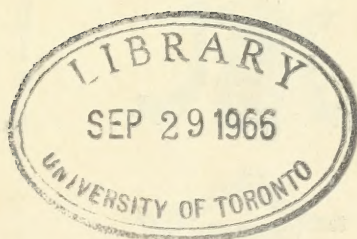
文學博士 井上頼國
熱田宮々司 前田忠行 監修
平田盛胤
三木五百枝 校訂

平田篤胤全集

東京
平田篤胤全集期成會

研窮藏經。雖僧家少矣。于茲大鑿居士。數閱藏典。搜索諸派之宗源。啓發單傳之禪本。遂撰述印度藏志二十五卷。挑日月之眞燈。拂古今之妄闇。實是末運之曇華也。蓋欲使諸宗之徒。歸入少室直指之道。撰述藏志。豈非遠大之願力。能所致乎。吾門其誰得不隨喜焉。仍準西天維摩居士。唐士東坡居士等類。贈與居士之二字。以代祝讚。自今愈無疲倦。普爲後世。教外之道。

可弘通者也。

天保十一庚子年十一月吉祥日

永平寺禹隣叟

鎭德寺覺巖

贈與

東華大壑居士

印度藏志卷之一稿

大壑　平　篤胤　撰述

○印度國俗品上第一

此の品三篇の本文は。總て玄弉比丘が西域記第二の卷なる說の。印度藏を見るに。先つ早く知らでは有るまじき條々を撫ひ集めて。解き辨ふるに便宜く。別に次第を立て載せり。

【一】玄弉西域記云。天竺之稱異議糾紛。舊云身毒。或曰賢豆。今從正音宜云印度。印度之人隨地稱國。殊方異俗。遙擧總名。語其所美。謂之印度。印度者。唐云月。月有多名。斯其一稱。

此記は。もろこし唐の太宗が。貞觀三年と云ひける年の八月に。玄弉彼の國を發て。印度國に至り。其國々を大抵は見巡り。貞觀十九年と云ひける年の正月に。唐土に歸りて。見聞たる事どもを記集めて。其の王に奉れる記なれば。古くは是より外に。正しく委き物は有こと無し。但し此記。流布の本。及び鐵眼本ともに。互に誤字あり。今は二本を校合して。此品の本文ともなし。また次々の注にも引つ。然れど尙何ぞや所思ゆる事の無きにしも非ず。稀には他書に引たるを。校して引たる文も有り。其は己が見たる二本の外に。なほ宋板。高麗板あり。諸書に其本どもを引たるも多し見む人その異なるを不審かる事勿れ。

此は阿毘曇心論の音義にも。天竺或言身毒。或言賢豆。皆訛也。正言印度。印度者曰月。月有千名。斯一稱也。一說云。賢豆本名。因陀羅婆陀那。此云主處也。以天帝所護故。號之耳。とあり。(大涅槃經、倶舍論等の音義も此に同じ、悉曇藏明燈抄に、天竺亦云天毒、亦云身毒、亦云天豆、亦云印度、梵夏有異、相傳不同、或云印度者、是天帝之一名也、其地天帝常守護、故以爲名也、とも云へり、)本文また此の音義に。印度者云月。とある說に依ときは。下文に。北廣南狹形如半月。とある國形に因りて號たるなり。(然るを本書

に、自說を註して、言諸群生、輪廻不息、無明長夜、無レ有ニ司晨一、其猶白日既隱、宵燭斯繼、雖レ有ニ星光之眼一、豈如ニ朗月之明一、苟緣ニ斯致一、因而譬レ月、良以ニ其土一、聖賢繼レ軌、導レ凡御レ物、如ニ月照臨一、由ニ是義一故謂ニ之印度一と云ひ、音義にも、彼土聖賢相繼、開ニ悟群生一、照臨如レ月、因以名也、と云るは附會なり、若實にさる意ならむには、月を以て號けむよりは、日を以て號くべき物をや、光明日爲レ上とは、阿含經に、佛祖も常に言るをや、佛者の附會大抵かくの如し、惑ふへからず、)また音義の一說に。本名因陀羅婆陀那。此云ニ主處一云々。とある說に依るときは。天帝釋の所護ある國なり。と云ふ義を以て負たる號と聞ゆれば。印度と云は。因陀羅婆陀那此略稱なり。(因陀羅は、帝釋の名にて、主とも帝とも譯せり、婆陀那は處の義と聞ゆ、帝釋のことは、第□品に註ふべし、)さて身毒賢豆ともに。印度の訛なりと言へば。共にエントと唱へ。天竺はチエムドと唱ふべし。(身賢ともに、唐音はエン、天はチエンなればなり、毒竺ともに、トの音なることは言ふも更なり、天竺をまた天篤天毒なども書等に見ゆ、但し音を正しく云ふときは、如此なれど、チエンドと唱へむこと、耳遠ければ、常には言はれたる儘に、テンヂクと唱へむに難なかるべくこそ、今の西洋人は、印度を訛りて、應帝亞と云ふ、)但し此は。本文の有がまにまに。姑く解るなれど。なほ說あり。其は第四品。四大河の處に註ふを見べし。○隨レ地稱レ國。殊方異俗とは。印度にては。一地一境ごとに。大小を論せず某國と稱して。唐土にて。州郡縣など置く制とは。異なる由を云へるなり。○遙擧ニ總名一云云とは。五天竺內の國々いと多く。各々其名は異れども。其總名を云ふときは印度といふを美號として。稱する由なり。(但し是また唐土にては、定まれる國號なく、世々の王どもの起れる、故國の名を弘めて、周より起れるは周と稱し、漢より起れるは漢と稱して、いと紛らはしきには似ざる事を、心に含みて、羨める文意ありげに聞ゆるは、己が意の思ひなしにや、見む人つらく思ふべし)

【二】印度種姓族類群分。而婆羅門特爲ニ清

貴。從二其雅稱一。傳以成レ俗。無レ云二經界之別一。
總謂二婆羅門國一焉。

印度國の種姓。族類の群分せること。謂ゆる四姓を始め。佛籍どもに散見して。今盡く計ふるに暇非ず。また然しも要なき事なれば。惣て漏しつ。(但し四姓の事のみは、次品に委しく說き辨ふを見べし。)偖しか諸姓の多かる中に、婆羅門種（倶舍論に大ばら門此云豪族とあるも勢あるが故也。)を殊に淸貴となす由緒は、此の種族は。始めて世間を成立せる。大梵王の子。梵天の苗胤にて。世々其稱を襲ひ來るに因り。(こは義淨三藏が寄歸內法傳に、五天之地、皆以二婆羅門一爲二貴勝一、凡有二座席一、並不下與二餘三姓一同行上自外雜類故宜レ遠矣、とある三姓は、刹利、毘舍、首陀の三姓にて、此の中に、刹利は王種なるすら、同席同行せずと云へるを以ても、婆羅門を貴勝と爲ること知れたり、なほ次品に委く云ふを見よ。)また其稱を雅として。總國の號にも負たる由は。婆羅門てふ語は。梵天の梵と同語なるが故なり。(かの內法傳にも、印度、說レ之爲レ月、雖レ有二斯理一、未二是通稱一、五天之地、皆曰二婆羅門國一と云ひ、其餘の書等にも、多く婆羅門國と見えたり。)此等の事の起原を知らむと欲するには。まづ彼の國太古の傳說。大梵王の事より。明し辨へずては知がたし。然るはまづ。其古傳說の大旨を云はゞ。大虛空上に。大梵天とも。梵自在天とも。大自在天とも稱ふ。無始無終の天界ありて。其の界に。大梵王とも。那羅延天とも。摩醯首羅天とも稱する。大主宰の天神ありて。是また無始無終の神なるが。無より有を出して。此の世間を成立し。人種は更にも云はず。萬物をも化生せる故に。世間衆生の祖神なりと語り傳へ來れり。(大梵王を、仁王般若經には、大靜王とあり、靜は梵の譯語なること、下に註ふが如し。)其は提婆論に。摩醯首羅論師說。梵王。那羅延。摩醯首羅。一體三分。所レ有一切命非命者。皆從二自在天一生。從二自在天一滅。自在天身者。虛空是頭。日月是眼。地是身。河海是尿。山丘是糞、火是熱。風是命。一切衆生是身肉蟲。自在天常生二一切物一云々。(提婆論を、精しくは、提婆菩薩釋楞伽經中

外道小乘涅槃論、といふ、一切經藏に收れり、提婆とは、龍猛論師が弟子なりし、伽那提婆論師なり、さて此の文、今本は文義通じ難き事ども有れば、中論の疏に引たると、校合して引たり、其心して見べし○今擧たる傳へは、大梵自在天王の、大地萬物の本祖主宰たる、大德を語り傳へたる古說の、適に殘れるにて、西戎籍に、盤古氏之左右目爲日月、毛髮爲草木、頭手足爲五岳、泣爲江河、氣爲風、聲爲雷云々、など謂へるに能く似たり、一偏に、寓言とのみ勿見くたしそ、實には天地世界、此の神の神靈に賴りて成れり、と云ふ傳なれば、かく傳へたるも、意味ある說なり、俱舍論の光記に、自在天、出過三界、有三身、一法身、遍充法界、二報身、居自在天、三化身、隨形六道、種々敎化、と云へる法身は、卽ち今引く文の趣きなり、)また摩陁羅論師說、自在天造作衆生。那羅延言。我造一切物。我於一切衆生中最勝。我生一切世間有命無命物。若人至心。以水草華果供養我。我不失彼人。彼人不失我云々。また本生安荼論師說。本無日月星辰及地。唯有大水。時大安荼生如鷄子。周匝金色。時熟破爲二段。一段在上作天。一段在下作地。彼二中間生梵天。名一切衆生祖公。作一切有命無命物。云々。(此傳は、西戎籍に、世の初めを語りて、天地渾沌如雞子、盤古生其中、萬八千歲天地開闢、淸輕者上爲天、濁重者下爲地、盤古在其中、一日九變、神於天、聖於地、天極高地極深、盤古極長、此天地人之始也、と云へるに、最よく似たり、)また女人眷屬論師說。摩醯首羅作八女人。一名阿提撤。二名提撤。三名蘇羅婆。四名毘那多。五名迦毘羅。六名摩㝹。七名伊羅。八名歌頭。阿提撤生諸天。提撤生阿修羅。蘇羅婆生諸龍。毘那多生諸鳥。迦毘羅生四足。摩㝹生人。伊羅生一切穀子。歌頭生一切蛇蝎蚊蝱蠅蚤蚰蜒百足等云々。(中論の疏に、梵王生八天子、八天子生天地万物、是衆生之父也、と云へるに、同じ趣きの傳へなり、)增一阿含經に。梵天の語とて。此處無爲之境。無始無終。無生無死。無老無病。亦無愁憂苦惱云々。發智論に。如梵衆天說。大梵王得自在。於世間能造化。能出生。是我等父。

など有るにて。古傳の趣きを知るべし。(なほ經論疏どもに、外道の說として、大梵王者、能生万物之本、と云ひ、或は衆生常識梵天以爲祖父、など多く見えて、今悉く計ふべくも非ず、次々にも引出るを見よ、能くも本朝の古傳に符合せる傳ども有り)、さて上に引く提婆論に。梵王。那羅延。摩醯首羅。一體三分と云へる。此の事は。華嚴經にも所見たるが。まづ大自在天と云は。譯語にて。一切經の音義に。摩醯首羅。此云大自在天と數所に見え。諸天傳に。摩醯首羅。此翻大自在天。或翻威靈帝と言ひ。(名義集に、大論を引て、摩醯首羅、正名摩訶莫醯伊濕伐羅、此云大自在と見ゆ、案ふに訶莫は衍字か、さるは摩醯は大と翻し、伊濕伐羅は、自在と翻する語なればなり、華嚴經音義には、摩醯首羅、正云摩醯濕伐羅、摩醯此云大、濕伐羅者、自在也とも有るにて知るべし、)三論の玄義に。有云。大自在天。能生萬物、万物若滅、還歸本天。故云自在。若瞋則四生皆苦。自在喜則六道咸樂。云々と言へり。(なほ此文の連次に、然天非物因、物非天果、蓋是邪心所畫、といふ文有れど、其は佛者が例の神を知らざる僻論なり、)さて摩醯首羅大自在天王頂生天女法に。摩醯首羅天王。於大自在天上。云々とあり。(また同法に、摩醯首羅大自在天神とも見ゆ、)然れば。大梵天。大自在天は。同天界の二名なること著明なり。借こそ。下に引く長阿含經に。大梵天界の事を。梵自在天とは言へれ。(また他化自在天と稱ふも、同天なり、其の由は、第三品の末に委しく云べし、)さて那羅延天とも稱ふ由は。倶舍論の音義に。那羅延天。那羅此云人。延那此云生本。卽是大梵王也。外道謂　一切人皆從梵王生。故名人生本也と云ひ(倶舍論頌疏に、那羅延、此云人種神と見え、其の通鱗記は、音義に同じ、但し此記音義共に、外道謂と云へるは、婆羅門を始め、諸異道の輩は、しか言へども、佛法にては、梵王を、人生本といふ說は取らず、と云ふ意を含めたり、)倶舍論に。また。大自在生主ともある。光記に。生主卽是梵王。能生一切世間。是世間主といへり　此等を合せ考へて。大梵天王。大自在天。那羅延天。皆これ同天神の。異稱なる。義を

辨ふべし。(那羅延天と云に就て、辨ふべき事あり、そは大涅槃經なる那羅延は、其の音義に、那羅延此云力士、或云天中、或云人中力士、或云金剛力士、或云堅固力士也、また六波羅密多經音義に、那羅延梵語、欲界天名、此天多力、身緑金色八臂、乘金翅鳥王、手持鬪輪及種々器仗、毎與阿修羅對爭也、また大般若經音義に、那羅延梵語、欲界中天名也、一名毘紐天、欲求多力者、承事供養、若精誠祈禱、多獲神力也、など見え、大部補註に、那羅延多力天名也、などある那羅延は、謂ゆる密迹金剛力士神の事にて、上に論ふ那羅延天とは別なり、此は早く諸天傳にも、金剛密迹、梵語跋折羅、或云跋闍羅、此云金剛、又梵語、那羅延、此云金剛手、由羅延翻手或翻執、而略跋折二字、只云那羅延也、由此力士手中、執金剛寶杵故從所執以立名、楞嚴中、本名烏芻瑟摩、此云火頭、と云へるが如し、但し此の金剛手の事は、阿含經に、始めて其の名見えたるが、實は、那羅延天の古傳より思ひ付て、佛祖が幻術を以て、假に其形を現して、我を守護する容に、他を驚かせる物にて、實物ならず、彼の經々には、此を金剛手菩薩と稱し、彼の普賢菩薩といふは即ち是也、此の事はなほ第□品に、金剛力士を變現せる所に、委く辯へ註ふを見て知るべし。)なほ大梵王の異名を言はゞ。因明論に。商羯羅天。是摩醯首羅大於一世界中。有大勢力と有りて。其疏に。商羯羅者此云骨鎖。却初梵王下化人間。以苦行形骨鎖相連。人慕其化。造像供養といひ。(大日經住心品の疏にも、商羯羅天、是摩醯首羅天別名といひ、其の冠註に、商羯羅、此云骨鎖天、却初、梵王化人間苦行像貌也、とも見えたり。)優婆塞戒經音義に。毘紐天。梵語。那羅延天之別名也。(一字頂輪王經音義に、毘鈕天、鈕或從糸作紐、或云尾瑟努天、古曰毘留天、即持輪天也、とも云へり、)また瑜迦師地論音義に。毘瑟蒰大。舊云毘搜紐、或云毘紐。皆訛也。是伐藪天別名也。舊言婆藪大也と見え。顯揚聖敎論の音義も。是と同說にて。此天有大威德。乘金翅鳥行。行時有輪以爲前導。欲破即破。無有能當也と云ひ。中論疏に。韋紐天。手執輪戟。有

大威勢一。故云三萬物從レ其生一也。など言へり。(大日經疏に、韋紐天、自在天別名とも、那羅延天、毘紐天別名と云て、其の冠註に、弘決を引て、毘紐天、亦云二韋紐天一、亦云二韋糅天一此翻二遍勝一、亦遍淨、俱舍云是第三禪頂、淨影云胎藏那羅延天眞言、云二毘瑟拏一、是與二毘瑟紐一同也、毘紐天有二衆多別名一、即是那羅延天別名也、毘是空義、瑟紐是進義也、乘レ空而進、所レ謂此天乘二迦婁羅鳥一而行二空中一也、と云へり、大涅槃經音義にも、毘紐天、亦作二韋紐天一、此云二遍同一、亦云二遍勝天一、ともあり、なほ異譯あれど、煩ければ漏しつ、)また十二天餞軌に。伊邪那天。舊云二摩醯首羅一、唐云二大自在天一也。と云ひ。(また火吽軌別錄に、東北方、大自在天王明、唵伊舍曩曳婆嚩訶とあり、提婆論に、伊賖那論師說、伊賖那尊者、形相不レ可レ見、遍二一切處一、以レ無二形相一而、能生二諸有命無命、一切萬物一云々と見えたり、此は古傳を甚く說き曲たる、後の論師らが私說と聞えたり、)瑜迦師地論の音義に。世主天此梵天之異名なりとも。魯達羅天此云二暴惡一。自在天之別名也ともあり。(大毘盧舍那經に、黑天とある其疏に、梵音魯捺羅、俱舍頌疏光記に、魯達羅此云二暴惡一、大自在天總有二千名一、今現行レ世、唯有二六十一、魯達羅、即一名也とあり、暴惡の義をもて名けたるは、謂ゆる塗炭外道のわざなり、其由は、次の卷外道の所に論ふを見べし、)大梵自在天王の異號。かくの如く多く。今擧るところ。凡そ十二名なり。(なほ異稱多かるを、其は思ふ旨有れば、次々に論ふを見べし、)此は人間を化せる威靈の卓越たる神なる故に。其功德の樣々に依て。人間より稱號を負たるにて。元より此神の。しか種々に名告れるには非ず。と知るべし。此に類たること。皇朝の神典にも多かり。(そは功積の高く、德業の勝れたる神等に、殊に異名は多かるを、別神とせるも多く有りて、古史徵に、具に論へるを見て、印度籍をも准へ想ふべし、然るを諸の經論に、右に擧る名どもの中に、二三を並べて、別神の如く說作れる說等の多かるは、名の異れるを、別神と思ひ混へてなり、其は彼の經に、別神とせるが、此の經には同神とし、彼の論に同神とせるを此の論に別神と爲て、其の說の定らざるにて辨

ふべし、其の一を云はゞ、十二天、輒に、伊邪那天、摩醯首羅大自在天を、一神とせるは正しけれど、大梵王を別神と爲て、其餞軛をさへに、別に擧たる類なり、然れば大自在天王を、大梵天王とは別なる神として、或は居二色究竟天一と云ひ、或は十地の菩薩にて云々、など云る説ども、總て取に足らず、彼安然が悉曇藏に、入大乘論などを引て、摩醯首羅有二三種一、云々と云る説の類は、愚を極めたる説にて、英斷の才なきは更なり、諸經論ども悉く、佛滅後數百千年の間に、異部各々その傳聞せる事、また各々の臆見をもて、記せる物なる故に、其説の異同ある事を知らず、佛經と云へば、佛祖が説とのみ心得て、一向に、護法の念の進める故に、此と彼と符ざる事をも、強ひて合せて、さる愚説どもの多かるなりけり、)さて婆藪天と云名に就ての事實は、俱舍論の頌疏法盈註に、
却初之時。自在天二十四返。人間行化。第二十四返。現二三目八臂身一。遇二足目仙人一。語曰。如レ我。面上有二三目一。卽堪三與レ我論二義一。仙人擧レ足報曰。如レ我足下有レ目。卽與論義、天知二墮負一却歸二本天一。

更不三復來二人間一。(足目仙人とは、優樓佉仙が事なるべし、亦名を眼足とも云へればなり、此は下に云を見よ、知二墮負一とは、仙に負たる由が、仙が自負に墮して、高貢なるを知りたる由か詳ならず)時人仰二慕天德一。爲レ之立レ祠。鑄二黄金一爲レ身。頗梨爲レ眼。座高一丈。號二此天像一爲二婆藪盤豆一。謂與二世人一爲二親愛一故云二世親一。とあり。(沙門鳳譚が、俱舍頌疏冠註に、玄奘譯婆藪此云レ世、盤豆、此云レ親、其像多爲二世人一、親近供養、西方人呼爲二世親天一、と有り、彼世親論師と云しは、此天廟に祈りて設たる故に、世親と云へる由見たり、西域記、健駄羅國の所に、自レ古作二論師一、有二那羅延天一、世親本生處也、とあるは是なるべし、今本、此文に誤脱あり、今は俱舍頌疏冠註に引る文を以て正し、此に用なき文を略きて引たり、また大涅槃經音義に、婆藪天、古音、此名レ實、亦名レ物也とも見ゆ、)さて此文に。第二十四返。現二三目八臂身一と有れば。三目八臂は。一時足目仙が高貢心を試みむ爲に。假に現せるにて。本形に非ず。然れば。補行記また名義集などに。大論を引て。大自在天。

八臂三眼。騎白牛。執白拂。有大威力。能傾覆世界。擧世以尊之。など有るは。此の時權に現じたる形を。時の人寫し傳へたるにぞ有りける。（されば、大自在天王頂生天女法に、天王三面六臂、顏貌奇特、端正可畏と云ひ、金七十論に、自在天二頭三手など有るは、共に三目八臂の誤なり、大涅槃經に、八臂天とある音義に、此云那羅延天、とも見えたり、此像貌に就ても、辨べき事あり、そは諸天傳に、經中別有摩醯首羅、乃藥叉神、非此天王、孔雀經云、摩醯首藥叉、止羅多國住是也、光明經鬼神品先云大自在天、次云大鬼王摩醯首羅、卽藥叉者、由三神皆有三目、相濫、今古畫像作兩種、一作菩薩相、三目八臂、一作藥叉形、赤髮豎起、三目八臂、今旣曰大自在、及威靈帝、非藥叉矣と云へるは、然る說なり、なほ本書を披き見べし、然れど文甚拙くて、通え難き說も少なからず、）さて上に擧けたる。大梵王の異名の說々に依りて。熟々其の事實を考ふるに。梵は下に註ふ如く。淨とも靜とも譯し。仁王經に。梵王を大靜王とも有りて。大梵王と云ふ名にての事

實は。いと温柔に聞ゆるを。自在天王と云を始め。其異名にての事實は。悉く强猛なる趣に聞ゆるを思ふに。印度籍に。其の說は無れど。我が神典の傳說を。姑く借て說むに。大梵王とは。其本體の名にて。和魂をかね。大自在天王と云ふを始め。種々の名ともは。其和魂を動用し。種々に碎心して。人間を化育せる功德に因りて負たる。荒魂の名どもと聞えたり。（神典なる和魂荒魂の事は、古史傳に說たれば、今更に委曲くは云ず、印度籍はすべて、神魂の事を說こと精密にて、一體分身など云ふ說も聞えて、中には論ひ得たりと見ゆる說も多かれど、和魂荒魂幸魂奇魂などの事は、つやつや得知らずぞ有りける、此等の事ども、我が神典を除ては、世に其玄妙微旨を、知るべき籍は有ることなし）偖また梵王といひ。梵天と云に差別ある事なるを。大抵の籍等に。此を混じて。梵王と云べきを。梵天と書し。梵天と云べき所に。梵王と載せるも多かるは。僞濫と云べし（上に引きたる籍等にも此の過ち多かり、熟々見辨ふべし）故此に其の差別を標示せば。長阿含堅固經に。一

比丘が。此の身の四大地水火風、何由永滅と云ふことを知むとて。天道に趣けりと云へる妄説中に。彼比丘詣梵天上。循問梵天。梵天報言。我等不知。今在大梵天王。無能勝者。統千世界。富貴尊豪最得自在。能造花物。是衆生父母。彼能知。彼比丘問。彼梵天王。今在何處。諸梵天言。不知所在。爾時梵王忽然出現。云々とあり。(此の全文は、なほ第三品の末に引て、論ふを見べし、此の比丘が名を、増壹阿含經には、馬勝比丘とあり。)此は目易きを一事擧たれど。阿含は大抵。この差別を書著せり。是を以て。梵王と。梵天と。混ふまじき事を辨ふべし。(凡て阿含經は、諸佛經の最先に記せる物なる故に、おのづから、故實の證となる文句の多かり、其説法の妄説も、妄説ながらに、後になれる經論どもの、佛意に背へる事を、糺し辨ふべき事いと多し、熟見て熟々辨ふべし。)さて梵王は。天地世界および。人種の大元祖神にて。梵天と云は其の子なるが。許多ある故に。梵補。梵衆など云ひて。彼の梵天界に住し。地界にも降りて。人間を敎化せる由なり。其は金七十論に。皮陀傳說。昔時梵王生有四子。一名婆那訶二名婆難陀那。三名娑那多那。四名婆難鳩摩羅。此の四子十六歲時。四有自然成。謂法。智。離欲。自在也と云ひ。(皮陀を吠陀とも、圍陀とも云ひて、印度大古の傳を記せる籍なり、此の事は、次節に委く註ふを見べし。)中論疏に。梵王生八天子。八天子生天地萬物。是衆生之父也。また提婆論に。從那羅延天臍中生大蓮華。從蓮華生梵天祖公。從梵天口中生婆羅門。云々など有るを會せ見て知べし。(那羅延天とは、梵王の異名なること、上に云が如し、臍より蓮華を生ずと云ふこと、其の物いかに蓮華に似たらむも、眞の道に非ざれば、打任せて、蓮華とは云ふまじきを、如此云へるは拙文なり、此の事中論の疏にも見えたり、印度にて、蓮華を殊にもて囃すことの本は、是よりや起りつらむ。)さて婆羅門種とは。梵口より生じたる種姓の由にて。梵種と云ふに同じ。其は西域記に。東印度境。迦摩縷波國。周萬餘里。氣序和暢。風俗淳質。語言少異中印度。性甚獷暴。志存强學。宗事天神。不信佛法。故自佛興

以迄ニ于今ー。尚未下建ニ立伽藍ー。招中集僧侶上其有ニ淨信ー之徒。但竊念而已。天祠數百。異道數萬。今王本那羅延天祚胤。婆羅門之種也。字婆塞羯羅伐摩。唐言レ冑。號拘摩羅。唐言ニ童子ー。自據ニ壇主ー。奕葉君臨逮ニ於今王ー。歴ニ十世ー矣。國王好レ學。衆庶從レ化。遠方高才慕レ義客遊。雖レ不レ信ニ佛法ー然敬ニ高學沙門ー。云々とある。那羅延天は。卽梵王なれば。其の祚胤と云ひて。婆羅門之種也と云へるは。上に引く提婆論の説とよく符ひて。婆羅門種とは。梵種と云に同きこと。著明なり。故なほ。梵と婆羅門と。同語なる由を辨へず。長阿含四姓經に。婆羅門種らが常語を擧たるに。我婆羅門種最爲ニ第一ー。餘者卑劣。我種清白。餘者黑冥。我婆羅門種。出レ自ニ梵天ー。從ニ梵口ー生と云よし見え。（此説を破れる佛説に、四姓種共に、善行の者あり、惡行の者あり、惡行の者ども、餘の三姓種に在て、婆羅門種のみ、惡行の者なくは、婆羅門種、我最爲第一、餘者卑劣、と云ふことを得べし、また婆羅門種の嫁娶産生を今見るに、世人と異なし、而るに我種は、梵口より生ずと云は詐なりと、言痛く論へれど、皆僻論なり、其は護法家の爲にいさゝか言む、此方の姓種にも、皇胤と蕃種とあるを、皇裔の元は、伊邪那岐神の御目より、生給へるが始なり、而るにかく蕃息しては、皇裔蕃種ともに、不善行の者あり、また産生も異なきを以て、皇裔なりと云を、詐として可ならむや、熟々此の理を思ふべし。）また中阿含梵志品に。衆多梵志曰。梵志種勝。餘者不レ如。梵志種白。餘者黑。梵志得ニ清淨ー。非梵志不レ得ニ清淨ー。梵志梵天子。從ニ彼口ー生。梵梵所化とあり。（此の梵志説を破ると、佛祖の論へる説ども、最をかしき中にも、草馬と父驢と、合會して生たるをば、何と名けむと譬へて云る説などは、實に抱腹に堪たる強説なれど、煩ければ記さず、凡て佛祖の、婆羅門種の、梵裔なる事を言破れるには、深き旨ある事なり、其由は□□に註ふる見よ。）此と同じ事を。雜阿含經には。婆羅門自言。我第一。他人卑劣。我白。餘人黑。婆羅門是婆羅門子。從レ口生。婆羅門所化。是婆羅門所有。と見えたり。（此の語は、弟子所説誦第六品、摩偷羅王が佛弟子、迦旃延に問へる語中に見えた

る語なるが、迦旃延が答に、此は世間の言說耳、云々と云へるは、既に師の誣說に、化せられたる後の說なれば、論ふに足らず、大論にも、婆羅門從梵天口邊生、故於四姓中第一、と云るを云、其の餘にも、此の意ばへの語ども、計ふるに暇あらず。)長阿含。雜阿含に。婆羅門とあるを。中阿含に。梵志といひ。長中二阿含に。梵天子とあるを。雜阿含に。婆羅門の子と云へり。是を以て。梵と婆羅門と、同語なること著く。殊には。金光明。最勝王經音義に。婆羅門。梵語訛也。或曰婆羅賀摩。亦訛也。正音云沒囉憾摩。唐云淨行。卽初禪梵天名也。彼國人民四類差別　婆羅門其一也。自相傳云。我從梵天口生。獨取梵名。以爲其稱。云々と言ひ。(また雜阿毘曇心論音義には、婆羅門訛略也、應云婆羅賀摩拏、此義云承習大法者、經中梵志亦此の名也、正云靜胤、言是梵天之苗胤也、とも云へり、)華嚴經音義に。梵謂梵摩。具云跋濫摩。此云清淨。葛洪字苑曰。梵淨也。また法華經音義に。梵天梵摩。此云寂靜。葛洪字苑。訓梵爲潔也。また不思議境界經音義に。

婆羅訶摩。梵語　卽梵天名也。など有れば。婆羅訶摩。跋濫摩。沒囉憾摩。婆羅門など。唯少かの轉訛なるが。梵摩と切まり。其を亦略して。梵と言ること著明なり。(これ本朝の古語の轉りて、延縮する趣によくも似たり、此は印度語のみならず、誰れの國も、訓語は惣てかくぞありける。)是らを合せ考へて。婆羅門とは。もと梵天をいふ稱なるを、婆羅門種は。その苗裔なる故に。世々其稱を襲ひ來れること知べし(大般若經音義に、婆羅門卽梵天名也、此類人自云、我本始祖從梵天口生、故取梵名爲姓と有るをも思ふべし、但し今引く文等に、婆羅門自云、此類人自云など云へるは、趣意ある言なり、其由は、次品に論ふを見るべし)さて私志記に。婆羅門亦云梵志。此云淨行。亦云淨志。又云靜者。亦云靜胤。卽修淨行之種姓也。とある淨行。淨志。靜者は。其の行を以て云ひ。靜胤とは。種姓より言ひ。梵志とは。梵は西語を。其の儘に用ひて。梵行に志ざす者の義にて。淨志と云ふに同じ。然れば。淨また靜は。梵といひ。婆羅門と云ふに當たるにて。行志者など

は。義を以て添たる語なり。（上に引く音義に、義云承習大法者、とあるをもおもひ合すべし、然れば諸書に、梵を淨、靜、潔、高淨、清淨、寂靜、など譯せるは、皆よく當れど、此の外に、言痛く理をもて譯せるは、皆當らずと知べし。）さて其の淨行を修すとは。何なる事をか云ふと考ふるに。即その高祖梵天の傳へたる。天乘靜淨の道を修する由なり。其の趣は。大般若經音義に。婆羅門梵語。即梵天の名也。唐云淨行云或梵行。此類人自云。我本始祖。從梵天口生。便取梵名爲姓。世々相傳。學四圍陀經論皆博識多才。明閑衆論。多爲王者師傅。高道不仕。或求仙養壽。時有證五通仙者也と云ひ。（五通とは云々、）金光明最勝王經音義に。世業相傳習四圍陀論。皆博學多智。守志貞白。文儒雅操。高道不仕。其中聽俊穎達者。多爲王者師。受封邑而自居。最爲上等也。と有にて知べし。（また六波羅密多經音義にも、婆羅門、唐云淨行、精持潔志、學四圍陀、博識多聞、爲王者師傅、高道不仕、彼國人民、多認此族爲祖也、と云へり、四圍陀論の事、また此を、梵天の傳授せる由緒などの事は、第□品の註に、委しく説き辨ふるを見て知べし。）かく先祖の正しく貴く。その相傳せる世業の。高勝なるが故に。國中の人擧りて。此を尊奉しつゝ。遂に總國の號にさへ。負する事とは成來しなり。然るを佛祖世に出て。其新ばり道を弘むるに就ては。思ふ旨ありて。此種姓。および其の淨行をさへに。甚く詈り卑めたる説等起れり。其義は。下の品々に。次々論ふを見て辨ふべし。

【三】五印度之境。周九萬餘里。三垂大海。北背雪山。北廣南狹。形如半月。畫野區分。七千餘國。時特暑熱。地多泉濕。北乃山阜隱軫丘陵潟滷。東則川野沃潤。疇壠（昔人云田疇山壠也トアリ）膏腴。南方草木榮茂。西方土地磽确。斯大概也。（頭注云西域記僧迦羅國の所に。國東南隅有駿迦山巖谷幽峻神鬼遊舍在昔如來於此說駿迦經（舊云楞迦經訛也）

五印度とは。彼惣國を。東西南北中と。五に別て

稱する故に言へり。周九萬餘里とは。唐土の六町一里の里法を以て云るなれど。其當る度量と。西洋圖。および彼の國の地誌どもを以て考ふるに。古へに五天竺と稱へりしが中の。南天竺のみ。今も印度といひ。其餘の四竺は。我が應永の頃より次々に。莫臥兒國といふ國に。大略併されたるが。其の周廻は。本朝の里法にて。六百里四方と云へり。然れば其に。南天竺を加へたらむには。大凡七百里四方ばかり有べし。(但し本朝の里法、三十六町一里なり、唐土の四千二百里に當る、然れども國の端々、その屈曲を入れて、巨細に量り、しひて云はゞ、九萬里とも、十萬里とも云ふべきなり)其は寄歸內法傳に。五天之地、界分縣邈。大略而言。東西南北。各四百餘驛。除其邊裔。雖非盡能目擊。故可詳而聞知。と有をも思合すべし。此は一驛を。本朝里法の三里と計り。東西南北。各々千六百里許なれど。其は行道の屈曲をこめて云にこそ有れ。直徑に量りては。邊裔を收たらむも。千里には過ず。周廻三千里ばかりに過ぎざるをや。(此を唐土の里法に積りて、一萬八千里なり、然るを玄奘が、周九萬余里と云るは、大に過たるに非ずや、然るを佛國曆象編に、強て本文の說を張むと欲して、云へる說に、彼地球所圖、廣袤俱不過三十度、約之烏道、則東西爲七千五百里、南北亦爾、按地理志、支邦之廣、約經緯並三千里、支那尙爾、況五印度、則在崑崙之南、閻浮中心、而沃野萬里、天府之地也、西域記曰九萬餘里、南海傳所言、粗亦同、蓋此二師、躬自歷覽所記、豈敍記虛誕、以自欺、欺人耶と云へり護法心を憐むべし、)總じて佛國の事は。往昔より。唯に荒唐無據の妄誕のみ多き故に。和漢古今その明說は無りしを。近ごろ尾張ノ國人に。朝夷厚生といふ人あり。佛國考證といふ書を著はして言るは。佛國は。佛書に據りて知べからず。其は總て。輿地の事は。圖に非ざれば辨へ難く。實測もまた得がたし。然るに佛書に。天竺を說くは。廣大を云こと。實に過る故に。其說に據りて。圖は製べからず。然るは成光子云。中天竺。東至震旦。五萬八千里。南至金地國。西至阿拘遮國。北至小香山阿耨達。亦各五萬八千里。云

々と云へり。（金地國詳ならず、意ふに寓言なるべし、阿拘遮國とは、百兒西亞を云か、〔〕今云、この成光子云は、翻譯名義集に見えたる說なり。）四方謂ゆる五萬八千里の諸國。みな地理に合ず。こは佛說に。金剛座。普賢劫初成。與大地俱起。據三千世界之中。と云るを以て、四方各々五萬八千里を杜撰して。佛國の四方諸國相去の里數を密合せし物にて。古へ支那にて。西域の地理を知らざりし故に。梵僧ども。此れ等の說を作爲して。支那に對して。自誇せる語なり。（また楞嚴經に、大國二千三百とあるに、仁王經には、十六の大國と云ふ如き、不同なること甚だ多し、また同經に、十萬の小國と云るが、近世莫臥兒一統の後に、四印度を合せて、小王國三十五とす、然れば仁王經に、十萬の小國と云へるは、一聚樂の小邑を呼て、國と稱するにや。）また佛書に。多く金剛座を世界の中とするに。竺法蘭が。漢の明帝に說るには。迦毘羅衞國は。大千世界の中なりと云へり。謂ゆる金剛座は。摩掲陀國にあり。迦毘羅衞國と。兩國相去ること五十由旬。支那の二千里なり。寓言なる故に。其の言の不定かくの如し。また阿耨達池の四面に。牛馬獅象等の頭面ありて。其の口より恒河等の四大河を吐出すと云ひ。其の河各々此池の周圍を繞ること一帀す。と云に至りて。其の說の奇怪極まると云ふべし。（西域記云、大地菩薩、以願力故、化爲龍王、於中潜宅、出淸冷水、給贍部洲、是以池東面、銀牛口、流出殑伽河、繞池一帀、入東海云々とあり、○篤胤云、こは玄奘が始めて言出たる說ならず、早く佛說に出たり、其は長阿含經閻浮提洲品に、いと委しく見えたり、然れど元より妄說にて、論ふにも足らねば、此には引き出すなむ。）近比此の地方は。清國の版圖に入りて。甚詳かに知られたる故に。千歲傳へ來れる說。今日に至りて。一笑話と成しなり。衞藏圖識等に記する所は。此の池の近傍に。四山在りて。山形の象馬等に似たるにて、何等の怪談もなきなり。（按ずるに、此の地方の實錄は、西藏志、西藏記、衞藏圖識、西域紀事、準噶爾方略、などの書、近世甚だ多し、圖識は、西征の役に成れる書にて、清國の官板なり。）また或說に。崑崙山（頭注云曆

象緜に樓炭經曰崑崙山者閻浮提地之中心也、起世經曰雪山(此云ニ崑崙ニ)高五百由旬(卽ニ二萬里ニ)闊亦爾、云々)を。阿耨達山に混同したれど阿耨達は。西藏の阿里東北の界にて。蕃名今は岡底斯と云ふ。圖識等に說く所は。岡底斯の一山。周回一百四十里。獅象等の四山と共に。五山相連なる所の綿亘。八百余里と云へり。(西域記に、池の周り八百里とあるに符合せり。)崑崙山は。長安を去ること。僅に五千里にて。天竺とは。絶遠の境なる故に。崑崙は漢語にて。山名の梵語は無きをや。(また唐の劉元鼎が吐蕃に使して、崑崙山を經見せしが、三山中高、而四下、河源流ニ其間ニと云ひて、然しも高山なる事を云はず、予が崑崙考に委く記す。)佛書に。印度地方を說くこと。大底此の類なり。萬國地理。經緯の度數を究めて。輿圖に據りて。其の方位を辯ずべし。右擧る如き。實測と異なる。廣大の說に依りて推步すべからねば。佛書に據ては。佛國知れざるなり。(詮ずる所、須彌樓山、蓮華藏海、九山八海などの圖は、地理實測の外なれば、別に其說を傳ふべきを、其の圖中に、冬夏至線、およひ極星の高度を盛り、五大洲萬國の地名を、相混雜して、同圖と爲べからず。)古來佛書に。輿圖を傳へざるも。其實測を闕しては。彼の說の廣大なるに。合ざる故なるべし。歷代博覽の佛者あれども。五竺の眞圖。傳はらざるを以て證すべし。且また世界名體志。および掌果圖などの如き。皆印度の西。波斯の地方を。平陸の盡る處とし。其の西を。すべて大海とす。僅に印度の少し西。海陸の事をさへに。知さること斯の如し。また西域記にも。波斯地方に至りて。西海を稱すること。他の諸書に同じ。(篤胤云、世界名體志と云は、佛祖統紀に見えたり、掌果圖と云は、我が寶永年間に、浪華子と云ふ人の作れるなり。)佛書に依て。佛國知べくは。佛家の博覽にして。名體志。掌果圖のごとき圖は。製せざるべし。古來天竺の眞圖。支那へ傳はらざる故に。彼の徒西域記等の說に依り。桶帚摸索して。製圖するの外なし。(然れとも、佛者にして、佛國の圖を著はせるは、支那にて名體志、わが國にては、浪華子が掌果圖のみなり、)偖また支那籍にても。佛國知べからず。然るは明

より前。西洋の輿圖無りし時は。西域の眞圖傳はらず。隋の裴矩が。西域圖記を著すと云ふも。今の回部に過ず。そは隋書の裴矩傳に。自敦煌至于西海。凡爲三道。北道從伊吾至拂菻。中道從高昌至波斯。南道從于闐至北婆羅門。各達于西海とあり。此の謂ゆる西域三道。皆西海に達すと云ふこと。支那にて。西域の地理を知らざる證なり。其は此地方の西に。眞海無ければ。右の三道の西。みな西海と云べからず。此の地方の西には。南方に百兒西亞江あり。北方に北高海あり。其の中間は。地中海まで陸地なり。(すべて百兒西亞江、西紅海、地中海、北高海、黑海などの、水陸の差別を知る人、明以前には、支那に無りし故に、儒佛の書どもに、其の説なきなり)波斯大秦の地方より以西。極南より極北に至りて。大海にすること。歐羅巴極西の如し。是を西海と稱せしなり。(波斯大秦とは、今の百兒西亞、如德亞の地なり、)是の故に。また此の處を。世界西の地端として。文獻通考に。大秦國西有弱水流沙近西王母所居處幾日所入と云り。支那古來傳ふる西海の説。かくの如し。(宋の儒臣程大昌が、禹貢を講せし時、帝北朝を問ふに、卽答ならざりしを深く恥て、夫より十七年史籍を究めて、北邊備對を著せり、其の書また、西海の説有れども、北高海等の、水陸の確説もなし、且つ大秦と波斯を、異稱同國として、後漢班超、嘗遣甘英輩親至其地也、至西海之西、又有大秦者、卽波斯也と云へり、程氏十七年、博覽を究はむと云へども、支那に其書なき故に、知べき由無りしなり、西域聞見錄に、伊吾以西、不常見於簡册、列史所載多闕略、とこれ明以前に、西域の地理を、支那にて知らざりし事を、證するに足れり)支那人の。梵國を遊歷せし者。僧にては玄奘。官吏にては王元策。古今此の二子に如者なし。二子の西遊共に唐の國初なり。五竺および。佛國を記すもの。西域記より詳なるは無れども。求法を專務として。地理に意を用ひざる故に。圖を載さず。宋の時に。五天竺の人皆來りしかば。其地理を問ひ考へたる事を。佛祖統記に。五竺の國名。校以西域記。唯師子國可見餘不可考とあり。纔に唐宋の間にし

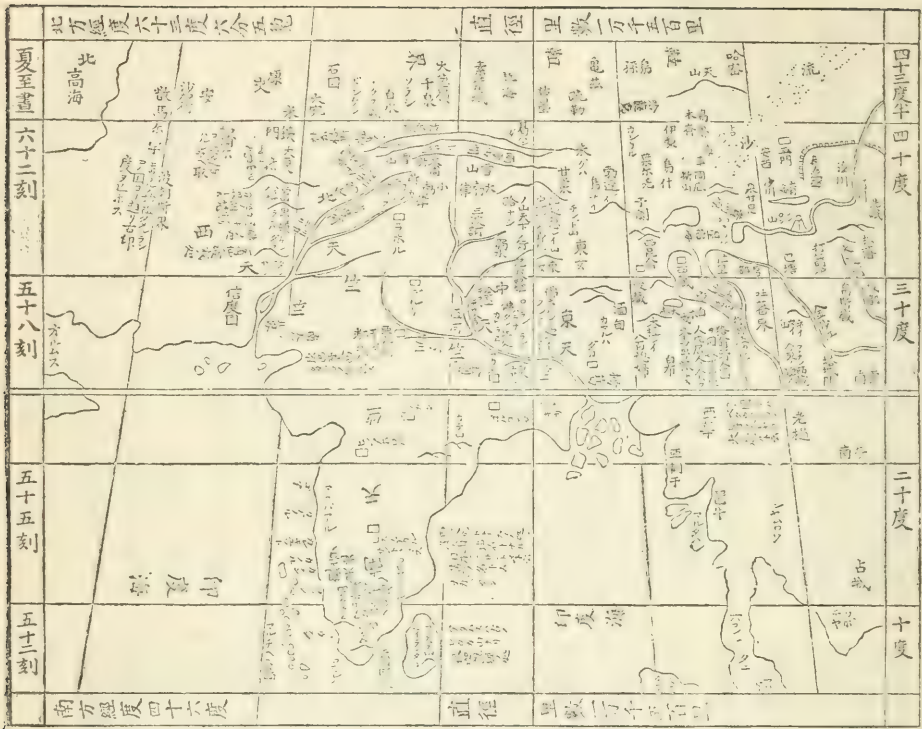
て此の如し。(これ古今地名を異にする故に、輿圖なくして、西域記に依りて考ふべからざる證あり。)葱嶺以東は。今多く支那の版圖に入り。國によりては。圖說も諸書に見たれども。葱嶺以西は。尙詳ならず。其は西域聞見錄に溫都斯坦を說ことの。麁漏なるにて察すべし。(中にも其の誤、もとも甚だしきは、諸書に錫蘭嶋を、涅槃の地とし、占城地方を、舍衛乞食の遺跡とせる如き、其の他、前に擧る類の、明淸諸家の誤說に由りて、其の實を得べき由なし。)また蘭說に。莫臥兒三十餘部の諸國を說こと。應帝亞を說る如く詳悉ならば。佛國は。委細に知らるゝ事なれども。其の諸部は。歐羅巴人の詳に知ざる所なる故に。地圖また地志にも詳說なし。然れども其梗概は。其の圖に依りてこれを得たり。昔の求法僧時代には。支那印度の往來絕ず。其頃の地名は。多く支那へ傳はりしが。今の地名。また輿圖を知るには。西洋の圖に採より外なし。(恨らくは、古今地名異れるに、西客古名を知らず、圖中に古名を記せざる故に、佛國推步し難し、且つ前にも云へる、佛跡を誤りて、錫蘭島とする如きも、莫臥兒部中の事を、西客よく知らざる證なり、其の部中を徘徊自由ならば、祇薗靈山等の佛跡を、見聞せざる事は有るまじければ、花蓮的印が、錫蘭嶋の古人より、聞傳へし誤說を、蘭書に確證として、記載する事有まじきなり、但し彼の諸部の中にては、亞瓦刺の都城、および辨瓦刺、坎巴牙の二國は、頗ぶる詳なるのみにて、其の他の三十餘部は、諸書に載する處、たゞ其の地名を知るに足れり。)さて其莫臥兒(頭注云今にて莫臥兒の併せたるは、北印度より中印度を呑み、其後又西印度を取り、右三印度は悉く有す、南印度は、其北方を頗る附屬せしめたるのみ。)部中は。日本里法の六百里四方といふ。此の境域は。東西二十度强あり。南北も。凡そ二十度に及ぶべし。是れぞ古の東中西北。四印度(頭注云東印度と云ふは、榜葛剌河東にて、亞華亞剌敢、および暹羅等を云ふ、此語も亦疎漏なる事甚し。)の境域なる。西域記に載する所。すべて此の境域なるに。其の說の廣漠なること觀つべし。(然るに西客も、此の地方は、其の委細を知らざる故に、

蘭書に記さず、支那の書も、共に唯應帝亞中、および南海諸島をのみ委しく說て、莫臥兒部中は、精しく書に載ざるなり○篤胤云、門人佐藤信淵は、西洋の輿地等に精ければ、此論を示せたるに、言けらくは、莫臥兒國の始祖を、答墨兒藍といふ、韃靼部中、北高海の東境なる、沙加待國の、撒馬兒罕と云地より出たる者にて、其始は、群盜なりしが、漸々に、印度諸部を蠶食し、北印度より、中印度を併せ、我が應永三年に、帝號を稱し、其後に、また西印度を併せ、遂に三天竺に主となりて、亞瓦剌に都せるが、後に南印度の北方をも附屬とせり、東印度と云は、辨葛剌河の東にて、亞華亞剌敢、および暹羅等を云ふと云へり、然れば朝夷氏の說、いまた盡せりとは云難けれど、大旨は違ふことなし）印度志に。莫臥兒の諸國三十五部の內にて。歐羅巴人の能く知る所は。辨瓦剌。坎巴牙なりと云へば。其の餘の諸部は。詳ならざること知べし。（辨瓦剌、坎巴牙の二部は、莫臥兒諸部の極南にして、亞瓦剌都城へは、遙に遠く、應帝亞へは近くして歐羅巴人住所の模寄なる故に、此地方は、西客往來して、通商すること、自由を得るに依て、詳に記すことを得れど、其の餘の諸部は、知ざる成べし、また亞瓦剌は、王城なれば、士人の說を聞傳へても、其梗概を得たるべけれど、麻辣襪爾、および穀羅滿垤兒などの地方の、詳說に比するに、十分の一にも及ばざるなり、然れども百歲の後、いつか佛國の確說委細を傳へむ者は、かならず蘭說に在むか）また我國にて。長崎へ。年々西客來舶する如く。莫臥兒國よりも來りなば。佛國知べけれど。古印度の地を。莫臥兒國より。一統せる後は。支那へも通信せず。（明志に、其の土以下去二中國一絕遠上、朝貢竟不レ至と云へり、莫臥兒の始祖、答墨兒蘭は、初め勞爾に都すとあるは、其の地北京と絕遠なるを云ふ）殊に我が國は。古來天竺と通舶せず。元和年間に暹羅國と通信せし事は。采覽異言等の書にも粗記せり。また寬永年間に。角倉紅屋などいふ商家の天竺へ通商せしと云も。暹羅なり。また世に。宗心渡天と云る。其の紀行を閱するに。暹羅へ渡りしなり。（宗心とは、謂ゆる天竺德兵衛が事なり、）其說に。

暹羅を摩伽陀國とし、且つ靈鷲山も。其國に在とす。故に其の人。中天竺へ渡りしと思ひて。記錄せし故に。其の言ふこと。始終埒もなき事どもなり。流沙。恒河。暹羅。摩伽陀を。皆一國中同所とせり。是は土人。昔より云ひ傳へたる説なるべし。（支那浙江寧波府の海島に、日本僧慧鍔が、觀音を安置せしを、補陀落山と云へる類なり。）釆覽異言にも。宗心紀行を引證して。暹羅の寺を。須達長者が居趾とせり。我が國にて。佛國の實説を知らざること。觀つべし。諸國に佛の遺跡を擬造する故に。靈鷲山も數多諸國に在るなり。獨錫蘭島にのみ。佛跡を寫せるに非ず。（また或説に、彼の暹羅國へ渡海する頃に、長崎人甚兵衞と云ふもの佛跡を尋ねむとて、祇薗精舍に至る、其處の路程四日、氣覺ありしと云ふ、然るに、西域記、慈恩傳などに、祇林を委記せしが、其事なきは不審し、また暹羅より行くならば、直に摩伽陀國に到るべきに、夫よりまた西北の方、日本里法の、二百五十里ばかり遠き、祇薗へ到りしは、また不審し、舍衞國は、古へも豐饒殷富の地なるが、西の方は既に、亞瓦羅城を去ること、甚だ遠きに非ず、この地方中國なり、然るに、異域の人の徘徊を許せしこと、不審し、是に由て見れば、是もまた實の、給孤獨園に非ざること知べし、其の人暹羅を出てより、祇園に到れる往返の路程、見聞する所の紀行を、遺さゞることを惜むべし、）さて西洋人は。典故に昧くて。古名を稽へず。佛說家は。地理に疎くて。今名を知らず。共に莫臥兒を。古への佛國なりと辨へず。（また儒者の、佛書を詳にせずして、一に史籍に據る類は論ふに足らず。）求法僧の紀行は其の人佛國を履て。見聞せる所の實錄なれども。其圖を載せず。西洋人の輿圖は。其の徒印度に居住して。製造せる所の眞圖なれども。古名を記さず。一は實錄にして圖なく。一は眞圖にして古名なし。爰に予其の人に非れども。輿地の癖ありて。傍觀するに堪へず。其の二つを相照して併考せば。推步すべしと思惟して。西圖の印度を載るもの。數圖を閲し。其の地方の梗概を得て。西域記等の里數を以て。安日河に順ひて推步す。其は佛跡みな。此大河の。前後左右に在るを以て

なり。故に恒水の河形と。幸ひに。一二古名の今存せる者と。極星の高度とに依て。五竺の地理を研究し。かたはら。釋迦の遺跡を搜索し。遂に佛國の方位を推究して。其實測を得たり。(彼の紀行、西圖の二つは、古今の異ありと云へども、實錄を以て、眞圖に相照して推步するを以て、山河海陸、里數遠近、古今變り無れば、皆符合せざるものなし、其符合する所、すなはち實測を得たる證なり、)然して後に。諸書に就て校閲するに。和漢の載籍。佛書蘭說。その說くところ紛々たれども。其の是非みな眼目に在りて。分明に辨知せざる事なし。其主意。五竺の分界。および今古の地名を照し。諸處方位を辨知せしむるに有り。彼の諸說紛々たるも。此の實測に由りて一定せしむ。世間僧俗の惑を解に足なむか。(又意ふに、世間の僧俗、おほく天竺を知りて、莫臥兒を知らず、恒河を知りて、安日河を知ざる人、卒爾に此說を聞て、疑ふも有なむか、其は佛國の方位、および其の四方遠近の地名を知ざるに依れり、若よく其れを知らば、今論ずる所を一讀して、諒察すべきなり、)さて近世

輿地圖を製するに。圖面に經緯線を施し。北極出地を傍書す。舊圖に比するに。精密と云べし。然れども。經緯共に。直線に爲して。棋枰の卦を爲すは。里數に量るとき。遠近大差を生ずる故に。此圖は極高に隨ひて。經度廣狹を爲せり。故に圖面の南北は。實の南北に非ず。緯線に準じて。斜に見る所。これ正南北なり。東西は。緯度に廣狹なき故に。經度を直線にす。故に圖面の正東西は。すなはち實の正東西なり。(是も地球の圓體に從ふときは、經線を直に圖すべからずと云へども、地理の實測に害なき故に、姑く製圖の便利に從へり、)さて東は唐土より。西は波斯に至る。北は胡國より南は。應帝亞の地端に至りて。一圖面にして。佛國の方角。また遠近里數を量り。五天竺の分界を知らしむ。と言へり。此の圖この說共に。いと宜しければ。其の儘に採りて。猶今己が著はす書に。用ある地名をも。西域記を始め。他書にも採り。里數を量りて載せるなり。(また彼の考證に、圖四あり、其一は全圖なり、二三四は、全圖狹小にして、詳にし難き故に、夏至線より北を分

て、二つの圖とし、夏至線より南を分て、一圖とせる物にて、共に四圖なり、然れども此に、四圖みな擧むこと、所狹き事なれば、其三圖なる地名をも、皆此の一圖に記せり、また其考説は、本書數十葉の細字にて、最も精しきを、其また此には所狹くて、己が意に、要と思ふ所のみを撫ひて、綴り記せれば、自然に、己が文風になりて、中には撰者の意に應ざる事も有なむか、其はせむすべなし、左にも右にも、此に載せるは略記なれば、委くは本書に就て見るべし、）さて此の圖説の如なれば。本文に。五印度の周廻を。九萬里と云ひ。三垂大海と云へる説共に信ずるに足らず。斯て五印度の中に。南のみぞ。今に應帝亞てふ古名を存せり。（此の國今は、□□□□と云國より治むる由、增譯采覽異言に見えたり、）〇北背雪山と云こと圖を觀て知べし。（なほ此の山の事、また阿耨達池の事は、第四品の第□節に、委く云ふを見べし、）さて本文に。北廣南狹と云へるは合へれど。形如半月は。いさゝか物遠し。また區分七千餘國とあるは。朝夷氏の説の如く。狹き一所をも。國と計へたる員數と見ゆ。（そはなほ第四品に註ふ説をも、合せ考へて辨ふべし、）時特暑熱、地多泉濕とは。輿地圖に據りて考ふるに。此の國は。北極出地。七八度（頭注云春分をこして七八度に當る故に三月比より七月比にて頭の上にあり、）より。二十七八度の間に在りて。赤道の下に當り既に南印度□□の邊は。日の眞下に當りて。眞晝には。表を立るに影（頭注云内法傳に影を見る所にあり、）なしと。曆象編にも云へるが如くなれば。暑熱の酷しきこと知べし。西域記に。國々の人の狀を云とて。顏色黧黑と云ふことの多かるは。暑熱強き故に。自然に顏色の黑きなり。（或説に、俗に色黑き人を、クロンボー頭注云ゼヲン島の西岸にコンロンボと云港あり」と云は、崑崙ぼと云ふ語にて、崑崙國よりあなた天竺の人は、色黑きを、崑崙人の、連來ること有より云へる語なるが、黑むぼと云ことゝなれるなり、と云へり、然も有なむか、）地多泉濕は。暑熱の酷しき地は。自然に濕氣の多かる理は誰も知り。北乃と云より以下は。文義聞えたる儘なれば。共に説を下さず。

【四】五天竺圖

【五】邑里閭閻方城廣峙。街衢巷陌曲徑槃紆闤闠當塗旗亭夾路。屠釣倡優。魁膾除糞旌厥宅居斥之邑外。行里往來僻于路左。至于宅居之製垣郭之作。地勢卑濕城多疊塼。暨諸牆壁或編竹木。室宇臺觀。板屋平頭泥以石灰。覆以甎墼。諸異崇構製同中夏。苫茅苫草。或甎或板。壁以石灰爲飾。地塗牛糞爲淨。時華散布。斯其異也。

此は邑里城郭家居の有趣にて。文義ともに聞ゆれば。註に及ばず。但し地に牛糞を塗り。時華を散布と云こと。華はさる事なれど。牛糞を塗るは信に異なり。(頭注云内法傳受齋軌則の處に、

施主之家設食之處地以牛糞淨塗、とも云へり」案ふにこは婆羅門の末派より。尼犍子外道など云をはじめ。次々に異行を立る者ども。甚多く出來し中に。苦行外道と云も有りて。最穢き法を行へるが有しかば。其の徒の濁始たる事の習ひと成れるなるべし。(其は儀軌どもに、蜜、酥、酪、牛尿牛糞を五淨と稱して、本尊および壇場などを淨むるに、塗ことの多く見ゆるは、決めて苦行外道の法ならむ、と所思ゆればなり、其の原は、牛糞の照日にあたりては、彼麝香といふ物の香するを、愛たるが本にて、其尿をも、酥酪をも、用ふるにや有らむ、牛の中にも、黄牛を別に愛て、其糞を上品とする由なるは、黄牛の糞は、殊に麝香の香つよき物なる故の事にや有らむ、」

【六】華草菓木雜種異名。所謂菴沒羅果。菴弭羅果。末杜迦果。跋達羅果。劫北他果。阿末羅果。鎮杜迦果。烏曇跋羅果。茂遮果。那利薊蘅果。般橠娑果。凡厥此類難以備載。見珍人世者略擧言焉。至於棗栗稗柹印度無聞。梨柰桃杏蒲萄等果。迦濕彌羅國已來往々間植。石榴甘橘諸國皆樹。

【七】土宜所出稻麥尤多。蔬菜則有薑芥苽瓠葷陁菜等。葱蒜雖少噉食亦稀。家有食者。驅令出郭。至於乳酪膏酥沙糖石蜜芥子油諸餅麨。常所膳也。魚羊麞鹿時薦肴胾。牛驢象馬豕犬狐狼獅子猴猨。凡此毛群例無味噉。噉者鄙恥衆所穢惡。屏居郭外。希迹人間。其酒醴之差滋味流別。蒲萄甘蔗刹帝利飲也。麴糵醇醪吠奢等飲也。沙門婆羅門飲蒲萄甘蔗漿。非酒醴之謂也。雜姓卑族無所流別。然其資用器巧質有殊。什物之具隨時無闕。雖釜鑊斯用。而炊甑莫知。多器坏土。少用赤銅。食以一器。衆味相調。手指斟酌。略無匙箸。至於老病。乃用銅匙。

寄歸內法傳に。五天之地「界分綿邈。大略而言。東西南北。各四百餘驛。除其邊裔。雖非盡能目擊。故可詳而問知。」所有噉嚼奇巧非一。北方足麵。西方豐麨。摩揭陀國麵少米多。南裔東陲。與摩揭陀一類。酥油乳酪在處皆有。餅果之屬。難可勝數。俗人之流膻腥尙寡。諸國並多粳米。粟少黍無。有甘瓜。豐蔗芋。乏葵菜。足蔓菁。然子有黑白。比來譯爲芥子。壓油充食。諸國咸然。又五天之人。不食諸虀及生菜之屬。由此人無腹痛之患。腸胃和輭。亡堅强之患矣。ともあり。併考ふべし。毛群を噉ふを穢とし。噉へる者は。恥て郭外に屛居する由なるは。西戎の國に勝りて殊勝なり。(但し羊麞鹿をば、噉ふ由なるは、何なる事にか知りがたし、近き頃は、皇國にしてさる末國にも若ざる人の年ごとに多くなりて、西戎人風に、獸肉を食ふを、穢としも知ざるは、悲しき事なり、此穢の事は、古史傳に委く註せるを見るべし。)さて一器に。衆味を相調へ。手指にて斟酌することは。諸蕃に多く。印度に限らぬ事なれど。鄙しく穢けき態なり。無匙箸と云こと。內法傳にも。西方食法。用右手。必有病故開聽畜匙。其筋則五天所不聞。四部亦未見。而獨東夏共有此事。俗徒自是舊法。僧侶隨情用否。筋既不聽不遮。即是當乎略敎。用時衆無譏議。東夏即可行焉。若執信有嗤嫌。西土元不合捉。略敎之旨斯其事也。と見えたり。

【八】潔淸自守。非矯其志。凡有饌食。必先盥洗。殘宿不再食。器不傳。瓦木之器。經用必棄。金銀銅鐵。每加摩瑩。饌食既訖。嚼揚枝而爲淨。澡漱未終。無相執觸。每有溲溺。必事澡濯。身塗諸香。所謂栴檀鬱金也。君王將浴。鼓奏絃歌。祭祀拜祠。沐浴盥洗。

寄歸內法傳に。餐分淨觸と云ふ條に。凡西方道俗噉食之法。淨觸事殊。既餐一口。即皆成觸。所受之器。無宜重將。置在傍邊。待了同棄。所有殘食。與應食者。食之。若更重收。斯定不可。無問貴賤。法皆同爾。此乃天儀。非獨人事。と云へるは、忉利天より傳へたる儀なる

由なり、故非人事と云へるなり、此の事のみならず、印度國に、正義と見ゆる事ともは、總て天儀と聞ゆること、深き由あることなり、其由は、次品の末に言ふを見べし、西戎の國にて、一几一器に、主客互に匙また箸をさし入れ食するとは異りて、よくも皇國の風儀に似たりけり、）諸論云。不嚼楊枝。便利不洗。食無淨觸。將以爲鄙。豈有器已成觸還將盆送所有殘食却收入厨。餘飯即覆寫瓮中。長臛乃反歸鐺內。羹菜明朝更食。飯果後日仍餐。持律者須識分疆。流漫者雷同一槩。凡受齋供及餘飲噉。既其入口身即成觸。要將淨水。漱口之後。方得觸著餘人及餘淨食。若未澡漱觸他並成不淨。其被觸人皆須淨漱。若觸著狗犬。亦須澡漱。其嘗食人應在一邊。嘗訖洗手漱口。並洗嘗食器。方觸鐺釜。若不爾者。所作祈請及爲禁術。並無効驗。縱陳饗祭神祇不受。（此れまで謂ゆる諸論の文なり、然して此の諸論と云へるは、決めて梵志の學ぶ吠陀論なり、そは次卷に註を見べし、）五天之地。云與諸國有別異者。以此淨觸爲初基耳。昔北方

胡人至西國。以便利不洗。餘食內盆食時叢坐。互相觸。不避猪犬。不嚼齒木。遂成譏議。故行法者。極須存意。然東夏食無觸淨。其來久矣。雖聞此說。多未體儀。と云ひ。（東夏とは、西戎の國をいへり、食に觸と淨との別なきこと、彼の國の風俗を記せる書どもを見て知べし、）食訖りて楊枝を嚼むこと。同書に。食罷之時手必淨洗。口嚼齒木。疏牙刮舌。務令清潔。餘津若在。即不成齋。然後以其豆屑。或時將土水撚成泥。拭其脣吻。令無膩氣。云々とあり。（さて下文に、牛糞を手に摺りて、淨むる由言へれど、其は記し出ず、）また食に盥漱。又畢行香泥。如梧子許。揩手令使香潔。次行檳榔荳蔻。以丁香龍腦。咀嚼能令口香。亦乃消食去癊。とも見えたり。此の齒木の事は。朝嚼齒木。といふ條に。每日旦朝。須嚼齒木。揩齒刮舌。務令如法。盥漱清淨方行敬禮。若其不然。受禮禮他。悉皆得罪。其齒木者。梵云憚哆家瑟詑。（憚哆譯之、）〓書入云なほ全文寫すべし、又云此は四吠陀の處に入る、』便利の後に洗ふこと。今も

印度に。其の風俗遺れる由聞ゆるは。殊勝なる事なり。心有む人は。效ふべき事にこそ。(此の風俗の遺れる事は以下缺)

【九】衣裳服玩無所裁製。貴鮮白輕雜彩。男則繞腰絡腋。横巾右袒。女乃襜衣。下垂通肩。總覆頂爲小髻。餘髮垂下。或有剪髭別爲詭俗。其所服者。謂憍奢耶衣。及氎布等憍奢耶者野蠶絲也。菆摩衣麻之類也。頷鉢衣織細羊毛也。褐剌縭衣織野獸毛也。細耎可得緝績。故以見珍。而充服用。其北印度風土寒烈。短製褊衣頗同胡服。

衣服に。鮮白の物を貴ぶこと。寄歸内法傳にも。西方俗侶官人貴勝。所著衣服。唯有白氎一雙。貧賤之流。只有一布。既無腰帶。亦不裁縫。直是闊布兩尋。繞腰下抹と見ゆ。(なほ委しくは、本書に就て見るべし、)華鬘は。華嚴經音義に。梵言摩羅。此譯云鬘。案西域結鬘師多用蘇摩那花。行列結之。以爲條貫。無問男女貴賤皆此莊嚴。或首或身以爲飾好。則諸經中有天鬘。寶鬘。花鬘市等。同其事也。(阿毘曇心論、また四分律の音義も同じ、)大般若經音義に。案花鬘者。西國人嚴身之具也。梵語云麽羅。此譯爲華鬘。五天俗法。取草木時花。暈澹成彩以線貫穿。結爲花鬘。不問貴賤莊嚴身首以爲飾好とあり。また身に瓔絡環釧などを佩ことも。其に神國の古へに似たるは。由緒ある事なり。(其は、下に註ふを見て知べし、)(頭注云毘婆娑論十二卷に至那國雖奴僕等皆依繒絹餘方貴勝所不能得、印度等國、乃至貧賤皆衣氎衣餘方貴人亦不能得と有れば、氎は美服なりと見ゆ、但此文は譯者の攙入と見えたり、其は至那と印度と對し云るを見て知べし、)

【十】刹帝利。婆羅門。清素居簡潔白儉約。國王大臣服玩良異。華鬘寶冠以爲首飾。環釧瓔絡而作身佩。其有富商大賈唯釧而已。人多徒跣少有所履。染其牙齒或赤或

黑。齊レ髮穿レ耳。脩鼻大眼。斯其貌也。

刹帝利と婆羅門とは。其の服玩同じき故に。共に舉たりと見ゆ。是を以て。謂ゆる諸外道とは殊なる事知べし。清素居レ簡。潔白儉約とは。然しも仰山なる飾を好まず。清潔なる服玩を用ふる事と聞えたり。環釧。また纓絡を飾とする事は。皇國の古へに合へること既にも云へり。（但し富商大賈は、釧のみ飾とすれど、寶冠は著ざると見えたり。）さて人多徒跣と云より下は。印度人の。なべての風俗を云へり。寄歸内法傳にも。西方不レ著二鞋履之屬一とあり。（また對尊儀と云條にも、若對二形像、及近二尊師一、除レ病則徒跣是儀、無三容輙著二鞋履、若是寒國聽レ著二短靴一、諸餘履屣、隨レ處應レ用ともあり、此は比丘の儀狀を云へるなれど、譲に鞋を著ることは、許さゞるなり。）阿含經を察るに。佛祖また比丘等が。乞食して歸れる事。また他家に往たる事など。多く見ゆるに。毎も足を洗ふと云ことの有るは。徒跣なればなり。（脩こそ佛像に、鞋履の屬を著たるは、見えざるなり。）さて耳を穿ちて。耳璫といふ物を懸ること。最も卑陋しき風俗なるは。案ふに此は彼の外道の族より始めて。遂に國風と成れるにや。然にても。諸天に。耳璫の事の見ゆるは。不審なり。（此は早く、佛祖の時の風俗をもて、諸天にも及ぼし說るにも有べし。）

【十一】凡遭二疾病一。絶レ粒七日。期限之中多有二痊愈一。必未二瘳差一方乃餌レ藥。藥之性類名種不レ同。毉之工伎占候有レ異。終沒臨喪哀號相泣裂レ裳拔レ髮。拍レ額椎レ胷。服制無レ聞。喪期無レ數。

疾病に遭て。食粒を絶こと。凡て醫療の趣は。寄歸内法傳に。大略見えて。下に引が如し。喪期無數と云へるは。唐土にて。喪に期を立たるに對へて。印度の風を言ひ著せりと聞ゆ。寔には期のなきぞ。追遠の眞情なりける。

【十二】送レ終殯葬其儀有レ三。一曰火葬。積レ薪焚燎。二曰水葬。沈レ流漂散。三曰野葬。棄

林飼獸。國王殂落。先立嗣君。以主喪祭。以定上下。生立德號。死無議謚。

三葬ともに最も鄙しく。眞の道に叶ざる惡風俗なり。(但し此事は、古人往々既に辨へたれば、今更に言はず。)さて野葬を。また風葬とも云ひ。是に土葬を加へて。四大の葬法と云よし。後の佛籍どもに見えたり。

【十三】喪禍之家人莫就食。殯葬之後復常無諱。諸有送死以爲不潔。咸於郭外浴而後入。

此も眞の道に叶ひ。漢を效ふ俗學者どもには優りて。殊勝なる所行なり。

【十四】年耆壽耄死期將至。嬰累沈痾願棄人間。親故知友奏樂餞會。泛舟鼓棹濟殑伽河。中流自溺謂得生天。十有其一未盡鄙見。出家僧衆制無號哭。父母亡喪誦念酬恩。追遠愼終寔資冥福。

此等の所爲は。梵志の敎に出たる事とは思はれず。彼謂ゆる。苦行外道の鄙見にぞ有べき。

【十五】君王奕世唯刹帝利。篡弑時起異姓稱尊。國之戰士。子父傳業遂窮兵術。居則宮廬周衞。征則奮旗前鋒。凡有四兵。步馬車象。象則被以堅甲。牙施利距。一將安乘授其節度。兩卒左右爲之。駕馭車乃駕以駟馬。兵師居乘。列卒周衞扶輪挾轂。馬軍散禦逐北奔命。步軍輕捍敢勇充選。負大櫓執長戟。或持刀劍前奮行陳。凡諸戎器莫不鋒銳。所謂矛楯。弓矢。刀劍。鉞斧。戈殳。長矟。輪索之屬。皆世習矣。

諸國を領居る。刹帝利どもの。篡逆なること。增一阿含六重品に。生漏梵志問佛言。刹利意何所求。佛言常好鬪訟。多諸技術。好喜作務。所作要究竟終不中休。又問言。國王何所求。佛言。王意所欲得國。故意在兵杖。貪著財寶と見え。

力品に。國王以二憍慢一爲レ力。以二此豪勢一而自陳說。とも有を見ても知られ。同經衆生居品に。比丘等が乞食すべき國の事を談ふ所に。摩竭國阿闍世。在レ彼治化。主行二非法一。又殺二父王一。拘留沙國惡生王於二彼土一。治化極爲二凶弊一。無レ有二慈仁一。人民麤暴好二喜鬪訟一。舍衞國波斯匿王。主行二非法一。犯二聖律敎一。譏二比丘尼得二阿羅漢一。十二年中閉二在宮內一。與共交通。と云ひて。此國々に於て。乞食すまじと談れる事もあり。此は佛祖の言に。建二立善本一波斯匿王得二無根善信一。起二歡喜心一。阿闍世王など擧たる王等なるに。其惡逆かくの如く。彼名高き阿育王と云しも。愚痴の極なる惡王なりけり(皇國の古人は、姑く置て、佛國また西戎の國にて、甚異に、佛法を信じたる倫を見通すに、愚人は更なり、陰惡ある人の、心臆せるが多かるは、其は謂ゆる五逆十惡を犯せるも、三寶を信ずれば、地獄の罪を免るといふ、佛祖の說を賴みてなり、此の事なほ第□品、蘇我の馬子が、始めて佛を信したる所に委く云べし)簒弑時に起りと云ふこと。觀經に。劫初已來。有二諸惡王一。貪二國位一。故殺二害

其父一。一萬八千と有にても知べく。王さへに斯在ば。況て臣として。君を殺せる者の多有けむこと。准へて想ふべし。故異姓にて。尊を稱するもありしなり。(本書に、諸國の事を記せる所に、其の王を、或は婆羅門種也と云ひ、或は吠奢種也といひ、或は戍陀羅種也、と判れる國々も多かるは、此の故にぞ有りける)さて國の戰士。と云より以下は。文義よく通え。殊に此には然しも用なく。雖通り心得て在べき事どもなる故に。註を下さず。

【十六】政敎既寬。機務亦簡。戶不二籍書一。人無二傜課一。王田之內大分爲レ四。一充二國用一。祭祀粢盛。二以封二建輔佐宰臣一。三賞二聰叡一碩學高才。四樹二福田一給二諸異道一。所以賦斂輕薄傜稅儉省。各安二世業一俱佃二口分一。假二種王田一六稅二其一一。官僚各有二分地一。自食封邑風壤既別。地利亦殊。

國民を治むる有趣。西戎國などよりは。甚く寬容にして。大旨は。皇國の御制度に似たり。其由を

巨細に言むは。此に專となき事なれば漏しつ。想ふに。本は梵志の教へ立たる法度なるべし。

【十七】夫其俗也。性雖狷急。志甚貞質。於財無苟得。於義有餘讓。懼冥運之罪。輕生事之業。詭譎不行。盟誓爲信。政教尚質。風俗猶和。凶悖群小時虧國憲。謀危君上。事跡彰明則常幽囹圄。無所刑戮。任其生死。不齒人倫。犯傷禮義。悖逆忠孝。則劓鼻截耳斷手刖足。或驅出國或放荒裔。自餘咎犯輸財贖罪。理獄占辭不加刑朴。隨問款對據事平科。拒違所犯。恥過飾非欲窮情實。事須案者凡有四條。水火稱毒。

鼻を劓き耳を截り。手足を斷るなど。印度の刑の極みと聞ゆるは。是れまた寛容なる律なり。國より驅出し。遠く放流し。或贖の財を出さしむるなど。皇國の御制に似たり。(内法傳に、西國極刑之儔、糞塗其體、驅擯野外、不處人流、除糞去穢之徒、行擊杖自異、若誤衝著、即連衣遍洗、)また水則罪人與石。盛以連囊。沈之深流。校其眞僞。人沈石浮則有犯。人浮石沈則無隱。火乃燒鐵鎌罪人踞上。復使足蹈。既遣掌案。又令舌舐。虛無所損。實有所傷。懦弱之人不堪炎熾。捧未開華散之向焰。虛則華發。實則華焦。稱則人石平衡。輕重取驗。虛則人低石擧。實則石重人輕。毒則以一羖羊。剖其右髀。隨被訟人所食之分。雜諸毒藥。置剖髀中。實則毒發而死。虛則毒歇而穌。擧是四條以防百非之路。とあり。情實を究むる四條の中に。燒鎌をもて云々する事は。我が探湯に似たり。(皇國にも斧を燒て、其を掌に受しめ、情實を究たる事も、近き世まで、往々有し事と聞えて、物にも見えたり。)其の餘の事ども、甚く古意に背けりと思ふ事のなきは。刑法もまた 西戎國には勝りて所思るなり。

【十八】致敬之式其儀九等。一發言慰問。二俯首示敬。三擧手高揖。四合掌平拱。五

屈膝。六長跪。七手膝踞地。八五輪俱屈。九五體投地。凡斯九等極唯一拜。跪而讃德。謂之盡敬。遠則稽顙拜手。近則舐足摩踵。致詞受命褰裳長跪。尊賢受拜必有慰辞。或摩其頂。或拊其背。善言誨導以示親厚。出家沙門。既受敬禮唯加善願。無止跪拜。隨所宗事多有旋繞。或唯一周或復三帀。宿心別請數則從欲。

百論疏に。禮有三種。一者下禮所謂揖也 二者中禮。四支着地頂不戴足。三者上禮。一身之中頭尊足卑。今以己之尊禮彼之卑。蓋是敬情之至とも見ゆ。九等の敬式。文よく聞えたり。然にても足を舐る式は。いと蠢けし。沙門の敬禮の狀は。佛經ごとに見えて。人普く知れり。宿心別請とは宿夜に思ひて。其家に請する由にて。數請ふ時は。其請に從りて。其人がり往を云ふ。下の品々に見たるが如し。(近くは、釋氏要覽の禮數篇を見ても知べし。)

【十九】數量之稱謂踰繕那。舊曰由旬。又曰踰闍那。又曰由延。皆訛略也、踰繕那者。自古聖王一日軍行也。舊傳一踰繕那四十里矣。印度國俗乃三十里。聖教所載唯十六里。

翻譯名義集に。踰繕那此云限量とあり。舊傳云々とは。大論に。由旬三別。大者八十里。中者六十里。下者四十里。謂中邊山川不同。故行里不等とある。下者四十里。と云へるを採て云ふなるべし。○印度の國俗云々は。玄奘法師が渡れる。當時の國俗には。三十里を踰繕那と云へる由なり。○聖教所載云々とは。佛經どもに。踰繕那とあるは。唯十六里の事ぞ。と云るなり。(さて其の一里と云は、唐土の六町一里なれば、十六里は、九十六町なり、皇國の三十六町一里を以て云ふときは、二里二十四町なり、然れども、其は謂ゆる、踰繕那の異説を擧たるにて、正量にあらず、次節の量を以て正と爲べし。)

【二十】窮微之數。分一踰繕那爲八拘盧舍。拘盧舍者。謂大牛鳴聲所極聞。稱拘盧舍。分一拘盧舍爲五百弓。分一弓爲四肘。分一肘爲二十四指。分一指節爲七宿麥。乃至蝨蟣隙塵。牛毛。羊毛。兎毫銅水。次第七分以至細塵。細塵七分爲極細塵。極細塵者不可復析。卽歸空故曰極微也。

二十四指並べたるを一肘とし。(大抵皇國の一尺二寸に當るべし)四肘を一弓とし。(皇國の四尺八寸に當る)五百弓を一拘盧舍とし。(皇國の二百四十丈に當る)八拘盧舍を。一踰繕那と爲る由なり。然れば一踰繕那は。皇國の千九百二十丈に當りて。六十間一町を。三十六町合せたる里數に積れば。一里十七町二十間に當るなり。(下なる品々に、由旬といひ、踰繕那とあるは皆是に倣ふべし)

【二十一】日月次舍。稱謂雖殊。時候無異。隨其星建。以標月名。時極短者謂刹那也。百二十刹那爲一呾刹那。六十呾刹那爲一臘縛。三十臘縛爲一牟呼栗多。五牟呼栗多爲一時。六時合成一日一夜。夜三晝三。居俗日夜分爲八時。晝四夜四於一一時各有四分。

倶舍論に時之極少名刹那。壯士一彈指頃とあり。○呾刹那は。名義集に翻一瞬と云へり。然れば六十瞬の間を。一縛臘とし。千八百瞬の間を。一牟呼栗多とし。九千瞬の頃を一時と爲し。(五牟呼栗多を、名義集には、五十牟呼栗多とあり、誰か是なることを知らず)此の六時を。晝夜に分て。一日一夜と爲す由なり。○居俗云々とは。俗間の者どもは。本來の定めに違ひて。如此も定むる由なるべし。

【二十二】月盈至滿謂之白分。月虧至晦謂之黑分。黑分或十四日十五日。月有小

大故也。黑前白後合爲一月。六月合爲一行。日遊在內北行也。日遊在外南行也。總此二行合爲一歲。又分一歲以爲六時。正月十六日。至三月十五日漸熱也。三月十六日。至五月十五日盛熱也。五月十六日。至七月十五日雨時也。七月十六日。至九月十五日茂時也。九月十六日。至十一月十五日漸寒也。十一月十六日。至正月十五日盛寒也。

文よく聞ゆれば。註を下さず。

【二十三】如來聖敎歲爲三時。正月十六日。至五月十五日熱時也。五月十六日。至九月十五日雨時也。九月十六日。至正月十五日寒時也。

上件數量をいふ事も。聖敎所載云々といひ。此にも如此云るを思ふに。佛祖の意と。凡て此の類の事までを。世間の例とは違ひて。殊更に法を立て。人の面向たる物と見えたり。（さる心ばへの事ども、往々見えたり、其は因ミ有らむ所に、次々註ふべし。）文は聞えたるが如し。

【二十四】或爲四時。春夏秋冬也。春三月謂制咀邏月。吠舍佉月。頭注云吠舍佉月倶冠八十六才ニ星ノ名トアリ、逝瑟吒月。當此從正月十六日。至四月十五日。夏三月謂頞沙荼月。室羅伐拏月。婆達羅鉢陀月。當此從四月十六日。至七月十五日。秋三月謂頞濕縛庾闍月。迦刺底迦月。末伽始羅月。當此從七月十六日。至十月十五日。冬三月謂報沙月。磨袪月。頗勒窶拏月。當此從十月十六日。至正月十五日。

報沙月を。西域記には。月の字を落し。名義集には。沙の字を脱せり。今校合て載せり。なほ本書を引見て云べし。

○聚樂廿一ノ十四ウ廿七ノ十ウ○諸國事廿二ノ二十七ウ十八才廿六ノ十五才○轉輪王九ノ三才卅四ノ廿ウ西キ一五才同六丁四主事○譯事住一ノ十三ウ○守羅廿五ノ十五ウ○天眼事法數廿四廿七ウ○阿僧祇廿五六才廿七ノ七才四十二ノ二ウ四十七ノ十二ウ五十ノ十二才住一ノ十七才三ノ十二ウ票十二ノ一ウ三才○記朔十九ノ二才廿二九才卅八ノ十三才三十九ノ七才五十六ノ九ウ九十ノ九十ウ○標四八才十二ノ十九ウ

印度藏志卷之二稿

大壑　平篤胤撰述

男　平田鐵胤　同

孫　同　延胤　同

門人　青山景通　校

○印度國俗中第二

族姓殊者有四流焉。一曰婆羅門。淨行也。守道居貞潔白其操。二曰刹帝利。王種也。奕世君臨。仁恕爲志。(刹帝利、舊曰刹利略也。)三曰吠奢。商賈也。貿遷有無逐利遠近。(吠奢、舊曰毘舍訛也。)四曰戍陀羅。農人也。肆力疇壠勤身稼穡。(戍陀羅、舊曰首陀訛也。)凡茲四姓。清濁殊流。婚娶通親。飛伏異路。内外宗枝姻媾不雜。婦人一嫁終無再醮。自餘雜姓寔繁。種族各隨類聚。難以詳載。

族姓の四流とは。印度に謂ゆる四姓を云ふなり。○一曰婆羅門云々。此は初品に。既に註へれば。今更に云はず○二曰刹帝利云々。金光明最勝王經音義に。刹帝利梵語也。此譯爲田主。上古以來王

族貴種、常習四圍陀論、博聞強記。其中有殊勝福者、衆立爲王也とあり。（また六波羅密多經音義に、刹帝利者、彼國王種也、福智勝者、衆舉爲王、大涅槃經音義に、刹利或云刹帝利、劫初以來帝王貴種此云田主、大般若經音義に、刹帝利、刹音察、以音梵音、歷代王種也、其中有福德智慧過於衆人者、共立爲王、因以爲氏也、雜阿毘曇心論音義に、刹利此譯云土田主也、謂王族貴種是也、など見えたり、彼此合せ見て、其の趣を知るべし。）亦習四圍陀論と云へるは。此論を習行すること、婆羅門種の世業なるを、刹利種も彼世業を習ふ故に。亦とは言へり。○三曰吠舍云は。此を同じ音義に。薜舍亦是梵語、此即商主也、雖有大福富有珍財、不能通達典墳、貨遷逐利爲業。爲多蓄積之故。王臣保惜。或賜邑封爲長者也。とあり。（また大涅槃經音義に、毘舍賣買求利、販易之人也、大般若經音義に、吠舍古云毘舍訛也、皆巨富多財通於高貴、或賞旅博貨涉歷異邦、蓄積資財、家藏珍寶、或稱長者、或封邑號者也、雜阿毘曇心論音義に、鞞舍正言吠舍、此云坐、坐謂坐賈也、案天竺土俗多重寶貨、此營求積財巨億、坐而出納故以名焉、なども見ゆ、合せ見て其の趣を知るべし。）○四曰戍陀羅云々は。大般若經音義に。戍陀羅古曰首陀、略不正也。此姓之徒務田業。耕墾播植賦稅王臣。多爲民庶。並是農夫。寡於學識。四姓之中。之居下等也とあり。（また大涅槃經音義に、首陀下姓、王役田夫之類也、雜阿毘曇心論音義に、首陀應言戍陀羅、謂田農官學者也、など見ゆ、合せ考ふべし、○私志紀に、毘舍此云商賈、亦翻爲居士、居者積也、居積財貨故也、首陀此云農業、播植五穀之種姓也、亦云細民、以其事業細碎卑下故也、とも有り、また首陀を、增一、雜、二阿含には、長者と譯し、長中二阿含には、工師と譯せり、案ふに此は首陀種の中には、農業を事とする者、また工巧を業とする者なども有が故に、かく云るにや、長者と云は、吠舍をのみ云ふ語かと思ふに、首陀をも然言ふは、中に富有なるを云なるべし、其は阿含中に、婆羅門を、富めるをば、長者と云ることも見ゆればなり、斯て居士と云は、

吠舍に限る事と聞へて、他姓に云ることは見ず、）さて本文西域記に、かく四姓の次第を載せる事は、玄弉法師が、彼國へ渡れる、當時の有趣をもて、記せりと見ゆるに就て論あり、其は此の四姓のこと、長阿含世記經の佛説にては、劫初に無量の人種、化生せるが中の一人を、衆人勸めて民主と爲たる、是れ刹利種の始なる由を説畢たる次に、爾時有一衆生念言、世間所有家屬萬物、皆爲毒刺、獨在山林閑靜修道、即遠離家、入於山林樹下思惟。衆人見已恭敬供養。稱善哉。此人能捨家居。獨處山林。寂然修禪。離衆惡。因是世間稱曰婆羅門。是故有婆羅門種也。彼衆生中習種々業。以自營生。多積財寶。名爲居士。是故世間有居士種。彼衆生中有機巧人。多所造作以自生活、是首陀羅工巧始也。於是世間有四種名也。と説たり。（文はいたく切めて引たれば、委くは本經を見べし、但し此經に、吠舍を居士と譯し、戍陀羅をは、工巧と譯せり、）此の佛説に。居士を第三とし　首陀羅を第四とせるには難無れど。刹利種を第一とし　婆羅門を第二として。其

起を説ることとは。佛祖が誣説にて。實には婆羅門種ぞ。第一なりける。（凡て經論疏どもに、刹帝利を第一に舉たるは、現在なる事實を捨て、佛祖がこの誣説を取れるなれば、盡く非なり、上に引く經々の音義にも、金光明經、雜阿毘曇心論の音義は、婆羅門を第一に舉て、これ眞面目なるを、其餘の音義どもは、刹利を第一と爲たるは、右の誣説を受たる也、後の物ながら、大藏、三藏の二法數に、本文と同じく、刹利を第二に舉たるを、古へを知れりと云べし、）然るは。此種姓の最勝最貴なる由は。初品に數多の籍を引て。精しく説辨へたる如くなるを。猶茲にも言はゞ。善見律に。常修淨行。博學多聞高貴人也。大涅槃經音義に。婆羅門謂淨行。高貴捨惡法之人。博學多聞者也。など見え。上にも引りし。唐の義淨三藏が。寄歸內法傳に。五天之地。皆以婆羅門爲貴勝。凡有座席並不與餘三姓同行、自外雜類故宜遠矣。と言ひ（文の意は、五天竺中には、悉く婆羅門を、最貴最勝の種俗として、座席に會集する事ある時も、刹利、吠舍、首陀の三姓と、同席同行さへに

せず、中にも刹利は、王種なるすら、如此なれば況て三姓の外なる、雑姓の類族どもは遠ざかりて、近よること能はずと云へるなり、また西域記に、摩竭陀國の處に、伽耶城、甚險固少居人、唯婆羅門有千餘家、大仙人之祚胤也、王所不臣、衆咸崇敬といふ事もあり、)上に擧る本文にも。印度種族。婆羅門特爲清貴と云へるをや。玄奘義淨ともに。甚く佛祖に心醉せる徒なれば。若し信に佛說の如く。刹利第一ならむには。彼處に渡りて。親しく見聞せる二人が。右の如く記さむ物かは。(また佛說の如くは、殊に國號にも負まじき物をや、熟々思ふべし、)さて初品に引たる籍等に。梵志らが說に、其先祖梵天の口より。生出せりと云ことを。佛祖は詐なりと言へれど。上古には然る例いか程もあり。既に其の身も。母が右脇の穴なき所より出たりと云ふに非ずや。(但しかく云へるに依りて思へば、佛祖が其の母の脇より生出せりと云ことも、妄說にやと思ふ由あり、其は第□品に論ふを見るべし、)また彼の引たる書どもに、此類人自云。我本始祖。從梵天口生。故取梵名

云々。とやうに記せる。是また趣意ある言狀にて。他よりは然云ねども。自誇りて云ふ說ぞ。と云意を含たる語勢なり。然れども自言のみならず。國人擧りて。然か稱して尊重せること。西域記。內法傳の記し趣にて論なく。大毘婆沙論には。大地所有。本是梵王神力。化作施諸婆羅門今婆羅門勢力羸弱。刹帝利等侵奪受用。とも見えたり。然ればこそ。佛祖が在世に在し婆羅門の趣を。阿含に據りて察るに。刹利王種の族さへに。其の往來を見ても。大僊人。和尚。上人。大師など稱して。尊崇頂禮せる趣も。著明に所知たれ。(また尊みて、世尊と云へる事もあり、凡て是等の有來し梵志の稱號をば、佛祖みなとりて、我を稱せしめたる故に、後には和尚、上人、大師など云を、佛者に稱し、世尊と云へば、佛祖が事の如くなも成にける、凡て佛法に用ふる諸號は更なり、此は難なしと見ゆる限りは、大抵婆羅門行より、竊せるにぞ有ける、其は次々に辨ふを見るべし、)然れは婆羅門種の起原を。世間に有ゆる。萬物家屬を毒刺として。寂靜を好み。家を捨て山林に入れる故に。婆羅門

と稱せりと云へる佛說は。梵は靜淨の義なるより思ひ附て。例の翻案せる誣說造言なること著明なり。(名義集に、普門疏云、劫初種族、山野自閑、故人以㆓淨行㆒稱㆑之、肇云秦言㆓多意㆒云々とある說の類は、摠て佛祖の誣言に轉化せられたる說にて、論ふに足らず、)然るは。家族を毒刺とするは。下に論ふ如く。外道に始れる沙門行にて。佛祖が道の要旨にこそ有れ。婆羅門の本行には非ぬをや。(此の事委くは、第□品に辨ふを見るべし、)抑佛祖が此の誣說を發せる因緣。いかにと考ふるに。刹利。吠舍。首陀の三種姓は。第□品に見ゆる佛說の如く。謂ゆる劫初に。一時に蟲の沸出る如く。化生したるにて。刹利種の祖と云へども。其の中なれば。猶卑しく。佛祖は其の種族なる故に。彼の梵志らが出自を。世人の尊重するが妬ましさに。右の如き誣言を發して。梵志は更なり。大梵王の古傳をも說破して。甚くかの神を卑しめ詈たる物なり。(大梵天王を卑しめ詈りたる事は、第□品に出れば、其處に委く論ふを見べし、)然して世人の信まじと思ふ妄說には。例として大梵王の語。またば故事などを作り設けて。其の證に引出ること。阿含に數所見えて。覺えず獨笑せらるゝこと多かり。(法苑珠林に、阿毘曇論を引て、大梵天者、異道ノ人等、以爲㆘能生㆓萬物㆒之本㆖、彼梵天王亦計爲㆓造化之主㆒、如來欲㆑破㆓彼情見㆒、故別標說爲㆑有也と云へるは、即この意ばへなり、)彼四姓經。また世記經にも。右に引く刹利第一。婆羅門。第二の說をとき詑て。梵天王頌曰とて。生中刹利勝。能捨㆓去種姓㆒。明行成就者。世間爲㆓第一㆒と說きて。我印㆓可其言㆒と云へるは。絕倒に堪たる事にて。此はかの大論に。衆生常識㆓梵天㆒。以爲㆓祖父㆒。故說㆓梵天㆒。と云る方便なりかし。(四姓經、世記經共に長阿含中にあり、彼梵天王頌と云もの、種姓の議論には、必いひ出る語にて、阿含中に甚うるさきまでに、所々見えたり、)かくて仇に取れる梵志等に。をり〳〵種姓の恥しめを受る事を苦みて。弟子比丘どもに。若人問㆓種姓㆒。我是沙門釋種子也。親從㆑口生。從㆑法化生。大梵名者即如來。號㆓如來㆒爲㆓世間眼㆒。爲㆓世間智㆒。爲㆓世間法㆒。爲㆓世間梵㆒。爲㆓世間甘露㆒。爲㆓世間注主㆒。と答ふべしと敎へて。

種姓を擇ばず。其の法を信受奉行する者を。總じて釋子と稱する事を始めて。刹利第一。婆羅門第二の說を誣出せるなり　是をこそ。我慢の人とは云べけれ（此惡弊本朝までに及びて、殊に姓氏を重むずる古風を亂し、彼日蓮が旃陀羅なるも、釋子と云へば、何なる貴種高姓の人々にも、異なく尊重せらるゝ事としも成ぬるは、最も歎息しき事なりかし）さて提婆論に。圍陀論師說として。從那羅延天臍中。生大蓮華。從蓮華生梵天祖公。從梵天口中。生婆羅門。兩臂中生刹利。兩髀中生毘舍。從兩脚跟生首陀。云々とあり。四種姓ともに。梵天の口臂髀脚の四所より生せりと云こと。（譬喩經、また名義集にも見たれど）此は梵志種の。梵口より生れつと云ふ說のみ實にて。餘の三種姓は。佛說の如く　劫初に。一時に化生して。次々に三種に派りたると所思たり。（然れども、一時に化生せるも、大梵自在天神の、造化の德に資ことは、云ふも更なり、斯て、度化生して後は、永く胎生することに定まりぬることと、是また言ふも更なり）然らでは。婆羅門種のみ梵胤なる由を。口實と爲來るべき謂無ればなり。然れば兩臂中生刹利と云より以下は。後に婆羅門種を美み思へる徒の。各々に。さる妄說を放ちしを集め載して。圍陀論師說と。後の佛者が誣たる說とこそ聞えたれ。（然は有れども、婆羅門を梵口よりと云ふ說は、何れにも動くことなし）さて凡て玆の四姓と云より末は。聞ゆる儘の文なれば　註を加ふるに及ばず。

其婆羅門。學四吠陀論（舊曰毘陀、訛也、）一曰壽。謂養生繕性醫方諸事。二曰祠。謂享祭祈禱事火懺悔。三曰平。謂禮儀占卜兵法軍陣。四曰術。謂異能伎數禁呪符印。

吠陀は。諸書に皮陀。韋陀。薜陀。圍陀。吠馱。鞞陀。違陀。毘陀。婆陀など記し。何れも其の一を執して。餘を訛りと云へり。今は孰れを正しとも定め難し。言義は。密嚴經音義に。吠陀梵語也。此譯云明論。謂壽祀平術。名四吠陀也。大涅槃經音義に。四吠陀此云四明論。有十萬頌。西方所重。明四種法。一壽。二祠。三平。四術と見え。名義集には。吠陀此云智論。知此生智。

卽邪智論。亦翻二無對一。とも言へり。（卽邪智論なりと云へるは、佛者の例の貶言なり、大藏三藏の二法數も、此尻馬に乘て、卽婆羅門之邪論也、以二世間之智一、造二養生等書一、而有二四種不同一、故名二四韋陀典一、其書不三曾傳二至東土一、と云へり、以二世間之智一と云へるは、佛法を出世法と自稱するに對して、吠陀を貶しめたる語なり。）また衆經音義に。韡陀此云レ分。亦云レ知也。四名者。一名二阿由一。此云レ命。謂二醫方諸事一。（今標る本文に、壽とあるを命とあるは、譯の違なり、倶舍頌に、命根、體卽壽、能持二煖及識一といひ、弘決一に、一期曰レ壽、連持曰レ命、いづれにても宜し、阿由を百論疏には、億荷力と作き、大涅槃經義記、法華文句には、億力と作たり、共に阿由と同音なり、韻鏡をよく見む人は疑はじ。）二名二夜珠一。謂二祭祠一也。（大涅槃經義記、法華文句などには、二耶受とあり、然れば彼の二法數に、珠夜と云るを、雜心論に、耶訓とあるも、共に誤なり。）三名二婆磨一。此云レ等。謂二禮儀卜相音樂戰法諸事一。（今の本文に平と云へるを、等とあるは、是また譯の違にて、義は異なし、倍

かの二法數に、娑を婆に誤れり。）四名二阿闥一。謂二呪術一也。ともあり。（本書に、闥字の下に、婆拏の二字あれど衍なり、そは百論疏に、阿闥とのみあり、雜心論、大涅槃經義記、法華文句ともに、阿陀と有ればなり。）さて此四明論の起原を。六波羅密經十偈に。「大梵演二說四圍陀一と云ひ。（百論疏に、舊毘婆沙論を引て、大婆羅門、造二皮陀說一とあるは、大梵と云に同じ、そは梵と婆羅門と、同語なること、前に云へる如くなればなり。）大毘盧遮那經。住心品の。大自在天乃至天仙。大圍陀論師。各々應二善供養一。とある所の疏に。圍陀是梵王所演四種明論。大圍陀論師。是受二持彼經一。能教授者。以三能開二示出欲之行一故。應二歸依一也。於二彼部類之中一。梵王猶二如佛一。四圍陀典。猶二如十二部經一と見え。（十二部經とは、佛法の本經と立たる經々なり、委くは第□品に注ふを見べし。）共に大梵王の演說とせり。然るを摩登伽經に。昔有レ人名爲二梵天一。修二學禪道一有二大知見一。造二一圍陀一。流布教化。其後有レ仙。名曰二白淨一。出二興于世一。造二四圍陀一。一者讃誦。二者祭祀。三者歌詠。四者禳災。云々と言ひ。（こ

の云々と約せる文は、下の細注に引くを見べし、）金七十論には。初従二梵王一乃至二仙人一説二四圍陀一とも。聖教名二聖言一者。如二梵天及摩㝹王所説一。四圍陀及證論一。とも云ひ。衆經音義に。此四鞞陀。是梵天所説。梵天孫毘耶婆仙人。又作二八鞞陀一。とも言へり。（毘耶婆問經に、此是仙人名二毘耶婆一造二四毘陀一、善知二聲論一、知二種々書一と有れば、梵天の説る四鞞陀に、また四鞞陀を加作れる事を、作二八鞞陀一とは云へり、此は佛祖と同時の人と聞へたり、然れば、梵天孫とあるは、孫裔の義と聞ゆ、また大毘婆沙論に、契經説、古昔婆羅門造二明論一者、追二呪術一者、上首有レ十、一頞瑟搩迦、二婆莫迦、三婆莫提婆、四毘濕縛密多羅、五闍莫鐸耆尼、六鴦耆羅、七跋羅墮闍、八婆死瑟搋、九迦葉波、十勃栗瞿、如レ是等諸婆羅門、世雖二尊敬一皆不レ度レ疑而命終とも見ゆ、明論とは、即吠陀論なり、世と云より末は、佛者が例の他道を貶むる詞なり、）此を和會して稽ふるに、四明論の原始は。大梵王より出たるを。彼天降れる梵天子の。人間に傳授せるを。（摩登伽經に昔有レ人名爲二梵天一。修二學禪道一有二大知見一、造二一圍陀一流布教化、とある是なり、）其の後裔の梵志仙人等が。次々に頌釋を物しつゝ。上下に引く書等に云如く。十萬頌と云ふ計りには成にけむ。（そは摩登伽經に、上に引く文の連次に、次後更有二一婆羅門一、名曰二弗沙一、其弟子衆二十有五、於二一圍陀一廣分二別之一、即便復爲二二十五分一、次復更有二一婆羅門一、名曰二鸚鵡一變二一圍陀一爲二十八一、次復更有二一婆羅門一名曰二善道一其弟子衆二十有一、亦變二一圍陀一爲二二十一分一、次復更有二一婆羅門一、名曰二鳩求一、變二一圍陀一以爲二二分一二變爲レ四、四變爲レ八、八變爲レ十、如レ是展轉、凡千二有十六種一、と云るにても、次々に多く成もて來しこと、推量られたり、然れども十萬頌と云へるは、佛籍の例の定數にて、信ずるに足らず、そは下に論ふ如く、書とし云へば、十萬頌といふ口僻なればなり、）さて俱舍頌遁麟記に。四吠陀論。梵天所説可二十萬頌一口相傳據不レ書二紙葉一。と云ひ。（俱舍頌瑟暉鈔も、これに同じ、）寄歸内法傳の。西方學法と云ふ條に。五天之地。婆羅門所レ貴典誥。有二四薜陀書一。可二十萬頌一、薜陀是明解義也。咸悉

口相傳授。而不書之紙葉。毎有聰明婆羅門。誦斯十萬。即如西方。相承有學聰明法。一謂生覆審智。二則字母安神。旬月之間思若泉涌。一聞便領。無假再談。親覩其人。固非虚耳とあり。（なほ東印度にて、其人を覩たる其の趣を記せれど、今は漏しつ。然るにても、其聰明法を載ざるは、最も遺憾しき事なり、大毘婆沙論十二卷、記憶の事を論ずる所に曾聞有婆羅門子、先誦四吠陀論書、中間忘失復溫誦之、盡斯方便不能通利、便往師所具述因縁、師即問言、汝先誦之時、以何加行、答言、本時手繩、口誦、師言汝當如本加行、彼隨師敎一切皆憶と云ことも見え、また阿難比丘が、一苾蒭に、記憶の法を敎たる事も見ゆ、其は第□品、四阿含の論の所に引くを見るべし。）抑印度には。下に云ふ如く。大梵王より傳授せる文字は。元より有りつゝも劫初に。梵天の口づから頌して。傳授しけむ故に。婆羅門の世々。其の故實を固く守りて。紙葉に書さず。義淨比丘が渡れる頃まで。幾千載をか經けむ。其の間を咸悉く。口づから授受し來れる。敦厖純固なる風俗。わが神國に。元より文字は有りながら。委曲くは記さず。貴賤老少口々相傳。前言往行存不忘。といふ古語に思合されて。且驚き。覺えず筆のさし措れて。天意は如此こそ在けれと覃く感悟をぞ極めたる。（大道廢れて仁義の名あり、大傳廢れて文句の書あり、此の今己が深くも思ひ悟れる事の旨趣は、今述むとすれど、言を盡さず、設書たらむも、中々に意を盡すべくも非ざれば、口惜ながらも、唖の如く此には筆をさし置くになむ、誠やかの佛説も、此古風のまに〳〵、元は紙葉に書さず、口々に授受し來れるを、其滅を去ること三百年許より、紙葉に書すこと始まりて、其より大乘說の浮華競ひ起りて、好くも惡くも佛祖が說の眞面目をば、搔き亂してぞ在りける、委くは第□品に、註ふを見るべし。）かく口々に。授受し來れる故にこそ。總に名目ばかり。紙葉に記し傳へたれど。其すら下に挍して辨ふ如く。彼此互に漏たる事。また參差せる事も有なれ。（然は在れど、總じて古き事の正しき事は、種々に訛り來つる中に、また文籍に載して、無朽なるに勝りて、深幽なる

味ひの存り傳はること、眞の古學に精密ならむ人は、自づからに知なむ物ぞ。)さて百論疏に。摩醯首羅天說十六諦義。と云ふことあり。(摩醯首羅天は、大自在天と翻して、大梵王の、荒魂の名と聞ゆること、前卷に說るが如し。)其說に一量諦。二所量。三疑。四用。五譬喩。六悉檀。七語言分別。八思擇。九決。十論義。十一修諸義。十二壞義。十三自證。十四難々。十五諍論。十六墮負とあり。此を大自在天の所說と云ふこと。全は信難けれど。中には然も有らむ。と覺ゆる義も無にしも非ざれば。若くは。四明論中の說の。殘れる物かと捨難く。殊には下に論ふ迦毘羅仙が。二十五諦。優樓佉仙が六諦。勒沙婆仙が十六諦。佛祖が四諦など。總て諦ちふ說の原なれば。因に此に擧たるなり。(但し右の文よりは、引放ちて、別に此を釋せる說有れど、多くは金七十論の說を取りて、附會せるにて、右の諦義に背ける說なれば採らず、其は悉檀とは、謂ゆる悉曇字母の事なるを、自對義由レ異ニ他義一、如下數人根是實法、論明ニ根是假名一等上也、と釋せる一をもても辨ふべし。)〇一曰壽。謂ニ養生繕性醫方諸事一。(無量壽經疏に、此を壽吠陀論とあり。)醫方諸事の四字は、上に引く。衆經音義に據りて補へり。(其はかゝる語ども、皷ならず、文句を合する本書の文例にて、三曰、四曰ともに然ればなり。)百論疏に。一荷力皮陀。明ニ解脫一。摩登伽經に。一者讃誦と云ひ。音義に。此を命と云へるを併せて考ふるに。此は謂ゆる養生の眞理を述て。大梵王の賦與せる。本性の事より論じ。其本性を繕め守りて。邪道を復ざる事を教ふる論なるべし。(其は繕性といふに、熟々心を潜めて案ふべし。)さて其繕性の趣は。彼摩登伽經に。始めて此の論を傳授せる梵天を。禪道を修學し。大知見ありて。教化せりと有れば。其攝心法を修して。世俗の卑陋を解脫する法なる故に。百論疏に。明解脫と說るなり。(禪行のことは、佛法に專と論ずる事なるが、此も梵志の行を取れるなること、末に委く論ふを見るべし。)かくて大梵王の。世間を成立し。人種萬物を生じたる化育を參贊して。衆生の木鐸たらでは有るまじき種胤なれば。壽命を長く保たずは。其の大業成ざる故に。我を利する耳ならず。人をも

益せむと爲て。壽吠陀論を。第一と立たるにや。(世の生さかしき輩など、醫術は小技ぞと心得て、曾ても心と爲ざるが多在ども、人の正道を行むと欲する人は、必ず先學ふべき事なる由は、古史傳、少毘古那神の下に委く註せるを見べし、)醫方諸事とは。下の五明論中の醫明に。藥石針艾とある、其術どもを始め。醫方に關かる事ども。悉く明め知るを云へり。(藥とは湯液醪醴より始めて、草根木皮、何にまれ、病に應じて用ふる物、また其性をも知るを云ひ、石とは砭なり、針とは毫針、針など猶多かり、艾とは灸なり、其外醫事種々あるを、皆學ぶ故に、諸事と云へり、下に論ずる阿輪論と云は、後に此醫方を釋廣たる書なり、なほ其處にも云べし、)さて學從伽經に。讃誦と云へるは、四吠陀にわたる事なるに。壽吠陀論のみ係たるは謬りなり。(但し此は、紙葉に書さず、口々相傳へたる故に、かゝる誤りはあるなり、)其は了義燈一に。如四吠陀論。婆羅門誦之。音聲有上中下。甚自可愛。但尋聲求理と云ひ。また如吠陀論云。我已飲甘露。成就不復死。我已入大光。願諸天知識。謂鑽乳海以爲甘露。飲之則得不死。誦此等言。甚好音聲とあり。是を以て壽吠陀論のみならず。四吠陀ともに。讃誦せること知られたり。(但し飲甘露云々は、壽吠陀なり、此は金七十論にも、圍陀中說言、我昔飲須摩味、故成不死、得入光天、識見諸天といひ、飲須摩味見見面、とも有るにて知るべし、須摩味とは、卽甘露の梵語なり、斯て了義燈に、其の誦する音聲は、愛すべけれど、都て義趣なしと云へる說有れど、其は佛者の例の貶言なれば、此に記さず、さるは尋聲求理とあるにても、義理深きことは知らるゝをや、)讃誦とは。今謂ふ和讃と云ふ物を誦する趣に。音聲を麗しく、天人共に聽感べく唱ふる由にて。音聲に上中下ありとは。謂ゆる律呂の具はれるなり。此は我が古へに。祝辭。宣命。故事。歌詠なども讃誦し。節譜して傳へたるに。思ひ合されて。最珍しく覺ゆ。(こは古史徵の開題記に、委く考へ記せるを見て知るべし、)さて寄歸內法傳の。先體病原と云ふ條に。西方五明論中。其醫明曰。先當察聲色。然後行八醫。如不解斯

妙一。求レ順反成レ違。(五明論の事は、此の品の末に出れば、其所に委く辨ふべし、其の中に、聲明、醫明、巧明などは、正に吠陀中に採れるなれば、其醫明曰とあるは、即壽吠陀なる故に、其の心を得て察辨ふべし、)言二八醫一者。一論二所有諸瘡一。言レ瘡事兼二内外一。(瘡に内外の別あること、醫は誰も知りたる事なれば、今更に煩はしく註せず、)二論レ針二刺首疾一。首疾但自在レ頭。(首疾に、針刺のみを行ふ趣に聞ゆるは、文の足ざるなり、藥石艾をも用ふる事は、云も更なるべし、)三論二身患一。咽以下名爲二身患一。(こは我が古へに謂ゆる、體療なり、今俗に本道と云は、外科に對へたる稱なるべし、)四論二鬼瘴一。謂是邪魅一。(こは謂ゆる瘴疫鬼祟など、總て鬼魅の態としるき病を云なるべし、)五論二惡揭陀藥一。遍治二諸毒一。(大涅槃經音義に、阿揭陀藥、阿云レ普、揭陀云レ去、言服二此藥一、普去二衆疾一、又阿言レ無、揭陀云レ價、謂此藥功高價直無量とも、阿揭陀此云二無病一、或云二不死藥一、有二翻爲二普除去一、謂衆病悉除去也、ともあり、攝大乘論音義には、阿揭陀藥亦云二阿伽陀一、梵言訛轉也、此云二丸藥一也、と云へり、

俱舍論寶記に、如有レ人爲二鼠嚙一、雖レ無二熱悶等一、時熱毒在レ身、要服二阿揭陀藥一、而藥威德力故、滅二身中毒一、と云こともあり、其藥方は、陀羅尼集經、軍荼利總印の處に、若婦人患二月水恒出、及男女鼻孔血出一者、取二囉婆善那、人莧菜根一、各收二二兩一、積米泔汁、及蜜共和爲レ丸、大如二梧子一、如レ法服レ之、其病即差、此名二阿伽陀藥一、更有二一方一、名同、取二沙糖鬱金華及酥一、擣和如レ膏、相似若患二鼻塞及鼻中臭一、又不レ得レ齅二香臭等一、即以二前藥一灌レ之即差、若患二半口頭痛一、即以二前藥一摩レ之即差、云々とあり、)六論二童子病一。始從二胎內一至二年十六一。(こは謂ゆる小兒科なり、)七論二長年方一。延レ身久存。(長年方とは云へど、藥方には非ずと見ゆ、其は本書に、此の下文に、長年之藥、唯東華焉、とも有ればなり、龍樹鼻水法、洗浴の事三七丁、)八論二足身力一。足力乃身體強健。(こは謂ゆる經行なるべし、此の事を同書に、五天之地、道俗多作二經行一、直去直來唯遵二一路一、隨レ時適レ性勿レ居二鬧處一、一則痊レ疾、二能銷レ食、禺中日昳即行時也、或可下出レ寺、或於二廊下一徐行上、若不レ爲レ之、身多二病苦一、遂令二

脚腫肚腫臂疼膊疼、但有痰癃不銷、並是端居所致、必若能行此事、實可資身長道、經行之基潤可二肘、長十四五肘、高二肘餘、壘甎作之、右繞佛殿本欲虔恭、經行乃是銷散之儀、意在養身療病、舊曰行道、或曰經行と云ひ、阿含に佛祖が經行の事、數所に見ゆ、但し元これ吠陀の敎を竊せるなり、謂ゆる法身なるも、痰癃有けるこそ、）斯之八術。五天之地咸悉遵修。由是西國大貴醫人、自益濟他、於此醫明已用功學、由非正業遂乃棄之。（こは信に、本業に非ずと云へども、道に志有む人は、生涯棄べからぬ業なりかし、）凡四大之身。有病生者。咸從多食而起。或由勞力而發。或夜未消。平旦便餐。或旦食不消。午時還食。因茲發動。遂成霍亂。（山田正珍云く、霍與臛古字通用。說文云、臛肉羹也、大氐人之爲食所傷、肉食居多、故特擧臛以統一應食物也、凡人溺其所嗜欲、皆謂之亂、と云へるが如し、）呃氣則連宵不息。鼓脹卽終旬莫止。病既成矣。斯何救焉。勿嫌繁重。冀令未損多藥宿痼可除不造醫門而新痾遂殄。四大調暢百

病不生。自利利人。豈非益。（また量身輕重、方餐小食者、卽是觀四大之强弱也、若其輕利、便可如常所食、必有異處、則須視其起由、既得病源、然後將息、若覺輕健、饑火內燃、至小食時、方始餐噉、凡是平旦名痰癃時、宿食餘津、積在胸膈、尙未疎散、食便成咎、譬乎火燄起而投薪、薪乃尋從火化、若也火未著而安草、草遂存而不燃、夫小食者、是聖別開、若粥若飯、量身乃食、若其要餅方長身、且食餅而無損、凡有食噉令身不安者、是與身爲病緣也、とも云へり、小食のこと甚だ良法にて、本これ吠陀論の所說なること、云ふも更なり、增一阿含經□□品に、佛告諸比丘、我恒一坐而食、身體輕便氣力强盛、汝等亦當一食、得修行梵行而得解脫、已得解脫便得解脫智、此名爲婆羅門要行之法、云々と有るは、早く佛祖が梵敎を取て我が物とせるなり、婆羅門要行之法、と云へるにても知るべし、大論に、四百四病者、四大爲身、常相侵害、一一大中百一病起と云ひ、大涅槃經音義に、四百四病、地水火風名四大、風輕地重、火上水下、互

相羊反名四毒蛇、一大不調百一病生、四大不調則生四百四病、是也、ともも見ゆ、）また進藥方法と云ふ條に。夫四大違和。生豈其有八節。変競發動無恒。凡是病生即須將息。佛說醫方經曰。四大不調者。一窶嚕。二變跛。三畢哆。四婆哆。初則地大。增令身沈重。二則水大。積涕唾乖常。三則火大。盛頭胸壯熱。四則風大。動氣息擊衝。即當神州沈重。痰癊。熱黃。氣發之異名也。（この謂ゆる佛說醫方經は、法苑珠林に引たる、佛說醫經といふ物に似たり、抑四大を以て、人身および事物の理を解こと、本は梵天の所傳と聞えて、梵志ら早く說來り、こは實に諸なる事なるを、佛祖また其の說を竊して、阿含にも往々其の理を說たり、然るに此の經說の如きは、四大の不調を說得たりと言ふべからず、殊に身沈重と云ふことは、古醫方書に、腫滿の事を云ひて、重は腫字の省字なれば、譯者もまた庬漏と云べし、然れば、豈これ地大增とも云むや、義淨も此の經は引つゝも、沈重は、地大の事ならぬ由をば知りて、下文に、此の說を採ざるは見有りけり、增一阿含經に、佛告諸比丘有三大患、云何爲三、風痰冷、此三大患有三良藥、云何爲三、若風患者、酥爲良藥及酥所作飯食、若痰患者蜜爲良藥、及蜜所作飯食、若冷患者、油爲良藥、及油所作飯食、と云へるぞ、佛祖が知りたる醫方の限なりける、是を以て自も、背痛し腰痛しと苦める時は、此の療法をぞ行ひける、此の事も阿含に見えたり、また涅槃經に、譬如良醫善八種術、先觀病根、相有三種、何等爲三、謂風熱水、風病之人、授之酥油、熱病之人、授之石蜜、水病之人、授之薑湯、とあるは、醫明論の療法を取れるなり、そは八種術と云るにても知べし、されば佛祖が療法も、同じ意ばへにて、是また吠陀の療法を取捨せりと見ゆ、なほ佛法の經論どもに、吠陀より竊せりと見ゆる醫說は、あまた所見あれど、煩ければ引出ずなむ、後世僞託の經等に、醫方を說る事も、往々見えたる中には、取べき事の交れるも、大抵は、梵志より出たるを、佛祖に誣たるにて、其はみな、吠陀中の醫方より流出せる法にこそあれ、佛祖が法には非ざるなり、猶下にも論ふを見るべし、）若依俗論病、乃有其

三種。謂風熱癃。重則與癃體同。不別彰其地大。凡候病源旦朝自察。(俗に依りてと云へるは、上に引く醫方經の佛說を放れ、醫方明の說に依て、論ずる由なり、そは金七十論に、內苦者謂、風熱痰不平等、故能生病苦、如醫方說、從齊以下、是名風處、從心以下、是名熱處、從心以上、並皆屬痰、有時風大增長、逼痰熱、則起風病、熱痰亦爾、と有るは、吠陀中の醫方說なるを以て知るべし、是より以下も、吠陀の醫明に因れる說なり、重は癃と同じ、と云るは確言なり、傷寒論の三焦の說に同じ、)若覺四候乖舛。即以絕粒。爲先。縱令大渴勿進漿水。斯其極禁。或一日二日。或四朝五朝。以瘥爲期。義無膠柱。若疑腹有宿食。又刺臍胸。宜須恣飮熱湯。指剔喉中。變吐令盡。更飮更決。以盡爲度。或飮冷水。理亦無傷。或乾薑湯是其妙也。(乾薑湯は、別にさる藥方あるに非ず、唯乾薑一味の煎湯と聞えたり、)其日必須斷食、明朝方始進餐、如若不能。臨時斟酌。必其壯熱特諱水澆。若沈重戰冷近火爲妙。(また其江嶺已南、熱瘴之地、不可依斯、熱發水淋、是土宜也とも云り、偺この小字に註せる文は、義淨が發明意なり、醫明の說に非ず、)如其風急。塗以膏油。可用布圍。火炙而熨。折傷之處。斯亦爲善。熱油塗之日驗。交益。(風急とは、折傷の事と聞えたり、凡て病の內外を別たず、某風風某と名くること、唐以前の醫書に多く見たれば、折傷は、急症なる故に、風急と云へるにや、)若覺痰癃關胸。口中唾數。鼻流淸水。欆慘咽閉尸滿槍喉。語聲不轉。飮食亡味。動歷一旬。如此之流。絕食便瘥。不勞灸頂。無假捩咽。斯乃不御湯藥。而能蠲疾。即醫明之大規矣。(また意者以其宿食若除壯熱便息、流津既竭、痰癃便瘳、內靜氣消、即狂風自殄、將此調停萬無一失、不勞其診脉、詎假問乎陰陽、豈非要乎、とも云り、此も義淨が發明意なる故に、意者とは云へり、然れば上文に、若覺四候乖舛と云より、大規矣と云るまでは、醫明によりて記せる說なること、著明なり、)又如羅痤暴起。熱血忽衝。手足煩疼。天行時氣。或刀箭傷體。或墜墮損躬。傷寒霍亂之徒。半日暴瀉之類。頭痛心痛眼疼

齒疼一。片有ニ病起一。咸須レ斷レ食。(こは醫方明なる絶粒の療法を廣めて、後人次々に治驗せるを、集め記せる説と見ゆ、其は上文に、絶粒の事を記して、卽醫明之大規矣と終めて、又かく別に言るにて知られたり、醫方明と見ゆる説とは異りて、中には何ぞや覺ゆる事も交れるなど漂く心を著て思慮すべし、)又三等丸能療ニ衆病一。復非レ難レ得。取ニ訶黎勒皮一。乾薑沙糖三事等分。擣ニ前二一令レ碎。以ニ水片計一。和ニ沙糖一融レ之。併擣爲レ丸。旦服十丸計。以レ和爲レ度。(若無ニ沙糖一者、餳蜜亦得、)諸無レ所レ忌、若患レ痢者不レ過ニ三兩服一。卽差。能破ニ眩氣一。除レ風消レ食。爲レ益處廣。故此言レ之。(醫方明なる藥方は、なほ多からむを、此一方をのみ出せるは、中に此方卓れて、功有る故と聞ゆ、故此言レ之と有るにても、其意知られたり、然るは、西方の藥味、與ニ東夏一不レ同、互有互無、事非ニ一概一、且如ニ人參、茯苓、當歸、遠志、烏頭、附子、廣黄、細辛一、若レ斯之流、神州上藥、察ニ問西國一、咸不レ見レ有、西方則多足ニ訶黎勒一、北道則時有ニ鬱金香一、西邊乃阿魏豐饒、南海則少出ニ龍腦一、三種豆蔲、皆在ニ杜和羅一、兩色丁香、咸生ニ堀淪國一、唯斯色類、是同ニ所種一、自餘藥物、不レ足ニ收採一、と云へるをも思合すべし、訶黎勒一味を、殊に多く用ふる趣なり、)又訶黎勒。若能每日嚼ニ一顆一咽レ汁、亦終身無レ病。此等醫明傳ニ于帝釋一。五明一數。五天共遵。其中要者。絶食爲レ最。東夏多並不レ閑。遂不レ肯ニ行學一。良由下傳者不上レ悟ニ醫道一也。(是等醫明、傳ニ于帝釋一とは、訶黎勒を用ふる醫明を云なり、其は阿毘曇心論音義に訶梨勒、此云ニ天主持來一、此果爲レ藥、功用至多、如ニ此間人參、石斛等一、無レ所レ不レ入也といひ、名義集に、訶黎勒新云ニ訶梨怛鷄一、此云ニ天主持來一、此果爲レ藥、功用至多、無レ所レ不レ入、と有るにても知るべし、彼國にて、此果を旨と用ふること、諸經論に多く見へたる中に、秘密儀軌と稱する籍どもに、殊に數所に見ゆ、名義集に、天主と云へるは、卽帝釋なり、然れども、此も實は、梵天の持來せるを、帝釋と誤り來れるなり、其は次品に、帝釋といふは、何者ぞと云ことを説出るを待見て後に悟るべし、五明一數とは、五明中なる、醫方明の一數の由なり、そは上に載せる文の、八醫と

言ふ中に、五論ニ惡揭陀藥一、遍治ニ諸毒一とあるは、卽訶黎勒を用ふる事と聞ゆればなり、訶黎勒を本草には、訶子とあり、猶彼書に就て、其功能を思合すべし、）而絕喰之時。大忌ニ遊行及以作務一。其長行之人。縱令斷レ食。隨レ路無レ損。如其差已後須ニ將息一。宜可下食ニ新煮飯一。飲中熟菉豆湯上、投以ニ香和一。任飮多少。若覺レ有レ冷。投ニ椒薑草茇一。若知ニ是風一。著ニ胡葱荊芥一。醫方論曰諸辛悉皆動レ風。唯乾薑非也。加レ之亦佳。准三絕食日而作ニ調息一。諱レ飮ニ冷水一。餘如ニ藥禁一。如其瞰レ粥。恐痰癊還增。必是風勞食亦無レ損。若患レ熱者。卽熟ニ煎苦參湯一飮レ之爲レ善。茗亦佳也。自レ離ニ故國一。向ニ二十餘年一。但以レ此療レ身。頗無ニ他疾一。（以上は醫方明の說を述て、己が治驗せる隨に記せりと見ゆ、苦參湯は、苦參一味の湯か、なほ多味なるか知らず、）神州藥石、根莖之類。四百有餘。色味精奇香氣芬郁。可ニ以蠲レ疾。可ニ以王レ神。針灸之醫診脉之術。無ニ以加一也。長年之藥唯東州夏焉。考ニ其藥石一實爲ニ奇妙一。將息病由頗有ニ疎闕一。故粗陳ニ大況一以備ニ時須一。（唐代義淨が時には、彼國にて、藥物を知こと猶多からむを、

四百有餘と云へるは不審き事なり、また長年の藥は、唯東州のみと云ふことも心得がたし、印度籍にも、彼此長年の藥のこと見え、前に既く、八醫の中に、長年の方と云ふも有るものをや、）若絕レ食不レ損者。後乃隨レ方處レ療。苦參湯偏除ニ熱病一。酥油蜜特遣ニ風痾一。其西天羅荼國。凡有レ病者。絕食或經ニ半月一。或經ニ一月一。要待ニ病可一然後方食。中天極多七日。南海二三日矣。斯由ニ風土差互一。四大不同一。致レ令ニ多少一。不レ爲ニ一槩一。未レ委東州宜レ斷レ食不。然而七日不レ食。人命多殞者。由三其無ニ病持一。故若病在レ身。多日亦不レ死矣。（また曾見下有レ病、絕粒三旬後時還差上、則何須見レ怪ニ絕食日多一、豈容下但見ニ病發一、不上察ニ病起所由一、とも言へり、西戎國人の、七日不食して、人命多く殞すと云ふこと、怪むべし、然るは予が知たる人に斷食行と云を爲たる人あまた在るに一人も死たる者のなきは、更にも云はず、皆三七日ばかりは、堅固に其の行を果したり、然るに西戎人の、しか死早きことは、元より國柄いたく劣りて、米穀の味ひも宜からず、鹽を食ふことも少なく、且人氣も柔弱なる故に、

絶粒と云ふより、まづ甚く心をおとし、氣を口して然は早く死るにや有む、七日ばかりの斷穀は、予も二度ばかりは行ひたれど、事にも非ざりき、又文化九年に、四月より九月まで、甚く煩ひたる時は、愈て後にきけば、四十日余りは、絶粒にて在しと、（若病したるものどもの言へりし也、）壯熱火燃。還將二熱粥一。食飲帶レ病强食。深是可レ畏。万有二一差一。終亦不レ堪レ敎レ俗。醫方明内極是諱焉。とあり。（なほ此の餘にも、醫事に關かる事ども、種々記せれど、吠陀中の醫明に因なき事をば、皆漏しつ、本書を披見て知るべし。）抑この醫療の趣は、和漢の醫療の趣とは。甚く異りたれば。如何ぞや思ふも有べけれど。此の道に於ては。實に風土の差互により。產物の有無に由て。其の方の異る法にし在れば。世の初發に。此の道を傳へたる梵天の。彼の國がらに合せて。敎始たる醫方なること著し。其は五印度の地人。みな此の方法を遵用して。悉く驗あるを以て。彼の國人に取ての良法なること知るべし。（但し余がいと若在し頃に、或る老醫の、病者とし云へば、絶粒すべき由を示して、醫療を施すが在りて、其の驗を得たる事をも、時時見たりしかど、其の頃はいと異かる所爲とのみ、思ひ過して在けるを、後に思へば、若くは此の治法にや據たりけむ、然れど其人は、更に文字なき田舍醫師にて在しかば、此の法に據れりとも定がたし、問はむと思へる頃は、既に昔人となれりと聞て、いと本意なかりき、また今の世にも、往々さる治法を行ふげにて、病者にしひて、食を進むるが惡しき由を、諭す人々もあるに驚きて、余も其の意ばへにて、自分は更なり、家内の者などにも、病るをりは食をしひず、堪らるゝ間は、食ずて在れなど、言ひ敎へて驗むるに、藥の回り速き事は、慥に知りたり、或る老人の說に、某とか云ふ寺より、張護符とか號けて、病人の家の柱に貼しめ、食を喰藥を飲ては、此の符に驗なしと云ひて、賣出るを、其の言の如くすれば、往々驗あるが奇くて、若きほど其を開き見たるに、六字の佛號を書て有りけり、然るに其の佛號よ、其の宗にては、甚く嫌ふ佛なるも、怪しかりしが、此にも彼にも、然して見る人有しと見えて、其の沙汰

の聞えしかば、今は其の佛號の上を、黒く塗抹して、出す事となりぬ、近頃思ふに、彼の佛號に、さる驗有べくも非ざれば、絶粒する故の驗ならむと言へり、此は心にくき說なり、然もあるべし、）

○二曰祠。謂享祭祈禱は。百論疏に。明善道法二謂と云ひ。大涅槃經義記には。一謂事火懺悔。二謂布施祠祀とあり。（衆經音義は、只に祭祀とのみあり、）二謂は。本文と同くて。互の精麁のみなれど。一謂事火懺悔は、此も祠吠陀なるを慢りて、壽吠陀と爲て。一謂とは言るなり。（かの紙葉に載さず、口づから傳ふる法なる故に、かばかりの違は有なめり、）故茲に。是をも和會して解むに。享祭は、神を祭る事なり。祈禱は神に禱る事なり。其は懺悔と事火とを專一と爲て。犯せる罪過。また其の穢惡を。禊祓する事を懺悔と稱し。事火法を修して。衆に布施を行ひ。其の法をさして。善道の法とは言へり。（然れば祠吠陀を、第一と立べき道理なるに、第二と爲たるは、左するも右するも、壽命長久に、身體壯實ならでは、神に事ふること、長久なり難き故に、壽吠陀を第一と立て、まづ是より學び始めて、祠吠陀をば、第二とは立たるにや、事の勢ひ、然も有るべき事なりかし、）さて懺悔と云は。禊祓の事なる由は。提婆論師が百論に。異道の行法を議せる所に。求那諦中。曰三洗。再供養火等。和合生神分善法とある。（求那諦とは、第□節に論ふ、優樓佉仙が、六諦中の一なり、然れども此法は、本疑なく、吠陀中より取れるなり、其は下に云ふ說どもを、思ひ合せて辨ふべし、）其の疏に。外道謂恒河是吉河。入中洗者。便得罪滅。彼見上古聖人。入中洗浴便成聖道。故。韓朝暝及日中三時洗也。三洗明滅罪。再供養火。爲欲生福と言ひ。（恒河とは、謂ゆる印度四大河の一なり、上古聖人とは、上古に在し、婆羅門の聖人なり、其聖人のしか爲たるを、見習ひて行ふ由なれば、是また彼始めて天降りて、人間を化せりと云ふ、初祖の梵天なるべく所思ゆ、）また和合生神分善法者。明崇日三洗以除罪。再供養火以生福。罪滅福生與神和合。但神爲主善依神生故。言生神分善。然神具生善惡とも言へり。（此に引く二文共に。ほどよく切めて擧

たれば、委くは本書を見るべし。）日に河中に入りて三洗すること。即謂ゆる懺悔にて。其は明レ祟とあれば。神の祟ある事を知明して。其罪犯を悔み除かむ爲に。身滌ぐなれば。皇道の禊祓ひの神事と異なし。（大論に此の法を難破して、河水旣洗レ罪亦應レ洗レ福也、と餘りに物知らぬ論にて、云ふにも足らず。）偖しか滅罪し畢て後に。事火法を修すれば福を生ず。罪滅し福生ずるは。即神と和合するなり。神は即主たり。善事は神に依て生ずる故に。神の分善と云ふ。然れども。神は善惡を具生する故に。罪犯あれば。祟をも行ふと云へるなり。（熟々心を著て、味ひ見るべし、甚よくも、我が古道の古意に符へる説なりかし。）さて事火法のことは、方便心論に。事レ火有二四法一。一辰朝禮敬。二殺生祭祀。三燃二衆香木一。四獻二諸油燈一と見え。百論疏に。智度論を引て。外道謂火是天口。正燒二蘇等十八種一。令三香氣上二達諸天一。天得レ食レ之。令二人獲一レ福。將欲レ燒時前遣二人呪一。然後燒とあり。（また外道謂二火是天口一、故就二朝晡二時一、再供二養火一、何故火爲二天口一耶、倶舍論云、有レ天從二火中一出、語言、諸天口中、有二光明一是火、故云二天口一とも云へり、火を天口と稱ふ事本これなり。）今此を和會して考ふるに。一辰朝敬禮とのみ言て。火を用ふる事を云ざれば。本は唯に大梵王に事ふる事を。事火と言へるなり。然思ひ合さるゝ事は。長阿含典尊經の寓誕に。大梵王の說とて。往昔大典尊と云し梵志の。大梵王を祭れる事を說る由にて。大典尊謂。諸先宿言。於二夏四月一閑二居靜處一。修二四無量一者。梵天則下與共相見。今我修レ之。使二梵天下一。與共相見。即修二其法一。以二十五日月滿時一。出二其靜室一。於二露地一坐。々未レ久頃有二大光現一。梵天王即化爲二童子一在二虛空上一。頭有二五角髻一。典尊見已即曰。何天。梵童子曰。我梵童子。餘人謂レ我祀二祠火神一。と有るにて知るべし。（こは文を甚く約めて引たり、委くは、本經に就て見るべし。）凡ての事實は。佛祖が寓言なれども。祭祀せる趣。また大梵王を梵童子と言ひ。火神と云へるなど。皆實事なり。（但し火神とは稱へども、火を掌る神と云には非ず、火行を爲て、祭る神なる故に、火神とは稱ふと聞えたり、尸棄と云ふ名を、火とも譯す

るは是の故なり、弊宿經に、奉二事火神一とも、事火梵志ともあり、○或人問、かの典尊經を、寓言と云ふことは、何を以て知れる、答、彼經の趣意は、我と我が法を、最無上の法とは、常に說つゝも、猶信ざる人の多かるを、面向むとして、一時耆闍屈山に在住せる時に、忉利天の執樂神、般遮翼子といふ者、夜靜にして、無人の時に、佛祖が許へ來て、忉利天へ、梵天王至りて、帝釋および、四天王など共に、佛祖の、法德を種々賛たる事を、我親しく聞たりと語れる由なるが、中に、此典尊と云ふ者の故事を作り入れて、大梵王みづから典尊を敎化して、鬚髮を剃除し、出家せしめたるが、卽今の釋迦如來なりと、大梵王の語るを聞たり、實に然りやと問しかば、佛信に其の說の如しとて、なほ其の法德を述しかば、般遮翼が、其の佛說を聞て、歡喜奉行せりと寓れり、大梵王の意は、上にも下にも論ふ如く、佛祖が法とは反なれば、比丘法を勸むべき由なし、忉利天また帝釋の事は、次品に論ふ如くなれば、佛祖が時分などに、さる事の有べき由なく、然れば般遮翼といふ、執樂神の來て、云々と言るは、妄作名妄誕なること著し、故れ夜靜無人時に、來れりとは云へり、凡て四阿含に、諸天鬼神などの來りて、云々の事有しと說ること、計ふるに暇あらず見えたるが、大抵夜靜無人の時とあるは、皆寓言なりと知るべし、典尊經の次なる、遮尼沙經も是なり、是を以て、餘人は皆かつて知ざるなり、中には、餘人も見るばかり、諸天鬼神などを現じたる條々も有れど、其は神通と稱する術をもて、權現せるにて、實物ならず、其の由は、第□品に委く辨ふを見て知べし、是等の事ども、阿含はなほ、其の妄說の趣うひ〳〵しきを、大乘と稱する諸經の妄說は、次々に精巧なる故に、昧者は皆信受奉行すめれど、活眼なるは誰か信ぜむ、猶次々に論ふを見るべし、）佛祖が每に言ひ出る頌に、祭祀火爲レ上。諷誦頌爲レ上。人中王爲レ上。衆流海爲レ上。星中月爲レ上。光明日爲レ上。天及世間人。唯佛爲二最上一。欲レ求二大福一者。當レ供二養三佛一と云て。大梵王に事ふるを、祭祀の上と爲たるを以て。佛祖が當時の趣をも想像すべし。（右の頌句、こゝには斯ばかり長文は用無れど、

次々の論辨に用ふる所ある故に、筆の序に標せり、中阿含四十一卷には、此の呪を呪火第一齋、通音諸音本、王爲二人中尊一、海爲二江河長一、月爲二星中明一、明照無レ過レ日、上下維諸方、及一切世間、從人乃至天、唯佛最第一とあり。)さて衆香木を燃し。諸油燈を獻じ。享祭せる種々の供物を燒て。香氣を天に上達せしむれば。天神そを食すと云ふこと。徴旨ある事に覺ゆるは、是また彼の梵天より傳授せる法なること著し。(衆香木を燃するは、其香をもて、穢氣を避むとの意と通ゆれば、我が古道の神事に、花賢木を獻るに、意ばへ似たり、諸油燈を捧ぐる事と合せて、火處燒の意ばへ有り、唯供物を燒こと、我が古道に例無れど、神は惣じて、其供物の氣味をのみ享給ふなれば、其を燒ことも徴旨ありて覺るなり、心を平にして熟思すべし、偖火に事ふると云ふこと、男のみ行へるかと思ふに、雜阿含四卷に、佛弟子、淨天と云し者の母の事を、年老在二中堂一持レ食、祀火求レ生二梵天一、とあり、然れば女も行ひける、)かくて火の穢を忌み。其淨不淨を重く論ずること。謂ゆる密理ども。また儀軌と稱せる籍等に多く見たる。是みな梵志の古法の存り傳はれる論にて。我が古意に符へること言ふも更なり。彼謂ゆる護摩ちふ法も。此事火法を弘めて。諸法に用たるなり。(そは六波羅密多經音義に、護摩法梵語、唐云二火祭祀法一、爲レ祭二賢聖一之物、火中焚燎、如レ祭二四郊五岳等一、と有にて知べし、但し謂ゆる儀軌に、多かる護摩法には、謂ゆる事火外道など云ふ徒の、己が向々作れりと見ゆる法の多くて、中には供物ならぬ種々の不淨物など、取集めて燒こと有るは、忌々しき事なり、其は此に、悉く辨ふべくも非ざれば漏しつ、)さて殺レ生祭祀と云こと、提婆論にも。婆羅門の古說を載して、那羅延天。從レ臍生二梵天一。梵天爲二衆生祖一。大地是其戒場。一切衆生。於二此場上一。殺レ生祀レ天。皆生二彼天一とあり。(此文なほ長し、其全文は、既に四姓の處に引たり、那羅延天とは、大梵王の事なる由も、既に云へり、)此を上に論ふ。事火懺悔と合せて考ふるに。大地は。衆生の戒場たりと言を思へば。人種の本世は。天界なるを。此世界へは。大梵王の警戒を。修行し果さむが爲に生れ來

つれば。此世界は。人種の本世ならず。戒場の寓世ぞと云傳にて。其警戒を犯し過つ事のあるを懺悔し。事火行をも行ふと知られたり。(是よくも、我が古道の意に符へり、されど此は生々なる古學者らが、曾ても知ざる說なれば、己が今かく云を、不審み思ふも有べけれど、古史傳に註せれば、今更に云ず、佛說を記せる書どもにも、此世を寓世と說るものあるは、梵志の古說を盜めるなること、言も更なり。)さて殺生祀天とは。百論に謂ゆる。作馬祀者。衆生初起稟於妙氣。得妙四大。則生常天。若稟麁氣。得麁四大。則生人中。爲求常天。故修馬祀。取一白馬放之百日。(或云三年、)尋其足迹。以布黃金。用施一切。然後取馬殺之。當殺馬時。唱言。婆藪殺汝。馬因祀殺。亦得生天。と有にて知べし。(文義は、人の生るゝ初起に、妙氣をうけ、妙四大を結びて生得たるは、死して常天に生ずれども、麁氣をうけ、麁四大を結びて生得たるは、再人中に生ずる故に、常天に生れむ事を求めて、馬祀を修すと云るなり、妙氣、妙四大、麁氣、麁四大の說、信に妙なり、實にも人の稟賦に、此差別あり、此は道の精微に思を潭めむ人は、自然に悟り得つべき事なりかし、)此は吠陀論中の法にて。常天とは。大梵天界を云り。布施てふ語も。馬の足迹に。黃金を布て施すより出たる語と聞えたり。(是吠陀中の法なる由は、下に引く、金七十論にて知られ、常天とは、大梵天界を云よしは、倶舍論頌に、逝宮天處とある其疏に、逝宮者、大梵天宮也、外道執彼爲常、佛爲破彼、呼爲逝宮と云ひ、其光記に、逝是無常義、と有にて知べし、大梵天界は、無窮なる由にて、梵志ら古く、常天、常宮と稱し來れるを、佛祖が例の貶しめて、逝とは云るなり、)さて馬を殺す時の唱言に、婆藪殺汝と云ことは。我が私に汝を殺すに非ず、婆藪天の殺すなり、と唱聞する由にて。此は大梵自在天王の異名なること。既に云るが如し。然れば馬の祀殺せらるゝ功德に因りて。其に生天を得ると云も。梵界よりの傳說なること著明なり。(本朝の大祓に、馬を引立る事あれど、此は神等の、禱言を疾く聞食さむ祝具に出すなれば、

事別なるが、御年神を祭るに、白馬、白猪、白雞を用ふるは、由有げなり、また西戎國にて、告朔に餼羊を用ひ、また牛を殺して祀する事あるも、由有げなり、其餘の國々にも、然る例多かる中に、わが蝦夷の國にて行ふ熊祭と云こと、其趣を尋ぬるに、梵志の馬祀に意ばへや丶似たり、然れば何國も、神慮は計り難き物にぞ有ける、）然るを金七十論に。此祀の事を論ひて。韋陀中說。作馬祀法。汝父母及眷屬。悉皆隨喜。汝捨此身。必生天上。諸天及仙人。說此非是罪。此實是罪也と云へり。（今本の文、百論疏に引く所と挍するに、互に衍文脫字あり、今は其宜しきを取て引たるなり、）此論籍は。迦毘羅仙人が說に。本づける籍なれど。佛說ありし後に。記せる論なる故に。中に佛意に轉化せられたる說も多かり。然れば。諸天仙の罪に非ず。と立たる此法をも。實は是罪なりとは言へり。（此籍に、佛意に轉化せられし說の多かること、下に論ふを見べし、）大論。百論。また其疏なども。此說に雷同して。甚く此祀法を譏したれど。佛者豈よく鬼神の情狀を知らむや。（但し知度論に、

作祀法者、竪一柱、高十七肘、有三丈四尺、案蘭築以種々物而莊嚴之、取一白馬繫著此柱、諸婆羅門在邊、燃火誦呪、散花香著火中、取草縛馬、腹火邊炙、莫令毛燋、馬遂死之、呪力旣成、死卽剝皮出完骨盡、頭尾宛然無異、與金銀寶物、置馬皮裹縫之、諸婆羅門、更燃火誦呪、呪事亦成、馬則起走、少時還躃地、齊馬行處、作方蘭埒城、以諸寶物布置城內、令遍滿、又取馬腹內寶物、悉用置中、作大功德布施一切、と譯して、六十四能中の一能なる由云へり、然れば此は、下に論ふ式叉論、六十四能中の法にて、吠陀中の法ならず、偖こそ上に擧る祀法とは甚く異なれ、案ふに、吠陀中の祀法を竊して、後に異道輩の、別に立たる一法にぞ有べき、）然るは我が古意を以て准へ論はむに。人衆はこれ萬物の靈長にして。本より尊く。禽獸蟲魚は更なり。天地間に有ゆる萬物は。本より人の食料に。產靈神の生成し賜へるなれば。人の用となるぞ。禽獸萬物の本分なる。殊に馬祀法は。謂ゆる人種神の敎授なれば。幽き由ある事ならむ

を。佛者らいかで。其幽旨を窺ひ知らむ。（凡て生物を殺すを、一偏に罪とする事は、大道の本義を知ざる者の臆説にて論ふに足らず、其は無用に殺し棄むなどは、神に罪得る態なれど、用ふる道有りて殺さむに、何でふ罪か有む、また土水草木金石を用ふると何ぞ擇ばむ、唯々無用に費さむ事は、活物死物を言ず、神の養料に賜へる物を、徒に棄るなれば、是ぞ信に罪得る態なる、然るに佛者、此理をば聊かも論はず、唯々活物を殺す事のみ、甚く誡むるは、愚昧にその怨靈あらむ事を恐るゝより、出たるなり、然れども萬の活物、おの／＼大小強弱ありて、大は小を食ひて、活命するが常なるに、彼等かつて、罪得るとしも見えざるは、神の賜へる本分の然有ればなり、然るに萬物の靈長たる人の養料とし、或は用ふる道有て用ひむに、罪得る理の有なむや、然れど佛説のありし以來、やうやくに、活物どもの祟をなす事の起れるは、彼妄誕、世に久しく弘ごりて、物にも及び、彼等に、其本分を忘れたるも出來しが故なり、故き物語書どもに、活物の殺されむとするを、助けて放たるが、夢に來りて、吾は殺され食れてこそ、物に生を受たる罪は消る事なるに、放ち生せる故に、罪は消ずと恨みたり、と云る事の、彼此見ゆるは、中々に其本分を忘れざる物等と云べし、然れば彼放生と云ふ事などは、陋しき口吟に、放ち人があるから取ると龜がいひ、と云へる如く、兒戲に等しき態にこそ、斯て古くも儒士の論に、万物は人の養料に生じたる也、と云へるも有りしを、佛者の論に、然らば蚊虻蚤虱の人をさすは、人これ蚊虱の養料に生せる物か、と言るも有れど、彼虫ら、唯々少か人の肌膚を吸咂るにこそ有れ、食ふに非ず、食ふとは、人の物を殺して竈作り食ふ類をこそ云へ、人の物を殺し食ふ如く、人を食料となす物は有る事なし、上古などに、然る妖鬼も有しかど、其は忽に滅し罰め給ふぞ、神の人を別に重みし給ふ御惠なる、猶此事に就ては、言ま欲き説は許多あれど、所狹き態なれば、まづ是にて筆をさし措つ。）さて梵志等が。祭祀を嚴重に執行ふに就て考ふるに。十二天餞軏に。思合さるゝ事あり。

十二天餞軏に。梵天王者。上天之主。衆生之父。

此天喜時世間安穩无有亂動此天瞋時世間不安何以故。劫初之時。此天成立器世間故也。云云（本書に、王字を脱せるを、其下文に、父王とも有るによりて補へり、偖この十二天儀軌てふ書は、豐山本の諸儀軌中に收れて、板本なり、卷首に、供養十二大威德天報恩品、とありて、卷尾に十二天儀軌とあり、唐の不空三藏が譯なり、其全編を見るに、慥に、婆羅門の古籍と見ゆるを、謂ゆる普賢菩薩が、佛祖の印可を受て說たる趣に、佛法臭き事ども書交へて、作り改めたる物なり、其は活眼をもて書見む人は自づからに知るべけれど、今少か云むに、佛祖は甚く、梵王を卑め貶し、世間を成立せりとふ古傳を說破して、造此世界非彼所及、など常に云るに、今引く文の、さる佛說とは反なる、一つを以ても悟つべし、なほ此軌は、次々にも數所に引出れば、其處々にも云を見るべし、）其文に。一切衆生。四大違變有種々病。或鬼魅來作種々病。迷倒世間。內外種々損害。謂諸衆生不知恩故。有如是違。以何爲恩謂。地水火風四大種有其精。日月諸天皆有內外養育之恩。供養此天有種々利。器界生界皆悉增力也。其數幾何。謂彼天數有十二也。地天。水天。火天。風天。大梵天。伊邪那天。帝釋天。毘沙門天。羅刹天。日天。月天。焰摩天也。如是諸天。何時歡喜何時瞋怒。謂諸國王及諸人民以非治世。作不善業。而捨正法爾時。諸天皆生愁憂。愁憂即過便生瞋怒。若止惡業以正治世。諸天歡喜皆悉來護。（愁憂過て、瞋怒を生ずと云ふこと、中にも珍しく感たき說なり、國を治めむ人などは、殊に味ふべき說にこそ、）若人了知如是諸天。以財之施嚴彼生身。後以法施顯彼法身。兼行慈悲不殺生命。以之供養爲報彼恩也。（かくの如く、諸天の事實を了知して、しが〱行ふこと、上の典尊經に謂ゆる四無量なるが、然して生命を殺さずと云ふことは、由なく生命を殺すを、警めたる語と聞ゆ、また案ふに、此儀軌は、後に佛者の手を經たる物なれば、此等の文は、例の攙入ならむも亦知べからず、）世有諸天鬼神。其數甚多。何唯供養此十二天。安立國土萬生安樂。謂十二天。總攝天龍。鬼神。星宿。冥官。是故供養

此十二天。即得二一切天龍等護一也とあり。(以上は、此にほどよく文を引切めて擧たれば、委しくは、本書に就て見るべし、此儀軌は疑なく、祠吠陀中の古說なるを、竊みて佛說に託せる物なる由は、既にたたりき。)天神地祇の情狀。また其功德を述釋たる趣を。熟々察するに。信に說得て。わが古道の正規格を以て律せむにも。亦少か間然する事なし。故今こゝに。此諸天の事を悉擧て。說まく欲すれど。大梵天。伊邪那天の事は。既に上に顯はし。猶下にも言へば。此二天を除き。また帝釋天より以下。六天の事も。次品に。其事の出る所々に說むが。便宜ければ。此には四大精天の事のみを解明すべし。(焔摩天の事は、次品の第口節に、毘沙門天、羅刹天の事は第口節に、帝釋天の事は、第口節に、日天、月天のことは、第口節に言へり、然して第口節の末に、取總ねて論ふを見るべし。)其はまづ地天のこと。同軌に

〇三曰平。謂二禮儀。占卜。兵法。軍陣。は百論疏に三明二欲塵法一。謂二一切婚嫁欲樂之事一と見え。衆經音義には。謂二禮儀卜相音樂戰法諸事一とあり。摩登伽經には。三歌詠とのみ言へり。今是を和會して解むに。禮儀と云へば。應對進退の禮節。また西戎籍に謂ゆる。射御音樂冠婚葬祭などの事をも明せる故に。或は婚嫁欲樂の事といひ。或は歌詠とも。音樂とも云へるなるべし。(婚嫁の禮を、欲塵の事とし、欲樂の事など云へるは、佛者の記せる籍なればなり。)占卜の事は。いかに行ひけむ。梵志仙人などの。卜相せる事實は數見たれども。其の法を知べき由なし。(案ふに、古く婆羅門らが傳へたる卜法は、決めて龜卜に似たる法なりけむ、此は後に考へ出る人必有べし、大毘婆沙論に、問、諸古夢書、誰之所レ造、答、仙人所レ造、彼由二宿住隨念智力一、憶二念本事一而造二此書一、と云ふ事もあり。)さて兵法は。何にまれ兵器を用ふる術なり。軍戰法も。其に今口品第口節の本文に就て。其大概の趣を察べし。(また案ずるに、密經および儀軌どもに、怨敵退散法の殊に多きは、梵志の古戰法は、呪詛を多く用たりと見ゆ、是また古道の意にも符へり、〇四曰術。謂異能。伎數。禁呪。醫方は。百論疏に。明二呪術竿

數等法と見え。摩登伽經に。四者禳災とあり。醫方は既に。壽吠陀に言へれば。其餘を和會して解むに。異能伎の事は。前節に。二曰。巧明伎術機關。とある所に言る如く。人の異に思慮りて。工出る種々の伎能なり。數とは。謂ゆる筭數の術にて。曆數をも込て云へり。（前節五明の處には、曆數とあるにて知べし、）禁呪は。五明の處に。呪禁閑邪とあり。呪して妖災病邪を禁ずる術なる故に。閑邪と云ひ。禳災とも言へりと聞ゆ。（但し大涅槃經の義記に、四和解達諍とあるは、甚く違ひて、此に和會して解がたし、後人なほ考ふべし、）さて數とは。筭數曆術の事なるに就て案ふに。曆術は。天地間に流行する造化の機運を。豫に測量して知る法なれば。謂ゆる天文學ぞ本なる。抑印度にて。此術の起れる原始を稽ふるに。宿曜經に。上古白博叉。二月春分朔于時曜躔婁。道齊景正。日中氣和。梵天歡喜命爲歲元。と有は。古傳を撫ひ載たるにて。此は彼始めて天降りて。人間を化せりと言ふ。梵天の敎始たる術にて。是も梵志の家學にぞ有りける。（下に論ふ十八大經の六論中に、竪底沙論と云ふは、釋天文地理筭數等法とあれば、四吠陀論なる、天文曆數法を釋せる籍なること著し、また方便心論に、過去有那耶摩、明聞慧思慧、聞慧有八、一天文、二算數、三醫方、四呪術、及四圍陀是爲八、ともあり、）其は增壹阿含善知識品に。老梵志等が學事を稱する時に。看諸祕讖。天文地理靡不貫博。書疏文字亦悉了知。諷誦一句五百言。大人之相。亦復了知。事諸火神日月星宿。と云ふを以て辨ふべし。（長阿含經に、梵志の學を稱するには、毎も七世以來父母眞正、不爲他人之所輕毀、三部舊典諷誦通利、種々經書、皆能分利、亦能善解、大人相法占候吉凶祭祀儀禮、と云へり、少しは異あるも、是れ大かたの常語なり、總じて、かゝる類の定語を考ふるに、四阿含に、その文例の定れるは、諸經の中に、最第一に古と云へども、四經各々に、其の記者の別なる故に、如此し、此の事はなほ第□品に委く論ふを見るべし、）さて此天文曆數測量の術。もと是梵天の所傳なるが。印度に傳はり。其より回々。胡國。唐戎國に傳へ。漸々に西洋なる諸國にも傳

はり。なほ次々に。精密なる測量法ぞ出來にける。(こは佛國暦象編に、委しく論へる如くなるを、今行はるゝ西洋學の徒など、朽惜がりて、西洋の天文は、阨入多國より始れり、彼の國は、開闢いと古く、三四千年許なるに、雲なく雨降ざる國なる故に、天文を明むるに便宜く、精密なりなど言ひて、暦象編の説を破らむと爲めれど、印度の開闢は、五六千年よりも前なるべき事、下に論ふ如くなれば、中々阨日多國などの、及ぶ所に非ず、但し彼の國邊、謂ゆる地中海の南邊なる島々は、雨降らずとも言へは、天文に精しき道理は、無にしも非ざれど、本これ印度法を受けたるに因れること、西洋暦なる星宿の名なども、印度の名を其儘に用たるは、印度より彼に傳はれる證なれば、暦象編なる此の説は、確乎として拔べからず、余が意と思ふに、印度より西洋に傳はれる事ども、天文暦術のみならず、文字は更にも云ず、醫方諸伎術、謂ゆる窮理の學も何も、その本は、印度より傳授せるを、彼の國人らが、次々に精密を加へたる物とこそ所思ゆれ、然れば西洋の諸國は、印度より開闢せりと言むも、强說に非ずと知るべし、然るを西洋人の却りて印度說は、我が古說を竊めるなりと云とか、竊人の猛々しきは、今に始めぬ事なりかし)かくて梵天の。始めて印度に傳授せる古說は。地轉の說なり。其は立世阿毘曇論に。有二諸外道一。作二如レ是說一。是大地恒去不レ息。若實爾者、如二向レ上擲一。應レ不レ至レ地。又諸外道作二如レ是說一。日月星辰恒住不レ移。大地自轉。疑二是天廻一。若如レ是者。射不レ至レ堋。又諸外道作二如レ是說一。大地恒浮隨レ風來去。若實爾者。地恒併動と有り。(此の論は、初卷に佛說と有りて、長阿含世起經を委くせる如き物なるが、彼の經とは甚く違へる說ども多し、そは次品に校するを見て知るべし、また文意盡ざる妄說は、殊に多かり、案ふに此は、阿含に說る事の盡さゞるを慨みて、彼の經ありし後の人の增說して、佛說に託せること炳焉し、然るを暦象編に、阿含の說とは、甚く違へる事をば曾て云ず、作二如レ是說一とある文を、作、また作など、訓みて、將來世に、地轉の說の起らむ事を、佛祖早く知りて、其の說を防がむ爲に、懸記せるなりと說るは、

いかに此の文を見紛へけむ、不審しき事なりかし）此れに依て。稽ふるに。此の論を記せる當時は更なり。佛在世より以前も。梵志學は。地轉の說にて有りけるを。此の論に。そを外道說と貶せるにて。其を難たる三說ともに。甚しき愚說なり。然るは大地の外邊に。薰圍とて。地面より高さ。大約二十度外を。圍繞せる物あり。是謂ゆる氣にて。動きて風となる物卽是なり。（この薰圍てふ物の始りは、古史傳の、風神の處に註せるを見るべし。西洋學には、此を濛氣、また霧環など號けたれど、當らざる號なり、我が黨には、神典によりて、薰圍と號けたり）大地は。この薰圍の圓繞せる隨に、其を持負つゝ。旋轉する故に。薰圍外は。譬へば囊の如く。薰圍中なる物は。囊中に在る物の如し。是を以て大地旋行すと言へども。薰圍其に旋行する故に。薰圍中なる人の。上に向て擲る物の。地に至らずと云ことなく。射して矢の堋に至ざる事もなき也。（其は試に、阿毘曇論の記者を、其の體よりは萬倍なる、大革囊に盛れて、囊口を結び固め、その疾こと電光の如く、東へ遣り、そを遣る間に、囊中の上に向て、物を擲しめ、囊中の東に向て弓射せしめば、此の疑ひは、忽然に晴なむ物ぞ、また大地もし浮て來去せば、地恒に併動せむと云へる難は、殊に至愚の論にて、辨ふに足らず、さるは昔西戎の國に、一愚人ありて、大船に乘りたるが、船の水上を行ことを知らず、過ちて帶たる劍を、水中に落せるに、其の船端に刻して、此の刻を付たる所の水中こそ、劍を落せる所なれとて、求めしとか、何ほど大船たりとも、大地の大さには、比ぶべくも非ず、微小なるに、其を行としも、知らぬ愚人も在しかば、況て大地の大に比べては塵埃もなほ比し難き、我等が小軀なれば、大地の旋行するを知らざる愚人も世には有るべき事にこそ）然ば右の愚論は左まれ右まれ。印度の古說に。地轉と云へば。日輪は旋らずと云ふ說なること著く。此は近世。西洋人も測量し。諸越人も早く考へ得て。漢末に其の說を記載し。其に我が神典の古傳に符ひて。萬古に動なき公說にぞ有りける。西洋の說は、天地二球用法記といふ書に見えて、骨閉留と云し者の說なり、諸越

人の說は、考靈耀といふ書に、地に有四遊、冬至、上北而西三萬里、夏至、地下南而東三萬里、春秋二分其中矣、地常動不止、譬如人在舟而坐、舟行而人不覺、と云へる是なり、よくも神傳に符へる說なるは、凡人の察考も、また恐るべき物なりけり）さて呪禁修法の事は。秘密儀軌と稱する籍等に。載せる法ども。大凡は。佛祖に出たる由に作成せれど。其れみな寓託の說にて、實には悉く梵志。また彼の外道の修法を竊せるにて。一法も佛祖が眞法は有となし。斯言ふ由は。長阿含世起經に。佛告比丘。若有衆生奉持龍戒。心意向龍具龍法者。卽生龍中。持金翅鳥戒及法者。持兎梟戒及法者。各墮其中。或持狗戒。或持牛戒。或持鹿戒。（俱舍遁麟記に、以外道通不了八萬劫前之事、不知狗牛過去有順後世天之業、但見狗牛死得生天、便謂食草噉糞是生天之因、故以効之、名狗牛禁、故本論說、有諸外道、起如是行見、立如是行論、受持牛戒鹿戒狗戒とあり、）或持瘂戒。或持摩尼婆陀戒。或持火戒。或持月戒。或持日戒。或持水戒。

或持供養火戒。或持苦行穢汚法。彼作是念。我持此功德。欲以生天。此是邪見。必趣二處。若生地獄。或墮地獄。俱舍遁麟記に。外道計恒河水能洗滌衆罪。謂爲福河。事火外道。計火能燒淨一切。故復投之。或投巖等。と云へるを以て。佛祖が甚く修法を惡へること。著明なり。日戒。月戒。水戒。火戒。大梵王に事ふる法をさへに。邪見と言へる物をや。（然るに密部の經軌どもに、金翅鳥王經、荼祇尼法、毘那耶迦法など云ふを始め、異類異形の物どもの、傳授せりと云へる修法の多かるは、梵志は知らず、謂ゆる外道輩の修せる法と見ゆるをも、佛祖の印可と誣ひ、佛說とも稱せるなり、但し彼の儀軌中に、諸佛法部、諸菩薩法部、諸明王金剛部など云ふ部類は、佛祖が物ならむと思ふも有なむか、然れど實には、釋迦を除ては佛なく、過去十方の佛と云は、寓誕なれば、其の修法の有べき由なく、また佛に修法など有ては、十號具足の位號に應はず、また菩薩と云ふも、觀音、普賢、文殊を始め、大抵は有名無實にて、佛祖かつて名をさへに知ざるが多く、況

て其の修法は更なり、皆後人の寓託なり、然は有れど、其修法の本は、梵志また外道輩の法を竊して、佛法風に作改めたるにぞ有りける、其は本より、盗心を以て然爲たるも多かれど、また此事なき由緒も有けり、其は行智說に、高僧傳なる、洛陽朱士行傳に、既至二于闐一、果得二梵書正本凡九十章一、未レ發之頃、于闐諸小乘學衆、遂以白レ王云、漢地沙門、欲下以二婆羅門書一、惑中亂正典上、王爲二地主一、若不レ禁レ之、將下斷二大法一聾中盲漢地上、王之咎也、王卽不レ聽レ賫レ經、云々と有れば、然る由緒によりて、異道の書を、佛說ざまに書改めて、賫歸れるも多からむと云り、信に然るべし、然れども、千歲覆ふべからず、發露する事ども有て、經々に就て、逐一に糺明すれば、元より佛法の物なるか、否ざるかは、いと著明に知らるゝ事なり、)なほ言はゞ、阿含四經は、佛祖が在世生涯を記錄せる籍なるに、優婆先那と云ひし比丘が、尺計なる小蛇の、身上に落たるに恐れて、命死ると泣喚ける時に、呪術の章句を授たる事有れど、此は一時の方便に爲つる事と見えて、餘に呪術修法を行へる事は、

都になきなり、(其の呪術の章句は、鳩耽婆隷、耽婆、耽陸婆羅、耽陸、禁滯、肅捺滯、枳跋滯、文那移、三摩移、檀滯、尼羅枳施婆羅、拘問鳩隷、鳩娛隷、悉波訶、とあり、此を翻譯して見ば、決めて佛祖より以前に在し呪文なる事をも知らるべけれど、其は今の用にも非ざれば漏しつ、)其は呪術修法は、神にまれ、鬼にまれ、本尊とする物有りて、行ふ事なるに、其の立たる法は、我を天上天下の最尊と、自證自可せる法なる故に、本尊と立べき物の無ればなり、(此は增壹阿含口品に、佛告二諸比丘一、八部之衆所レ謂、刹利衆、婆羅門、長者衆、沙門衆、四天王衆、三十三天衆、魔王衆、梵天衆、我至二此衆中一、共相問訊、言談講論、獨步無レ侶、亦無二疇匹一、於レ中最尊、八部之衆無下能見二頂一、亦不レ敢レ瞻レ顏、何況當二共論議一乎、と云へるにても、自可自證の鼻高きこと、想像られたり、)故その沒後に、迦葉、阿那律、阿難を始め、聲聞の大弟子ども、師が生涯の事實說法を結集せる、上座部の藏中に、呪禁藏と云はなく、上座部衆中を擯斥せられし、斗量(屑か)の末徒らが、結集せ

る大衆部に。呪禁藏をも收たれど。其は佛祖の本意には非ずかし。(此の結集のこと、委くは第□□品に註ふを見べし、)然ればその大衆部の徒が。結集せる呪禁藏と云は。梵志また外道等の呪禁修法を竊みて。佛説に誣託せる藏なること疑なき物なり。(かの大乘と稱する託説も、本は此大衆部の末派なる、大天と云し比丘より□□して、次々に大乘經説を僞作せるにて、凡て佛祖が本法を、小乘と貶しむる説も、此の大衆部の論師等よりぞ起りける、此の事も第□品に委く論ふを見るべし、)さて後世これに倣ひて。次々に異道法を竊して。佛説に誣つゝ。儀軌類の籍ども多く出來れる。其の最後に大誣に誣たるは。謂ゆる三部の密經。五部の祕經など稱する經々なり。(此を佛祖が法身、大日如來と云が所説にて。南天竺の礫迦國の、鐵塔に納めて有しを、龍猛論師が取出たりなど云ふ説は、後人の付託なること、第□品に辨ふを見るべし、)其の證を言はゞ。彼の經々の中に。專要とする。蘇悉地經眞言法品の。結頂髮眞言の所に。眞ニ言髮一。三遍。當ニ頂作レ髻。若是比丘。右手作レ拳舒ニ大母指一。屈ニ指頭一押ニ大指頭上一。令ニ頭指圓曲一。眞言三遍置ニ印頂上一。と有るは。本これ有髮なる梵志の修せる法なるを。佛者に用ふるは。變法なる故に。若是比丘云々と。結髮印を作りて。頂上に置けとは言へり。佛説に誣託しつゝも。此は其の羊皮を忘れて。覺えず其の虎質を露顯せるなり。此の經もし實に佛説ならむには。比丘相を主とし。若是有髮云々と。剃髮の印を作りて。頂上に置けとこそ言べけれ。(祕密部と稱する經軌に、かゝる類の思ひ辨ふべき事ども、いと多く所見あれど、然しも引出むこと煩さければ、餘は皆漏しつ、准へて想ひ像るべし、)さて彼の諸儀軌中なる。呪術修法を見通すに。是ぞ梵志が修法の眞面目を。其の儘に傳へたりと覺ゆるは。一部も所見なき中に。大梵王。また其の異名の神の修法呪文。また符印なども多く散在して。見つべき事も少からず。其が中にも。一字心呪經に出たる。大轉輪王の一字呪と稱する呪文。もと決めて。梵天の傳授にて。大梵王の眞呪なるべく所思たり。(余が此の説は、唐の六典と云ふ籍に、大醫署、呪禁博士、掌下敎ニ呪

禁生、以呪禁、祓除邪魅之爲厲者、とある所の註に、有道禁出於方術士、有禁呪出於釋氏、以五法神之、一曰存志、二曰禹歩、三曰營目、四曰掌決、五曰手印、皆先禁食葷血、齋戒於壇場以受焉、と見え、皇朝醫疾令の御制も、是に同じければ、呪禁の法も、また明辨せずば有べからずと、往年まづ道藏を得らるゝ限は見て、その微旨を知り、次に諸儀軌の、人間に傳はる限りを見るに、大抵は穢しき惡法なる中に、適に古意に符へる事も有るを捃摭し、また世間に祕とする呪禁法をも、彼此に問ひて、道家梵家の修法と共に、一部に類聚したりし時に、諸儀軌を考へたる趣きの大意、すなはち此の上下に書載する說どもなり、委くは別に記せり、)其は彼經に。一時佛在淨居天宮。觀察大衆諸天仙等。爲欲利益末世衆生故。入於一切如來最上。大轉輪王頂三昧。卽於眉間放一大光。其光普遍十方世界。還至佛所。繞三帀入佛頂。當入之時。光中忽有聲曰。釋迦如來。我是一切如來智慧。大轉輪王一字心呪。我是最上祕密心呪。汝爲未來衆生。敷演斯呪令獲利益。爾時如來見聞斯已。告諸大衆。云何名爲轉輪王一字呪。卽說呪曰。(此是梵本、一字之呪、)部(上聲)林(去聲二合、此是唐音、彈舌呼之、)爾時佛告諸天仙衆。我今欲說曼陀羅法。及念誦法。設火食法。若有人。能持此陀羅尼最勝妙法。不知吉祥之日及諸星等。汝諸天神勿爲障礙。汝等天衆護持是人。一切鬼神。及諸毒惡毘那夜迦等。亦當守護。不得損害云々とあり。(此はこゝに、用なき妄說の長文を悉く捨て、妄誕ながらも、今の論に用ある文のみを採り出たれば、委くは本經を見べし、斯て是より末は、種々に修法して、此の呪を用ふる事を記せれど、其は上に云ふ如く、別に部類せる物あれば、此に云ず、)此に淨居天宮に在りてと云へれど。此は佛祖が妄意に設けたる天名にて。然る天界は有ことなし。(其の由は、次の品に委く辨ふを見べし、)然れば。其の天なる諸天衆を集めて。說たる趣に作れるも。妄誕なること言も更なり。(此の呪のこと、一字佛頂輪王經、一字奇特佛頂經、一字頂輪王經などにも出て、皆佛說と爲たるが、此の心呪經を

除て、餘經はみな、娜謨三漫多沒駄南、と云ふ語を首に付たり、斯て此の四經は、もと一部の呪禁籍なるを、人々各々に、佛祖に誣て作り改めたる故に、別經の如くは成れるなり、其は其の説所をも、此には、淨居天宮と有れど、餘經には、在摩竭提國菩提樹下金剛道場成正覺時、と云へり、是を以て、後人の思ひ〳〵に、作り改めたる物なることを辨ふべし、諸天衆のこと、いかに妄ならずやも、）一大光の説。是また妄誕なること炳焉く。大轉輪王頂三昧といふ。三昧の有るべくも非ず。（總じて、四阿含外なる經々に、何三昧、某三昧とて多かるは、皆佛祖の知ざる三昧にて、中には梵志異道などより、出たりと見ゆるも有れど、大凡は、論師らが妄三昧なりと知べし。）また其の大光中より。聲を發して。と云へるなどは。論にも足らず。唯此の文中に取べき事は。大轉輪王心呪と稱し。最上祕密心呪と云ひて。其の功德を敷演せる説のみなり。其は此の心呪を。佛頂よりとは言へれど。本來これ。大轉輪王の呪なる故に。全佛呪なりとは竊みかねて。輪王と云ふ名は存したれど。佛呪の如く思ひ取るべく。佛頂大光の妄説を作り。また其の光物に。佛を汝など言しめて。胡亂せるなり。（凡て古説を竊して佛説とし、古法を竊して佛法とせる趣は、經々大かた此の有狀なり、心を著て讀辨ふべし、）抑大轉輪王といふ王の事。阿含經の佛説に。數所に見えて。金輪聖王とも稱し過去世に出て。謂ゆる須彌の四洲を治り。金輪寶と云ふを始め。七寶を持たるが。其の王の四洲を巡見する時に。彼の輪寶おのれと轉りて。王の前導する故に轉輪王と號くる由を説たり。（此の事委くは、第二品、第三品に註し辨ふべければ、此にはたゞ大意を云ふなり、）然れども。其は妄誕にて。其の實は。前節に論へる。大梵自在天の大威力ありて。能く當る者なく。空行する時に。輪ありて前導を爲す。と有る古説を。例の翻案して作れる説なり。（一字佛頂輪王經は、上に云ふ如く、もと此の心呪經と同物を、別人の作り改めたる物と見ゆるが、彼の經には、佛祖が大轉輪王に化て、説る由に作れるが、其の文に、爾時如來變身相如大轉輪王具足七寶云々と云ひ、大轉輪王坐

於座上、身容赫奕映照一切、如鎔金聚、即說呪曰、云々と有をも思ふべし、正に大梵、王の狀と見え、大轉輪王坐於座上と云ふ文より前、佛祖が變化たる說などは、後攙入たる說と、あらはに見ゆめり、雜含二十六十七丁佛最勝處智、轉梵輪於大衆中、能師子吼而吼と、いくつもあり。)斯て佛祖が始めて說法せる事を。轉法論と云よし。諸經論に見えたるが。此をまた梵輪を轉ずとも云を思へば。元は梵王の前導する輪の。自在に轉じて能く當る者なきが如く。其の法を弘通するに譬へたりけむを。其に就て。また彼の說法の始めは。大梵王の勸請せるを受て說たる故に。梵輪を轉ずと云と言へる。幻說をさへに翻案せり。(大梵王の請に因りて、說法を始めたりと云こと、阿含經の佛說に見えて、第□□品に具に論ふ如く、佛祖が妄說なれど、是本にて、婆沙論百八十二卷に、問何故名梵輪、答因三梵王勸請而轉、故名梵輪、佛是大梵、佛所宣說、故名梵輪、何故名梵輪、答以下梵世具聖道上故、名梵輪、有說惟梵世有梵行果、故名梵輪、問何故名梵、答、極寂靜故名梵、問論、是何義、答、動轉不住義、捨此趣彼、能伏怨敵、故名爲輪とも云ひ、俱舍論頌に、婆羅門、亦名爲梵輪、眞梵所轉故名と言ひ、其の疏に、婆羅門者、此云淨志、亦名梵論、佛與無上梵德相應、故名眞梵王と云るは、共に佛祖が翻案の上に、誣說を加增せるなるが、婆羅門と梵輪とを、同語とせるは、餘りなる强說なり、其は梵と婆羅門は、前節に辨ふ如く、同語の梵語なれど、輪は翻せる語にて、漢語なる物をや、然れば此は、譯者の誣說なること論ひなし、活眼ならむ人は、自然に辨へてむ、近世の佛者ども、多く俱舍論頌疏に、婆羅門と梵輪と、同語とせる說に依れる中に、住心品冠註に、梵具曰婆羅門、又曰跋濫摩、又曰梵摩、又略曰婆論、又曰梵輪、又曰梵也、と云る梵輪は、笑ふに堪たる事なりかし。)彼此會せて考ふるに。一字心呪の大轉輪王は。大梵王の異稱なること灼然たり。(もし此の大轉輪王を、四州を巡るとふ王の事と强て思ふも有なむか、然れど其の輪王のこと、佛祖も妄說は爲たれど、大梵王よりは、甚く劣れる趣に說たるを、右

の經々を作れる徒の、知らざるべき由無ければ、彼の輪王には非ず、大梵王なること著明なり、但し一字心呪經に、大自在天、那羅延天、梵天王とを別に出せるは、同神の異名なる事を知ざる故なり。）猶思會さゝる事は。既に云へる如く。梵を正には。婆藍摩とも。沒囉憾摩とも云を見よ。こは步林吽と云ふに同じきは。卽梵天界の名を唱へて。梵王の威稜を仰ぎ。かつ彼の天界に生せむ事をも。祈願ふ意の呪文と聞ゆるをや。（豕の音譯を、奇特佛頂經には、步林吽と見え、一字心呪經は、部林と記し、一字頂輪王經には、步嚕と見え、一字佛頂輪王經には、勃琳飦とあり、皆同音譯なり。）然れば。儀軌どもの修法に立たる本尊は更なり。現存する人にまれ。物にまれ。其の方に願ふ事あるには。一向に其の名を唱ふる法の多く見たるは。是より始まれる法と聞ゆ。（また佛法に於て、佛菩薩の名號を、一向に稱ふる事も、その修法に倣へることは、言も更なり。）かくて豕は。印度の呪文の祖にて。次々に多く成もて來つると見ゆる中に。四大天神の呪を始め。彼の古風を観べき呪文の。

稀に存れるも少からず。（そは彼の呪禁法を類聚せる物の中に載せれば、世に漏るゝ時も有なむかし。）偖かく註し畢て。熟々觀れば。西戎の國に謂ゆる道士の所業に。太似たり。是を以て。大圍陀論師の長老なるを。大仙人とぞ稱へりける。（但し諸越の道士學も、後世に及ては、多く玄妙に過たる理談を作り出て、觀るに堪ざる迂説どもあり、余が謂ゆる道學は、其れと異にして、漢晋以前の古書に、思ひ合さるゝ事どもの散見せるを取りて云ふなり、此は別に聚め記せる物あり、然れば道學にも新古あり、概して思ふべきに非ず。）なほ上に論ふ四吠陀論の外に。十四論あるを。上に合はせて十八大經と稱ふ。そは百論の疏に。十八大經者。十八明處。四皮陀爲四。復有六論。合四皮陀爲十。復有八論。足爲十八。四皮陀者。一荷力皮陀。明解脫法。二冶受皮陀。明善道法。三三摩皮陀。明欲塵法。（謂一切婚嫁欲樂之事。）四阿闥皮陀。明呪術算數等法。（四皮陀の文は、上に引て、既に委く辨へたり。）六論者。一式叉論。釋六十四能法。（六十四能法詳ならず、然れども、祠

吠陀の所に引りし大論の說に、馬祀法の異法を六十四中に有るよし云へれば、凡て祠法を釋せる書と知られたり、）二毘迦羅論。釋諸音聲法。（毘迦羅論は、聲明論と翻して、文字および、音聲の道を明釋せる書なり、なほ此事は下に次々云を見べし、）三柯刺波論。釋諸天仙上古以來因緣名字。（こは上古に出たる諸天仙の、古事舊傳を釋せる物なること、文に云へる如くなるべし、）四竪底沙論。釋天文地理算數等法。（これも聞えたるが如し、）五闡陀論。釋作首盧迦法。（この本註に、仙等の說偈を、首盧迦と名くる由見えたり、作る法と有れば、其の樣にならひて、自ら作る法を釋せる物と見ゆ、百論序疏に、通偈即首盧偈、有三十二字、釋道安云、胡人數經法也、莫問長行偈、但令三十二字滿、便是一偈也、四圍陀有萬偈、偈有三十二字、智度論云、摩訶波若、十萬偈、三百二十萬言、故知定三十二字爲一偈也、とあり、）六尼鹿多論。釋立一切物名因緣。（こは諸天仙の、古く一切の物の名を立たる、其の義を釋せる物と聞ゆ、○下に引く金七十論の自性、先生

覺とある所に、外智者、六皮陀也、一式叉論、二毘迦羅論、三劫波論、四樹提論、五闡陀論、六尼祿多論、とあるは、即この六論なり、迦毘羅仙が、外智を得たるに、此を用たるを思へば、いと古き物なり、然れど、六皮陀といひ、何れも釋某とあれば、四吠陀を本頌として、增釋せる物なること明なり、又た中に、毘迦羅論も入たるを以て、悉曇文字も、本は四吠陀論中の物なる事を、まづ心得おくべし、○悉曇藏に引たる、道騰が法華論注に、婆濫摩四波陀、後人更作六種論、解彼波陀、一毘伽羅論即是六論之一也、とあり、）八論者、一陀莵論。釋用兵杖法。二楗闥婆論。釋音樂法。三阿輪論。釋醫方。（この三論も、吠陀中の事を釋說せる物なること、上に准へて知べし、）四肩亡婆論。簡釋諸法是非。（こは吠陀論に本づきて、諸の外道の異說法の是非を、簡び釋せる論と聞えたり、）五那邪毘薩多論。明諸法道理。（上に同じ趣の物と聞えたり、）六伊底呵婆論。明傳記宿世事。（こは前世、因果の事を論へる物と聞えたり、）七僧佉論。解二十五諦。（こは下に委く論ふ如く、外道

迦毘羅仙が說にて、眞の梵志の說に非ざれば、吠陀論の末書と爲べからざるを、愼りて、佛者の此を加へたるなり。)八課伽論、明二攝心法一。(攝心の法は、吠陀中に元より有れど、彼と異なる法なるべきこと、二十五諦說の、彼とは甚く異なるに准へて知られたり。)此兩論。同釋二解脫法一とありて。

此をまた十八明處とも名くと。同跡に見えたり。

師必博究二精微一。貫二窮玄奧一。示二之大義一。導以二微言一。提撕善誘。雕レ朽勵レ薄。若乃識量通敏。志懷二逋逸一。則拘縶。及二闕業成一。後已年方三十。志立學成。既居二祿位一。先酬二師德一。其有博古好レ雅。肥遁居レ貞。沈二浮物外一。道二遙事表一。寵辱不レ驚。聲問已遠。君王雅尚。莫二能屈一レ迹。國重二聰叡一。俗貴二高明一。褒贊既隆。禮命亦重。故能强志篤學。忘レ疲。遊レ藝訪レ道。依レ仁不レ遠二千里一。有レ貴二知道一。無レ恥二匱財一。娛遊惰レ業。媮レ食靡レ衣。既無二令德一。又非二時習一。恥辱俱至。醜聲載揚。

俱舍論普光記に。婆羅門法。七歲以上在レ家學門。十五已去學二婆羅門法一。遊方學門至二年三十一。恐二家嗣斷絕一。歸レ家娶レ婦。生レ子繼嗣。年至二五十一入レ山修道と云ひ。(こは俱舍論頌疏冠註、また大日經住心品疏冠註に引るを、按合して再引たり、俱舍論遁麟記にも、此の說あり、三十を四十とせる本は誤なり。)音義に。梵種年滿二七歲一就レ師學レ之。學成卽作二國師一。爲二人主一所レ敬と云へり。(大論には、在家中七世淸淨、生滿二六歲一、皆受レ戒名二婆羅門一、出レ家名二沙門一、在レ家名二婆羅門一とあれど、此は論あり、次品に云ふべし。)師は卽謂ゆる。大園陀論師なり。博く彼の四論の精微を究め。其の玄奧を貫窮して、徒弟に道の大義、道の微言を示し導き。提撕善誘を事とし。朽木の性質なるをも。彫用べく。其の薄きを勵まし。(婆羅門の學のみならず、我が古學にとりても、人の師たらむ者は、必ず如此くなるべき態なれど、先師の逝られし以來、さる人師の世に在ることを聞かず、今見る人師は、麁漏を極めて、精微を究めず、僅に門牆を覬覦して、其の玄奧を知らず、兒蒙輩を誑惑し、此に小義を示し、導くに謾言を以てして、夫の人の子を賊ふ人師の多かめるは、甚も悲しき事にこそ。)識量通敏なるが。逋逸の志を懷くをば。拘縶へて闕業を成畢しむる。是ぞ師の道なると云

ふ意なり。（識量の通敏に過たるは、猶及ざる失ありて、大業に遁逸の志を生じ、紀を侵し、惡を濟ふの廢人となるが多かり、我が黨の小子は、心してよ。）年方に三十に至り。志立ち學成り。旣にして祿位に居こと。上の音義に謂ゆる。國師と作り。王の國政を補佐るを云ふ。（是をもて國王らも、其を大師とも、王師とも尊稱せり。）金光明經の音義にも。世業相傳習四圍陀論。皆博學多智守志貞白。文儒雅操高道不仕。其中聰俊顯達者。多爲王者之師。受封邑而自居とあり。（阿含經の數所に、學業の成れる、婆羅門らが事を云とては、必ず某の王、卽封某所與某婆羅門、以爲梵分、と云るは是なり。）まづ師の德を酬ふと云ふは。國師と作りて道を傳へ。其の師に。我が敎を受たる如く。徒弟を諭へ立る事を云なるべし。是人の徒弟たる者の本分にて。其は梵志學より言ときは。其の師德を酬ゆる耳ならず。言もて行けば。大梵王および先祖梵天。また古昔。諸仙人の德を酬ゆるにそ有りける。（然れども、子として父母の德を酬ゆる者鮮く、徒弟として、其の師德を酬ゆる者は甚だ稀なり、さるを子弟の不肖といふ、不肖は、人の子弟たる者の、深く愧べき事なりかし、）其有博古と云より以下は。聞ゆる儘の文なるが。肥遁居貞は。周易の天山遁の卦の意を取り、沈浮と云より。亦重しと云までは。莊子などの文に依て作りと見ゆ。（道の字は、本に道と作れど、其は疑なく誤字と見ゆれば、意をもて改めつ。）故能と云より以下は。學者の本志。まことに然有べく。最も高尙なる學風なりかし。（文は聞えて有れば、註するに及ばず、）

（鐵云以下別稿也）

○百論疏に。四皮陀者。一荷力皮陀。明解脫法。二治受皮陀。明善道法。三三摩皮陀。明欲塵法。謂一切婚嫁欲樂之事。四阿闥皮陀。明呪術筭數等法。ともあり。（無量壽經疏に、有四吠陀、婆羅門學、一壽吠陀論、二祠吠陀論、三平吠陀論、四術吠陀論、と有て、此の本文とせる西域記の文に、異ならず、○法華文句に、毘陀論、此云智論、婆耶娑造、凡四種一信力毘陀、明事火滅罪、二耶受毘陀、明供養婆羅門得福、三沙摩毘陀、明和合

二國、四阿陀毘陀、明二闘戰一とあり。)互にかく少かの相違。また漏たりと見ゆる事も有れど。壽祠平術の順次は違はず。然るに雜心論に。四毘陀經。一者億力毘陀。二者阿陀毘陀。三者耶訓毘陀。四者三摩毘陀。毘陀者智也と有は。上に引く諸書とは。順次太く異なり。(また大涅槃經義紀には、一億力、謂事火懺悔、二耶受、謂布施祠祀、三阿陀、謂諸闘戰法、四三摩、和二解違諍一、と有は、順次も甚く違へり。)此は世々次々に。口授に傳來せし故に。數千歳を經る間に訛りつゝ。また後には。異說を立る者も多く出來しかば。如此も有べき事なりかし。(然は在れど、總じて古き事の正しき事は、種々に訛り來つる中に、また文籍に載して、無朽なるに勝りて、淺幽なる味ひの存り傳はる物なること、眞の古學に精密ならむ人は、自然に知なむ物ぞ。)其は寄歸內法傳西方學法と云條に。婆羅門所レ貴典誥有二四薛陀書一。可二十萬頌一。薛陀是明解義也。咸悉口相傳授而。不レ書二之紙葉一。每有二聰明婆羅門一。誦二斯十萬一。卽如二西方一相承有二學レ聰一明法一。一謂生覆審レ智。二則字母安レ神。旬月之間思若二泉涌一。一聞便領。無レ假二再談一。親覩二其人一。固非レ虛耳。とあり。(なほ東印度にて其人を覩たる、其趣を記せれど、今は漏しつ、然にても此聰明法の詳に知られざる事は、遺憾の極にぞ有ける、抑、大梵王の傳授せる文字は。

(稿本の表紙に書付置玉へることども鐵云)

○梵志の經書に佛のことありと云こと○弊宿經に靈魂の事を精神また識神など云り死後魂有無の論いとおもしろし○婆羅門の中にも後世を受ざる異流もありき弊宿經みるべし○散陀那經裸形梵志經に梵志の學風を論ずる事委し擧べし又阿摩晝經も儀軌の僞書なる證據の文多くあり見べし○增一慙愧品第十八に古昔の諸佛常所レ說法苦集滅盡道盡爲二婆羅門一說レ之○婆羅門を道士と云事增一結禁品に三所あり○增一牧牛品第三段かに諸婆羅門各與二此論一吾姓最豪無レ有二出者一或言姓白或言姓黑婆羅門自稱言梵天所生云々○占相と云事俱冠○六波羅密多經音義に刹帝利者梵語彼國王種也福智勝者衆擧爲レ王波羅門亦梵語唐云二淨行一精二持潔志一學二四圍陀一博識多聞爲二王者師傅一高道不レ仕彼國

人民多認此族爲祖也とあり○増一七日品の五才に梵天去此極爲玄遠彼天帝身亦復如是とよくみるべし。七日品の二に波斯匿王見七梵志曰此諸人今此世間の阿羅漢と云る事あり本書見るべし。

己が梵輪を轉ずる由は云々○住一四十三才精進の事あり○神仙術西域記七六ゥ○呪の事住心一十三ゥ○四禪の事一三十一才○法數四十五十一ゥ十二四才に數息法あり○六種の身風廿八七才。廿六六才。十八廿五ゥ。標十十才より十八四才ゥ又十一ゥ○五通。五種通。妖通。五神通廿一十。十一十二○阿含。標上一廿一才○梵天治罪法票十二ゥ○金七十論作者標十十六ゥ。

印度藏志巻之三稿

大壑　平篤胤撰述
男　平田鐵胤　同
孫　同　延胤　同
門人　青山景通　校

○印度國俗品下第三

外道服飾。紛雜異製。或衣孔雀羽尾。或飾髑髏瓔珞。或無服露形。或草板掩體。或拔髮斷髭。或蓬鬢椎髻(音釋には椎髻上直追也とあり)。裳衣無定。赤白不恒。

さて婆羅門の行法。および四吠陀論の事は。上の件々に解辨ふる如なるが。此の行法を本據として。別に門戸を立る。謂ゆる外道の諸流あり。抑外道とは。佛道の外なる諸道を。佛法者より貶し云ふ語にて。儒道の外なる諸道を漢學者より。左道と貶し云に同じ。(これ謂ゆる、尊内卑外の意ばへにて、佛者はすべて、其の道を内とし尊み、他道をば外とし貶して、我が書を内典と稱し、他道の書をば、外籍俗書など云り、されど其は彼の道の垣

内ならむ者こそあれ、他の道々より云へば、佛道また外道なり、故金七十論には、佛道を始め、他道を弘く、外道とせる意を以て、外曰と、問答の文に記せり、但し此は、各々其の道々の、私をもて論ふなれど、本朝の古道より云ふときは、儒佛の道は更なり、何道にまれ、天皇祖神の御道に差へる説の有むは、悉く外道邪道に非ざるは無ぞかし、是ぞ公平の議論なる、）然れども。後世の佛籍どもに。眞の婆羅門法をも。推こめて外道と言へるは。眞の佛語を。よく稽へざる。古比丘らが過失にぞ有りける。然るは。阿含經中に考ふるに。外道梵志と云ひ。或は梵志外道とも云ひて。外道と梵志とを混せず。（中阿含には、外道と云べき所に多く異道といへり、）其目易きを云はゞ。增壹阿含牧牛品の佛説に。梵志別有二梵志之法一。外道別有二外道之法一。と云へるを思ふべし。（また同品に、羅閱城中有二梵志一、名曰二施羅一、備知二諸術一、外道異學所レ記、天文地理靡レ不二貫練一、又復敎二授五百梵志童子一、とあるも、梵志に對へて、他道を外道異學と云へり、また佛道を内とし、他道を外とせる事も、内經に、觀二外道異學一、如レ觀二空瓶一、而無二所有一、今察二内法一、如二似蜜瓶一、靡レ不二甘美一、とあり、此を始とや言ふべからむ、名義集に引く、二敎論に救レ形之敎、稱爲レ外、濟レ神之典、號爲レ内、と云へるは附會なり、）佛祖は。他道を甚く貶しつつも、婆羅門法をば。外道と言はず。其の法内にも入れず。別に一法とせり。其は佛祖の學は。もと謂ゆる。外道に從ひて受けたるなれど。其行法は。禪定を始め。何も婆羅門法を取りて。少か己が新意を交へて建立し。其の行を。やがて梵行と稱へれば。然すがに祖法をば。甚く言腐し難き故なるか。（然るを阿含外なる、大乘といふ經論どもに、其差別を辨へず、婆羅門をも、推こめて外道と稱し、殊に此の學をいひ腐せる説等の多かるは、佛祖が本意を知ざるなり、名義集に、婆羅門を、外道篇に出し、出定後語にも、外道に婆羅門を混じて論へるは、此よなき誤りと知べし、）玄奘比丘のみ。其佛意を知たりけむ。西域記には。其の差別を。大概は文別たり。心を著て察るべし。（此のこと既に上に、外道の服飾と、婆羅門の服玩を記せ

る所にも云へりき、大涅槃經音義に婆羅門俗人也、とも謂ニ淨行一高貴捨ニ惡法一之人、博學多聞者也、ともいへり、)さて其外道は。迦毘羅仙と云しが始にて、是最も久遠也。輔行記に迦毘羅此云ニ黃頭一。頭面俱如ニ金色一。(名義集には、婆毘迦羅、亦云ニ劫毘羅一、此云ニ金頭一、或云ニ黃髮一と見ゆ、)說經十萬偈。名ニ僧佉論一と見え。百論の疏に。僧佉此云ニ制數論一。明ニ一切法一。不レ出ニ二十五諦一。一切法攝ニ入二十五諦中一。故名爲ニ制數論一。(名義集には、僧佉正云ニ僧企耶一、此云ニ數術一、又翻ニ數論一と云ひ、百論音義にも、僧佉訛也、應レ言ニ僧企耶一、此云レ數也、其論以ニ二十五根一爲レ宗、舊云ニ二十五諦一と云ひ、大涅槃經音義に、迦毘羅論、古昔云ニ黃頭仙人論一也、と有れば、僧佉論とも、迦毘羅論とも云へり、異名同論なり、)二十五諦者。此論。智度論。金七十論。俱舍論。涅槃經闍提首那。並解ニ釋之一。今略和會序ニ其綱要一。(此の論とは、百論をいふ、此の論疏の作者吉藏かく言へば、自は其綱要を和會し得つ、と思ひためれど、元より言痛き論なる故に、なほ綱と目と混雜して、其の綱要を得難く、殊に佛者どもの記せるは、本人の立たる名目を、其の方風の名に替へ、或は其事を變じなどして、惑はしき事ども多かり、其は五唯を五塵とし、男女二根と、大遺とは別なるを、大小二道など云ひ、或は大小便、道など云ひて、其の作用を省きたるなど、甚く本人の意に背けり、故今金七十論を拔き、なほ輔行記、因明論疏名義集大藏、三藏、の二法數など、合せ考へて、綱は其宜しきに從ひ、目は悉く、金七十論の繁語を去り、目易きを捃摭して、左の如く記し、まゝ他書を取て、目中に記せるは、其書名を云て別ちつ、然れども仍其の旨趣の、會得し難き狀なるは、元これ腐々しき論なれば、何はせむ、只古き佛者らの、此の仙人が說を憎む余りに、其旨趣をよくも辨へず、謾に記せるには、少か勝りてや有む、かくて金七十論に、專と據る由は、彼の論は、迦毘羅仙が說に據て、其の末派の者の記せる論なればなり、猶此の論の事は、下に云べし、)蓋此外道亦修ニ禪定一。有ニ五神通一。知ニ八萬劫內事一。八萬劫外。冥然不レ能ニ了知一。故謂ニ之二十五冥諦一。(案ずるに、禪定五神通は、元より婆羅門

の古法なる故に、此の外道も亦と云へりと聞ゆ、知八萬劫内事、と云ふことは、此の仙が妄想の妄誕なり、然してまた佛法に、過去無數劫内の事を知り、未來無數劫の事をも知ると云ふは、此の仙が妄誕に加上せる、佛祖が妄誕なり、其は此事のみならず、其説法の骨と立たる、謂ゆる四諦十二因緣も、此の二十五諦より、思ひ立たる說なり、そは、末々に記し辨ふを見て知るべし、）一者神我。能生諸法。常住不壞。是二十五諦之主。故名爲主諦也。（若我依此身、則有作用、若無我依者、身則不能作、五大聚名身、此身非自爲、必爲他、他者卽是我、譬如牀席等聚集、非爲自用、必皆爲人設也、）二者自性。或名勝因。或名爲梵、此本有故。無所從生。有三德也。（三德者、一樂、二苦、三癡也、覺等二十三、從自性出、而必皆有三德、故知、本有三德、末不離本、故譬、如黑衣從黑縷出、末與本相似、神我與自性和合、能生於覺等二十三、譬如男女由兩和合故、得生子、若自性有者、不能生變異、以無伴故、譬如一人不能生子、一縷不生衣、自

性亦如此、○二法數云八萬劫前冥然不知之、但見最初中陰初起、以宿命力恒憶想、昧爲自性、世間衆生由冥初、而有卽世間本性、故云冥初自性也、○因明論疏云、八萬劫內有覺知、八萬劫前不覺、號爲冥性也、）次自性先生覺。（或名大、或名智、或名想、覺有八分、四分爲喜、四分爲癡、喜分者、謂法與智、離欲及自在也○法有二種、一者無瞋恚、二恭敬師尊、三內外淸淨、四滅少飮食、五不放逸、又有五、一不殺、二不盜、三實語、四梵行、五無諂曲、○智有內外二種、外智者六皮陀也、一式叉論、二毘迦羅論、三劫波論、四樹提論、五闡陀論、六尼祿多論、內智者三德及我也、由外智得世間、由內智得解脫、○離欲有內外二種、外者於諸財物、已有三時苦惱、謂覓時守時失時、故求出家、此因外智成、內者先得內智、已識我與三德異、故求出家、因外離欲、猶住生死、因內離欲、能得解脫、○自在有八種、一微細、極隣虛、二輕妙、極心神、三偏滿、極虛空、四至得如所意得、五世間之本主、一切處勝他故、六隨欲塵、一時能用、七不繫屬

他、能令三世間衆生、隨我運役、八隨意住、謂隨時隨處隨心得住、此四喜分、是名薩埵相、此相增長、能伏羅闍及多摩、多摩者、一非法、二非智、三愛欲、四不自在、此四癡分、是名多摩相也、○因明論疏云、薩埵此云有情、及勇健義、今取勇健義、次刺闍、此云微、亦云塵坌、今取塵義、次答摩、此云闇、闇鈍之闇、自性正名勇塵闇、三德者舊云樂苦癡、今名貪嗔癡也、)次從覺生我慢。(謂我聲、我觸、我色、我香、我福德、皆可愛、如是我所執、名爲我慢、若覺中喜分、及癡分增長則生我慢、具如下說、)次從我慢生五唯。(謂一聲、二觸、三色、四味、五香、若覺中癡增長、則生我慢、能伏通喜、是癡爲我慢種、故聖說、名大初、是我慢、能生五唯也、)次從五唯生五大。(謂聲唯生空大、觸唯生風大、色唯生火大、味唯生水大、香唯生地大、我慢生五唯、五唯生五大故、五唯及五大、悉是癡種類也、)從五大生十一根。一五知根。(謂一耳、二皮、三眼、四舌、五鼻、此五名知根者、能取聲等五塵故、)次五作根。(謂一舌、二手、三足、四男女根、

五大遺、此五名作根者、皆與知根相應、作諸事故、舌能說名句、手能作巧捉、足能行高下、人根能生兒子、大遺能棄糞穢、故名之、)次心根也。(謂能分別爲心、心根有二種、分別是其體、云何如此、此心根若與知根相應、即名知根、若與作根相應即名作根、何以故、是心根能分別知根事、及分別作根事、故譬如一人或名工巧、或爲能說、心根亦如是、此心云何說爲根、與十根相似、十根從轉變我慢生、心根亦如是、與十根同事、十根所作事、心根亦同作、是故得根名、若覺中喜增長、則生我慢、能伏通癡、是喜爲我慢種故、聖說名轉變、是我慢能生十一根、云何如此以喜多故、能執自塵、此十一名薩埵相、是故謂三德轉異、能生十一根、而此十一根、安置各異、誰之所爲眼最居上、能看遠色耳各一邊、能聞遠聲、鼻在一處、能取至到香、舌在口中、能取來到味、皮根在內、外至觸皆知、手居左右、而能執捉、足在下分、能行高下、二根居隱處、能生兒子、意根無定所、能行分別事、安置此諸根、是誰所作、非我非自在、自

性爲二正因一、自性生二三德及我慢一、我慢隨二我意一轉、由二此三德一、安二置諸根一、故覺以下七名二變異一、自性所レ作故、)諸人知二此二十五諦境一。決定脫二三苦一。隨レ處隨レ道、髮髻剃頭、得二解脫一無レ疑也、と有り、(二十五諦といふ諦は、諦審の義と諸書に見ゆ、右の二十五數の義を諦審して、知る由の稱なり、三苦の事は、下に引く文に見ゆ、)さて輔行記を始め。諸書に。上の五大の所に。此仙人が說を擧て謂五大卽四大及空也。此五種。由二五唯一而生故云下從二五唯一生中五大上。地大藉レ塵多故。其力最薄。空大藉レ塵少故。其力最强。故五輪成二世界一。空輪最下次風。次火。次水。次地。此就下成二世界一五輪上判レ之。成二肉身一亦爾。と有を思へば。古說の四大に。空を加へて。五大と爲たるは。此仙が所爲にや。(四大及空とあるも、其義と聞へたり、)さて四皮陀中。有二諸仙人說如レ是言一とて。一切三世間。初生二微細身一。但有二五唯一。此微細身生二入胎中一。赤白和合增二益細身一。是母六種飮食味。浸潤資養增二益麁身一。是母子飮食路。二處相應故得二資益一。猶如下樹根有中容レ水路上。此細身中。手足頭面腹背形量。

人相具足。麁身亦如レ是。細身名レ內。麁身名爲レ外。と云ふ說を引き。(此の說は、然る理ありて覺ゆ、信に四皮陀中の說ならむも知るべからず、)昔時自性者。廻轉生二世間一。細身最初生。從二自性一生レ覺。從レ覺生二我慢一。從二我慢一。生二五唯一。此七名二細身一。細身常住。若麁身退沒時。細身若與二非法一相應。則臨二受生時一受二四生一。一四足。二飛行。三胸行。四傍形。若與レ法相應。則臨二受生時一受二四生一。一梵天。二天。三世主。四人道。臨レ死細身棄二捨麁身一。此麁身父母所生。鳥獸噉食。或復爛壞。細身輪二轉生死一。と云へり。(後の四生を、異所には、一梵王生、二天帝生、三世主生とあり、然れば一梵天とは、梵天界に生るゝを云ひ、二天とは、忉利天界に生るゝをいひ、三世主とは、此の世の國界を治むる主と、生るゝ由と聞えたり、偖この文は本論の長文を、殊に甚く切めて引たれば、心得なく見ては、本論に違へりと思ふ人も有なむか、然れど本論を熟く見む人は、疑なかるべし、)此は四皮陀論の古說に。基たるには有れど。自性と云ふ物に。尊重を結歸して。彼大梵自在天の神德に因。といふ古

說を破れり。其は言二自在天爲レ因。是義不レ然。云何以二無德一故。自在天無レ有二三德一。是故自在不レ爲因。自性有二三德一。世間有二三德一故。知自性能爲レ因。と云へるにて知べし。（三德とは、樂苦癡を云ふこと、既に上に註せるが如し、斯くて自性と云へるは、自然を云るにや、と思ふに然らず、そは一切世間自然爲レ因、と云ふ古き說をも破りて、是義不レ然、と云へればなり、印度にも古く、自然の說を唱へし者あり、そを無因論師といへり、其說に、世間無レ因而起、是寶是常號曰二自然一能生二萬法一、生二一切物一、など云ふとぞ、唯識論疏、また其、演祕など云ふ物に見えたり、）さて剃頭して。比丘相と爲るを。解脫とする事も。此の仙が始たる事なるは。上に引く文に。隨レ處隨レ道。髮鬢剃頭。得二解脫一無レ疑也。と言へるにて著明なり。（豈大梵自在天の意ならむや、眞の梵志は然らざること、上に既に論へり、剃頭すること、眞の道に叶はむには、初生より、髮の生ては生るまじき物をや、）偖また。今當レ說二未見法一とて。其偈に。最後由二伽時一。當レ有二如レ是人一。依二邪見邪行一。誹二謗佛法僧一。先邪化二父母及朋友及眷屬一。開二四惡道路一。將レ他入二此中一と。說き。下文に。如二未來一。過去亦如レ是とあるは。將來の事を云へるにて。是謂ゆる懸記の始なり。佛法僧は。佛法に謂ゆる。三寶と異にして。百論疏に。加毘羅謂佛寶。僧佉經謂法々寶。弟子謂僧寶也と云へる如く。佛とは。迦毘羅仙を稱へり。其は名義集に。佛陀秦言二知者一。漢言レ覺。妙樂記云。此云二知者覺者一。對レ迷名レ知。對レ愚說レ覺。とあるが正說にて。元より知覺ある人をいふ。彼の國の古言なればなり。（法華音義に、佛梵云二佛陀一、此云二覺者一、此略去二陀字一、但云レ佛とあり、○四分律音義に、梵行梵言二梵摩一、此云二淸淨一、或曰二淸潔一、正言二寂靜一、葛洪字苑云、梵潔、取二其義一矣、なほ名義集は更なり、餘籍どもにも、種々高妙に云作せる說ども有れど、凡て佛祖が說に、附會せる說等にて、取るに足らず、）法とは。謂ゆる二十五諦法を云ふ。僧とは略語にて。是も名義集に。僧伽秦云レ衆。四人已上皆名レ衆。とあるが正說にて。是また彼國の古言なれば。二十五諦法を信受する。衆人を云へり。（比丘相に、剃髮せる者を

のみ云ふ稱の如く云る說等は、後の說にて、是また取に足らず。）然れば。佛祖が謂ゆる佛てふ稱は。此を襲ひ。また法と比丘とを合せて。三寶と稱する事も。此に傚ひ。また彼の事々しく言嘖ぐ。懸記と云ことも。伽毘羅仙が妄を。眞似たるにぞ有りける。（よく思ふべし、佛祖新說を發すと云へども、語までを新製すまじければ必ず襲ふ所なくは有べからず、猶その襲ひ取れる事ども、次々に辨ふを見るべし。）さて此迦毘羅仙と云し者の。出たる時世は詳ならず。金七十論の發端に。昔有仙人。名迦毘羅。從空而生。自然四德。一法。二慧。三離欲。四自在。總四爲身。見此世間沈沒盲闇。起大悲心。咄哉生死在盲闇中。遍觀世間。見一婆羅門姓阿修利千年一祠天。而迦毘羅在虛空中。不現其身。語曰汝戲世間法耶。言竟卽去。（梵志の天を祠る法を、世間法と云へる、是ぞ婆羅門法を破れる、外道の始なる、是を以て本論に、彼の吠陀論なる、馬祀の法を非として、生を殺して祠すること、諸天及仙人は、罪に非ずと云へども、實にこれ罪なりと云へり、上に載せる、自性先生覺とある處の、謂ゆる五法中に、一不殺とあるも、是より立たるにて、此の仙が始めたる戒なり、然れば、佛祖が不殺生の戒も、是の法を襲へる法なる事、知られたり。）滿千年已而復來。重說上言。阿修利答曰。戲。仙人聞已復去。其後復更來。又說上言。答之亦如是。仙人語曰。汝能修道不。阿修利言能住。仙人卽爲說三苦言一內苦。謂風熱淡等。從臍下。是爲風處。從臍上。至心名熱處。從心已上。名爲淡處。有時風大增長逼痰熱。則起風病。熱淡亦爾。如是名身苦。八分醫方能治身苦。心苦者。可愛別離。怨憎聚集。所求不得。分別此三。則生心苦。（この內苦二種の中に、身苦の說は、上壽吠陀の處に辨ふる如く、吠陀論の說なり、）二外苦。謂世人禽獸蛇山崩岸圻等。三天苦。謂寒熱風雨雷電等。時阿修利卽便信捨家法。修出家行。因說二十五諦。度脫爲弟子。云々とあり。（此の論の今本は、誤說錯亂など多く、文義の通せざる所も少からず、今は百論の疏に引く所と、互に異なる文を校正して引たり、輔行記には、得五通、前後各知八萬劫、

徧觀二世間一、誰堪レ度者、見二一婆羅門一、名修利、人間遊行問言、汝戲耶、答曰然、叉過二二千歲一問能修レ道不、答、能、因爲說二三苦一云々とあり、今と少か異なり）然は有れど。此の發端の文に。阿修利が。千年に一度つゝ。天祀を行へる每時に。迦毘羅仙が來れりと言ひ。彼の仙人を。從レ空生など云へるは。悉く妄誕にて。論ふに足らず。其は華嚴經音義。迦毘羅城の處に。具云二迦毘羅皤窣都一。言二迦毘羅一者。此云二黃色一也。（頭注云華嚴經音義に、佛弟子なる劫賓那を、此云二黃色一也、謂此尊者上祖、黃頭仙人、因爲レ族、此則氏族爲レ名也とあれば、子孫もありしなり）皤窣都者。此云二所依處一也。上古有二黃頭仙人一。依二此處一修レ道。故因名耳。とあれば。其の住る所は詳なるをや。（名義集諸國篇も同じ、此は佛祖が父祖の、代々領れる國なり、此の事なほ、第三品に云を見べし、偖金七十論なる說中に、佛法より非とする事は然もあらで、梵志行の古意を以て議せむに、非說はいと多かり、其は次々にも云べし、また婆羅門法の、古證となる事も少からず、其も序あらむ所々に云を見べし、）また因明論疏に。成劫之時有二外道一。云二劫毘羅一。此云二黃赤色一。以二頭髮眉面色。皆黃赤一故。（古云二迦毘羅仙一訛也、）造二二十五諦論一、乃恐二身死不レ傳一。即問二自在天長生法一、此洲頻陀山下食二餘甘菓一。卽得二久住一。化作二大石一。方圓如二一帳牀一。とも見えたり。（止觀輔行記にも。迦毘羅恐二身死一、往二自在天一問レ天、令下往二頻陀山一取二餘甘子一食上可レ延壽食已、於二林中一化爲レ石、如二牀大一、有二不レ逮者一書レ偈問レ石、後陳那菩薩、斥レ之書レ偈、石裂と云へり、世親論師が傳には、迦毘羅が末流の、頻、闍訶婆娑、と云ふ者、石と化れる由云へり、其文また陳那が事も第口品に引て論ふを見べし、）さて二十五諦の說の。次々に傳來せる趣は。金七十論偈に。祕密大仙說と有りて。祕密者。施二五德婆羅門一。不レ施二餘人一。故名二祕密一。（五德者。一生地好、二姓族好、三行、四有能、五欲得、具二此智慧一、乃堪レ施レ法、餘則不レ與、）大仙說者。迦毘羅仙人。如二次第一所說。と釋し。是智勝吉祥牟尼。（頭注云玄應が雜阿毘曇心論音義に、牟尼、經中或作二文尼一、舊譯言レ仁、應レ云二茂泥一、此云レ仙、通二

内外一、謂下久在二山林一、修心學道者上也、とあり、）依レ悲說。先爲二阿修利一。次與二般尸訶一。と云へる偈の釋に。此智昔四皮陀。未レ出時。初得二成就一。因二此智一。四皮陀及諸道。後得二成就一故。說二最勝吉祥一。牟尼依レ悲說著。迦毘羅大仙人。依二大悲一故。先爲二阿修利一說。阿修利仙人。次爲二般遮尸及頻闍訶一說是。般遮尸及頻闍訶廣說二此論一。有二六十千偈一。次第乃至二婆羅門。姓拘式名自在黑一。抄集出二七十偈一と云ひ。（牟尼とは、迦毘羅仙を言へり、此論の備考に、牟尼者、此云二寂默一、離二癡亂一義、と云へるが如し、六十千偈は、謂ゆる僧佉論とも、迦毘羅論とも云へる、論のことゝ聞ゆ、其を略せるが、此金七十論なる由なり、備この二十五諦の智に因りて、四皮陀および、諸道後に成ことを得たりと云へるは、勝を己が法に歸せむとての、妄誕なることは、言まくも更なり、彼の備考と云物の說には、珍しきこと無れど、本の異同はよく訂せる物なり、越州曉應述とあり、明和六年の印本なり）また弟子次第來。傳二受大師智一。自在黑略說。已二知二實義本一。とある偈の釋に。此智者徒二迦毘羅一來。至二阿修利一。阿修利傳二與般尸訶一。般尸訶傳二與褐伽一。褐伽傳二與優樓佉一。優樓佉傳二與跋婆利一。跋婆利傳二與自在黑一。自在黑得二此智一。見二大論難レ可受持一。故略抄二七十偈一。七十論。與二六十萬義一等。外曰。大論與二七十一有二何異一。答曰。昔時聖傳及破二他執一。彼有此無。是異義とも言へり。（大論とは、彼の六十千偈の僧佉論をいふ、昔時聖傳とは、猶異所に、聖語聖言とも云て、其は梵王梵天の、所說なる由見えたれば、聖傳も共に、吠陀の傳說なるべきを、傳へざるは、最惜き事なり、備此文に、優樓佉とあるは、次に論ふ、衞生師論を造れる仙とは、別人と聞えたり、其を此の優樓佉と同人と見ては、時代合ざればなり、外とは、數論師の外なる道の人を、廣く云へり、）また因明論疏には、迦毘羅仙後弟子。十八部中。上首者名二筏里沙一。此名爲レ雨。（雨時生故即以爲レ名、）其雨徒黨名二雨衆一。造論者及學人名二數論師一。造二二十五諦一。亦名二金七十論一。即是數論也。（梵云二僧佉奢薩怛羅一）謂以二智論一。數二度諸法一。從レ數起レ論。論能生レ數。故名二數論一也とあり。合せ考ふべし。（また廣百論に、記

論外道とも云へり、卽其音義に、伽毘羅論是也とあり、なほ此論、まだ其論師らがこと、第□□品□百年の處にも、論ふを見べし、)さて從數起論。論能生數云々とは。上二十五諦の所に記せる如く。從某。生某其某。有若干某。とまづ云ひて。其若干の某に。また若干の某ありと。次々に論を起し。各數を生じて、論へる說なる故に。數論と號る由なり。(其の分派しつゝ、立たる名數の多きこと、七十論を披て見て知るべし、中々に此に說盡すべくも非ず、)但し此は。迦毘羅仙が始めたる敎方なるが。後に佛祖。その敎方を竊して。佛法には。なほ此の外道に十倍して。言痛く名數を多く立たり。其は近く。諸乘大藏三藏など言ふ。法數の書等を見よ。中には彼と此と。强て對合せむと欲して。立たる名數も甚多かり。(然れど此は、文の章なる由、其の方の書に云へるものあり、文の章も、事にこそよれ、是等は兒戲に等しき態にこそ、なほ此の事は、次品に委く云を見べし、)さて。迦毘羅仙が次に出たるを。優樓佉仙といふ。輔行記に。優樓佉。此云休留仙。其人晝藏山谷。

以造經書。夜則游行說法敎化。猶如彼鳥。故得此名。亦名眼足。其人在佛前八百年。出世。亦得五通。說論十萬偈。名衞世師と云ひ。(百論疏にも、優樓迦、此云鵂鶹仙。亦云鵂角仙。亦云臲胡仙、此人釋迦未興、八百年前已出世、而白日造論、夜半遊行、欲供養之、當於夜半營辦飲食、仍與眷屬來受供養、所說之經、名衞世師とあり、)因明論疏に。成劫之末有外道。名嘔路迦。(舊云憂婁迦訛也、)此云鵂鶹。身形醜陋。晝則隱伏山林。夜則來人間乞食。因驚他產婦令墮胎。便不乞食。乃於碓碾擣舂場糠中拾取碎米而食之。因此亦號蹇拏僕。(舊云蹇拏陀訛也、)此云食米齊仙人。(名義集に、前の迦毘羅仙が事を、食米臍外道、應法師云、舊云食米屑也、外道修苦行、令手大指、及第三指、以物縛之、往至人家舂穀簸米處、以彼縛指、拾取米屑聚至掌中、隨得多少、去以爲食、若全粒者卽不取之亦名鵄鳩行、外道拾米、如鵄鳩行也とあるは、此仙が事を誤りて、迦毘羅とせるなり、)造論名吠世師迦奢薩恒羅。(舊云衞世

師）此云勝論。造大句論。諸論中勝故。或勝前數論故名。（廣百論釋音義に、鵂鶹子、字書、鵂鶹鉤鵅也、廣雅、鵂鶹鳩鵄也、山東名訓侯、關中名訓狐、亦名恠鳥、晝日恒住山中、夜則出山扣人、乞食、若得卽食、不得則空度、由其夜行故、稱鵂鶹、又此鳥多住山巖中、此仙人亦爾、故以名焉と云ひ、大毘盧遮那經音義に、鵂鶹卽鸒候、夜飛怪鳥也、亦名訓候、或名訓狐、以所鳴之聲爲名也、多居土窟穴、晝伏夜出、捕鼠及鼷鼩、小鳥等爲食、毛羽蒼斑、大如鷹、眼圓睛赤紫瓜似鷹、與角鵄、荒鷄、土梟等、同類而稍大也、起世因本經音義に、鵄鵂鶹惡鳴之鳥也、古今正字に、鵄屬也、字書云、鵂鶹䳚鳥也、一名鵅、夜飛晝伏・古今正字に、恠鳥也とあり、倶舍論音義に、晝盲夜視、鳴爲怪也、纂文に云、夜則拾人爪甲也とあり、金光明經音義に、案鵂鶹恠鳥也、晝伏夜飛、啄食諸鳥鵲衆鳥、大如角鷹、觜爪鋒利、眼如赤銅、眼光射人、亦名薰胡、或名鸒候、其聲鳴似自呼、若作鵂釋、皆非、恐繁、不能引說とも云へり、卽梟と云ふ鳥なり、輔行記に、休留と作るは、古への省字の例なり、）六句論、一實句義。梵云陀羅標。此云主諦。九法爲體。（謂地水火風空時方我意、與二十四德爲所依、）二德句義。梵云求那。此云依諦。（謂色味香觸數量、一異合離彼此覺苦樂欲瞋勤勇重輕潤行作聲、）三業句義。梵云羯磨。此云作諦。（謂取捨屈伸行、）四大有句義。梵云三摩若。此云總相諦。）卽前實德業、不能自有、由別有一大有有之、十句論名同、倶舍名總同句義。）五同異性句義。梵云毘尸沙諦。此云別相諦。（別離實德業、外有別自性、人與人同、由別有同法令同、人與畜異、別有異法令異、）六和合句義。梵云三摩夜諦。此云無障礙諦。能令實等不相離成。要得一人傳受、須具七德。とあるは。謂ゆる勝論外道の六諦なり。（百論音義に、衞世師此訛略也、應言鞞崽迦論、此云勝、其論以六句義爲宗、舊云六諦也と云ひ、攝大乘論音義に、吠世師亦云衞世師、皆訛也、此云勝異、過餘論、義名勝、能破餘論故名異、ともあり、）然して復言く。後劫滅時。波羅底斯國有婆羅門。名摩納婆

伽二(此云二儒童一)有レ子名二般遮尸棄一(此云二五頂一)七歳雖レ具。根熟稍遅。爲レ染二妻妃一。卒難二化導一。後因二遊戲與一レ妻競レ花。厭却念二仙人一。仙人應レ時而至。迎至二住處一。爲說二六句論一。後末代。十八部中上首。名二戰達末底一(此云二慧月一)造二十句論一。開二同異句一爲レ二。更加二有能無能無說三句一也とある。是ぞ優樓佉仙が立たる。法行の大概なる。然して六諦は。迦毘羅仙が二十五諦を。取捨して作れり。と見ゆる中に。乞食すること、妻妃に染ずと云こと。甚き若行などは。此仙が新意と聞えたり。斯て此仙人。晝は山を出づ。夜のみ出しは。實は其形の醜陋を耻たりし故と聞ゆ。亦名を眼足と云とは。頭に眼なく。足に眼の有けるにや。(倶舍法盈註に、劫初之時、自在天二十四返、人間行化、第二十四返、現二三目八臂身一、過二足目仙人一語曰、如二我面上有一レ三目一、即堪二與レ我論義一、仙人擧レ足報曰、如レ我足下有レ目、即與論義、云々と有るは、覺束なき說ながら、決めて此休留仙人が事なるべし、右の全文は、既に上に引て、其處にも論へりき、)優樓佉仙が次に出たる外道を。勒沙婆仙と云ふ。

百論に。勒沙婆が弟子。誦二尼乾子經一言。五熱炙レ身拔レ髮等受苦法。是名二善法一とある所の疏に。勒沙婆者。此云二苦行仙一。其人計下身有二苦樂二分一。若現世併受苦盡。而樂法至出上。所說之經名二尼犍子一。有二十萬偈一。尼犍子此云二無結一。依レ經二修行一。離二煩惱結一。故以爲レ名。亦名二那耶修摩一。舊云二尼犍子一。(大涅槃經音義には、尼乾子此云二無繫一、是躶形外道、不レ繫二衣食一、以爲二少欲知足一者也、地持論音義に、尼乾子、應云、泥犍連佗、此云二不繫一、其外道拔レ髮露レ形、無レ所二貯蓄一、以レ手乞食、隨レ得即噉者也、とも見えたり、)經說レ有二十六諦一、開慧生レ八。一天文地理。二算數。三醫方。四呪術。及四韋陀。故云レ八也。(四韋陀とは、上に說りし四吠陀なり、彼には、呪術醫方天文算數等も、具れること、上に論ふ如くなるに、其四吠陀を用つゝも、なほ是れ等の事を、一二三四と云て、別に立たるは、彼の吠陀論なる事どもを、なほ加增し考へて、記せる說どもなるべし、)次修慧生レ八。修二六天行一爲レ六。(此の六天は、謂ゆる欲界の六天なり、其はなほ下に云ふを、合せ考ふべし、)及事二星宿天一行

爲レ七。(こは一ッなれど、前の六に足して七の由なり。)修二長仙行一爲レ八。(これも一なれど、前の七に足して、八の由なり、斯て此の八を、前の聞慧の八に足して、十六諦なり。)修二長仙法一意。欲レ捨二無常苦一故。求二常樂一。卽第十六諦也と言ひ。(長仙法とは、仙法を修行して、無常の苦を離れ、長生常樂を求むる事と聞えたり。)また方便心論を引きて。有二五智六部四濁一。以爲二經宗一。五智者。謂聞智。思智。自覺智。慧智。義智。六部者一不見部。二苦受部。三愚智部。四命盡部。五不好得姓部。六惡名部、四濁者一嗔。二慢。三貪。四諂也。而明二因中一。亦有レ果。亦無レ果。亦一亦異。以爲二經宗一とも言ひ。(上に謂ゆる、聞慧生レ八は、この聞智に當れり、修慧生レ八は、思智に當るが詳ならず、自覺智より下三智の事、また六部の事も、詳ならず。四濁は聞えたるまゝの事なるべし。)また婆沙論を引て。僧佉經計二十一根一。衞世師經計二五根一。尼乾子經。計三內外物有二命根一故。不レ斷二生草一。不レ飮二冷水一とも。僧佉偏明二覺諦一。衞世師偏引二依諦一。尼乾修二長仙法一。此三師。竝是釋

迦未レ興時。盛行二天竺一とも見えたり。(此の三師とは、迦毘羅優樓佉、勒沙婆の三仙を云へり、葦紐天、大自在天に、此の三仙を合せて、二天三師と云へることも、同疏に見ゆ、また名義集に、此の三仙說、無二漏盡通一、故唯五通、とも云へり、)さて百論の初品に。問答を設けて。有人言。葦紐天名二世尊一。又言。摩醯首羅天名二世尊一。又言。迦毘羅。優樓迦。勒沙婆等仙人。皆名二世尊一。汝何以。獨言レ佛爲二世尊一。內曰。佛知二諸法實相一。明了無礙。又能說二深淨法一。是故獨稱レ佛。爲二世尊一と有るを見れば。世尊とは。もと大梵自在天王を稱せる號なるを。三仙人らが借上しけるに。(金七十論に、諸外道迦毘羅仙を、世尊と稱せり、また大論に、皆以二二天三仙一爲レ師、皆稱二薄伽梵一、亦稱二一切智一。)佛祖また其を眞似て。我が稱號と爲たる也けり。然れど皇國にて稱せむ事は。最も畏く。憚ある稱なれば。比丘等の。いかに物知ざるも。心すべき語にこそ。(其は大梵王を稱むには、世間を成立せる天神にて、衆生の祖父とさへ云へば、難なきを、仙佛など、さる卑しき者には、掛まくも畏

し、そは天皇の御座せばなり、此の世には、天皇を除奉りて、世尊と稱する者の何か有む、故己が此の書には、佛經を引る文にも、佛祖を世尊と稱せる所は、凡て如來とも、佛とも替たり、己いと若かりし時に聞たる、俗の口吟に、「天地へむだ指をさす京の釋迦」といふ句の有しは、さる卑しき口吟する徒にも、道を知たるが在けりと、今にいと感しくぞ思所ゆる）さて十八部外道。と云ふ事あり。其は百論疏に。釋迦出時。値二十八智人一。羅什云。三種六師。合十八部。（淨名疏に、此三種、約二六師一、一師有レ三、三六十八種外道師也、と云へり、然れど此十八は、信に足ざる、例の妄數なり、そは佛法も、小乘は、後に十八部に派たる由、異部宗輪論に見たる、彼のみは、其名數慥なれば、然も有べけれど、迦毘羅仙が立法、また優樓佉仙が立法も、上に載せる如く、十八部に派たる由なるに、此も十八部とあるは、異むべき事に非ずや、然れば共に、例の妄數なること、疑なき物なれば、大凡に心得て在べし、）大同小異、皆以二苦行一爲レ本。初六誦二四韋陀一。（此を四教義に、博學多聞、通二四韋陀十八大經一、世間吉凶天文地理醫方卜相、無レ所レ不レ知とあり、）中六自稱二一切智一。即是六師。（此を四教義に、邪心見レ理發二於邪智一、辯才無礙也と云へり、即是六師とは、下に出す六師は、即是中六師ぞ、と云へる意なり、）後六得二五神通一。（此を四教義に、得二世間禪一發二五神通一亦有二慈悲忍力一、刀割香塗、心無二憎愛一と云へり、上文名義集に引ると、互に精麁あれば、校して引たり、）詳二此意一十八人。皇法師云、初六從二聞慧一生、阿蘭迦蘭等也。中六從二思慧一生。若提子等也。後六從二修慧一生。須䟦陀等也。此皆勒沙婆部中。枝流出也。とあり。（聞慧、思慧、修慧ともに、勒沙婆仙が立法なるに、其より生ずと云へば、各々其一慧を執して、また別に一機軸を出せるなり、然れば此皆勒沙婆部中より流出と云こと、實に然る言なり、）初六なる阿蘭迦蘭と云は。謂ゆる阿羅々仙人なり。大涅槃經音義に。阿羅々。此云二懈怠一。獲二通定一者也。また陀羅々仙。有レ作二阿羅邏一。古音云二無醫仙一也。とも見ゆ。（十輪經音義に、阿羅茶唐言二自誕一、舊經阿蘭迦蘭是也とも、大般若經音

義には、阿邏荼迦邏摩子梵語、外道仙人名也、此無正翻とも云へり、名義集に、阿羅々迦摩羅、亦名羅勤迦藍とのみ有りて、翻はなし、）また此部に。欝陀羅仙人と云があり。其も大涅槃經音義に。欝頭藍弗。此云獺戲子。坐得非想定。獲五神通。飛入王宮。遂失通定。途步歸山とも。欝陀伽。古音云勝也。亦名盛也。ともあり。（十輪經音義に、嗢達洛迦唐言雄傑、卽經中欝藍弗是也と云、經律異相音義には、優喩藍梵語、外道名也、或名欝頭藍と見え、名義集には欝陀羅々摩子、亦云欝頭藍弗、此云猛喜、又云極喜、とあり、名義集なるは、上も此も、共に中阿含經に依れるなり、）此二仙人は。共に佛祖の師なり。其は百論疏に。佛未成道時就此二人受學。涅槃經云。從阿羅々學無想定。從欝頭藍弗學非想定。此二人既是佛師。と云へるが如し。（なほ此二仙人が事は、第口品に註をも見べし、○上に引たる音義に欝陀羅が王宮に飛入して、通定を失へりと云こと、西域記摩揭陀國の下に、昔有外道欝頭藍子者、於大林中棲神匿迹、既具五神通得第一有定摩揭陀王特深宗敬、每至中時請就宮食、欝頭藍子、凌虛履空往來、至已捧接置座、王將出遊有少息女、淑慎令儀、王召而命曰、仙至來如我所奉、少女承旨、大仙至已捧而置座、欝頭藍子既觸女人起欲界染退失神通、飯訖言歸、不得虛遊中心愧恥、詭謂女曰、吾比修道業、入定怡神、凌虛往來、略無暇景、國人願觀、聞之久矣、今欲從門而出、履地往、使夫覩見之徒、咸蒙福利、王女聞已宣告遠近、是時百千萬衆、佇望來儀、欝頭藍子步自王宮、至彼法林、宴坐入定、心馳外境、棲林則鳥鳥嚶囀、臨池乃水族跳驪、情散心亂失神廢定、乃生忿恚、卽發惡願、願我當來爲暴惡獸、狸身鳥翼搏食生類、身廣三千里、兩翅各廣千五百里、投林噉諸羽族、入流食彼水生、發願既已忿心漸息、勤求頃之復得本定、不久命終、生第一有天、壽八萬劫、如來記之、天壽畢已、當果昔願、得此獘身、從是流轉惡道、未期出離とあり、佛祖が懸記は、信ずるに足ず、されど仙人の、女色に依りて、其の通を失へる類は、獨角仙人など云

ふを始め、印度に彼此あるは、遂がたき女色を禁ずる事を專旨として、其道を立ればなり、本朝にも、久米仙と云へるが、女色を思ひて、通を失へりと云も、印度の仙法に依たればなり、西戎國の古仙道は然らず、是ぞ我が古道に叶へる、眞の仙道なる、其は別に記せる物あり）さて中六なる。若提子と云は。謂ゆる六師外道の一人なり。此も百論疏に。六師者。一富蘭那。其人計斷。謂無君臣父子因果之義。（なほ本書に、富蘭那從母得名、姓迦葉也と見え、名義集には、迦葉母姓也、富蘭那字也、とも言へり）二倶舍翅子。其人計一切法自然爲宗。（なほ本書に、倶舍梨從母立名、字云未迦梨也と云ひ、名義集に、末伽黎此云不見道、其人謂、衆生苦樂、不因行得、皆自然耳、と見ゆ、是謂ゆる無因外道なり）三毘羅伲子。其人計道不須修。經八萬劫。自然而得。如轉縷丸於高山縷盡則止。（なほ本書に毘羅伲子、從母立名、字云剛闍夜也と見え、名義集に剛闍夜此云正勝、毘羅胝此云不作、其人謂、道不須求、逕生死劫數、自盡苦際、苦盡自得、何假求、也とあり）四欽婆羅、其人計身有苦樂二分。現受苦盡。樂法自出。（なほ本書に、欽婆羅麁弊衣名、字云阿耆多と云ひ、名義集に、其人非因計因、著弊衣及拔髮、五熱炙身、煙薰鼻等、以諸苦行、爲道、謂今身併受苦、後身常樂也と見えたり）五迦羅鳩馱。其人計亦有亦無。應物起見、他問有耶。答云有。他問無耶。答云無。（なほ本書に、迦羅鳩馱是母名、姓迦旃延也と云ひ、名義集に、迦羅鳩馱、此云牛領、其人謂諸法亦有相、亦無相也、と言へり）六若提子、其人計業決定得報。今雖修道。不能中斷也、とあり。（なほ本書に、若提子從母作名、字尼健陀、是出家總號也と見え、名義集には、尼犍陀此云離繫、出家總名也、如佛法出家名沙門、其人謂、罪福苦樂本自有定因、要當必受、非行道所能斷也と見ゆ、猶此外道がこと、下の細注にも記すを見るべし）かくて輔行記に。六師元祖是迦毘羅。支流分異。遂爲六宗とあれば。上に引く百論疏なる。皇法師が說に。中六從思慧生と有れど。勤沙婆仙が立法に從のみならず。迦毘羅仙が立法

にも從れる。と知られたり。(思慧と云は、勤沙婆が立たる、五智の一なること、既載せるが如し。)さて後六なる。須跋陀と云ふは。佛祖が毒害せられて。死期になれる時に來て。弟子と爲れるが事なるべし。此は長阿含遊行經。また大涅槃經にも見えたるを。下の本文に擧つれば。今委くは云はず。(第口品を披き見て知るべし、)さて迦毘羅仙が。自性の新說を立たるより。次々に。優樓佉。勤沙婆。六師の徒など。己が向々。彼に勝む此に優らむ。と競ひ起て說法せる。其差別は。上に往々辨へたる如なるが中に。大なる事を論むには。天說にぞ有りける。其は迦毘羅は。新說を立たる始なれど。仍梵天の古說を存し。往々其德をも述べ。また我と法と相應すれば。梵天また忉利天に生ずと云へるも。上に本文を引て辨ふる如く。梵志の古說に據れること灼然く。優樓佉が天說は如何。と云こと詳ならねど。古說を背ける說は。無りしと聞えたり。(右の事ども、上に論へる二仙が立法の趣を、よく見通して、辨ふべし。)斯くて。諸天の異說を起し始めたるは。勤沙婆仙にぞ有ける。そは上に引く。此仙が立法の文に。修慧とて。六天の行を修す。と云ふ事の有るにて知べし。抑、六天とは。謂ゆる欲界の六天なり。(四王天、忉利天、燄摩天、兜率天、化自在天、他化自在天、これを欲界の六天といふ、此諸天を立たる奸意は、次品に委曲に論ひ露すを見て知べし。)然して。此後に出たる。六師外道の第一に居る。富蘭那と云し者。その欲界の說を破りて。色界の諸禪天を立たるが。(大梵天を初禪とし、光音天を第二禪とし、徧淨天を第三禪とし、色究竟天を第四禪とし、此を四禪天と云ふ。)なほ飽ずまに。己が立たる。色界四禪の說をも破りて。無色界の。空處識處など云ふ天を立たり。其は名義集に。事鈔と云物を引て。色空外道。以下用レ色破ニ欲有一。以レ空破ニ色有一。謂中空至極上。と有にて知べし。(文の義は、此の外道、まづ始に、色界諸禪の說を立て、勤沙婆が欲界の有說を破れるが、後には己が、色界諸禪の有說をも破りて、別に無色界空の說を立て、空を至極とせる由なり、偖こそ色空外道と號けたるなれ。)然るに此が同時に出たる。阿羅々仙と云ひし者。ま

た共の上を一層して。無處有處天。と云を妄想し。此の仙が同時に。欝陀羅仙と云し者。なほ加上して。非想非々想處天と云を妄計したる。是ぞ謂ゆる。二十八天の究竟なる。(この二十八天、また其の名義、また中には、眞の古名もあるを拾ひ集め、新に名をも設けて立たる、由緒などの事は、次品に委く云ふを見べし。)かくて最後に。佛祖起りて。其をみな網羅して襲ひ取り。悉く元より。常在せる諸天と爲て。大千世界の妄説を。大成せるにぞ有りける。(此の事も、次品の末に、委く辨へたれば、披き見べし、此にはまづ概略を云ふのみぞ。)さて天説は更なり。佛祖が一代の説法の。骨とある事ども。悉く梵志の古説。また諸外道の立法の。己が意に應へるを。竊せる説なること。明白なるに。其を心宜からず思へる。末派者の所爲として。大涅槃經を僞作せる中に。(此の經は、佛滅よりは五百年ばかりは、慥に後の世人の、作れる經なること、第口品に論ふを見て知るべし。)佛告迦葉。所有種々異論。呪術言語文字。皆是佛説。非外道説(頭注云位心品冠注に、三界六道皆是自心佛之名字也、故大本瑜伽中云我即大自在天、我即梵天、我即帝釋、我即天龍八部、諸鬼神等、又曰如來、亦名凡夫外道、亦名種々惡趣衆生、亦名五逆邪見人云々、灌頂疏に、「悉曩藏引く」異論呪術言語文字、皆是佛説、非外道説と云文を解して、外道偷得安已典耳、といへり、)云々と説り、と作れるは。笑ふに。堪たる語ぞかし。(百論疏に、一切九十六術、經書記論、即是邪説、稱爲有上、佛法正説、名爲無上とも見えたり。)其は此の語の如くは。佛祖が生涯は更なり。後世次々に出たる論師ども馬鳴。龍猛。提婆。無著。世親を始め。論説とし言へば。種々の異論を破らむと。勞き喧けるは如何ぞや。(さる種々の異論を弘め置て、また其を止むと勞き喧ぐは、譬へば痴者の、わざと家ごとに火を放ちて、其の火を救はむと、猥狽するに異ならず、此はそも何ちふ狂事ぞも、然れば此の涅槃經なる説は、盗人他の財寶を竊み取りて、元より我が物がほに持なし、彼の家になほ餘りの財寶も殘れるを人に示して、彼家なる財寶こそ我が物なれど、猛び罵るが如し、いと可笑くこ

そ、かゝる類の痴説をも、護法者流は、涅槃の無盡説よ、法身の金剛説よと、猶喧ぐめれど、努々拘はること勿れ、)さて其の提婆論師が百論は。殊に異論を破らむと。勞つける籍なるが。初品に。迦毘羅。優樓迦。勒沙婆。三仙が事を論へる次に。又有諸師。行自餓法。投淵赴火。自墜高巖。寂默。常立。持牛戒等。是名善法。と云へる所の疏に。此を精く説て。此中凡列十師。一迦毘羅三寶行世。二優樓迦三寶行世。三勒沙婆三寶行世。(この三寶と言へる言の由は、既に迦毘羅仙の所に云へり、)第四師。以自餓爲道。第五師。以投淵求聖。第六師。以赴火爲道。第七師。自墜高巖求道。第八師。以寂默爲道。第九師。以常立爲道。第十師。以持牛戒爲道。前之三師。廣列經法。以三寶行化。後之七師。直辨苦行而已。と云ひ。(なほ言へる説に、自餓法者、或一日食三果、或吸風服蘇、或服氣也、寂默者、若提子論師、立非有非無爲宗、明一切法、若言是有、無一法可取、若言是無、而萬物歷然、以心取境、無境稱心、以境取心、無心稱境、

故云非有非無、嘿然無言、持牛戒者、如倶舍論說、合眼低頭食草、以爲牛法、彼見牛死得生天上、即尋此牛八萬劫來猶受牛身、不達爾前有於天因、謂牛死得生天是故相與、持牛戒、成論云、持牛戒若成則墮牛中、如其不成則入地獄、然外道苦行世人信之、なども云へり、)百論は、專と異論を破れる書なる故に、疏にも、外道のこと委く見えて、中には、論ひ得たりと見ゆる説もはた無きにあらず、)また龍猛論師が大論にも。種々異論を破れる説の多かる中に。以灰塗身。裸形無恥。以人髑髏。盛糞而食。拔頭髮。臥刺上。倒懸熏鼻。冬入水。夏則火炙。食菓菜草根。牛屎。稊稗。水衣。一日乃至一日一食。或噏風飲水。(頭法云倶舍論の玄應音義に、塗灰外道遍身塗灰、髮即有剃不剃、衣纔蔽形、但非赤色爲異耳、奉事摩醯首羅天者也、晋行事那羅延天頂留少髮、餘盡剃去、內衣在體纔蔽形醜、其衣染似赤土色也と見え、倶舍論に外道狗牛等禁、とある遁鱗記に、外道不知狗牛過去有順後生天之業、但見狗牛死得生天、便謂食

草噉レ糞、是生天之因一、故以效レ之、名二狗牛禁一、)など云へる穢行も。涅槃の說に依るときは。是また佛祖が。金剛涅槃の所爲となるをや。(凡て彼の大乘と云ふ諸經は、末に辨ふ如く、後人の佛祖に託して、己が向々、さかしらを、述たる物なるが、佛祖を稱へ揚むとして、却りて甚く云ひ貶さしむる說のみぞ多かる、憐むべし、佛祖は、千重の濡衣をこそ著たりけれ、然ればよし、此の論を、心に應はで、論ひ直さむとすとも、大乘を信らむ限りは、其の濡衣を、脫得させむこと叶はず、此に於て、大乘を捨て、謂ゆる小乘の學に入りたらむには、始めて供に、佛法の眞面目を語るべくなむ、)さて外道等が妖行。ますく募りて。其の惡弊を國人等は更なり。獸類までに及ぼしけり。其は西域記。阿耶穆佉國の下に。大城東兩河。交廣十餘里。東合流口。日數百人。自溺而死。彼俗以爲願レ求二生天一。當二於此處一。絕レ粒自沈。沐二浴中流一。罪垢消滅。是以異國遠方相趨。萃止七日。斷食後絕命。(河下して沐浴ぐ事は、上に論ふ如く、眞の道に叶へる行なれど斷食して絕命する事は、卽自餓法の惡弊なり、)至二於山猨野鹿一。群二遊水濱一。或濯レ流而返。或絕レ食而死。當二戒日王之大施一也。有二一獮猴一。居二河之濱一。獨在二樹下一。屛レ迹絕レ食。經二數日一後。自餓而死。(こは惡法の弊の、獸類までに及べるなり、總して惡法盛りに行はるゝは、其やがて、妖氣の行はるゝなる故に、かゝる奇異の事あり、禽獸は更にも云ず、虫魚草木までに及ぶ、其一二を云はば、西戎籍宣室志と云ふものに、石憲と云ふ者、夏のころ雁門關と云所へ行くに、暑盛なるに、疲れて、大木の下に臥たるに、夢に一僧來りて、我が廬の南に、窮林積水あり、暑を淸むべし、我に偕ひて遊び給へと、石憲伴はれて、西の方へ數里を行けば、窮林積水あり、群僧水中にあり、石憲怪みて問へば僧云く、これ玄浴地なりと、水中の群僧、狀貌異ならず、已に日暮るゝに、一僧云く、吾徒の誦經を聞むと欲するかと、石憲しかりと云へば、群僧水中に聲を合せて噪し、食頃ありて、一僧すなはち、石憲が手を取て偕に浴す、其の冷なること甚し、驚き寤れば、衣盡く濕たり、明日道すがら、蛙の鳴こと甚し、夜夢た

る所に類たり、謂ゆる誦經の音なり、往て尋ぬるに、窮林積水あり、蛙甚多し、果して玄陰池と云ものなり、群蛙儼然として昨日の僧の如し、と見え、また故事要語と云ふ書に、漢籍皇朝類苑を引て、宋の熙寧年中に、李賓と云ふ人、潤州に知たる時に、其の園中の桒の花、悉く荷花となりて、各々に一佛の形あり、彫刻むが如く、其の數を知ことなし、暴乾せども、其相依然たり李が家は、佛に奉ずること、甚だ篤き故に、此の異ありと、本朝にも、元祿壬午の四月に、桒花結びて荷花をなす、中國皆然り、此時沙門公慶、南都の大佛を再興し、たま〳〵開眼の年に逢ふ故に、此の異ありとて、頑民摘取りて此を篇にし、禮拜供養して、佛緣を作ことありとも見ゆ、人正を好めば、正氣これに應じ、人異を好めば、異氣これに應ず、そは近き頃江戶人など、蕣花の異なるを好む故に、年々に異花を生じて、其好に應ずるに似たり、實は似るに非ず、其變を好むは、やがて妖を招く理ある故に妖氣の是に應ずるなり、愚人のさる事としも得知らずて、珍ほどばしり喧ぐめるは、最も

憐むべき事にこそ、眞の道に志有らむ人は、深く思ふべし、此は事の因に、少か驚かしおくのみ。）故諸外道。修二苦行一者。於二河中一立二高柱一。日將レ且也、便卽昇レ之。一手一足執二柱端一。蹋二傍杙一。一手一足虛懸外伸。臨レ空不レ屈。延レ頸張レ目視レ日右轉、逮二乎曛暮一。方乃下焉。若レ此者其徒數十。冀斯勤苦。出二離生死一。或數十年未二甞懈怠一。と有るを見て知べし。（此の外道らが、獼猴に傚ひて、かゝる行する事は、やがて妖氣に相牽れるなり、佛法甚く信する徒にも、古今にかゝる倫は、あまた聞えたり。）さて外道の數は。楞伽經に。百八部邪見。とあるは。此よなき多數なれど。餘の經論どもには。九十六種外道。と云へるぞ多かる。（但し此の數も、說一切有部律に、外道六師各出二十六種一、合九十六種是也とあれば、是も例の虛數にぞ有りける、然ればこそ、大毘盧遮那經に、三十種外道と云ひ、涅槃論には、二十種外道なども云へり。）斯て右の多數は。佛法をも入れて。九十六種とは云へり。其は分別功德經に。九十六道之中。佛道以爲二其最一。と云へるにて知るべし。（また大集

經に、佛道の事を、勝ニ於一切九十五道ーと云へるも、佛道を入れて、九十六種の意なり、）然れば印度にて。諸道を指して。外道と云ふこと。元來は。四吠陀論を奉ずる梵志より。他道を貶せる語なるを。佛者を始めに外道にも做へるにぞ有べき。（其は金七十論は、佛道より云へば、外道の書なるに、佛道また他道を、凡て外と云ひ、上に引く阿含に、梵志と外道とを佛も別ち、九十六種外道と云は、佛を入れてなることを、思ひ合せて、察らるゝなり、）さて大涅槃經に、外道九十五種、皆趣ニ惡道ーとある所の音義に。外道者。邪見猥雜不レ堪ニ纏說ー。所行所執各々不レ同。今且略ニ舉數般ー。以明ニ差別ー。所レ謂數論勝論。執レ我計レ常。五熱炙身。編レ椽臥レ棘。塗灰掬食。翹レ足裸形。自餓投河。鷄狗等戒。被衣芏草。赴レ火投レ巖。矯亂謬習ニ諸邪定ー無利勤苦不レ得ニ解脫ー。是故經言。皆趣ニ惡道ー。瑜伽六七。顯揚九十。廣辨ニ宗途ー。如ニ彼二論戒禁所執ー。以顯相從。總攝論レ之不レ過ニ十六ー。如ニ論中頌曰ー執ニ因中有ニ果。顯ニ了有ニ去來ー。我道宿作因。自在等實法邊無邊矯亂。計ニ無因斷空ー。最勝淨吉祥。名ニ十六異論ー。一因中有果宗。二從緣顯了宗。三去來實有宗。四計我實有宗。五諸皆常論宗。六宿作因論宗。七自在等因宗。八實爲正法宗。九邊無邊論宗。十不死矯亂宗。十一計無因論宗。十二計七斷論宗。十三因果皆空宗。十四妄計最勝宗。十五妄清淨宗。十六妄計吉祥宗と云へり。是れにて佛道より。外道と指たる諸法を。總攝し盡せり。是を以て。九十六種と云ふは。虛數なること。明に知られたり。（然れどなほ、出定後語の外道篇をも見べし、）さて阿含經中に。究羅檀頭婆羅門と云へるが。五百特牛。五百牸牛。五百特犢。五百牸犢。五百羖羊。五百羯羊を辨じて。祀に供せむと欲せり。と云へる類の甚しき法は。みな外道法に轉化せるなり。彼の經中に。唯に婆羅門とあるも。能く其行を。眞の梵法と。外道法とを見分つべきなり。

校者ら曰く。次に下く記したるは。先師の此章の。始の處の初稿なり。少か書さして。稿を改められたり。と見ゆる物から。また後說に洩れたる事もみゆれば。是に舉げ置くになむ。

外道とは。佛道の外なる諸道を。佛法者より貶し

云ふ語にて。儒道の外なる諸道を。漢學者より。左道と貶し云ふに同じ。（是謂ゆる、尊内卑外の意ばへにて、佛者は凡て、其道を内とし尊み、他道をば外とし貶して、我が書を内典と稱し、他道の書をば、外典俗書など云へり、されどそは、彼の道の域内ならむ者こそあれ、他の道々より云へば、佛道また外道なり、但しこは、各々其道々の心をもて論ふなれど、本朝の古道より云ときは、儒佛の道は更なり、天皇祖神の道に差へる説どもは、悉く外道左道に非ざるは無ぞかし、是ぞ公平の論ひなる。）然れども。熟々阿含を考ふるに。外道と云へるに意ばへあり。そは増壹阿含牧牛品一に。觀二外道異學一。如レ觀二空瓶一。而無二所有一。今察二内法一。如二似蜜瓶一。靡レ不二甘美一。とある類は。佛法を内とし。他學を外と云へる常の例なれど。また同品二の佛語に。梵志別有二梵志之法一。外道別有二外道之法一。とあり。此は佛法より云へる語なるに。梵志をば外道と云ず。佛法内にも入れずて。別にせるなり。（また羅閲城中有二梵志一。名曰二旃羅一。備知二諸術一、外道異學經籍。所レ記天文地理。靡レ不二貫練一。又復教二授五百梵志童子一、とあるも、梵志に對へて、他道異學と云へり。）然れば佛祖は。他の道を甚く貶しつゝも。梵志學をば。外道とまでは言ざりけり。其は佛祖。元より梵志に從學して。悉く其法を學び取り。少か己が新意を交へて。其の法を建立し。其の行を。やがて梵行と稱へれば。然すがに。甚くは言ひ腐し難き故なり。（然るを阿含外なる、大乘といふ經論どもに、其差別を辨へず、婆羅門をも外道と稱し、殊に此の學を、いひ腐せる説どもの多かるは、佛祖が本意に合ず、翻譯名義集に、此の別を辨へず、婆羅門を外道篇に出し、出定後語にも、外道に婆羅門を混じて論へるは、此よなき誤まりと知るべし。）玄弉法師。その佛意を知りたりしか。また彼が印度に渡れる當時は。彼國の佛徒ら婆羅門と。外道と別て云へりしか。此にまづ外道の服飾を記し。下文に別に。婆羅門の服玩を記し。諸國の事を記すにも。外道と婆羅門とを。大抵は別て擧たり。西域記に。よく心を著て察るべし。（外道と云ひ、異道、異學など云へるも、其の差別あり、また餘經論どもに、梵志の外道行を

なすを、梵志外道と云ひ、沙門の外道行をなすを、沙門外道など云へるは、故實に叶へる云ひざまなり。)扨此に謂ゆる外道も。其の本は。婆羅門行者の中より。次々に派りて。其行を異にせる徒にて。六師外道と云を始め。甚多く其の行の趣は。大論に。以レ灰塗レ身。裸形無レ恥。以二人髑髏一盛レ糞而食拔二頭髮一臥二刺上一。倒懸熏レ鼻。冬則入レ水夏則火炙。食二菓菜一。草根。牛屎。稗子。水衣二一日乃至二日一食。或噏レ風飲レ水。など有るにて知べし。(なほ外道はもと、梵志より派たる物なれば下文婆羅門學の所に、委く考へ註すを見るべし。)如レ此く。鄙しき行の者なれば。髑髏を瓔珞とする如き。穢き事の有るなり。(阿含に、摩羅と云ひし者、外道法を行ひて、以下缺)

詳二其文字一。梵天所レ製。原始垂レ則四十七言。寓レ物合成。隨レ事轉用。流二演枝派一其源浸廣。因レ地隨レ人微有二改變一。語二其大較一未レ異二本源一。而中印度特爲二詳正一。辭調和雅。與レ天同音。氣韻淸亮爲二人軌則一。隣境異國習謬成レ訓。競超二澆俗一莫レ守二淳風一。至二於記レ言書レ事。各有司存。史誥總稱謂二尼羅蔽荼一。唐言二靑藏一。善惡具學災祥備著。

其文字とは。謂ゆる悉曇梵字なり。悉曇字記に。悉曇天竺文字也。西域記云。梵王所製。原始垂レ則四十七言。寓レ物合成。隨レ事轉用。流二演支派一其源浸廣。因レ地隨レ人微有二改變一。而中天竺特爲二詳正一。邊裔殊俗兼習二訛文一。語二其大較一本源莫レ異。斯梗概也とあり。此引文今本と異なり。(されど、文を引直せる物とも見えず、字記の撰者、唐の智廣が、當時に在し異本なりと見ゆ、しか思ふ由は、西域記今傳はる本は、前撰なるか後撰なるか、知べからねど、諸書に引たる文とは、違へる事ども、彼此見え、また文の錯亂誤字脫文も、計ふるに暇あらず、其著きを云はゞ、今本に付たる音釋に、邊裔音曳、邊末之地といふ釋あり、此は今本の、今擧る文になき文字なるに、字記に引たる文にあり、其の餘にも、かゝる事ども有れば、今本なる音釋は、さる異本に付たるを、採たる物と見ゆるをも、思ひ合すべし。)さて字記に引るには。梵王と有るを。今本には。梵天とあり。名義集に。西域悉曇章。本是婆羅賀磨天所作。自レ古。迄レ今更無二異書一。

但點畫之間微有不同。悉曇此云成就所生。是生字之本也。と見え。(婆羅賀磨天とは、卽梵天を云ひて、梵王とは異なること、既に上に辨たるが如し。)また安然比丘が悉曇藏に。大論勝鬘經などを引て。造書天造文字。と云へるは。大涅槃經音義に。造書天。梵云婆羅賀磨天。卽造悉曇章十二音字母者是也。とあり。(造書とは、婆羅賀磨の正譯に非ず、義譯なることは、云まくも更なり。)梵天梵王。互に云へるも常なれば。何にても宜し。と思ふも有るべけれど。此は梵王と有るぞ正しかる。(梵王と、梵天との差別は、上なる四種性の所に、既に辨へたるか如し。)其は彼の字記に。上に引く文の下に。南天竺の婆羅門僧。般若菩提が語を載して。南天祖承摩醯首羅之文。此其是也。とある摩醯首羅は。大自在天と翻して、卽大梵王の異名なればなり。(かの字記なる梵字は、般若菩提か字記の撰者、智廣に傳授せる文字なる故に、此の語の意は、今傳授する梵字は、卽ち摩醯首羅天の所製を祖承して、南天竺に行はるゝ文字、すなはち是ぞ、と云へる意なり、)また內法傳にも。創

學悉談章(亦名悉地羅窣覩)斯乃小學標章之稱(但以成吉祥為目)本有四十九字。共相承轉成一十八章。總有一萬餘字。合三百餘頌。(凡言一頌、乃有四句)一句八字總成三十二言。(更有小頌大頌、不可具述)六歲童子學之、六月方了、)斯乃相傳。大自在天之所說也とあり。然れば梵子は。もと大梵自在天王の。大梵天界にて製れるを。其の子梵天の降りて、印度に弘通せりとふ傳へなるを。作者を直に。梵天と云へる說は訛なり。(また婆羅賀磨天を、造書天と譯せるも同じ、また舊婆沙論に、劫初時、瞿頻陀羅婆羅門、造梵書佉盧陀仙人造佉盧書、大婆羅門造四圍陀、ともあり、是も同じ、さて婆羅門とは、梵天と云に同じければ、瞿頻陀羅と云は、梵字を人間に、傳へたる、梵天の名なるべし、大婆羅門とは、大梵天と云に同じければ、四圍陀を造れりと云ふこと、末なる四吠陀の所に云ふ如くなれば、正說なり、佉盧書のことは、此に要なき事なれば言ず、偖是に就て思ひ出たる事あり、悉曇藏に、大乘四論玄義記などを引て、梵天三兄弟下欲界、如梵書伽書

篆書、左右下三行書、二種在天竺國、㝡弟蒼頡下來漢地、觀鳥跡造篆書といひ、また兼名苑云、書有三種、梵書左行、佉樓書右行、蒼頡書下行なども言へり、蒼頡がこと、最をかしき說なり、また百論疏に、外日、昔有梵王、在世說七十二字以教世間、名佉樓書、世間之敬情漸薄、梵王貪悋心起、收取吞之唯阿漚兩字、從口兩邊墮地、世人貴之以爲字王と有は、妄誕なること云ふも更なり、）さて慧琳意義に。阿察囉唐云文字。義釋云無異流轉。或云無盡。或云常住。梵字獨得其稱。諸國文字不同此例。何者如諸國所有文字。並是小聖。隨方語言演說文字。後遇劫盡時。悉皆磨滅不得常在。唯此梵天王所說。設經百劫亦不差別。故云常住とあり。（玄應音義には、字者文字之總名、梵言羅刹囉、と有りて、譯は慧琳に同じ、また金眞集記には、梵云阿乞察羅、とありて、說は玄應慧琳に同じ。）佛者は。大抵文字をも。本は佛より所出せりと執する中に。玄應慧琳全眞など。梵天王の所說と稱する。梵志の古說に因るは。珍しき事なり。（然れども、無異流轉

また無盡と譯せる語義を、解る說は叶はず、其は下に、大涅槃經を引て、其所に辨ふを見べし、）或書に。此の說を難破して。大乘唯識論に。また述記などを引き。火災劫時。梵王命終火至梵世。高臺燼滅先已成空。於時乎知。謾誰計常。後成劫時。梵王始生。降臨更敎。當時梵文奈何同異。設與今同是造不得。必可有滅。認什麼計常住。世尊敎法尚有時矣況梵天者之所說乎。其經百劫無差別者。蓋粹焉外道之計著也。と云るは。強て大梵王を云ひ腐せる。佛祖が誣說の尻馬に乗れる。大乘者流の頑僻なりかし。（殊に火災劫の時に、梵世まで燼ると云ふ說も、佛祖が梵王を、云ひ腐さむ計に、始て唱へ出たる妄說なる物をや、其由は、次品に委く論ふを見よ、但し其は或書に、倶舍光記に、惡刹羅、唐言字、是不流傳義、謂不隨方流轉改易、と云へる說を難じて、是亦依世傳之言、慢一隅者之僻談也、何者北天旣變訛、五竺異音、胡覩更轉、漢倭失眞、歐巴、利未、不須梵文、五大南洲不用梵語、十之八九、梵字不布、易言隨方無改と、）さて四十七言と

は。悉曇字記に載せる。悉曇十二字と稱する韻字と。體文と稱する三十五字と。合せて四十七字を言へり。(委くは字記を見べし、また彼の記を註せる物にては、行智が新釋といふ物いと宜し、必ず見べし、)然れども。實に大梵自在天王の製りて。梵天の人間に傳へたる古字は。もと悉曇十二字の中なる。[梵字](ア)[梵字](イ)[梵字](ウ)[梵字](エ)[梵字](オ)の五字と。(かの十二字の中に、長聲の五字と、[梵字]の揆聲、また其の急聲の七字を入たるは別に麼多と云ふ書ある上は、此の中に有むこと、迂と云つべし、)體文字は。三十五字の中なる。[梵字](カ)[梵字](サ)[梵字](タ)[梵字](ナ)[梵字](ハ)[梵字](マ)[梵字](ヤ)[梵字](ラ)[梵字](ワ)の九字と。合せて十四字の外に。摩多と稱する。[梵字](アー)[梵字](イー)[梵字](ウ)[梵字](ワー)。[梵字](エ)。[梵字](エー)。[梵字](オ)。[梵字](オー)。[梵字]撥聲[梵字][梵字]急聲の十一畫のみにて餘の體文字どもは。疑なく後世に。音聲を。精密に譯し取らむと思へる徒の。杜撰し補たる文字なり。其は梵字。また其の音は。大梵自在天王より原始れる由は。諸書に普ねく其說を載し。實に然も有べく覺ゆる傳へなるに。長阿含闍尼沙經の佛說にも。大梵天王說とて。其有二音聲五種一。清淨乃名二梵聲一。何等爲レ五。一者其音正直。二者其音和雅。三者其音清徹。四者其音深滿。五者周徧遠聞。具二此五一者。乃名二梵音一とあり。此は佛祖が在世の時まで。傳はれる古說を取て。說法せるにて。實に此の頃までの梵音は。かくぞ有りけむ。(三藏法數に、梵音者、卽大梵天王所出之聲、而有二五種清淨之音一也、一正直音、謂二諸梵天、其音聲端正質直而、不レ邪曲一、二和雅音、謂二諸梵天、其音聲柔和典雅、離二諸麤獷一、三清徹音、謂二諸梵天、其音聲清淨明徹、四深滿音、謂二諸梵天、其音聲幽深充滿、而不二淺陋一、五周徧遠聞音、謂二諸梵天、其音聲周徧遠聞而不二迫窄一、とも見えたり、)然るに字記中に。今擧る十四字のみ。熟く此の說に符ひ。また皇國の正音聲にも符ひて。實に天音と稱すべく覺ゆるを。今捨て擧ざる體文の字どもは。邪曲麤獷。佚離。淺陋。迫窄にして。更に大梵王の正音と云べき音に非ず。殊に[梵字]等の五字を。韻字と爲し[梵字]等の九字を體文とし。謂ゆる麼多を配すれば。有ゆる諸正音を生じて。正直。和雅。清徹。深滿。周徧と稱するに足れり。

其五十音

然して長聲に用ふる時は。長聲の麼多を配し。撥聲に用ふる時は。撥聲の麼多を配し。急聲に用ふる時は。急聲の麼多を配し。用ふること例の如くすれば。有ゆる音聲を。容易に譯し得らるゝ事なれば。大梵王より出たる本字本音は。必ず右の如くならずは。五種の梵音の旨に合ざること。熟々思ふべし。(麼多を配する例の事は、字記を始め、悉曇のこと記せる諸書に、普ねく見たれば、今更に云ず、但し右は清音こそ有れ、濁音また半濁の音はいかに、と思ふ人も有べし、其は人間の訛音にこそあれ、天上には、決して有まじき音なること、師の漢字三音考を見ても悟りねかし、實には、撥聲急聲なども、天音にはなき理なれど、皇國よりは甚く劣りて、鄙しき國なる故に、自然に舌だみて在れば、別に此の二音をば、天意に許し言しめたるにや)偖かく記し畢て。大般涅槃經文字品を見るに。迦葉白言。云何說字根本。佛言。說初半字。以爲根本。持諸記論呪術文章。凡夫之人。學是字本。然後能知是法非法。所言字有十四音。名曰涅槃。常故不流。無盡金剛之身。是十四音名曰字本とあり。(こは此に用なき文を、甚く約めて引たれば、委くは本籍を見べし)此の經は、佛滅より五百年ばかり。後世人の。佛說に託して。作れる經なれども、是の說に於ては。梵疑なく梵學の古說を取て。佛說に誣たるにて。梵字の根本を記載せること。斯ばかり。正說なるは有こと無し。(此の經を、佛滅より、五百年ばかり、後世の僞託なりと云こと、第口品に委く論ふを見て知べし)其はまづ。半字滿字と云ことより解むに。此も紛々たる腐說多かる中に。名義集に。悉曇章。是生字根本。說之爲半。所生餘章。文字具足、名之爲滿とある。是ぞ半滿の正說なる。(名義集の今本の此の文に、誤子脫語あり、今は悉曇義の所引によりて正せり、斯て此の文に、悉曇

章と云へるは、字記の初に擧たる、𑖀等の十二字のみを云に非ず、謂ゆる對文をもこめて稱へり、他にも此の例多かり）さて文の義は、𑖀等の韻字。𑖎等の對文は。字を生ずる根本なれども。此を說て半字と爲す。然るは𑖎に。𑖂𑖄𑖊𑖌等の麼多を配せざれば。幾久計許の音聲を爲こと能はず。これ半と號くる由緣なり。（𑖭𑖝𑖡𑖮𑖦𑖧𑖨𑖪も、是に准へて知べし、）所生餘章。文字具足云々とは。字記なる𑖎の初章より次々。半字に麼多を配せて。所生せる十八章は。文字某々に。音聲も具足せる故に。是を滿字と號くる由なり。（或說に、未レ成レ字之畫、謂二之半字一、如二フ丨丶⊥等一是也、已成レ字、是謂二滿字一、如二𑖀等一是也と解たるは、甚じき非說なりかし）然れば。大涅槃經に。半字と云へるは。悉曇字母の。いまだ滿字に製せざる間を云るにて。初の半字としも言へるは。字記なる悉曇章十二字の中の。𑖀𑖂𑖄𑖊𑖌の五字と對文の中の。𑖎𑖭𑖝𑖡𑖮𑖦𑖧𑖨𑖪の九字と。合せて十四は。何れも初位に在る故に。初の半字と言へるなり。偖こそ下文に。是十四音名曰二字本一。とは言へれ。また。經文に。十四音名曰二涅槃一。常故不レ流。無盡金剛之身。と云へるは。謂ゆる四十七言の。三十三言は。世々に轉訛し。國々に於て變替するを。彼十四音は。堅固無動にして。盡ることなく。萬國萬世の常住音なるを。謂ゆる涅槃の常なるに喩へて。字德を讃せる語なり。（然るを玄應が、此の經の音義に、無盡是字、在二紙墨一得レ不レ滅借二此不滅一以譬二常住一、と云へるは誤なり、こは白虎八轉聲にも云へる如く、紙墨に記せる文字は、時ありて滅するを、豈常住としも言むや、不滅としも云むや）さて此の十四音の半字を。父とし母とし。謂ゆる麼多を用ひて。滿字に製りて用ふる時は。何なる事をも。自在に記し得らるゝ故に。初半字爲二根本一。持二諸記論呪術文章一。とは言へるなり。（昔より、斗量の悉曇家有しかど、此眞面目を見得たる者は無りしと聞えて、字記に、悉曇十二字の所に載せる、舊云とある說を始め、悉曇藏にも、十を以て計ふるばかり、半滿また、十四音の異說を擧たるが、惣て愚を極めたる腐說どもなる中に、秀法師云 とて、悉曇十二字、合二長短二聲一爲二一

音、合有六音、次從迦以去有二十五字、五字爲一音、合爲五音、是前爲十一也、次從耶以去九字、三字爲一音、合有三音、足前合爲十四音也、不取魯流四字爲音、明此四字、直是利前音、非是音也と云へるのみぞ、稍その旨を得たる樣なれど、なほ悉曇十二字の撥聲、急聲の兩字を除きて、五字と爲し、魯流等の四字を一字と爲して、此をも入れて、十四字なる事を知ざるは、惜むべし、慧林が此の經の音義には、譯經者呼字母爲半字、胸臆謬說也、云々とて記せるも、愚說にて論ふに足らず、其愚說なる故に、十四音といふ由をも得知らずて、譯經者の謬と爲て、言十四音甚無義理、など云へるは惣じて西戎國は、音聲の修理正からず、其の國人ら、音聲の眞を知らざるの故の愚說には有れど、笑ふに堪たる事なりかし、然れば余が今、此に辯ずる論說は、悉曇學の三千年眼とや言べからむ、蓋これ皆、先師の漢字三音の考、字音假字の格を、傳へ受たる、恩賴に因てなりけり）偖本文に。遇物合成。隨事轉用と云るは。字記なる初章より。十八章まで配音製字は更なり。有ゆる事物の字をさへに。其の例を轉用して一二字に書く類を云へり右に論ふ如く。初半字十四音。これ字本なる上は彼佉離迫窄なる。半字どもを。種々に合せて。諸事物の名の多音なるを。各々一二字に調ふる如き。煩雜なる事は。決めて大梵王の敎授ならず。後人の生才覺に。巧出たる態なること。音聲の道を眞に知り。大梵王それ何物ぞと。窺ひ得たらむ人は。自然に知なむ物ぞ。案ふに。大梵自在天王の傳へたる十四音を。五十音に配合して。古く〱用ひたる趣は決めて此方の假字を用ふると。異無りけむ。猶是事に就ては。論すべき說多かれど。殊に思ふ旨趣もありて。余は云はず。唯少か其端を垂統して。後世に。追考せむ人の出るを俟にこそ。（然るは己れ今云ざらむも、眞に音聲の道に精密なる人は、決めて其由を、考へ出ずは有まじき理の有ればなり、然れば例の、護法者流などは、此論を見てば、言囀ぐ事も有なむ、吾が黨の小子よ、努々拘はること勿れ、遂には此の道理を、發し得る人の出來なむ物ぞ、また其を考へ出なむ人

は必ず此の字原をも考へ出べし、此は余が懸記の一なりかし、〇かく論ひ畢りて、行智に見せたり しかは、彼阿闍梨云く、梵字の正體は、實には、𑖎𑖭𑖝𑖡𑖮𑖦𑖧𑖨𑖪にて、五韻字は本の隨なるべく、其字原は、田より出たる如く見ゆと云へり、速くも一知己を得たり、斯てまた白虎八轉聲を見れば、大日經、また其義釋、生顯論などを引り、經云、𑖀字門、一切諸法本不生、凡最初開口之音、皆有阿聲、離之則無一切言說、伊等聲亦因阿字發起也、謂初下筆、便生形、是名曰命、積聚成◇、四方作田、象形爲𑖀、本唯一點、約持命也、故悉曇𑖀字、亦爲衆字之母、𑖀字遍一切字、若無𑖀字、則字不成、要有𑖀字、若字無頭、即不成字、𑖀爲頭也、如人無頭、即一切支分、皆死、𑖁字等亦如是、若不以𑖀字爲頭、即不成聲、亦不名字也、故𑖀字爲命也と云へるは、由有げなる說なり、然れど阿を始と云ふ說は、信難し、其は日文傳に論へるを見て知べし、さて枝派を流演して、浸に廣く。地に因り人に隨ひて。改變あれども。其の本源を異にせざる趣は。

本記に。五印度外なる。胡國僧伽羅國などを始め。諸國に行はるゝ文字とも。梵字に本源きつゝも。字形用格の異なる事を。多く載たるにて知べし。隣境異國。習謬成訓と云ひ。初に引る字記の文に。邊裔殊俗兼習訛文。語其大較。本源莫異。斯梗概也と云へるは是なり。(行智云く、また字記註文に、胡土境鄰天竺、文字參涉とも云へるに依れば、印度に近き國々にても、梵文の片端を、訛ながらも傳ふると見ゆ、事林廣記卷十に載る、蒙古篆と云ふもの、梵文に似たるは、右の類ならむ、と云へり、實然るべし、斯てまた案ふに、於蘭陀といふ國の文字を始め、西洋の諸國の字どもゝ、決めて其の本は、梵字を傳へて後に、其を種種に、轉用せる物と見えたり、其證をも種々思ひ得たれど、此には所狹き態なれば、今は論はず、是も後人の追考を俟になむ、〇かく記して後に、東森井が須彌山儀銘解を見れば、西域の八線法を、印度に出たる法なりと論ふ因に、今現に、西學家の、西洋文字の法を見るに、其の點例等の法、全く印度の八轉聲の法に傚へり、其度量の法に、是

を以て呼て、幾許足と云が如きも、是を印度に取れり、印度の度法に、足と云こと。宿曜經に、星度を以て、百八足と爲るが如き、以て見べし、故に知る、八線等の數法も、彼の月氏等より傳へたること必せり、と云へり、實に然るべし〕さて中印度特爲ニ詳正ー。辭調和雅。與レ天同レ音。云々と有れど。唐比丘の玄奘が耳にて。天と同音なりとは。聞得けむこと。信かたじ。然るは西戎國は。印度に勝りて。言語音聲の道胡亂しく。梵籍を音譯せる趣の。甚拙く笑ふに堪たる音譯の多ければ。其の天音と同じと思へるは。己が國にて。和雅清亮と心得たる。音聲にこそ有れ。其はた眞の天音によりて律すれば。非ぬ訛音にぞ有りける。〔此は師の漢字三音考、字音假字用格などを見ても、辨ふべし、眞の天音を、相續し傳ふる國は、皇國を除て、大地中に有ことなし、次には印度なれども、上に辨ふる如く後には甚く亂れて、正音を失ひ、次には於蘭陀を始め、西洋の諸國には、正音を交へたる國も有れど、唐戎はむげに、音聲わろき國なりかし〕また玄奘比丘は。中印度の音聲を。かく稱たれど。字記なる。般若菩提が說には。上に引く如く。南印度を。摩醯首羅。大自在天の文を祖承せるにて。正なりとし。中印度をば。兼以ニ龍宮之文ー。有下與ニ南天ー少異上と云て。然しも稱ざるをや〔龍宮の文を兼以ふ、と云ふにつきて、種々腐說あれど、其は彼の古文に、侏離迫窄なる音字を物して、交へ用ふる事を始めたる徒の、人に信を起さしめむと欲して、寓託せる說と聞ゆれば、今論ふに足らず〕さて競超ニ澆俗ー。莫レ守ニ淳風ー。とある　是ぞ總て蕃國の惡風俗なる　抑かの古悉曇十四音の用格を、壞し廣めて。かの邪曲麤獷なる陋聲を聚めて。文字にうつし。其の轉用する例を。作爲したる時代は。何時ならむと云ふこと。今知べきに非ざれども。西域記に。北印度境なる健馱羅國。婆羅覩邏邑の所に。是製ニ聲明論ー波儞尼仙。本生處也。遂古之初。文字繁廣。諸天降レ靈導レ俗。由レ是文籍生焉〔案ずるに、遂古之初、文字繁廣、と云るは誤なり、そは遂古くは、文字たゞ十四音にて、そを配合して、五十言なりしこと、上に委しく論へるが如し。諸天降レ靈とは、梵天の

降りて、世間を創めたる事を文せるなり、）自時厥後。其源泛濫。異道諸仙各製文字。人相祖述。競習所傳。學者虛功。難用詳究。（これぞ彼の古文の、漸に廢れたる如くなりて、邪曲淺陋なる音字の、世に弘まれる所以なりける。）人壽百歲之時、有波儞尼仙。生知博物。愍時澆薄。欲削浮僞。刪定繁猥。（人壽百歲之時、といふ語は、佛祖の言出たる語にて、其在世前後の世を、廣く稱ふ語なるが、此の仙は、決めて佛祖よりは、太く後れて出たる人なり、其は下に論ふを見べし。）遊方問道。遇自在天。遂伸述作之志。自在天曰。盛矣哉。吾當祐汝。仙人受教而退。（寄歸內法傳にも、仙人爲大自在天之所加被。面現三目。時人方信とあり、然れども、大自在天神の三目は、上に辨へたる如く、足日仙人を驗むとして、假に現じたる相にて、本形に非ざれば、此の神に加被せられて、と云こと覺束なし、案ふに、波你尼仙が時は、なほ上世なりし故に、生ながらに、然る形なりけむを、文字を聚むるに就て、緣ある事なれば、大自在天に加被せられてなど、言弘めたる說にぞ有るべき、然れば大自在天に遇て、其の祐を受てと云ことも、託言なるべし、然るは、大自在天王、やがて梵天王あれば、若實に、此の神の祐けむには、さる邪曲迫窄の音を、採用すべきに非ず、必ず十四字の古悉談のみ、傳ふべき物をや）於是研精覃思、捃摭群言。作爲字書。備有千頌。三十二言矣。（これぞ謂ゆる聲明論なる、但し此には、此の論を撰れる事のみ云へれども、此仙が作れる書は、なほ多く、凡て八千頌あり、其を總て、毘伽羅論といひ、譯して聲明記論と云なり、此に謂ゆる千頌を、聲明論といひて、聲明記論中の一種なるを、要とある物なる故に、此には、其事のみ云へりと見えたり、なほ委くは、次節に云を見るべし、）究極今古。總括文言。封以進上。王甚珍異。下令國中。普使傳習。師資傳授盛行當世。故此邑中諸婆羅門。碩學高才。博物強識。とあるに依りて稽ふるに。彼十四音の外なる。麤獷邪曲の音字をも。世に弘まれる隨に聚めて。其の意に。繁猥と覺ゆる事どもを。去りて。大成し。聲明論のみならず。彼の十八章をも。此の仙人が撰たる

なり。(そは次節に引く、玄弉傳にて知らる。殊に聲明論と云も、悉曇音聲を明せる稱にて、彼の十八章の趣に異ならず、其の次節に、註するを見て知るべし。)かくて其撰書を、王に進上せりとある。其の王の名は何と云けむ。是また知るべきに非ねども。今引く文に。此の仙が時を、人壽百歳之時と云ひ。本書此の次の文に。如來去レ世。垂ニ五百年ニする時に。此の仙人が。再生せる事を載たれば。佛在世よりは後。佛去世の五百年よりは。前に出たる人なること。推て察べく。其の王は。疑なく迦膩色迦王なるべし。(此は佛滅後、四百年に出たる王にて、佛法を好み、世友論師、脇比丘など云を始め、五百の蝙蝠僧を集めて、佛祖の眞説たる、薩婆多一切有部、といふを大成せしめ、大毘婆沙論、と云を撰しめたる王なり、委くは、第□□品に註ふを見るべし。)其は今引く文の。上條々に。此の王が事を多く記して。唯に王とばかりも。數所に言るを以て知られたり。(佛祖の滅時は、諸書に妄説を記せれど、實は、第□□品に委く辨ふる如く、西戎にては、周敬王と云しが、三十四年と云ける歳に當り、皇國にては懿德天皇の二十五年、と云ける歳に當れり、其より四百年後は、西戎にては、前漢の武帝と云しが末世に當り、皇國にては、崇神天皇の御世の、始に當れり。)人壽百歳之時とは、佛前佛後をかけて言る語なれども。此の仙人が撰べる。字書の趣を察するに。麤獷淺陋なる音聲を。攟摭したるには。上に引く阿含經の佛説に。梵音の五種を云へるに合はざるなど。彼此うち合せて。佛滅後の人と考へ決めたるなり。(其は阿含の佛説に、梵音をしか贊せる上は、佛祖の當時までは、音聲の正しかりけんこと著きを、此の仙人もし、佛祖より以前に出たる人ならむには、其正音をもて、字書を記すべきに、麤獷淺陋なる音の多きは、佛滅後、漸々に音聲を訛り、かつ異道諸仙ら、各自に古文を變じ、次々に製字せるを、仙人が心だけに、攟摭せる故なること熟々思ひ辨ふべし、護法家の説に勿惑ひそよ。)さて大涅槃經音義に。悉曇章の事を。此乃梵天王聖智所傳。五通神仙。高才術士。廣解略解。凡數百家。各聘ニ智力ニ。廣造ニ聲論名論數論等ニ。終不レ能レ説ニ盡其妙ニ

也。と贊せるは。彼十四音こそ有れ。彼邪曲迫窄なる對文をしも。翻用する例を略說して。彼をも並て贊せる語なるは。西戎比丘なる故に。眞の音聲を知らずて也けり。(なほ次なる聲明論の所にも論ふを、合せ考ふべし。)さて本文に。至於記言書事。各有司存云々とは。印度の諸國王らが。各各史官を置て。言事災祥を具に記載せしむる事にて。此は西戎國も同じ風なり。西域記に。印度記云。□□□□□□□□など云ふことの所々に見たるは。然る記載を採れる說にもや有む。

開蒙誘進。先遵十二章。七歲之後。漸授五明大論。一曰聲明。釋詁訓字。詮目流別。二曰巧明。伎術機關陰陽曆數。三曰醫明。禁呪閑邪。藥石針艾。四曰因明。考定正邪。研覈眞僞。五曰內明。究暢五乘因果妙理。

十二章とは。前節に解たる。悉曇章十二音の韻字を云。(アイウエオの長短十聲に、擬聲急聲の二音を加れて十二音なり。)まづ是より始めて。謂ゆる十八章に及ぶことは。言ふも更なり。但し此は波儞尼仙が。彼十八章を立たる頃よりの。遵方にこそ有れ。舊くは。十四音の半字よりぞ。遵へ始めける。其は大涅槃經の譬喩に。小兒を敎ふる事を云ひて。以愛念故。晝夜慇勤。敎其半字。而不敎誦毘伽羅論。何以故。以其幼稚未堪故。と有にて知られたり。(今傳はる字記の、十八章の如き、煩勞なる事にては、小兒のよく堪る所ならむや、其は古今の老比丘等さへに、生涯勞して功なきほどの、難事なればなり、)さて此の經文に。不敎誦毘伽羅論とある。其の論は。此所に擧たる本文に。一曰聲明云々と言へる書にて。本は大梵王の梵字說にて。謂ゆる異道。十八大經中の一部なるを。(是もと十八大經の中なること下に云べし、)後にかの波儞尼仙が意と。異道諸仙の字說また論義をさへに撫ひ錯へて。作爲せる籍なり。(此の事は、前節に引註せる、西域記の文に、此の仙が聲明論を製れる事を論へる說と、なほ下に論ふ說をも、思ひ合せて辨ふべし、)そは玄奘三藏が傳に。印度梵書。其源無始。無知作者。劫初梵王先說。傳授天人。以梵王之所說故。曰梵書。其言極廣。有百萬頌。卽舊譯云毘伽羅論

(頭注云大涅槃經音義に毘伽羅論外道大論此云無一頌あり、)者是也。(正應云毘耶羯、刺諵)此翻名爲聲明記論。以其廣記諸法能詮故。といひ。(文の意は、印度の梵書は、梵天王の先說して、天界また人間にも、傳授せれど、其の源は、梵王の所作か否ざるか、其作者の實說は、知らず、無始より有し物にや、然れども、梵王の所說なる故に、梵書とは稱ふと云ふ意なり、此はいと質朴なる言ひ狀にて、此の作者は、竺また唐などの人等が、得知る所に非ざるなり、此も決めて、追考する人あらむ、)梵王先說具百萬頌。後帝釋畧爲十萬頌。(毘伽羅論の本は、大梵王の先說と云こと、古傳なるに論無れど、後に帝釋云々と言へるは、後世の牽強譚說なり、其由は、次品の末に、帝釋と云しは何物ぞと、說出むを待て見るべし、)其後北印度。健駄羅國婆羅門。波膩尼仙。又畧爲八千頌。卽今印度現行者是也。とも載し。(略纂に、劫初起、梵王創造一百萬頌聲明、後帝釋復略爲十萬頌、次有迦單沒羅仙、畧爲一萬二千頌、次有波膩尼仙、略爲八千頌、今現行者、唯有後二、前之二論並已湮沒とあり、此に依れば玄奘傳に迦單沒羅仙が事を漏せり、此仙がこと未詳ならず、)また寄歸內法傳に、西方學法と云條に。夫聲明者。梵云攝拕苾駄。卽五明論之一明也。(攝拕是聲、苾駄是明也、)五天俗書。總名毘何羯喇拏。舊云毘伽羅論者訛也。大數有五。同神州之五經也。(此の文に依れば、一論にして、攝拕苾駄とも、毘何羯喇拏とも云ふ兩名あり、然るを、別種の如く解る說は、みな非なり、神州とは、唐戎國を、其の國人なる故に、尊みて稱せるなり、五經とは、詩書易春秋禮記をいふ、)一則創學悉談章。(亦名悉地羅窣覩、)斯乃小學標章之稱。(但以成就吉祥爲目)本有四十九字。共相乘轉成一十八章。總有一萬餘字。合三百餘頌。(凡言一頌、乃有四句、一句八字、總成三十二言、更有小頌大頌、不可具述、)六歲童子學之。六月方了。斯乃相傳。是大自在天所說也。(これ今傳はれる、悉曇字記の旨に異なし、大自在天之所說と云へるは、字記に、摩醯首羅之文、と有るに同じ、玄奘比丘が傳に、上に引く文の次に、又有字體三百頌と云ひ、略纂

にも、右の小註に引たる文の次に、字體根栽聲明論、有三百頌、波膩尼仙所造、と云へるは、共に此一十八章、三百餘頌の事なり、是を以て、今傳はる悉曇法は、古の眞面目に非ず、後に異道諸仙の、謾に製せる文字、また其所傳を集めて、波儞尼仙が撰れる物ぞ、と云ふ考按の、當れることを悟るべし、）二謂蘇呾囉。即是一切聲明之根本經也。譯爲略詮意明。略詮要義。有一千頌。是古博學鴻儒。波儞尼所造也。八歳童子八月誦了。（こは前節に引たる、西域記に、此の仙が聲明論を造れる事を云て、捃摭群言、作爲字書、備有千頌、と云へる書にて、上に引く玄弉が傳、また略纂に、略爲八千頌、とある書を、再略せるなり、其は玄弉傳に、上の小註に引たる、又有字體三百頌、と云へる文の次に、其支分明相助者、復有記論、略經有一千頌といひ、略纂に、略成聲明頌爲一千頌、名爲聲明略本頌、と有は、即この蘇呾囉の事なればなり、偖今引く玄弉傳に、此蘇呾囉を、記論と云へれば、此を聲明記論とも云なり、其は第一の悉談章より、第五荗栗底、蘇呾羅までを、聲明記論と稱へども、中に此蘇呾羅は、聲明の根本經なる故に、此の名を專に負るなり、然れば波你尼仙が、聲明論を、造れりと云ふは、此の一論に限らず、初めの悉談章より、第四論、三棄羅章までに通る言なるを、前節に引く、西域記にも此にも、只此の一論のみを、波儞尼と云へるは、是また專とある論なる故なり、）三謂馱覩章。有一千頌。專明字元。功如上經矣。（字元とあれば、此は悉曇文字を作れる起原の書を、明せる論と聞ゆるに、今傳はらず、何なる字元にか有けむ、最も惜きことなり、）四謂三棄羅章。是荒梗之義。意比田夫創開疇畎。應言三荒章。一名頞悉吒馱覩。一千頌。意明七例。（七例者、一切聲上、皆悉有之、一一聲中、各分三節、謂一言二言多言、總成二十一言也、）曉十羅聲。（十羅聲者、有十種羅字、顯一聲時、便明三世之異、）述二九之韻。（二九韻者、明上中下尊卑彼此之別、言有十八不同、名丁岸哆聲也、）二名文茶。一千頌。（文茶、則合成字體也、）三名鄔拏地。一千頌。（大同上例、而以廣略不等爲異、）此三荒章。十

歳童子。三年勤學。方解其義。（この三乘羅章の條は、文を略して擧たれば、委くは本書を見べし、梵語を活用する趣をも、荒々は、述たり、或書に、頞瑟吒駄覩、唐云八界、是三乘羅章之一分也、と云へり、此を玄奘傳、また略集には、八界論、八百頌といひ、文荼をば、二書に、闡釋迦論、千五百頌と云ひ、鄔拏地をば、二書に、溫那地論、二千五百頌と云へり、其の二書を、内法傳と引合せて見べし、此には然しも、專となき說どもなれば、凡て漏しつ、）五謂苾栗底蘇呾羅。即是前蘇呾囉釋也。詳談衆義。盡寰中之規矩。極天人之軌則。十五童子。五歲方解。若向西方求學問者。要須知此方可習餘。如其不然。空自勞矣。此是學士闍耶昳底所造。其人沒代。于今向三十載矣。とあり。（なほ本書を披見べし、此の外にも、僧俗ともに、讀べき書等の事を、いと委く說たり、）さて右五論を、總て聲明論とも。聲明記論とも稱して。謂ゆる五明大論の第一也。（聲明論は、梵に攝拖苾駄といひ、聲明記論は、梵に毘何羯喇拏とも、毘耶羯剌諵とも毘伽羅とも云ひて、一籍兩名なる由は、既に云りき、）名義集にも。毘伽羅此云字本。河西云。世間文字之根本。典籍音聲之論。宣通四辨。詞讃世法。讃出家法。言詞清雅。義理深邃。雖是外論。而無邪法。故以此論。喩方等經。とあり。（四辨とは、大藏法數に、智度論を引て、一義辨、顯了諸法之義。二法辨、稱說法之名字。三詞辨、能說名之語言。四樂說辨、必須示說前三。と云へり、世法とは、世俗の陋しき所行を云ふこと、印度藏の常なり、出家法とは、此は比丘の出家法を云に非ず、梵志の家を出て、山林に入り、梵行を修するを云へり、無邪法とは、謂ゆる外道等が行ふ如き、奇怪なる法はなし、と云るなり、喩方等經とは、後世謂ゆる大乘經の中に、方等部といふ經々あり、其は大乘家にて、甚く尊む經なる故に、此毘伽羅論をば、佛法外の論なれども、其方等部の經に喩へて尊む由なり、）是れをも合せて考ふるに。此の論は、もと文字の義理を。大梵自在天王の先說して。天人に傳授せるを。梵志の大經中に收めて。人間に誦し傳へたる物なること知られたり。（其は聲明とも、字本とも譯するにて

論なし、然は有れど、本は百萬頌有しを、帝釋の略して、十萬頌に爲せり、と云ふ説は信がたし、此は疑なく、後人の寓説なり、そは事の始め、天界より起れる事は、深幽の旨こそ有れ、然しも言痛からぬ物なるを、次々に附會して、事々しく成もて往ぞ、常の例なる、故涅槃經音義に、毘伽羅論は、外道大論、此云無頌とも云へり、外道の大論と云へるは、本これ彼の十八大經より、抜取たる物なればなり）然れば後世次々に、誣説を牽強して、文字の事のみならず、梵學の教訓をも説交へて。其説の繁猥なりしを、波儞尼仙が意と。其浮僞と覺ゆる事どもを刪定せれど、謂ゆる諸法の。能詮義理深遠と覺ゆる事。また世法を訶責し。出家法を讃せる事などは仍存し置て。遂に八千頌と作たるを。再略めて上に引く寄歸内法傳なる。第一論より。第四論までを撰し。（第五は、波儞尼より、また遙に後の人の撰れる釋書なれば闕らす。）其が中に。第二なる蘇呾囉をば、一切聲明の。根本經と爲むと欲して　殊に力を用ひて。千頌に撰れると所聞たり。斯在ば。玄奘が當時。かの國に現行せる毘伽羅論は。名こそ本の儘なれ。大梵王の傳授せる眞面目には非ざりけり（今論ふ事ども、詳には知がたき趣なるを、前節に引りし、波儞尼が聲明論を製れる事の、西域記なる傳、また此に引く書等の傳など、彼此思ひ合せて、考ふること此の如し）さて右に論ふ如く。廣博なる籍と成れる故に。大涅槃經に。兒輩に堪ずと爲て。此論を教誨せず。まづ十四音の半字を。教ふる由を言へるなり。然るを西域記の記者。玄奘。また内法傳の撰者。義淨などが渡れる頃は。既く其の舊き教方は廢れ世中舉りて。波儞尼仙が論に從けむ故に。二書に右の如くは記せるなり。（また此に因りて案ふるに、彼大般涅槃經と云ふ經は、波儞尼が、聲明論を製れる時よりは、後に作れる經と見えたり、此の事なほ第口品に、此經を論ふ處に云を見べし、然れば、彼の十四音の悉曇章も、其頃まで、なほ別行せりと聞えたり）さて中古より。本朝の佛者ども。謂ゆる梵唄を。聲明と言へれど。此は西戎國の魏と號し世に。曹植と云し者の始たる事にて　此に謂ゆる聲明と。名は同く實は異な

り。混ふべからず。(此に用なき事なれば、唯少か驚かし置のみなり、若委しく知らま欲くは、元亨釋書第二十九巻に、就て見るべし、)○二曰巧明云云。此を名義集に引るには。工巧明とあり。人の種々に思計りて。巧出る伎術なり。機關とは。其工める伎術の機關なり。陰陽とは。占卜の方を言へり。(其は陰陽と云ふことを設けて、總て事物を論する事は、西戎國に限れる事にて、印度に論なき事なれども、西戎國にて、卜筮の法に專と言へば、其の語を借て文せるなり、)暦數とは。天地間に流行の機運を、豫に測量して。知る法を云ふ。(此の事はなほ次節に委く論ふべし、)○三曰醫明云々。此も名義集に引るには。醫方明とあり。(此の事なほ次節に論ふべし、)四曰因明云々は。正道邪道を考へ定め。其眞僞を研覈する由なれば。註に及ばず。○五曰内明云々。五乘と云こと。論疏ども。區々の説あれば。此なるも定かたし。天乘。人乘。佛乘。聲聞乘。菩薩乘など。猶多かり。三藏法數に。乘即運載之義。謂人天等。各以所修之法為乘。運載至其所至之處故。有五乘也

とあり。(なほ法數に、種々の五乘を聚め擧たれば、披見て知るべし、)因は因緣。果は果報也。五乘の徒各々に。其の運載する所の乘に因りて。彼の因緣あれば。此の果報ある事の妙理を。究め暢る由なり。(但し佛法起りて以來こそ、右の如く、種種の乘名も出來つれ、古く梵志學のみなる世には。唯天乘といふ稱のみぞ有りける、其は華嚴五教章に、小乘者、天乘也、謂以五戒十善為乘、運出四趣故、名小乘、とある小乘是にて、佛家より貶して、小と云へるなり、なほ此の事は、次節に註ふべし、斯て後に、佛家の中にて、大乘小乘と云は、また別なり、そは第□品に委く辨ふべし、)さて名義集に。右の五明を標て。此内五明也。外五明者。前四明同。五曰符印とあり。(内とは佛道をいひ、外とは異道を云るなり、下これに倣ふべし、)大藏法數に。大論を引て、内外の五明を標たるに。内五明聲明。醫方。呪術。工巧。因明。外五明。聲明。醫方。呪術。工巧。符印とあり。(内外ともに、此の本文に謂ゆる、内明の一條はなし、)然れば是も。外五明。これ其の本にて。龍猛

論師が。大論を作れる頃は。符印を因明に替て。佛法に取れるを。玄弉が渡れる頃には。何者か既く。本文の如く改めて。醫明と禁呪を。一となし。別に内明と云を立て。五明の數を合せたるにて。彼も此も。此五明論と云もの。本は次節に論ずる。婆羅門の四吠陀論と。毘伽羅論とを。梵志より分派たる。外道輩が竊みて。五明大論と號しを。龍猛論師。そを再竊みて。佛法の物と爲たるなり。惣じて此の論師は。もと竊人なりしけにや。後に佛者と成ても。舊僻を止ず。甚じき竊事ぞ多かる。(そは次々に、論ふを見て知べし、)、

如來理敎。隨レ時得レ解。去レ聖悠遠。正法醇醨。化ニ其見解之心一。獲ニ聞知之悟一。部執峯峙。諍論波騰。異學專門。殊途同レ致。十有八部。各擅ニ鋒鋭一。大小二乘。居止區別。其有宴默思惟。經行住立。定慧悠隔。諠靜良殊。隨ニ其衆居一。各別ニ科防一。無レ云ニ律論經紀一。凡絓ニ是佛經一。講ニ宣一部一。乃免ニ僧知事一。二部加ニ上房資具一。三部差ニ侍者一祗承。四部給淨人役使。五部則行乘ニ象輿一。六部又導從周衛。道德既高。旌命亦異云々。羅レ咎犯レ律。僧中科罰。輕則衆命訶責。次又衆不ニ與語一。重乃衆不ニ共住一者。片擯不レ齒。出ニ一住處一。措レ身無レ所。羇旅艱辛。或返ニ初服一。

沙門法服。唯有ニ三衣。及僧却崎泥縛些那一。三衣裁製。部執不同。或緣有ニ寛狹一。或葉有ニ小大一。僧却崎覆ニ左肩一掩ニ兩腋一。左開右合。長裁過レ腰。泥縛些那。既無ニ帶襻一。其將レ服也。集レ衣爲レ襵。束帶以レ條。襵則諸部各異。色乃黃赤不レ同。

本書に。僧却崎。舊曰ニ僧祇支一訛也。唐言ニ掩腋一。泥縛些那。舊曰ニ涅槃僧一訛也。唐言レ裙とあり。三衣とは。釋氏要覽に。法衣有レ三。一僧伽梨(卽大衣也)二欝多羅僧。(卽七條也)三安陀會(卽五條也)此是三衣也。若呼ニ七條偏衫裙一爲ニ三衣一者悞レ之也と見ゆ。(なほ僧衣のこと、四分律、僧祇律など、其餘の書等にも、委く所見たれど、此には然しも用なき事なる故に、委くは註さず、各々其書を見て知べし、)部執不レ同とは。佛滅後には。異說を立る者。次々に起りて。各々其異に執するを。異部執と云へり。其の部執に依て。三衣の裁製も。不同ありと言るなり。(異部のことは、第十口品に委く註ふを見べし、)寄歸內法傳。衣食所須と云條

にも。一切有部。則兩邊向外雙攝。大衆部則右裙。豎在左邊向內插之。不令其墮。西方婦女著裙。與大衆部無別。上座正量。制亦同斯。但以向外直翻。傍插爲異。腰條之製亦復不殊。尼則准部如僧。全無別體など見えたり。(なほ同條に、唐土の僧衣の法に背へる事をも、何くれと委く論へり、披き見るべし、)

○慧均僧正大乘四論玄義記云。尋十四音本是過去諸佛。通化道俗法門。而爲出世不爲世戯論也。但諸佛去後。梵天議要。三兄弟下欲界。如梵書。伽書。篆書。左右下三行書。二種在天竺國行化。字躰猶是梵字。左右行爲異也。寂弟蒼頡在後。下來漢地。黃帝時飛往海邊。視鳥跡造書字。名篆書也。實是諸佛造十四音字。後諸梵天等。復述作十四音。本化世也。天作十四音。生出世間言辭之本。天竺國風俗學世道學。必以此爲端。是文字樞要也云々。佉樓書者。是佉樓仙人。抄梵文以備要用云々。經云。種々異論。呪術言語文章。皆是佛說者。就應跡作語。釋迦一代爲語。佛在外道後出世。然外道得此善言好語。竝是迦葉等佛已說之也。外道拾得安置己典。其如優婆塞戒經說也。云々(頭注云慧均玄義記云、六十四書者、八卦離成六十四卦、一卦中更開爲八卦、八八六十四也、八卦者伏羲所出、伏羲本是應聲菩薩變化、若於天竺無八卦者、何由傳化於震旦哉、といへり笑ふべし、)

○未た[illegible]名苑云。書有三種。梵書左行。佉樓書右行。蒼頡書下行。明燈抄云。外道計云。摩醯首羅爲法身。毘紐天爲報身。梵王爲化身。□□(智首)法華玄義に。謝居士云。所有文字。皆是過去迦葉等佛所說。外道偸安己典也。云々○新羅國靈妙之寺釋僧不思議大日經供養法疏云々。○慧均云。光音天造四十二字門。○入大乘論云。摩醯首羅天有二種。一毘遮舍摩醯首羅。是第四禪王。二伊舍那摩醯首羅是第六天王。○佛滅後初五百年。小乘教興。大乘經皆移龍宮。後五百年。大乘教興。龍樹菩薩入海。取經所傳。中天竺龍宮文者。即是也。(シッタン藏が說トミユ、)大論云。迦葉阿難往王舍城。結集小乘三藏。文殊彌勒。與阿難等。於鐵圍山。結集摩訶衍藏。○百論云。劫初大梵王。將

七十二字。來化於世間。世間皆不信。故呑七十字。唯留於二字。著口之左右。謂阿之與漏。故外道經初。皆安此二字。言阿無漏有。謂一切諸法不出有無義。故安於經初。以表於吉相。抄とあり〇三慧ハ聞思修ナリ法數二廿三オ〇增一、、、に。以何故名爲婆羅門。盡除愚癡之法名爲梵志。以何故名爲覺。以其覺了愚法慧法故名爲覺。以何等故名爲彼岸。以其從此岸至彼岸。名爲彼岸。能行此法者。然後乃名爲沙門婆羅門。トアリ。〇中含四十呪願ニ通音ハ諸音本トイヘリ〇住心一四十三才ニ。九十六種外道。嘉祥三論玄義ニ心遊道外。故名外道トアリ。〇二十種外道法數四十六廿ウ。十八初オ。ウ。二オ。十七廿六オ。廿七オ。〇悉曇藏ニ引ク須彌四域經云。寶應祥菩薩爲伏義。日光菩薩名女媧也。〇法華云。我此九部法。隨順衆生。說入大乘爲本。卽其證也。〇孃言〇增一力品第三十八二ニ。六師外道の輩が。輸盧比丘尼に降伏せられし事みゆ。七日品に衆多尼犍子と云ことあり。八難品第四十二の一ニ外道六師〇外道(一十三オ、

五十六オ、十五十四オ、廿三十五オ、廿五十二ウ、廿二ウ、廿六七オ、八オ、ウ、廿オ、廿七廿四オ、四十八廿五オ、五十八オ、七十十二オ、七十八一ウ)人肉を以て祠すること三十五ノ十ウ〇外道佛說をヌスム西域三十二ウ〇鬼を使へる婆羅門のことと八十オニあり〇生を殺して天に生すと云外道のこと西域記五十四オ六一ウ〔毘伽羅論廿五十三ウ〕印度記西域記七十二オ。八七オ。國志曰六十年前云々。十十三オ。先志曰十一十三〇西域記七。弗栗恃國の處に。近代有王。號光冑。碩學聰睿。自製聲明論。と云こともあり 同記八十二オニ僧伽法を祖とする外道のことあり。僧伽處ニ引べし。角力の咄をかくべし。同記十一十三ウニ先志曰昔此邑中。有婆羅門。生知博物。學冠時彥。內外典籍究極幽微。歷數玄文云々。作大自在天。婆藪天。那羅延天佛世尊等像。爲座四足云々ケマン一十八オ。二六ウ。廿十オ。廿六二オ。卅二十九ウ。五十九四ウ。七十八ウ。七十二十三ウ〇九十五種外。爲十一宗。法數四十三廿四オ。三十五三オヨリ五ウマデ〇票十七四十三オニ外道裸

身のゆゑあり○外道六師。法數廿七十一ウ。同十二ウ。○凡て佛法に數を立て道を論ふことは數論カヒラ外道の眞似なり。

印度藏志卷之四稿

大壑　平篤胤撰述　男　平田鐵胤　同
孫　同　延胤　同
門人　青山景通　校

○大千世界品上第一

此品凡て五卷の本文は。長阿含世記經を採り。其餘の三阿含に。往々世界の事を記せる說ども。また起世經。起世因本經。樓炭經。立世阿毘曇論などは。世起經の異本異譯なれは。考合せて拔萃し。其腐々しき妄說どもは。總て載せず。されど其の由は。その節々に辨へつ。其意して見べし。

如是我聞。一時佛在舍衛國「祇樹給孤獨園」倶利窟中。與大比丘衆千二百五十人俱。時衆比丘於食後。集講堂上議言。諸賢未曾有也。今此天地何由而成。何由而敗。衆生所居國土云何。爾時如來於閑靜處。天耳徹聽聽如是議。於靜窟起詣講堂坐。知而故問。汝等向者議何等事。諸比丘白佛

言。我等食後議二是天地何由而敗何由而成一。佛言善哉善哉。凡出家者應レ行二二法一。一賢聖默然。二講論法語。集二在講一亦應レ如レ是。諸比丘汝等。欲レ聞二天地成敗衆生所居國邑一耶。諸比丘白レ佛言唯然。願樂欲レ聞。如來說已當レ奉二持之一。

凡て佛經說は。佛在世より纔々に。比丘等。老少口々に誦唱し來れる。前言往行なるを。佛滅後に。各々の部執起りて。諸部に分派し。其れより數百歲後に。其の諸部にて。各々に傳誦せる說法を。始めて記載せる物なるが故に。必その初發に。如是我聞とも。聞如是とも記出る事にて。同事の說法にして。經々互に異同あるも。是由にぞ有りける。(此は富永仲基說に、我者何、後世說者自我也、聞者何、後世說者傳聞也、如是者何、後世說者、傳聞如レ是也、と云へるが如し、此餘に、護法者流の說とも多かれど、悉誣言にて、論するに足らず、尙委くは、第□品より次々に、論ふを見て思ひ辨ふべし、)舍衞國「祇樹給孤獨園」などの事は。下に云を見よ。(第□品第□節の下見べし、)千二百五十人と云へる比止の數。拘はる事なかれ。然るは長阿含經は。篇ごとに必千二百五十人と云へるを。中阿含經には。其數を云ず。(爾に云こと有るときは、千比丘と云へり、)增壹阿含經に。數を云ときは。必大比丘衆五百人。と言へる如く。諸經各々。一定の文法有ればなり。(是また諸經悉く、後世に、各々思ひ〳〵に記載せる物なる、一の證なり、)さて比丘らが。天地の成敗。また衆生の所居たる。國土の斯て在る事を。未曾有なる事に思ひ怪めるは。諸なる事にて。其趣今も見る如く所思ゆ。圓通菩薩が梵曆策進に。夫現住所依の天地を。何と撿撿せざるを。豈學を好むと云べけむや。と言るは。實に然る言なり。(未曾有とは、佛書の常語なり、俗言は、不測と云が如し、未曾て有ず、とかける文字に、泥むべからず、)然るに佛祖が教說は。下に次々論ふ如く。すべて妄誕なり。比丘ども其の由を辨へず。信受奉行せるは憐むべし。(起世經、樓炭經も、此の說法の發端は、此に同じ、然るに、以下缺)

佛告二比丘一。諦聽々々。善思二念之一。當二爲レ汝說一。今此大地。深十六萬八千由旬。其邊無レ際。地止二於水一。

水深三千二十由旬。其邊無レ際。水止ニ於風一。風深六千四十由旬。其邊無レ際。其大海水深八萬四千由旬。其邊無レ際。須彌山王入ニ海水中一。八萬四千由旬。出ニ海水上一。高八萬四千由旬。下根連レ地多闡ニ地分一。其山直上無レ有ニ阿曲一。生ニ種々樹一。樹出ニ衆香一。香徧ニ山林一。多ニ諸賢聖一。大神妙天之所ニ居止一。其山下基純有ニ金沙一。

(頭注云すみの事を外の山々國々の如くうひ〳〵しく云ざるも元より人のよく知れる名なればなり然らば北洲の事をもうひ〳〵しく云ふまじき事なるに此をうひ〳〵しく云るは東西兩洲の事と對にせん爲也〕樓炭經に。佛告ニ比丘一。是地深六百八十萬兪旬。其邊際無レ限。其地立ニ水上一。其水深四百六十萬兪旬。其邊際無レ限。其風持レ水。其風深二百三十萬兪旬。其邊際無レ限。其海深八百四十萬兪旬。其邊際無ニ崖底一。須彌山王入ニ大海水一。八萬四千兪旬。高亦八萬四千兪旬。下狹上稍々廣。上下正平。種々含生類在レ上止。悉滿無ニ空缺處一。諸神亦在レ上止。諸尊復尊天神。悉在レ上居止と言ひ。起世經には。佛告ニ比丘一。此大地厚四十八萬由旬。

邊廣無量。此之大地住ニ於水上一。水住ニ風上一。風依ニ虛空一。此大地下所レ有水聚。彼水聚厚三十六萬由旬。邊廣無量。其須彌山王入ニ海水中一。八萬四千由旬。出ニ海水上一。亦八萬四千由旬。須彌山王其底平正。下根連。其須彌山王於ニ大海中一。下狹上廣。漸々寬大。端直不曲。牢固大身。微妙最極。生ニ種々樹一。其樹鬱茂。出ニ種々香一。其薰遍レ山。多ニ衆聖賢一。最大感勝妙。天神之所ニ住居一と言へり。大地。水。風。海の深さなど二經共に本文と異なり。(此の二經、實は本文の異本なるに、如レ此き異有れば、其餘の經論どもに、異說多きこと、准へて察ふべし、增一阿含經にすら、此の地の厚さ六萬八千由旬、須彌山頂、東西南北、縱廣八萬四千由旬と云へり、況て大乘と云ふ經々に、異說多きこと、云も更なり、)さて須彌山の。海水上に出ると。海水に入るとの由旬數は。本文と二經よく合れど。他の經論には。合ざるが多し。(そは起世因本經、また大論には、四萬二千由旬と云へり、但し增壹阿含には、本文および二經と同く、須彌山出ニ水上一、高八萬四千由旬、入レ水亦深八萬四千由旬とあり、)餘事の

教說には。其の時々の謂ゆる方便にて。異說の出來むこと。有るまじきに非ねど。此等の數量には。決めて異有まじき事なるに。如此き相違ある事は。元これ佛祖が造說にして。其時々。口に任せて。左も右も說出せるを。諸比丘らが。聞取れるまにまに。次々誦し傳へて。其を遙後の世に。各々さかしらをも加へつゝ。記載せる故なること。上にも下にも辨ふが如し。(然れば此の品、また次々の諸品に見ゆる、遠近廣狹淺深などの數量は、さしも論ふに足らざれば、其相違をも逐一には論せず、云はでは有まじき事のみを云ふなり。)須彌山は。大般若經音義に。蘇迷盧山。梵語寶山名。或云須彌山。或云彌樓山。皆是梵音聲轉不正也。正梵音云蘇迷嚧。嚧字轉舌。唐云妙高山。大論云。四寶所成曰妙。出過諸山曰高。或名妙光山。以四色寶。光明各異。照世故とあり。(また倶舍論音義に、蘇迷盧此云妙高山、亦言好光山と見え、海龍王經音義に、安明由山、卽須彌山也、亦言迷樓山、正言蘇迷盧山、此譯言好光山、亦言好高山と云ひ、不思議境界には、修迷留、大寶積に、彌樓山ともあり。)さて立世論地動品に。佛告富樓那比丘。是地界住水界上。是水界住風界上。是風界住於空中。風力上昇。圓轉相持。厚九億六萬由旬。廣十二億三千四百五十由旬。周廻三十六億一萬三百五十由旬。此風上際卽是水界。停上安住。無有散溢。厚四億八萬由旬。廣十二億三千四百五十由旬。周廻三十六億一萬三百五十由旬。此水上際卽是地界。安住不動。厚二億四萬由旬。廣十二億三千四百五十由旬。周廻三十六億一萬三百五十由旬。とあり。此また上に引く書等の。由旬數と。甚く異なり。(なほ大毘婆沙論、倶舍論などの異說は、下に擧るを合せ察べし。)さて此の山の莊嚴。また高さ廣さなどは。佛祖が妄誕なれど。是の山世界の中央に在て。其下根は、大地に連き。其の頂上は。諸尊大神妙天の居止する處。といふ說などは。元より梵志に傳はる違陀論の古說を。其儘に取用たるなり。(其は下文忉利天の章に、委く辨ふるを見て知るべし。)然れば蘇迷盧といふ名も。元より古傳なること著明なり。然れど。妙高。妙光。好高。好光などいふ譯語は信られず。其由

は。此の下品の總論に云ふを見るべし。

須彌山外有二佉陀羅山一。高四萬二千由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所レ成。二山中間有レ水。廣八萬四千由旬。周帀無量。生二諸雜華一。其表有二伊沙陀羅山一。高二萬一千由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所レ成。二山中間有レ水。廣四萬二千由旬。周帀無量。生二諸雜華一。其表有二樹提陀羅山一。高一萬二千由旬。縱廣亦同。其邊廣遠雜色間廁。七寶所レ成。二山中間有レ水。廣二萬一千由旬。周帀無量。生二諸雜華一。其表有二善見山一。高六千由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所レ成。二山中間有レ水。廣一萬二千由旬。周帀無量。生二諸雜華一。其表有二馬祀山一。高三千由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所レ成。二山中間有レ水廣六千由旬。周帀無量。生二諸雜華一。其表有二尼彌陀羅山一。高千二百由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。雜色間廁。七寶所レ成。二山中間有レ水廣。一千二百由旬。周帀無量。生二諸雜華一。其表有二調伏山一。高六百由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。間廁。七寶所レ成。二山中間有レ水。廣六百由旬。周帀無量。生二諸雜華一。其表有二金剛輪山一。高三百由旬。縱廣亦同。其邊廣遠。間廁。七寶所レ成。二山中間有レ水。廣三百由旬。周帀無量。生二諸雜華一。去二是金剛輪山一不レ遠。有二大海水一。

起世經に。須彌山次有レ山。名二佉提羅迦一。其次有レ山。名二伊沙陀羅一。其次有レ山名二遊提陀羅一。其次有レ山名曰二善見一。其次有レ山。名二馬半頭一。其次有レ山。名二尼民陀羅一。其次有レ山。名二毘那耶迦一。其次有レ山。名二斫迦羅一。(此言レ輪也)去二輪圓山一。其間不レ遠。邊有二空地一。青草遍布。卽有二大海一と云ひ。(山々の高、また其山々の中間なる水の廣など、凡て本文に同けれは、其は省きて引たり、)樓炭經に。八重山者。第一山名二阿多利一。高百六十萬里。第二山名二伊沙多一。高百三十四萬里。第三山名二逾安多一。高四十八萬里。第四山名二善見一。高二十四萬里。第五山名二阿波尼一。高十二萬里。第六山名二尼彌多羅一。高四萬四千里。第七山名二維那兒一。高二萬二千里。第八山名二遮加和一。高一萬二千里とあり。㊂佉陀羅山。俱舍論に。竭地洛迦山とあり。(起世經に、佉提羅迦、樓炭經に、阿多利など云ひ、本書に、迦陀羅、迦羅々などあるも、共に音の轉訛なり、)然

して神泰記に。此山上寶樹形。如羯地洛伽木。舊云佉陀羅木。此方名檐木。此山樹形似彼。故以爲名也と云へり。（普光記も同し、また華嚴經に、軻黎羅山と有るを、探玄記に、於此山出佉陀羅木。此云苦鞭木。故以爲名ともあり。）㊂伊沙陀羅山は。俱舍遁麟記に。伊沙馱羅山。此云持軸。謂此山多有諸峯。形如車軸。故以名焉とあり。（俱舍音義も同說なり、樓炭經に、伊沙多、本書に伊沙陀、また伊沙とも有るは、轉訛なり。）㊃樹提陀羅山は。樓炭經に。逾安多。起世經に。遊揵陀羅とある。卽是なり。遊揵を轉訛して。樹提といへり。（また本書に、樹臣とも、樹辰とも作るは、臣辰ともに誤字と見ゆ。）俱舍論音義に。喩健達羅。此云持雙山。言此山峰有二隴道。因以名之と云ひ。普光記に。踰健陀羅。舊云乾陀羅 或由乾陀羅。訛也。此云持雙。此山頂上有二隴道。猶如車迹。山持二迹。故名持雙とあり。（また華嚴音義に、由乾山、大論作由揵陀羅山、由揵雙、陀羅尼持也と云ひ、大涅槃經音義に、由乾陀山、此云持雙也、とも云へり。）㊄善見山は 俱舍論に。

蘇達梨舍那と有りて。其音義に。此云善見。言此山端嚴縟麗。見者皆稱善。則以名焉とあり。（本書世本緣品、冬日寒冷の所に、樹提陀羅山、善見山と、互に錯乱せり、樹提陀羅山、須彌山より第四、善見山は第五なり、同品日光焰熱の所、また閻浮洲品なると、校べ見て知べし。）㊅馬祀山は。本書二所にかく有れど。一所には。馬食山とあり。起世經には。馬半頭と云ひ。樓炭經には。阿波尼と云へり。（また是に依れば、本書三災品に、善見山と有べき所に、阿般尼樓山とあるは、此に有べきを誤りて彼に入れるなり。）此は俱舍論に。頞濕縛羯拏と有て。其音義に。此云馬耳。言此山峯。形如馬耳。因則名之とあり。（本書三災品に、此名あるべき所に、尼隣陀羅山とあるは、尼彌陀羅山の訛語を別に、馬祀山の梵語として、擧たるなり、阿般尼樓とこそ、此に有べけれ。）さて馬半頭。馬耳など云へるは通ゆれど。馬祀馬食など譯せる意は。詳ならず。㊆尼彌陀羅山を。一所には。尼民陀羅ともあり。（起世經もしか作だり、卽樓炭經の尼彌多羅なり。）此云地持山。又魚名也。言 は海中

有レ魚。名ニ底民達羅一。此山峯似ニ彼魚頭一。故復名レ之とあり。㊇調伏山は。本書に三所ともかく有り。此を樓炭經に。維那兒とあり。起世經に。毘那耶迦山と。有るに依て考ふるに。倶舍論には。毘那怛迦山と有て。その音義に。毘那怛迦此云ニ象鼻一。山形似レ彼。故名レ之と云ひ。神泰記に。此云ニ障礙神一。有ニ一鬼神一人形象頭。凡見ニ他勝事一必爲ニ障礙一。山峰似ニ彼神頭一也。とあり　此は謂ゆる歡喜天とも。聖天とも云ふ魅の事にて。然る障礙をなすが故に。諸儀軌に。これを調伏する法多く所見たれば。其の意を得て。調伏と譯せるにや（元金剛輪山は。起世經に。斫迦羅。此云レ輪也、と註し。輪圓山と譯せり。華嚴經音義に。斫迦羅山。正云ニ拘獨羅一。此云ニ輪圍一と云へり。（また名義集衆山篇に、斫迦羅、或云ニ灼羯羅一、又云ニ斫迦羅一、應法師云、此云ニ輪山一、舊云ニ鐵圍一、圍即輪義、譯人義立、とも見えたり、樓炭經に、遮加和とあるは、甚き轉訛なり。）さて須彌山より　此金剛山まで九山。また其山々の中間なる八水を總ねて。九山八海なり。（下に引く立世論も、此の數に同じ、起世經、樓炭經は云ふも更なり、）然るを大毘婆沙論。倶舍論など。凡て諸論には。此に金剛輪山なく。謂ゆる四洲海の外なる。二鐵圍山の一山を擧て。九山八海といふ數を合せ。（そは倶舍論に、九大山者、妙高山王處レ中而住、餘八周匝遶ニ妙高山一、於ニ八山中一、前七名レ内、第七山外有ニ大洲等一、此外復有ニ鐵圍山一、圍ニ一世界一、妙高爲レ初、鐵圍爲レ後、中間有ニ八海一、前七名爲レ内、第八名レ外、と云へるを見て知べし。）此なるをば。須彌山を除きて言ときは。諸書に。七山七海と云へり。（其は西域記に、蘇迷盧山、在ニ大海中一、七山七海環峙環列七金山外、乃鹹海也、と云へるを見べし。）抑阿含の諸經は本なり、諸論は末なり。況て婆沙。倶舍は。作者も著明に知るゝ。最後の世の書なるに。何ぞも。本を捨て末を取れる。と考ふるに。阿含の經々は。左も右も。諸部に誦し來れる隨に。記載せる物なる故に。前後うち合ざる異説おほく。諸論は。後世の論師らが。本經に拘はらず。前後うち符ふべく作れる物なる故に。悉く論部の書には據なりけり。（其は古今の比丘ら、盡く彼の佛胥に繫縛せられて、

諸經說をば、みな佛口より出たる眞說にて阿難らが、其の佛口のまに／＼記せる物、と信じて在れば、彼うち符ざる說の、綻び見えつゝも、其を校正讎黃して、眞說を見るべき物とは思たらず、徒に尊奉して、事實のやごとなき說どもは、凡て俱舍論などには據るなり、知らずやも、彼の論などは、佛說には本づきたれど、各々その論師らが說なりとは、故今は阿含の本經佛說を校合讎黃して、佛說の大千世界を論ずること、前後の說の如し、俱舍論、立世論等の世界說をのみ、見知れる比丘等、呀ること勿れ、）同じ阿含の經なるに、增一七日品に。佛告比丘。須彌山南有大鐵圍山。長八萬四千里。高八萬里。又此山表。有尼彌陀山圍彼山。尼彌陀山。復有山。名佉羅山。去此山復更有山。名伊沙山。去此復更有山。名馬頭山。去此。復更有山。名毘那耶山。次有山名鐵圍。大鐵圍山。鐵圍中間。有八大地獄云々と有り。山名も足らず。其次第も甚く異なり。（かくても比丘らは、其に如來の金口說、と信するにや、）また立世論數量品には。佛告富樓那比丘。是世界。

地形相圍圓。如銅燭盤。如陶家輪。是世界地亦復如是。猶如燭盤邊緣隆起。其鐵圍山亦復如是。譬如燭盤中央聳起。其世界中。有須彌山王。亦復如是。（須彌山、中央に聳え起り、諸山次弟に是を圍繞し、其外邊に鐵圍山の、隆起して、周圍する狀を、まづ云へるなり、）此須彌山。七寶所成。色形可愛。四角端直。譬如工匠善用繩墨所成板柱其形方正。是須彌山亦復如是。（須彌山の形を、方正なりと云こと、上に引く諸經に見えず、此は論あり下に云べし、）半形入水。八萬由旬。半形出水。八萬由旬。其山四邊。各八萬由旬。周廻三十二萬由旬。最裏大海名須彌海。深八萬由旬。廣四萬由旬。一邊長十六萬由旬。周廻六十四萬由旬（須彌山の海水より出ると、海水に入るとの數量、また前節に引たる書どもの說とも、甚く異なり、猶下文に細註せるも、本論は皆大字なれど、見易からむ爲に、細字とせり、）海外有山。名曰乾陀。此山入水四萬由旬。出水亦爾。廣亦如是。（是山一邊長二十四萬由旬、周廻九十六萬由旬、）此山外海亦名由乾陀。深四萬由旬 廣亦如

是。(一邊長三十二萬由旬、周廻百二十八萬由旬。)海外有山。名伊沙陀。入水二萬由旬。出水亦然。廣亦如是。(一邊長三十六萬由旬、周廻一百四十萬由旬)山外有海。亦名伊沙陀。深二萬由旬。廣亦如是。(一邊長四十萬由旬、周廻一百六十萬由旬)海外有山。名訶羅置。入水一萬由旬出水亦爾。其廣亦然。(一邊四十四萬由旬、周廻一百七十六萬由旬。)山外有海。亦名訶羅置。深一萬由旬。廣亦如是。(一邊長四十六萬由旬、周廻一百八十四萬由旬。)海外有山。名修騰婆。入水五千由旬。出水亦爾。其廣亦然。(一邊長四十七萬由旬、周廻一百八十八萬由旬。)山外有海。亦名修騰婆。深五千由旬。廣亦如是。(一邊長四十八萬由旬、周廻一百九十二萬由旬。)海外有山。名阿沙干那。入水二千五百由旬。出水亦然。廣亦如是(一邊長四十八萬五千由旬、周廻一百九十四萬由旬。)山外有海。亦名阿沙干那。深二千五百由旬。廣亦如是。(一邊長四十九萬由旬、周廻一百九十六萬由旬。)海外有山。名毘那多。入水一千二百五十由旬。出水亦然。廣亦如是。(一邊長四十九萬二千五百由旬、周廻一百九十七萬由旬。)山外有海。亦名毘那多。深一千二百五十由旬。廣亦如是。(一邊長四十九萬五千由旬、周廻一百九十八萬由旬。)海外有山、名尼民陀。入水六百二十五由旬。出水亦然。廣亦如是。(一邊長四十九萬六千二百五十由旬、周廻一百九十八萬五千由旬。)山外有海。亦名尼民陀。深六百二十五由旬。廣亦復然。(一邊長四十九萬七千五百由旬、周廻一百九十九萬由旬。)鹹海外有山。名曰鐵圍。入水三百十二旬半。出水亦然。廣亦如是。周廻三十六億一萬三百五十由旬。是義佛說。如是我聞とあり。此は山の次第。其餘も、大かた發智論。大毘婆沙論倶舍論。などの說相に同じ。(大毘婆沙論は、發智論を釋し、倶舍論は、大毘婆沙を、略說せる物なる故に、其說相大かたは同じ趣なり。然れば、發智論は、立世論に本づけりと見ゆ、そはこれ諸論の祖なればなり。)さて彼も此も佛說なりと云ふに。右の如く異なるは、是ぞ後世各々に。如是我聞と稱して。己が向々杜撰を加へたる所以なりける。(立世論は、如是我聞を多く品末に云へ

り、此は阿含、樓炭、起世等の經々よりも、殊に後世なるが故なり。)然るを東森菩薩が學には。右の諸經を專と採らず。此論によりて。測量を合せ。經々論々。かく異說ある事の議に及ざるは。奈何ぞや。(佛說の本たる經說を捨て、末なる論を取むには、其異同を辨明して取捨せる用意を述ずば、有まじき事ならずや。)故考ふるに。此を辨明する時は。佛說悉く破れて。諸經論一部も。佛祖が當時の物ならぬこと。忽に顯れて。其說を張こと能はざる故。と見えたり。(須彌山儀銘解に、正法念處經には、唯六萬山、須彌を圍繞すと說て、七金山の義を明さず、倶舍等には、唯七金山を明して六萬山の事を說ず、而るに立世には、七金山に惣じて一千十六峯有ことを明せり、倶舍等に唯七金山と說くは、其山海の界分差別なるに、約して只七山とし、立世論は、稍詳にして、其の七金山の中の大峯を明し、正法念經は廣く諸天の依報を明すが故に、其大峯別峯、盡く是を擧て、六萬山と稱す、略說の中に、密なる事あり、廣說の中に、闕る所あり、彼是照應して、其詳を得べし、經論に、總じて、此義多し、一端を以て概論し難きこと知べし、と云るは、和會し得たる如く聞ゆれども、此等の事は、然も、有らば有れ經々論々悉く、數量事實に相違あるを何とする。)さて以下缺

即所謂也金剛輪山外。亦有二大海水一圍繞。北岸有二大樹王一。名二菴婆羅一。圍七由旬。高百由旬。枝葉四布五十由旬。北有二天下一。名二欝單越一。其土正方。縱廣一萬由旬。人面亦方。像二彼地形一。

起世經に。須彌山王北面有レ洲。名二欝多囉究留一。其地縱廣十千由旬。四方正等。而彼人面還似二地形一。其究留洲。有二一大樹一。名二菴婆羅一。其本縱廣七由旬。下入二於地一。二十一由旬。出高百由旬。枝葉垂覆五十由旬。と見え。樓炭經に。須彌山王北。有二天下一。名二欝單越一。廣長各四十萬里正四方。有二大樹一。名二銀莖一。圍二百八十里。高四千里。枝葉分布二千里と云ひ。立世四天下品に。爾時比丘白レ佛言。北欝單越。國土若大。佛告二比丘一。北欝單越大。東際長二千由旬。西際二千由旬。南北亦爾。周八千由旬。以二金山城之所一。圍繞。黃金爲レ地。晝夜常明。是欝單越地。有二四種德一。一者平等。(謂平

等者、彼國土中無有坑穽、亦無穴居、又不欹灰、無有高下、亦不泥滑、故名平等。）二者寂靜。（其寂靜者、彼國土中無有師子虎豹熊羆毒蛇蜂蠆能害人者、故名寂靜。）三者淨潔。（其淨潔者、於彼國中、無有死屍死蛇死狗諸不淨物、若彼民人大小便利、地圻受之、受已還合、故名淨潔。）四者無刺。（其無刺者、彼國土中無利刺樹、無臭氣樹、故名無刺。）彼中有草。名曰車毘。其色紺青。形甚可愛。如孔雀頂。觸時柔軟。如迦眞衣。（迦眞衣者、不可染汚、夏冷冬温、）又如阿時那衣。（阿時那衣者、燒之不燃、車毘亦如是、）是車毘草。遍覆其地。四時不凋。長惟四寸。其國諸江八功德水。（倶舍頌疏に）岸渚及底。並布金砂。其水恒流。無有增減。金提堅固。永無崩落。佛說如是。とあり。（分註せる語ども、悉く舊よりの註に非ず、本文なれど、例の紙葉を約めむとて、私に分註せるなり、）是謂ゆる須彌四洲の一なり。大寶積經音義に。四洲者。爾雅云。凡水中可居曰洲者。妙高山四面。大海中。各有一洲。東曰勝身。南曰贍部。西曰牛貨。北曰高勝也とあり。此洲をまた北倶盧洲とも云ふ。大般若經音義に。北倶盧洲。古名鬱單越。或名鬱怛曜。或云鬱多羅拘樓。或名郁多羅鳩留。皆梵語輕重不同也。正梵音。云嗢呾羅矩嚕此譯爲高勝也と云ひ。大涅槃經音義に。北倶盧洲。此云高上。地四方正等。人面如之。定壽千歲。如天快樂。佛法不聞。とも。北鬱單越。此云勝所作。謂彼國人所作。皆無我所。勝餘三洲也。とも言へり。（また因本經音義に、鬱多羅究留、梵語北洲名也、或云此鬱單、在妙高北大海之中、其正方四海之中、此其一也、雜阿毘曇心論音義に、鬱單曰、或言鬱怛羅越、正言鬱怛羅究留、此譯云高上作、謂高上於餘方、鳩留此云作、亦云姓、未詳何義立名也、起世經音義に、鬱單越、或言鬱拘樓、正言鬱怛羅究瑠、此譯云高上作、鳩留此云作、亦云姓也、六波羅密多經音義、北拘盧洲、梵語此云高勝、在大鹹海中、其形正方、定壽千歲、無中大者、常受快樂、次於諸天、故言高勝也、など云るをも合せ見て知べし、）さて。阿含。起世。樓炭。因本の四經ともに。鬱單越洲品と。贍部洲

品は。別に立たれど。次なる東西兩洲の事は。諸品の因々に記して。其品々はなし。此は由縁ある事なり。南瞻部洲の章に。論ふを見るべし。

○須彌山王北。有天下。名鬱單越。其土正方。縱廣一萬由旬。人面亦方。像彼地形。有大樹王。名菴婆羅。圍七由旬。高百由旬。枝葉四布五十由旬。於三(四カ)天下。其上最勝。故名欝單越。

景通云。右須彌山王北云々。より以下の文は。此章の本文を。後に書改められたるなり。然れど。注解までは。いまだ正しあへ給はざりしと見えて。本文に符はざる所あり。故しばらく。舊の儘に記せり。但し紛らはしきが爲に。今は目易く頭に○を加へ。一文字下くして。本章の末に記せるなり。下の東西南の三洲も是に同じ。

東岸有大樹王。名伽藍浮。圍七由旬。高百由旬。枝葉四布五十由旬。東有天下。名弗于逮。其土正圓。縱廣九十由旬。人面亦同。像彼地形。

起世經に。須彌山王東面有洲。名弗婆毘提訶。其地縱廣九千由旬。圓如滿月。彼間人面。還似地形。其毘提訶洲。有一大樹。名迦曇婆。其本縱廣七由旬。下入於地。二十一由旬。出高百由旬。枝葉垂覆五十由旬と見え。樓炭經に。須彌山王東有天下。名弗于逮。廣長各三十六萬里。周帀正圓。有大樹。名條莖。圍二百八十里。高四千里。枝葉分布二千里。と言ひ。立世四天下品に。爾時比丘白佛言。東弗毘提。地形若大。佛告比丘。東弗毘提。大廣二千三百三十三由旬。周廻七千由旬。地形團圓。猶如滿月。とあり。弗于逮は。須彌山の東に在る由にて。東勝身洲と云ふ。大般若經音義に。東勝身洲。古云弗于逮。或云弗婆提。或云毘提呵。皆梵語輕重不同也。正梵音。云補囉嚩尾禰賀。義譯爲身勝。阿毘曇論云。以彼洲人身形殊勝。體無諸疾。量長八肘故。以爲名也とあり。(雜阿毘曇心論音義に、弗婆提、或言弗毘提訶、或云逋利婆鼻提賀、逋利婆此云前、鼻提賀此云離體と云ひ、六波羅密多經音義に、東勝身洲、在妙高山東面、其形圓如滿月、亦在鹹海中、於四洲中、此洲人身形殊勝、故名勝身洲也華嚴經音義に、毘提訶、毘此云勝提訶曰身也、又毘云種、提訶與也、など見えたり、)○須彌山

王東有天下。名弗于逮。其土正圓。縱廣九千由旬。人面亦圓像彼地形。有大樹王。名伽藍浮。圍七由旬。高百由旬。枝葉四布五十由旬。
西岸有大樹王。名曰斤提。圍七由旬。高百由旬。枝葉四布五十由旬。西有天下。名俱耶尼。其土形如半月。縱廣八千由旬。人面亦爾像彼地形。
起世經に。須彌山王西面有洲。名瞿陀尼。其地縱廣八千由旬。形如半月。彼諸人面。還似地形。其瞿陀尼洲。有一大樹。名鎭頭迦。其本縱廣七由旬。下入於地。二十一由旬。出高百由旬。枝葉垂覆五十由旬。而彼樹下有一石牛。高一由旬。以此因緣故。名瞿陀尼洲と見え。樓炭經に。須彌山王西有天下。名俱耶尼。廣長各三十二萬里。如半月形。有大樹。名斤蔞。圍二百八十里。高四千里。枝葉分布二千里。其樹下有石牛。高四十里と言ひ。立世四天下品に。爾時比丘白佛言。西瞿耶尼。其形若大。佛告比丘。西瞿耶尼。大廣二千三百三十三由旬。周廻七千由旬。地形團圓云々とあり。俱耶尼は。大般若經音義に。西牛貨洲。古云瞿伽尼。或云俱耶尼。或云瞿陀尼。皆梵音楚夏不同也。正梵云過嚩抳。此義翻爲牛貨。阿毘曇論說。以彼多牛。用牛貨易。故以爲名とあり。(また雜阿毘曇心論に、瞿陀尼瞿此云牛、陀尼此云取與、以彼多牛、用牛市易、如此間用錢帛等、或云有石牛也と見ゆ、起世經音義も、同說にて、瞿此譯云牛、陀尼夜、此云取與とあり、六波羅密多經音義に、西牛貨洲、在須彌山西面、形如半月、亦在鹹海中、彼州市買用牛貨易、故名牛貨也大涅槃經音義に、瞿陀尼此云牛貨洲也、其土無錢、以牛爲貨易也、など言へり、)須彌山王西有天下。名俱耶尼。其土形如半月。縱廣八千由旬。人面亦爾。像彼地形。有大樹王。名曰斤提。圍七由旬。高百由旬。枝葉四布五十由旬。
南岸有大樹王。名曰閻浮。圍七由旬。高百由旬。枝葉四布五十由旬。南有天下。名閻浮提。名閻浮者下有金山。高二十由旬。因閻浮樹生。故得名閻浮金。其土南狹北廣。縱廣七千由旬。人面亦爾。像此地形。
起世經に。須彌山王南有洲。名閻浮提。其地縱

廣七千由旬。北廣南狹如車廂。其中人面還似地形。此閻浮提有一大樹。名曰閻浮。其本縱廣七由旬。下入於地二十一由旬。出高百由旬。枝葉垂覆五十由旬。而彼樹下有閻浮檀金。聚高二十由旬。以金從於閻浮樹下出生。是故名爲閻浮檀。閻浮檀金。因此得名と見え。樓炭經に。須彌山王南有天下。名閻浮利。廣長各二十八萬里。南狹北廣。有大樹。名閻浮。圍二百八十里。高四十里。枝葉分布二千里。とあり。閻浮樹。なほ本書に。其果如甕。其味如蜜。樹有五大觚。四面四觚。上有一觚。其東觚果。乾闥婆所食。其南觚者七國人所食。(この七國は、拘樓國、拘羅婆、毘提、善毘提、曼陀、婆羅、婆利と云ひて、其は□□□、)其西觚果海蟲所食。其北觚果禽獸所食。其上觚果者。星宿天所食。など云へり。(立世論閻浮提品に、佛說比丘、有樹名曰閻浮、因樹立名、此樹生閻浮地北邊、在尼民陀羅河南岸、此樹株本正洲中央、從樹中央、取東西角、並一千由旬、形容可愛、枝葉相覆、久住不彫、風雨不侵、高百由旬、樹身徑刺、廣五百由旬、圍十五由旬、其枝横出五十由旬、其果熟時甘美無比、果大如甕、其核大小、猶如世間閻浮子核、其上有鳥形如大殿、獼猴之形如六十歲大象、是兩鳥獸恒食其果、南枝果子多落閻浮地、北枝果子多落河中、爲魚所食、樹根悉是金砂所覆、春雨不濕、夏則不熱、冬則無寒、有乾達婆、又夜叉神、依樹下住、とも云へり、)閻浮提は。大般若經音義に。南瞻部洲。瞻部梵語此大地之總名也。古譯或名譫浮。或名琰浮。或名閻浮提。皆梵語訛轉也。正梵音云贍謨。阿毘曇論說云。有瞻部樹。生此洲北邊。泥民陁羅河南岸。正當洲之中心。北臨水上。於樹下水底南岸下。有瞻部黃金。古名閻浮檀金。樹因金而得名。洲因樹而立號。故名瞻部也とあり。(雜阿毘曇心論音義に、閻浮提、或言剡浮洲、提者略也、應言提鞞波、此云洲と見ゆ、起世經音義も同じ、六波羅密多經音義にも、此大地之總名也、四回一大鹹海圍繞故、名爲洲、北廣南狹陋、其形三角と云ひ、また閻浮此云勝金、とも云へり、)是の洲のこと。本經閻浮提洲品を始め。樓炭經。起世經。立世論など。其の外の經論

どもにも。最精く所見たるが。其の名こそ元より有つれ。事は悉く妄誕なれば。總ては載さず。(但し下節に擧る事ども、、凡て妄説には有れど、人の普ねく云ふ事にし有れば、一通り知らずば有まじき事なる故に、載せるなり、)さて北洲を方とし。東洲を半月とし。西洲を圓とし。南洲を三角とせるは。地水火風。四大の形を表せるなり。(此は東森菩薩も、早く方は地の三摩耶形なり、圓は水の三摩耶形なり、三角は火の三摩耶形なり、半月は風の三摩耶形なり、三摩耶をまた三摩提と云ふ、梵語なり、此云二等持一、離二昏沈掉擧一曰レ等、住二一境性一曰レ持、と云へるが如し、)さて閻浮と云ふ名の。古名なる事は。何にして知ると云ふに。上に引く音義に。瞻部と云が。正梵音なり。と云へるに就て案ふに。西域記に。中印度境。瞻波國。周四千餘里。國大都城北背二殑伽河一。周四十餘里。在昔劫初人物。伊始野居穴處。未レ知二宮室一。後有二天女一。降二迹人中一。遊二殑伽河一濯レ流。感レ靈有レ娠。生二四子一焉。分二瞻部洲一各擅二區宇一。建レ都築レ邑封レ疆畫レ界。此則一子之國都。瞻部洲諸城之始也。(頭注云また東印度境三摩呾國の所に、去レ城不レ遠有二窣堵波一東有摩訶瞻波國卽此云二林邑一是也、とあり、)と。有るにて所レ知たり。(天女の、河に遊び靈に感じて、四子を生る事、すこふる鴨御祖、玉依毘賣命の、賀茂川に遊びて、神靈に感じ、若雷命を生る故事に似たり、)此は在昔と云より末は。疑なく右傳説にて。謂ゆる印度記などの説と見ゆれば。瞻部と云ふ洲名は。もと此瞻波國に天降れる。天女の四子を分封せる故に。一國の名の。一洲に及べるにぞ有ける。(此は例を云はば、皇國にも一郷の名を一郡に及ぼし、再その一郡の名を、一國に及ぼせる例、いかほども有り、今も其類と知るべし、)故是以て。此國を瞻部洲。諸城之始也。とは云へり。然れば瞻部は。瞻波の轉語なり。語義は詳ならねど。彼の天降れる天女の名にもや有けむ。(人名を、國名に爲たること多かり、)然るを佛祖。その古説に翻案して。閻浮樹。閻浮金などの妄説を造れり。(凡て佛祖が妄説の趣は、上にも云へる如く、大かた本よりの古説を、翻案せる物なるが、此餘にも、地名に就ての翻案は、なほ多く、そは西域記に載せる、僧

伽羅國の因縁は、獅子ちふ獸が、人の女をとりて、交通して、生せたる男子の、開ける國なる故に、僧伽羅と號たりと云ふ古說なるを、僧伽羅と云ひし商人が五百の商人と共に、過ちて、五百の羅刹鬼女の島に至れるを、福智ある者にて、天馬の救を受て、免れ歸りしかば、羅刹鬼女、いと淑美しき形となりて、僧伽羅が國に至り、其の國王に、僧伽羅が不情を訴ふるに、王その美姿に惑ひて、僧伽羅が、そを鬼女なりと諫むるを用ひず、其の女を納れて妻とす、然るに彼の鬼女夜に入りて、本の住所に還り、五百の鬼女を將て來り、王宮なる人どもを皆食ひ盡せり、此に於て、其國の王臣共に、僧伽羅が福智を仰ぎて、其國を讓れる故に、其國の號を、僧伽羅と云よしにて、其時の天馬は、今の我身是なり、其の鬼女は某の女なり、其王は、今の某なりと腐しく、翻案の妄說せること、阿含に見えたるをも思ふべし、然る類ひなほ多かり、此の事西域記にも、二事並べて、委く載せるが、玄奘が心にも、其翻案をば悟りつと見えて、前なる故事を本に記し、後なる故事をば、佛法所記則云々、と次に載せり、西域記は、總て印度記などの類、よる書の有て、記せる書と見ゆれば、前なる故事も、さる記より採りて、載せるに心有らむ、）然は有れど。其の身これ中印度の產にして。其在世中に。印度を巡行せる迹を。四阿含中の事實に據りて考ふるに。南印度邊は。常に巡行せれど。西印度邊をば。廣くも巡らず。況て東北二印度などは。其の道の口邊のみ見たる故に。五印度を總ては。委く知らず。（此は四阿含中に、一時佛在二某國某所一云々とある文に、普ねく心を著て讀見べし、大抵は、中南、二印度の國々なるをや、）また其世の人も。なほ世の古かりしかは。東北邊などは。能く知れる人なきを幸として。人も知らず。實は吾もえ知らざる。東北邊の事をば。彼の天眼をもて見知れる由にて。謾に大言の妄言を放ち出せる物なり。（其は雪山と、阿耨達池の方位を違へるにて、東北邊を知ざること炳焉く、西印度の極を、大海なりと云るにて、彼の邊を知さる事も灼然かり、この事は、第一品阿耨達池の下に、委く論へれば、今更に言はず、）偖かく妄說せる本を。何と

考ふるに。金七十論に。如天上北鬱單越。非證量比量所知。信聖語故乃可得知。名聖言者。如梵天所説四違陀。と有り。(文の意は、梵天界、忉利天界など、天上のこと、北鬱、單越、倶盧の事などは、人の證量比量を以て、知る所には非ず、四違陀典に傳はる、梵天の聖語を信ずる故にこそ、知ことを得つれ、と言へるなり、)然れば。大地の中央なる處を。蘇迷盧山と稱し。其の高頂を。忉利天上と云こと。其北方に。倶盧てふ國ありと云ことは。元より四違陀論中に在て。其は彼天降れる梵天の。婆羅門に傳へたる古語なること。著明なり。是をもて。舊く梵志ら。其國は。蘇迷盧山の南に在てふ意をもて。南瞻部と稱し。北倶盧と。南北相對して語り來しを。佛祖その古説を採用せる物から。本説の隨にては。梵志説に勝がたき故に。東西兩洲の妄説をば。作り加へたる物なり。(もし實に東西兩洲の説も古傳ならむには、金七十論に引く、四違陀の説に、此の兩洲の事をも、云ずは得有るましき物なるに、此の事二所に有れど、東西兩洲の事なし、心を平にして味ふべし。)かくて瞻部と云を。大樹の名とし。其に對せむか爲に。北倶盧にも。菴婆羅ちふ大樹の名を作り。妄説の東西兩洲にも。伽藍浮。斤提二大樹の名を設けて。其國々の事ども。仰山に妄説せる物なり。故是を記載すれども。除て論せず。妄説といふ一言をもて。是を弊せり。其は立世論に。東西兩洲の事を説畢れる所に。佛爲諸比丘。説此因縁。是故得知と云へる文に。心を著て見よ。南北兩洲の説は。元より傳へ來つる故に。人も知たれど。東西兩洲の説は。佛説によりて。始めて知ことを得たり。と云へる文意なるをや。(もし妄説ながらも、知らまほしく思はむ人は、長阿含、世記經、起世經、樓炭經ともに、南閻浮提品、北鬱單越品ありて、共にいと委しく見えたり、就て見べし、立世阿毘曇論、大毘婆妙論もしかり、斯て右の經論ども、何れも南北兩洲の品々あれど、東西兩洲の品々なきは、自然に虚説の隱れて、實事の顯はるゝ一端とも云ふべくなり、)さて立世論閻浮提品に。上の小註に。文略して引如く。閻浮樹の事を載して。如是之事。云何知耶。昔王舍城。有

兩比丘具神通力。從佛口聞閻浮樹相。共至樹所。見樹果熟墮地。從其蔕孔。授手至臂。其最長指猶不至核。牽手而出。爲果所染。手臂皆赤。其果香氣能染人心。是二比丘還王舍城。說如上事。時有一人。名曰長脛。姓拘利氏。是人神通。若行水中。前脚未沒。後脚已移。若行草上。草雖未羅便得移步。是長脛人。卽白佛言。我得至閻浮樹所不。佛云得至。是人發此。向北而去。行度七山。（七山とは、謂ゆる小黑、大黑、多犛牛、日光、銀山、香水、金邊の七山をいふ。）登金邊山。向北遠望。唯見黑暗。怖畏而反。佛問。汝至閻浮樹不。答言不至。佛問汝何所見。長脛答曰。唯覩黑闇。佛言。此黑闇色。卽閻浮樹。是人更向北。重度七山。又度六大國土。（六大國土とは一鳩留、二高臘鞞三毘提訶、四摩訶毘提訶、五鬱多羅曼陀、六沙熙摩羅野をいふ、此論別、六大國品とて、此國々の事に委しく記せり。）又度七大樹林。林間有河。度是七河。又度阿摩羅林。及訶梨勒林。（この七大樹林、また七河などの事は、下に注ふべし。）乃至閻浮樹南枝。從南枝上。行至北枝。俯窺見下水相。與常水異。澄清洞徹都無障翳。是人觀已。試手攀樹枝。脚履水。是脚至水。如石卽沒。云何如此。是水最輕。若以彼水。投此間水。如酥如油。浮在水上。若以此水。投於彼水。卽沈如石。（本の重濁なるは浮び、輕清なるは、沈む理なる故に、此說を成せり、）是人取閻浮一果子。還王舍城。奉上如來。佛受此果。破爲多片。施諸大衆。果汁染於佛手。爾時佛以此手。擊於山石。至今赤色如昔不異。濕亦不燥。掌跡分明。因昔分果爲片々。故名此石爲片々巖。云々と言へるは。閻浮樹のこと。佛說に幻化られし徒ならでは。人の信ざる說なるを。强て信せしめむと欲て。此論の撰者が。殊に作れる妄誕なり。其は如是之事。云何知耶と云ひ。至今云々と結べる文意を以て知られたり。（總てこの阿毘曇論は、世起經、樓炭經、起世經などの說法を信ざる人に、信しめむと、彼經々なる說どもの、前後合ざる事をば、前後を合せ、絕て人の信じと思ふ說をば、其說迹を造り出し、甚く事實に合ざる說法をは、論ひ直

しもして。彼經々よりは、後に作れる書なり、是をもて、凡ては、彼經々の異本とも云べき物なるを、論とは題せり、此は護法家こそ知らざらめ、眞の活眼をもて書見む人は、初の一二品を見てば、自づからに知なむ物ぞ、なほ次々にも論ふを見て辨ふべし。）南岸を。本に北岸とあるは誤りなり。今意を以て此を改む。本籍に。名閻浮者。下有金山。高二十由旬。因閻浮樹生。故得名。爲閻閻浮。閻浮樹其果如簞。其味如蜜。樹有五大觚。四面四觚上有一觚。其東果乾達婆所食。其南觚者。七國人所食。其西觚果。海蟲所食。其北觚果者禽獸所食。其上觚果者。星宿天所食とも。見ゆ。（また大論に、閻浮樹名、其林茂盛、此樹於林中最大、提名爲洲此洲上、有此樹林、林中有河、底有金砂、名閻浮檀金、以閻浮樹故名爲閻浮洲、此洲有五百小洲、圍繞、通名閻浮提と見え、名義集に或云、閻浮果汁、點物成金因流入河染石爲金、其色赤黃、兼帶紫焔、とも見えたり。）西域記に。南瞻部洲。舊曰閻浮提洲。又曰剡浮洲訛也。翻爲穢樹。と見えたり。○さ

て此閻浮提（頭注云此閻浮提地、南北二萬一千由旬東西七千由旬とあり。）と云ふ號は、此全地球をいふ號なる由。古人も言ひ。誠に。然も有べき事と所思ゆるに。七千由旬とあるは。本朝の里數に積りて。大抵七萬六千七百八十一里三十町ほどに當れば。甚く大に過たり。（そは大地は圓躰にて、其周廻は、大抵一萬□里ほど有り徑は、三千□百里ほどなればなり。）是に依て。他書を考ふるに。俱舍論に。南瞻部洲。北廣南陜三邊量等。其相如車。南邊唯廣三踰繕那半。三邊各有二千踰繕那とあり。然れば三邊は。六萬五千八百十二里三十一町に當り。一邊は四里十六町に當る故に。惣ては。六萬五千八百十七里二十一町あり。是れにても猶大に過たり。故阿含經中の佛說に。閻浮提洲の事を說たる所々を考ふるに。先其北方の事を云へるに。閻浮樹邊に空地有りて。其空地に。各々縱廣五十由旬なる。三十七叢林あり。是を過て。また空地ありて。其空地中に。各々縱廣五十由旬なる大池。四あり。是を過て大海水あり。鬱禪山。金壁山など云ふ大山を過て。雪山ありと。印度地

の山川に及べり。然るに彼雪山より北。謂ゆる葱嶺より。西北東に跨りて。胡國韃地を始め。印度には。數倍勝れる大國ども多く。北に向ひて行々けば。西洋人の謂ゆる。止部里亞の大地に至り。其北の際は。謂ゆる冰海にて。北極に近きに。佛祖謂ゆる。閻浮樹といふ大樹王は更なり。三十七の大叢林。また四の大池ある由も聞えず。然れば餘かの三洲の說は。更にも云ず。閻浮提洲の說も。凡て妄說なること炳く。閻浮洲の事として。說る事どもは。佛祖の聞知れる限にて。悉印度限の事にぞ有りける。(よく心を著て見るべし、阿含中に、唐土を始め、諸外國の事を云へる說法は、一所だに有ことなきは、大地世界を、たゞ印度限の事と思ひて諸國界の、印度より外に、百千倍なるが多在ことを、佛祖の時まで、彼國人も知らざりしかばなり、阿含の外なる經論どもに、唐土を始め、外國の事等も且々見えたれど、其は互に往來して、外に國在る事を聞知れる後に、作れる經論どもなればなり、)かく印度より外なる。地界の連ける國國をさへに。知ざりしかば。其說たる須彌世界。

四大洲の說は更なり。謂ゆる大千世界の說も。妄作なること論ひなし。(其は我も知らず、當世の人も、普ねく大地の有狀を知ざるを幸として、廣太無邊の幻說を發し、當世の人を欺ける也けり、そは當世の慕何人どもこそ、信用ひて語り繼つれ、後世までを得しも詎かめや、かく言はゞ、護法者らは、佛祖が時とは、世界の狀甚く變れり、なども言むか、然も有らば、佛は三世了達の智有り、とか云へば、何とて後の變をば、說遺さゞりけむ、然る懸記は、阿含中に所見なし、阿毘曇論に、後世に大地圓躰の說を發する者有む、と云ことを、懸記せる由見えたるに就て、其を論ひ擧て、地球の說を破り、須彌世界の說を立て、護法喧する者も、今世に在て、衆人の目に、須彌山、閻浮樹などを仰見れども、見ざるを以て疑ふなれど、其は凡眼なる故に、見ざるにこそ有れ、佛の天眼を以て見て、彼山彼樹の有る事を見知りて說たるを、凡心を以て、疑ひ議するは癡人なり、など云とか、然も有らば、なほ大天眼を得たり、といふ人の出て、佛祖の說みな妄なり、我か得たる大天眼を以

て見るに、此六合の外は、大琉璃丸にて包み、其外に、平坦廣大無邊なる、七寶の空地あり、其空地に、無數の大廣池ありて、一一の池に、無量の世界あり、一一の世界、悉く此世界の如く、大琉璃丸にて包めりなど、なほ果しなき妄說を作り出むに、信ざる人の有れば、それ凡眼なる故ぞ、見よ〳〵彼處に見ゆるをや。と指さし云ひて、護法者と諍はむに、護法者はた何とか爲らむ、横に誣たる威を權用ふるか、彼謂ゆる三百の杵を、心に突れて、氣死するかの二ツを出じとぞ思ふ、されば戎人も、賢しき倫は、六合の外は存して論せずといひ、猶賢きは、論せざるに非ず、知ざる也とぞ言へりける、知ざる事を知良して作れる、佛祖の妄說の實に、合はざること是を以て知るべし。）さて此縱廣七千由旬と云こと。大地の縱廣に合はず。閻浮提と稱せる。印度の縱廣には。猶合はざるに就て。また考ふるに。鬱單越を一萬由旬と立て。次次に千由旬づゝを減したるにて。例の佛口風の。方量もなき由旬數にそ有りける。（凡て佛經の僻として、事物の數量をば言ひ合する事にて、上に云る三十七叢林を、各々五十由旬といひ、四ツの池をもしか言ひ、此餘何にても數を合せて云ふぞ僻なる、池林ともに、實ならむには、大小なくては、叶はざる事なるをや、なほ佛經の數量の、拘はるまじき由を云はゞ、阿含中に、老人の年を云ること、五所ばかり有るを、いつも百二十歲とあるは、最も可笑き事ならずや、唯一人、百二十六才と云へる人あり、佛祖の生涯、をり〳〵また、其前後にも出たる老人の、異人同歲なるべき謂有むやも是等の數を合はせたるは、中にも慕何慕何しき事ならずや。）さて佛說に。閻浮提と云へるは。印度の事と聞ゆるに就て。猶案へば。阿含の佛說に。印度の國號を云へること見えず。是にて益々閻浮とは。印度限の號に。佛祖の設たる號なること著明なり。斯在ば。佛祖の出たる當時は。印度。身毒。賢豆など云號は無りしを。後に次々にさる號は付たるにて。前品に論へる如く。本は婆羅門國といふ號なるを、例の婆羅門を誣破る。佛祖の趣意なれば。彼に勝むとして。閻浮提といふ號も。因緣も妄作し。猶足ずまに。餘の三洲。また大千

世界の因縁をも。妄說せる物と知られたり。(但し此は、昔より圓內なる人の、曾て知ず、言ざる事なれば、世には、五百矛を受るごと、心を痛めて猶護法言を、發せむとする人も有べけれど、彼等に拘はる論ひならず、本朝の古道を學びて、圓外に出たる、神活眼の人に諭ふる說ぞ、此後彼等、いかに强言すとも、努々とり合ふまじくこそ)さて印度の實に縱廣は。西域記(頭注云平野廣臣云、西域記に、周九萬里とある、には印度の九萬里なれば、本朝の三十六町に直しては、五千里なるべし、其は印度の一里は、二町なればなり)に。周九萬里とあるは。六町を一里とせる。唐土の里數なるべけれど。此を本朝の三十六町を一里とする里數に直して。一萬五千里なれば。是れにても甚く大に過きたること。前品に論へるか如し。(されど、閻浮提にも、印度にも、北廣く南陜しと有るは、然すがに閻浮提、やかて印度なる證語の殘れるなりけり、後世の佛者ども、此を別にせる說どもは、凡て信るに足らず)

大海水底。有二婆竭龍王宮一。縱廣八萬由旬。宮牆七重。七重欄楯。七重羅網。七重行樹。周帀嚴飾。皆七寶成。須彌山王。與二佉陀羅山一二山中間。有二難陀跋難陀二龍王宮一。各々縱廣六十由旬。宮牆嚴飾。亦復如レ是。

大樓炭經に。佛告二比丘一。大海底。須彌山北。有二婆竭龍王宮一。廣長八萬由旬。以二七寶一作。常有二五百鬼神守一レ門。大海北邊。有二難頭和難龍王宮一。廣長各二萬八千里。以二七寶一作ると見え。(婆竭龍王宮の門に、五百鬼神ありて守ると云こと、本經に漏たり、案ずるに、難頭和難龍王とて、一龍王なるを、本經に二龍王に分たり、是より後に出たる經經、中、增一、雜阿含を始め、みな二龍王とせり、下に擧る起世經は更なり)起世經に。佛告二比丘一。大海水下。有二娑伽羅龍王宮殿一。縱廣正等八萬由旬。七寶所成。須彌山王。佉低羅山。二山中間。復有二難陀優波難陀。二大龍王宮殿一。縱廣六千由旬。略說如レ上とあり。(餘は大抵本經に同くて、說相は却りて委曲なり、)婆竭龍王は。法華經音義に。娑伽羅。亦云二婆竭羅一。鹹海名也と見ゆ。(名義集もおなじ)然れば。大海に住とふ意を以て號しなり。

龍は摩訶般若經音義に。那伽此譯云龍。或云象。以其大力故喩焉。とあり。(名義集も同じ、行智云く、彼國にても、長を那我と云は、本朝と同語なり、然れば龍を那伽といふも、長き物ゆゑにや、と云へり、然も有べし、)難陀跋難陀二龍は。法華經新註に。難陀此云歡喜。跋此云善。此兄弟二龍王。常護摩提國。雨澤以時。國無飢年。缾沙王。年爲一會以報。百姓聞皆歡喜。從此得名。卽目連所降者也。とあり。(名義集も、文句を引て、同說なり、目連が此二龍を降せりと云ふ事實は、增一阿含口品に見えて、本より妄說なり、其由は、佛像初成品に、委しく辨ふるを見べし、)四阿含を始め。諸經論に。其名高き龍王なるが。皆兄弟二龍なる由の說なり。(然れど佛祖が本說は、一龍王にて有しなり、そは上に引く、樓炭經にて知るべし、)さて龍を。海底に住む物と云は。印度の古說にも有べけれども。此は論ひあり。然るは。物に各々住處あり。丘谷池澤などこそ。龍の住所なれ。海水は龍の住所に非ず。然るに彼國籍ともに。海底をば。彼が掌る所とせるは。最古より誤り來れるにて。此は海神はも。和邇神にませば。彼神の奇しき稜威あること。其狀また宮殿の事など。且且も見聞傳へて。眞龍とは。錯たりけむ。(海底に和邇神ありて、其を大海津見神と申し、常に人形に坐まし、嚴然たる宮殿もあること、神典に委しく見えたり、)其は鰐の類にも。種々有りて。中には龍にいと能類たるも在ればなり。神農本經に。鮀と云へる物など是なり。故後には。此を鼉龍とも言へり。李時珍が綱目に。陳藏器曰。鼉形如龍。聲甚可畏。長一丈者。能吐氣成雲致雨。既是龍類。時珍案鼉字。象其頭腹足尾之形。故名と云へり。我が神典に。彌尋熊鰐など見えて。丈長くいと猛きも有るをこめて。和邇とは言へり。印度藏に。海龍王と云へるは。其らを見ての說なり。(然れど阿含に、難陀跋難陀二龍王、其形最大繞須彌山七帀、頭猶山頂、尾在海中、など云へるは、餘りなる妄誕なり、)

大海北岸有一大樹。名究羅睒摩。其樹下圍七由旬。高百由旬。枝葉四布五十由旬。其樹東有卵生龍王宮卵生金翅鳥宮。其宮各々縱廣六千由旬。宮牆七重。七

重欄楯。七重羅網。七重行樹。周帀校飾。以七寶成。此卵生鳥。食卵生龍。自在隨意。其樹南有胎生龍王宮。胎生金翅鳥宮。其宮各々如上。此胎生鳥。食胎生龍。自在隨意。其樹西有濕生龍王宮。濕生金翅鳥宮。其宮各々如上。此濕生鳥。食濕生龍。自在隨意。其樹北有化生龍王宮。化生金翅鳥宮。其宮各々如上。此化生鳥。食化生龍。自在隨意唯諸大龍王。爲金翅鳥。不所搏食。

大樓炭經に。佛告比丘。難頭和難龍王北有大樹。名爲拘梨睒。莖圍遶二百八十里。高四千里。枝葉分布二千里。其樹東有卵生種金翅鳥宮。廣長二十四萬里。七寶所成。其樹南。有水生種金翅鳥宮。其宮如上。其樹西。有胎生種金翅鳥宮。其宮如上。其樹北。有化生種金翅鳥宮。其宮如上。卵生金翅鳥。取卵生龍食之。水生金翅鳥取水生龍食之。胎生金翅鳥取胎生龍食之。化生金翅鳥取化生龍食之と見え。(四生の龍王宮の事はなし。)起世經に。佛告比丘。大海之北。爲諸龍王。及一切金翅鳥王故。生一大樹。名曰居吒奢摩睺。(此言鹿聚。)其樹根本周七由旬。下入地中二十由旬。其身高一百由旬。抜葉偏覆五十由旬。樹外園苑。縱廣正等五百由旬。云々と有りて。四種生龍鳥の說は本經に同じ。(但し例の飾文多きことは、云も更なり、)究羅睒摩を。究羅睒摩羅ともあり。大樓炭經に。拘梨睒。起世經に。居吒奢摩睺。此言鹿聚。とある是なり。起世因本經音義に。拘吒賖摩利。或云居吒奢摩睺。大樹名也。是諸金翅鳥所棲。薄處於此採取龍食。隨自己類。居住此樹四面也。と有りて。譯語はなし。(此言鹿聚、といふ類の譯語は、其本經の分註より外に所見なし、)金翅鳥は。大般若經音義に。揭路茶梵語。虜質不妙也。正梵音云蘗嚕拏。古云迦婁羅。卽金翅鳥也。或名妙翅鳥。發智論音義に。妙翅鳥。以形色爲名也。背及兩翼。皆作金色。亦名金翅鳥。卽梵語。名迦婁羅王也。案起世因本經云。金翅鳥與龍具四生。所謂卵胎濕化。然卵生者力小。只食卵生龍。化生者威力最大。能食四生。欲食龍之時。以兩翅扇海水。開衍得諸龍。吞在嗉中。龍尙未死。亦名此鳥。爲大嗉鳥也。飛至居吒奢摩梨樹上。然後吐出啄而食之。

被レ啄之時。出二大怖畏之聲一。極受二苦楚一。此鳥亦名二龍怨一。其背兩翼悉皆金色。故以爲レ名也と云ひ。(名義集にも、文句云、迦樓羅此云二金翅一、翅翮金色、兩翅相去三百三十六萬里、頸有二如意珠一、以レ龍爲レ食、肇云金翅鳥神とあり、菩薩處胎經に、第一大鳥不レ過二金翅鳥一、頭尾相去八千由旬、高下亦爾、若其飛時、從二一須彌一至二一須彌一、終不二中止一、とも見えたり、)華嚴經音義に。迦樓羅或云二揭路荼一。此云二食吐悲苦聲一。謂此鳥凡取二得龍一。先内二嗉中一。後吐食レ之。其龍猶活。此時楚痛。出二悲苦聲一。或云二大嗉頂鳥一。謂此鳥常貯二龍於嗉内一。其項盆麤也。舊云二金翅妙翅一。且就レ狀名。非二敵對翻一。然其翅有二種々寶色一。非二唯金一也と云へり。(なほ餘の音義どもに、皆因レ形因レ事立レ名也、八部鬼神中之一部也、有二大神力一、とも見えたり、)卵生。胎生。濕生。化生を。龍鳥の四生と云ふよし。また龍を捉りて食ふ狀など。本經また。樓炭。起世にも。委しく見えたり。(但し此四生のこと、佛祖が新發明說の如く、諸書に記し有れど、此は元より、然る差別おのづからに有りて、誰もしり、佛祖が發明と云ふにも足らざる事なるをや、)金翅鳥に喰れざる。諸大龍王の名。本經に。娑竭。難陀。跋難陀。伊那婆羅。提頭賴吒。善見。阿盧。迦拘羅。迦毘羅。阿波羅。迦菟。瞿迦嵬。阿耨達。善住。優睒迦波頭。得叉迦など。十六龍の名見えたり。(樓炭、起世の二經は、共に十二龍の名ありて、其名は、三經互に異同あり、なほ諸經論に、龍王の名いと多かり、中にも正法念處經に多く、殊に、其說委しけれど、皆妄說と知べし、)さて此龍鳥の事、かく註しては有れど。妄說なること云も更なり。華嚴經に此鳥所レ扇之風。若入二人眼一失レ明。故不レ來二人間一也と說りと作れるは。佛祖獨のみ。見知れる由の說なれど。人間に見知れる物の無きは更なり。舊より。古說にも聞えざる物なる故に。佛祖が忘誕の尾を結ぶと。また然る忘說をば放てる也けり。(法苑珠林に、莊周が寓言せる大鵬といふ鳥の事を引て、其を金翅鳥の事と爲たるは、笑ふに堪たる附會なりかし、)立世論四天下品に。佛告二比丘一。東南二大洲中間。有二迦樓羅洲一。南西二大洲中間。有二迦樓羅洲一。西北二大洲中間。有二迦樓羅

洲。北東二大洲中間。有迦樓羅洲。是鳥洲者。其圍各々一千由旬。洲形團圓一切皆是深浮留林。迦樓羅鳥住。在林中。洲外水下。竝龍住處。（本文また樓炭、起世の如く、唯一所にのみ鳥王宮あるが事足らぬ狀なる故に、此作者の心と迦樓羅四洲の說をば、作り出たるなり、）迦樓羅鳥有四種生。諸龍亦皆有四種生。化生迦樓羅。能食四種龍。濕生迦樓羅。除化生龍。能食三種。卵生迦樓羅。食後二種。胎生迦樓羅。食後一種。其鳥食時。雨翅扇水。水開五十由旬。捉龍還上樹食。殘骨狼籍。是故四洲。恒有臭氣。（迦樓羅鳥の、龍を捉食ふ趣は、大かた上の諸經に同けれど、四洲に臭氣ありといふ說はめづらし、若くはこれ譯者眞諦が攙入にて、彼龍骨とふ藥品の事などに、附會せむとの態には非ざるか、此論に、眞諦が攙入文の多きこと、次品に云ふを見べし、）東南二大洲。中間之迦樓羅洲。有樹名曲深浮留。形相可愛。枝葉繁密。久住不彫。風雨不入。如世精巧裝飾華鬘。及衆寶耳璫。亦如傘蓋。高下相覆。高百由旬。枝葉四布徑百由旬。其樹下本。徑五由旬。周

圍十五由旬。迦樓羅王。名鞞那低耶。居是樹上。（本文および、引たる經等には、宮殿とあるを、此論には其說なく、其樹をやがて自然の舍屋なして、相覆ふ狀に文作せる、作者が文の巧を見べし、樹名を異にせるも、即文の巧なり、其は下文にて知べし、）其大龍王。名摩那斯。出浮顯現。是時鳥王即取此龍。安樹枝上。而是龍王自性本大。更復變化。能令身長。遍滿樹上。龍身重故。樹爲羅曲。爾時鳥王覺是事已。仍放此龍。作是思惟。是摩那斯。壞我住處。是時鳥王起悔恨心。退一處住。默念憂惱。爾時龍王變天童子。以天金寶莊嚴臂手。天冠耳璫。衆寶瓔珞。以飾其身。往鳥王所。而作是言。汝有何事。憂惱困苦。默然獨住。鳥王答曰。摩那斯龍壞我住處。天童子言。汝更取龍。作飮食不。損汝住處。尙復憂惱。龍失眷屬。其苦云何。汝若更復取龍。住處決當不立。於是龍鳥二王共立誓願。不相損害。永爲朋友。爲是因緣故。名此樹爲曲深浮留。（摩那斯龍王は、名義集に、此云大身。或云大意。或云大力、とあり此龍王が手段、いと面白し、然

れば龍をのみ食とせる迦樓羅鳥王、此後は、物食はずなりぬるにや、また此計は、四鳥洲の中に、何れの洲なるか、又は四洲みな斯在しか、作者は何どて、心著ざりけむ、）是四天下。及四鳥洲。其地最大。是故今說其一一洲。八洲圍繞。牛洲。羊洲。椰子洲。寶洲。神洲。猴洲。象洲。女洲。是義佛說。如是我聞と云へるは。上の佛祖が說相の。いと拙作なるを。覆はむと。彼や眞。此や實と躊らふ間に。此の巧なる說を信受させむと。此論の作者が。例の作瞞たる。是も妄誕にぞ有ける。過其邊空地。有三十七叢林。各々縱廣五千由旬。過是復有空地。其空地中有四華池。各々縱廣五十由旬。過是空地。有大海水。去海不遠。有山名鬱禪山。過此不遠。有山名金壁山。有八萬巖窟。八萬象王止此窟中。過此山已而有雪山。縱廣五百由旬。深五百由旬。東西入海。

其邊とは。閻浮樹の邊を云へり。三十七叢林。四華池などの事は。本書に。盡く其樹の名。また華の名をも記せれど。煩ければ。其數を計へて。かく約め記しつ。（樓炭經、起世經の趣きも、大抵これに同じ。）過是空地云々は。起世經に。彼林池の事を說畢りて。其次有海。名烏禪那迦。廣十二由旬。其次有山。名烏禪伽羅。過烏禪伽羅山。有山曰金脇。此山中有八萬窟。八萬龍象在中居住。過金脇山有山。名曰雪山。高五百由旬。廣厚亦爾。彼山。四角有四金峯。挺出各高二十由旬。と云ひ。樓炭經にも。林池の事をいひ終て。過此空地。其空地有海。名鬱禪。從東西流入大海。鬱禪北有山。名鬱禪茄。過鬱禪茄山。復有山。名須桓那鉢。其山有八萬窟。八萬象在中止。過須桓那鉢山。有山名冬王。高四千里と言へり。大抵本文に同じ。（烏禪那迦、鬱禪茄と云へるは、卽鬱禪山を云ひ、金脇、須桓那鉢と云へるは、卽金壁山をいひ、冬王山と云へるは、雪山を云へり、さて本書は更なり、今引く二經も、此の山々の美麗なる趣をも、例の仰山に說記せれど、其はまた例の如く採らず。）然るに立世阿毘曇論に。是閻浮樹外有二林。形如半月。圍繞此樹。內名阿黎勒。外名阿摩勒。阿摩勒林南復有七林七河。一一林。一一河。各々廣五十由旬。東西達海。

林河相次。互相間錯。七林七河所覆。七百由旬。最後林南有六大國。其最南國、名曰高流。(七林の樹名を、盡く擧て、其形狀をも說き、六大國の名も皆有て、其國風、また其國、往昔の妄誕故事をも、委しく記せれど、皆漏しつ其はみな例の妄說なればなり)佛爲諸比丘。說是六大國次第因緣。故得知と云ひ。(七林云々ト云フ注コ、ニ入ル)また恒河北有七山。一名周羅迦羅山。高廣一伽浮多半。二名摩訶迦羅山。高廣三伽浮多。三名罹訶那山。高廣一由旬半。四名修羅婆訶山。高廣三由旬。五名雞羅婆山。高廣六由旬。六名乾駄摩駄山。高廣十二由旬。七名修槃那般婆山。高廣二十由旬。是山於秋月天晴不雨時。最放光明。復有諸人。近雪山住。四月比高平地會。互相招呼。往觀天上。至摩訶迦羅山頂。仰觀北面。遙見彼山光明照曜。因相謂曰。是須彌山。我今已見天上。(この文に依るときは、周羅迦羅山、摩訶迦羅山、などは、雪山の近きに在る山と聞えたり、然れば、此七山の次第は、本文また上に引たる文どもの、閻浮樹邊より云へる、山海林池などの次第とは異にして、雪山より、北方を云へる次第なり、思ひ紛ふべからず、)是修槃那般婆山北邊。復有大池。長五十由旬。廣十由旬。其山有巖。長五十由旬。廣十由旬。是中殿堂其數不一。象王等之所住處。云々と云るは。本文また上に引く。二經の說ども甚く異なり。然れど。修槃那般婆山とは。本文に謂ゆる。金壁山の梵語と聞ゆれば。大旨は違ふことなし。(そは金壁山を、樓炭經に、須桓那林とあるが同語と聞え、かつ巖ありて、象王の住所と云をも思ふべし、)さて本文に。雪山の東西を。海に入ると言へるは。佛祖この邊の地理を知ざりし故なり。然れば其より以北の說も。妄なること。准へて知べく。天眼の妄なる事をも辨ふべし。(佛祖が、僅に印度內の地理をさへに知ざりしこと、旣に前節の註、また初品第口節の註に委しく論へれば、今更に云はず、)然るに佛國暦象編に。甚く此天眼を信として。前節の註に引たる。長脛人の。閻浮樹を見て。其果子を採り來れりと云說。また此に引く諸人等が。雪山に近づき。大黑山の項に至りて。金壁山の光明を見たる。と云へる說をも

舉て。今世幸有ニ精製望遠鏡一。齎持以至ニ蝦夷之北一。而從ニ高山一窺ニ其北一則必當レ得レ覩ニ金邊之光明一。及閻浮提之相一。若進ニ於蝦夷一。至ニ于北溟一而窺レ之。則益可矣。(以下論云中從ニ摩訶迦羅山一。得ニ見ニ金邊山光明一。準知。其地勢頗高而、北極出地大率當レ及ニ五十餘度一。故與ニ蝦夷北邊一、其地勢寢應レ均矣、極北雖ニ幽渺一、若下其有レ光一明者上。謂レ可レ得レ窺ニ見其事一者。據レ之故也、)不肖若不レ得レ遂ニ此舉一者。請海内同志佛子。的窺ニ得是實徵一而。闡ニ海内之惑一。以宜ニ暢佛乘一。則護法莫レ大レ焉。想金邊山。距ニ北極一也必不レ遠矣。而閻浮樹者。在ニ于極辰之北一。千二百由旬一也。若夫親得ニ此實徵一。則種々邪說一時氷消。我焉好レ奇。惟法是苟矣耳。と云へるは。實に近世傑出の護法者と稱ふべし。(爭で疾く、此舉を遂しめて、其年頃の惑を、氷消せしめむ由もがな、)然は有れど。是より前に。論ニ西洋精器。不レ足レ憑。といふ條ありて。望遠鏡を始め。其餘の諸精器を。盡く廢せるに。今その望遠鏡を齎持して。金邊山の光明。また閻浮樹を窺はむと希へるは。如何ぞや。然るは。彼望遠鏡をもて。其山其樹を窺ひ得べくは。日月星辰の遠近大小をも。窺ひ得べき物をや。(風に聞く此菩薩、今は七十に垂むとすとか、然らば曆象編を作れる頃は、稍老して在けるか、最も心得がたき事なり、)此菩薩。口を開けば。極めて世の天學家を愚弄し。彼天眼を言揚て。測量家の世眼を。譏誹せる中に。吾法。得ニ天眼神境等神通一。以見ニ其實一者之外。出ニ於臆想情量一者。致ニ弗レ取也如レ敎而解。如レ解而行。如レ行而證。六通無礙。無ニ毫所レ惑。是名ニ眞習道之人一。遠見ニ萬劫之前一。猶如ニ今日一。其見ニ萬劫之後一亦然。而不下爲ニ山壁所一障。徹ニ視無窮天地一。猶如レ眡ニ掌菓一。非ニ如レ是人之言一。不レ足レ爲レ據也。碌々庸人。不レ自揣ニ其分一。測ニ荒唐之事一。筆以惑レ人。輕窕之士競騁焉。苟存ニ意於道一者。豈不レ務而闘ニ乎哉。など云ひ。(是また文を甚く切めて抄せり、曆象編全部五卷、數百葉なるも、大抵は、此類なる大言にて、其要たる所は、僅に二三十葉には過ざるべし、其數十葉も、悉く非說なること、下に次々論ふを見て知るべし、)殊に眼智。と云ふ篇をも立て。諸經論を牽き。天眼と肉眼との差別を。甚言痛く說たり。

世の測量生ら。其を見て。口惜げには見ゆる物から。少か天說をのみ論じ。佛經論の博大なる由に聞悸して。其天眼を。何なる眼とも得探ねず。鼻を啜りて默居るを。傍より見るに堪ねば。今一彈指して。其天眼をうち潰してむ。其は先上に云如く。天眼と云ことゝ。佛祖が時より。遙前なりし。古梵志の。大仙人と成れる倫は。彼梵天子を出て。未遠からざる故に。然る天眼を得たるも在りつと聞ゆれど。(此は我が神世の神達に、奇靈なる態の種々有りしが、神世を過て、人世となりても、なほ上古の人には、今人の思議すべからぬ、靈異の有けるに、准へても辨ふべし)佛祖その天眼を得たり。と云は妄誕にて。其在世中に。天眼を得つる樣に示せし事ども。總て幻法をもて。然は眎たるにて。實の天眼をば。不得しなり。其由。いと近き一事をもて諭さむに。大毘婆沙論に。契經說。若胎是男。依母右脇向背蹲坐。若胎是女。依母左脇向腹蹲坐。得天眼。者覩此差別。依經而記。と云る說あり。(此は第百四十七卷の二葉に見えたり、此論に、契經說、經說など云へるは、皆佛祖が眞說經を云へり、文義は、佛の天眼を以て觀たる說に、男子の母胎に在ときは、其背に向ひ、右脇に倚りて蹲り坐し、女子の母胎に在ときは、其腹に向ひ、左脇に倚て蹲まり坐す、天眼を得ずては、此差別を視こと能はず、此は浮たる說に非ず、如來の眞經に依りて云ふ說ぞ、と云へる意なり)今案ずるに。此天眼說。甚く違へり。其は人子の母胎内に在るとき。男にまれ女にまれ。蹲坐する物に非ず。頭を下に向けて。逆さまに屈み在る物なり。此は皇朝の先哲。及び西洋の古賢等。また我が黨の者も。正しく其實を撿して。知り定たる說なるが。其は有識の人耳ならず。亦子を揚る老嫗までも。今は甚能く知れる事なり。(皇國西洋既に然る上は、印度の胎子、また豈然ざらむや、此は人子のみならず、草木の實も、また其理を一にして、其仁の核中に在をみれば、其根は反りて、上に向たり、何國の草木か然らざらむ、然れば、何國の胎兒か然らざらむ、熟思ふべし)世の愚老婦すら。能く知れる。僅々たる胎兒の容をだに。得視ざる眼を以て。爭か天地世界を徹視

する事を得む。然れば是一事を以て。佛祖が天眼說の。總て妄なる事を。まづ辨ふべし。(然るを礙礙たる菩薩が、其天眼說を首張して、其を眞の知道と稱し、漫に荒唐の大言を放ちて、衆を惑さむと欲るを、苟くも道に意を存する者の、豈務めて是を闢かざらめや。)なほ上に引く。菩薩が說中に。佛祖が神通を稱して。遠見二萬劫之前一。猶如二今日一。其見二萬劫之後一。亦然と云へる。もし此說の如くは。今此印度藏志を撰ぶこと。佛祖始めて。佛法を唱へしより以來。その道に。斯ばかりの大厄は有ること無れば。何も。後三千年の期に當りて。我が道法に。さる厄有りとは言遺ざりけむ。此懸記の無き上は。萬劫の後を見ること。猶今日の如し。と云ふ說も立がたし。是の說立ざる上は。遠く萬劫の前を見ること。猶今日の如しと云ふは。殊に妄說なること言ふも更なり。

所三以閻浮地。名二閻浮一者。下有二金山一。高二十由旬。因二閻浮樹生一故。得三名爲二閻浮金一。閻浮樹其果如レ簞。(飲食之器也)。其味如二蜜樹一。有二五大觚一。四面四觚上有二一觚一。其上觚果者。星宿天所レ食。其東觚果者。乾闥婆所レ食。其西觚果者。海蟲所レ食。其北觚果者。禽獸所レ食。其南觚果者。七國人所レ食。「一曰拘樓國、二曰拘羅婆、三名二毘提一、四名二善毘提一、五名二曼陀一、六名二婆羅一、七名二婆梨一」七大國北有二七大黑山一。「一曰裸土、二曰白鵠、三曰守宮、四者仙山、五者高山、六者禪山、七者土山」此七黑山上。有二七婆羅門仙人一。此七仙人住處。一名二善帝一。二名二善光一。三名二守宮一。四名二仙人一。五者護宮。六者伽那々。七者增益。

樓炭經に。其閻浮利樹下有レ山。皆以二七寶一作レ之。高八百里。周帀亦八百里。其樹高四千里。周帀二千里。圍五百五十里。根深八百四十里。閻浮樹實。譬如二大瓶一。其味甜如レ蜜。其色白如二酥肥一。閻浮利大樹北。有二七重山一。七重樹一。有二七婆羅門仙人精舍一。といひ。

世起經には。閻浮樹果。譬如二摩伽陀國一斛之甕一。摘二其果一時。汁隨流出。色白如レ乳味。甜如レ蜜。閻浮樹果隨二所生一。有二五分利益一。謂東南西方上下二方。東分生者。諸揵闥婆。皆共食レ之。南分生者。有二七大聚落人民一食。「謂一不正呌、二呌喚、三不正體、四賢、五善賢、六牢、七勝。」於二七種大聚

落中ニ。有ニ七黑山一。「所レ謂一偏相、二ハ搏、三ハ小栗、四ハ何髮、五ハ百偏頭、六ハ能勝、七ハ最勝」彼ノ七山中。有ニ七梵仙所居之窟一。「一ハ善眼、二ハ善賢、三ハ小、四ハ百偏頭、五ハ爛物池、六ハ黑入、七ハ增長、」西ニ分生者。金翅鳥等所ニ共食一レ之。上ハ分生者。虛空夜叉皆共食レ之。下ハ分生者。海中諸蟲皆共食レ之。とあり。（高姓の人々にも異なく尊重せらるゝ事としも成ぬるは最も歎息しき事なりかし。）さて凡茲四姓と云より末は聞ゆる儘の文なれば註するに及ばず。（表紙に）

音義廿六ノ十九オニ婆伽婆此云ニ世尊一トアリ。曆象三ノ三十二ウニ彼ノ土ノ沙濕加ニ善星比丘一善ニ星曆一者多シ矣トアリ○增一醉象品ニ閻浮里地東西廣七千由旬。南北長二萬一千由旬地形似レ車。瞿耶尼縱廣三十二萬里。地形如ニ半月一。弗于逮縱廣三十六萬里。地形正ニ鬱單越縱廣四十萬里。地形如ニ月滿一云々。苦樂品第廿九ナリ。七品ノ二ニモ云々乃至千世界ヲ二千世界此名ニ中千世界一乃至三千世界此名ニ三千世界一○妄想ニヨリテ世間生ズ「衆生ノ妄想ナリ」法數ノ八三ウ○八功德水廿五四オ○轉輪王七寶ノ順次相違住心七五十オ妙ナリ○夢ノコト住心冠注八廿五丁ウラニ委シ○輪王七寶法論卅ノ十一ウ○法數十六ノ十二オ四輪王ノコトアリ又十二ウ又四主ノコトノ同丁○標二八ウ五十四ウ十五オタゞ七寶ノコト法數卅ノ十三ウマタ十四ウ○七種受胎法數卅ノ二十三ウ○楞嚴世界法數十二ノ廿五ウ

印度藏志卷之五稿

大壑　平篤胤撰述　男　平田銕胤　同
孫　同　延胤　同
門人　青山景通　校

〇大千世界品第二

其山上有二阿耨達池一。縦廣五十由旬。其水清冷。七寶砌壘。七重欄楯。七重羅網。七重行樹。種々異色。七寶合成。池東有二恒伽河一。從二牛口一出。從二五百河一入二于東海一。池南有二新頭河一。從二師子口一出。從二五百河一入二于南海一。池西有二婆叉河一。從二馬口一出。從二五百河一入二于西海一。池北有二斯陀河一。從二象口一出。從二五百河一入二于北海一。阿耨達宮有二五柱堂一。龍王止レ中。

起世經に。雪山頂中有二阿耨達池一。阿耨達多龍王。在レ中居住。縦廣五十由旬。其水涼冷。池東有二恒伽河一。從二象口一出。流入二東海一。池南有二辛頭河一。從二牛口一出。流二入南海一。池西有二博叉河一。從二馬口一出。流入二西海一。池北有二斯陀河一。從二師子口一出。流入二北海一と云ひ。（今此に引漏せる事も、本文に同じ、たゞ其の水の出る獸口は、互に異なり、）樓炭經に。冬王山上有レ水。名二阿耨達一。廣長二千里。其水涼冷。輭美且清。其龍王宮在二其水中一。阿耨達池東有二大江一。流入二東海一。阿耨達池南有二大江一。名二和叉一。流入二南海一。阿耨達池西有二大江一。名二信陀一。流入二西海一。阿耨達池北有二大江一。名二斯頭一。流入二北海一とあり。（此の經も、此に引ざる文は、本文に大抵同じけれど、獸口より水の出る由を云ず、また河の名も互にかはり、かつ東江の名を漏せり、）

阿耨達池は。諸書に。阿耨達正梵音。云二阿那婆達多一此云二無熱惱池一と有れど唯に無熱池と譯すべし。其は阿は無と譯し。耨達は。熱と譯する梵語なるを。惱字は。龍には都て。三熱の苦あるを。此の池の龍のみ。其の苦なしと云へる。佛祖が翻案の妄説より起れり。義譯の字なればなり。（其の由は、既に初品の第三節に云へり、）また此の池を。雪山の頂上に在と云へるも。佛祖が東北邊の地理を知らで。牽強せる妄説なる由も。既に論へるが如し。（是また初品の第三節に云へりき、）偖こそ。大般若經の音義にも。雪山上の説を取らず。大雪山北。

香山之南。二山中間有此龍池。謹案。起世因本經。及立世阿毘曇論。皆云大雪山北。有此大池。縱廣五十踰繕那。(計面方一千五百里)於池四面。出四大河。云々と言へれ。(但し余が見たる、黄檗板の立世論には、此の池のこと見えず、)こは本文。また上に引く經等に。雪山の頂上に。此の池ありと說るが。處違へる事を心づきて。其由を引下せる說なり。(しか引下しては有れど、なほ處差へること、既に初品にいへり、)其は立世論。因本經などは。右の經等より後に。記し傳へたるが故なり。(凡てかゝる事どもに心を付るぞ、佛書見の要旨なる)○恒伽河は。倶舍論の音義に。殑伽河。諸經論中。或作恒河。或言恒伽河。亦云恒迦。或作强伽河。皆訛也。(西域記にもかく言へり、但し此は、玄奘法師が說より、出たり、凡て衆經の音義を讀む人は、彼の比丘が譯せる書の音義に、殊に心を付て見べし、そは彼の比丘は、多く梵語の轉訛を正せればなり、)此河。從無熱池東面象口而出。流入東海。舊譯云天堂來。以彼外書。云中本入摩醯首羅天頂。從耳中出。流在地上。以

此天化身。在雪山頂故。作此說。見從高處而來故。云天堂來也とあり。(此文一切經音義なるは、誤脫の字あり、今は餘書等に引るを以て校せり、近來板に彫れる一切經音義は、誤字脫文いと多し、其心して見べし、下に引く文も、悉校して引たり、)○新頭河は。同音義に。信度河。舊言辛頭河。此云驗河。從池南面銀牛口中流出。還入南海也とあり。○婆叉河は。同音義に。縛芻河。舊云博叉。或作薄叉。亦云婆叉叉嚎叉。皆一也。此云青河。從池北面頗黎師子口中。流出入北海也とあり。(今本に、叉嚎叉の三字を脫せり、)○斯陀河は。同音義に。徙多河。或言私多。或云悉陀。亦言私陀。皆梵音之差也。此云冷河。從無熱池西面。瑠璃馬口而出。流入西海。卽是此國大河源。「其派流之小河」也とあり。(今本に私陀の陀を脫し、冷を令に誤れり、但し余が音義を引用ふるに、多く右の如く校正して引たれど、其由を盡くには言はず、)さて此音義に。其獸口。また其流入する海の。東西南北など。本文と互に異なるは。倶舍論に依れる故なり。(然るに彼の頌疏の

說は、本論に依つゝも、猶異にして、雪山之北、香山之南有二大池水一、名二無熱惱一、出二四大河一、一殑伽河、從二池東面一出、遶レ池一帀、方入二東海一、二信度河、從二池南面一出、遶レ池一帀、方入二南海一、三徙多河、從二池北面一出、遶レ池一帀、方入二北海一、四縛芻河、從二池西面一出、遶レ池一帀、方入二西海一、無熱惱池、縱廣正等五十由旬、非レ得二通人一無レ由二能至一、於二此池側一、有二瞻部林一、樹形高大、其葉甘美、依二此林一故、名二瞻部洲一と云へり、徙多と、縛芻との東西を差へり、)また西域記に。瞻部洲之中地者。阿那婆答多池也。(唐言二無熱惱一、舊曰二阿耨達池一訛也、)在二香山之南。雪山之北一。周八百里矣。金銀。瑠璃。頗胝。飾二其岸一焉。金沙彌漫。清波皎鏡。大地菩薩。以二願力一故。化爲二龍王一。於レ中潛宅。出二清冷水一。給二瞻部洲一。是以池東面。銀牛口流二出殑伽河一。繞レ池一帀入二東南海一。池南面金象口。流二出信度河一。繞レ池一帀。入二西南海一。池西面瑠璃馬口。流二出縛芻河一。繞レ池一帀。入二西北海一。池北面頗胝師子口。流二出徙多河一。繞レ池一帀入二東北海一。或曰潛二流地下一。出二積石山一。即徙多河之流。爲二中國之河源一云。と言へるは。阿含の經々とも。倶舍論とも異なる一說なり。(無熱地を、瞻部の中地と云る事などは、初品に既に論へり、大地菩薩云々の說、また銀牛、金象、瑠璃馬、頗胝師子のこと、池を繞ること一匝など云へるは、みな大乘經說の、方廣なる妄說に寄合せる、後世の加增說なり、心地觀經といふ大乘經には、阿耨達池、四大龍王各居二一角一、東南龍王白象頭、西南龍王水牛頭、西北龍王師子頭、東北龍王大馬頭、各從二四角一涌二出四大河一、云々とも妄添せり、此に就て思ふに、倶舍頌疏の慧暉が鈔に、東面河口似二牛頭一、南面河口似二象頭一、西面河口似二師子頭一、北面河口似二馬頭一也、と云へるは、大乘說を奉行せる乞士の口づきともなく、中々に見所ある說なり、)斯てまた華嚴經の音義に。準レ經香山頂上。有二阿耨達池一。其池四面各流二出一河一。東面私陀河。從二金剛師子口一流出。其沙金剛。東入二震旦國一。便入二東海一。南面恒伽河。從二銀象口一。流出。其沙白銀。流入二南印度一。便入二南海一。西面信度河。從二金牛口一流出。其沙黃金流入二信度國一。便入二西海一。北面縛芻河。從二瑠璃

馬口一流出。其沙是琉璃。流入二波斯拂林一。便入二北海一。其池縦廣五十由旬。四面各一由旬也とあり。(是また、上に擧る諸書の說とも合はず、準經とは、華嚴の說に準りて、說をなす由なり。)右の如く。經論註疏。互に說の異なるを。古今の比丘ら。佛學者など。訂し辨へむとは思ひたらで。西と云へば。其に頂突き。東と云へば。其れにも點頭しつつ。彼も此も尊奉せるは。何ちふ愚昧ぞや(玄弉比丘などは、正に彼地を經歴せる者なれば、其西域記などは、正說なるべく所ㇾ思ゆれど、甚く差へること、初品に朝夷氏の說を擧て、辨へたるが如し、況て餘の比丘らが說をや。)但し一通りは。かく思へど。彼の倶舍論に。得通の人ならでは。此の池の邊に至ことは能はざる所なり。と言へるを思ふに。此の論の作者世親を始め。大智度論。毘婆沙論などの撰者らも。神足通を得たる由云へれども。其れみな幻妄の說にて。渠等印度比丘ながらも。其實地を撿知せざりし故に。妄想の異說多かり。此の池の在どころ。實は西域の東北界にて。雪山とは。絕遠の隔なるをや。(但し四大河の、雪山邊より流るゝ事は違なし、此等のこと、初品に委く註せれば、今更に云ず、比丘らが妄說の繁かる中にも、上に引く倶舍頌疏に於二此池側一有二瞻部林一、樹形高大其菓甘美、依二此林一、故名二瞻部洲一と云へるは、妄誕もまた極れりと云ふべし)さて本文に。恒伽河を。東海に入ると云ひ。新頭河を。南海に入ると云こと。まづは違はねど。西域記に殑伽を東南海に入り。信度を西南海に入る。と云るは。能叶へり。(華嚴の音義に、信度を西海に入ると云るも違へり)次に婆叉河を。西海に入ると云へれど。此は華嚴の音義に。波斯拂林に流入して。北海に入る。と云へるが能く叶ひ。(西域記に、西北海に入ると云へるは、能くも叶はず)斯陀河を。北海に入と云へるは。甚く違ひて。是も音義に。震旦國に入り。東海に入と云へるが。大かた叶へり。(西域記に、東北海に入と云へるも甚く違へるに非ず)さて此斯陀河てふ名は。大般若經音義に。東面出者名二私多河一。此國黃河。卽東面私多河之末也と見え。(此國とは、卽唐土を云へるなり)西域記の或曰に。潛二流地下一。出二積石山一。卽

徙多河之流。爲二中國之河源一と云ひ。(中國とあるは、此も唐國を云へり。)華嚴の音義に。入二震且國一。便入二東海一と云へるに依れば。斯陀は。西の國々にて。唐戎國を。支那と云へると同語なり。故是をもて。倶舍頌疏に。徙多河。此云二孟津河一是也と云へり。(華嚴の鳳潭が、此の頌疏の冠註に、孟津河は、謂ゆる黃河の源にて、其の大源は、私多河より流出して、積石山の下に潛伏し、地下より星宿海と云に出て、唐地に入り、それ謂ゆる孟津河なること、尙書禹貢篇を始め、數多の書を引て、いと精しく辨へたり、就て見べし、孟津河を、また盟津河とも云ふ、即黃河流なり。)支那ちふ國名。また其國の事も。阿含中には所見ざれど。其れより後の經論等には。多く見えて。華嚴經音義に。震且國或曰二支那一。亦云二眞丹一。此翻爲二思惟一。以下其國人多レ所二思慮一。多レ所二計詐一故。以爲レ名。卽今此漢國是也とあり。(また或は振且、脂那など見え大毘婆沙論には、支那致那人、致那、中華なども云へり、斯て思ふに、此の音義に、漢國人の趣を云へること、よく當れり。)然れば此の國名は。漢人の思慮計詐おほき故に。印度より負たる稱なるが、其國へ流入する河なる故に。河の名をも。斯陀河とは負たるか。(但し佛祖は、支那國ある事をば、都に知ざること、阿含の經々を熟讀して、明に知るゝを、其の佛祖が眞說に、斯陀河と云へるを思へば、河の名が本にて、其斯陀河の流入する國なる故に、佛祖よりは後に、彼國ある事を知りて、其を支那とは負たるか、また若くは、佛祖より古く、梵志學には、彼の國ある事を知りて、かく名け、且々その國邊の事をも云へるを、佛祖はすべて、舊說をもどく僻ありし故に、其東邊に。支那てふ國ありと云ふ梵志說をば、探ざりし故に、阿含に彼の國の說の無にや、此は左に右に思ひ定めがたし。)其はともあれ。信度國に流入する河を。信度河と云ひ、波斯拂林に流入する河を、縛叉河と云ふを以て。支那も斯陀と同義なる事は論ひなし。(信度國は、西域記に、渡二信度大河一至二信度國一と記し、西印度境なる由見え波斯國も同記に、西印度境なる、狼揭羅國の所に、自レ此西北至二波剌斯國一、雖レ非二印度國一、路次附出、舊曰二波斯一略也

とあり、此國名を、西洋人は、波留舍と云なり、然れど文字をば、波斯と書傚へり、（また因に云ふ、唐戎國を支那と云こと、西洋人の稱し始めたる如く、彼國の學する徒は云ふめれど、實には印度人の命たる名なるを、印度よりも西なる國々は、凡て印度の事ども、見習ひ聞ならひて、開けたる故に、印度より移れる事の多ければ、此の名も、印度にいふを學びたるなり、然るを蘭學者らは、却りて印度は、彼を傚へりとや云ひなすらむ、）また是に就て、我が友行智說に。西域記に天竺之稱。舊云二身毒一。或曰二賢豆一。今從二正音一。宜レ云二印度一。云々と云へるは。史記西南夷傳に。天竺身毒也と有りて。師古が註に身音捐。とあるに依れりと見ゆれど。此の註は誤まりとおぼゆ。其は捐字は。喉音にて。唐音エンなれば。彼の註は。身字を直にエンと讀しめて。强て印度と云ふ音に充むと。註せる物なり。（また賢□□□□□）然れども。身毒は。元より身毒にて。印度とは別なり。然るは。身毒と。信度は同音にて。信度國は。信度河に沿たり。信度と云ふは。即センドと云ふ語にて。月の梵名センドと聞ゆ。（信度河をば、西洋語にセンドと云へり、彼の阿陀牟、延波と云し神の在りと云ふ、樂地に在る池より、四河を流出す、謂ゆるセンドス、チギリタ、ケンドズ、ガングスの四水をいふ、此センド、やがて信度河なることは、餘の三河も、みな印度地方の國なるにて知べし、○篤胤云、天竺は、初品に云如く、正音チエンドなれは、是またセンドの轉語にて、身毒信度と同語なること明なり、）然れば唐土にて。月氏國と云る國名の聞ゆるも此信度國の翻名なること知べし。また唐土を支那と云は、信に徙多河より負たること疑なし。其は信度。波剌斯の二國は更なり。印度河（頭注云篤云印度と云はもと印特迦國より起りて南天竺に及へる名なるべし印度川とは殑伽川なり）に傍たる國を。印特國（また印特迦國とも）と云にても知らる。と語りき。此山の事。また阿耨達池のこと。長阿含閻浮提洲品に。佛告二比丘一。雪山縱廣五百由旬。深五百由旬。東西入レ海。雪山中間有二寶山一。高二十由旬。雪山埵出高百由旬。其山頂上。有二阿耨達池一。縱廣五十由旬。其水淸冷。

七寶砌壘。七重欄楯。七重羅網。七重行樹。種々異色。七寶合成。(なほ其莊嚴の華麗なる狀を、長長と說たれど、煩はしければ記し出ず、本書に就て見よ、猶池の側に、園觀浴池ある由にて、其莊嚴の有狀、目を驚かす事どもなり。)池の東有恒伽河。從牛口出。從五百河。入于東海。池南有新頭河。從師子口出。從五百河。入于南海。池西有婆叉河。從馬口出。從五百河。入于西海。池北有斯陀河。從象口出。從五百河。入于北海。阿耨達宮中有五柱堂。阿耨達龍王。恒於中住。何故名為阿耨達。所有龍王盡有三患。唯此龍王無有三患。何為三患。一者熱風。熱砂。燒其皮肉。二者惡風吹宮。失寶飾衣。龍身苦惱。三者金翅大鳥。欲取龍食。諸龍怖懼常懷熱惱。阿耨達龍無如此患。若金翅鳥生念。欲往。即便命終。故名阿耨達とあり。(右は甚く文を切めて引たれば委くは本經に就て見るべし。)雪山の大に過たる事は。更にも云ず。東海入海といひ。其中間に寶山あり。其寶山の頂上に。阿耨達池ある由にて。其莊嚴の事また龍王の事など說るも。皆妄說なり。其は阿耨達池の所在さへに違へること。圖を見て知るべし(思ふに佛祖の當時は、彼の國人も、なほ雪山、阿耨達池あたりの事は得知らずて、唯其國の北邊に、さる池、さる山の有とばかり、且且聞て、佛祖も實には見知ざるを、謂ゆる天眼通を得て、世界の有ゆる處、また事物ともに、知りたりと言ひ出たりし故に、見も知らぬ境の事をも、見知れる由して、如此は妄說せるなり、是もし妄說ならずは、山と池とは所違へるを、其山の頂上に、と云るは如何ぞや、かく難めば、護法者流は、例の神通力を以て、池をば後に異所に移せり、など言ひ遁るらむ。)雪山の事は。西域記に。弗栗薩儻那國の所に。從此國東北。踰山。涉川。越迦畢試國邊小邑凡數十所。至大雪山婆羅犀那大嶺。嶺極崇峻。危隥敧傾。蹊徑槃迂。巖岫廻互。或入深谷。或上高崖。盛夏合凍。鑿冰而度。行經三日。方至嶺上。寒風淒烈。積雪彌谷。行旅經涉莫能佇足。飛隼翺翔不能越度。足趾步履。然後翻飛。下望諸山。若觀培塿。於贍部洲中。斯嶺特高。其嶺無樹。唯多石峯。攢立叢倚。森然

若レ林。又三日行。方得レ下レ嶺。至二安咀羅縛國一と有りて。大凡の狀知られ。迦畢試國の事を記せる處に。北背二雪山一。三垂黑嶺。王城西北二百里。至二大雪山一。山頂有レ池。請レ雨祈レ晴。隨レ求果レ願と記して。其池に。惡龍の住する由見えたれども。此は阿耨達池の事には非ず。(案ふに、阿含の佛說は、此池と阿耨達池とを、一に思ひ混へたる說なり、是を以て、彼の天眼は賴かたく、且佛祖が、此邊の地理を知らざりし事をも辨ふべし、起世因本經、立世阿毘曇論などに、大雪山北、有二此大池一と云へる、是もなほ所違へり、)彼の池の事をば。別に卷首に。贍部洲之中地者。阿耨達池也。在二香山之南。大雪之北一。周八百里矣。金銀瑠璃頗胝。飾二其岸一焉。金沙彌漫。淸波皎鏡。大地菩薩。以二願力一故。化爲二龍王一。於レ中潛宅。出二淸冷水一。給二贍部洲一。是以池東面。銀牛口。流二出殑伽河一。繞レ池一帀。入二東南海一。池南面金象口。流二出信度河一。繞レ池一帀。入二西南海一。池西面瑠璃馬口。流二出縛芻河一。繞レ池一帀。入二西北海一。池北面頗胝師子口。流二出徙多河一。繞レ池一帀。入二東北海一。即徙多河之流。

爲二中國之河源一。と載せり。(此文に、中國と云へるは、唐土を云へり、圓明院行智說に、印度にて、唐土を支那と稱ふは、此の徙多河の流れ入る國なる故に云か、と言へり、然も有るべし、)また摩喝陀國。毘布羅山の西南に在る。溫泉の事を云ふとて。其泉源。發二雪山南無熱池一。潛流至レ此とも言へり。池を雪山頂より引下せるは。然る事なれど、北と云ひ南と云へるは。所違へり。雪山の東とこそ言べけれ。其は圖を觀て知べし。(然れば玄弉法師は、此池の邊をば、往て見ざりしと見えたり、大般若經音義にも、阿耨達池、正梵音、云二阿那婆達多一、唐云二無熱腦池一、此池在二五印度北一、大雪山北香山南、二山中間、有二此龍池一、無熱腦者、龍王福德之稱也、一切諸龍皆受二熱沙等苦一、此池龍王、猶無二此苦一、故以爲レ名也とあれど、是も池の在所違へり、)さて阿耨達を。阿那婆達多とも云て。唐に無熱腦と譯する由なれば。元は熱からず。淸冷なる由もて。負たる稱なるべし。(熱をヌクタと云は、本朝の語に同じと聞ゆれば、腦は附會のさかしらか、其は提婆達多を、天熱と譯するにても知

べし、さて阿は無、また非の義なり、そは阿素洛とは、非天の義なるを以て知べし、此は漢語に、阿相、阿父、阿母など云ふ阿と同語なり、储また阿素洛の素洛は、天の義なれば、是また本朝語に、空をソラと云に同語なり、なほ此餘にも、本朝の語と同じきが甚多し、此の事をも心得て、佛籍を讀べし、なほ次々にも出るを見よ、）然るを佛祖翻案して。雪山上（頭注云大毘婆沙論百巻に契經説苾芻當レ知大雪山中有二如レ是處一獼猴與レ人倶不レ能レ行、有二如レ是處一獼猴能行人不レ能レ行有二如レ是處一獼猴與レ人倶能行と云へる契經は阿含中には見ざれど、佛祖が説なること著なるが、此趣を見ても其世の人は、雪山を知らざるに就ての妄誕なることを知られ、婆沙に此説を擧たるにて、此論を記せる人も、其山のことを知ざること灼焉し、）の池と一に混じ。まづ其龍王宮の莊嚴を説き。無熱と稱するより。龍には總て。三熱の苦ある由を妄説して。此龍王のみ。其熱苦なき故に。無熱腦龍王といふ。其龍王の住する池なる故に。無熱腦池といふと。妄誕し。彼池の近傍に。牛馬象師子などに

見成る、山どもの有る由。ほの／＼聞き傳へて。其の獸形に見ゆる四山を。直に生畜にとり成し。其口々より。四河を吐流する由を。幻説せるものなり。（凡て佛祖の妄説どもを、阿含中に見て、熟々考ふるに、更に種なき事も多かれど、半は元より有來し故事、また其見聞せる事實を、翻案して作れる類もいと多し、そは次々に、然る事の出る處處に、辨ふを見て知べし、）然も有らば。增壹阿含六重品に。佛祖の諸比丘を將て。此龍宮にて。説法せる事のあるは。如何と云ふ人も有りなむか。其は此に引たる妄説ありし後に。また其の末流の徒が。妄説せるなり。（其の妄説よりして、舍利弗と、目連と、法力を諍ひて、目連が負たる事の、大幻説を作り、其幻説より延て、目連が大神足を現じて、東方七恒河沙前の佛土に往詣して、奇光如來といふが所へ飛行たるに、彼の世界の人は、形體極めて大なる故に、目連を見て、人に似たる虫こそ有れとて、其の佛に見せたるに、此は閻浮提洲の、釋迦如來の弟子に、目連とて、神通第一の者なりと云にぞ、目連なほも神足を現じて、其

の世界の大身比丘ども數口人を、吾が鉢に入れて、佛祖が阿耨達池に居たる所へ持來れり、など云へる事をさへに妄說せり、なほ彼より此と、妄誕を增長せるが、其は妄說の系圖を引て、見ばや、と思はむ人の有む時に、其次第を追て語り出べくなむ）然は有れど。阿含中には。此龍王を。大地菩薩と云ことは言ざるを。此は又。其の後に加へたる妄說なり。（そは阿含の佛說には、唯に牛馬象師子と說たるを、銀牛、金象、瑠璃馬、頗胝師子、と加說し、また其四獸の口より出、とのみ說るを、其水各々池を繞ること一帀して、と加說せるを以ても、准へ悟りねかし）此池。また此の龍王の妄說。流れに流れて。本朝までに波及して。彼の空海法師が雨の祈りに。此の龍を請じたりと云を始め。言もて行けば。果しなき幻說どもぞ弘ごりける。（是また系圖を作らでは、此に盡し難ければ、今は漏しつ）さて雪山は。唐土に謂ゆる。葱嶺に接ける山なること。西域記に。活國覩貨邏國故地也。役屬突厥。從此東入葱嶺。葱嶺者。南接大雪山。北至熱海千泉。西至活國。東至烏鎩國。東

西南北各數千里。崖嶺數百里。幽谷險峻。恒積冰雪。寒風勁烈。多出葱。故謂葱嶺。又以山崖葱翠。遂以名焉。と有るにても知らる。（葱嶺に、葱生たりと云こと、水經注にも、其の山高大、上生葱、故曰葱嶺と云へり）然るを彼曆象編に。阿含。起世。樓炭など。佛祖の眞說に。雪山頂上に有りと云へる。阿耨達池を。他書には。所違ひて有ことの辨論は無して。樓炭經に。崑崙山者。閻浮提地之中心也起世經に。雪山（此云崑崙）高三百由旬。闊廣亦爾。於山頂上有池。名曰阿耨達多。とある由にて引用し。（余が見たる、一切經藏の本には、此の文どもなし、彼の菩薩は、佛學の大家なれば、然る本を持たるか、訝しき事なり、普通の本に無して、其藏本にのみ有むには、其の由を記しおかでは、甚く人惑はしなる事なり、續高僧傳の、玄奘法師が傳に、崑崙虛とある、其音義に、虛或作墟、雪山之異名也、と云る說あれど、其は見おとせるか引出ず）彼西域記初卷なる。瞻部洲之中地者。阿耨達池也とある文。また水經に。崑崙墟在西北。去嵩高五萬里。地之中也。高萬

千里とある文。なほ種々の漢籍どもを引證して。崑崙者。印度名阿耨達山。卽大雪山也と言ひて。此を大地の頂上とし。地頂の山の天竺にある上は。萬邦の最勝たる國なりと。條條に。いと喋々しく言擧たり。(論閻浮提地形、と云ふ條には、諸文、以北極下爲地頂者多矣、今據佛說、以義斷三之地頂、則閻浮提地、縱廣二千由旬、而其北極以南、七百六十由旬是此人之所住、其分限之、其北極以北千二百四十由旬、則皆神仙龍鬼之所住也、若就人之所住而言則崑崙是地之最高處而、且地之中也、若就南方天下閻浮一洲而言、則北極下地、是地之中心而周髀所言是也、須彌是四天下之中央、而人天八部之依處也、其義散蔓大藏中、故不煩辨、とも云へり。)然れども。崑崙山と。阿耨達山と。稍近くは在ども。元より別山にて。二山ともに。雪山より東方の。いと遠き地に在るをや。(そは前品に記せる、朝夷氏の說を見て知べし。)案ふに崑崙山を。雪山に附會せるは。水經註に。數多の書を引たるが。其在所。また高量など。異說紛々たるに倦じて。數說不同。見未聞非所詳究。不能不聊述聞見。以誌差違也と云へるが。復下に。釋氏西域志曰。阿耨達太山。其上有大淵水。宮殿樓觀甚大焉。山卽崑崙山也。穆天子傳曰。天子升崑崙。卽阿耨達宮也。と有より。思ひ付ての惑說なるか。(水經の注と云もの其の引たる書等に、種々不審なる事ども有りて、信られぬ物なり、其は釋氏西域志といふ書は、西域記より思ひ付たる僞書と見えて、餘にさる書の名は見當らず、穆天子傳も、本書と校するに、卽阿耨達宮也と云へる文なし、其は此の書元より僞書なれども、周穆王が當時の記に、託せる物なるが故に然る文の有べくも非ず、凡て此の水經の注は、漢土に流るゝ諸河水の原を、崑崙山よりと云へる本文に合せて、註せる物から、其崑崙の在所を知ざるが故に、左に右に、說くるほして、斯る妄說をば作り出たるにぞ有ける、然れど、此は、後魏と云ひし世に撰れる古き書なる故に、古說のより所と爲べき事も、取用べき事も、また無きには非ざるなり。)然れば。彼菩薩が所藏の樓炭起世に。右の如く有とも。其は護法者流の附會攙入せる文な

れば。取に足らず。三山別に。歴然と有るを何とせむ。護法者たち喧こと勿れ。

雪山右有毘舍離城。其北有七黑山。其北有香山。其山常。有歌儛倡妓音樂之聲。山有二窟。一名爲晝。二名善晝。妙音乾沓婆王。從五百乾沓婆。在其中止。

善晝窟北有娑羅樹王。名曰善住。八千樹王圍繞四面。善住樹王下有象王。(頭注云象王が八千の浴池また榮花の事)亦名善住。止此樹下。身體純白。力能飛行。其頭赤色。雜色毛間。六牙纖傭。金爲間塡。八千樹王下。有八千象。圍繞隨從。其八千象亦復如是。

此四天下有八千天下。圍繞其外。復有大海水。周帀。圍繞八千天下。復有大金剛山。遶大海水。金剛山外。復有第二大金剛山。二山中間窈々冥々。日月神天有大威力。不能以光照及。於彼有八大地獄。一名想。二名黑繩。三名堆砷。四名叫喚。五名大叫喚。六名燒炙。七名大燒炙。八名無間。一一地獄。有十六小地獄。小獄縱廣各々五百由旬。

大樓炭經に。佛告比丘。有大鐵圍山。更復有第二大鐵圍山。中間窈々冥々。日月大尊神光明。不能及照。其中有八大泥犂。第一名想。第二名黑耳。第三名僧乾。第四名樓獵。第五名嗷嚾。第六名燒炙。第七名釜煮。第八名阿鼻摩呵。一一泥犂有十六部。と見え。

起世經に。其四大洲。及八萬小洲。諸餘大山。及須彌山王等。外別有一山。復名斫迦羅。(前代舊譯云鐵圍山)高六百八十萬由旬。縱廣亦同。彌密牢固。金剛所成。此輪圓山外。更有一重大輪圓山。高廣正等如前由旬。其兩山間。極大黑闇。無有光明。日月有如是大威神力。不能照彼使見光明。於兩山間有八大地獄。何等爲八。所謂活地獄。黑地獄。衆合地獄。叫喚地獄。大叫喚地獄。熱惱地獄。大熱惱地獄。阿毘脂地獄。此八大地獄。各々復有十六小地獄。周帀圍遶而爲眷屬。是十六獄。悉皆縱廣五百由旬とあり。(本文二經、互に獄名の異あるは、譯の異れると、梵語の轉訛と有るを以てなり)さて本文。また此經等に依ときは。彼九山八海四天下。および八千天下を周帀圍遶せる大海水の外に。そを圍遶する。大金剛山。二重にある由の佛說なり。(然れば前の九山八海に

四大洲外なる一大海、また此二山を入れて、十一山九海なり、須彌山を除ては、十山九海と云べし、然るを立世論、倶舍論を始め、四大洲を圍繞する大海水の外に、一鐵圍山を置て、凡て九山八海とせるは、佛説と違へり、古今の比丘ら、皆その論説に依たれど、阿含は本經なり、諸論は末なり、豈本を捨て末を取らむや）斯て其二つの大金剛山の中間なる。窈々冥々の處に。八大地獄。および其八獄に。各々十六づゝの小獄。部てある由なれば。總ては百三十六地獄なり。（大般涅槃經に、地獄一百三十六所とある、其音義に、八地獄、是根本、各有十六、以爲眷屬、合成一百三十六也、と云へるが如し）地獄は。攝大乘論音義に。那落迦梵語也。亦言那羅柯。亦云泥羅夜。舊言泥羅耶。斯梵言楚夏耳。此譯有四義。一不樂。二不救。三闇冥。四地獄。經中言地獄者。一義也と云ひ。（また法苑珠琳に、地者底也、獄者局也、梵名泥犂耶、舊翻狹處、局不攝地空、梵本正音、那落迦、或云捺落迦、新婆沙論云、諸有情無悅無愛、無味無利、無喜樂、故名那落迦、捺落名人、迦名爲惡、惡人生彼處故、と見え、六波羅密多經音義には、捺落迦梵語、地獄之摠名也、と云へり、）大般若經音義に。經言地獄者。冥司幽繫之所也。此下過二萬無間。深廣同。上七捺洛迦。此皆大地獄也とあり。（また名義集に、那落迦、此翻惡者、輔行云、地獄從義立名、謂地下之獄、故名爲地獄、婆沙云、贍部洲下、過五百喩繕那、乃有其獄、とも云へり）さて此八大地獄。また百二十八小地獄の名を。しか號たる由縁。また其大苦痛の趣など。右の經等に。地獄品とて。餘品より殊に長き品々あり。文繁く煩しければ。都て註さず。（其大凡は、次節に引く、鐵城泥犂經の趣に準へても悟りねかし。）さて上に出たる四天下に。八千の天下ありて。其外を圍遶すと云へるは。島々を云へる物かと思ふも有べけれど。是また妄誕なり。故説法ごとに口合はず。此にかく八千と云かと思へば。下に擧る米災の所には。四天下及八萬天下と云へり。是れ口に出るまゝの謾話なればなり。

彼二山中間復有十地獄。一名厚雲。二名無雲。三

名呵々、四名奈何、五名羊鳴、六名須乾提、七名優鉢羅。八名拘物頭。九名芬陀利。十名鉢頭摩。㈠其獄罪人。自然生身。譬如厚雲。故㈡其獄罪人自然生身。猶如段肉故。㈢其獄罪人。苦痛切身。皆稱呵呵故㈣其獄罪人苦痛酸切。無所歸依。皆稱奈何故。㈤其獄罪人苦痛切身。欲擧聲語舌不能轉。直故㈥其獄罪人。皆黑如須乾提華故。㈦其獄罪人皆靑如優鉢羅華故㈧其獄罪人。皆紅如拘物頭華。故。㈨其獄罪人皆白。如芬陀利華。故㈩其獄罪人皆赤。如鉢頭摩華。故喩有六十四斛胡麻。有人百歲持一麻去。如是至盡。厚雲地獄受罪未竟。無雲壽。厚雲二十倍。呵々壽。無雲二十倍。奈何壽阿々二十倍。羊鳴壽。奈何二十倍。須乾陀壽。羊鳴二十倍。優鉢羅壽。須乾陀二十倍。拘物頭壽優鉢羅二十倍。芬陀利壽。拘物頭二十倍。鉢頭摩壽。拘物頭二十倍。是名一中劫。二十中劫名一大劫。瞿波梨比丘。謗舍利弗目犍。墮此紅蓮地獄中。

起世經に。彼世界中間。別有十地獄。何等爲十。一頞浮陀。二泥羅浮。三阿呼。四呼々婆。五阿吒吒。六搔揵提迦。七優鉢羅。八波頭摩。九奔荼梨。十拘牟陀。此獄衆生。身形如泡沫也。此獄衆生。身形如肉段也。此獄衆生。受嚴切苦。逼迫之時叫喚而。言阿呼阿呼也。此獄衆生。極苦逼時。叫喚而言呼々婆呼々婆也。此獄衆生。苦惱逼時。但得言阿吒々阿吒々。然其舌聲不能出口也。此獄中之猛火焰色。如此華也。此獄中之猛火焰色如此華也。此獄中之猛火焰。色如此華也。此獄中之猛火焰。色如此華也。此獄中之猛火焰。色如此華也。此獄中之猛火焰。色如此華也。云々とあり。(十地獄の次第も、本と互に異り、かつ本文には、其罪人の色を、其華どもに如たりと云ひ、樓炭經もしか言へるを、起世經には、火焰の色、その華どもの色に如たりとせり、此は道理に叶ひて聞ゆるを、本文と樓炭は、道理に當らず聞ゆれども、これぞ古色なるべく覺ゆ、偖また樓炭經は、此十地獄の在處、本文また起世經と異にして、是を閻羅王界の地獄と爲たり其文は下に引くを見るべし、)さて立世論地動品に。佛說比丘。有大地獄。名曰黑闇。各々世界外邊悉有。皆無覆蓋。此中衆生自擧其手。眼不能見。雖復日

月具大威神。所有光明不照彼色。黑闇地獄住在何處。兩々世界。鐵輪外邊。名曰界外。是寒地獄。一名頞浮陀。二名涅浮陀。三名阿波々。四名阿吒々。五名嘔吼々。六名鬱波縷。七名拘物頭。八名蘇健陀固。九名分陀利固。十名波頭摩。云々と言ひ。また此れを寒冰地獄とも云て。下文に。其寒氷なる趣を説たり。其在處は更なり。上の經等に。焰熱なる由云へるとは。甚く異なる説相なり。(然してまた地獄品に、別なる十地獄の名を擧たる、第八までは、前節の八大地獄なるが、第九を外圍隔といひ、第十を閻羅地獄と云ふ由にて、其事相を長々と記せるを見るに、第九外圍地獄と云ふは、八大地獄に、各々十六づゝ圍繞せる、小地獄なる由を記し、第十、閻羅地獄といふの説相を見れば、下に引く鐵城泥犂經を取りて、仰山に加説せるにて、前後うち合ざる説等を、多く記載たるにぞ有ける。)然るをまた。龍樹論師が大論に。前節の八大地獄を。八熱獄と立て。此なる地獄の二を減じて。八寒水獄者。一名頞浮陀。二名尼羅浮陀。三名阿羅々。四名阿婆々。五名睺々。六名漚波羅。七名波頭摩。八名波頭摩と云ひて。寒苦の狀もて説たるは。立世論に依れる説なれば二獄も減せる意は詳ならず。

閻浮提南。大金剛山內。有閻羅王宮。縱廣六千由旬。其城七重七重欄楯。七重羅網。七重行樹。周市校飾。七寶所成。

大樓炭經に。佛言。大鐵圍山外。閻浮利天下南。有閻羅王城。縱廣二十四萬里。以七寶作。云々(二十四萬里は、本文の六千由旬を、唐土の里法に直せるなり、山外は、決めて山內の誤りなり。)起世經に。彼內輪圍。大輪圍。二山中間外。閻浮提南。有閻摩王宮殿。縱廣正等六千由旬。七寶所成。於其四方。各有諸門。一一諸門皆有却敵樓。云々とあり。(三經ともに、例の飾文を略して擧ぐること、每もいふが如し。)閻羅王の事は。倶舍論音義に。琰摩或作閻摩羅。或言閻羅。亦作閻摩羅社。又言夜磨盧迦。皆是梵音楚夏也。此譯云縛。或言雙世。竊謂。苦樂竝受故以名焉。(五天使者經音義も、此に同じ、苦樂並受とも云へるは、下の本文に擧る佛說に、此王五欲の歡樂

は受つゝも、晝夜に三熱の苦惱を受く、と云へる意を得て云へる説なり、)又云。閻摩此云雙。羅社此云王。兄及妹皆作地獄王。兄治男事。妹治女事。故曰雙王也。(閻摩羅經音義も、同説にて、鬼官之摠司也と云へり、印度にても、古く男に對して、女を姉妹と云へること、阿含を始め、大毘盧舍那經住心品に、閻摩天、閻摩后とあり、)大般若經音義に。琰魔王梵語。冥司鬼王名也。舊云閻羅王。經文作剡魔。皆訛略不正也。(剡尸染反)正梵音云琰摩。(閻奄反)古人譯爲平等。と云ひ。また爓魔梵語。鬼趣王也。經文作剡魔。訛略不正也(剡音、揚染反)梵音爓摩。義翻爲平等王。此司典生死罪福之業。「主守八熱八寒及小地獄」。役使鬼卒於五趣之中。追攝罪人。捶拷治罰決斷善惡。更無休息故。三啓經云。將付琰摩王。隨業而受報。勝因生善道。惡業墮泥犂。即其事也とも言へり。(また名義集には、琰魔或云琰羅。此翻靜息。能靜息造惡者不善業故とも見えたり、)さて。此王のこと。金七十論に。八分の生處といふ事を説る所に。一梵王生。二天帝生。三世主生。四乾闥婆生。五閻摩羅生。六夜叉生。七羅刹生。八沙神生と云ひ。(閻摩羅生を、一所には、阿修羅生とあり、此は、由緒ある事なり、下に論ふを見べし、)また臨退死時。作如是計。獄卒縛我就閻王所。因此計生苦。不及得聽僧佉義。故名盲闇とも有り。(金七十論は、迦毘羅仙が説を集記せる物にて、僧佉義とは、即其法を云へり、故この文意は、此世にて罪を犯せる者は、退死の時に臨みて、冥府より獄卒來りて、その識神を縛して、閻王の所に就しむ、と云ふ古説を信じて、しか思計する故に、我が僧佉義を聽得るに及ばず、是をもて、然る輩をば、盲闇の人と名くと、古説をいひ腐せる文意なり、)此等の説を。上に引く音義どもに。冥司王。鬼趣王。鬼官總司など云ひ。生死罪福の業を司典して。其善惡を決斷する由言へるに。合せ考ふれば。太古より。梵志の古説に傳はる神王なること。炳焉なり。(上の音義どもに、佛説に見ざる説どもゝ多かるは、梵志に傳はる古説の、諸書に散見せるを摭ひて、記せればなり、總て音

義は更なり、他の佛書どもにも、佛經に見えざる梵說の見ゆるは、皆その類と知べし〕故かの十二天餞軌にも。此王の名を標出して。焰摩天喜時。人無横死。疫氣不發。此天瞋時。人非時死。疫氣充滿と云ひ。（文意は、此王は、鬼神の總司なれば、此をよく祭る時は、此の王喜びて、殊によく鬼神を司典して、疫氣をも發さしめざるを、能く其祭を爲ざる時は、瞋りて鬼神らが、疫氣を行ふをも制せず、非時に、人の横死すること多し、と云へるにて、皇朝の眞の道にも符へる、最も古意なる說なり、かし）また其供養の所に。焰魔天與諸五道冥官。太山府君。司命。行疫神。諸餓鬼等。來入壇場。同時受供と言ひ。祈願の所には。若欲除疫用焰摩天とも云へり。（諸五道冥官とある五道は、地獄、畜生、餓鬼、修羅、諸天の五道を云ひ、某々の冥官をも、帥うる由なり、冥司の總王と云へば、然も有べし、但し此は舊よりの印度說なれど、太山府君、司命と云へるは、印度說ならず、漢說なるに、入たるは、此軌の譯者不空三藏の加筆なり、然れども此等を加たるも、意は違はざるなり、其は太山府君、司命神など云ふは、西戎國にて、幽冥の事を行ふ神と立たる物なればなり、其由を委しく云むは、說長ければ、此に漏しつ〕故是を以て。佛祖やがて其古說を襲ひ取りて。閻羅王界の事をば說るなり。（古今の文盲學者ども、此王の事、また地獄の事など、其說の、よりて起れる本を知らず、少か佛籍の片端をのぞき見て、總て佛祖が妄誕なりと論ふは、愚昧なり、然れども、其は佛祖が常に、妄誕の僻を持たる故に、過に眞說の交れるをも推こめて、然は云はるゝなりけり〕さて此界の事を。また鬼道とも鬼趣とも云へり。其はまづ。立世論云何品に。云何鬼道名閃多。閻摩羅王名閃多。故其生與王同類故名閃多。復說。此道與餘道往還。善惡相通。故名閃多と言ひ。（名義集に、閃多此云鬼とあり、）大毘婆沙論に。云何鬼趣名閉戾多。答。施設論說。如今時。鬼世界王名琰摩。劫初時有鬼世界王。名粃多。是故往彼生彼。諸有情類。皆名閉戾多。卽是粃多界中諸所有義。有說。由造作增長增上慳貪。身語意惡行。往彼生彼令彼生相續。故名

鬼趣と云へり。(なほ異説を多く擧たれど、煩はしければ抄し出ず、)今此二説を合せて考ふるに。まづ婆沙の旨は、劫初時の鬼世界王を。粃多と云へりし故に。以下缺

世間有三使者。一者老。二者病。三者死也。有衆生身行惡。口言惡。心念惡。身壞命終。墮地獄中。獄率將此罪人。詣閻羅王所。白言。此是天使所召也。唯願大王善問其辭。王問罪人。言。汝不見初使耶。罪人報言我不見也。王復告曰。汝在人中時。見老人耶罪人言見。王言。汝何不自念我亦當爾。彼人言我時放逸不自覺知。王言。汝放逸不能收惡從善。今當令汝知放逸苦。又告言。汝不見第二天使耶。對曰不見。王言汝在人中時。見病人耶。罪人言見。王言。汝何不自念我亦當爾。彼人言。我時放逸不自覺知。王言。汝放逸不能改惡從善。今當令汝知放逸苦。又告言。汝不見第三天使耶。對曰不見。王言。汝在人中時見死人耶。罪人言見。王言。汝何不自念我亦當死。彼人言我時放逸不自覺知。王言。汝放逸不能改惡從善。今當令汝知放逸苦。時閻羅王以三天使。具詰問已卽付獄率。時彼獄率。卽將罪人。詣大地獄。其大地獄。縱廣百由旬。下深百由旬。

起世經に。佛告諸比丘。世間凡有三使者。何等爲三。老病死也。世間之人以自放逸。身口意惡。其人命終趣於惡道。生地獄中。其守獄者。驅彼衆生。卽時將至閻摩王前。白言。天王此等衆生。昔在人間。縱逸自在。恣身口意。行於惡行。其惡行故今來生此。天王善敎示之。好訶責之。時閻摩王問罪人言。汝善丈夫。昔在人間。見初天使善敎示汝。好訶責汝不耶。答言。大天我實不見。時閻摩王復更告言。汝昔在世間時。豈不見婦女丈夫之衰老耶其人答言。大天我實見之。王言汝愚癡人。昔日旣見是相。云何我亦不離是法。於身口意。不作善業。其人答言。我實不作如是思惟。王言。若如是者。汝自懈怠。行放逸。不修身口意善業也。以是因。汝當長夜得大苦惱。是汝自作聚集故。得此報也云々。(此問は、二使三使をもて、訶責敎示する趣、本文の如く、病と死となり、然しも異こと無れば、約めたり、なほ本文および、其の餘の經等にも、老病死

の體相を、いと精細に説述たれど、此は人の普ねく知る事なるに、その文の繁きが煩はしければ、本文にも、唯に老人病人とのみ約め記せり、）時閻摩王。以三使者致示訶責訖。卽棄捨之。卽勅令將去。時守獄者。卽執罪人手臂。以頭向下。以足向上。遙擲置於地獄中と云へり。本經と互に精麁は有れど。三使者問の事は違はず。然るに大樓炭經は。五問にて。其使者など云はず。是ぞ古色なるべく所思たる。（樓炭經は、阿含よりも却りて古體なること、上にも下にも往々論ふを、合せ考へて知るべし、）其は本經また。起世經こそ三問なれ。閻羅王經。泥犂經。增一阿含なども。皆五問なるは。是古説なる事を辨ふべし。（然るに、本經また起世經に、其の二問を除きて、三問とせるは因あり、其は下に云を見べし、）其經等の中に。閻羅經。泥犁經の二部は。ことに古色を存せるは。疑なく古梵志らに。傳來せる。古説なるを。竊に盜みて。佛説に託せるにぞ有りける。（佛經どもに、元より梵志に傳來せる古説を竊みて、佛説に託せるが多かること、上にも下にも、數所に論ふを見

辨ふべし、閻羅王經を、具には閻羅王五天使者經といふ、宋三藏法師慧簡譯、とありて三紙半ならでなし、泥犂經は、鐵城泥犂經といふ、東晉沙門竺曇無蘭譯にて、五紙半あり、此二經の中にも、泥犂經は、殊に古體なる物なり、具眼の人は、披見て知べし、猶此經の下に云ふを見べし、）故今二經の攙入文。また重復せる文を去り。倂せて此に標出して。其古説を著さば。凡人於世間身行惡。口言惡。心念惡。見邪行邪。其人壽終墮惡道。或入泥犂。人身行善。口言善。心念善。見正行正。其人壽終生天上。或生人間。譬如雨泡。天雨滴而。一泡興一泡滅。世間人死。識神出生。亦復如是。（增一阿含善聚品なる、閻經王五問説は正に此説を取れるなるが、惡道と云に、餓鬼道、畜生道を當たり、）在世間人不孝父母。不畏帝王。不學經戒。不事道人。不敬長老。不施貧窮。不畏後世。不隨仁義。無可用心。如是人死。其魂神卽墮泥犂中。（道人を、中阿含に、梵志といひ、樓炭經には、婆羅門とも、道人とも有り、但し右の經々に、不事沙門道人とある沙門は、

例の攙入文なれば、除きたり、)泥犂卒名曰旁。旁卽將行至閻羅王所。輙白王言。此人非法。當有所見。惟大王處此人過罪。時閻羅王卽呼其人。前對問言。汝於世間。不念父母養育推燥居濕乳哺。長大之恩。何以不孝父母。其人答言。我實闇愚不知故耳。閻羅王言。汝處罪者。非父母君天師長道人過也。汝自所作。今當受之。是第一問。(此事、增一中、二阿含にも、第一問なれど、大樓炭經は、却りて第四問にあり、)王復問言。汝於世間不見男子女人病困時。羸劣甚極。手足不任。衆醫不能治者耶。其人答言。我實見之。閻王復言。汝謂獨可得不病耶。凡人已生。法皆當病。其强健時何自放恣。其人答言。闇愚故耳。閻羅王言。汝以愚痴自處其罪。非父母君天師長道人過也。汝自所作。今當受之。是第二問。(此事增一、中、二阿含、閻羅王經ともに、第三問にあり、今は泥犂經によれり、)王復問言汝於世間不見男子女人年老時。髮白齒墮。羸瘦僂步。起居持杖者耶。其人答言。我實見之。閻王復言。汝謂獨可得不老耶。凡人已生法皆當老。其强壯時何自放恣。其人答言。愚暗故耳。閻羅王言。汝以愚痴自處其罪。非父母君天師長道人過也。汝自所作今當受之。是第三問。(此事增一、中、二阿含ともに、第二問にあり、閻羅王經は、第三問にあり、)王復問言。汝於世間。不見男子女人諸死亡者。或藏其屍。或棄捐之。一日二日至七日。肌肉壞敗。狐狸百鳥蟻蟲皆就食之耶。其人答言。我實見之。閻王復言。汝謂獨可得不死耶。凡人已生。法皆當死。其在世時何自放恣。其人答言。愚暗故耳。閻羅王言。汝以愚痴自處其罪。非父母君天師長道人過也。汝自所作。今當受之。是第四問。(此事諸經みな、第四問にあり、)王復問言。汝於世間。不見弊人惡子。爲吏所捕。案罪所應刑法加之。或斷手足。或削鼻耳。刓刻肌膚。熱沙沸膏。燒灌其形。裏蘊火燎。懸頭日炙。屠割支解。毒痛慘拜耶。其人答言。我實見之。閻王復言。汝謂爲惡獨可得解耶。唯眼見。世間罪福分明。汝在世時。何不守善勅。自放恣耶。其人答言。愚暗故耳。閻羅王言。汝自用心作不忠正。非父母君天師長道人過也。

今是殃罪。要當ニ自受一。豈得ニ以レ不レ樂故止一耶。是爲ニ閻王忠正之教。第五問一(閻羅王經は、是より以下を闕たり、故是より末は、泥犁經のみに依れり。)前對已畢。泥犁旁卽牽持去。詣ニ第一鐵城一云々とあり。(この云々と約めたる文は、下に引く八地獄の說、すなはち是なり。)然れば梵志の古說は五問なるを。第一第五は。佛祖が謂ゆる世事諦なる故に此二問は除きて。其要旨たる。老病死の三問に約し。其を天使など號けて。我が立法に附會せるを。本經に其說を用ひ。起世經に其を委曲し。大樓炭經には。本より五問の說を用ひて。天使者など云はず。增一中の二阿含には。五問の古說は用ひつゝも。天使者と云語をば。用ひて。是また其說を委曲せるにぞ有りける。(然るは、五問の古說世に普く聞えて有し故に、五問の說なる經々を記せる徒、さる佛意をば得しも悟らず、有來し儘を取用ひ、佛意を附會しつゝ、己が向々作傳へたるなり、故是をもて、使者と云へるも、云ざるも有るなり、誠に諸經盡く、佛祖が說る其儘を、阿難が結集して記傳へたる物ならましかば、假令說法の精麁はありとも斯の如き相違の有べくも非ず、)見高からむ人は少しく思ふべし、)さて本文に。時彼獄卒。卽將ニ罪人一。詣ニ大地獄一。其大地獄云々とある。大地獄は。閻羅王の司る地獄にして。上なる大小の地獄等とは別なり。然るを此に。唯々かく言へるのみにて。其事相を載さず。起世經には。此獄の別に有る山をさへに載さねど。大樓炭經に。閻羅王界の所に。其界有ニ十大泥犁一。一名ニ阿浮一。二名ニ尼羅浮一。三名ニ阿呵不一。四名ニ阿波浮一。五名ニ阿羅留一。六名ニ優鉢一。七名ニ修揵一。八名ニ蓮華一。九名ニ拘文一。十名ニ分陀利一。とありて。其事相をも略載せり。(なほ此前文に、其泥犁城、廣長各々四萬里、窈々冥々、四方有ニ四門一、諸角治甚堅、垣壁以レ鐵作、上亦有ニ鐵覆一、其地悉布レ鐵、火悉自然出、ともあり、增一、中の二阿含も、此界の地獄を擧て、四阿鐵城の大地獄など云へるが、其說相は、甚く腐腐し。)然れば是本色なりしを。長阿含の世記經は。上に云ふ如く。樓炭よりも後なる故に。此界より取りて。二鐵圍山の中間に移せるが。過ちて此に。其大地獄縱廣百由旬。下深百由旬。と云文をば削

り殘せるを。起世經はまた其後に成れる故に。此文をも皆削り去たり。其は樓炭經なる此界の十大泥犂の名と。世記經。起世經なる。彼處の十大地獄の名と。同きを以て辨ふべし。(互に少づゝ語の轉訛ある故に、其れとも有らぬ如く見ゆれど、能く按見よ、もはら同じ地獄なるをや、偖こそ樓炭に、彼處の八大地獄の事は記せれど、十大地獄の事は、彼處に記さず、是を以ても、樓炭は古く、世記經は、其次に成り、起世經は、また其後に成れる事をし辨ふべし。)斯てその樓炭經に、しか說たるは。彼の泥黎經の古說を取れるにぞ有りける。然るは彼の經に、閻羅王五問の事を記し畢て、其連次の文に。泥黎旁卽牽去將。詣第一鐵城。名阿鼻摩城。有四門。周帀四千里。中有大釜。長四十里。中皆有火。人遙見之恐怖戰慄。泥犂旁。劒刺人內之數千萬人。門皆閉晝夜不得出。人在其中數千萬歲。火亦不滅。人亦不死。久々遙見。東門自開。人皆欲出。走到其門。門復自閉。欲出諸人。於門中共起大鬪諍。久々復遙見西門開。諸人皆走往門復閉。復於門中共大鬪諍。久々復遙見南門開。諸人皆走往門復閉。復於門中共大鬪諍。久々四門皆復自開。人得出。自以爲解脫。(增一阿含、中阿含に、一地獄なるは、卽この地獄にて、中阿含には、此を四門大地獄といひ、二經共に、此獄の苦相に、今引く八地獄の苦惱をみな現はし、なほ仰山に說たるが中に、增一に、地獄左側、極爲火然、鐵城鐵郭、地亦鐵作、有四城門、極爲臭處、似所染屎溺、とも云へり。)復入第二泥犂。人足著地卽焦。擧足肉復生。有東走者。西走者。南走者北走者。周帀地火熱。數千萬歲。乃竟自以爲得脫。(此第二地獄の名を本書に、鳩延泥犂とあり。)復入第三泥犂。其中有蟲名嘔。喙嘴如鐵。黑頭足。蟲遙見人。皆帀來啄人。肌骨皆盡。如是數千萬歲。乃竟得出。人自以爲得脫。(此第三地獄の名を、本書に彌離摩得泥犂とあり。)復入第四泥犂。其中有山。石利如刀。人皆走上其巓。復有走下者。向足皆截。地皆如利刀。如是數千萬歲。乃竟得出。人自以爲得脫。(此第四地獄の名を、本書に舃羅多泥犂とあり、餘の經々には、皆その石の利を、直に刀、または劒

と云へるを、此經のみ、如レ刀と云ひ、如二刺刀一など云るは古色なり、)復入二第五泥犂一。其中有二熱風一。相逢避レ之。不レ能二得脫一其人求レ死。不レ能レ得レ死。求レ生不レ能レ得レ生。如レ是久々數千萬歲。乃竟得レ出。人自以二爲得脫一。(此第五地獄の名を、本書に阿夷波多桓泥犂とあり)復入二第六泥犂一。其中多二樹木一。皆有レ刺。樹間有レ鬼。人入二其中一者。鬼頭上出レ火。口中出レ火身爲二十六刺一遙見レ人。來大怒。火皆見。十六刺皆貫二人身體一裂如レ食レ之。走欲二得脫一走常觸二此鬼一。如レ是數千萬歲。乃竟得レ出。人自以二爲得脫一。(この第六地獄の名を、阿喩操波犂桓泥犂とあり)復入二第七泥犂一。其中有レ蟲名レ鶉。人入二其中一者。是蟲飛來入二人口中一。食二人身體一。人皆走極。蟲食不レ置。人皆四面走欲二求脫一。不レ能二得脫一。如レ是數千萬歲。乃竟得レ出。人自以二爲得脫一。(此第七地獄の名を、本書に桀蓰務泥犂とあり)復入二第八泥犂一。其中有二流水一。人皆墮二水中一。水邊有二刺棘一。水熱過二於世間湯鑊一。熱沸踊躍。人皆熟爛走欲レ上。岸邊有レ鬼。持レ矛逆刺レ人。復入二其中一不レ能二得出一。入皆隨レ水。下流復有レ鬼。激如鉤取問レ之言。從二何所一來。其人言。我不レ知下從二何所一來上。我但飢渴欲二飲食一。鬼言。我與。卽取レ鉤托二開其口一。因取二消銅一注二入口中一。皆焦爛求レ死不レ能二得死一。求レ生不レ能二得生一。諸泥犂中人。皆復得レ出。自以二爲得脫一。(此の第八地獄の名を、本書に墮檀羅泥渝泥犂とあり)反入二第七泥犂一。次第還入二第一阿鼻摩泥犂一。時來至人。遙見二鐵城一。皆大歡喜呼二稱萬歲一。閻王聞レ之。問二泥犂旁一。是何等聲。泥犂旁言。是呼聲者。是前過二泥犂中一者也。閻羅王言。是皆不レ孝二父母一。不レ畏二天命一。不レ畏二帝王一。不レ畏二禁戒一。不レ承二事道人一者。卽復呼二其衆人一。敎二示之一言。今汝解脫。去復爲二人子一當二端身端口端心一。一對畢。乃皆得レ出。在二城外地一。諸死者。先世爲レ人時。作レ惡猶有二小善一。出二泥犂一己後生二善道一。人從二泥犂中一出。各自正心正口正行。不三復還入二泥犂中一。泥犂中亦不レ呼レ人。各自思惟。亦可レ爲レ善。人死入二泥犂一者。侯王道人乃得二與レ閻羅相見一耳。凡餘人但隨レ群入。閻羅地獄王名也とあり。(倶舍論に、大自在天、作二大功力一生二世間一、又生二地獄一とあるは、古傳と聞えたり、)阿含起世。その餘の經

等に記せる。地獄の趣より。事少く甚古色なるは。元より此は。梵志に傳はる古說にて。總て泥犂說の祖經なるが故なり。其は何を以て知なれば。其事實の簡古なるは更にも言ず。雜阿含經に。彼の阿育王が。始め佛法を知らず。兇惡なりし時に。地獄經及び五天使經等を案じて。地獄の狀を作れる事あり(此の事委しくは第口品に載すを見て知べし)地獄經とは。即この泥犂經を云ひ。五天使經とは。即上に引く。閻羅王五天使者經。と聞ゆるを以て是を知れり。(泥犂は、すなはち地獄の梵語なれば、地獄經と云に同じ。)阿育王が時は。佛滅より百十六年後なれど。佛說の經は。いまた記載なき間なるに。此の二經の既に有しは。梵志の古說なるが故なり。(此王が時頃に、いまだ佛說の經無りしこと、此も第口品に委しく辨ふるを見るべし、大毘婆沙論百七十二卷にも、此の經の事見えたり。)さて地獄の在所は。大毘婆沙論に。大地下に其獄あり。地下の獄なる故に。地獄と云よし言るが。本古の說にて。其事相は。大かた泥犂經に記せる如く。なほ簡に傳へけむを。佛祖その說を用ひて。樓炭經なる十大泥犂の說法し。後には其在所を。二鐵圍山の中間に移し。また別に八大地獄。百二十八小地獄の說をも作り。その事相苦相を。なほ仰山に妄說せるを。比丘ども次々に。傳聞しもて來けるに。彼本故の說は。いと早く世に弘まりて有れば。後に諸經論を記せる徒。彼も此も捨がてに載しつゝ。互に異同重復せる說等の。多く出來たるにぞ有りける。(然るをなほ、後世和漢の比丘ら、彼れをも此れをも、如來の金口說法と、ひたぶるに尊奉しつゝ有りあるは、憐れむべし。)

彼閻羅王晝夜三時。有二大銅鑊一自然在レ前。若鑊出二宮內一。王見畏怖捨出二宮外一。若鑊出二宮外一。王見畏怖捨入二宮內一。有二大獄卒一。捉二閻羅王一臥二熱鐵上一。以二鐵鉤一擗レ口使レ開。洋銅灌レ之。燒二其脣舌一。從レ咽至レ腹。通徹下過無レ不二燋爛一。受レ罪訖已。復與二諸采女一共相娛樂。彼諸大臣。同受レ福者亦復如レ是。時閻羅王自生レ念言。世間衆生迷惑無識。身爲二惡行一口意爲レ惡。故受二此苦一。若能改レ惡爲二善行一者。命終受レ樂如二彼天神一。我若命終生二人中一。若遇二如來一者。當下於二正法中一。剃二除鬚髮一。服二三法衣一。出家修道。以二清淨

信。淨修梵行。所作已辦。斷除生死。於現法中自身作證。不受後有。

大樓炭經に。閻羅王晝夜各三過。燒熱銅自然火。在前宮中。王即恐畏。衣毛起竪。即出宮舍外。外亦自然有火。王大怖懅還入宮。泥犂旁便各々取閻羅王。撲燒鐵地。持鐵鈎鈎其口開。以消銅灌王口中。焦喉咽。已皆焦腹中腹胃五臟。銅便下過去。燒炙毒痛不可忍。過惡未盡。故不死と見え。(此はかの十大泥犂の事相を、記し畢たる所に見えたり、)起世經に。其閻摩王。以惡不善業果報故。於夜三時晝三時間。自然而有赤鎔銅汁。在前出生。當於是時。其王宮殿即變爲鐵。於先所有五欲功德。有目前者。皆沒不現。若在宮內。則出宮內。王見怖畏。諸毛皆竪。即便出外。若在宮外。則出宮外。王見大怖。即走入內。時守獄者。取閻摩王。高舉撲之。置熱鐵地。其地熾然。極大猛盛。撲令臥已。即以鐵鉗開張其口。鎔銅汁瀉置口中。時閻摩王被燒脣口。次燒其舌。復燒咽喉。復燒大腸及小腸等。次第燋然從下而出。時王念言。一切衆生。以往昔身口意惡故。彼等皆受種々苦惱。我今亦然。嗚呼願我捨此身。生於人間中。於佛敎法。正得信解。更不復於後世受生。發是善念時。閻摩王宮殿還成。天五欲及功德。現前悉皆具足とあり。(此文に、從下而出と云までは、本文また樓炭經と同說なれど、時に王念言と云より下は、趣意別なり、其は下に云ふを見べし、)さて此神王に。晝夜三熱の大苦惱あり。と言へる說法は。梵志の古說に。此は冥府鬼神の總司と。甚く信ずる神なる故に。例の神天を。總て論ひ腐さむと欲る立法なる故に。始めて然る惡說を發して。其大苦惱も。我佛法に歸依する意念の起るときは。息よしを說て。世人を面向むと爲たる物なり。(其は梵志の古說に、さる傳へのなきは更にも云ず、神祇の本つ御國、および萬國古今に通りて、天神地祇に、三熱の苦惱ありと思へる、古傳も說もなき事にて、此は佛說にかぎる、大惡邪說なるを以て知べし、此邪說よりして、我國中古の奸比丘等、羅山先生の說の如く、時の王公大人を煽惑して、神祇に三熱の苦惱ある由を、專らと說き、然る神祇を尊信すれば、

害ありて利益なし、神とは云へど、其本地、佛菩薩なるは、利益あり、と邪說して、有ゆる神祇に、本地佛を立て、菩薩といひ、權現と云ふ事をなも、始めたりける。）斯くて後世に作れる經等に。佛祖が此大妄說の尾を結びて。此王また其諸臣の本緣を云へる說に。閻羅王者。昔爲毘沙國王。經與維陀始生王。其戰兵力不敵。因立誓願爲地獄主。臣佐十八人。領百萬之衆。頭有角耳。皆悉忿懟。同立誓曰。後當奉助治此罪人。毘沙王者。閻羅王是也。臣佐十八人者。諸小王。是卽主領十八地獄也。百萬衆者。諸阿傍是也と言へり。（こは問地獄經に見ゆるを、採て記しつ、なほ種々の事ども見えたり。）若し是の說の如くは。毘沙王と云しが。彼所に王と爲ざる以前は。彼の界に總司たる王の無りしと。爲むか。然も有らば。冥中の事。誰か其の權を取れる。其辨なきは如何ぞや。猶後世の賣僧ども。上の件の佛說に依りて。種々說を作れる中に。唐土の僧の作れる。佛說十王經と云物あり。其には此王を。謂ゆる地藏菩薩の化身なりと言へり。（是らの事は、古今妖魅考に委しく論へれば、彼の考に就て見べし。）さて大樓炭經に。閻羅王念言の事なきを。本經に。右の如く念言を載せり。然れど其は。地獄に墮たる衆生の。苦惱を憐れむ心より。（但し此は、上に引く五問の旨を思ふに、古說ならむもまた知べからず。）我が苦惱をも悲める由なるを。起世經に。また頗ぶる其說を加上して。其苦惱を受る時に。さる善念を發する由に。佛力の爲に。本の如く。宮殿も成り。五欲功德も悉く具足する由に作れり。次々に記者の。巧になり行く趣に。心を著て思ひ辨ふべし。（なほ此王に三熱の苦ありと云ふより始めて、鬼神、また天狗龍蛇の類までも、三熱を苦しむと云ふ說に就ては、唯我獨得の祕說あれど、思ふ旨あれば、此には姑く漏すになむ。）さて新婆沙論に。瞻部洲下有大地獄。瞻部洲上。亦有邊地地獄。及獨地獄。或在谷中。或在山上。或在曠野。或在空中と云へる。邊地地獄より以下の地獄のことは。僧護因緣品に考へ記すを見るべし。觀物三昧海經に。地獄。畜生。餓鬼などの諸苦惱を說擧りて。稱南無佛。稱佛恩力。尋卽命終生四天處。生彼

天已悔過自責。發菩提心。諸佛心光不捨是等。攝受是輩。如羅睺羅。教避地獄如愛眼耳。故起世經。世尊說偈言云々。（法苑の文なり、）彼の地獄世界は。金剛山と。大金剛山との中間に在るを。閻羅王宮は。大金剛山の內にと云へば。其の山の中心に在て。地獄を治意と聞えたり。（但し此は佛說の意にこそあれ、實の古說は、地獄を地下に在とふ傳なれば、其の王宮も、必ず其處に在とふ傳と見えたり、また然しも僞說せる地獄、また閻羅王の說ならむには、其の驗有るまじき事なるに、法苑珠林を始め、諸書にも記し傳へ、また今も往々、かの苦相によく合ふ、地獄の相を見る者あるは、如何と難むる者も有なむか、若し然もあらば、是の事も深く思ひて、妖魅考に記せるを、披き見て曉るべし。）

須彌山北大海水底。有羅呵阿須倫王域。縱廣八萬由旬。其域七重。七重欄楯。七重羅網。七重行樹。周帀校飾。以七寶成。其王宮殿。縱廣萬由旬。復有毘摩質多阿須倫王。睒摩羅阿須倫王。小阿須倫王。阿須倫大臣等。各有宮殿。皆悉七寶所成。各將無數大衆。隨縱羅呵阿須倫王。阿須倫王宮殿。在大海水下。海水在上。四風所持。一名住風。二名持風。三名不動。四名堅固。持大海水。懸處虛空。猶如浮雲。去阿須倫宮。一萬由旬。終不墮落。阿須倫王。福報功德威神如是。

大樓炭經に。佛言。須彌山下。深四十萬里。有阿須倫。名抄多尸利。其城郭。廣長各三百三十六萬里。以七寶作之。四方有四門。一一門邊。各有十阿須倫居止。其城東出四萬里。有維摩質阿須倫城郭。廣長各三十六萬里。以七寶作。四方有四門。各有三百阿須倫止。抄多尸利阿須倫城南。出四萬里。有波陀呵阿須倫城郭。廣長各三十六萬里。以七寶作。四方有四門。各有三百阿須倫止。抄多尸利阿須倫城西。出四萬里。有波利阿須倫城郭。廣長各三十六萬里。以七寶作。四方有四門。各有三百阿須倫止。抄多尸利阿須倫城西。出四萬里。有羅呼阿須倫城郭。廣長各三十六萬里。以七寶作。四方有四門。各有三百阿須倫止。抄多尸利阿須倫。身高二萬八千里。有高二萬四千里者。有高二萬里者。有高萬六千

里者。有高萬二千里者。有高八千里者。有高七聲者。長六聲者。五聲者。四聲者。三聲者。二聲者。最小者長一聲。抄多戸利阿須倫宮。有四風。常持之。主持水在上。如浮雲矣。と見え。（本書此に維摩質の名を脱せり、今闘戰品によりて補へり）起世經に。佛言。須彌山王東面。過千由旬。大海水下。有鞞摩質多阿須羅王國土住處云云。須彌山王南面過千由旬。大海水下。有踊躍阿修羅王宮殿住處云々。須彌山王西面過千由旬。大海水下。有奢婆羅阿修羅王宮殿住處云々。須彌山王北面過千由旬。大海水下。有羅睺羅阿修羅王宮殿住處。云々とあり。（此は樓炭經に合せて思ふに、中央なる抄多戸利阿須倫を漏せり）此二經に依るに。本經は。中東南西の四阿須倫の事を落して。北面の一阿須倫のみを存せるなり。（そは本經、この文中に、毘摩質多阿須倫王、睒摩羅阿修倫王といふ、二王のあるを以ても辨ふべし）さて大樓炭經なる。阿須倫品は幡飾の文少くして。十行二十字を二葉半に足らねど。要旨を漏さず。起世經の阿修羅品は。同じく十行二十字を。十三

葉ばかり有れど。例の幡飾文を除くときは。却りて精からず。（また本經は、たゞ羅呵阿修倫の事のみなるに、十行二十字を三葉半あり、全品備りたらむに、其多有むこと想ふべし、凡て佛經の多分なるは、實用の事少なく、少分なるは、實用の事多かり、牛に汗する六百巻の、大般若經は、一紙に足らぬ般若心經に及ざるを、古今の佛者らは、其を知らずてぞ有りける）さて阿修倫のこと。放光般若經音義に。阿修倫。又作阿須羅。或作阿修羅。皆訛也。正言阿素洛。阿者無也。亦云非素洛酒也。亦云天。名無酒神。亦名非天。經中亦名無善神と云ひ。（非天と云ふ由を、大日經住心品疏、淨名疏などに、此神果報最勝、鄰次諸天。而非天也、また雖天趣、無天實德故、曰非天也とも云ひ、無酒神と云ふ義を、阿修羅採四天下華、醞於大海、魚龍業力其味不變瞋妬誓斷、故言無酒と云ひ、無善神と云由を、其所作乖理不善故など見えたり）大寶積經音義に。阿素洛。正云阿素羅。此曰非天。諸鬼神中最大福德。印度風俗。凡諸鬼神通名爲天。此類常與諸天爭勝。

故以非天簡之。諸餘眷屬。或住諸山八間海島。往々聞有阿修羅窟。即傳記所説清辨菩薩。所入處是也と言へり。(大般若經音義にも、常與三十三天力爭勝負、故爲簡別云非天。有大神通幻力、能現大身、自在無礙也と言ひ、名義集に、大毘婆沙論を引て、舊翻無端正、男醜女端、素洛名端正、彼非端正故、名阿素洛とも云へり、猶諸書に、種々に翻譯あれど、腐々しければ漏しつ、)羅呵阿修倫は。名義集に。羅睺。文句此云障持。化身長八萬四千由旬。擧手掌障日月。世言日月蝕。釋名云。日月虧曰蝕。稍小侵虧。如蟲食草木之葉也とあり。(また覆障とも翻する由、諸書に見えたり、)此は本經の闘戰品に。阿修倫(頭注云アスリン及び牟提輪天子來れる事あり、七未曾有の事、)大有威力。而念言。此日月行我頂上。我取日月以爲耳璫。自在遊行耶。瞋恚熾盛。即念捶打。と云ひ。(大樓炭經、起世經にも、此の事見えたり、)增一阿須倫品に。佛告諸比丘。受形大者。莫過阿修倫王。形廣長八萬四千由旬。其口縱廣千由旬。欲觸犯日月時。化身十六萬由

旬。往日月前。形甚可畏。日月王見已。各懷恐怖。不寧本處。故不有光明。と有に依りて云へる說なり。(なほ此の日月蝕の佛說は、次卷に論ふを見べし、大毘婆沙論百五十一卷に、遏邏呼阿素洛帝形量廣大、長十六千踰旬とあり、甚く少さし此は何ぞや、)毘摩質多は。法華經の音義に。毘摩質多羅。吠摩質怛利。此云綺畫。或云寶飾。また名義集に。文句。此云淨心。亦云種々疑。即舍脂父也と言ひ。正法念處經に。修羅居。在五處。住一在地上衆山中。其力最劣。二在須彌山北。名曰羅睺。三復過二萬一千由旬。有修羅。名曰勇健。四復過二萬一千由旬。有修羅。名曰華鬘。五復過二萬一千由旬。有修羅。名曰毘摩質多。此中出聲徹於海外。自云。我是毘摩質多。故云響高。ともあり。(是が事、なほ下に引く、雜阿含經を見て知べし、)睒摩羅阿須倫は。此の名。本經より外に所見なし。(然れど考へあり、下に註ふを見べし、)さて金七十論に。違陀中の說を引て。天帝及阿修羅王。爲時節所滅時。不可免。と云へる論あり。(文の意は、違陀中に謂ゆる、天

帝釋、阿修羅王の如き、威德ある神王と言へども、世界滅盡の時節に爲ては、免る可からずと論ひ貶して、迦毘羅仙が法を、首張せるなり。）然れば是また。四達陀典の古說に有し神王なること。著明なり。然るに上第三節に引たる。同論八分生處の說に。五閻摩羅生とある文を。また別處にも擧たるに。五阿修羅生とあり。斯在ば。本來の古傳は。同神の異名にて有りけるを。佛祖が例の翻案して其事實。また所業をも引分て。別なる二惡神と爲たるにぞ有りける。（凡て佛祖が態として、古說なる一神一天を、幾神幾天にも引分て、其事實また所業をさへに、別にせること、今盡く計ふべくも非ざれば、次々に因あらむ所々に、辨へもて行くを見て知べし。）さて阿修羅王の古說。もと是一神なる上は。樓炭經なる。五大阿須倫王。起世經なる。四大阿修羅王。孰れ佛祖の正說にもあれ。共に妄誕なれば。其名も事跡も取に足らず。（妄誕なる故に、名も說も互に異れり。）然れど本經の阿修倫品なる。睒摩羅阿須倫王と云ふ名は。閻摩羅王と。阿修羅王と一神なる。其二名を混じて。號たる名の。遇に殘れる物とこそ覺ゆれ。（但し此の名は、本經にのみ見えて、餘の經論疏どもには見えず、然れば比よなき、本經の賜物なりけり。）倩かく按定して後に。熟々想像れば。此の神王の傳說は。挂まくは畏けれども。我が健速須佐之男大神の御傳を。訛なから。傳聞し奉れる也けり。請その由を言はむに。まづ此王の强猛威力無比なりと言が。彼大神の御上に等きは。更にも云ず。天上より貶墜せられて。住處を海底に移せりと云が。彼の大神の御父神より。海原を治せと。勅承給へる後に。天御國にて。甚く荒び給しかば。根底國に遷逐はれ給へるに符ひ。（大毘婆沙論に、世初成時、阿素洛、先住㆓蘇迷盧頂㆒、三十三天、遍㆓其頂㆒而住、彼瞋恚、卽便退下と見え、楞嚴經に、阿修羅於㆓天中㆒、降㆓德貶墜㆒、と有るなどを思ひ合すべし。）往々天上に上りて。諸天と爭戰すと云が。彼大神の。天國に昇り坐し。深き故ありて。荒び給へるに由あり。（本經の戰鬪品を始め、樓炭、起世、立世論など、其餘の經論等にも、普く見えたり、但し此御荒び有りし事は、惡神なる故には非ず、

根國に就給へるも何も、深き由ある事なりかし、）まは月月を。蝕せしむと言ふが。其御荒びの時に。世間常闇と成れるに符ひ。（上に引く文等に、手掌をもて、日月を覆障す、と云へる卽ち是なり、）其容貌は。雄壯にして。端正からねど。舍脂ちふ美麗しき女子を持て。其を天帝釋の正后に立たりと云が。其御女。須勢理毘賣命を。大國主神の正后と爲給へるに由あり。（大般涅槃經音義に、舍脂夫人舍脂、此云㆓淨量㆒、是阿修羅王女、爲㆓天帝㆒所㆑重也とあり、四阿含中に、多く此名見えたり、）種種の華を採て。酒を醞れりと云ふも。彼大神の。種々の菓を聚めて。酒を作り給へるに縁ありて聞ゆるに。況て阿修羅。閻摩羅。同神なれば。彼大神の就坐る。根底國と云は。夜見國とも言ひて。甚闇く汚き處にて。蛇室屋。呉公室屋など云がありて。辛き目見する室なるに。彼の閻摩王界なる。泥犂と云は。窈々冥々として。甚臭く穢き處にて。其中に。蝠と云ふ惡蟲の住むとふ泥犂。また鶉と云ふ惡蟲の在とふ泥犂の。最熟く符へるを想ふに。彼國籍に。泥犂那といひ。捺落迦と云ひ。翻して地獄と云なるは。我が夜見國の。古傳の訛説なること。著明なり。是灼然ならむ上は。閻摩羅といひ。阿修羅と稱する王の。速須佐之男神なること。更に疑なき物なり。（故是をもて、佛祖が閻魔界、および其地獄を、南方に在と云へるが、妄誕にて大毘婆沙論などに、大地下に在と云へるが、古説なる事を知れり、然るに彼泥犂經に、其の在所を云はざるは、泥犂と云ふ語は、やがて地獄と云ふ語なる故に、殊に其在所を云はずとも、地下なる事の著ければなり、是に就て、行智云ひけらく、閻摩は、夜摩とも云ふを思へば、闇てふ皇國語と、同義にやと云へり、實に然るべし、是に催されて、更に思へば、須佐之男命は、夜見國へ逐はれ給へる故に、亦名を、速佐須良命とも申せり、阿修羅と云ふ名は、其の訛ならむも、また知るべからず、）然れば。彼違陀典の古説は。閻摩羅とも阿修羅とも云ふ神。この大地下にありて。世界に有ゆる鬼神を總司り。衆生等が生時の善惡を。幽より察窮おきて。死後また更に。其の識神の罪福を決斷し。其業因のまに〳〵。善惡の諸道へ。某々に。班ち

遣すと云ふ説にぞ有りける。(こは上なる、閻羅王界の處に引出たる、書どもに、所見たる説どもを、見合せて辨ふべし。)然は有れど。此の事業に於ては。我が眞の古傳說より。此を思へば。大物主大神の。有ゆる鬼神を帥坐まし。(大物主と申す御名は、此由緒によりて負ませり、物とは、凡て鬼神を云へばなり。)幽冥府の事を所治し看に同じければ。其御態を。一つに混じて。訛り傳へたる也けり。(其は上なる閻羅王界の所に引たる、饑軌の文に、焰摩天喜時、人無横死、疫氣不發、此天瞋時、人非時死、疫氣充滿、と云へるが、崇神天皇の御世に、三輪に坐す大物主神の、御心に喜び給はぬ事有りしかば、疫氣の發れるにて知べく、五道冥官、太山府君、司命、行役神、諸餓鬼を帥る由なるが、大物主神の御名の由緒また千萬づの神ら、首渠者と坐て、幽冥を總司り給ふに、符るを以て知べし。)故是に至りては。其所業を二つに分けて心得べし。然れど。如是く混じ傳へたるも謂なきに非ず。そは大物主神は。速須佐之男大神の最愛み給へる御末子の神にて。彼の大神の坐す。

夜見國へも往坐て。彼神の稜威の御靈を蒙ぶり賜ひ。其後に。彼大神の治看すべき。天下に有ゆる國の。幽事を所治看す。大物主神と成り給へれば。然も訛り傳ふまじき事には非ずかし。(世に須佐之男神を、唯に荒ぶる最惡き神にて、惡鬼神の首領の如く、心得たるが多く、大物主神の、此世界に有ゆる鬼神の、首渠神と坐て、治め給ひ、幽より、世人の善惡を見行して、死後に其賞罰を糺判し給ふ、冥府の御業などをば都ても窺ひ知らざる人の多かるは、最も悲しき事なり、いかで心有らむ人は眞の古傳を精究して、眞の旨をも知りねかし。)偖茲に。立復りて。また本文の事を案ふに。阿須倫城の縱廣八萬由旬、其宮殿縱廣萬由旬と云へるに。上に引く增一阿含に。阿修倫王形。廣長八萬四千由旬。其口縱廣千由旬。化形十六萬由旬と說たり。常身は。其城よりも。四千由旬大きく其宮殿よりは。七倍餘り。大なるは。同じ阿含の佛說なるに。如何ぞや。(上に引く名義集に、謂ゆる智者大師が文句を引て化身八萬四千由旬と云へるは、常身の、是よりは、小なる由に聞ゆれど

も、佛祖が眞說は、常形八萬四千由旬にて、化形は、十六萬由旬なる物をや、然れば、智者の說は、其佛說をとり直せるなり、また華嚴經に、羅睺阿修羅王本身長七百由旬、化レ形長千六萬八千由旬、於二大海中一、出二其本身一、與二須彌山一而正齊等とあるは、此經阿含の經々よりは、また後世に作れる經なる故に、其長のうち合ざるに心付て說直せる物なり、)さて雜阿含經に。阿修羅王の大身なる因緣を說て。阿修羅前世時。曾爲二貧人一。居近二河邊一。常度レ河擔レ薪。時河水深流。復駛疾。此人數爲レ水所レ漂。殆死。得レ出時。貧人發願。我後身長大。一切深水無二過レ膝者一。以二此因緣一。得二此極大身一。四大海水。不レ能レ過レ膝。立二大海中一。身過二須彌一。手據二山頂一。下觀二忉利天一。と言へり。(また同經に、阿須倫王の本緣を說て、劫初成時、有二光音天一、入レ海洗レ身、水精入レ身、生二一肉卵一、經二八千歲一、乃生二一女一、身若二須彌一、千頭少レ一、頭有二千眼一、口別有レ千、少レ一、口別四牙、牙上出レ火、猶若二霹靂一、有二二十四脚一、有二九百九十九手一、此女、有時在レ海浮戲、水精入レ身、生二一肉卵一、復經二八千歲一、生二毘摩質多一、有二九頭一、頭有二千眼一、口常水出。手有レ千少レ一、脚唯有レ八、納二香山乾闥婆女一、生二舍脂羅睺一、舍脂者、是帝釋、取爲二夫人一、「羅睺由レ有二勢力一、多共レ天諍、帝釋前軍、先放二日光一、射二修羅眼一、令レ不レ見二天衆一、故彼以レ手障レ之、」とも見ゆ、本文には、羅呵は君、毘摩質多は臣、と聞ゆるに、此には、羅睺を、毘摩質多が子とせり、斯て帝釋天と、鬪諍の處は更なり、多く毘摩質多を、首領の如く說たり、是また、前後と說の合ざるなり、)抑是等の事どもは。佛祖が例の心留もなき。妄誕を。次々に傳聞し來れるにて。總て論ふにも足らざる說なれど。事の因に抄し出たるなり。(なほ其莊嚴歡樂の事、および天帝釋と戰ふ趣、また佛祖が許に來りて、互に未曾有の說競せること、其餘くさ〴〵の妄說ども多かり、近くは法苑珠林に、引並へたるを見るべし、)但し上に引たる。正法念處經に。修羅居。在二五處一住。一在二地上衆山中一。其力最劣。と云へる修羅は。其強猛なる所より。修羅と言なれど。此は別物にて。諸儀軌に。阿素洛窟に入る術。と云が多く有りて。往々其事

實の聞ゆるは。即是なり。（諸儀軌は、大抵梵志の修法、また謂ゆる外道らが法術を、竊める物なる故に、古説も多く交れる中にも、此はまゝ見聞せる事實と聞えたり、其は法苑珠林に擧たる、瞻波國の大頭仙人、また南印度の婆毘吠伽論、また摩伽多國の、一人が入れる窟など是なり、此は印度のみならず、諸國にも大山深山などに、然る怪しき物、また所のおり〳〵見ゆる事ありて、本朝の古き物語を、書集めたる書等にも、阿素洛窟とこそ言ざめれ、思ひ合さるゝ事多かり、そは余が妖魅考に論へる如く、謂ゆる變現地獄の類にぞ有りける。）さて此謂ゆる。阿素洛窟なる物等と。彼阿修羅王衆とを推こめて。修羅衆といひ。闘諍を好む由を以て。軍戰闘諍にて。命終せる人の識神は。此部衆に入ると云ふ説を建立し。此を修羅道とは云なり。此も佛祖が説法より起れり。（なほ下に、謂ゆる六道の事を論ふ所にも、言ふを見べし。）（鐵云コレハ別物なり是の説に依るときは、靜息と翻し、また遮とも翻して、謂遮令レ不レ造レ惡故、など云へる説どもは、後世の義譯にて、實の古意には合はざるなり。）是の説に依りて猶思ふに。鬼官之摠司也と云ひ。兄及妹と云へるは。夫婦の如くも聞ゆるは。畏けれど。大國主神の妹夫おはし坐て。幽冥世の大神と坐ます事をさへは。一に混じ奉りて。閻魔王と語り傳へたるには非じかと所思ゆ。印度の古俗にも、男に對して、女をば廣く妹といひ、女に對して、男を兄と稱へる事も、阿含中に往々見えたるは、本朝の古意によくも合へる事なればなり。）本文なる佛祖の説は。古傳を甚く變へたる説なれども。窈々冥々於ニ（コノ以下ナシ）

「これも別なり」

抑佛祖が。此愚説を作れる因縁を考ふるに。佛の生の子の名を。羅睺羅と稱ふは。印度にて。日月の蝕するを。羅睺羅といふ。翻して覆障といふ語なり。然るに彼小僧は。月蝕の時に生れたる故に。名を羅睺羅と負るを思ふに。印度の古風として。人の名をば。殊に祝して負すること。彼此に見たれば。佛説の如き。惡物の名を負すべき由なし。然れば。本は唯に覆障の義にて。月蝕の時を。羅睺羅といひ。此を壽たき時と爲來りけむ故に。名

けし事と聞えたり。（さるは普ねく、秘密儀軌とふ物を見るに、月蝕の時をば、多く修法成就する時とせるを以て、彼の國の古風に、月蝕の時を、佳時とせること知られたり、彼秘密儀軌とふ物は、佛書といへども、多くは梵志、また外道どもの修法說法にて、中々に眞の佛經よりは、古風の見ゆること多かればなり、其の由は既にも云るを、また下にも云を見るべし。）然るに佛祖。謂ゆる成佛せる後は。如來と自稱し。自知自覺自證の。唯我獨尊と稱して。大千世界の說を發して。其を我が刹土といひ。其の間なる事ども。一も知らざる事なしと立て。日月の蝕は更なり。世界に有ゆる事の因緣を。作說して。舊より有り來し阿修羅の事を。仰山に加說して。阿修羅世界の說をも建立し。（唯に阿素洛とて、山谷の巖窟などに住む物なる由は、儀軌どもに普ねく見えて、下に引く如くなれば、舊より有り來し物なることは明なり。）羅睺阿須羅と云ふ名をさへに作設けて。日月蝕を。それが所爲となし。當時は我も知らず。人も知らざる事なるを我一人知貌に說ちらして。世人を欺けるにぞ

有ける。（表紙ウラ）住心三四十三オニ沙門婆羅門ト云フコト必見ルベシ。

印度藏志卷之六稿

大壑　平篤胤撰述　男　平田鐵胤　同
孫　同　延胤　同
門人　角田忠行　校

(一)大千世界品第三

須彌山王半有日月。東出西沒周旋天下。日宮殿(頭注云日宮殿爲五風所持)縱廣五十由旬。宮殿四方遠見故圓。二分天金一分頗瓈。純眞無雜。內外淸徹光明遠照。日天子正殿。純金所造。高十六由旬。日天子身放光明。照于金殿。金殿光出照于日宮。日宮出光照四天下。其日宮殿爲五風所持。其日天子無有行意言。我行住。常以五欲自相娯樂。日宮行時。無數百千諸大天神在前導從。歡樂無倦。好樂捷疾。因是日天名爲捷疾。日天子身出千光明。五百光半照。五百光傍照。是故日天子名爲千光。

　大樓炭經に。日大城郭。從須彌山東出。遶須彌山西入。四方光明周帀故圓。以天金水精作城郭。廣長各二千四十里。高下亦等。城中有金樓觀宮殿。名閻浮。殿中有日天子座。日天子身皆出光明。照閻浮宮。宮殿光明照大城郭。城郭光明下照四方。日天子不念言我爲行不行也。常以五樂自娯樂快樂。有無央數天在前快樂無極。前後導從御行故謂爲御日天子。日天子城郭下。出五百光明周帀。復有五百光明。是爲千光明。日大城郭有常持風五品。共轉行日大城郭。未曾休息時也と見え。(月宮を本文に、縱廣五十由旬と有るを、此經に、二千四十里とあるは、例の一由旬を、四十里とせる里法にて、下に引く起世經に、五十一由旬と云るに同じ、本文に一由旬多し、)起世經には。日天宮殿。縱廣正等五十一由旬。上下亦爾、其宮殿正方如宅。遙看似圓。天金天頗瓈合而成就。其日宮殿有五種風吹轉而行故其日宮依空而行。復別有無量諸天先行。行時各々常受安樂。皆名牢行。日宮殿中有閻浮檀妙輦。其輦之高十六由旬。廣八由旬。日天子及內眷屬。入彼輦中五欲和合。受樂歡喜而行。日天子身支節分中。光明出照彼輦。輦中光明照彼宮殿。大殿光明相接出。已照四大洲及於世間。其日天子有一千

光。五百光明向下而照行。有五百光傍行而照とあり。(本文また樓炭經には、日天子金殿に居て、光を出すと云るを、華とあるが異なると、本書に五十由旬なるを、五十一由旬と云へるが、差へるのみにて、餘はさしも異りなし、)さて立世論日月行品に。從閻浮提地。高四萬由旬。是處日月行。半須彌山。等遊乾陀山。(遊乾陀此云持雙、須彌山儀銘解に、凡日月恒星の繞る處は、須彌の半腹、持双山の頂に當れり、須彌の中心を去ること、二十四萬五百四十五由旬の處なり、此を日月迴星輪と名く、謂ゆる赤道是れなり、又其繞る所に、內路外路あり、是謂ゆる黃道赤道なりといへり、なほ第五節に註ふを見るへし。)是日月宮殿團圓如鼓。是日宮者。厚五十一由旬。廣五十一由旬。周廻一百五十三由旬。玻瓈所成赤金所覆。火大分多下際火分復爲最多。其下際光亦爲最勝。其上際金城圍繞。諸天男女遍滿其中。是宮殿名修野宮殿。是日天子於其中住。是宮殿住四十餘劫。以衆生業僧上緣故恒行。天子不在時。亦宮殿恒行。天子還時。隨宮所在。即下其中。とあり。(衆生の

業僧上緣を以て、恒に行くと云へるは、此の論に始れる說なり、其は本經どもに、日宮のしか旋行する事は、行意あることなしと說きたれば、何の緣に因りて旋行すと云ふ事、詳ならぬ故に、其說を補ひて、此の說を構へ出たる物なり、是より次々に引く文にも、此の說多かり、其處々に論ふを見るべし、天子不在時、亦宮殿恒行云々、是れまた大乘部の諸經に、佛祖が說法の每時に、日天子月天子など、會集せる由記せる故に、さる不在の時は、主神なければ、旋行すまじき理ぞと、難むる者のあらむ事を思ひて、また彼の大乘說にうち合せて、此說を設けて、其難を防げる物なり。)さて日月大地三大の中に。大地は旋り。月は大地に從ひて旋れども。日は其定位を易ることなし。然るに大地は動かず。日月の旋ると見ゆるは。人體の少ければ也。(此は西洋說に云ふ所、よく我が古傳に符ひて、正說なり、なほ下に論ふを見るべし。)日輪は。日神の坐す天國にて。其質は淸淨明白なる物には論無れど。二分の天金。一分の頗瓈ちふ說は。妄誕なり。日中に神あり。其

體に光明ありと云ふこと。唐戎などに勝りて。彼國の古說なるが。我が古傳に符へり。(然して其の身光金殿を照し金殿の光明日宮を照し、然して天下を照すと云ふこと、道理は叶へれど、此は臆度の說なり、況て其の金殿の莊嚴、高さなどの說は、云ふにも定らず、)さて五風の爲に持るゝと云こと。是また妄なり。(其實說を知ま欲くは古史傳に就て見よ、)五風とは本經に。一は持風。二は養風。三は受風。四は轉風。五は調風とあり。(起世樓炭の二經に、謂ゆる五風には、互に名の異なるが有れど、其は漏しつ、)其の日天子と云より以下。妄なるは。云も更なるが中に。無數百千諸大天神從ふと云は。古說ある事にや。(西域記に、西印度境、茂羅三部盧國の所に、風俗質直好學尙德、多事大神少信佛法、有日天祠、莊嚴甚麗、其日天像、鑄以黃金、飾以奇寶靈鑒幽通神功潛被、五印度國諸王豪族、來此求願常有千數、天祠四周池沼華林、甚可遊賞といひ、曷盤陀國の所に、今王淳質儀容閑雅、篤志好學、建國已來多歷年所、其自稱云、是至那提婆瞿呾羅、唐言漢日天種、此國之先葱嶺中荒川也、昔波剌斯國王、娶婦漢土、迎歸至此、時屬兵亂、東西路絕、遂以王女置於孤峯、峯極危峻、梯崖而上下、設周衞警晝巡夜、時經三月寇賊方靜、欲趣歸路女已有娠、使臣惶懼謂徒屬曰、王命迎婦、今將歸國王婦有娠、顧此爲憂不知死地、訊問諠譁莫究其實、時彼侍兒謂使臣曰、勿相尤也、乃神會耳、每日正中有一丈夫、從日輪中乘馬會此、使臣曰、若然者何以雪罪、歸必見誅留亦來討、進退若是、於是卽石峯上築宮起館周三百餘步、環宮築城、立女爲主、至期產男、容貌妍麗、母攝政事子稱尊號飛行虛空控馭風雲、威德遐被、聲敎遠洽鄰域異國莫不稱臣、其王壽終葬在此城、東南百余里、大山巖石室中、其屍乾腊今猶不壞狀羸瘠人儼然如睡、時易衣服、恒置香花、子孫變世以迄于今、以其先祖之世、母則漢土之人父乃日天之種、故其自稱漢日天種、といふ事も見えたり、日大神は、比賣神に坐すを、此は其從ふ神の態にや有けむ、古事記なる比賣語曾の故事、後漢書の東夷傳なる、云々の故事など思ひ合すべ

し〕さて十二天餞軌に。日天喜則光不レ損レ物。人瞋不レ鈍。有情非情皆悉快樂。此天瞋時失レ度無レ光。雖レ有二眼目一不レ能レ見レ物、寒苦忽逼と云ひ、また其供祭の所に、日天與二諸星衆七曜、諸執遊空一切光神一。俱來入二壇場一。同時受レ供と見え。求願の所には。若求レ智日天爲レ首。とも云へるは。舊より其傳有し故に。かく祭軌をも。以下缺

月宮殿縱廣四十九由旬。宮殿四方遠見故圓。二分天銀。一分瑠璃。純眞無レ雜。內外淸徹。光明遠照。月天子正殿瑠璃所造。月天子身放二光明一。照二瑠璃殿一。瑠璃殿光照二于月宮一。月宮光出照二四天下一。其月宮殿。爲二五風一所持而行。其月天子「無レ有二行意一。言我行住」。常以二五欲一自相娛樂。月宮行時。無數百千諸大天神。在レ前導從。歡樂無レ倦、好樂捷疾。因レ是月天名爲二捷疾一。月天子身出二千光明一。五百光下照。五百光傍照、是故月天子名曰二千光一。

大樓炭經に。月大城郭出達二須彌山一。東行西入。光明威神稍減。是故名爲レ月。四方光明周帀故圓。以二天銀天瑠璃一。造二作之一也。廣長各千九百六十里。高下亦等。城中有二瑠璃宮一。殿中有二月天子座一。月天子身皆出光明。照二其宮殿一。宮殿光明照二大城郭一。城郭光明偏照二四方一。月天子不三自念二言我行不行一。常以二天五樂一娛樂。快樂有二無央數天一。在レ前導。快樂歡喜前後導從御行。是故名爲二御月天子一。月天子城郭下。有二五百光明一周帀。復有二五百光明一。是爲二千光明一。月大城郭有二常持風五品一。是爲二五風一。常共行。月城郭未三曾有二休息一也と見え。〔千九百六十里は、例の一由旬を、四十里とせる里法にて、本文に、四十九由旬とある里數なり、御月天子は、本書に御字のみあるは、月天子の三字を脫せるなり、故今は前に引く、御日天子の文によりて、三字を補へり〕起世經に。月天宮殿。縱廣四十九由旬。上下四方周帀正等。宮殿如レ宅遙看似レ圓。純用二天銀青瑠璃一以爲二間錯一。其大宮殿有二五種風一。攝持而行。以二是五種一故。其月宮依レ空而行。復有二無量諸天宮殿一。引前而行。無量諸天子在レ前行。於二前行時一。恒受二無量種々快樂一。月宮殿中復別有二青瑠璃大輦一。其輦之高十六由旬。廣八由旬。月天子與二諸天女一在二此輦中一。以二五欲一和合受二樂歡一。悅豫隨意而行。月天子身支節分光照二彼輦一。其輦中光

照ニ月宮殿ー。月宮殿光照ニ四大洲ー。其月天子有ニ五百光ー。向下而照。有ニ五百光ー。傍行而照。故名ニ千光明ー也とあり。（本文また樓炭經ともに、瑠璃宮殿とあるを此經には、たゞ大輦と云へるのみ異にて、餘はさしも異なることなし、）立世論日月行品に。是月宮者厚五十由旬。廣五十由旬。周廻一百五十由旬。是月宮殿瑠璃所成。白銀所覆。水大分多。下際水分復爲ニ最多ー。其下際光亦爲ニ最勝ー。其上際金城圍遶。諸天男女遍ニ滿其中ー。是宮殿名ニ栴檀宮殿ー。是月天子於ニ其中ー住。是宮殿住四十餘劫。以ニ衆生業増上緣ー故。恒行光照。若天子不在時。亦宮殿恒行天子還時。隨ニ宮所在ー。卽下ニ其中ーとあり。（衆生の業増上緣を以て、恒行すと云こと、天子不在時、亦宮殿恒行云々と云へる文義は、前節に辨へたる如く、此論の作者が、大乘說にうち合せたる、防難の說なり、）さて上に云如く。月は大地に從屬して旋る物なり。（此由は、古史傳を見て知るべし、）月輪は。月神の坐す國にて。其質は重濁なる物なれども、其光明ある事は。彼にも河海の如き溜あり。

日光其に映じて光明あらしむ。是を以て月に盈缺あり。然れば其質を二分の天銀。一分の瑠璃てふ說は。妄誕なり。（瑜伽論二には、日輪以ニ火頗胝ー所レ成、月輪以ニ水頗胝ー所レ成、ともあり、）月中に大神あり。其體に光明ありと云こと。唐戎國などに勝りて。彼國の古說なるが。我が古傳に符へり。（然れど其體の光明、瑠璃殿を照し、其殿の光明、月宮を照し、然して天下を照すと云へるは、佛祖が妄誕なり、況て其殿の莊嚴高さ、月宮の廣狹莊嚴などの說は、云ふにも足らず、）さて五風の爲に持るゝと云ふこと其月天子と云ふより以下の妄なるは言ふも更なるが中に。無數百千諸大天神從ふと云は。古說ある事にや。（また案ふに、日天子、月天子ともに、捷疾といふ同名なるは奈何ぞや、正法念經には、以ニ衆生業之所ニ住持ー、令ニ日旋轉ー、有ニ大尊神ー、名曰ニ健疾ー、常在レ前導、于ニ瞬目頃ー、能行十千一百五十由旬、周帀旋轉、以レ日爲レ度とあり、此は名義集諸天篇に、摩利支此云ニ陽炎ー、在ニ日前ー行とある、星神の名と聞えたり、此神の事は、別に末利支天華鬘經、摩利支天經、摩利支菩

薩念誦法、摩利支天一印法、などいふ物あり、華嚴經には、有レ天名二摩利支一、常在二日前一行、日不レ見レ彼、彼能見レ日と見え、摩利支天經には、有二天女一名二摩利支一、有二大神通自在之力一、常行二日月天前一、日天月天不レ能レ見レ彼、彼能見二日月一、云々と言へり、右の經軌等によりて考ふるに、此は梵志の祭事する神と聞ゆるを、佛祖なま／＼に聞知りて、日月の名とは誤れる也けり、此神の事なほ別に考へあり、）さて十二天儀軌に。月天喜時。冷光增レ物。人死二熱病一。瞋時皆捨矣。日月互照。有二大利益一時節和融。衆生作事一一隨喜。（頭注云宿曜經云天地初建寒暑之精化爲二日月一烏兎抗衡生二成萬物一云々）といひ。其供祭の所に。月天與二諸住空廿八宿。十二宮神。一切宿衆一。俱來入二壇場一。同時受レ供と見え。求願の所に若求レ定用二月天一。若欲レ除二熱寒病一隨二用日月天一。日天除レ寒。月天除レ熱とも云へり。（大毘婆沙論に、日月一輪捷疾、不レ及二堅行天子一、此是導二引日月一車者とあり、增一馬血天子品、第四十三一に、有二四男子一善二於射術一、然彼四人各向二四方一射、設有レ人成盡攝二四面之矢一、使レ不レ墮レ地、日月前有二健步天子一、行來進止、復踰二此人之捷速一日月宮殿行疾二於斯一云々、）

月宮殿小小損減有二三因緣一。一者月出二於維一。是故損減。二者月宮殿內有二諸大臣一。身著二青服一。隨次而止。住處則青故日日減。三者日宮有二六十光一。照二於月宮一。暎使レ不レ現。是故所暎之處。月則損減。

大樓炭經に。月大城郭稍々現二缺減一。有二三事一。一者角行故。稍々現二缺減一。二者月大城郭邊有二天人一。其身色青衣被瓔珞。亦青所侍而止。頓其面則現缺減。三者日大城郭。以二六十光明一。照二月大城郭一。奪二其光明一則現缺減と見え。起世經に。復次月天宮殿漸々而現。有二三因緣一。一者背相轉出。以二是義一故圓滿而現。二者有二青身諸天一。形服瓔珞。一切悉青。常半月中隱二覆其宮一。是故月形漸々而現。三者日宮殿中。別有二六十光明一。一時流出障二彼月輪一。以二是因緣一故。漸々而現とあり。

月光漸滿有二三因緣一。一者月向二正方一。是故光滿。二者月宮諸臣盡著二青衣一。彼月天子。以二十五日一處レ中而坐。共相娛樂。明光徧照。過二諸天光一、猶如三衆燈燭中燃大炬火。過二諸燈明一。三者日天子。雖下有二六十

光。照於月宮。十五日時月天子能以光明逆照。使不掩翳。復以何縁月有黒影。以閻浮樹影在於月中。故月有影。

樓炭經に。月大城郭現滿具足。有三事。一者月稍行三方。用是故月稍現滿。二者月十五日。諸青色天人。入月城中。共相娯樂。彼時月天子光明。照諸天人。譬如衆燈中央。然大火。其火皆曜衆燈。是故現滿。三者。月十五日日大城郭。以六十光明。照月大城郭。月不受用。是故現滿。復月中何因現乳色。閻浮樹影照現月中。故使月大城郭。現乳色不明と見え。（本文には、一を月向正方といひ此經には、月稍行三方、と云へり、二三の縁は、本文に同じ、）起世經には。復次其月宮殿圓淨滿足。亦有三縁。一者爾時月天宮殿正方面出。以是義故。圓滿而現。二者彼青色天常半月中隱月宮殿。而十五日時。月天子光明圓滿。照曜熾盛。譬如諸油脂中然大炬火。諸餘燈明悉皆翳覆。月天宮殿十五日時毎恒如是。三者日大宮殿六十光明。十五日時不能覆蔽。復次何因縁故。其月天宮殿於彼黒月分第十五日。一切不現。其月宮殿。於彼黒月分第十五日。最近日宮。由彼日光作覆翳故。一切不現。復次何縁月天宮殿名為月也。其月宮殿於黒月一日己去以其光明缺而滅少得名月也。復次月天宮殿其中有影。因閻浮樹故作影也とあり。（此經三縁ともに、本文に同じ、然して黒月、分に現ざる事の辨、また月と名くる由の辨は、此經の新説なる中に、光明缺る故月と名く、と云ふ説は、月缺也と云ふ漢説を盜みて、譯者の附會なり、）さて此月光虧盈の佛說。餘に愚說なるを以て。立世論に是を救ひて。其月行者。傍行則疾。周行則遲。其日行者。周行則疾。傍行則遲。日與月或合或離。一一日中。日行四萬八千八十由旬。合離皆爾。若稍合時。日々覆月三由旬。又一由旬三分之一。以此方便。（圓通云く。方便とは其漸次を言ふなり、）故。十五日一切被覆月光不現。（圓通云く、是黒月一日より、黒月十五日に至る、此方の十六日の已後、十五日なり、）若稍離時。日々日行四萬八千八十由旬。是日離月三由旬。又一由旬。三分之一。以是方便故。十五日月大圓滿。如是數量日行周圍。疾速

於月。四萬八千八十由旬。と云ひ、（圓通云く、按に三由旬、又一由旬三分の一を積こと、十有五日なれば、五十由旬となる、恰も月の廣に當る、是故に合離然るのみ、）また云何黑半。云何白半。由日黑半。由日白半。日恒逐月行。一一日相近。四萬八千八十由旬。日日相離亦復如是。若相近時。日日月圓。被覆三由旬。又一由旬三分之一。以此事故十五日。月被覆則盡。是日黑半滿。日々離月。亦四萬八千八十由旬、月日日開三由旬。又三分之一。以此事故。十五日月則開淨圓滿。と云ひて。第一緣。第三緣の愚脱は救へれど第二緣の愚說をば救かねて。其は知ぬ氣にさし置たり。（然るを彼暦象編には、心に懸りつと見えて、其愚を救ひて云けらく、其第二緣、說由侍天形服、有虧盈者、是理當演八部衆之所見、夫如來出興不獨爲人趣、是以始從成道、終至涅槃、毎說經會、天龍夜叉等八部大衆、莫不圍遶焉、且八部衆甚多、而人纔居其万一己耳、故不啻說人之所見也不須偏以人事爲難云々と云へるは、甚をかし、然るは彼八部衆會と云ふ事は、後世の大乘方廣を弘めたる者どもの、僞說にこそ有れ、謂ゆる小乘の眞古經どもには、本文世記經、及び大樓炭、起世等の經々を始め、かつて其事はなき物をや、此事は、なほ第□品の第□節に、委く論ふを見るべし、殊に此大千世界は、始に擧たる如く、上の三經共に、たゞ常に從ふ比丘ども、天地を異める事より、其等に諭さむと、說出せる教說なること、發端に見たる如くなるをや、）

日月有四重翳。不得放光明。一者雲也。二者風塵。三者烟。四者阿修倫。使覆日月不得放光明。

此一節は。增一阿含聲聞品に見たるを。同じ因に。此に擧たり。大毘婆沙論に。佛亦說言。苾蒭當知。此日月輪五翳。何等爲五。一雲。二煙。三塵。四霧。五曷邏乎阿素洛手。此中。雲者。如盛夏時。有少雲起。須臾增長。徧覆虛空。障日月輪。倶令不現。煙者。如林野中焚燒草木。率爾煙起。徧覆虛空。障日月輪。倶令不現。塵者如亢旱時大風旋擊。囂塵卒起。徧覆虛空。障日月輪。倶令不現。霧者如秋冬時山河霧起。又聞。外

國兩初晴時。日照ニ川原一。地氣騰湧雰霏布散。徧覆ニ虛空一。障ニ日月輪一。俱令レ不レ現。曷邏呼阿素洛手者謂阿素洛與レ天鬪時。天用ニ日月一以爲ニ旗幟一。由日月威天常勝彼時曷邏呼阿素洛。常心忿日月欲摧滅之由。諸有情業增上力盡ニ其智術一。不レ能ニ摧壞一。遂以レ手障。令ニ暫隱沒一如ニ契經說一無下大身形端嚴殊妙。如ニ曷邏呼阿素洛一者上此說ニ變化一非レ謂ニ實身一云々。(本文に比するに、霧の一說多かり、)さて雲烟霧塵の。日月の光明を翳すことは。常に人の見知れる儘の說敎なれば。事も無れど。阿須倫が日月を覆ふと云ふ說は。後世の經論等にも多く見え。人も能く知る日月蝕の佛說なるが。此本文これ其本にて。此阿須倫は。前卷に註せる。羅睺阿修羅王を云へり。(故婆沙論には、曷羅乎阿素洛と云へり、大論には羅睺羅阿修王ともあり、)其は旣にも引たる名義集に。羅睺此云ニ障持一。長八萬四千由旬。擧ニ手掌一障ニ日月一。世言ニ日月蝕一。とある是なり。(羅睺を、また覆障とも、吸氣とも、執日とも翻する由、諸書に見たり、)斯て此佛說の。起れる原を考ふるに。まづ阿修羅王の本說は。上に委く辨へたる如く。我が健速須佐之男命の古傳を訛れるにて。其日月を蝕せしむと云說は。彼命の天上にて荒び給へる時に。世間常闇と成れる事の片端を傳へて。每の日月蝕をも。其態と云繼ぎ來れり。(但し其名を羅睺阿修羅とは云はざりき、其由は、下に註ふを見て知べし、)然は有れど。其は世間の俗說にこそ有れ。梵志の天學には。別に正しく交食を測量する術の備はりて有けり。其は文殊儀軌經。熾盛光陀羅尼經など。其餘の籍にも。羅睺計覩に依りて。日月蝕を作ことの。往々見えたるは。梵志說を盜める說なること著く。かつ第二品。四吠陀論の所に註せる如く。回々の曆法は。印度の古曆說を承たる法なるに。羅睺計都を推て。蝕時を測量する法備はり。(其法とは、曆象編に、回々西洋の曆に、白道の交點を以て、羅睺と名け、白道の中點を指て、計覩と名く、月道南より、北に迴りて、黃道の一點に交はるを、羅睺と云ひ、此點に本行ありて、日月左旋すること、三分有奇なり、而して羅睺正對の點を、計覩と爲す、謂ゆる龍頭龍尾なり、また內道口、外道口と云は是な

り、また正交中交とも名く、蓋黃白二道兩規の斜絡、その兩交の點は、必正對なり、而して日月の行、羅計に至れば必ず蝕す、と云るが如し、）復其を受たる。唐土の授時暦。三統暦などにも。其測量法の具はりて有ればなり。（今其證を引むに、舊唐書暦志に、李淳風が麟德暦に、日月の虧初、及び復末の時刻を求むる術中に、迦葉考威等天竺法、先依日月遲疾度、以推入交遠近、日月食分加時、日月蝕亦爲十五分、去交十五度、十四度、十三度、影虧不法蝕、自此已下、乃依驗蝕、十二度十五分、蝕二分少强、以漸差降、自五度半已上、蝕既十四分强、若五度無餘分已下、皆蝕盡、又用前蝕多少、以定後蝕餘分、若既其後蝕度及分、即加七度以爲蝕度、若望月蝕既、來月朔日、雖人而不注蝕若蝕半已下五分取一分、若半已上、三分取一分、以加來月朔蝕度及分、云々と有を見て、印度に早く、交食術の備はれる事を知べし、迦葉考威は、印度の古暦の名なるが、其暦法の本は、世の初に、梵天子の傳たる術なること、既に委しく說るが如し、）さて梵志の天學に、

交食術のしか備はりて有れど。佛祖は例の。梵志說を用ふる事を嫌ふが故に。別に一機軸を出して。其說に勝むとは思ふ物から。其出すべき說法を思ひ得ざりし故に。また例の翻案して。世間の俗說を用ひ。古傳の阿修羅を。なほ仰山に妄誕加說し。謂ゆる龍頭を。印度語に羅睺と云ふ。其語を取りて。羅睺阿修羅王と云名を設け。日月蝕を。なべて其態に牽强せるにぞ有ける。（其妄誕とは、前卷に引たる、本經鬪戰品に、阿修羅王、大に威力ありて、日月の、我が頂上を行ことを怒りて、彼を取りて、耳璫に爲むとて、障ると說き、增一阿含□□品に、阿修羅、八萬四千由旬の身を、十六萬由旬に化して、日月に觸れむと前み往く時に、日月王恐怖して、本處に寧せざる故に、光明有らず、と說るなど是なり、なほ彼處に云るを見べし、）さて古說に羅睺計都と云しは。回暦に謂ゆる龍頭龍尾。唐土に謂ゆる。內道口外道口の梵語なり。（此事は旣に上に註せるを思ふべし、）然るを經論どもに。此を星名と爲たるが多かる中に。七曜攘災訣と云物に。羅睺遏囉師。一名黃幡。一名

蝕神頭。一名復一名大陽首。常隱行不見。逢日月則蝕。朔望逢之必蝕。與日月相對亦蝕。計都遏囉師。一名豹尾。一名蝕神尾。一名月勃力。一名大陰首。常隱行不見。到人本宮則有災禍。云々と言へる類は。論ふに足らず。(此攘災訣と云ふ書は、西印度の僧、金倶吒と云しが撰れる籍にて、云々、)さて彼暦象編に。就交食稱羅睺者三。其一以龍頭名羅睺。以龍尾名計都。(支那、又謂之内道口外道口、)其二。實爲蝕神星。名羅睺計都者。而作日月蝕。(これ即攘災訣に謂ゆる、黄幡豹尾の説を取れるなり。(其三羅睺阿修羅王。作非道之蝕。(此は、本文なる佛説に就て、云へる説なり、)印度謂爲障者名羅睺。如尊者羅睺羅。障胎六年故云也。と和會し。千載の疑濛を破らむとて云へる説に。大經月喩品云。復次善男子。如人見月六月一食。六月一蝕。即交常度之率而。交食之大要也。文殊儀軌經云。一晝一夜名爲一日。十五日爲半月。兩半月爲一月。如是六月。爲羅睺障時。此亦指交常度而言者。與大經正同と云へれど。此二經などは。佛滅より。九百年餘り後に作れる經等にて。(大經とは、大般涅槃經を云ふ、此は彼龍猛論師が時よりも後に、託作せること、富永仲基既に考へ置たり、其由委くは、第□□品に註ふを見べし、文殊儀軌經といふ物、是また其よりも、甚く後れたる世の僞託なり。)また謂ゆる密部の經軌ともに。往々日月の蝕を期て。悉地を求むる由を云へるに就て。もし其法なくば。何に由て。豫に蝕時を知ことを得む。見つべし佛已に言こゝに及ぶと云へるも。一通り理たりげに聞ゆれど。知らず密部の經軌ども。總て梵志及び諸外道の修法書を。佛説に託せる物なるが故に。日月蝕を期する説も有ことを。(其由は、前巻四吠陀論の所にも註せるを、なほ委しくは。第□□品にも云ふを見よ、)また彼説に。其言修羅手障者。特言變異之蝕耳とて。數多の經を引たれど。其みな阿含よりは。遙後に僞作せる經等なる故に。本文に擧たる。佛祖が忠説を救はむと。書作せる説なり。其は四阿含中に。さる差別は説ざるにて論なし。斯て其變異の蝕と云ふ説の

證に、漢籍春秋襄公二十四年の所に。秋七月甲子ノ朔。日有レ食レ之既と有て。また八月癸巳朔。日有レ食レ之。と有などを引て。兩月つゞきて。日食すること。極めて此理なし。其一蝕は。必是變なりと。なほ世々の史に。さる類のあるを。數拾ひ並べて。證と爲たれど。其は總て。史の誤文重復なること。史學に精密なる人は。誰も能く知れる事なるをや。(また修羅手障の事に就て、元史の天文志に、至正十八年三月辛丑の夜に、雲中に火光あり、夜半に至り、空中に兵戈相撃の聲ありと見たる、また二十七年の正月乙未の夜に、天鼓空中に鳴り、戰鬪の聲を聞が如し、など有る類を、あまた引出て、修羅鬪諍の證と爲たれど當らず、此は別に考へ記せる物あり。) さて上に謂ゆる。印度謂ニ爲レ障者一。名ニ羅睺一。如ニ尊者羅睺羅一。障レ胎六年。故云也と云へるも。また非説なり。其は彼小僧が。母胎に六年在しと云は。佛祖が修行中に。女を姙ませたる事を文れる幻説にて。實に蝕時に生れたる故に。其名を羅睺羅と負しと云ぞ正説なる。其は羅睺計都を測量して。蝕を知る故に。蝕時をしか云し故なり。(佛祖が生子の名を、かく負たるを以て、羅睺計都を推て、蝕を知る術の、早く有しこと著し、然るは此が生れし頃は、いまだ佛祖が、修羅手障の説を起さざる以前なればなり、また修羅手障の説、舊より有むに、佛説に云へる如き惡物の名を其子の名に負すべくも非ず、印度の古風は、凡て人の名を命ずるに、專と祝語を用たればなり、日月蝕を彼攘災訣の類こそ凶と爲たれ、儀軌どもには、多く修法の成就する時と爲て、其時を期するを、思ふに、梵志の古説には、吉時と爲たりけむも、また知べからず、「頭注云善星が佛祖にフハムキなるは天文者なる故に佛説を信ざる故ならむ」)

六十念頃名ニ一羅耶一。三十羅耶名ニ摩睺多一。百摩睺多名ニ優波摩一。日宮殿六月南行。日行三十里。極南不レ過ニ閻浮提一。亦復如レ是。是時月宮殿半南行。不レ過ニ閻浮提一。月北行亦復如レ是。

起世經に。六十刹那名ニ一羅婆一。三十羅婆名ニ牟休多一。若干刹那。若干羅婆。若干牟休多。日天宮殿常行不レ息。六月北行於ニ一日中一漸移レ北。向六俱廬奢。未ニ曾暫時離ニ於日道一。六月南行。亦一日中

漸移レ南。向六倶盧奢不レ差二日道一。日天宮殿六月行時。月天宮殿十五日中亦行爾許。とあり。實とや佛祖が世界說は。其說法の本懷ならず。其謂ゆる佛法を信受せしむる方便に。說出る事にし有れば。元より其方の學問は。無かりし故なり。其は此の本文に。南行北行などのみ云ひて。其說の甚く稚氣に。拙きを以て知るべし。起世經は。稍後に記せる經なる故に。始めて日道と云ふ語をし立て。少しく增說をも爲したれど。猶拙き說等にて。日月の轉度。推步の片端をも知るに足らず。(但し婆羅門學には、最古より此學の傳はりて有つれど、其說を用ひず、別に一機軸なる新說を、張行せむと爲たる、例の我慢わざにぞありける、)然るに立世論日月行品に。日宮者行二一百八十路一。月宮行十五路。(圓通云く、是日月南北緯度の數なり、)日十二路是月一路。(圓通云く、是日月の平廣度なり、)若日出入時十二日所行路。月出入時。一日行之得度。從二極南路一至二極北路一。二百九十由旬。(圓通云く、是卽南北の緯度なり、赤道の左右合して、四十七度なり、)日有二兩路一。一者外路。

二者內路。從二閻浮提內路一。至二北鬱單越內路一。相去四億八萬八百由旬。周廻十四億四萬二千四百由旬。其外路相去。四億八萬一千三百八十由旬。周廻十四億四萬四千一百四十由旬と云ひ。(圓通注に、彰所知論に、北行六月、南行六月、行至二中道一曰二日月廻照輪一、歷徧謂二之一歲一といへり、今準知するに、閻浮提と鬱單越と、廻照輪相去こと、四億八萬一千九十由旬、周廻十四億四萬二千二百七十由旬、これ謂ゆる赤道なり、立世に之を說かざるは、蓋これ略耳と云ひ、また須彌山儀銘解に、太陽南陸を極むる際を、外路と名く、是れ謂ゆる冬至線なり、大陽北陸の極る際を、內路と名く、是れ所謂夏至線なり、內外二路の最中に在る所の、赤道より外路に至りて、相距ること、二十三度四十六分一十七秒半あり、內路と赤道と相距こと、亦二十三度四十六分一十七秒半あり、是を黃赤の距緯と名るなり、春分と秋分には、日赤道にあり、冬至には日外路を極め、夏至には日內路を極む、是を距緯と名く、緯とは日月五星の、南北の路を緯と名け、東西の路を經と名くるなり、印度にて

は、赤道を日月廻星輪と名く、日月星宿の經緯の行度、皆赤道を準繩と爲ればなり、とも云へり、）また日恒行一由旬半。又一由旬九分之一。其一一日出時如レ是。入亦如レ是。（圓通云く、南行を出と爲し、北行を入となすなり、）六月日中。從二內路一出二於外路一。（圓通云く、赤道以北を內路と爲し、赤道以南を外路と爲なり、）月恒行十九由旬。又一由旬。三分之一。其一一日出亦如レ是。入亦如レ是。十五日從二內路一至二外路一。十五日從二外路一至二內路一。云々など言ひて、日月行度の測量を合せたり。（其文義は、歷象編に、是は白道の緯度に就て其平行を言へり、一由旬半の、また一由旬三分の一、積こと百八十日にして、二百九十由旬と成る、是れまた赤道南北の度にして、乃半年の周なり、月の恒行十九由旬、また一由旬三分の一、積こと十五日にして、また二百九十由旬と成る、これ即轉中分の數なり、此中に言ところ、南北の行度は、乃此方に謂ゆる、日月の東移と、其義便合す、然るに今說は、專ら歷算の爲にせず、故に其大分を言ひて、其小餘を詳審にせず、然れども其理を、推て以て、其數を測ときは、其布算を得ことも、また難からずと言へり、實に此說の如し、）然れども。此は是論の撰者が、其祖法を護ると。本文また起世經などの說の。いと淺々に拙きを愁ふる意に。他の曆算推步の術を竊して。須彌四洲の妄誕に牽强して。其測量を密合せるにこそあれ。曾て佛祖が眞說に非ず。（其由下に云ふを見るべし、）そは曆算推步の術はしも。謂ゆる須彌說にまれ。地球說にまれ。其餘天地の形象。また遠近廣狹などを。何に說を立たるも。測り合すれば。合さるゝ事なる故なり。（然るは唐土に、まづ古く蓋天、宣夜、渾天の三說あり、後世に、安天、穹天、昕天、平天の四說あり、斯て佛者の須彌說、また西洋の天說も、地球とは云へど、其を不動といひ或は地轉と云ひ、猶種々の說有て、彼の國籍に、數十家見えたり、然るに其測量推步の術に於ては、皆よく合ひて、四時の運、日月蝕などに至りても、合ざるは、一說も無にて所知たり、合ずば誰か信ずる者の有む、然れど其は測量の合をこそ信ずれ、須彌世界說を始め、其形象の實徵に合ざるをば、誰かは信せむ、

然れば其測量の合を以て、其形象をも信ぜよと云ふは、誣説なりと知るべし）然るを暦象編に。須彌四洲説の。彼周髀なる蓋天説に符合し。立世論なる説の。西洋暦を始め。諸暦の測量に合ふ事をし。甚く奇異なる事に説成して。佛説の奇特。神妙の如く誇れるは、片はら痛き事なり。（またかの須彌山儀銘解に、其測量の術とて、記せるを見るに、時憲授時の二暦を始め、諸暦の算術を借用して、量り合せ、此事は、授時暦と密合せり、其事は時憲暦と合り、豈奇ならずや、此事西洋暦に合るは、奇と云ふべしなど誇り、朔實を求むる法を説て、今の西洋暦法と、秒微に至るまで密合す、梵暦は、天眼の測る所なれば、雅より理精當なるに論なし、彼の西洋暦法は人の巧智の積む所にして、天眼の實測に密合すること、亦感ずるに堪えたりとも云へるは、笑ふに堪えたり）さて須彌山の形を。本文には。其山直上無レ有ニ阿曲一と云ひ。起世經には。下狭上廣。漸々寛大。端直不レ曲とはあれど。方正とは云はざるを。（大樓炭經にも、方正なる由見えず餘の經論等にも、方正と云はず、）

此立世論にのみ。四角端直にして。其形方正なること。工匠の善く繩墨を用ひて。所成せる柱の如し、と言るに就て、彼菩薩が。須彌山儀銘に。噫奇哉。生々之數。天然播ニ於厥形一。（其自解に、須彌界の體相其狀、自然に天然本然の數量を表することを述す、老子に道生レ一、一生レ二、二生レ三、三生ニ萬物一と云る如く、是天地の造化、生々無窮の義を云なり）周髀云。數之法出ニ圓方一。圓出ニ於方一。方出ニ於矩一。矩出ニ於九九八十一一。（解に、是に由りて之れを觀れば、方圓は卽天地にして、一切の數此より出て、之れに歸せずと云ふこと無し、矩は方を爲の器なり）今夫須彌界。圓而容レ方者。豈非下法爾形ニ象天地之數一者上乎（解に、是より下は、須彌界の形象を論ず、圓にして而容レ方とは、鐵圍の形團圓にして、外に繞り、須彌七金山正方にして、其中に安立するを云ふ、法爾とは、天然本有の數にして、造爲に非ることを云ふ、形ニ象天地之數一とは、其方圓を形にして、九九の數に契ふを云ふ、）九山巍々。雲聳牆廻。表ニ於極陽之象一。是生ニ於九九之數一。（解に巍々は高峻の貌なり、雲聳と

は、須彌山の高き、三百二十萬里、持雙の高さ、百六十萬里、持軸の高さ、八十萬里、其餘の六山、皆高さ半々に減ず、第八の持邊山、高きこと尙二萬五千里、これ雲霄よりも、尙遙に高きに非ずや、牆廻とは、七金山並に皆方正にして、牆の如く、須彌の外を、七重に廻り、また四天下の外に、鐵圍山有て、盤縁の如く、圓に高く、鹹海を圍みて、高きこと一萬二千五百里なり、以て其言所を知るべし、表二於極陽之象一とは、表は表顯の義なり、列子云く、易變而爲レ一、一變而爲レ七、七變而爲レ九、九變者究也と、七は少陽の數、九は老陽の數にして、九は卽ち乾數の極なり、故に今極陽と云ふ、易の陽爻、皆九を用ふるは是れ陽の極なればなり、陽九に究りて、乃復變じて一となる、一は形變の始め。九は是形變の終なり、終りて、復はじまる、變化窮り無きなり故に物皆九に究るなり今須彌界九山の如き九九本然の理數より成るもの以て見るべし。）八海斷々溟瀛錯阻。象二於純陰之體一。是生二於八八之理一。（解に、八海は九山の中間に、各々海あり、故に八海と云ふ、七金山以内を、內海と稱す、第八は鹹海なり、斷々とは、釋名に、斷は段なり、分爲二異段一也とあり、言ふ心は、八海各別にして、同じからざる故也、溟瀛とは、海洋を云ふ、錯阻とは、山々海々參錯として、阻隔するを云ふ、純陰とは、其水を云ふ、八海是なり、八は是れ少陰の數、六は是れ老陰の體なり、陽は九に極り、陰は八に生ず、故に八々相乘じて、六十四となる、天地の數此に極り、八海天然にして成る、豈然らざる事を得むや、故に是れを八八の理より生ずと云ふ。）則生々之數至矣極矣。と言へり。信に此說の如く。立世論の說。よくも漢土の天圓地方。陰陽の道理に符合せり。是に就て。また考ふるに。總じて梵說に。陰陽を以て。事物の理を斷ずる說は。有こと無れば。漢說とは。決めて符まじき謂なるに。如此く熟符へるは。此論の譯者眞諦が。久しく漢土に住なれて。須彌界說を信ざる者の爲に。彼國說に。符合すべき說を攙入れて。譯せるが故なり。（宋人朱熹が語に、釋氏唯四十二章經のみ、是古書なり、餘は中國の文士、潤飾して之を成すと云る、卽是なり、眞諦は、大

乘起信論義記に、譯經圖記を引て、沙門波羅末陀、此云眞諦、西印度優禪尼國人、郡藏廣部罔不措懷、藝術異解偏素諳練、歷遊諸國、隨機利見、以梁武帝泰淸二年、見帝於寶雲殿、帝勅譯經云云、至訖陳泰建元年、譯立世阿毘曇經論、及俱舍論等、總陳梁二代勅譯經論、四十四部、一百四十一卷と見え、もと梵僧なれど、然る傑出の比丘なりし故に、謂ゆる隨機利見の方便を用ひたるなり、)いで其由を。委曲に解むに。周髀算經と云もの。是まづ僞託の書なり。其は彼蓋天說は。事物紀原に。黃帝爲蓋天。と有れば。古けれど。謂ゆる三代の頃より。其說のみ粗聞えて。秦漢の代まで其書無りしを。(古く其說の聞えたる事は、王充論衡に渾天を排して、蓋天を述たる說あり、揚子法言に、曰請問蓋天、曰蓋哉蓋哉、應難未幾とあるは、更にも云ず、隋志に、甘氏石氏巫咸等、三家の星位に依準して、蓋圖を爲れる由見えたれば、三代の頃より、其說の粗有し事は著し、そは甘石巫の三家は、謂ゆる三代の人等なればなり、)蔡邕が天文志に。周髀の名を出して。其術を論じ。

考驗天象。多所違失。と云へるを見れば。漢末には。既に其書あり。然るに今。其周髀算經と云ふ書を察るに。其發端に。昔者周公問於商高曰。と云より。周公曰善哉と云まで。二百六十一字の文は。稍古く見ゆれど。(但し此を、周公が當時、自記せる書なりと云へる說は、云にも足らず、其は昔者周公云々と有にて、後世の作なること論なし、此は尙書堯典に、若稽古之帝堯、云々と端を起し、素問に、昔在黃帝生而神靈、云々と云へるにて、後世の記と知るゝに、准へて知べし、)昔者榮方問於陳子曰。と云より末は。其註に。非周髀之本文。從其類。列於事下。欲尊而遠之故云昔者。と云へる如く。前文有しより。後世人の。また寓作して列次せるなり。(川邊百彌か此書の圖解に、榮方陳子共に寓名、假に儲けて、其委曲を述る、他書の或問の類か、前文は、周髀の本文とし、是よりは、算經と見ても可ならむ、と云るは然る說なり、文中に、呂氏春秋を引たるにても、漢以前の書ならぬ事は論なく、周公曰善哉と、前事は既に終めて、新に昔者榮方云々と端を起せる

にて、別人の別書なること、一目見て知る丶文なるをや、)其寓作なること。當時灼然たりし故に。漢書經籍志に。之を載せず。隋書經籍志に始めて。周髀一卷趙嬰註。同甄鸞重述の目あり。(こは古今僞書考に、周髀算經、漢志無、隋志始有、周髀之義或稱、周公受之商高、故曰周髀、益誣矣と云へるは、實然る說なり、趙嬰は、唐の藝文志にもかく有り、後に周髀を註せる書等には、趙爽字君卿とあり、明仲棋が序に、意者、趙嬰趙爽止是一人、豈其字文轉寫之誤耶、以隋唐之書爲正可也、又崇文總目、及季籍周髀音義、皆云、趙君卿不詳何代人、今以自序文考之、有曰、渾天有靈憲之文、靈憲乃張衡之所作、實後漢安順之世、而甄鸞之重述者、乃是解釋君卿所註、出於宇文周之世、以此推之則、君卿者是亦魏晉之間人乎、と云へり、此說まことに然るべし、甄鸞は、後周の大史にして、天和曆と云を作り、また笑道論と云を著して、周武帝が排佛を諫め、また數術記遺と云をも著せりとぞ、然れば佛法を好み、數術を好める人なり、故周髀算經の注を重述せるなり、)かくて。其造れる趣を。熟々察るに。天圓地方の說こそ。其國說なれ。七衡六間の。須彌界說なる。七山六海に同じき。內極外極の。內路外路に似たる。四極の四洲に同じ理なるを始め。其餘も悉く契合するを思へば。漢末及び魏晉の頃は既に佛法世に普く行はれ。須彌界說も。人皆知りて信ずる者の多かれば。彼天圓地方の葢天說を本とし、須彌四洲に擬して。四極をたて。七衡六間を立て。七金山。及び其間の六海に準じ。內極內衡。外極外衡などの名を設けて。須彌界說に密合すべく。算を合せて造れる者なり。(彼仲棋が序に、趙君卿が註を評して、若夫乘句股、朱黃之實、立倍差減菩薩之術、以盡開方之妙、百世之下莫之可易、則君卿者、誠算學之宗師也と云へるは、然る言にて、註に、本文の意を得ざること、一節も無を思ふに、本文決めて君卿が作りて、自註を加へたりと見ゆ、漢魏晉の間に出し人の、本文註ともに、僞作せる書は、此餘にも數多あるを、思ひ合すべし、然るを曆象編の作者が、論語に、譬如北辰居其所、而衆星拱之、とあるを附會して、

宣尼亦從蓋天、周公孔子論天、以爲蓋天、後世孰有得而尙焉者哉、と云ひて、周公が當時の記とし、天文の聖說曆算の祖書なりと策進せれど、曆術また算數の事も、古く其原を、周髀にかけて云へる說とては無ものをや）然して。彼立世阿毘曇論に符合ふ事は。眞諦此論を翻譯するに。影傍して。時人を誘はむ方便に。周髀算經と。其說を密合せしめ。天圓地方の說に因りて。阿含。樓炭。起世などの本經に云ざる。須彌方正の說を作し。算經の內極外極に擬ひて。內路外路を立などせる故に。互に吻合するにぞ有りける。（是に就て案ふに、隋書天文志に、梁武帝が諸儒を會して、天體を測り、天地儀と云を撰れるに、其全く周髀に同じと有り、此は彼立世論を譯せる眞諦の、梁武帝が命を受て、種々の經論を譯し、梁亡びて、陳代の泰建元年と云ふ年までに、四十四部、百四十一卷の經論を譯せる中に、立世論も有れば、彼天地儀と云し物は、眞諦に立世論の旨を問ね、蓋天說に合せて、作けむ故に、周髀に同じ趣なりしと覺えたり、彼武帝と云し酋長が、甚く佛法に心淫せる、必しか有けむこと、熟々思ふべし）さて其吻合する趣を。委く云むに。天圓地方は然る物にて。曆象編にも。蓋天卽周髀之說也。其言曰。天似蓋笠。地法覆槃。天地中高外下。北極之下爲天地之中。其他最高。滂沱四隤。三光隱映以爲晝夜。天中高於外衡冬至日之所在。六萬里北極下地、高於外衡下地。亦六萬里。外衡高於北極下地二萬里。天地隆高相從。（北極下地則地頂也、外衡下地、則地之最卑處也、故云天地隆高相從、又周髀云、天離地八萬里、冬至之日、雖在外衡常出極下地上二萬里、故日兆月、月光乃出、故成明月、星辰乃得行列、是故秋分以往到冬至、三光之精微、以成其道遠、是陰陽之性自然也、）日距地常八萬里。麗天而平轉。分冬夏之間日前行道。以爲七衡六間。每衡周徑里數。各依算術用勾股重差。推晷影極游。以爲遠近之數。皆得於表股者也。是髀之名所由出也。（此にはかく云つゝ、また別所には、宋何承天が、始めて表を立て、日景を候て、冬至を定たる事を云て、景象を測りて、節氣を定むること、佛の經論に出るときは、範を

此に取こと、斷じて知べし、と云へるは何ぞや、周髀信に古書ならむには、晷影を測る術、元より有と云るに非ずや、)佛氏所說。須彌卓立地心。其高八萬由旬。而日月上下以遶其半腰焉。可見其相大同。較諸佛說。則事之精粗量之廣狹雖非無小異。而其相狀髣髴大同。乃信聖智所測彼此冥契。非凡見之所能企及矣。其義髣髴不異須彌。聖者所測。其義冥契。誰不俯信。蓋周髀者。實支那天文暦數之祖法也と云ひ。(此周髀の說、即佛說に、須彌山王は、世界の中心に卓立して、其高きこと八萬由旬にして、日月衆星上下して、其半腰を遶る、と云へる說に、周髀の說の、よく吻合する事を感たるなり、須彌山儀銘解には、周髀は、當時周公、殷の大夫商高に、諮決し給ふ所の書にして、上下二卷あり、漢の趙君卿、北周の甄鸞、唐の李淳風等の註あり、古人の蓋天を信せざる者、周髀に於て、議論を容るゝ者有と云へども、明末已後、周髀に言ところ、悉く徵信ある故に、明清の諸儒、その聖作なる事を信伏せり、實に暦數を言ふ者、此書を知らずば有べからずと

云ひ、至聖の確說と、したゝかに稱揚たり、)また周髀曰。凡爲日月運行圓周。七衡周而六間。以當六月節。六月爲百八十二日八分日之五。故日夏至在東井極內衡。日冬至在牽牛極外衡。也衡復更終冬至。故曰一歲三百六十五日四分日之一。一歲一內極一外極。』蓋天之說梗概如是。と言ひ。(須彌山儀銘解にも、七金山に因りて、六月の節を爲こと周髀の七衡と、理全く同じとて、此文を引きて、註に云く、東井則二十八宿中井宿也、牽牛二十八宿中牛宿、是也とあり、衡とは、音義に云く、衡者七規也、謂規爲衡者、取其衡運則生規、規者正圓之謂也と、衡は其六間の隔を云ふ、規は其圓の規をいふ、七衡にして六間あれば、乃六月の節を爲なり、七金山は、なほ七衡の如し、七重にして、六間有ればなり、七金山の中の持双山は、周髀の內衡と理同く、持軸山は、彼第二衡と同く、擔木山は、彼第三衡、善見山は、第四衡、馬耳山は、第五衡、象鼻山は、第六衡、持邊山は彼第七衡と、理全く同きなり、但し周髀は、日行の天度に就て云る故に、七衡並に圓ならずば有べ

からず、佛說は地に就て顯す故に、七山並に方ならずば有べからず、惟之を異とするのみ、と言る一を以ても知べく、なほ編なる論下周髀所レ言、四極節氣之差、與二佛說一契合上。とある條をも合せ察るべし、)また周髀曰。凡日月運二行四極之道一。故日光外所レ照。徑八十一萬里。周二百四十三萬里。(圓通註して云く、日光外、及ところの際を以て、四極と爲す、外衡の外、日光の及ところ、十六萬七千里、衡外に照すところ、左右合して、三十三萬四千里と爲る、外衡日道の徑り、四十七萬六千里に合して、四極の徑、都て八十一萬里と爲る、是みな影を測りて、表股に得るところの數なり、)故日運行處極北。北方日中。南方夜半。日在二極東一。東方日中。西方夜半。日在二極西一。西方日中。東方夜半。凡此四方。晝夜易レ處。四極猶如二須彌四洲一。(起世經云、若南洲日正中時、東洲日則始沒、西洲日則初出、北洲正當二夜半一、若西洲日正中時、此南洲日則始沒北洲日則初出、東洲正當二夜半一、若北洲日正中時、西洲日則始沒東洲日則初出、南洲正當二夜半一、若東洲日正中時、北洲日則始沒、南洲日則初出、西洲正當二夜半一、立世論倶舍論等、並皆同レ之、)印度支那聖說暗符。大體既合。故至二于節氣推步一。分至籌運等。其法亦皆相類。豈可レ不二奉信一哉とも。周髀所レ言外衡經緯。比二之立世等所レ說。外衡經緯一。(外衡立世謂二之外路一、○今按ずるに、立世等と云るは、餘の經論等にも、此說ある趣に。作成せる文なれど、立世論を除ては、此說有ことなし、此類に世眼を眩惑せしむる文法、甚多し、彼論を見む人々、心してよ、)幾當二二十四分之一一。(周髀所レ測、外衡經度、爲二八十一萬里一、而立世所レ說、外衡經度、一千九百二十五萬五千二百里也、)是亦似二於自然之數一者。其佗三光之運。地體之義。無レ不下與二佛說一吻合上。豈不レ信哉とも云るにて知るべし。(今引く暦象編の文どもは、繁を去り、甚く約めて擧たれば、委くは本書に就て見べし、)信に此說等の如く相同きは。豈偶然の事ならめや。態と作り設けて。彼此互に密合せしめたる說なること。更に疑なき物なり。(然るを近來、また暦象編に催誘せられて、周髀によりて、蓋天地平の說を、張らむと欲する者あり、憐むべし、)また延喜式に。

不レ暗ニ周髀一者。不レ可レ抽ニ算博士之及第一。と有を引て。吾邦いにしへ。大に周髀を重むずと。須彌山儀銘解に云へれど。此は算術の方にこそ用ひ給へれ。天文の事には非ざるをや。（東森菩薩左に右に、須彌界説を、世人に信しめむと、まづ周髀を聖説と云に證して、元より其道には、外道と貶する、漢土聖人の道に光らし、或は皇典皇道をも引こめ、諸宗の僧尼の左袒を催し、千計萬慮、彼を牽き此を賴みて、今行はるゝ天文暦術を排し、其自序にも、豈惟災ニ於吾佛教一而已哉、又妨ニ吾皇國皇神之道一、並吾山家所傳一實神道野山所傳御流、及兩部神道等、爲將ニ蕪蔑一矣、且也、將下棄ニ周孔之懿典一、廢中祭祀之大禮上矣、と云ひ、或は其要、由レ不レ知ニ神道一故也と云ひ或は彼西説、亂ニ吾聖教一乎、壞ニ亂支那聖典、皇國神道一請海内諸兄弟、須ニ務闢一焉矣など、甚喧しく言擧たり、其結構を察るべし、偖しか聖人の道を曜しつゝも、梵暦策進には、古人云く、天文地理に通ずるを儒と云と言へり、然るに唐以前三代に泊びて、其暦數、並に平氣平朔を用ひて、未だ盈縮を密測すること能はず、是故に、氣納常に天に後れ、日月食を測こと能はず、若食を測ことを得ざれば、是天に合せざるの暦なり、故に漢已前の書、六經十三經を研磨すること、千萬年を歷とも、天地の實數を知こと能はず、と云へり、いかに前後合ざる説ならずや、然るに日月食を測ことを知ざる世の人は、天文地理に通せざる故に、儒とさへ云ふに足ざる由なれば、其三代已前なる、周公孔子も、聖人と云に足ざるは、更にも云はず、儒とも云べからぬ者ども、と云へるに成ればなり、又何ぞと云へば、暦象編、須彌山儀銘解などに、吾皇國皇神之道と、云擧たれど、梵暦策進には、甚く不敬の妖言を發して、皇道皇統をさへに、言ひ腐し奉れり、其は末に論ふを見べし、然れば暦象編などに、皇道及び聖道を云立たるは、心ある術計なること著く、策進には、覺えず其眞情を吐露せるなり、實には彼周髀僞書なる上は、謂ゆる三代の聖人ども、天文の測量を知ざるに論無れば、今引く策進に云へる説、よく當りて、其聖人を陣らせたる説どもは、深き心ある、しばしの方便にぞ有ける。）是を以て彼國にも。宋

と云し代まで。周髀を信ずる事無りしを、明清の儒者らが、此を信奉する事と成ぬるは、彼書に。春分夜以至秋分夜。極下常有日光。秋分夜以至春分夜。極下常無日光。（註に北極之下、從春分至秋分為晝、從秋分至春分為夜、とあり、）また北極左右。夏有不釋之氷。など云へるが。明末に、始めて西洋人の齎來れる萬國圖に。北極下に。一歳を。一晝夜と為る國ある事の見たるに符へる故なり。（此は曆象編にも。自宋已後、暨于明、周髀之書、人皆聊備奇聞耳、明末西儒入于支那、而齎萬國圖籍、人見之果知有極下、以一歳為一晝夜之國、於是人始信此書周公之眞撰、而知乎先聖制作之精神、千載不可易、是故清儒梅勿菴謂、今有歐邏巴實測之算、與之相應、然後知所述、周公受學商高、其說亦非無本、古昔遠西未通於支那、聖人唯由理以推之、於數千歳之下、果有徵信、豈不偉哉と云へり、）然れども此説の符ふを以て。周髀を。周公が眞説と信ずと云は。至愚の論なり。然るは姑く周髀を周公が撰と許して。論はむにも。周公其地をふみて記せるならず。測量術を以て知れるに。違無れば、後人なりとも。天地を測量する計の者の。誰か測量し得ざらむ。（唯謂ゆる聖人のみ、此を推ことを得て、後人はかつて能ざらむと思へるは、至愚に非ずして何ぞ、殊に算經、右に引く文の下に、中衡左右、冬有不死之草、と云る文あり、然れば此は、淮南子墬形訓に、南方有不死草、北方有不釋之氷、と云る文によりて、測量せる説なり、偖こそ能く、其術に叶へれ、淮南子の説は、疑なく神仙の遺説なり、其由こゝに盡し難ければ、別に記せる物あり、）況て三代の人の。曆算測量の術に飽かりし事は。日月食をさへに知ざるにて。論無れば。周髀なる極下夜國氷海の説。また其僞作者の測量なること疑なし。總じて漢人の、喜く僞書を作る、其心を案ふるに、早く自説は有ながら、其を自説と云ては、他の用ざらむ事を思ひて、古人に託するなれど、其は最も怯き心なり、然るは何國の人も、眼を卑めて耳を尊ふが常なれば、古今の眼目を、啓發すべき明説も、新に云ひ出るをば、受用ふる人のなき物なれど、其説の確乎た

るは、當時行はれざらむも、後の今を見こと、今の古を見る如くなりて、後には遂に世に用らる丶物なるを、遠く當世に行はれむ事ゐ、近利を思ひて、千載後の知己を待べき遠識なく、且は其語説を信ずる事の、厚からざるが故に僞託するなり、豈怯からずや、然れば周髀を作れる人等も、此を周髀と稱せず、彼畢人等に、託せず、自名を記し置たらむに、此夜國の考などは大なる手柄なるべきを、其名を知れず有ことは憐むべし豈此書のみならむや、謂ゆる秦漢以前の書と云も十に八九は僞書なるが、皆此類と知べし、また印度藏の大乘と稱する經々、みな是後人の僞託なること、末に辨ふ如くなるが、其中には此を佛祖に託せざらましかば、と覺ゆる物のなきに非ず、是また憐むべし、また昔も今も利の爲に、古書と見ゆるを擬造して、世人を欺くが有るは、是盜人の類なれば、論に足らず、)さて周髀なる説の中に。算法は更なり。此夜國の説は。立世論に擬へるに非ず。此作者の考説なり。然るを暦象總の菩薩が。此をも佛説に。早く有し説にせむと欲して。西説に。北極下に。一年を一晝夜と爲す國有りと云こと。竺漢の古昔に。已に其説あるを證す。と云條を立て。今の周髀を引たるは。然事なれど。竺に涅槃經曰。日月光明不至處之衆生。因佛光所照迯初得相見。と云ふ文を引たれど。此は佛祖が例の。大光明を放つ。と云ふ所に見えて。土中陰晦の所に住する蟲獸。及び非人などの所まで。其光明の及べる由の。幻説にこそ有れ。極下の夜國を云るに非ず。(故此文は、經々に、佛祖が身光を放てり、と云ふ幻説の所には、必と云ばかり、最多く見えたり、)また立世論曰。時有一人曰長脛。生有神境通。因欲見閻浮樹閒佛方處。踰於六大山。登第七金邊山頂。轉面向北。聳身遠望。唯見黒暗。怖畏而反。其樹者在于閻浮提極北。而此所言。長脛之見黒暗者。其時蓋當極下之夜間也。(何者若、長脛如遇極下之晝、則必見此樹。不見其黒暗矣、而其夜國、亦非常夜也、半年爲晝、半年爲夜、從其夜得名也、所以是地然者、太陽毎從春分、向赤道北、日漸高于北、近于北、及夏至北至是極、而高亦極焉、太陽

自此還向南行、日卑日遠、至秋分復在赤道、此限百有八十日、日照恒及於北極下、乃是夜國之晝也、)と證に爲たれど。此立世論の文は。怖畏而反と云に聯きて 佛問。汝至閻浮樹不。答言不至。佛問。汝何所見。是人答云。唯觀黑闇。佛言。此黑暗卽閻浮樹。是人重禮佛足。向北行云云。と云文あり。然れば其黑暗は。大樹の茂榮たるが。遠望に黑く見たる山にて。夜國の事に非ず。其は佛言。此黑暗卽閻浮樹。と有にて論なし。何に事闕たる引文に非ずや。笑ふべし。(殊に彼閻浮樹は、閻浮洲の北端に在るよし、諸經論に見えて異說なく、自もしか云ひて、南端より、其樹邊までの里數をさへに說き、また北極下の地は、閻浮の中心なる山をも云へれば、北極下より、閻浮樹までは、大抵閻浮洲里數の、半折ばかり有べきを、極下の夜國に引付たるは、何ぞや、且右に引く文の當ざるを、何とする、此引文の說には、なを論あり、第口口節に云を見べし。)また此菩薩。口を開けば。西說を排斥せるに。所以是地然者と云より以下は。西說を生捕に取りて。私意を其間に加へ

たる說なるは。其口に似ざる拙說と云ふべし。(然るは西洋にて、印度の羅睺、計都二星を步する術を用ふる事を謗りて、潛用印度之法者、豈不甚拙哉、其事苟不踰八之隷而、猥加私意於其間者何也、と云ひ、漢晉の儒者らか、蓋天說を取ざるを誹りて、極下夜國の事を揚言して、倘使楊雄葛洪、起於九原、則何顏得對今日之人哉、なども云へり、然れど是らは、然しも顏なき事にも非ず、然るは西洋にて、羅睺計都の推步を用ふるは、古く便宜しと、用ひ來れる故なり、また楊雄葛洪が頃には、蓋天の說こそ有つれ、周髀の書なし、夜國の說は無りしかば、後世に其說ありとも、何の恥かは有む、其は蓋天說を取ざるは、夜國の有無に關かる事に非ねばなり、然れば、彼等もし九原に起ば、却りて曆象編の作者をこそ、何顏ありて、今日の人に對するやと、手を拍てや笑らむ。)さて此菩薩が學問は。算術を專と學び。一部の立世阿毘曇論に。周髀算經を取合せ。諸經論を牽強せる學問なるが。其本據とする立世論は。彼國の後人が。佛說に。世間の曆算を盜み合せ。

(世間の暦算と云は、佛祖以前より、有來し暦說を云ふ、此はもと梵天子の傳にて、梵志家に傳はり、其より種々に轉傳して、數家の說ありしこと、既に委く云へるが如し。)自己の妄說をも。多く加へたる梵本なりしを。漢土にて。譯者眞諦。また漢說自說をも。攙入せる書なり。世間の暦算を盗み合せたりと云こと。何を以て知と云に。其日月行品に。閏月を立る因緣を云とて。依二世間說一以二三十年休多一決二定是月夜分一。三十年休多爲二六十分一。日行疾故五十九分。便周二長餘一分一。因二是事一故。一月則長二一日一。又二月復長二一日一。乃至二一年一足長二六日一。如レ是五年則長二一月一。用二是一月一補二五年中一。是爲二閏月一。若不レ作レ閏者。時節及年差壞不レ當二云々と有を見よ。世間に元より。晝夜長短の暦算有しを。其說に依りて。佛法者が始めて、閏月を作たる由なるをや。(但し、其世間說と云は、彼梵志らに、梵天の傳へたる暦法なること、云も更なり、然して其歷法に、もと閏月を作ることは無かりしなり、其れは今引く文にて著明なり、今西洋にて、恒星年暦とて、閏月を立ることなく、二十九日、三十日、三十一日などの月を作るは、其古法の傳れる也、回々國の大陽年暦と云も是に同じ、然れば閏月を立る暦法は、佛者よりぞ始まりける。)なほ世間則說とも。世間則曰とも。世間中云々など。數所に見えて。此日月行品は。その世間說を竊して。牽强せる說なること。卷を披けば忽に知らる。また漢土にて。眞諦が攙入せる證の尤きを一つ言むに。晝夜の長短をいふ所に。五月十五日。正圓滿。西國始結夏時。漢地安居已滿二一月一。是時日則最長十八年休多夜則最短十二年休多從二十六日一減二一羅婆一云々と有り。西國とは印度をいひ。其に對へて漢地と云へり。(なほ西國と漢地と、對へ云へること數有れど漏しつ。)全書もし。佛祖が眞說ならむに。然る文の有む物かは。然るを彼暦象編に。右の說等を引きて。是皆佛說なる佛直說也と云ひ。須彌山儀銘解には。是皆佛說なるを。阿難等の結集せる也。と言るは。何てかく死眼なるや。書見の識なき哉らむ。(全書を見通せば、昔王舍城有二兩比丘一、從二佛口一、聞二閻浮樹相一、云々、など云へる類の文あまた有り、佛說を直に、

阿難が記せる論に、か丶る文の有べくも非ず、論の趣、かつて阿難が結集に託して、後を欺かむと記せるには非ざる故に、餘の經論等よりも、後撰なる文格にて、佛說故、得知如是等事、など所所に云へるを、然る文には心著ざるか、然もあらば、謂ゆる死眼を以て、書を見たりと云べし、然れども彼菩薩、なか〳〵に、然る死眼の人とも覺えねば、若くは一切經は、普く人の見ざる故に、是らの書も人の見まじく思ひて、僅に論を抄錄し出て、これ佛說なりと、人を威せるにや、其は上に起世經樓炭經などに、なき文を記し出て、彼經經に有りと云るに、思ひ合さるればなり、然れば死眼か、その欺きかの二つをいでず、)斯れば本文および。起世經の說の描きが。佛祖の眞說にて。立世論の、曆算によく符へるは、却りて後人の牽强なること、炳焉なり。然れば護法家は、左まれ右まれ。識有む人は。佛祖が眞說を取てこそ論ふべけれ。(なほ此論の外に、正法念處經、日藏經、月藏經、摩登伽經、宿曜經、大毘婆沙論、倶舍論、などを始め、天文曆算の事ども、立世論よりは、委く載せる經論どもを、數引出て論へれど、其は殊に後作の書等なる物をや、其はなを次々にも論ふを見べし。)

日光熘熱有十因緣。一者日光照佉陀羅山。觸而生熱。二者日光照伊沙陀羅山。觸而生熱。三者日光照樹提陀羅山。觸而生熱、四者日光照善見山。觸而生熱。五者日光照馬祀山。觸而生熱。六者日光照尼彌陀羅山。觸而生熱。七者日光照調伏山。觸而生熱。八者日光照金剛輪山。觸而生熱。八山皆七寶所成。故觸生熱也。復次。上萬由旬有天宮殿。名爲星宿。瑠璃所成。日光照彼。觸而生熱。是爲九緣。復次日宮殿光照大地。觸而生熱。是爲十緣。日光焰熱。佛時頌曰。以此十因緣。日名爲千光。光明焰熾熱。佛日之所說。

大樓炭經に。日大城郭。熱爲春夏有十事。一者須彌山王邊有山。名阿多。七寶作之。彼擁其日大城郭之光明。用是故天下熱。是爲一事云々。(此に云々と切たるは、阿多山より次々、輪圓山まで、八大山を照すが故に、其山々の七寶等の、造成なるに觸れて、熱する由云へること、本文に異

無ればなり、）復次。從レ此高四十萬里。有ニ天神舍一。以ニ水精一作レ之。在ニ虚空中一。大風制持行レ之。譬如ニ浮雲一矣。天下人皆共名レ之爲ニ星宿一。其大者圍七百二十里。中者圍四百八十里。小者圍二百四十里。㨿ニ日大城郭之光明一用レ是故天下熱。是爲ニ九事一。復次天下地。㨿ニ日大城郭之光明一。用レ是放天下熱爲ニ春夏一。是爲ニ十事一と見え。（星宿天の高を、四十萬里と云るは、起世經に一萬由旬とある由旬を、例の里法に直せる里數なり、）起世經に。日天宮殿。常於ニ夏時一生ニ諸熱惱一。其日宮殿六月之間。向レ北行時。一日常行六倶盧奢。未ニ曾離ニ日行道一而行。但於ニ其中一有ニ十種緣一。故生ニ熱惱一。何等爲レ十。須彌山外。有ニ佉陀羅迦山一。七寶成就於ニ其中間一。日宮光明照ニ於彼山一。觸而生レ熱。此第一緣云云。（この云々も、また本文の旨に同ければ切めつ、）復次。從ニ此大地一已上虚空。高一萬由旬。有ニ諸夜叉宮殿一。頗瓈所レ成觸レ彼而熱。是第九緣。其次四大洲。并八萬。小洲中。自餘大山須彌山等。是第十緣。日天宮殿六月之中。向ニ北道一行。熱惱因緣とあり。（本文に、星宿天宮とあるを、夜叉宮殿と云るは、星宿の神は、夜叉なり、といふ古說有しと聞ゆ、但し其宮殿を、本文には、瑠璃と有を、頗璃と云ひ、第十緣は、本文に大地を照しとあるを、此には諸大山を照す、と云るは異なり）彼此合せ見て。春夏の時節に。溫熱ある事の。佛說を知べし。（須彌山儀銘解に、起世經の此文を引て、冬至巳後は、日輪漸く北に近ければ、金山を照すこと益深きが故に、熱を生ずること日々に多し、是日輪最高の行なる故なり、と云へり）

日光寒冷有ニ十二緣一。一者日光照ニ須彌海一。觸而生レ冷。二者日光照ニ佉陀羅海一。觸而生レ冷。三者日光照ニ伊沙陀羅海一。觸而生レ冷。四者日光照ニ樹提陀羅海一。觸而生レ冷。五者日光照ニ善見海一。觸而生レ冷。六者日光照ニ馬祀海一。觸而生レ冷。七者日光照ニ尼彌陀羅海一。觸而生レ冷。八者日光照ニ調伏海一。觸而生レ冷。復次。日光照ニ金剛輪山一。外有レ水日光所レ照。觸而生レ冷。是爲ニ九緣一。閻浮提地河少倶耶尼地水多。日光所照觸而生レ冷是爲ニ十緣一。倶耶尼河少。弗于逮水多。日光所照。觸而生レ冷。是爲ニ十一緣一。弗于逮河少。鬱單越河多。日光所照。觸而生レ冷。是爲ニ十二緣一。日宮殿光照ニ大海

水。日光所照。觸而生冷。是爲十三緣。日光爲冷。
佛時頌曰。以此十三緣。日名爲千光。其光明淸冷。
佛日之所說。

大樓炭經に。日大城廓。令天下爲秋冬寒。有十三因緣。一者須彌山中間海。奪日大城郭之光明。用是故。令日大城郭。寒爲秋冬。是爲一事。云云。(第一事より第九事まで、本文と異無ければ、また是を約めつ、)復次其河水東流。向閻浮利者少流。向倶耶尼者多。便奪日大城郭之光明。用是故。天下日寒是爲十事。復次、河流向倶耶尼者少流。向弗于逮者多。彼復奪日大城郭之光明。用是故天下日寒是爲十一事。復次河流向弗于逮者少。流向欝單越者多。彼復奪日大城郭之光明。用是故天下寒。是爲十二事。復次大海水。奪日大城郭之光明。用是故天下日寒。有秋冬。是爲十三事と見え。(大かた本文に同しけれど、彼は只に、其の洲々の河水の多少をいひ、此は河流の其の國々に向ふ、多少をいへり、少か異なり、)起世經に。復次何因何緣有諸寒冷。日天宮殿。六月已後漸向南而行。爾時復有十二緣。故生寒冷。一者於須彌山。佉提羅迦山。二山之中間。有須彌海。日天宮殿經其間。照觸其間。此是第一寒冷因緣如是。次第乃至輪圍山海。是爲八緣。復次閻浮洲中、所有諸河流行之處。日天宮殿光明照觸。故有寒冷。是爲九緣。復次如閻浮洲諸河流行。瞿陀尼洲諸河流行。倍多於此。日天宮殿光明照觸。寒冷更多是爲十緣。復次如瞿陀尼洲諸河流行。弗婆提洲諸河流行倍多於此。日天宮殿光明照觸。故有寒冷。是十一緣。復次如弗婆提洲諸河流行。欝單越洲諸河流行。倍多於此。日天宮殿光明照。觸而生寒冷。是爲十二緣とあり。(本文また樓炭經の、十二緣よりは、此に十二緣とせるが、優りて覺ゆれど、彼も此も、共に妄誕なれば、左ても右ても有ぬべし、)彼此合せ見て。秋冬の時節に。寒冷ある事の佛說を知べし。(須彌山儀銘解に、起世經の此の文を引て、夏至已後は、日輪漸に南に向て、七海及び鹹海を照すが故に、金山を離るゝこと益遠く、海水を照すこと、漸くに近きが故に、寒冷を生ずるなり、是日輪最卑の行なる故なり、と云へり、)

復次　有何因緣。於冬分時。夜長晝短。日天宮殿過

六月。已漸向南行。每於一日移六俱盧奢。無有差失。當於此時日天宮殿在閻浮洲最極南垂。地形狹少日過速疾。此因緣故於冬分時晝短夜長。復次有何因緣。於春夏時晝長夜短。日天宮殿過六月。已漸向北行。每一日中移六俱盧奢。無有差失。異於常道。當於是時在閻浮洲處內而行。地寬行久。所以晝長。此因緣故。春夏晝長夜短促也。

此の一節は。阿含世記經に漏たる故に。起世經に採て補へり。是かならず。無ては有まじき說法なるに。早く世記經に脫せり。と覺ゆればなり。（樓炭經にも落たり、起世經、因本經ともに、此の節あり、是を以ても、樓炭經と、世記經と、同本異譯、また起世經と、因本經と、同本異譯にして、凡ては四經もと、一經の異本異譯なることを知り辨ふべし。）須彌山儀銘解に。外學の曆說に從ときは。地平を以て。晝夜の限として。日輪地下より。地平に出るを日出とし。日輪地上より。地平に入るを日沒とす。（支那の渾天家西洋の地球等の、地平を立ることは、理ならびに皆おなじ。）今の須彌界の理は。日輪東方の。金山より出るを日出とし。西方の金山に入るを。日沒とす。而して其の晝夜に。長短有ことは。冬至已後は。日行日々に北に近く。また最高の行にして。日輪漸くに高し。故に日出日々に東に深く。日沒また西に深し。故に。梵曆の法に依れば。冬至已後は。晝長を增こと日每に日周九百分の其の一分を增し。春分に至りて。九十分を增す故に。一日三十分時の。三時を增なり（印度には、一日を三十時と爲なり。）春分已後夏至に至りても。亦また如是なれば。合して日周九百分の其百は。十分を增す故に。夏至の晝長を增こと。一日三十分時の六時なり。是印度の晝の極長にして。晝長きこと十八時。夜短きこと十二時。冬至の晝夜は此に反す。是立世論等に說所なり。（故に知る、是中印度の晝夜に就て、此を明すなるべし、天下の諸國、北極出地の數度を逐て、晝夜の長短、各々齊しからずと云へども、七金山を、晝夜の限とするなり、外說の地平を、晝夜の限として、其時刻を求ると、法大に同からずと云へども、其得る所の刻分に至て、秒微までに密合して、更にまた精妙なる者あり。）と言へり。

此閻浮提日中時。弗于逮日沒。倶耶尼日出。欝單越夜半。倶耶尼日中閻浮提日沒。欝單越日出。弗于逮夜半。欝單越日中。倶耶尼日沒。弗于逮日出。閻浮提夜半。弗于逮日中。欝單越日沒。閻浮提日出。倶耶尼夜半。

樓炭經に。閻浮利日中時。東弗于逮便冥。西倶耶尼則日初出。北欝單越則夜半也。倶耶尼日中時。閻浮利卽冥。欝單越日初出。弗于逮夜半也。欝單越日中時。倶耶尼則冥。弗于逮日初出。閻浮利卽夜半也。弗于逮日中時。欝單越則冥。閻浮利日初出。倶耶尼則夜半也とあり（起世經も、同說なれば引出ず）立世論日月行品に。日光徑度。七億二萬一千二百由旬。周廻二十一億六萬三千六百由旬。閻浮提日出時。北欝單越日沒時。東弗婆提正中。西瞿耶尼正夜。是一天下四時。由日得成とあり。（餘の三洲の事は無れど、准へて知べし、）また雜寶藏經に。問曰日之在上。其體是一。何以夏時極熱。冬時極寒。夏則日長。冬則日短斯那。答言。須彌山有上下道。日於夏至行於上道。路遠行遲。照于金山。是故日長而暑熱。日於冬時行於下道。路近行速。照大海水。是故日短極寒とも有れど。皆後世の說なり。さて右四章の說敎。すべて妄誕なること。言ふも更なるが。此は梵志に傳はる。天文測量の古說に從ことを嫌ひて。別に一機軸を出さむと巧つゝも。大地の圓體にして。虛空中に懸れる眞理を知ざるが故に。其臆說の。かく甚く拙きなり。抑大地の圓體にして。虛空中に懸れる義は。我が神典の古傳に照々たれば。他說を引て論ふべき事には非ねど。漢籍にも早く。素問の五運行大論に。地爲人之下。大虛之中者也。天氣擧之也と云へり。（此の文義は王氷か註に、言人之所居、可謂下矣、徵其至理、則是大虛之中一物爾、大氣謂造花之氣、任持大虛者也、と云へるが如し、）西洋の天文說には。地球と號けて。殊に精しく。其の形狀を考へ記して。其の書どもに。須彌世界の說を難破せるも多かり。其の或說の中に。大地の形は。南北と東西と。直徑の里數少しく差有れど。先は鞠の如く圓球なる故に。地球と名く。其の周の里數に。異說も有れど。大抵は。皇國の三十六町一里の里法にして。一萬一

百五十二里あり（今云、然れば其直徑は、三千二百十二里二十四町計、と知べし、然れども、其は定說と爲べからず然るは其大約こそ、測りも知るれ、其定數を知べき由の無ればなり、）かくて此を。佛說の閻浮洲の。由旬數に比するに。大よそ六十二分量に當り。此を須彌四洲世界に比すれば。拳を以て。富士山に比するに異ならず。況て大千世界の說には。比量すべくも非ず（今云、地球の說は、小と云へども實說なり、故にいまだ盡さゞる所あり、須彌四洲世界の說は、廣大を云むと、作り出たる妄說なる故に、大と云へども、唯に愚人を誑惑せしむる、一大長說にぞ有りける、）さて我か邦薩州鹿兒島の北極高度は。三十一度。奧州津輕の北極高度は　四十二度なる故に。吾邦は南北の廣さ十一度の國なり。天は三百六十度なり。（今云、此の或說の測量は、一度を、皇國の里法にて、二十八里七町十二間とす、三百六十歩を一里とする、唐の里法にしては、二百五十里なり、「或は一度を、二百里とも云ふ」、）大地。日に從ひて周旋すること。三百六十日にして。星度元に復す。（今云、舊說には、大地不動にて、日輪の周ると說なれど、今說は、日輪不動にて、大地周旋の說を用ふ、是ぞ正しき測量なる、）然れば天地俱に。其繞り。三百六十度なるに論なし。（今云、なほ此度數に、少か餘り有れど、今その事を云ざるは、大意を示せるが故なるべし、其餘りを集めて、後世に閏月を立たるなり、）是に因りて。此を觀るに。吾が邦は。周地三十三分の一に強し。是を以て吾邦を。三十三横に並ぶる時は。周地こゝに盡て。餘ること三度なり。是即現量なり。誰か非とする事を得むや。（京師の北極高度は、三十五度一分あり、若京師より、直經二十八里七町十二間北すれば、北極高を益こと一度にして、三十六度一分となり、若し二十八里七町十二間南すれば、極の高を滅ずること、一度にして、三十四度一分となる、是二十八里七町十二間にして、一度を、差ふこと如此し、凡そ東西三十度を差ときは、時刻の差ふこと一時なり、是を以て之を觀れば、周地の繞り、吾邦の里法にして、一萬一百五十二里に過ざること、確乎として拔べからず、（彼の暦象編に、西儒爲レ法、以ニ

極星出地、爲標準、故若相距二百五十里、北則極益高一度、若二百五十里南、則極益卑亦一度也、故以二百五十里、乘三百六十度、則得九萬里也、遂以爲一周地之量、而其地度之法、以便於地理、故、皓儒碩生皆信之、不悟其非、甚可哀矣、近者有以吾邦里法、測地度者、曰、驗北極出地、二十八里四百二十歩、而差一度、故地球之周、凡一萬百五十二里、徑三千二百四十四里三百三十歩餘、夫蕩々坤輿豈如是渺小者哉、如吾神洲、居天下之萬一、東西凡當五百七里百八十歩、故以地理撿之、自肥瓊浦至奥南部之東涯、則幾及二十度、雖然、今且從東西四十八度之義、以所布算也、假使以吾邦二十、布列東西、則其萬百五十二里、既皆盡焉、毫釐地容海矣、彼疏於理、曷如此甚哉、と云へるは、此の或説に對せる論の如くも聞ゆれど、寢言を聞が如くにて、解がたし、）佛教動すれば、邈遠廣大を說て。人をして恍惚として。知難からしむ。然れども日月百刻にして。復吾が天頂に見ゆる故に。時差を以て。里差を測るときは。虚空に飛騰して。

周り視ざれど。周池の大さ。知ことを得べし。（此に知る佛教は、盡く放蕩虚誕の説なること、現量赫々たるを、是通じ難き其の一なり、）復次に。和蘭の北際なる。救爾蘭度の如き。北極高きこと八十餘度にして。幾と極下に逼れり。南海赤道の蘇門多刺國等より、極下に距りて。一千六百一十五里半なり（今云、此は皇國の里法を以て云へるなり、三百六十歩を一里とする、唐の里法に積れば、凡二萬二千五百里にすぎず、）立世論等に准ずるに。閻浮提の南際より。四星輪に至りて。二百五由旬あり。（今云、此の或説は、都て東森菩薩が說に對する。論說なる故に、由旬數も、彼の菩薩が一由旬を、唐の里法の四十里となす說に依りて云へり、其は下文に、三百五十八由旬を化せる、里數を見て知べし、然れば此の由旬數も、唐里法に化して、八千二百里なり下これに倣へ、）廻星輪より。極下に至りて。支那の里法。一萬四千三百二十四里ある由なれば。此を由旬に化して。三百五十八由旬奇と成れば。閻浮の南際より。北極下に至る直徑。五百六十三由旬あり（今云、廻星輪と

は、印度にては、赤道を、日月廻星輪と名く、日月星宿の經緯の行度、みな赤道を準繩とすればなりと、須彌山儀銘解に云へり、上第口節に委しく引たるを見べし、五百六十三由旬は、二萬二千五百二十里となる、）閻浮提の地。北際より北に過こと。一千四百三十七由旬なり。（五萬七千四百八十里あり、）北極は。閻浮の中心より。南に去こと、四百三十七由旬の地に當る。（一萬七千四百八十里となる、）若爾らば。經說に言ふ所の。北俱盧洲の上の。北天の赤道ある所。正しく閻浮の南際より。九百二十一由旬の地上に當れり。（三萬六千八百四十里なり、）然れど猶未だ。閻浮の中心に至ざること。七十九由旬なり。（三千百六十里なり、）論說都合せざること如是し。須彌七金山。何の地にか有べき。（もし此を然ずと云はゞ、吾邦の南北の國にして、十一度の差あるを、如何が會するや、是通じ難き其の二なり、）復次に。經論並に須彌七金山。日光を障ふが故に。天下の晝夜を爲と言へり。然れども。今現に此を見るに。冬至前後には。日辰の位に出て。申の位に沒るが故に。此の時しも南面せずては。日の出沒を見こと能はず。彼山々は。正北に在る由なるに。何の由ありて。日光を障ふるや。卯より辰に至る。三十度の間の日光を障ふるや。また申より酉に至る。三十度間の日光。是また七金山の障ふべき理なし。（豈南面して、左右に七金山あるの理有むや、障るもの無して障るは、何物とかする、是通じ難き其の三なり、）復次に。須彌七金山。日光を覆ふて。天下の晝夜を爲さば。北極下。前後二十三度半の地。これを夜國界とす。此の地。春分より秋分に至る半年間は。常に晝にして。日輪地上の四面車行して沒せず。故に此の半年を晝とす。何に由てか。彼の諸山日光を覆ざるや。また此の地秋分より春分に至る半年間は。常に夜にして。日光を見こと無し。（此爵單越、瞿爾洲と云は、もと此夜國の古傳說なるべきこと、總論の分註に云を見べし、上にも少か其の端をいへりき、）然るを經文に。日光東弗婆提に至る時を。閻浮の日出と爲と說き。立世論に此の二洲の相去こと。三十六萬八百二十八由旬とす。（日沒西瞿耶尼に在るも同じ、）如是き遠きは。日光よく及ことを得て。閻

浮南邊より極下に至り。相距こと。僅に五百由旬なるに。日光の及こと能はざるは何ぞや。(是通じ難き其の四なり。)疑難多しと言ども。其の大なる四難を擧て。其の妄を示す。と言へり梵曆策進にも。此に似たる四の難說を擧て。外人如是き疑難を爲とき。奈何するや。回々支那等、是が爲に。佛敎既に亡滅に及べり前鑑目前に在り、大敎既に壞亂せむとす。何ぞ坐にして。亡ぶるを俟むや。支那には。今世佛に事ふる者。千百中に一二となれり。(其は曆學疑問補に、回々國始事佛久矣、從事曆法、漸以知其說不足憑、また回國以曆法測驗疑佛說之非とも云ひ、支那も是が爲に、佛敎大日廢せること、同書に、夫中士人之倫敎本於帝王、雖間有事佛者、不過千百中之一二、と云へるを見べし。)梵網經に。聞一言破法聲。猶以三百矛刺心。とあり。一言猶然り。況や今破法の言。洋々乎として。天下に滿るをや。三百矛に及ずとも。針を以て刺るゝ如くも思はず。攘手跋跨して。佛子と思へるは何事ぞや。(凡て我等が衣食住は、皆盡く如來毫光の賜なり、何ぞ如來の大恩を報し、六趣衆生の永沈を、救ことを思ざらむや。)若それ彼が言の如く。須彌界虛設とならば。始華嚴より、終涅槃に至まで。須彌界に關らざるは。一經も有こと無れば。其の經悉く虛談となるを。佛子として。爭か是を等閑に過すべけむ。今世にして。佛子の急務。是に過たるは無し(今云、此の語の如くなれば、須彌四洲界の廣大說だに碎るれば、謂ゆる八萬の聖敎は、みな虛談となるにこそ、此は其の護法者の傑出たる、此の菩薩の語にし有れば、實に然るべし、見む人よく心得て在るべし。)彼の邪說を摧かむ爲に、大藏の所說を撿し、諸の史傳を採りて、支那西洋の曆元等を研究すること。粗曆象編に著すが如し。(日藏經、月藏經、文殊儀軌經、摩登伽經、舍頭諫經、宿曜經、正法念經、起世經、樓炭經、起世因本經、長阿含經、立世阿毘曇論、新舊婆娑、俱舍等は、最も梵曆を推考すべき經論なり、其の中にも、梵曆の深理を見べきは、立世論の日月行品、日藏經の星宿品是なり。覃思すること久して、佛說の曆理天文を、粗洞にする事を得べし、大體既に明なる

ときは、枝葉に自に融鎔する事を得るなり。)倩按ずるに。五眼具足の大覺世尊、不可說の塵刹を洞視して。盡さゞる所なきは。固より論なし。(今云云々)僅々の一須彌界の事 日月星辰の曆數の如き。何の紕繆か有む。(今云、云々。)日藏經星宿品の如き。一年間の日轉月離。晨昏の中星。一周年の日影等を。詳に說還し給へり。其の精妙至當なるや。大聖の所說なれば。誰か此に尙ふる者有むや。(今云云々。)是等の洪慈を垂給へるは。誰が爲ならむ。偏に今日此の邪說の興ることを。知し召るゝ故なり。(而るを澆季の弟子、懈怠にして、是らの遺敎を知らず、今時破法の興るをも知らで、恣に遊逸に耽ることは、後世の鎔銅、いかむぞ免るゝ事を得むや。)如來大慈を以て。末世の倒惑を知見し給ふが故に。日纏月離、經緯の數量を。盡く須彌界四天下の里數を以て說給へり、是誠に世間不供の說にして。凡人の。絕て爲こと能はざる所なり。古へ印度より。唐土に將來する所の諸曆の法を察するに。盡く三百六十度の。周天度の法にして。度法月法を以て。造爲する者なり。如是きは、推步には。甚閑便なりと云へども。天地の里數を顯すに便ならず、立世論に獨日月合離の曆數。及び黃赤距緯。日月每日の緯度の平行。一一に。閻浮及び。四天下の里數を以て明し給へり。(是誠に佛智の甚深、今日を照し給ふが故なり、何となれば、今日外人の疑難する所は、佛說の天地なり、是の故に須彌界の里數を以て、日月合離、及び緯度の平行を明し給へるなり。)而して其の出所の曆數。二十四氣。晦朔弦望。盈縮遲速。日月食に至るまで。毫差なし。然れば所說の須彌界。器界の躰量。眞實なること。爭か疑慮を容るゝ事を得むや。(彼の種々の巧器を以て、遙天の度分を摸索する者と、豈同日の論ならむや、四天下の里數、日月合離の里數等、豈凡夫の窺ひ求むる所ならむや、是誠に佛說の佛說たる所なり。)今日吾が黨の愚輩を救むが爲に。大聖世尊。殊に須彌界の里數に約して。日纏月離を明し。以て佛說の天地を。徵信せしむる深意なり。(何となれば、彼の諸曆、みな度分に約して、日纏月離を明せるに、立世論、獨須彌界の經緯の里數に約して、日月の曆

數を明し給へるは、豈佛說の、天地を用ひて、以て之を徵信せしむるの意に非ずや）若爾らば。此の事の實は。天文曆數の爲のみに非ず。一代大小の經論を。證誠するの印璽なり（須彌界實に非ずは、曆數天に合せず、曆數天に合せざれば、日月食密合せず、もし此の事密合せば、須彌界の數量、これ眞實なること、誰か疑難を容るゝ事を得ん、これ豈證誠の印璽に非ずや）若此の事無くは。從上外人の天說を以て佛說の天地を破折せむに。何を以て之を摧破する事を得ん。此の時に當りて大小の宗敎。豈能破ことを得むや。且かの破法の屈儒。邪見の巫士。往々佛法を毀謗す。立世論に明す所の。如來金口の曆法は。彼の天球地球を摧破し。一代敎を守るの大法城。彼の邪賊を摧く大金剛輪なり。海內の諸兄弟。意を一にして。且弘く且學びて。澆末の佛法を護惜せむは。豈佛子の本意に非ずや。上に出せる。四箇の疑難の如きは。門に入りて熟習するに非ずは。能く摧ことを得べからず。と言へり。（此は本書の文を、甚く約めて擧たれば、委くは本書を見べし、板本にて、梵曆策進と題し、平安東森菩薩、比丘圓通、欽みて、吾佛法中の、海內の諸兄弟に白す、と記せり）其答辯なきは惜けれど。唯賴める立世阿毘曇論は。上に辨ぶる如く。僞託の書にて。强に。須彌四洲の里數。日月合離の里數に密合して作たれど。上四難の如きは。何とも摧破すべき便有まじければ。此菩薩加護法心は憐なれど。此を祐くる人は世に有じとぞ思ふ。

海水鹹苦有三因緣。一者有自然雲。徧滿虛空。周徧降雨。洗濯諸天宮。滌蕩天下。四天下。八萬天下。諸大山王。皆洗濯滌蕩海中。諸處有穢惡鹹苦諸不淨汁。下流入海。合爲一味。故海水鹹。一者。昔有大仙人。禁呪海水。長使鹹若。人不得飲。是故鹹苦。三者。彼大海水雜衆生居。其身長大。或百由旬。二百由旬。至七百由旬。呼噏吐納。大小便中。故海水鹹。

大樓炭經に。佛言。海水何故鹹味。有三事。一者海中有大魚。身長四千里者。八千里者。萬二千里者。萬六千里者。二萬里者。二萬四千里者。二萬八千里者。三萬二千里者。皆潰溺海中。故。二者

雲起覆諸海。於大雨。洗盪須彌天宮。其鹹水悉入大海故。三者。昔者得仙道人能咒。咒使海水鹹。故是爲三事と云ひ。（本文及び起世經と、次第は違へれど、同じ趣なり、）起世經に。此大海水。如是鹹苦。不堪飮食。有三因緣。一者起大重雲。彌覆凝住。然後降雨。洗諸天宮。復洗諸大山及四大洲。其中所有鹹辛苦味。一時幷下入大海中。二此大海水。爲諸大神大身衆生之所居住。所有屎尿流出皆有海中。三者。此大海水古昔諸仙祝言。願汝成鹽味不堪飮。令大海水鹹不堪飮。と見えたり（三經互に、いたき相異あることなし）三經共に此の說謂ゆる三災品。火災の下に載たれど。因に此に移したり。佛祖が例の臆斷にも。大海水の鹹き因緣をば臆斷することも能はず。此の三說を作れるが。共に小兒の臆見に似たり。（もし實に、諸天神大海衆生の、屎尿不淨の流入して然らむには、其諸天神、大海衆生の便利の鹹苦なるは、何の因緣にて然る、と問はむに、佛祖は何と答ふらむ、聞まほし、中に仙人咒言の說は、少し勝りて聞ゆ、）我が神典の古傳を除ては。萬國に。大海水の鹹苦なる因緣を。知べき說の有ことも無れば。然も有べき臆見にこそ。

（此の本因を知まほしくは、古史傳に就て見べし、）

復以何緣。有諸江河。因日月有熱。因熱有炙。因炙有汗。因汗成江河。已復因何緣。世間有五種子。有大亂風。從不敗世間。吹種子來生此國。故有五種子。一者根子。二者莖子。三者節子。四者蒂（蒂與蔕同本也謂脫葉之處とあり）中子。五者子々。是爲五子。

起世經に。復何因緣有諸河水。流於世間。有日故有熱。有熱故有炙。有炙故有蒸。有蒸故有汗濕。有汗濕故。一切山中汁流爲水。故有諸河。復何因緣有五種子。出現世間。若於東方有諸世界。或成已壞。或壞已成。或成已住。南西北方成壞及住亦復如是。爾時阿那毘羅大風。別於他方成住世界。吹五種子。散此界中。所謂根子。莖子。節子接因。合子。子々。此爲五子とあり。

佛告比丘。有四大天神。何等爲四。一者地神。二者水神。三者風神。四者火神。昔者地神生惡見言。地中無水火風。時我知其所念。卽往語言。汝勿

生化念。地中有水火風。但地亡多。故地亡得名。時爲彼地神。次第說法。除其惡見。爾地神卽於座上。遠塵離垢。得法眼淨。而白我言。我今歸依三寶。盡形壽持五戒。於正法中。爲優婆夷。水神火神風神。亦復如是。（頭注云提婆論服水論師口力論師にあたりていへる說なるべし）

大樓炭經に。佛言。昔者持地大天神。發是惡見。言。但有地。無有水火風。我爾時。往持地大神所告言。汝實言無水火風不。神言唯然。我言。大神莫說地無水火風。所以者。何地有水火風。（頭注云增一鹿頭梵志のことより末に四大を以て人身をとける說あり）地里數最深。我便以法勸助。令意開解歡喜。時持地大神白言。我從今已往歸命三寶。受持優夷戒。常有慈心於人及蜎蜚蠕動之類也。持水大神。持火大神。持風大神。亦復如是と見え。起世經に。佛言。世間有四種大神。所謂地大大神。水大大神。火大大神。風大大神。曾於一時。地大大神發是惡見。於地界中。無水火風界。我知其意。詣彼神所。而告之言。大神汝心實有如是惡見。云地界中無水火風界耶。答言實爾。我言大神。汝莫起是惡見。此地界中有水火風界。但於其中。地界偏多。以是得地大名。斷其惡見。令生歡喜。於諸垢中。得法眼淨。大神白言。我今歸依三寶。當奉持優婆塞戒。乃至水神火神風神。俱有此見。我既知已。悉往詰問。令得悟解。歸依三寶。此等名爲四大大神とあり。（本經には、地神の惡見をのみ、佛祖が度せるを、水神の惡見をば地神度し、火神の惡見を水神度し、風神の惡見を火神度せりと記し、樓炭起世は、共に佛祖が度せる由なり、此は總て妄誕なること、云ふも更なれば、然る違までは抄し出ず、）さて地水火風を四大と號け。天地のかくて在こと。及び人體の事。また其の病ある時なども。悉く此の四大の理を窮めて。是を論するは。元より是。四吠陀說なること。既に論へるが如し。（第二品四吠陀論の下を見べし、）故佛祖も。其の古說に依て。別に此の四神の事を。かく說出し。諸事の道理を說るも。皆此の四大の理を用ひたるが。後には是に。空と云ふ事を加へて。五大と立て。說たる事も多かり。（但し、そは□□

□仙といふ外道の說に據れる說なること、第□□品に云へるが如し、然して後の大乘經說には、猶加增して、六大七大など、次々に、事々しく說を作り立て、古說を厭むと構へたり。)斯て。其の四大の理を說ること。阿含を始め。諸經論。及び其の註疏どもに。多く見えたる中に。圓覺經に依りて。三藏法數に。四大者謂人身攬外地水火風四大而成。故稱爲四大也。一地大。地以堅礙爲性。若不假水則不和合。(謂眼耳鼻舌身等、名爲地大。)二水大。水以潤濕爲性。若不假地即便流散。(謂唾涕津液等、名爲水大。)三火大。火以燥熱爲性。若不假風則不增長。(謂身中煖氣、名爲火大。)四風大。風以動轉爲性。此身動作皆由風轉。(謂出入息。及身動轉。名爲風大。)と云へるは。言少にして。能く其の意を述たり。(阿含は更なり、餘經にも、人體を指て、直に四大と云ること、數ふるに暇あらず。)さて十二天儀軌に。一切衆生。四大違變有種々病。諸衆生不知恩故有如是違。以何爲恩。謂地水火風四大種。有其精日月諸天。皆有内外養育恩。供養此諸天有種々利。皆悉增力。と有りて。此の四大神を初に擧たり。(此の全文は、既に第□□□品の、第□節に引たるを見べし。)然して地天喜則。有二利益。一者人身堅固。色力增長。二者器界地種。味力增長。此天瞋時亦有二損。一者人身亂壞。色力減少。二者器界地味。力違本また供祭の所に。地天與地上諸神。樹下野沙諸鬼神。俱來入壇上。同時受供と云ひ。(地天とは、古傳に、土の神埴安毘賣命と申す神是なり。)水天のことは。水天喜時有二利益。一者人身不渴。二者雨澤順時。此天瞋時亦有二損。一者人身乾渴。二者器界旱魃。萬物乾盡。或雨大雨。世界滿水。流損草木及與衆生。また受供の所に。水天與諸川流江河大海諸神。及諸龍衆。俱來同時受供と云り。(水天とは、古傳に、水神彌都波能賣命とまをす神、是なり。)火天のこと。火天喜時有二利益。一者人身熱氣。隨時增減。二者時節不逆。此天瞋時。亦有二損。一者人身熱氣。非時增減。二者自然散火。焚燒諸物。また受供の所に。火天與

諸火神。及諸持明神仙衆一。倶來入ニ壇上一。同時受レ供と云ひ。(火天とは、古傳に、火神迦具土命とまをす神是なり、名義集鬼神篇に、惡祇尼此云ニ火神一と見ゆ、持明仙と云ことは、儀軌經論どもに、多く見ゆる名稱なるが、此はもと、吠陀の明教を持ちて、仙と成れるを云ふと聞ゆ、然るに、火神に從ふことは、事火を專とする故にや、また餘に由緒ある事なるか。) 風天のことは。風天喜時有ニ二利益一。一者人身輕安。擧動隨ニ心意一。二者器界安隱。无レ有ニ傾動一。而隨ニ世間一。有ニ冷風和一。不レ損ニ情非情等一。此天瞋時亦有ニ二損一。一者人身及音。而不ニ隨意一。二者大風吹滿散ニ破世間一。或不レ吹レ風。草木不レ順レ時也。また受レ供所に。風天與ニ諸風神无形流行神等一。倶來同時受レ供。と言へり。(風天とは、古傳に、風神志那都比古、志那都比賣命と申す神是なり、名義集に、婆庾此云ニ風神一とあり此天瞋時、人身及音而不ニ隨意一と云へるは、別に盛ニし、是に就て案ふに、金七十論に、五種風と云ことあり、一者波那、二者阿波那、(頭注云云言ニ阿那一者謂ニ持息一入一是引ニ外風一令レ入レ身義、阿波那者謂ニ持息出一是引ニ内風一令レ出レ身義とあり) 三者優陀那、四者婆那、五者婆摩那是五風、一切根同一事、波那風者、口鼻是其路、取ニ外塵一是其事謂我止我行是其作事、阿波那風者、見ニ可畏事一卽縮ニ避之一、是風若多令ニ人怯弱一優陀那風者、我欲レ上レ山、我勝他不レ如、我能作レ此是風若多令ニ人自高一、謂我勝我富等、是優陀那事、婆那風者、編ニ滿於身一、亦極離レ身、是風若多令ニ人離レ他不レ得ニ安樂一是風若稍々離分々、如レ死離盡便卒、婆摩那風者、住ニ在心處一能攝持是其事、是風若多令ニ人慳惜一、覓レ財覓レ伴云々と言へるは、婆羅門外說なれど、味ひあり、本は決めて吠陀より出つらむ、名義集に、優陀那、天臺禪門曰、此云ニ冉出一、去レ臍下二寸半、大論云、如ニ人語時一、口中風出、名ニ優陀那一、此風出已、還入至レ臍、偈云風、名ニ優陀那一、觸レ臍而上去、是風觸ニ七處一、項及斷齒脣舌喉、及以智、是中語言生、論云、出入息、是身加行、受想是心加行、尋問是語加行、大集經云、有レ風能上、有レ風能下、心若念レ上風隨レ心牽起、心若念レ下、風隨レ心牽下、運轉所作、皆是風隨レ心、轉作ニ

一切事、若風道不レ通、手脚不レ遂、心雖レ有レ念、即擧動無レ從、譬如三人牽二關捩一、即影技種々所作、捩繩若斷、手無レ所レ牽當レ知皆是依レ風之所作也、とあり、なほ上に息を數ふる事を云る所と、合考ふべし、)然して未に。若鎮二惡處一。並祈二五穀一用二地天一。若欲レ除二旱魃洪水難一者。用二水天一水難用二火天一。火難用二水天一。若欲レ除二怨賊一用二風天一。並於二此天一。祈二風難等一。如レ是爲レ首。若有二四大病一。隨用二四大精天一也とあり。此の四大神の主宰。また其の威德を述たる說ども。能く我が古傳の旨に符へり。(其の古傳の旨は、既に古史傳に詳に註せれば、今更に云はず、)

佛告二比丘一。雲有二四種一。云何爲レ四。一白。二黑。三赤。四紅。其白色者地大偏多。其黑色者水大偏多。其赤色者火大偏多。其紅色者風大偏多。其雲去レ地。或十里。二十里。三十。四十。至二四千里一。

大樓炭經に。佛告二比丘一言。云何有二四色一。何等爲レ四。一者有二青色一。二者有二赤色一。三者有二黃白色一。四者有二黑色一。其有二青色一雲者。中有二水界一大多。其有二赤色一雲者。中有二火界一大多。其有二黃白色一雲者。中有二地界一大多。其有二黑色一雲者。中有二風界一大多と云ひ。(此は本書のまゝ、一字も略せず、然るに文義盡さず、通えがたし、)起世經に。佛言。於二世間中一有二四種雲一。謂白雲。黑雲。赤雲。黃雲。此四雲中。若白色者多有二地界一。若黑色者多有二水界一。若赤色者多有二火界一。若黃色者多有二風界一。復有レ雲。從レ地上昇在二虛空中一。或一俱盧奢。或二。或三。或至二六七俱盧奢一住。或有レ雲。上二虛空中一。或一由旬。六七由旬。或百由旬。數百由旬。或千由旬。或數千由旬住。とあり。(此は唯雲の虛空中に止まるに、高下ある事を云へるのみにて、別の事なし、)さて白雲を地。黑雲を水。赤雲を火。紅雲を風に當たるは。四大の色を以て說りと聞ゆるに。皆違へり。中にも。黑を水に當たる抔は。譯者の態と。漢說を用たりとさへ所思たり。(然るは水を黑色と云こと、漢土にも古くは聞えず、中古より、五行家の設たる說なればなり、彼の國も、最古く、水は五色に當ること無し、とこそ云へれ、)雜阿含經五の卷に。四大の色を。青黃赤白と云へるぞ古說なる。殊に雲色に。種々ある由は。一向

に四大の理を推ては。論がたき由有。其は別に考有て。記し辨へたる物あれば。此に云はず。

電有四種。云何爲四。東方電名身光。南方電名難毀。西方電名流燄。北方電名定明。有時身光與難毀相觸。有時身光與流燄相觸。有時身光與定明相觸。有時難毀與流燄相觸。有時難毀與定明相觸。有時流燄與定明相觸。以是緣故。虛空雲中有電光起。復以何緣。虛空雲中有雷聲起。虛雲空中有時地大。與水大相觸。有時地大與火大相觸。有時地大與風大相觸。有時水大與火大相觸。有時水大與風大相觸。以是緣故。虛空雲中有雷聲起。

大樓炭經に。電雷有四品。何等爲四。一者東方電名百主。二者南方電名身味。三者西方電名阿竭羅。四者北方電名阿祝盤。何以故。虛空雲中出聲。有時地種。與水種共諍鬪。地種與火種共諍鬪。地種與風種共諍鬪。譬如山々相搏。却住。是故虛空中出聲。と云。(四方の電名こそ、本文と異れ、其の道理は、異なる事なし、)起世經に。佛言東方有電。名曰無厚。南方有電名曰順流。西方有電名墮光明。北方有電名百生樹。「復虛空中出生電光。有二因緣。何等爲二。一者或有一時。東方電與西方電。相觸相對。相磨相打。以是故出生大明。此第一因。二者或復南方電。與北方電。相觸相對。相磨相打。以是故出生電光。譬如雨木風吹相著忽然。火出還歸本處。此第二因。虛空雲中有出音聲。有三因緣。一者一時雲中。風界與其地界。相觸著。故便有聲出。二者一時雲中。風界與彼水界相觸著故。卽便出聲。三者一時雲中。風界與彼火界。相觸著故。卽便出聲。所以者何。譬如樹枝相楷相磨。卽有火出とあり。

相師占雨。有五因緣。而使迷惑。一者雲有雷電。占謂當雨。以火大多故。燒雲不雨。是爲占師初迷惑。二者有大風起。吹雲四散。入諸山間。三者大阿須倫。接攬浮雲。置大海中。四者雲師。雨師。放逸婬亂。竟不降雨。五者世間衆庶。非法放逸。汚淸淨行。慳貪嫉妬。所見顚倒。故使天不降雨。以此緣故。相師迷惑。占雨不可定知。

起世經に。佛言於虛空中。有五因緣。能障礙雨。令占候師迷惑。何者爲五。或雲興雷動。作伽荼々々。瞿厨々々等聲。或出電光。或復有風。

吹二冷氣一。皆是雨相。諸古察人。及天文師等。悉覩二此時一。必當降レ雨。爾時火界增上。力生卽於二其時一雨雲燒滅。是第一雨障因緣。而天文師及古候者。心生二疑惑一。記二天必雨一而竟不レ雨。云々とあり。(餘の四因緣、みな本文に同くて、唯委きのみなり、故略しつ、樓炭經も同じ因緣なるが、文義盡さゞれば、是も略きつ、)

凡世地動。地在二水上一。水止二於風一。風止二於空一。空中大風有レ時自起。則大水擾。大水擾則普地動。是爲レ一也。次得道比丘。比丘尼。及大神尊天。觀二水性一多。觀二地性一少。欲二自試一力。則普地動是爲レ二也。」

此の一節は本經長阿含の第一分遊行經佛涅槃の所に說たるを天文說の同じ因に此に載しつ。(但し其の經には、八因緣を說て、此外になほ菩薩託胎時、出胎時、初成道時、初轉法輪時、佛教將レ畢時、涅槃時の六地動を說たれど、今は下に引く立世論に合せて、此の二動を擧つ、其の六動の事は、下に說辨ふるを見て知るべし、)立世論地動品に。佛告二富樓那一。大地動有二二因緣一。何者爲レ二。是地界住二水界上一。是水界住二風界上一。是風界住二於空中一。有レ時大風吹二動水界一。水界動時。卽動二地界一。是一因緣。故大地動。復有二大神通威德諸天一。若欲レ震二動大地一。卽能令レ動。若諸比丘有二大神通。及大威德一。觀二地相一令レ小水相令レ大。欲レ令二地動一。亦能震動。是名二第二因緣一。(すべてこれ本文の旨と、互に異なることなし、)有二諸外道一。作二如レ是說一。是大地界恒去不レ息。是言應レ答。此事不レ然。若實爾者。如二人擲レ前物一。應レ落レ後。(諸外道とは、佛道者が、其の道の外なる諸道を云ふ語なること、既に云へり、其の說に、大地恒去不レ息と云は、卽地轉の說にて、甚だ謂れたり、其の由下に論ふべし、)又諸外道作二如レ是說一。是大地界恒墜向レ下。是言應レ答。此事不レ然。若實爾者。如二向レ上擲一。應レ不レ至レ地。(此の外道說非なり、信に佛祖が辨說の如し、)又諸外道作二如レ是說一。日月星辰恒住不レ移。大地自轉。疑二是大廻一。是言應レ答。此事不レ然如レ是者射不レ至レ堋。(大地自轉の說は、然る事なれど、月星辰の、恒に住して移らずと云へる說は非なり、日輪こそ動ざれ、月星ともに、旋轉する事は論なし、)又諸外道作二如レ是說一。大地恒浮隨レ風來去。應二如レ是

答。此事不レ然。若實倚者。地恒併動。若不レ爾者。地作二何相一。地住不レ動。(大地恒に浮びて、風の隨に來去すと云は、前の大地界恒去不レ息と云ひ、大地自轉と云へるに異無けれど、左も右も風の吹く隨に來去す、と云へる如く聞ゆるは、語足らず、然れど、佛祖が辨說は、愚の至なり、其は下に論ふに准へて知べし、)如レ是義者。諸佛世尊已說如レ是我聞とあり。(此の地動辨の佛說どもは、世世次々に、語り繼來れるを、遙後に、かく論に載せるが故に、其の記者がかく謂れるなり、)さて本文に。世の地動と云へるは。卽ち謂ゆる地震の事なり。此を佛祖が、全大地の動く。意得たる趣の說法なるは。甚く愚說なり。抑地震は。全地の動には非ず。其は此の全地に、萬國あるが中に。一國動きて。他國は知らず。一國に郡鄕多き中に一郡一鄕動きて。他郡他鄕に。其の動を知ざる事も有を以て。全地に係ざること。著明なり。(斯てその地震する由を、今說まく欲すれど、此は古史傳に委く註へれば、今は漏しつ、)さて得道の比丘尼。及び大神尊天の。水性地性を觀じ。力を試みむと欲すれば。普地動くと云ふ說。是また愚說なり。然るは地震も。地震すべき理ありて。震ふにて。其の本源は。信に神祇の態なるに論無れど。觀相試力などの。癡事による事には非ず。また佛祖を始め。比丘等が態と。地震せりとふ事も。佛籍らに多く見ゆれど。此は皆渠等が幻法を助くる。妖魅の。愚人を誑かして。然は思はすにこそ有れ。實の地震には非ず。(佛說が託胎時、出胎時、初成道時などに、地震ありしと云は、後に云ひ出たる妄誕なるが、その初轉法輪時、涅槃時、また佛教將レ畢時ごとに、地震ありしと云ふ事は、其の妖魅の助にて、集へる愚人らを誑かして、然は思はせたるなり、)然れど其は邪法なる故に、威德正智の卓たる人。其席に望めば、其の幻法かならず崩れて。地震も何も得成ざる正理あり、(此は己正に其の驗を見つる事もあれど、其はおきて、彼の光大臣の鵟の妖態を顯はし、唐戎に傅奕と云し者の、天竺僧が人を呪ひて、或は殺し或は活せると、正邪を試して、我を咒せしめたるに、傅奕は何の事もなく、其妖僧のかへりて斃れたるなどを、思ひ合

せて辨ふべし、）其は論より手近く、今本朝に。かく比丘比丘尼の多かる中には。何に謂ゆる澆季にも有れ。其の觀相の旨を熟く得たるも有べければ。其に說法せしめ。其の席に。威德正智の卓たらむ人を置て。比丘が說教畢たらむ時に。觀相試力せしめて。試むに。其の驗忽に視つべし。(圓通菩薩が須彌山儀銘の和解に、佛祖が神通を疑ふ者に諭さむと、種々論へる中に、今の世澆季に淹して、曾て得通の人なきは、其の人の劣れるにて、其教の妄なるに非ずと云へり、實に然も有らば試むべき便なし、また然も有らば、彼の引導も其詮有まじき道理なるを、其詮ありげに物するは、此の事に於ては詮あるか不審々々、）但し今かくは論へど、余はし人も通を得るてふ事を疑ふ倫には非ず、唯その通力に邪正ある義を論ふなり。正とは。正道に依り。正神の助くる通力を云ひ。邪とは邪道に依りて。邪魅の助くる通力を云なり。(正道に依り、正神の助によりて、通力と云ふべき、異驗奇瑞の有しこと、我が古には、神武天皇、景行天皇、神功皇后、倭迹日百襲姫命、□□王など、

猶多かり、また唐土の仙人には、殊に多く、仙人ならでは、諸葛亮と云し人なども、往々通力と覺ゆる事を行へりき、其は正道に依りて、正神の助を得たるにぞ有りける、此の正と邪とを並べて、此を考ふるに、正なるは、誠心祈誓の驗とのみ見えて、尤からず邪なるは、其の人の直に行ふ如く見えて、甚尤けし、世人此の左別を知らず、邪正をこめて、其を混に意得るは、甚く誤れり、）然れば。佛祖及び比丘らが術力は。邪魅の助なること著し。其は何を以て知なれば。其の說く道の。天皇祖神の正道に。甚く違へるを以て。是れを以て。是れを知れり。(佛祖が說法の、正道に違へること、當品の總論に、委しく辨ふるを見て知べし、）邪魅ならで。非道を助くべき謂無れば。佛祖が說敎後。また然らぬ時も。地動など示せるは。皆其が態なる事を辨ふべし。(なほ佛祖が通力てふ事には、大に說あり、其は佛祖變現品に、取總て論ふを見べし、）さて立世論に。諸外道の說に。是大地界恒去不レ息と云ひ。大地自轉。疑二是天廻一と言ひ。大地恒浮と云ふ由なるは。佛祖が在世に。早く地轉の

說の有しにて。此は彼の梵天子の傳へたる。梵志家の天文說なるを。諸外道にも取り用ひたりけむ。(梵志家の天文說は、元これ梵天子の傳へなること、第二品、四吠陀論の所に宿曜經を引て、既に委しく論へりき、また其の說諸外道に及べる耳ならず、回々胡國西洋の諸國、唐戎までに傳はり、猶次々に精密なる測量を加たる事も、其所に委しく論へるを見るべし）抑々日輪。その所を替ず。大地旋轉して。晝夜四時を爲こと。我が神典の趣にて。此の梵說それに能く符へるは。最も感たし。彼の證量比量を好ざる。梵志の古風にし有れば。其の考說には非ず。彼の梵天子の古傳說なること。疑なし。(梵志學に、證量測量を好ざる事は云々、)但し諸越人は。早く地轉の趣を考へ得て。漢末に其說を記載し。近世西洋人も。證量し得たるが。共に我が神典の古傳に符ひて。彼も此も。萬古に動なき公說にぞ有りける。(諸越人の說は、考靈耀といふ書に、地有四遊、冬至上北、而西三萬里、夏至地下南、而東三萬里、春秋二分其中矣、地常動不止、譬如人在舟而坐、舟行而人不覺と云へる是なり、西洋人の說は、天地二球用法記と云ふ書に見えて、骨閉留と云し者の說なり、能くも神傳に符へる說なるは、凡人の察考も、また恐るべき物なりけり、)然るを佛祖が。此を非說として。大地恆に去て息ずは。前に擲る物後に至るべし。射て堋に至らざるべし。と云へるは。共に愚說なれど。童蒙の爲に少か辨へば。大地の外邊に。薰圍とて。地面より高さ。大約そ二十度外までを。圓繞せる物あり。此は謂ゆる氣にて。動きて風となる物。即是なり。(この薰圍てふ物の始まりは、神典に見えて、古史傳の風神の處に註せるを見るべし、西洋學にては、此を濛氣、また霧環など號けたれど、當らざる號なり、我が黨には、神典によりて、薰圍と號けたり、)斯て薰圍の外邊は。譬へば囊の如くにて。薰圍その外に通ずる事なく。薰圍中なる大地は。譬へば。囊の中央に止まれる物の如し。(舊說に、大地の空中に止まる趣を譬へて、瑠璃の□□に、一粒の大豆を入れて、息を吹込れば、其の大豆□□の中央に止まるに比へたるは、能く叶へり、今も其の意ばへなり、)是を以て

大地。日夜に旋行すると言へども。薰園の圓繞せる隨に。其を持負つゝ。旋行する故に。大地に立たる人の。前に擲る物。後に落ると云こと無く。射て垜に至ず。と云ふ事も無なり。其は薰園中なる物。人は更なり。何にまれ。薰園に隨ふ理なるが故なり。（なほ此佛說を信せむ人も有らば、試に、其體よりは、萬億倍ならむ大革囊に盛られて、囊口を結び固め、その疾こと電光の如く、東へ遣しめ、其を遣る間に、囊中の我が前なる方へ物を擲げ、囊中の東に向て弓射たらむに、此の疑ひは忽然に晴なむ物ぞ、然れど此は容易からぬ事なれば、何なる護法者も、試し得まじきは、最惜き事なり。）また大地もし浮びて來去せば。地恒に併動かむと云へるは。殊に至愚の論にて。辨ふるに足らず。（然るは昔西戎國に、一愚人ありて、大船に乘たるが、船の水上を行ことを知らず、過ちて佩たる劍を、水中に落せるに、其の船端に刻して、此刻を付たる所の水中こそ、劍を落せる所なれとて、求めしとか、何ほど大船たりとも、大地の大には比ぶべくも非ず、微小なるに、其を行としも知らぬ愚人も在しかば、況て大地の大に比べては、塵埃もなほ比すべからぬ、我等が小軀なれば、大地の旋行するを知ざる愚人も、世には多かるべき事にこそ。）然るは印度の古說。西洋の新說。共に地轉と云へば。日輪は其所を替ずと云ふ說にて。皇朝の神典に符合し。議論に及まじき說明なればなり。（然れば、本文及び立世論なる佛祖が說は、例の、古說をもどく惡意より、作り出たる妄誕なること、云ふも更なり。）然るを彼の佛國暦象編に。西洋の地轉說に。地球一旋。是爲二一晝夜一。轉二三百六十一。是名二一年一。卽一周天也。と云へるを破らむと。夫佛陀者。天眼窮二三際一。將來之事早已知レ之。豫爲レ防レ之。以垂二之慈悲一。と云ひて。立世論なる。右の破說を引たるが。作二如レ是說一とある文字を。作また作など訓みて。將來の懸記に取成し。佛懸知二邪說之起一。預記如レ是。佛之懸記其類甚多。果有二厥徵一。皆如二地動一。可レ見二通明不一レ徒然一。とも言へるは何ちふ誣言ぞも。（こは彼の文に、是言應レ咨と云ひ、應二如レ是咨一など言へるが、懸記めけるに依ての說か、然も有らば、甚く文義を辨へざる者

と云ふべし、然るは此語はし、佛祖が時よりは、早く地轉の古說あるが故に、其の說をもて、佛祖が新說を難ずる者の有むには、如是答へよと言敎へたる耳にて、地轉說の、後世に起らむ事を、懸記せるには、非ざる物をや、）また其引文を視れば、有二諸外道一。作二如レ是說一。是大地恒去不レ息。是言應レ答。此事不レ然。若實爾者。如二向レ上擲一。應不レ至レ地。と記せり。此を余が上に引たる文と照し見よ。二條を一條に約して。强に佛說を護立むと爲たる結構なり。（もし過りて、かく引たるが、然も有らば、須彌山儀銘和解に、予立世論を考ふること、己に年有り、而して一旦豁然として通曉す、是故に同志の爲に、此を遺して、永く不朽に傳へ、佛典の及ぶ所の、廣大なる事を、倶に渴仰せむと欲するなり、と云ひ、其の家學、たゞ一部の立世論にある人のわざ、とも非ぬ過なりかし、凡て佛者の著せる諸書に、其經論を引たるを見るに、其の謂ゆる經論になき文を、有と云ひ、また章を斷じて、邪義を附會し、世人を誑惑せる說ども多かり、其はかの經論の多有を、常に誇り、俗人は、

そを讀得べき物とも思たらぬを幸として、世人を皆盲目のごと侮りて也けり、但し他の佛法者こそ有れ、暦象編の作者は、大藏數萬卷の經論、今幸ひに、天下に彌布せり、之を學びて後に是非の議論に及ばゞ穩當と云ふべし、世人かつて佛典を硏せず、而して其是非を論ずるは、甚これ不當に非ずや、と言ひ、世人偶に、佛敎を見れども、佛敎を以て、佛敎を見る人甚少なりと誘へれば、然る賣僧わざは、有まじく覺ゆるに、是の如き事あり、また上に論へる、樓炭起世などになき文を、有と引出たる如き事も多かるは、左に右に、佛者の著せる書どもは、謾には信られぬ物と知べし、斯て其の難を受て、遁るゝに所無れば、例の方便とぞ云なる此には何もせむすべなし）偖まづ如是く。立世論の佛說を。後來の懸記に取成おきて。其の才の有む限を振へり。と見ゆる其の破說に。夫地球九萬里。一晝一夜而一周地。則其行非下速二於箭一大凡二十四倍上。則不レ能也。豈有二此理一哉。（試測二箭行量一。人息一呼。箭行幾不レ過二五十步一。一吸亦然。凡人息。一晝夜而。一萬三千五百。故。呼吸

合、成二一萬七千一故知、箭行一晝夜而得二百三十五萬步一乘以二一十四一恰成二三千二百四十萬步一、九萬里則亦、三千二百四十萬步。故、得二兩數正適當一。故云速二於箭一凡二十四倍。)若爾則如三人向レ東射者。其箭當下後二於堋一二十四倍上。蓋箭在二於空一。而人與レ堋著レ地。箭行遲二於地旋一。而地旋速二箭一。則當下比二箭及二百步一。人與レ堋隨レ地俱轉。先中於箭上。凡二千四百步上也。論所レ謂。射不レ至レ堋是已。(如二其向レ東射者一、終必不レ得レ至レ侯、如三其向レ西射者一、箭離レ弦未レ過二於空一、倏爾及レ侯。而如二其南北射者一亦終不レ得レ中レ侯也、飛鳥行雲皆類レ之。其違二現量一如レ是、)吾曹。焉得レ不三務闢二彼邪說一哉。と言へり。(なほ此の比丘が著せる書等は、地球地轉の說を破るを專と爲つれば、其の破說の牛毛なる中の、一節を抄し出たり、須彌山儀銘和解には、彼の蠻夷の徒、邪敎を挾みて、妄に曆數を謂て、地動の說を張れり、然れども、官圖道明にして、之が爲に取られず、然るを常典に暗き者は、動すれば此を張むとす、我が黨、國の爲に鼓を擊て、之を攻ずば有べからずとも云へり、彼の邪敎は、禁じ給へること、誰も知れゝど、地轉の天文說を禁じ給へる事は、何の頃なりけむ、)此は立世論の尻馬に乘れる說なれば。甚く骨折りて。考たりとは見ゆれど。勞して功なき徒言にぞ有りける。(そは上に論へる、薰園の說にて辨ふべし、)さて因に。此に論ふべき事あり。其はこの菩薩。已に曆象編を著して後に。海內の佛者を誘ふ由にて。梵曆策進といふ書をも著せるが。其の中に。近世邪見の巫士。佛敎の盛大を嫉謗して。動すれば。大聲に佛敎を破す。愚渠に對して言く。汝常に談じて。吾邦は日神月神の神孫なりと謂ふ。何にも然るべし。若爾らば吾邦は、日月行度の實數。天地の實量を傳へ測ること。最詳なるべきに。諸の神書。一も此を知べき物なく。印度支那西洋回々等に比するに。此の國もとも。此事に昧して。一も其の徵信すべき物なきは何。と云ふを以て摧斥するに金剛鎚を以て。瓦氷を摧くに等し。と言へり。(此は本書の愚文重復を略き、約めて引たれば、猶本出を見べし、巫士とは、巫の事を云へるか、なほ別所に、神道者の常談に、日神月神の子孫なりと

云ふ、而して其二神の行度の、實數だも知らずと云ひ、また屈見の儒流、及び神職など、佛教を疾謗する者を摧くに至りては、此現量の事實天地曆數の實測を以てせば、誠に金剛鎚に等かるべし、とも云へるを思ふに、然る神道者の倫を、云ふにも有べし）其の巫士と云へるは、名を何と云し者なりけむ。天照日大御神の道を奉ずる者。と聞ゆるに。其の道の爲に、かゝる邪惡の妖言を聞つゝ。など金剛鎚に擊れし瓦氷の如く。默止たりけむ。甚不審しき事なり（曾て風に傳聞せる事あり、そは京にて、或天文者の、西洋說を用ふる者と、彼の菩薩と、或所にて出會ひて、互に天說を論へる事の有けるに、菩薩甚く論じ伏られて、困じける時しも、彼の天文者勝に乘りて、佛法をさへに、稍誹謗したり、菩薩きゝて、勃然と色を起して、汝この佛法を誹れる事こそ、聞捨られね、然るは今かく公より、諸宗を立置たまふ事は、此法なくては、王法立がたき深理を思召して、公武これを尊崇し給ふが故なり、然るを汝、凡卑の身として、此法を誹るは、卽王法を謗るなれば、我今その啓すべき所に白して、嚴科に處し給ふべく計はんと、居丈高に叱りて、座を立ければ、天文者甚く恐れて、這々に歸れるが、人して密に、菩薩が動靜を伺しむるに、專その啓すべき所に啓する章の、用意すと聞えければ、益々恐れて、頓に死たりと披露して、其國へ逃歸りけるとぞ、然れば此巫士も、さる威しに逢たりけむ、故に、默止けむも知べからず）然るはまづ。此の菩薩は。何國の生ならむ。近世外國僧の渡來して。足を止むるが有りとしも聞えねば。決めて此の皇國內の生にて。皇朝の僧官を賜はり。皇朝の衣食する人なるべきに。甚しき邪言を出せり。其は右の文に。吾邦は。日神月神の神孫ならば。日月行度の實數。天地の實量を傳へ測ること。最詳なるべきに。云々と言へるは。此の事に昧ければ。天皇を日神の御末ぞと云ふ。神典の說は。妄誕なりと云ふ意なり。然も有らば。天皇の御大祖は。何より出給へりとか爲る。此の菩薩。姓は釋迦とも何とも云へ。斯る妖言を吐出べき物かは。昔より僧の。諱憚り無きは常なれども。今世にして。餘りに常典に昧き

菩薩なりかし。(□□□のころ、釋圓月と云しが、日本史といふ書を作りて、天皇の大御祖を、呉泰伯が末なりと記しけるに、廷議ありて、其書を燒捨られ、圓月をば流罪し給へりとぞ、是皇朝の常典なるを知ざるを、狂僧とや云べき、此の部の狂僧をり／＼出る事にて、神國神字辨といふ書にも、道樂菴敬雄と云ける狂僧が、吾國の開祖は、呉泰伯と云こと、天照大神を宗とするより、百千萬倍勝れりと云る說を載たり、然れど此れ等は、陽に知らるゝ妖言なるを、此の菩薩、曆象編などに、西說を破るとしては、妨ニ吾皇國皇神之道一など、往々言擧しつれど陰には皇道を、甚く卑めて在ける故に、覺えずかく眞情を吐露せるなり、然れどなほ罪深きは、妖言とも聞えぬ趣に、言を巧みて、何にも然るべし、など愚弄せるは、最憎し、是の如きを、陰惡とは云ふなり。)諸神典に、日月行度。天文測量の說なきを以て。日神の神孫と云を信ざる由なれば。聊か其の義を誨さむに。二の所以あり。其の一は皇國は萬國の極宗たるが故に。世の初より早く。天皇祖神の神語によりて。日月の日月たる所以。また其の尊き由緒の本は知りて有れど。其の行度の如き。急務ならざる事は。朴略にして。他より早く議すまじき國なり。(然るは日月の行度は、今世の如く、議する事となりては、議するまに／＼、議すれども、上古の大らかなる御世には、議せざらむも、事缺ること無れば、議せむとも爲ざりしなり、天地の實量を測ざるも、是におなじ。)其の二は。皇國は萬國の君國にして。萬國の貢を受べき國なる故に。天文測量の術。また急務に非ざれば。他より早く議すまじき國なるを。唐戎及び印度を始め。諸外國。終には皆。皇國に臣と稱して仕へ奉り。各々その國產を貢ぎ奉らでは。得有まじき。幽き理の有れば。彼の天降れる梵天子。まづ印度に早く天文測量の術を傳へて。其を萬國に及ぼし。なほ精密を加へたるを。皇國に奉貢せしむる神意なり。是ぞ皇國の。萬國に君位たる所以なる。(此は片言も、正しき徵なき事は云ざるを、若いぶかしみ思はむ人もあらば、余が古史傳に就て索めよ、梵天子天降りて、印度にまづ天文測量の術を傳へ、其より回々、胡國、

西洋、支那にも及べること、四吠陀論の下に委しく記せり）抑々天文學の本務は、星宿を知る事なるが、是より及て。日月の行度。天地の測量、暦術をも研窮するにて、其の星宿を探ぬる事は、もはら交易の爲に。諸國に渡る海路を知むとの用意なり。但し此は。顯に就て云なれど。幽より是を云ときは、萬國を終には皇國に貢せしめ給はむと、神のしか制令給へるなり（此の道理は、當品の總論に云ふを見ても知べく、其の委しき事は、古史傳に就て見るべし）然るを法師ながらも、夫現住所依の天地を。奈何と推撿せざるを、豈學を好むと云むやと、人を誘ひ。國恩を報ずと云ひ。皇道を護する由をも云へる者の。然る推撿なく。彼の妖言を吐出たるは何ぞや、また此の皇國の本因を知らで、天地の實量、日月の行度は更なり、梵籍の眞面目をも。知得む物かは（是をもて、此の菩薩が作れる暦象編、須彌山儀銘解、梵暦策進など、其の護法心より、勤たる事は勤たれども、萬國の天文暦術本これ印度より起れりと云へるなど、瑣瑣たる枝葉の事には、信なる説もまゝ有りて、大本の説に於ては、總ねて非説と云むも強語ならず、また序なれば云ふ、官に用ひ給ふ天文書説は、何ならむ知ねども、俗の天文者らが持囃す、唐戎印度西洋諸國の天文書ども、及び皇國人の世に著せる天文書も、己が見たる限りは、皆天文の縕奥を視るに足らず、鞋を隔てゝ痒を掻くちふ如き説ぞ多かる、其は外國人は更なり、皇國人と云へども、皇國の本因、日月の神の實義を知ざれば、なりけり）知ざるが故に、經々論々。悉く後人の僞託にて。其の説の齟齬する事をも辨へず。佛説傍説うち雜れる。一部の立世阿毘曇論を。言々句々。皆これ金仙梵皇の眞説。金科玉條と尊奉して。彼の僞託の經々論々の中より。立世論に誣會すべき語どもを摭ひ採りて。須彌山四洲世界の説を、推立むとは構たるなり。（凡て著述の心得は、まづ其の本據と立べき書の、眞僞本來を知べきは更にも云ず、其の引用すべき書の、本來眞僞をも熟々に辨へおきて後に、物すべき態なるに、然る心得もなく、皆佛説ぞと引用せるは、如來の金口説とだに云へば、口を閉る人のみ多かる世間ながらも、亦

中には、然る眞僞本來をも糺せる人の、絕て有まじき物にも非ざるを、豈俺忽の所爲ならずや、〇因に云ふ、此の菩薩が書に、佛祖が稱を往々梵皇と云へるは、輔行記の序に、古先梵皇乘レ時利見と云へるに取れる由なれど、引文などは、然も有らば有れ、自文には、皇字憚るべし、其は我が大君の御稱と、定賜へればなり、世尊など云も、此の國にしては、忌憚るべき事、既に論へるを思ふべし、是また常典にわたることぞ。)さて官には。最疾く右の妖言惡說をば。所知看たりけむ。其の著書どもを。世に弘むる事をし禁じ給へり。最も有難き御事なりかし。(大寶の僧尼令に、凡僧尼、上觀ニ玄象一、假說ニ災祥一、語及ニ國家一、妖ニ惑百姓一、付ニ官司一科レ罪、とある所の義解に、天文爲ニ玄象一、過誤爲ニ妖言一也、と云ひ、なほ本文に、妖言惑レ衆といふ罪をば、謀大逆、謀叛と並べて擧られたり、宍賢こ。)長阿含阿摩晝經に。佛言。食ニ他信施一行ニ遮道法一。邪命自活。誦ニ天文書一占ニ相天時一。或說ニ地動彗星日月薄食一。或言ニ星食一。或言ニ不食一。如レ是善瑞如レ是惡徵。入ニ我法一者無ニ如レ是事一。と有るは。佛祖が比丘を敎ふる。鐵柱の眞金言なるを。彼の菩薩。さる金言をば得知ずて。後世擾人の僞經等に依りて立たる。天文曆術こそ可笑けれ。(頭柱云令延喜式に算經を用ふる事)

印度藏志卷之七稿

大壑　平篤胤撰述
男　平田銕胤　同
孫　同　延胤
門人　青山景通　校

〇大千世界品第四

其須彌山王有七寶階道。其下階道廣六十由旬。夾道兩邊有七重寶牆。其中階道廣四十由旬。夾道兩邊有七重寶牆。其上階道廣四十由旬。夾道兩邊有七重寶牆。其下階道有鬼神住、名迦樓羅足。其中階道有鬼神住、名曰持鬘。其上階道有鬼神住。名曰喜樂。

起世經に。佛言。須彌山下別有三級諸神住處。其最下級。縱廣正等六十由旬。其第二級。縱廣正等四十由旬。其最上縱廣正等二十由旬。於下級中有夜叉住。名曰鉢手。第二級中有夜叉住。名曰持鬘。於上級中有夜叉住。名曰常醉。とあり。然るに大樓炭經に。こゝに此三級階の說なきは。傳誦し落せりと見ゆ。（そは諸天と、阿須倫の戰鬪品に、三階級の事こそ云はね、此三鬼神の事を、拘跡鬼神、持鬘鬼神、棄陀末鬼神、と言へればなり、斯てまた增壹七日品に異說あり、第三節に註すを見べし、）立世論鬪戰品に、須彌山王。從其上頂。向下二萬由旬。是第一層。是層四出。並五十由旬。周迴四有由旬。金城圍繞。高一由旬。埤塊一由旬半。城門高二由旬。門樓一由旬半。十由旬有一門。無數千門衆寶所成。諸城門邊。象馬四軍之所防衛。諸天男女遍滿其中。有諸天子。名曰持鬘。於此中住。（此は本文に謂ゆる、其下階道に當れり、）從其上頂。向下四萬由旬。是第二層。餘如上說。有諸天子。名曰常勝。於此中住。（こは本文に謂ゆる、其中階道に當れり、）從其上頂。向下六萬由旬。是第三層。餘如上說。有諸天子。名曰持寶器。於此中住。（此は本文に謂ゆる、其上階道に當れり、）從海水際。向上五十由旬。是第四層。餘如上說。是四天王軍之住處。（名義集に、俱舍云、妙高層有四、相去各十千、堅首、持鬘、常憍、天王衆、如次居四級、とあるは、俱舍は此の論に本づける故にかく合り、

但し此は四天王の本城には非ず、軍場なり、）是層之外、又出四百五十由旬。周廻一千八百由旬。諸龍獸。及金翅鳥之住處也。（是また其本住處には非ず、警護の場なり、龍鳥の本住處のことは、既に出たり、）須彌山王。上下諸層並厚五十由旬。其海中諸層、悉是修羅住處。（是また修羅王の軍せむとて、出張する所の義と通えたり、）此阿修羅。爲得諸天五事因緣、故往攻伐。何者爲五。一天須陀味。二諸天平地。三諸天園林。四諸天國邑。五諸天童女。是爲五事。諸天亦欲得彼五事。往擊修羅。何者爲五。一修羅須陀味。二修羅平地。三修羅園林。四修羅國邑。五修羅童女。是爲五事。（本經、樓炭、起世ともに、此の五事因緣の說なく、而阿修羅王の念言に、我有大威德、神力不少、而忉利天、日月諸天、常有虛空、於我頂上、遊行自在、我今寧可取彼日月、以爲耳璫、自在遊行耶、と云ひて、瞋恚熾盛に、鬪戰を起す由に作たり、）是時修羅來擊諸天。先於水際與龍鳥鬪。若不如時。更退還本。若戰勝時。登最下層。與四天王軍共鬪戰。諸龍鳥亦登此層一時共鬪。云々とあり。（是より三層、二層、初層、と次々に攻登りて、忉利天まで至る由を載せり、本經、樓炭起世には、忉利天まで攻至れる時は、天帝釋より、其上虛空に依りて居すと云なる燄摩天、兜率天、化樂天、他化自在天へも、加勢を請ふ由をも記せり、總て妄誕にて言にも足らぬ說等なれど、比丘らが音高く言立る事なる故に、因に此處にいさゝか註しおくなり、增一七日品にも、須彌山下有阿須倫、若欲與忉利天共鬪時、先與細脚天共鬪、設得勝已、復與尸利沙天共鬪、勝彼天已、復與歡悅天共鬪、勝彼天、便與忉利天共鬪云々とあり、大旨は同じ、）

（鈇云草稿ノ表紙ニ見エタルコトドモ　南山ノ行事抄ハ律ノ注也票十七ノ四十二ウ婆沙一百三十六ニ四大洲及諸天ノ身ノ長アリ○梵行ハ淨行也梵志ノ業ナルヲ佛又スミテ己ガ業ノ名トセリ○鬼子母神ノコト法四十六ノ十五オ　金剛密迹ノコトモアリ　華嚴六十七ニ世友尊者カコトアリ○身壽頌疏十一ノ十七ノ左ヨリ○劫數頌疏十二ノ三ヨリ　法數十二ノ二十七オ十八ノ十ウ○綺語ノコト票十五

ノ四十六ウ○婆訶九ノ初ウ十ノ十九オ二十一ノ十一ウ二十二ノ十七オ二十五ノ七ウ　華嚴世界ノコト法數十八ノ十五オウ十六オ票十四ノ六十七ウ同書十八ノ二十四ウニ心經ハ般若ノ精要トアリ○世界ノ二義法數八ノ七ウ二世間トハ衆生世間器世間ヲ云ハノハオウ○穢土ト云コト法數八ノ九ウ）

其須彌山王四面。有四埵出。高七百由旬。雜色間廁。七寶所成。四埵邪傴曲臨海上。北面天金所成。光照北方。東面天銀所成。光照東方。西面天水精所成。光照西方。南面天瑠璃所成。光照南方。起世經に。須彌山王上分之中。四方有峰。傍挺角出。各高七百由旬。微妙可喜。七寶所成。曲臨海上。北面以天金所成。照彼鬱多囉洲。東面以天銀所成。照彼瞿陀尼洲。西面以天玻瓈所成。照彼瞿陀尼洲。南面以天瑠璃所成。照此閻浮提洲と見え（本文に同じ趣きなり、）樓炭經には須彌山王。以金銀水精瑠璃四寶作成之。須彌山王北脊天金。照北方天下。須彌山王東脊天銀。照東方天下。須彌山王西脊。天水精。照西方天下。須彌山王南脊天瑠璃。照南方天下とあり。（上二經に異なし）名義集に。西域記云。蘇迷盧山四寶合成。在大海中。日月之所迴泊。諸天之所遊舍。七山七海。環峙環列。四面各有一色。東黃金。南琉璃。西白銀。北頗梨。隨其方面。水同山色と云へり。（此は今傳はる西域記と、文の異なるは更なり、四面四寶の中に、南のみ上三經と同くて、三面は各々相違なり、又次節に引く立世論とも異なり、合せ見べし）偖かく說々異なる事の論は無して。彼曆象編に。山須彌寶光。四天下處空各異厥色。及日既沒於南洲。而中西洲上有時空色如紅者。須彌西面赤頗底。寶光映虛空。餘暉延及我南洲之所爲也と云へるは笑ふべし。

其四出埵。高四萬二千由旬。有四天王宮。多門天王城。有須彌山北千由旬。王有三城。各々縱廣六千由旬。恆有五大鬼神。侍衞左右。持國天王城。有須彌山東千由旬。縱廣六千由旬。恆從無數揵沓和神。廣目天王城。有須彌山西千由旬。縱廣六千由旬。恆從無數大龍神。增長天王城。有須彌山南千由旬。縱廣六千由旬。恆從無數究槃茶神。四天王宮殿。各各縱廣四十由旬。

大樓炭經に。佛告比丘。須彌山王北。去四萬里有天王。名毗沙門。有三城郭。廣長各二十四萬里。須彌山王東。去四萬里。有提頭賴吒天王城郭。廣長二十四萬里。須彌山王西。去四萬里。有毘留博叉天王城郭。廣長二十四萬里。須彌山王南去四萬里。有毘留勒叉天王城郭。廣長二十四萬里と見え。(此經の說にては、四天宮の在處、かの四出埵とは聞えず、東西南北に去りて在る由なり。)起世經に。佛言。須彌山王北面半腹下。去地際四萬二千由旬。於由乾陀山頂之上。有毘沙門天王之三大城郭。縱廣各處六百由旬。須彌山王東面半腹下。去地際四萬二千由旬。於由乾陀山頂之上。有提頭賴吒天王城郭。縱廣同上。須彌山王西面半腹下。去地際四萬二千由旬。於由乾陀山頂之上。有毘婁博叉天王城郭。縱廣同上。須彌山王南面半腹下。去地際四萬二千由旬。於由乾陀山頂之上。有毘婁勒迦天王城郭。縱廣同上とあり。(此經の說にては、彼謂ゆる四出埵は、由乾陀山の頂までに、垂り及べる山と通えたり。)立世論四天王品に。須彌山王凡有四頂。東西南北。其東頂者眞金所成。其西頂者白銀所成。其北頂者瑠璃所成。其南頂者玻瓈所成。(四方各頂の成れる四寶、上の本文、また起世樓炭等とは異にして、其所を誤れるに似たり。)是四頂者上廣下狹。其最狹處周圍一千五百由旬。其最大處。周圍二千一百由旬。一切諸天依此中住。有四由乾陀山。一北。二東。三西。四南。各有兩頂。(由乾陀山は周帀して、須彌山を圍繞する山なるに、四由乾陀山とはめづらし。)北由乾陀山二頂中間有國。名毘沙門。周圍一千由旬。金城圍繞高一由旬。埤堄高半由旬。城門高二由旬。門樓一由旬半。十十由旬。有一一門九十九門。皆衆寶所成。復有天州。天郡。天縣。天村。周帀遍布。此大城内。毘沙門天王之住處。王領所攝。從由乾陀山北。至鐵圍邊。一切夜叉神。是王所領。(卽謂ゆる多門天王なり。)東由乾陀山二頂中間有國。有提頭剌吒。周圍一千由旬。金城圍繞。餘如上說。此大城内。提頭賴吒天王住處。王領所攝。從由乾陀山東。至鐵圍山。乾闥婆天是王所領。(卽謂ゆる持國天王なり。)西由乾陀山二頂中間有國。名毘留博叉。周圍一千由旬。金

城園繞餘如上說。此大城內。毘留博叉天王住處。王領所極。從由乾陀山西。至鐵圍邊。諸龍迦樓羅鳥是王所領。（卽謂ゆる廣目天王なり、）南由乾陀山二頂中間有國。名毘留勒叉。周圍一千由旬。金城園繞餘如上說。此大城內。毘留勒叉天王住處。王領所極。從由乾陀山南。至鐵圍山。拘槃茶神是王所領とあり。（卽謂ゆる增長天王なり、斯て此論の說相、上なる經等の趣とも、また甚く別なり、）然るにまた增壹七日品に。須彌山上有四種天。銀城中有細腳天。金城中有尸利沙天。水精城有歡悅天。瑠璃城有力盛天。金城銀城中間多門天王。將諸閻叉居住。金城水精城中間廣目天王。將諸龍神居止。水精城瑠璃城中間增長天王居止。瑠璃城銀城中間持國天王居止。とも見えたり。多聞天王は。立世論音義に。毘沙門。或言鞞舍囉婆拏。此譯云難聞。亦云普門。或云多門。其王最富寶物。自然主夜叉及羅剎。夜叉此云傷。謂能傷害人也とあり。（名義集にも、光明疏云、須彌北水精埵王、福德之名聞四方、故云多聞、と云へり、）此天王に侍衛すと云ふ。五大鬼神名は。

本つ經に一名般闍樓。一名檀陀羅。三名薩摩跋陀。四名提偈羅。五名修逸路摩と見ゆ。凡て佛籍に。鬼神を夜叉と云が常なれば。增壹に將諸閻叉と云へる閻叉は。卽この五鬼神の事と聞えたり。其は大般若經音義に。藥叉梵語地居天衆鬼神也。部屬北方毘沙門天王。護衆生界善神。或散諸山居止と有にて知るべし。（然れば名義集に、西域記を引て、夜叉舊云閻叉、其訛也、正音云藥叉、此云勇健、亦云暴惡、とある暴惡、また放光般若經音義に、藥叉此云能噉人鬼、又云傷者、謂能傷害人也、と有などは非なり、また名義集に、天夜叉、地夜叉の別ある由にて、地夜叉は地に在り、天夜叉は、天の城池門閣を守る物と云へり、世に勇壯なる形貌の物を夜叉鬼神の如しなど云ふは、是より出たるにて、兇惡の由には非ず、其は天上を守護すと云にて知るべし、儲こそ和夷羅閻叉を、執金剛神と譯せり、謂ゆる金剛力士神の類なるか、）羅剎も同集に、此云速疾鬼。又云可畏。亦云暴惡。或羅叉娑此云護士。若女則名囉叉斯。とあり。（大般若經音義に、囉剎娑、梵

語古云羅刹、訛也、惡鬼神也、此類諸鬼多居海島、或住砂磧、皆有倶生通力、飛行人間、能變美妙容儀、媚惑於人、詐相親輔、方便。誑誘、而噉食之、如佛本行集經中所說、と云ひ、また男即極醜、女即甚姝美、並皆食噉於人、とも云へり）持國天王も同音義に。提頭賴吒。或言提多羅吒。或言弟黎多曷囉吒。此譯云持國者。主領揵達婆及毘舍闍。毘舍闍。或云臂奢拓。謂餓鬼中勝者也と見え。（毘舍闍のこと、地藏十輪經音義にも、畢舍遮鬼、唐言食血肉鬼、羅刹之類也と云へり）名義集に。光明疏云。須彌東黃金埵王。亦翻安民とも見ゆ。其從ふると云なる。揵沓和神の事は既に出たり。（上品の□□節に、委しく註せるを見べし）廣目天王も。同音義に毘留博叉或云毘樓博叉。或云鼻溜波阿叉。此譯云雜語。或言醜眼。主領龍及富單那。富單那是臭餓鬼中勝者也。と見え。（また名義集に、富單那、此云臭餓鬼、主熱病鬼也、亦名富多那と云ひ、十輪經音義には、布單那唐云作灾恠鬼、或與人畜為祟也、ともあり）名義集に。光明疏云。須彌西白銀埵王。亦翻廣目と見ゆ。其從ふると云ふ。諸龍神の事も既に云へり。（上品等□□節に、委しく註せるを見べし）增長天王も。同音義に。毘留勒叉或云毘離。或言毘樓勒叉迦。或言鼻溜茶迦。此譯云增長。主領弓盤茶及閉黎多。弓盤茶者。或云鳩盤茶。甕形頭似冬瓜。閉黎多者。或名薜荔多。餓鬼中劣者也。と見え。（名義集にも、薜荔多、正言閉麗多、此云祖父鬼、餓鬼劣者也と云ひ、六波羅密多經音義には、餓鬼之總稱也、また放光般若經音義には、薜荔或言卑帝黎、或云卑帝梨那、或言閉黎多、或作俾禮多、皆訛也、正言彌荔多、此譯云祖父鬼也、舊云餓鬼、餓鬼中最劣者也、とも云へり）名義集に。光明疏云。須彌南瑠璃埵王。毘留勒叉。亦翻免離とあり。其從ふると云ふ。究槃茶神と云ふも同集に亦云槃査。亦云倶槃茶。此云甕形。舊云冬瓜。此神陰如冬瓜。行置肩上。坐便踞之。即厭魅鬼也。梵語。烏蘇慢此云厭。字苑云。厭眠內之不祥也とあり。（大寶積經音義に鳩盤茶、南方天王下鬼名、面似冬瓜とも、究槃、茶梵語鬼名也、或云恭畔茶、皆一也、此

譯爲形面似冬瓜、此鬼陰囊長大、常於肩上擔行、とも云ひ、大雲經音義に、拘辨茶應言弓槃茶、甕形頗似冬瓜也、また六波羅密多經音義に、鳩畔陀、梵語鬼名也、面如冬瓜、囊最大、長時於肩上擔行、身亦腥臭と云ひ、十輪經音義には、鳩槃陀、經中或作畔茶、聲轉也、唐云冬瓜鬼、言面似冬瓜、或云腹似冬瓜也、ともあり、)さて十二天餞軌は。印度に。往古より名の傳はり。有內外養育之恩。と尊崇し來れる。十二神天を祭る。儀軌なるが中に。毘沙門天王と羅刹天と入りて。毘沙門天喜時。藥叉衆喜不害人民。不行毒癘。瞋時皆亂。羅刹天喜時。諸噉完鬼隨亦喜。不唾毒氣。不作惡行。此天瞋時。皆悉亂現と云ひ。其祭供を受る所に。毘沙門天。與諸藥叉呑食鬼神等。俱來入壇場。羅刹天。與羅刹食血鬼衆。俱來入壇場。とあり。然れば上に名の出たる四天王。および鬼神の中に。此の二天は。殊に古說ある神なること明なり(然れば彼金七十論なる、天道は八分生の中にも、六夜叉生、七羅刹生、とこそ所見たれ、是に依て思へば、夜叉と羅刹を、古說には、然しも惡物とは爲ざること知べし、然るに此の二物を、上に引く書等の如く、種々凶惡なる物のごと說作せるは、佛說ありし以來の事とこそ所思ゆれ、羅刹女といふ物、海島に在りて、人を媚惑して啖ふと云ふことは、阿含に、僧伽羅國の故事を、翻案せる妄說より起りて、其を佛本行集經に、なほ妄說を添たるより、世に弘まれるにて、其の以前は、羅刹さる說の無りしなり、故れ音義にも何にも、羅刹の人を食ふ事とし云へば、彼の經を必ず引出るなり、其の餘孔雀明王經などにも、其事を云へれど、彼の經などは、殊に後の佛者の作れる物なれば、云ふに足らず、其は左まれ右まれ、舊より藥叉羅刹を、惡物といふ傳ならましかば、梵志の古說に八分生の中には、入まじき物をや、)さて毘沙門天王のこと。毘奈耶律序音義に。于闐國名也。在安西南一千二百里。此國有山。亦名于殿。出美玉。山下有水。名玉河。河側有城。名崑崙城。昔此城人。獻玉於帝。故云玉出崑崙。諸胡呼此國爲豁旦。亦名地乳國。於此國界有二天神。一是毘沙門天王。往來居于闐山頂。城中亦有廟。

居七重樓上（此の神廟のこと、西域記に、瞿薩旦那國、印度謂之屈丹、舊曰于闐訛也、周四千餘里、產白玉黳玉、氣序和暢、俗知禮儀、人性溫恭、好學典藝、博達技能、衆庶富樂、編戸安業、王甚驍武、自云毘沙門天之祚胤也、昔者此國虛曠無人、毘沙門天於此棲止、無憂王時東土帝子蒙譴、流徙居此東界、群下勸進、又自稱王、方建城郭、宜告遠近、詳議地利、時有異道、負大瓠盛滿水、自而進曰、我知地理、遂以其水屈曲遺流、周而復始、依彼水迹、峙其基堵、遂得興功、即斯國治、今王所都於此也、城非崇峻、攻擊難克、自古已來、未有能勝、其王遷都、作邑建國安人、功績已成、齒耋云暮、未有胤嗣、恐絶宗緒、乃往毘沙門天神所、祈禱請嗣、神像額上剖出嬰孩、捧以回駕、國人稱慶、既不飲乳、恐其不壽、尋詣神祠、重請養育、神前之地忽然隆起、其狀如乳、神童飲吮、遂至成立、智勇光前、風教遐被、遂營神祠、宗先祖也、自茲已降、奕世相承、傳國君臨、不失其緒、故今神廟多諸珍寶、拜祠享祭、無替於時、地氣所育、因爲國號と見えたり、）是大鼠神。其毛金色有光。大者如犬、小者如兎、其有靈、求福。皆[illegible]得者鼠王神也とあり。（此鼠王神の事も、西域記同國の條に、王城西百五六十里、大沙磧正路中有堆阜、並鼠壤墳也、聞之土俗曰、此沙磧中、鼠大如蝟、其毛則金銀異色、爲其群之酋長、每出穴遊止、則群鼠爲從、昔者匈奴率數十萬衆、寇掠邊城、至鼠墳側屯軍、時瞿薩旦那王、率數萬兵、恐力不敵、素知磧中鼠奇、而未神也、洎乎寇至、設祭焚香請鼠、冀其有靈、少加軍力、其夜王夢見大鼠曰、敬欲相助、願早治兵、旦日合戰、必當克勝、王知有靈祐、遂整戎馬、令將士、未明而行、長驅掩襲、匈奴之聞也、莫不懼焉、方欲駕乘被鎧、而諸馬鞍人服、弓弦甲縺、凡厥帶系、鼠皆齧斷、兵寇既臨、面縛受戮、於是殺其將、虜其兵、匈奴震懾、以爲神靈所祐也、瞿薩旦那王、感鼠厚恩、建祠設祭、奕世遵敬、特深珍異、故上自君王、下至黎庶、咸修祀祭、以求福祐、行次其穴、下乘而趨、拜以致敬、祭以祈福、或衣服弓矢、或

香華肴膳亦既輪誠多貢福利、若無享祭、則逢災變と云へり。信に鼠王神にぞ有りける、）また法苑珠林に、唐玄宗が天寶十一年と云ひける年に。西蕃三國より。軍兵を起して。西涼府と云を攻ける時に。玄宗かの不空三藏に祈らせ、我も其傍に在りて見けるに。忽然に。五百騎計の神兵庭上に現じ。空を凌ぎて去りぬ。其後に。西涼府より使來りて。其間の事を白して。城の東北三十里ばかりに。雲霧の間に。神兵の長高きが。多く現はれ來りて。西蕃の軍に向ひ。また金色なる鼠。數を知らず出來て。敵の弓弦。甲冑の縫など。悉く咋切り。また城の北門の樓に。光明を放つ天神現じて。西蕃の軍士を睨む。敵是に恐れて。敗北し去れりと告けるに。玄宗ます〳〵感じて、其より處々の城樓に。多聞天王を安置しける由見えたり。（不空三藏とは、即上に引く十二天儀軌を、翻譯せる人なり、）是等を合せて考ふるに。多聞天王と云ふ神は。舊より梵志の古說に有りし。眞の神なるが故に。如此く異驗あり。餘の三天王の中に。南天王こそ。少か由有りて聞ゆれ。東西の二天王は。佛祖が例の東西南洲を妄說せる後に。其洲どもに配せむが爲に、揑出たるにぞ有りける。（偖こそ本經および、樓炭起世の古譯どもを見るにも、多聞天王ばかりは、三城ありと云ひ、四王の名、また事實を云ごとに、此の名を先に出して、餘の王天王は、もはら此王に屬するが如くにぞ見ゆめる、其は古來より、世人普ねく此名をば、知りて在ける故に、佛祖も此王の事をば、殊に力を入れて說きたるを、傳誦しける故にて、事の勢、かならず然も有べき事なりかし）なほ此多聞天王の事は考へあり。品末の總論に云べし。

須彌山王頂上有忉利天城。縱廣八萬由旬。其城七重。七重欄楯。七重羅網。七重行樹。周帀校飾。以七寶成。其城高百由旬。其一一門。有五百鬼神侍衞。其大城內。復有小城。縱廣六萬由旬。以七寶成。城高百由旬。一一城門有五百鬼神侍衞門側。其善見城內有善法堂。縱廣百由旬。於此堂上思惟妙法受淸淨樂。故名善法堂。堂有四門。周帀欄楯。以七寶成。其堂中柱圍十由旬。高百由旬。其堂柱下敷天帝御座。縱廣一由旬。以七寶成。其

座柔輭。輭著天衣。夾座兩邊左右各十六天王座。善法堂北。有帝釋宮殿。縱廣千由旬。以七寶成。大樓炭經に。佛告比丘。須彌山頂上有忉利天。廣長各三百二十萬里上。有釋提桓因城郭。名須陀延。廣長各二百四十萬里。以七寶作之。門各常有五百鬼神守。其城中。有忉利天帝參議殿舍。廣長各二萬里。以七寶作之。殿舍中柱周四百八十里。下有天帝釋座。廣長各四十里。兩邊各有十六小王座。天帝坐時。兩邊各有十六小王侍坐。殿舍北。有天帝後宮。廣長四萬里。皆以七寶作之と見え（本文に、善見城と有を、須陀延といひ、善法堂とあるを、參議殿舍と云へり）起世經に。須彌山王頂上。有三十三天宮殿。縱廣八萬由旬。七寶所成。一一門處。各有五百夜叉守護。於彼城內。更立一城。名曰善見。縱廣六萬由旬。一一諸門。亦有五百夜叉守護。善見城內有聚會之處。名善法堂。縱廣五百由旬。當其中央。有一寶柱。高二十由旬。於寶柱下。爲天帝釋。別置一座。高一由旬。方半由旬。其座兩邊各有十六小天王座。夾侍左右。復有帝釋宮。縱廣一千由旬。此善法堂諸天集處。東西南北四面。皆有諸小天王宮殿住處。とあり。（本經および樓炭經に、五百鬼神と云へるを、此の經に五百夜叉と云へり、これをもて、夜叉は鬼神の梵語なること見るべし、）忉利天は。華嚴經音義に。忉利梵言。正云怛唎耶怛唎奢。怛唎耶者。此云三也。怛唎奢者卅也。謂須彌山頂。四方各有八大城。當中有一大城。帝釋所居。總數有三十三處。故從處立名也。と言ひ。金光明經音義に。忉利天在須彌山頂上。有三十二天子。並朝於帝釋。故名三十三天。卽天帝釋所治處也。とあり。（また大涅槃經音義に、忉利天此云三十三天。在須彌山頂上。四方各有八天王。帝釋居中。合三十三天也とも言へり、）三十二天子とは。下文に。天帝の座の兩邊を夾みて。左右に各々。十六天王座あり。と云へる是なり。（左右を合せて三十二天子なり、）天帝とは。卽帝釋を云ふ。名義集に。釋提桓因。大論云。釋迦此言能。提婆此云天。因提此言主。合而言之。云釋提婆因陀羅。今略云帝釋。華語梵語並擧也と云ひ。（法華經新註に、釋提桓因、具

云釋迦提桓因陀羅、釋迦能也、提桓天也、因陀羅帝也と見え、大涅槃經音義に、釋提洹因、具云釋迦提婆因陀羅、釋迦云能仁也、提婆云天也、因陀羅此云主、とも云へり、）また因陀羅此云帝正翻天主。以帝代之とあり。（道行般若經音義に、因坻或言因提、或云因陀羅、正翻名天主、以帝代之、故經中亦稱天主、或稱天帝也ともあり、中阿含には、多く天王釋と云へり、）さて此の稱の釋迦を。能仁とも能とも譯せるは。佛祖が姓の釋迦を。能仁と譯せるが例となりて。此稱にも及べるにて。非譯なり。其は佛祖が姓を。釋迦とも釋とも云は。其先祖が。直樹林に成長れるより起りて。釋迦は直の梵語なれば。彼が姓も能仁と譯するは。後の誣譯にこそ有れ。正譯に非ず。（此事委くは、第□□品に論ふを見て知べし、）然れば天帝の釋も。直の義なること灼然なり。故是をもて。釋は直。提婆は天。因陀羅は帝と譯して。直天帝とぞ稱べかりける。（然るを法華經音義に、釋迦提婆因達羅者、釋迦刹帝利姓、此云能也、提婆天也、因陀羅帝也、即釋中天帝也と云へるを始め、佛祖が姓の釋迦に、引付たる說の多かれど、總て取に足らず、）さて釋提婆因陀羅と云は。他より稱せる號なるを。猶別に種々の名あり。其は雜阿含經に。有比丘白佛言。何故名舍脂鉢低。佛言。阿修羅女舍脂。爲天帝第一后故。（鉢低は天とも主とも譯せり、）何故名千眼。佛言聰明智慧。於一坐間。思千種義。觀察稱量故。（大涅槃經の章安疏に、千眼者、一時知千義、斷千事故、といひ、了義燈に、非有千眼、以能一時見千法故、とも、或は、帝釋本身如常二眼、千眼者降修羅時、別所現也、正法念處經畜生品、往考など云へる說ども聞ゆれど、凡て古說には非ず、）何故名因陀羅。佛言。帝釋居天主位。斷理天事。故名因陀羅。何故名憍尸迦。佛言本爲人時姓故。名憍尸迦。云々とあり。（此は別譯の雜阿含をも合せ見て、然も有げなる條々を、撫ひて記せり、）大論に。天帝釋に。三十二小王を合せて。三十三天の因緣を記して。昔摩伽陀國中。有婆羅門。名摩伽。姓憍尸迦。有福德大智慧。知友三十二人。共修福德命終。皆生須彌山頂。摩伽婆

羅門爲天主三十二人爲輔臣、喚其本姓故言憍尸迦と云へるは、佛說に、唯憍尸迦は云はで爲人時姓とのみ言ひて、其本因を說ざる故に、其因緣を妄說せる物なり（凡て龍猛論師が說には、佛說に因緣なき事を、其因緣を作る、常の事なり、其は因あらむ所々に論ふを見べし、また淨名疏には、昔迦葉佛滅後、有一女人、發心修塔、報爲天主、有三十二人助修者、作輔臣、君臣合之爲三十三天也、と云へり、是また妄誕なること云も更なり）さて憍尸迦と云ふ名の譯は、法華玄贊に天帝字憍尸迦、此云繭兒と云ひ、倶舍論惠暉註に。云靈兒とある。是ぞ正譯と聞えたる。其は思ふ旨有れば。此に言はず（今品の總論に論ふを見べし）さて善法堂とて。天事を斷理する堂あり。（起世經に、三十三天集會坐時、於中唯論微細善語深義、稱量觀察、皆是世間諸勝要法、眞實正理、是以諸天稱、爲善法堂と云るをも思ふべし）其中央に。一大柱を立て、其を寶柱と云ふ由なるが、此は小緣の事に非ず。決めて梵志に傳へ來れる。古說ならむと所思たり。立世論天住處品には、殊に此柱を稱して。中央大柱圍一由旬。其一橡桷有十六柱、其一一柱、復十六柱之所支持。是柱、下至地上。不至桷。如一髮許。一柱上至於桷。下不至地如一髮許。以是義故。是善法堂、住在空中、不可了覺、四方門屋、一者正東。二者正西、三者正南、四者正北、とも言へり。謂ゆる塔の中心に建る。擦といふ柱の立樣も、是に倣へり（凡て彼の塔といふ物のこと、佛法に起れる事の如く、世人は思ひて有れど、元これ梵志の所業にして、其やがて、此の寶殿寶柱に倣へる、深き由緒ある古風なりけむを、佛法にも、其を學び習へるなり、其は小未曾有經に、佛告阿難、若有一人、造帝釋大莊嚴殿用八萬四千寶柱、衆寶校飾、不及佛滅後、以如芥子舍利起塔、大如庵摩勒果。百千萬倍、不可稱量と云ひ、無上依經に、佛言、帝釋天宮有大飛閣名常勝殿、若有男子女人、造作如是寶殿、百千、佛涅槃後、取芥子大舍利、造塔、如阿摩羅子大、此功德勝、譬喩所不及、など云へるを想ふべく、また塔を旋ると云事を、提謂經に、佛言

旋塔有三法、一足擧時、當念足擧、二足下時當念足下、三不得左右顧視、唯其地など見え、法苑珠林に、是等の説を引て、經律中に、左旋を制して、右旋せしむ、左旋行は神に詶せらる。或は旋ること百帀、十帀七帀三帀など云へるをも思ひ合すべし、古意に符へる事どもの交れるをや、）さて此須彌山頂。忉利天帝の事は。古傳説なること。上に往々引たる。梵志の四吠陀中に是說ありて。其は世の始めに。天降れる。彼の梵天子の聖語に依りて知れり。と金七十論に云へるを以て論なく。且その吠陀中說を引て。臨死細身棄捨麁身。此麁身者。父母所生。或復爛壞。細身常住輪轉生死。若麁身退沒時。細身與法相應。則受四生。一梵天。二天。三世主。四人道。如是細身。則爲定常。若與非法相應。則受四生。一四足。二有翅。三胸行。四傍形。と言へる中の。二天とある天。忉利天を云へり。（其はまた別所には、一梵天、二天帝、三世主云々、とも有るにて知られたり。）然れば死後に。忉利天界に生ずと云ふ說も。本は梵志の古說なること。著明なり。然して其細身と。相應すべき法と云ふは。何なる天乘ならむと考ふるに。次節に見たる。孝順父母云云の四事と。謂ゆる十善業にぞ有りける。（其は下に、說辨ふるを見て察るべし、）

半月有三齋。（頭注云大自在天按監世間）云何爲三。月八日齋。十四日齋。十五日齋。是爲三齋。何故於月八日。常以月八日。四天王告使者。汝等按行世間。觀視萬民。知有孝順父母。敬事長老。淨修齋戒。濟諸窮乏者不。使者聞教。徧按行天下。具觀察已。還白王言。世間其人甚少。甚少。四天王聞愁憂而言。世人多惡。減諸天衆。增修羅衆。若使者還言世間人。有孝順父母。敬事長老。勤修齋戒。施諸窮乏者。四天王聞歡喜而言。世多善人。增諸天衆。減修羅衆。於十四日。告太子。而令觀察世間。亦如是。於十五日。四天王躬下按行天下。觀察萬民。往登忉利天。往諸善法堂諸天聚集議論之處。白天帝言。世衆生多不善也。天帝釋及諸天聞已。愁憂而言。世人多惡。減諸天衆。增修羅衆。若四天王。言世衆生多善行者。天帝釋及諸天聞已歡喜而言。增諸天衆。減修羅衆。

以是故月三齋也。時天帝欲使諸天倍歡喜說偈
言。
常以月八日。十四十五日。受化修齋戒。其人與我
同。
佛告比丘。帝釋此偈非為善受。非為善說。我
所不可。所以者何。彼天帝釋。婬怒癡未盡。未脫
生老病憂悲苦腦。我說其人未離苦本。若我比丘漏
盡阿羅漢。所作已辦。捨於重擔自獲己利。盡諸
有結。平等解脫。說此偈者。我所印可。我說其
人離苦本。

大樓炭經に。佛言月八日十四日。十五日。是為三
齋。月八日齋時。四王告使者言。往案行天下。
觀視萬民。知世間有孝順父母者不。有承
事道人者不。有敬長老者不。有齋戒守道
者不。有布施者不。有信今世後世者不。使
者受教案行天下。還具白言。多有不孝父母。
不敬事道人長老。不齋戒布施者。四天王聞之。
即不歡喜說言。今我聞惡語。減損諸天增益阿
修倫種。若多有孝順父母者。敬長老者。齋戒
布施者。信今世後世者。具白之。四天王聞之。

即大歡喜說言。我今聞善言。增益諸天。減損阿
須倫種。是為月八日齋。云々と見え。（此に云々
と約せるは、是より下、天帝に白すまで本文の旨
に同じければなり。）起世經には。諸比丘一月中
有六烏晡沙他。（本の旨釋に、烏晡沙他梵語也、
此云增長、謂受持齋法、增長善根也とあり、）
白黑二月。各有三齋云々と有りて。白月の八日。
十四日十五日と。黑月の八日十四日十五日を。三
受齋日と云ふ由を記せり。本文また樓炭經とも。
甚く異なり（然して天使者の世間を編觀するに、
何族姓子が、父母に孝順なり、誰家の男子女人が、
尊長に敬事し誰が六齋を受け、誰が八禁を持ち、
誰が戒行を守ると云ふ事を、委曲に觀察して、四
天王に啓する由を載して、不善者多しと聞けば、
天王慘然として、人間壽命極成短促、少時在世、
宜修諸善轉至後世便得安樂。彼諸人等、云
何不善、此滅天衆、增修羅種と歎き、善者多し
と聞けば、甚善甚善、便增天衆、減修羅種、と
歡喜する由を記して、餘は大かた同じ趣なり、）さ
て此三齋六齋と異說なる中に。孰か佛祖の眞說と

云ふこと。知べきに非ねども。元これ梵志の古說を取れることは著明なり。(雜阿含經にも、三齋を擧て、此に記すと同じ趣なるが、增一阿含馬血天子品(頭注云馬血天子品八關齋法これは外道の八關齋の所に着べし)には、別に賢聖八關齋法、と云を作り說たり、其說法に、一者不殺生、二者不與取、三者不婬、四者不語妄、五者不飲酒、六者不時食、七者不レ處二高廣之牀一、八者遠下離作二倡伎樂一、香華塗レ身、汝等善思二念之一、隨而奉行、若善男子善女人、於二八日十四日十五日一、往二詣沙門若長老比丘所一、自稱二名字一、比丘當二一一指受一、無レ令レ失云々と說たり。)其は何を以て知なれば。彼三齋の古說は取つゝも。天帝の偈 佛告二比丘一と云より。天帝の偈を。不可とせる說なるを以て知るゝなり。(其文意は、天帝は、世人ら常に父母に孝順にして、長老に敬事し、勤めて齋戒を修し、諸窮乏に布施し、月三齋日には、別にこそを行ひて、受化する人をば、我と同じと稱たれども、彼いまだ、婬怒癡の三毒を盡さず、生老病死の愛悲苦惱を脫せざれば、彼れと同じ功德なりとも、何の可ことか有む、もし我が弟子阿羅漢の如く、恩愛の道、婬怒癡の重擔を捨て、出家乞食し、諸の有結を盡し、自己の利を獲て、平等解脫せるが、人の三齋を行し、右の善行あるを、我と同じと稱擧むには、我印可すべし、天帝釋がごと、若本を離れざる身にて、さる世俗の小善事を行ふ人を稱たる偈は、善受ること勿れ、善說と爲ざれ、我が印可せざる所ぞと、甚く貶しめたる語意なり、熟々味へて察るべし、三齋の說は、梵志に、古より傳はる說法なること、昭々として知るゝなり、立世論天住處品なるも、同じ趣なるが、天帝の偈言を誹れること、猶甚しく、是を爲二邪歌一非二是善歌一、是爲二邪言一、非二是善言一、云何者、釋提桓因、未レ解二脫生老死、憂悲苦惱五陰一、と云へり、とさへ記せり。)然れば此三齋の說は。古來より。梵志に傳はり。彼神王たち。蘇迷盧山の埵に在りて。使者を班ち。身づからも。世間の人の善惡を觀察して。天帝に復奏し。玆に人々善惡の分定りて。天上生の報と。修羅生の報と。判然たる由を以て。世人に善を勸め。惡を懲すと。教導し來れる說なりけ

む（但し此節に、阿修羅種と有るを、彼大海水底に住むと云なる、阿羅王衆の事と、限りて思ふべからず、此に阿修羅種と云へるは、上なる閻羅界の所に、金七十論を引て論へる如く、閻羅王の別名にて、閻羅王種と云が如し、然るは、閻羅王は、天道人道を除て、餘の諸道の司典なればなり、若此に阿修羅種と有るを、彼阿修羅王種の事としては、其生天せざる者は、盡く謂ゆる修羅道に歸す、と云ふになりて、更に道理に叶ざる物ぞ、また此一句を以ても、此三齋說は、もと梵志の古說を、其儘に取れるなること、前品の第三節、第六節に註せる說どもと、合せ考へても悟りてよ。）然るを佛祖。其說は用ながらも。例の如く古說を破り。婬怒癡を盡し、生老病死。憂悲苦惱を脫してこそ云ふ新說をば、翻案せる也ける。（斯て後に、また賢聖八關齋と云ふ事をも作り出たり、其は增一阿含經、馬血天子品に、一者不殺生、二者不盜取、三者不婬、四不忘語、五不飲酒、六者不時食、七者不レ處ニ高廣之牀一、八者遠ト離作ニ倡妓樂一、香華塗一レ身、汝等善思ニ念之一、隨而奉行、若善男子善女人、於ニ八日十四日十五日一、往ニ詣沙門若長老比丘所一、自ラ稱ニ名字一、比丘當ニ一一指受無レ令レ失、云々と說たり、然れども、頭上に神在りて、其善惡を察す、といふ古說に因ざる故に、謂ゆる無骨說法となりて、今世の比丘等に、よく此八關齋を思念し奉行する者、我いまだ是を見ず。）これ梵志の古說なるが故に。彼十二天餞軌に。天帝釋者地居之主。注ニ記衆生所レ作善惡一云々と有にも熟合へり。（此全文は、下の總論に引きて、委しく說べし、甚深意ある說なりかし。）さて名義集八部篇に。提婆此云レ天。論云。光潔最尊最勝。故名爲レ天。苟非ニ最勝之因一。豈生ニ最勝之處一。言ニ最勝因一者。所レ謂十善。身三。語四。及意三行（身三とは、不殺生、不偸盜、不邪婬の三をいふ、此は身に屬たる事なれは、身とは云へり、語四とは、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語の四なり、意三とは、不貪欲、不瞋恚、不邪見を云ふ。）以ニ茲十善一運ニ出五道一。故名ニ此十戒一曰ニ天乘一。若單修ニ習上品十善一。乃生ニ欲界。四天王。二忉利天一。と言へる十善は梵志の古說なること言ふも更なるが。此は長阿含四姓經に見えて。

十善行十惡行と。反對して說たり。(餘の阿含部中なる經々にも、多く見たれど、中にも古き一經に就て、長阿含とは云なり、)さて其十善十惡のこと。三藏法數に。最好く說たり。其說に。十善者。善卽順理之義也。(謂行此十法、皆順理故、然有二種、一者止、二者行、止則止息己惡、不惱於他、行則修行勝德、利安一切也、)一不殺生。(謂不害一切物命、是止殺之善、既不殺已、當行放生之善也、)二不偸盜。(謂不竊取他人財物、卽是止盜之善、既不盜已、當行布施之善也、)三不邪婬。(謂不行邪婬欲事、卽是止婬之善。既不邪婬、當行清淨梵之善也、)四不妄語。(謂不起虛言、誑惑他人。卽是止妄語之善、既不妄語、當行實語之善也、)五不兩舌。(謂不向兩邊、說是談非、令他鬪諍、卽是止兩舌之善、既不兩舌、當行和合利益之善也、)六不惡口。(謂不發麤獷惡言、罵辱他人、卽是止惡口之善、既不惡口、當行柔和輭語之善也、)七不綺語。(謂不莊飾華麗之言、令人樂聞、卽是止綺語之善、既不綺語、當行質直正言之善也、)八不貪欲。(謂不貪著情欲塵境、卽是止貪之善、既不貪欲、當行清淨梵行之善也、)九不瞋恚。(謂不生忿怒之心、瞋恨於人、卽是止瞋之善、既不瞋恚、當行慈忍之善也、)十不邪見。(謂不偏邪異見、執非爲是、卽於止邪見之善、既不邪見、當行正信正見之善也、)〇十惡者。惡卽乖理之行也。(謂衆生觸境顚倒、縱此惑情、於身口意動、與理乖戾成此十惡也、)一殺生。(謂自殺、亦敎人殺、斷害一切衆生之物命也、)二偸盜。(謂竊取他人一切財物也、)三邪婬。(謂非己妻妾而行欲事也、)四妄語。(謂好造虛言誑惑他人也、)五兩舌。(謂向此說是、向彼說非、或向彼說此向此說彼、而使彼此乖諍也、)六惡口。(謂言語麤獷、毀辱他人、令其受惱也、)七綺語。(謂乖背眞實、巧飾言辭、令人好樂也、)八貪欲。(謂於順情之境、貪著樂欲心、無厭足也、)九瞋恚。(謂於違情之境、不順己意、心生忿怒也、)十邪見。(謂撥無因果、行邪見道、心無正信也撥者絕也、)と言へるは。約にして。能く其意を盡せり。茲に復思ふに。謂ゆる大乘方廣の經には有れ

ど。華嚴經に。十惡果報と云ふ說あり。今擧たる十惡の說に能く符へるは。此また梵志の古說を摭ひて。載たりと見ゆるを。三藏法數に註して。十惡果報者。謂衆生前世造十惡業。感餓鬼畜生地獄。三惡道報。受是苦盡。若生人中。餘業未盡。毎一惡中。復受二種果報。故名十惡果報也。一殺生果報。(謂殺生之罪、能令衆生墮三惡道、若生人中、得二種果報、一者短命、二者多病也。)二偸盜果報。(謂偸盜之罪、亦令衆生墮三惡道、若生人中、得二種果報、一者貧窮、二者共財、不得自在。)三邪婬果報。(謂邪婬之罪、亦令衆生墮三惡道、若生人中、得二種果報、一者妻不貞良、二者不得隨意眷屬。)四妄語果報。(謂妄語之罪、亦令衆生墮三惡道、若生人中、得二種果報、一者多被誹謗、二者爲他所誑。)五兩舌果報。(謂兩舌之罪、亦令衆生墮三惡道、若生人中、得二種果報、一者眷屬乖離、二者親族弊惡。)六惡口果報。(謂惡口之罪、亦令衆生墮三惡道、若生人中、得二種果報、一者常聞惡聲、二者言多諍訟。)七綺語果報。(謂綺語之罪、亦令衆生墮三惡道、若生人中、得二種果報、一者言無人信、二者語不明了。)八貪欲果報。(謂貪欲之罪、亦令衆生墮三惡道、若生人中、得二種果報、一者心不知足、二多欲無厭。)九瞋恚果報。(謂瞋恚之罪、亦令衆生墮三惡道、若生人中、得二種果報、一者常被他人求其長短、二者常被於他之所惱害。)十邪見果報。(謂邪見之罪、亦令衆生墮三惡道、若生人中、得二種果報、一者生邪見家、二者其心諂曲。(頭注云上品中品下品の善心また餓鬼畜生地獄心あり)と言へるは。是また約やかに好く註たり。凡て此の十善十惡の說。もと是梵志の天乘說なるか故に。阿含の佛說にも。普ねく世人に係て云ひ。中に邪婬の戒も入たるぞかし。(頭注云人天機とて謂諸惡莫作諸善奉行是名人天機とあり)是一つを以ても。佛行比丘の從事に非ざること。灼焉なり。(大かた佛說に、斯る筋を說るには、梵志說を其儘に用たるを、一度佛口にかゝりて、佛言くとだにあれば、世の愚學者どもは、悉佛說ぞと心得ためるは、笑ふに堪たる事ぞかし、唯梵志の不幸なるは、其淨行法語を、

盡く佛祖が幻法に奪ひ取られて、數千歳の今に至るまで、頑愚闇昧の癡比丘らに、惡見外道の中に强收られて、其根を雪がず有來しは、最も悲しく憐むべし、故今己、その任には非ざれども、數千歳の下に生れて、傍より其汚名聞くに忍びず、事の序にかく辨へつゝ、其淨行法語を、佛書どもに、我物貌に持誇れるを、見るが隨に攻とりて、其許に復するを、哀れ古梵志の識神たち、余が文机の邊に來集ひ、其淨行の耳ふり立て聞食、と云ふ。）かくて佛祖。これ十戒説を本と倣ひて。其道にもまづ。俗人に五戒をたて。沙彌には。謂ゆる十戒をぞ立たりける。（俗人の五戒とは、不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不婬酒なり、沙彌の十戒とは、不殺、不盜、不婬、不妄語、不飲酒、離高廣大牀戒、離花鬘等戒、離歌舞等戒、離金寶物戒、離非時食戒、となり、此は凡て、手近き書等にも、普ねく見たれば、委しくは註さず。）さて梵志の十戒行を。天乘と稱するは。彼法數に。乘卽運載之義。謂人各以所修之法爲乘。運載至其所至之處。故云乘也、天者謂天然自然。樂勝身勝也。以十善行爲乘。運出五道得生天。故名天乘。と云へるが如し。（佛法にも、小乘大乘と云を始め、何乘某乘と稱するは、卽ちこの乘と云を襲へるなり。）偖かく記し畢て後に。また須彌山儀銘解を見れば。印度には。劫初に梵王帝釋等。直に五戒十善の敎。及び言語文字を傳ふ。（後世に至りても、梵語梵字と稱する是なり。）吾邦天神代を立つ。是誰か。初禪及び忉利の天神ならざる事を知むや。（故に吾邦の言語と、印度の言語と、間契ふ者多し、是れ同じく、天の言を傳へたる所以に非ること無らむや。）日月それ惡乎。天神ならずと謂むや。五星列宿も。亦是同象なり。誰か天神ならずと爲むやと言へり。此菩薩が說中に。斯ばかりの正語は有こと無し。能くも予が梵籍の考へに應へり。（此意をもて、普ねく一切經藏を察たらむには、上件の如き惡說どもは、言はざりけむを、謂ゆる護法の心のみ進れる故に、其眞面目を、見得ざりけること最惜けれ。）

佛告比丘。一切人民所居舍宅。皆有鬼神無有空者。一切街巷四衢道中。居兒市肆。及丘塚間。皆有

鬼神。無有空者。凡諸鬼神。皆隨所依。卽以爲名。依人名人。依村名村。依城名城。依國名國。依土名土。依山名山。依河名河。一切樹木極小。如車輪者。皆有鬼神依止。無有空者。一切男女。初始生時。皆有鬼神。隨逐擁護。若其死時。彼守護鬼。攝其精氣。其人則死。然則今人何故。有爲鬼神所觸嬈者。設有此問。汝等應答。世人爲非法行。邪見顚倒作十惡業。如是人輩。若百若千。乃有一神護耳。譬如群牛群羊。若百若千。一人守牧。若有人修行善法。見正信行具十善業。如是一人。有百千神護。譬如國王有百千人衞護。以是緣故。世人在爲鬼神所觸嬈者。

起世經に。有一色人。爲諸非人之所恐怖。有一色人。爲諸非人之不所恐怖。彼諸外道若作是問。汝等當報。於世間中有一色人。習行非法作十不善。故護生諸神。漸々捨離。如是等人。若百若千。惟留一神。總守護之。如牛群羊群。或百或千。其傍惟置一人守視。以護神少故。恒爲非人所恐怖。於世間中有一色人。習行正法修十善行。是一一人。皆有無量百千諸神守視。如是等人。不被非人恐怖。譬如國王若王大臣。其一一人。則有無量百千人之守護。「世間人輩有如是姓字者。其非人中。亦有如是一切姓字。人間所有山林川澤。國邑城隍。村塢聚落居住之處。其非人中。亦有如是山林城邑舍宅之名。諸王坐處。「一切街衢。四交道中屈曲陌等。或屠膾坊。及諸巖窟。並無空虛。皆有衆神及諸非人之所依止。復棄屍林。塚丘壑。及諸惡獸所行道路。悉有非人在中居住。凡諸林樹高至一尋。圍滿一尺。卽有神祇在上依住。以爲舍宅。一切世間男子女人。從生已來。卽有諸神。常隨逐行。不曾捨離。唯習行諸惡及命終時。方乃捨去。如前所說とあり。（大樓炭經忉利天品にも、此說を載たれど、文義を盡さゞれば、其は引かず。）此一節。實に希有の妙說にして。本朝の古意に符合し。中にも起世經の說相は。本文に優りて。謂もまた著明に聞ゆるは。案ふに往昔。幽顯いまだ判れず。彼始めて天降れる梵天子。なほ在世なりし時に。自本より視知れる。幽冥の趣を口授して。梵志家に傳々せる古說なるを。竊して佛說と爲せ

ること疑なし。(其例は、前後にいか程もありて、今計ふるに暇あらず、)其は何を以て謂なれば。此說に於ては佛祖が常に。大梵王を始め。諸神祇を甚く陋むる意とは。氷炭相反する說法なるを以て知れり。(起世經に、或有ニ衆生一、熏ニ修月戒、日戒、星宿戒、大力天戒、水戒、火戒、事火戒一、必生ニ地獄一、或生ニ畜生一、とさへ說たり、事火戒とは、梵志が梵天王に事ふる法を云ふ、)また此說に。一切の男子女人。初生の時より。諸神常に隨逐して。擁護すと云へるは。誠に然る言なれば。其諸神を祠らでは有まじき謂なるを。佛祖が立法を。阿含中に考ふるに。其義曾て見えず。其は增壹阿含邪聚品に。佛告ニ比丘一。一者以レ刀施レ人。二者以レ毒施レ人。三者以ニ野牛一施レ人。四者以レ女施レ人。五者造ニ作神祠一。此五施者。不レ得ニ其福一と見え。雜阿含經に。如來持レ鉢入レ城乞食。有ニ一比丘一在ニ天祠邊一。時佛語言。汝種ニ苦子一。極爲ニ鄙穢一とあり。(天祠とは、大梵自在天王、また其餘の諸天神を祭へる祠をいふ、一比丘が其邊に在しは、其天祠を禮拜せるなり、佛語に汝苦子を種ると云しは、諸天神は、生老病死の苦本を離れざる物ゆゑに、其を拜禮する事は、彼が苦に習ふ子を種るにて、鄙しく穢き所行ぞと云へるなり、)是等を始め。神天を崇敬するが。汚穢なりと。禁戒せる語ども甚多し。然れば此の一節は。梵志說を竊して上三齋の說法の因に。前後の說法と齟齬するに。心を遣らず。風と說出せる盜說の。遺り傳はれるにぞ有りける。(本經に、此說法を、設有ニ外道梵志一、問言云々と言はゞ、如レ是く答へよと云ふ趣に記せるを以て、なほ佛說ぞと諍ふ人も有なむか、其はなほ精からず、梵志にも、佛祖が當時に、古說をやめて、異說を立る者も多く、其を外道梵志と云ること、第二品、外道の辨の所に云へる如なれば、此は一種の梵志外道を指せるなり、是を以て樓炭には、此を異道人と云ひ、起世にも、諸外道と云へり、正行の梵志を指て、佛祖は外道と云はざりしこと、既に論へるがごとし、)さて上に引く。邪聚品なる五施の說に。毒を施す事の惡なるは更にも云ず。野牛を人に施すこと。角もて人を抵むの恐有れば然も有べく。刀と女は。其道に不用とせる物なれば然も云べし。

神祠を造作するを。福なしと云こと。是何ちふ邪說ぞや。然るは此說法の次に。一者造ニ作園觀一。二者造ニ作林樹一。三者造ニ作橋梁一。四者造ニ作大船一。五者造ニ作房舍一。此五施者。令レ得ニ其福一と云へり。(此施どもは、都て己が道に用ある事どもなるは、私と云べし、其中に、大船のみは、然も非ざるにや、)上なる五施は。福を得しめず。此五施は福を得しむること。誰か其權を執りて然るや。總て大千世界中の事は。佛その成敗を司る由なれば。此權も佛是を執るか。然も有らば。前節に謂ゆる。諸有結を盡し。苦本を離るとは云べからず。然れば其權を執るもの。神祇ならで何か有む。(但しそは、其神の意に應ずる事をこそ福へめ、其道に叶はざる事は、福へざること云も更なるが中に、佛法風の事に福ふ事も有れど、此は別に子細ある事なり、其由を云はむ、說長ければ、古今妖魅考に論ふを見べし、)さて神祠を造作すること。其神祇を崇信するの至なれば。何か歡感さるべき。感喜ばゞ。爭で祥の無るべき。然るを神祠を造るは。福を得ず。房舍を得るは福を得ると云こと。何に

佛祖が私言ならずや。是一を以ても。彼老が諸有結を盡せりと云こと。余が印可せざる所なり。(かかる說法の、世に弘これる故に、神國の神裔たる國人も、大半は此邪說を信受して、佛宇を莊觀ならしめ、神社をば、甚く荒廢せしめて、遂に天皇祖神の道をしも、蔑如せしむる事となも成にける、何に妖言ならずやも、)百喩經と云は。何者か擬けむ。其經中の頌に。神鬼難レ測潜來密往。授以ニ福基一。薦以ニ歆饗一。兼祭ニ幽塗一冀レ免ニ饑想一。凡聖等祠福祚無レ爽。と云へるは。佛書に珍らしき語なり。(此は法苑珠林に引たるを、再引せり、法苑珠林に、また十方譬喩經に、天上天下鬼神、知ニ人壽命罪當至未レ至、不レ能レ治レ人、不レ能レ使ニ人富貴貧賤一、但欲ニ人作レ惡犯一レ惡、因ニ人衰耗一而往亂レ之、語ニ其禍福一、令ニ人向レ欲得レ設ニ祠祀一耳、と云へるを引て、故知空祭ニ鬼神一、欲レ求ニ現福一、難レ可レ得レ力也と云へるは、道世も愚比丘なりし故に、古說と佛說の差別を知らず、佛祖が本意を載たる譬喩經に左袒して、かく云へるにぞ有ける、)さて本文には。人を嬈亂する物と。守護神とを。都て鬼神と云へ

る故に。混雑しきを。起世經に。人を嬈亂するを非人と云ひ。守護神を諸神と云ひて。此を別てるは。殊に珍重たく。精き説なり。(非人とは、人ならで、靈ある物を廣く稱へる中に。鬼神の類を多く云へり。)然るは山林川澤。城隍村塢。丘塚街巷。四衢道は更なり。海原の邊にも沖にも。鬼神の住はぬ所なく。善惡邪正樣々なるが中にも。產土神よく人を守護し。(產土神は、各々所々に依て異なり、故に鎮守神とも云ふ、此を唐土には、城隍神とぞ云める。)人能く正善道に因順して。神祇を尊崇するは。猶許多の神ありて副護り。また邪惡道に因順して。神祇の尊崇すべきを知ざるをば。產土神まづ是を捨て守護せず。是に於て。邪惡の妖鬼。その際を伺ひて嬈亂し。或はます〳〵その惡行を長せしむ。信に此説の如し。(是に就て、西洋人の窮理説に、人には各々其業に從ひて、其を幸ふ物あり、是をエムゲルと稱ふ、善業にまれ、惡業にまれ、其業に專と勤しむ人には、殊に其物多く集ひて、其極境に至しむ、此の物に、善惡邪正ある事は更にも云ず、其態も、各々異にして、

人の心業に從ひて、其方なるエムゲル、是を助くる由にて、彼國籍に、一藝に勤める人の肖像を載たるに、机邊上に、其物の多く飛相ふ趣を畫たり、然も有げなる事なるかも、)唯し守護する諸神も。其人の命終に及ぶ時に。捨去る由云へれど。此は傳への訛ならむ。實には其命終の時は。守護神殊に愛憐を垂れて。其枕邊を去らず。識神の往方。冥府大神の糺判をも見定むるを。善神の守護なき人の命終には。彼嬈亂を事とする妖鬼ら。佛菩薩など。其餘種々の物と化り來りて。其識神を誑惑して。其部中に引入るゝなど。己具に考へ置たり。(是らの説は、最長ければ、此には少か其端倪をこそ云へれ、精くは別に記すべし。)斯在ば。人としては。然る諸神の守護。養育の恩を。束の間も忘るまじき物なり。故是を以て。十二天儀軌に。一切衆生。四大違變有種々病。或鬼魅來作種々病迷倒世間。內外種々損害謂諸衆生不知恩故有如是違。以何爲恩謂地水火風四大種各有其精日月諸天皆有內外養育之恩。供養此天有種々利。器界生界皆悉增力也云々と言へり。(此全文は、既に

第二品の第二節、祠吠陀の下に引て、委く註せるを見べし、)是また梵志の古説なり。此の本文および起世經の説と思合せて。共に天道の眞面目なる事を悟り辨ふべし。

過忉利天由旬。一倍有燄摩天宮。過燄摩天由旬一倍。有兜率天宮。過兜率天由旬一倍。有化自在天宮。過化自在天由旬一倍。有他化自在天宮。是爲欲界。欲界衆生有六種。地獄。畜生。餓鬼人。阿須倫。六天是也。

大樓炭經に。過忉利天上有燄摩天。過燄摩天上有兜術天。過兜術天上有尼摩天。過尼摩天。上有波羅尼密和耶越致天。と見え。(此經には、天々の相去る由旬數を云ず、古色なるべし、また異所には、尼摩羅天、波羅尼密天とも、無貢高天、他化自轉天とも云り、)起世經に。三十三天上。一倍有夜摩天宮殿。夜摩天上一倍。有兜率陀天宮殿。兜率陀天上一倍。有化樂天宮殿。化樂天上一倍。有他化自在天宮殿と言へり。(また別所には、夜摩を須夜摩、化樂を化自樂とも云へり、(頭注云十池のぼさつ閻浮提王らんりん王忉利天王やま天王とそつ天王善化天王自在天王)○燄摩天は。大藏法數に。夜摩天梵語。夜摩華言善時。亦名時分。謂其時々唱快樂故。以蓮華開合。分其晝夜。此天依空而居とあり。(名義集には、須夜摩此云善時分、又翻妙善、新云須燄摩、此云時分、時々唱快樂故、とも見えたり、)○兜率天は。大藏法數に。梵語兜率華言知足。謂。其於五欲境。知止足故。此天依空而居とあり。(名義集には、兜率陀此云妙足、新云覩史陀、此云知足、西域記「頭注云 毘摩羅詰唐言無垢稱、舊曰淨名、淨則無垢名則是稱義とあり」云、覩史多舊曰兜率陀、兜術陀、訛也、於五欲知止足故、佛地論名喜足、と云ひ、なほ此を經論等に、兜飾多、兜駛多、兜率哆、珊覩史多、なども見えたり、然して大般若經音義に、都史多梵語、欲界中六天之一名也、唐云知足、以下天多放逸、上天多闇鈍、受樂不進故云知足、一生補處最後身菩薩、多作此天王、當來彌勒、見今在彼天爲王也、と云へり、)さて此天を。一生補處。最後身の。菩薩の出世。前に住する處と云ふ説は。普ねく佛

書に見ゆる説なるが。此は佛祖が其出世前には此天の菩薩王にて在し。と云へる妄説を發して後に。謂ゆる過去六佛の事をも。其趣に説き。また當來の世に出む。彌勒と云ふ佛も。此天に菩薩王と成りて。今見に出世すべき時を。待て在よし言へる妄誕より。起れる事なり。（其由は第□品、第□品などに辨ふるを見べし、）○化自在天は。諸書に化樂天とも譯せり。大藏法數に。化樂天者。謂自化二五塵之欲一。而娛樂故。此天依レ空而居とあり。（名義集には、須涅窰陀、或尼摩羅、大論云、此言二化自樂一、自化二五塵一、而自娛樂、故言二化自樂一、楞嚴名二樂變化天一とも云へり、）また對法論音義に。樂變化天。樂五考反。但此天雖レ有二寶女一。於二變化一者心多二愛著一。於レ男亦爾。故以名焉。舊言二化樂天一。音洛失レ之久矣。とも云へり。（此天名は、なほ余が考あり、末に註ふを見べし、）○他化自在天は。大藏法數に。他化自在者。謂假二他所化一。以成二己樂一。故此天は。依レ空而居。卽魔王天也とあり。（名義集には、婆舍䟦提、或波尼窰、大論云、此云二他化自在一、此天奪二他所化一、而自娛樂故、亦名二化應聲天一、別行疏云、是欲界頂、卽魔王也とも見ゆ、此天を魔王としも云ふ由は、末に註ふべし、）さて上四王天より。此他化自在天までを。六欲天と云ふ。其は大藏法數に。楞嚴經を引て。六欲天欲。卽色欲。四天王以レ形交爲レ欲。忉利以レ風爲レ欲。夜摩以二抱持一爲レ欲。兜率以二執手一爲レ欲。化樂以二視笑一爲レ欲。他化但以レ視爲レ欲也。故名二六欲天一とあり。（但し六天欲情の趣は、早く本經に見え、卽ち忉利天品に、四天下人男女交會、身々相觸成レ欲、諸龍金翅鳥、亦復爾、阿須倫身々相近、以レ氣成レ欲、四天王忉利天、亦復如レ是、焔摩天相近以成レ欲、兜率天執レ手爲レ欲、化自在天、熟視爲レ欲、他化自在天暫視爲レ欲、自上諸天、無二復婬欲一とあり、樓炭には、四天王まで、男女亦行二陰陽之事一と云ひて、餘は同じく、起世經には、四天下人若行レ欲時、二根相到、流二出不淨一、諸龍金翅鳥等、若行レ欲時、亦二根相到、但出二風氣一、卽得二暢適一無レ有二不淨一、諸阿修羅、四天王天、三十三天、行レ欲之時、亦復如レ是、夜摩諸天執レ手成レ欲、兜率天憶念成レ欲、化樂諸天熟視成レ欲、他化自在

天共語成レ欲と云へり、楞嚴經とも、各々互に異同あり、孰れか佛祖の眞說とせむ、蓋みな妄說なる事は、言ふも更なり、）

○闍尼沙經に。淨ニ修梵行一。於レ是命終生ニ忉利天一。受ニ天五福一。一者天壽。二者天色。三者天名稱。四者天樂。五者威德。—

「名義集に。前節に引たる修ニ習上品十善一。乃生ニ欲界一四王天。二忉利天一と云へる文の次に。若修ニ十善一坐ニ未到定一。乃生ニ三夜摩天。四兜率天。五化樂天。六他化自在天。由ニ禪定力一故と云ひ。（世界名體志に、四王忉利單修ニ上品十善一、得レ生、夜摩以上兼修ニ未到定一とあり、單と云ひ、兼と云へるに、心を著て思ひ辨ふべし、）天台止觀に。若端坐攝レ身調ニ和氣息一。泯然澄靜身如ニ雲影一。虛豁淸淨、而猶見レ有ニ身心之相一。是則名爲ニ欲界定一也。（こは四王忉利の定法を云へるなり、名義集また名體志の說は、大論に本づける說にて、單に十善行を修してと云へるは、古說と聞ゆるを、定法なくては事足ず思ひて、止觀に此定法を作れりと見えたり、）

從レ此巳去。忽然不レ見ニ欲界定中身首。衣服牀舖等事一。猶如ニ虛空一。間々安隱。名爲ニ未到定一。と有るなどを見て。此天界定の說相をも知べし。（未到定とは、未だ根本定の境に到ざる由の名なり、根本定の事は、次節に註ふを見べし、）さて此を定としも云ふ由は。諸書に。定者攝レ心無ニ分散一。故名レ定也と云へる如く。其志せる事行に。心を攝定して。散動する事なきを云ふ語なり。然れば梵志の古說に。定と云しは。彼十善行に單に志して。其を彼十惡行に散動せしめず。忉利天上に生せむ事を。求むる法を云ひし也けり。（此定心は、いと恐しき物なり、彼孔丘と云ひし諸越の聖人が、天生ニ德乎予一、桓魋其如レ予何と云へる、また一婦恨を懷きて、三年雨降ざるも、事こそ替れ、皆一箇の定心にぞ依れりける、然れば古へ學せむ徒も、阿波禮皇祖天神の道に乘じて、單に此定心を修し固め、神生ニ德於予一、左道輩、其如レ予何、と言擧すべく、身口意を磨き淨めて、古梵志らは更なり、凡て然る蕃人等に、心愧ざらむ由もがな、）然るを佛祖が時よりは。數百歲往昔に。勒沙婆仙と云ひし者。

世に出て。梵志に元より有來し。忉利天生の古說の上に。餤摩以上の四天を並立て。欲界六天行と云ふ事は。此者の始たる行法なれば。(此事は、既に第三品の初節に註せり、なほ今品の總論にも、論ふを見べし、)欲界と云稱は更なり。彼餤摩以上の四天に生ずる。未到定と云ふも。實は是奴が立たる法名なるを。佛法にも其を竊せること。言ふも更なり。(其は梵志の古說には、忉利天、大梵天の傳へこそ有りつれ、餘の諸天の說は無く、其二天ともに、男女夫婦の道ある由の傳なれば、忉利天を、別に欲天など云ふべきに非ず、色界無色界など云ふ諸天名を作り、男女の道を、非法のごと云へる說の起りて後に、其徒より、欲界天と云ふ名をば設たること、著明なり、斯て餤摩天より上、四天の說なき上は、其定法も、梵志說には有るまじきこと、是また言まくも更なり、)さて此勒沙婆仙が後に。富蘭那。阿羅々。鬱陀羅。佛祖。また世々の佛法論師ども。次々に出て。何定。某定と。已が向々號けつゝ。諸定說法を。作り增たるにぞ有りける。(其數いと多く、法數籍にも、漏たるが多ければ、今盡く計ふべくも非ず、)○是爲二欲界一とは。上に次々出たる諸界諸趣より。第六他化自在天までを云ふ。此事本經は更なり。樓炭。起世。その餘の諸書にも。普ねく見えて論ひなし。(其は二法數に、下極二無間地獄一、上至二第六他化天一、男女相參、多二諸染欲一故、名二欲界一と有にても知べし、)○欲界衆生云々は。本經に。欲界衆生有二十二種一云々と有れど。其は地獄。畜生。餓鬼。阿須倫人の五種に。四王天より。第六天までを六種とし。合せて十一種に。魔天を加へて、十二種と爲るなれど。魔天の入たるは。後人の態なり。故是をもて。有二十二種一と云る語をば除きつ。(魔天を別に、一天界とせるは、後天の攙入なること、次第に辨ふるを見て知るべし、)さて起世經。三十三天品に。佛言。世間有二三種惡行一。所レ謂身惡行。口惡行。意惡行。(身惡行とは、即上に謂へる殺生、偸盜、邪婬をいひ、口惡行とは、妄語、兩舌、惡口、綺語を云ひ、意惡行とは、貪欲瞋恚邪見をいふ、即謂ゆる十惡行なり、)若有二衆生一。作二是惡行一。身懷命終。生二地獄中一。彼於二此處一最後識滅。

地獄之識初相續生。彼識共生。卽有二名色一。緣二名識一故。卽有二六入一。生二畜生中一生二閻摩世一。亦復如レ是。三種惡行應當二遠離一。(最後の識とは、在世中、最後までの心識を云へり、地獄に生じては、彼最後までの識みな忘滅して、地獄の識と爲り、其名色を覺えて、眼耳鼻舌身の六入も、地獄の趣になる由にて、畜生中に生れ、閻摩世に生れたるも、其如くぞと云へるなり、彼莊周が、夢に蝶と化りて飛たりと云へる寓言、思ひ合すべし、)復世間有二三種善行一所レ謂身善行。口善行。意善行。(身口意の善行は、謂ゆる身三、語四、意三の十善行を云ふなり、)若有二衆生一作二是善行一。身懷命終。生二於人道一。彼於二此處一。最後識滅。人道之識初相續生。彼識生時。卽名色生。緣二名色一故。卽有二六入一、(こは或は地獄、或は畜生、或は閻摩世より、人道に生ずる衆生は、更にも云はず、人道より、人道に再生せるも異なく、皆前世の識を忘滅して、今世の識となり、名色六入も其趣に變ると云ふ義なることと上の如し、偖しか見ときは、三惡道より轉生し來らむ者の、前生に、十善行を作むことは、

有まじく思はむ人も有なむか、此は己れ深き考あり、別に云ふべし、)復有二衆生一作二此善行一。身懷命終。生二於天上一。此處識滅。彼天上識初相續生時。卽名色生。有二名色一故。卽生二六入一。(此處とは、人間界を云へり、文意は、上に釋るに准へて知べし、)彼於二天中一。初出生時。卽如二人間十二歲兒一。若是天男。卽在二天子坐處膝邊一。若是天女。卽在二天女兩股內一。忽然而生。既出生已。彼天卽稱二是我兒女一。由二行報一故。自然智生。卽自念言。我由二何行一。今生二此間一。卽復念言。昔於二人間一作二彼善行一。由二此行一故。今得レ生レ天。我設於レ此命終。復生二人間一。當レ淨二身口意一。倍復精勤。修二諸善行一。(由二行報一故、と云より以下、起世經の文、迂遠に聞え難き語ども有れば、阿含に依て載しつ、)兒生未レ久。便自覺レ飢。時於二其前一有二衆寶器一。自然盛二滿天須陀味一。種々異色。彼兒以レ手。取二須陀味一內二其口中一。卽自消融。彼兒食訖方覺レ渴時。卽於二其前一有二天寶器一。盛二甘露漿一。入二其口中一。消融亦爾。飮食既訖。身遂長大。與二彼舊生天子天女一。等無レ有レ異。衣服瓔珞。鬘貫樂器。種々衆寶。各

隨ニ其意一。於レ是詣ニ諸林苑中一。無數天女。鼓樂弦歌。語笑相向。新生天等。未レ見レ女時。憶ニ宿世事一。了々分明。如レ覩ニ掌中一。由レ見ニ天女一。此心卽滅。於レ是便有ニ婇女侍從ニ三種善行。應當ニ修習一とあり。（此の五道の一節は、殊に長文にて、佛妄の多く錯れるが中より、其古說と覺ゆる說の大要を擇びて抄せり、また中に聞取がたき文は、樓炭阿含をも挍べ見て、改めたるも有り、委くは本書どもを、熟見して知べし。）是また梵志の古說を取れる說法なり。其は何を以て知るなれば。世間と云ひ。所レ謂云々と言るにて。まづ知られ。（所謂とは、世間に謂ゆるといふ義にて、凡て古經どもに、前に佛祖が說の承る語なくて然云へるは、世間說を用ふる時の常語なり、阿含中に殊に多し。心を著て察べし、其謂ゆる世間說と云は、歟ならず梵志の古說か、或は外道說を取れるなり、然るは其說ども、世人のよく聞知りて有ればなり。此にまた心を着て、察辨ふべし、須彌山儀銘解に云々。）阿含樓炭の二經には。四王天の生より。他化自在天の生まで。一天々々に。其生るゝ樣を載せるに。

今引く起世の說には。唯に生ニ於天上ニと云ひて。其天々を別たず。此は梵志の古說に。四王忉利を一天とし。空居の四天を云ざる。古色に符へるを以て知られたり。（樓炭阿含の二經には、空居の四天をみな擧て、一一に其生るゝ趣を記せる、其大要は同けれど、阿含に、四王天の初生は、人間の一二歲兒の如く、忉利天の初生は二三歲の如く、兜率天の初生は、四五歲の如く、化自在天の初生は、五六歲の如く、他化自在天の初生は、六七歲の如しと云ひ、樓炭經も、大抵は同けれど、相違せる事も少からず、其經等を披き見て知べし、然るに起世に、人間の十二歲兒の如し、とのみ云へるは、いかに古色ならずやも、）借この起世の文に。生ニ餓鬼中一と云べきを。生ニ閻摩世一と云へるは。餓鬼やがて。閻摩世の物なるが故なれども。此は阿含樓炭二經に。餓鬼とあるぞ宜しき。然るは。閻摩羅王の司典する所は。無威德の餓鬼耳ならず。有威德鬼神も。また此王の主宰すること。上に精しく論へる如くなればなり。（こは前品第三節の註に論へり、披き見べし、）さて天道。人道。地獄道。

餓鬼道。畜生道を總ねて。五道とは稱ふなり。（また五趣とも云へり、大毘婆沙論に、問趣是何義、答、諸有情所レ應レ往、所レ應レ生、結生處故、名レ趣已とあり、）其は三藏法數に。正法念處經に依りて。五道者天。人。地獄。餓鬼。畜生也。一天道。（天者最高最上、極大極尊、受下用出二於自然一快樂上、莫レ非二如意一、由下昔廣修中淨行上、故感二此報一、是名二天道一也、）二人道。（人者忍也、謂能安二忍世間苦樂之境一也、蓋天地所生、惟人爲レ貴由レ習二善行一、報感二此身一、是爲二人道一也、）三地獄道。（地獄、謂在二地下一也、其量大小不同、其壽延促各異、皆由三衆生造二極惡業一、報盡命終、至レ此受レ苦也、）四餓鬼道。（謂此鬼類羸瘦醜惡、見者畏懼、窮レ年卒レ歳不レ過二飲食一、或居二海底一、或近二山林一、樂少苦多壽長劫遠由二昔慳貪一、所レ報、獲二此身一也、）五畜生道。（畜生亦云二傍生一、此道偏在二諸處一、其類非レ一、互相呑噉、受レ苦無レ窮、是名二畜生道一也、）若言二六道一則加二阿修羅一。此不レ言者。以三阿修羅一道。攝二於天。人。畜生。餓鬼諸趣一故也。と言へり。（正法念處經は、阿含、樓炭、起世などよりは、後に作れる經にて、或は大乘經とし、或は小乘とするばかり、大乘方廣說を用ひたる經なれども、亦小乘と云ばかり、古きが故に、然すがに、古實なる說も交りて、かく五道の說にて在けるは、上に引く、起世經の五道なる古色に符ひて、甚珍しくぞ所思ゆる、大毘婆沙論も、五趣を釋り、）さて天道の事は。（大毘婆沙論に、云何天趣、答、天一類伴侶、問何故彼趣名レ天、答於二諸彼趣一、最勝、最樂、最善、最妙、最高、故名二天趣一、有說先造二作增長上身語意妙行一、往レ彼令二彼生相續一、故名二天趣一、有說、以三彼自然身光恒照二晝夜等一、故名レ天、問諸天住在二何處一、答四大王衆天住二七金山及妙高山四層級上並日月星中一、三十三天、住二妙高山頂一、夜摩乃至色究竟天、皆在二空中一、密雲如レ地各有二宮殿一、於レ中居止、無色界天無二形色一、故無二別住處一、問諸天形相云何、答其形上立、問語言云何、答皆作二聖語一）上下に論へれば、此はおきて。人道の說には論ひあり。然るは人忍也と云ふ說。天台文句を始め。諸末書みな此說なれど。甚じき附會なり。其は大毘婆沙論に。云何人趣。答。以三能用意思惟觀

察所作事故。名摩奴沙。有說。語意妙行往彼生彼。令彼生相續故。名人趣と言ひ。（立世論云何品にも、云何人道名摩㝹沙、一聰明、二者勝、三意微細、四正覺、五智慧增上、六能別虛實、七聖道正器、八聰慧業所生故、說人道爲摩㝹沙、と云へり。）名義集に。摩㝹賖此云意。人能息意。能修道得達分とも。摩㝹舍喃此云人ともあり。（また梵語雜名、梵語千字文の二書にも、人の梵語を[illegible]とあり。）是らを合せて考ふるに。梵語に。人を摩奴沙と云は。聰明なる義の稱にて。意の梵語と同じ。然るを人者忍也と。漢字音の義をもて解るは。何に附會ならずや。（然るは摩奴沙といふ梵語に、苦樂の境に於て安忍す、と云ふ義は無ものをや、西戎比丘らが、解釋せる注疏どもに、其國說の附會多きこと、此の二つを以ても悟りつべし。）さて此人道世界を。穢土火宅など號けて迯尻貌に云作せる說法どもは。天皇祖神の神慮に孛れる。無比の妖言邪說なること。今更に論ふべくも非ざれば。漏しつ。（もし佛法者にも過に此神慮を窺ひ知らむと思ふ倫も有なむには、姑く一度その舊習を掃除して、皇朝の正典拜讀しよく味へて知ねかし。）さて天台四教儀集註に。天道人道に。阿修羅道を加へて。三善道と云へるを。三藏法數に。約め說て。三善道者。謂。天人阿修羅。同修十善雖有上中下品不同。皆名善道。一天道。（謂因修上品十善。得生其中。是名天道也。）二人道。（謂因行五常。復行中品十善。得生其中。是名人道。五常者仁義禮智信也。）三修羅道。（謂雖行五常。欲勝他。故行下品十善。得生其中。是名阿修羅道也。）亦名仙道者。以修羅一道。攝屬不定故也。と云へり。此說に。修羅の一道を。攝屬不定なるが故に。また仙道と名くと言へるは。上に引く五道說にも。若言六道。則加阿修羅。此不言者。以阿修羅一道。攝於天人畜生餓鬼諸趣故也。と云ると同意にて。此は大に說あり。然るは梵志の古說は。第口節の註に委しく論へる如く。闍羅阿修羅は。同一體の神王にて。此道は。四吠陀典に。上生八分の中に入ること。金七十論に見え。（其一所には、闍摩羅生といひ、一所には、阿修羅生と有りて、

其やがて同一體の神なる證なること、上に委しく辨へたるを見べし。）十二天儀軌に。五道冥官。司命。行疫神。諸餓鬼を帥る由見え。大般若經音義にも。於五趣中決斷善惡。司典生死罪福之業。勝因生善道。惡業墮泥犂。云々と云へる如くなる故に。阿修羅一道は。諸趣を攝すれば。別に一道とは。立難き由云へるなり。金七十論なる四吠陀説。また彼儀軌説。僅々たる一二句なれど。何に正實なる説ならずや（佛祖が説法有りしより、一神王の二名を分て、二神王と爲し、共にいと妖惡なる神と爲て説法せる、其妄誕の尾を整へて、次々に託作せる經論、および後世の註疏どもに、加增せる妄説を集めて、此に積たらむには、棟に充る量ならむを、其が中に、音義を始め、法數などの末書に、右の如き古説も破綻し出て、一二句なる、吠陀儀軌の古説に符合し、かくなも説明さるゝ事となりて、然ばかり多き妄誕どもの、朝の霜と消失べきは、世に實ばかり、貴き物は無りけり、其は死眼にこそ消て見ゆれ、活眼ならむ人を待て、見出しむる、鬼神の縕奧微旨にぞ有ける。

故是を以て西戎人も、莫見乎隱、莫顯乎微とぞ云へりける、）さて此閻摩阿修羅王は。五道冥府の主宰として。人種萬物の。邪正善惡を糺判する神天なるに。其趣をまた仙道とも云ふ義は。まづ名義集仙趣篇に。梵語茂既此云仙。釋名云。老而不死曰仙。仙遷也。遷入山也。故制字。人傍山也。（莊子云、千歲厭世、去而上僊、抱朴子云、求仙者、要當以忠孝和順仁信爲本、若德不修、而但務方術、終不得長生也、）と云へる如く、印度にて古く仙と云しは、卽かの梵志行を修し得て。住山を事とし。無爲閑寂に長生して。生ながら幽冥に近付き。神威德を成就せる人を云ひて。西戎國にて。古く仙と云しも。同じ趣なるが。其所業。やゝ鬼神に通る所あれば。閻摩阿修羅王の。攝屬たるべき謂なる故に。此の王の司典する道を。また仙道とも稱なるべし。（其は鬼神のみを攝するに非ざれど、鬼道と稱るも、云ひもて行けば、同じ意ばへなり）斯て其仙人の有趣は。諸經論釋にも。多く散見せるが中に。楞嚴經に。十種仙を載せり是にて大抵盡せりと見ゆるを三藏法數

に約め載せる其説に。一地行僊。(謂其服食藥餌、能駐一期之壽、而不能輕擧、故名地行仙、一期者從生至死也、)二飛行僊。(謂其飡食黄精松柏之類、久而身輕、故名飛行仙、黄精者、藥名、松柏者謂松柏之葉也、)三遊行僊。(謂其服還丹、化形易骨遊戲人間、故名遊行仙、還丹者、謂神仙九還之丹也、)四空行仙。(謂其乘陰陽動靜、調氣固精、騰身履空、故名空行仙、)五天行僊。(謂其能鼓天池、嚥津液、不交世欲、故名天行仙、大池者卽口也、)六通行僊。(謂呑吸日月精華、作意存變以延身命、歲久功成、遂有異見通世物情、故名通行仙、)七道行僊。(謂其能以呪術持身術力成就故、名道行仙、)八照行僊。(謂其能繫念一境、澄凝精思積久、功成照用顯發、故名照行仙、)九精行僊。(謂其內以坎男離女爲四配、外卽採陰助陽、攝衞精氣、故名精行仙、)十絶行僊。(謂其存想世間有爲功用運想化理、超絶世間、故名絶行仙、)と云へるが如し。(然は有れ此の十行仙は、漢籍に謂ゆる、天仙、地仙、屍解仙の中なる地仙なるが、凡て仙と云ふに、

種々の別あり、此差別に於ては、已に殊に委しく考へ記せる物あれば、此に云ず、)さて地獄。餓鬼。畜生。是を三惡道と云ふ。其は四教儀集註に依りて。三藏法數に。三惡道者。道卽能通之義。謂一切衆生。造作惡行而生其處。故名惡道也。一地獄道。(謂此處在地之下、卽造作極重惡業、衆生墮於此道、故名地獄道、)二餓鬼道。(餓鬼道有三種、一謂罪業極重者、積劫不聞漿水之名、其次者、但伺求人間蕩滌膿血糞穢、又其次者、時或一飽、卽造作惡業衆生、由慳貪故、生於此道、故名餓鬼道、)三畜生道。謂被毛戴角、鱗甲羽毛、四足多足、有足無足、水陸空行等、卽造作惡業衆生、由愚癡故生此道、故名畜生道、)と言へるが如し。斯て地獄のこと。既に註へれど。猶彼に漏せるを註さば。立世論云何品に。云何地獄名泥犂耶。無戲樂故。無喜樂故。無行出故。無福德故。復說此道於欲界中最爲最下。故名非道。因此事故。名泥犂耶と云ひ、大毘婆沙論に。云何捺落迦趣。答。彼諸有情無悅無愛。無味無利。無喜樂。故名那落迦。或有

說者。由彼先時造作增長增上暴惡。身語意惡行。往彼生彼。令彼生相續。故名捺落迦。(なほ捺落迦といふ名義の數說を舉たり、されど本書に就て見むは、無益なる說等なり、)問。地獄在何處。答。多分在此瞻部洲下。問。諸地獄卒、爲是有情數爲是非有情數耶。答。若以鐵璅繫縛。初生地獄有往琰摩王所者。是有情數。若以種種苦具。於地獄中。害有情者。是非有情數。瞻部洲下有大地獄。瞻部洲上亦有邊地獄。及獨地獄。或在谷中。或在山上。或有曠野。或有空中(阿含、樓炭、起世、共に上に舉る如く、地獄の在所を、南方二鐵圍山の中間に在と云るを、此論に、大地下に在と云へるは、古へに依れる說なること、既に云へりき、また邊地獄獨地獄と云ふ獄の、大地上に在と云こと、此論の發明にて、佗書に見ざる妙說なる其由別に記せる物あり、)問。地獄有情其形云何。答。其形如人。問語言云何。答。彼初生時皆作聖語。後受苦時。雖出種々受苦痛聲。無有一言可了。惟有斫刺破裂之聲。と言へり。(地獄の趣の、聊も古色に見ゆる說どもは、上に既に註せれば、今更に云はず、其多分の妄誕をも知まく欲く思はむ人は、法苑珠林に並記せるを見べし、)次に餓鬼道のこと。此も大毘婆沙論に。云何鬼趣名閉戾多。答。施設論說。如今時鬼世界王名琰摩。劫初時。有鬼世界王。名粃多。是故往彼生彼。諸有情類。皆名閉戾多。即是粃多界中所有義。有說。由造作增長增上慳貪。身語意惡行。往彼生彼。令彼生相續。故名鬼趣と云へり。(なほ異說を多く舉たれど、煩しければ抄し出さず、)此閉戾多と云ふは。名義集鬼神篇に。應法師云。薜荔多。正言閉麗多。此云祖父鬼也と見え。六波羅密多經音義に、餓鬼之總稱也と云へり。(また放光般若經音義には薜荔或言卑帝梨。或云卑帝梨耶。或言閉梨多。或作俾禮多。皆訛也、正言彌荔多。此譯云祖父鬼也、とも見えたり、)今案ふに。祖父鬼としも云は。是餓鬼の初なりし故にて。婆沙に。劫初時に。鬼世界王なりと言へるも。祖父なるが故と聞ゆ。(然るに諸音義に、餓鬼中最劣者也、と云ふ說の多かるは、諸道に於て、中に勝れたるを王とは云ふ

なるに、最劣にして、王とも祖父とも云ふなるは、心得難きに似たれど、其悪業の最劣なるが、やがて諸餓鬼に勝れてある故に、然は云へるにこそ。)さて此閉戻多を、劫初時の王とし。今時の王を。琰摩と云ふ由なるは。餓鬼趣をば、舊くは琰摩王の所攝を云ず。閉戻多の所攝として。其名を取て。鬼趣を閉戻多と云へるが。(粃多と云ふは、閉戻多の切れる語と聞えたり、梵語雑名、梵語千字文などに、鬼の梵語を歩多とあるは、粃多の訛なるべし。)後に佛説起りて。此をも琰摩王の所攝。と云ひ立たる趣。いと顕に聞えたる。(其據と引たる施設論を、其には施設足論といふ、謂ゆる六足論の一なるが、佛弟子迦多延那が作と云ひ傳へて、婆沙よりは遥に古き書なり、そは第□品に、委しく註ふを見て知るべし。)然れば。此名は。餓鬼の總稱には當れど。閻摩王界の總稱には當らず。此は立世論云何品に。云何鬼道名ニ閉多一。閻摩羅王名ニ閉多一。故其生與レ王同類故。名ニ閉多一。復説。此道與ニ餘道一往還善悪相通。故名ニ閉多一と云へるに依りて。閉多とは云べし。(名義集にも、此説を引て、閉多此云レ鬼、と云へり。)さて此論に。此道與ニ餘道一往還。善悪相通と云へるは。琰摩王の所司は。甚汪く。五道の冥官を始め。總て幽冥を主典すれば。善悪の天鬼神。みな其中に籠ればなり。(餓鬼もすなはち、其中に有ること、言まくも更なり。)故是を以て。毘婆沙論に。問鬼住何處。答琰摩王界。是一切諸鬼本所也。從レ彼流轉。亦在ニ餘處一。於ニ此洲中一有ニ二種鬼一。一者有威德。二無威德。有威德者。或住ニ華林果林種々樹上一。好山林中亦有ニ宮殿一。在ニ空中一者乃至或住ニ餘清淨處一。受ニ諸福樂一。首冠ニ華鬘一身著ニ天衣一。食ニ甘美食一。猶如ニ天子一。乘ニ象馬車一。各々遊戯。故四王衆天。三十三天。中有ニ大威德鬼神一。與ニ諸天衆一守レ門防レ邏。遵從給使と云ひ。(この有威德鬼神と云ふは、みな善神にて、此を諸天と云むも非ならず、其は大寶積經音義に、印度風俗、凡諸鬼神通名爲レ天、と有るにて知るべし、況て其司典たる閻羅王に於ては、天とも天と稱すべし、故十二天儀軌に、焔摩天、羅刹天といひ、金七十論に、天道八分の中に、閻摩羅生、乾達婆生、夜叉生、羅刹生、沙神生とあり、然れば此の五種を、

天とも神とも云こと著く、其が中に、沙神と云ふは、塵沙上に住する神の由にて、謂ゆる地祇なるが、此なる有威德鬼神にも、由ありて聞ゆ、）無威德者。或住二廁溷糞壤水竇坑塹之中一。乃至或住二種種雜穢一。諸不淨處一。薄福貧窮飢渴所レ苦。由二彼積集一。感二飢渴業一。經二百千歲一不レ聞二水名一。豈能得レ見。況復得レ觸。或腹大如レ山。咽如二針孔一。雖レ遇二飮食一。而不レ能レ受。頭髮蓬亂。裸形無レ衣。顏色枯悴以レ髮自覆。執二持瓦器一而行乞丐。とも言へり。（また謂ゆる舊婆沙論には、無威德者、或依二不淨糞穢一而住、或依二草木塚墓一而止、或依二屏厠故塸一而居、皆無二舍宅一、恒常飢渴、累年不レ聞二漿水之名一、豈得レ逢二甘膳一、設値二大河一欲レ飮、卽變爲二炬火一、縱得レ入レ口、卽腹爛焦と云ひ、順正理論に、無財鬼とて、口中常吐二猛焔一、熾然無レ絕、身如レ被レ燒、腹大如レ山、口如二鍼孔一、雖レ見二飮食一不レ能二受用一、飢渴難レ忍、また多財鬼とて、住二本舍邊一、便穢等處一、欲下恆收二他所レ棄、吐殘糞等一、用充中所食上、而得二豐饒一、有二飮食一處、見二穢或空一、樂レ淨見レ穢、樂レ穢見レ空と云ひ、瑜伽論などにも、是等の事を

委しく載せり、）偖まだ同論に。鬼趣形云何。答多分如レ人。亦有二傍者一。或面似レ猪。或似二種々惡禽獸一。如二今壁上彩畫所一レ作。（また於二鬼趣中一、有二四足者一、如二狐狸象馬等一、有二多足者一、如二六足百足等一とも見ゆ、また護諸童子陀羅尼經に、童子を苦惱せしむる、十五鬼の名を出して、其形を種々の禽獸、また人形男女にも譬へ、舊婆沙に、無威德鬼形容鄙惡、不レ可二具說一、頷如二餓狗之腔一、頭若二飛蓬之亂一、咽同二細小之針一、脚如二朽橋之木一、口常垂レ涎、鼻恆流レ涕、耳內生レ膿、眼中出レ血と云ひ、五道經には、餓鬼形量極大者、長一由旬、頭如二太山一、咽內如レ針、頭髮蓬亂、形容羸瘦、拄レ杖而行、如レ是者極衆、最少者如二有知小兒一、或云三寸、とも見えたり、）問語言云何。答劫初成時。皆作二聖語一。後時隨二所生處一。作二種々言一。形言亦爾と云へるなどは。本據ある說と見ゆれば抄しつ。（聖語とは、世の初に天降れる、梵天子より傳はれる天語を云ふ、梵語すなはち其訛言なり、）中にも形言ともに。所生處に隨ふと云へる說は、實に然も有べく所思たり。（其は上に謂ゆる、形容なるを、現に

見たる事實も、和漢の書に多く聞ゆれど、然も有らず、其國當世の有趣にて、唯鄙惡なるを見たるが、殊に多く、また實に小兒の如く、或は三四寸なる人容の物なと見ること、古書に往々見ゆめり、然して彼餓鬼と見ゆるが、皆水を乞ふ由なるは、奇しき事なり）さて右の如き鬼趣と成こと。十惡行。その因と爲とは言へど。中にも貪欲慳吝なるが多く。此趣に墮ちて。然る苦惱を受る也けり。（故この趣の事を記せる書ごとに、慳澀多貪故と云ひ、或は此を爲ニ極慳所枯苦果一、或は欲レ豐ニ足資具一故、以ニ不如法一積ニ集財寶一慳悋居レ心不レ能ニ布施一乘ニ此惡行一、生ニ此鬼中一、など云ざるは無し、實にも慳吝貪欲は、天地を鎔造ませる、天皇祖神および、幽冥大神の、甚く嫌ひ給ふ事にし有れば、然も有べき事にこそ、然るは年ごろ晋ねく、財寶を多く貯へて、其を豐富と思へる徒の所業を察るに、此窮鬼の趣に入らざらむ人は、二三人は有まじく所思ればなり、窮鬼を、和名抄に、伊佉須太萬とあり）なほ正法念處經に。三十六鬼の名を出して。精しく其所行を載せるを始め。其餘の經論どもに散見せる鬼名は。數知らず多かる中に。首楞嚴經に載せる。十鬼の説は。己年ごろ幽界の趣を。潭思精究して。窺ひ得たる實迹も多かるに。相照して思へば。實に幽中の祕を。啓發し得たりと覺ゆる説も少からぬは。決めて佛祖および論師ら。凡夫の臆に取りて。云ひ出たる説に非ず。（此經も、謂ゆる大乘經の一にて、例の如く、如是我聞、一時佛云々と記出て、佛祖が説に託せれど、甚く後に記せる物にて、佛説には、大に勝りて見つべき事も少からず、其は梵志の古説を交え記せり、と見ゆればなり、猶此經、後人の僞託なること、第□品に、委しく辨ふるを見るべし）是また最古く。顯幽いまだ判れず。彼天降れる梵天子。なほ在世なりし間に。自見知れる幽説を語れるが。梵志家に遺れるを。大乘經々を。託し作れる論師等は。みな才智拔群なる梵志の　由有りて佛法者と爲れるが多在ば。其家説を。佛説に託して。書述たる説なること疑なし。（其大意を云はゞ、惡行を作せる人の識神、まづ地獄道に入りて、其罪畢り、後に惡鬼道に再轉し、其れよりまた、畜類

に轉生する趣の說なり、是珍しき說にて、古今の事迹に合せて考ふるに、甚謂れたり。)然れど其を此に記さむこと、所狹き事なれば。此は別に云むとす。(なほ右に註す鬼趣の外に、佛法起りて後に、また一趣の妖魅ぞ出來にける、其は世に天狗と稱する物是れなり、此は僧徒の靈の成る物にて、鬼趣の多かる中にも、甚く枉々しき魅なるが、其較著なるは、祠に憑りて神備ひ、木石古物に憑り、兒蒙輩に憑き、佛菩の像に憑りて、吉凶禍福の異驗を示せ、或は其容を現じ、禽と變り獸と化り、或は鬪諍を起さしめ、火災を發し、佛經說に合せて、愚輩の極樂の莊嚴を見するなど、千變萬化の妖態を以て、世人を誑惑し、彼法を信受せしむる計をはす物なるが、其生を鳶、また鷲に受て、時ありて然る種々の形に變化し、或は其形、元より人の如くにて、時として、鷲また鵄と化りて飛行する事あり、また火車ちふ妖物も、佛法ありて後に出來し物なり、是らの事は別に古今妖魅考といふ書を著して、其に委く云へるを見べし。)次に四七ノ五十九ウ畜生道のこと。是も大毘婆沙論に。云何旁生趣。

答。諸旁生。其形旁故。行亦旁。以行旁故。形亦旁。是故名旁生。有說彼諸有情。由造作增長增上愚癡。身語意惡行。往彼生彼。令彼生相續。故名旁生趣と云ひ。(なほ異說を多く擧たれど、煩しければ記さず。)立世云何品に。云何禽獸名底栗車。此道衆生。因諂曲業受生。復多覆身行。故名底栗車。とあるを合せて思へば。畜生と云ふ譯は當らず。(然るを法苑珠林に、生謂衆生、畜謂畜養、謂彼畏行、稟性愚癡不能自立、爲他畜養、故名畜生と云へるは强說なり、是を以て、若以畜養名畜生者、如諸龍水陸空行、豈可爲人所養、名爲畜生耶、と云へる難もありて、養者義寛、今從畜養偏多、故名畜生、と云へる答へも有れど、かにかくに非譯なり。)金七十論には。若與非法相應。則受四生。一四足。二有翅。三胸行。四傍形と見え。今一所には。五不行とも有り。此の五を總て。婆沙に旁生と云ひ。立世論に覆身とは言へり。是ぞ當れる譯なる。(然れど經論註疏、悉く畜生とのみ有り、今改むべくも非ず。)偖また毘婆沙論

に。問旁生本住何處。答。本所在大海中。後時流編在諸趣。（旁生の本所を、大海中に在と云へること、甚も謂なく、心得がたき說なり、）問其形云何。答多分旁側。亦有竪者。問語言云何。答劫初成時。皆作聖語。以飮食時分。有情不平等故。諂誑增上故。便有種々語。有不能言者。と言へり。（劫初成時、皆作聖語と云ふこと、然も有べく思合さるゝ事、わが古へにもあり、法苑珠林に、依樓炭經說、畜生不同、大約有其三種、一魚、二鳥、三獸、於此三中、一一無量、魚有六千四百種、鳥有四千五百種、獸有二千四百種、於彼經中、但列總數、不別列名、正法念經、種數不同有四十億、亦不列名と云へり、共に妄誕なること、云ふも更なり、）

（偖しか見るときは、三惡道より轉生し來らむ者の前生に、十善行を作むことは、有まじく思ふも有べけれど、地獄閻摩の兩種は、元より人情なるべき道理なれば、其の行に、善惡あること著く、唯畜生のみは、其行に善惡の別有まじく覺ゆれど、山海林野に住ふ禽獸こそ察知らね、謂ゆる六畜の類、人家に畜おく、牛馬鷄犬猫などを、年ごろ試たるに、同物にして、智愚强弱は更なり、其性にも樣々ありて、寬裕なる有り、麁狡なる有り、質直なる有り、奸曲なる有り、中には、人語をも會する趣なる有て、其誨を守り、また曾て其敎を聞ざるも多し、他に對しての趣を察るにまづは暴逆なるが多けれど、中には辭讓謙遜に見ゆるも交り、己を愛する人と否らぬ人とを別ち、主をも別によく守りて、恩義を思ふも多かれば、其物の分分に、善惡の行別ることは明なり、然れば山海林野の禽獸にも、此差別有むこと、准へて知べし、偖こそ古今の事實にも、禽獸蟲魚の類に、人の恩義を報ひし倫も甚多く、幾千ぢと云こと、今計ふべくも非ず、また其義によりて、物より人に轉生せる類も、今計ふるに暇有ざれば、物各々に、相應の善惡行有むこと、また何か疑はむ、）

大毘婆沙論に。契經說。五趣謂。地獄趣。旁生趣。鬼趣。人趣。天趣。契經雖作是說。而不廣分別。契經是此論所依根本。彼所不說者。今應分別。故作斯論。（契經とは、謂ゆる十二分敎の第

一にて、佛祖が眞說を云ふ、委くは、第□品に註ふを見べし、文義よく通ゆれば、註に及ばず、）問趣是何義。答所往義。諸有情所應往。所應生。結生處故名趣己。（これ自問自答なり、下これに効ふべし、）問何故。捺落迦趣名捺落迦。答是捺落迦所趣處故。有說。捺落名人。迦名爲惡。惡人生彼處。故名捺落迦。（捺落迦と云ふ名義に就て、上の有說を擧たるが中の一說を擧たり委くは本論を見べし、偖捺落迦趣とは、卽地獄趣を云へり、）問地獄在何處。答多分在此贍部洲下。（此答に、多分はと云へるは、下に擧る偏地獄、獨地獄等の、地上にも有ればなり、）云何安立。有說從此洲下四萬踰旬。至無間地獄。彼處恒受苦。無喜樂間。故名無間。縱廣高下各二萬踰旬。次上有三萬五千踰旬。安立餘七地獄。一一縱廣高下各五千踰旬。次上有五千踰旬。（千踰旬青色土、千踰旬黃色土、千踰旬赤土、千踰旬白色土、五百踰旬白墡、五百踰旬是泥、）有說。無間地獄。在於中央。餘七地獄周廻圍繞。如今聚落圍繞大城。（一一の地獄の名ども、其趣なども譯せるど、其は略しつ、斯て其由旬量の事など、世記經、樓炭、起世など、も異なり、見合すべし、）問若如說贍部洲周圍。六十踰旬。三踰旬半。一一地獄。其量廣大。云何於此洲下得相容受。答。此贍部洲。上尖下闊。猶如穀聚。故得容受。又一一大地獄有十六增。並本地獄以爲十七。並諸眷屬。便有一百三十六所。（六千踰旬は、西東北三偏の規をいひ、三踰旬半は、南偏の量なり、）問何故。眷屬地獄說名爲增。答。有說。此是增受苦處。本地獄中被逼切。已復於此處重遭苦。故說名增。（なほ異說有れど抄さず、）問諸地獄卒。爲是有情數。非有情數耶。答。有說若以鐵瑣繫縛。初生地獄往琰摩王所者。是有情數。若以種々苦具。於地獄中害有情者。是非有情數。此是非有情數。由諸罪者業增上力。令非有情似有情現。以諸苦具殘害其身。（この業增上力と云ふ說は、起世經に、佛說の道理に當らざる事多く、人の信まじき事を思ひて、其を信しめむ料に、作り設けたる說なるを、此論を始め、其餘の經論ども、皆其說をもて、道理の通せざる事をば、必

ず業增上力とぞ云ふなる、其說の多かる中に、此なる諸罪者の業增上力と云ふのみは、實に然も有べく所思たり、其由を此に云むは說長ければ、古今妖魅考に、委しく論ふを見べし、）瞻部洲下有大地獄。瞻部洲上亦有邊地獄　及獨地獄。或在谷中。或在山上。或在廣野。或在空中。（この邊地獄、獨地獄と云ふ獄のこと、實に此說の如く、所在多かり、其現證も說長ければ、妖魅考に委しく記すを見べし、）問地獄有情。其形云何。答。其形如人。問語言云何。答彼初生時。皆作聖語。後受苦時。雖出種々受苦痛聲。無有一言可了。惟有所刺破裂之聲。（聖語とは、梵語を云ふ、其もと梵天王の傳へたる語言なる故に、聖語といふ、其は金七十論に、聖語者梵天所說、とあるを以ても辨ふべし、）云何旁生趣。答諸旁生一類伴侶衆同分依得事得處得。及已生旁生。無覆無記色受想行識。是名旁生趣。問何故彼趣名旁生。答其形旁故行亦旁。以行旁故形亦旁。是故名旁生。有說彼諸有情。由造作增長增上愚癡。身語意惡行。往彼生彼。令彼生相續。故名旁生趣。

有說流徧諸處故。名旁生趣。謂於五趣皆在。（捺落迦中有無足者、如孃矩吒虫等、有二足者、如鐵嘴鳥等、有四足者、如黑駮狗等、有多足者、如百足等、於鬼趣中有無足者、如毒蛇等、有二足者、如烏鵄等、有四足者、如狐狸象馬等、有多足者、如六足、百足等、於人趣中有無足者、如一切腹行虫、有二足者、如鴻鴈等、有四足者、如象馬等、有多足者、如百足等、北拘盧洲中有二足者、如鴻鴈等、有四足者、如象馬等、無有無足及多足者、彼是受無惱害業果處、故四王天、忉利天中有二足者、如妙色鳥等、有四足者、如象馬等、無有無足及多足者、如前釋、上四天中惟有二足者、如妙色鳥等、餘皆無有、空居天處轉勝妙故、問彼處若無象馬等者、以何爲乘、亦聞、彼天乘象馬等、云何言無、答由彼諸天福業力故、作非情數象馬等形、而爲御乘、以自娛樂、）問旁生本住何處。答本所住處在大海中。後時流轉編在諸趣。（旁生の本住は、もと大海中なりしと云こと、彼國に古傳有し說なるか、最も意得がたし、）問其形云何。答多分

旁側。亦有堅者。如緊捺落。毘舍遮醯盧索迦等。問語言云何。答劫初成時。皆作聖語。後以飲食時分。有情不平故。及諂誑增上故。便有種々語。乃至有不能言者。と云へり。

云何人趣名末奴沙。答以能用意思惟觀察所作事故。名末奴沙。有說語意妙行往彼生。彼令彼生相續。故名人趣。有說多憍慢故名人。以五趣中憍慢多者無如人故。契經說。人有三事。勝於諸天。一勇猛。二憶念。三梵行。勇猛者。謂不見當果。而能修諸苦行。憶念者。謂能憶念久時所作所說等事。分明了了。梵行者。謂能初種「順解脫分。順決擇分等」殊勝善根。及能受持別解脫戒。由此因緣。故名人趣。

問語言云何。答世界初成時。一切皆作聖語。後以飲食時分。有情不平等故。及諂誑增上故。便有種々語。乃至有不能言者。

於五趣中。有阿素洛。餘部立之爲第六趣。不應作是說。契經惟說有五趣。故問何故名阿素洛。答素洛是天。彼非天。故名阿素洛。復次世界初成時。諸阿素洛先住蘇迷盧頂。後三十三天。偏妙高山頂。次第而住。彼極瞋恚。卽便退下。然諸天衆咸指之言。此非我類。此非我類。由斯展轉。名非同類。復形不端正。故名非端正。

問諸阿素洛退住何處。有說妙高山中有空缺處。如覆寶器。其中有城。是彼所住。問何故經說阿素洛云。我所住海同一鹹味。答若彼所部村落。住鹹海中。而阿素洛王住彼山內。有說大鹹海中。於金輪上。有大金臺。廣各五百由旬。臺上有城。是彼所住。云々。如三十三天。帝釋爲主。諸阿素洛。毘摩質怛羅爲主。

問阿素洛其形云何。答其形上立。問語言云何。答皆作聖語。問諸阿素洛。何趣所攝。有說。是天趣所說。然以諂曲所覆故。不能入正性離生。是鬼趣攝。問其事云何。答若佛爲其說四念住。彼作是念。佛爲我等說四念住。必爲諸天說五念住。若佛爲說三十七助道法。彼作是念。佛爲我等說三十七。爲諸天說三十八。以爲如是諂曲心所覆故。（此說に依て考ふるに、阿素洛を舊說には、天趣に攝せるは、鬼趣に攝せるは、佛者の所說なり、斯て佛祖が、阿素洛に說法するを、

然る諂曲心を起すと云ふ說は、また例の幻談なること、云も更なり。）問若爾。何故經。說帝釋語毘摩質怛羅。阿素洛王言。汝本是此處天。答帝釋應言汝本是此處鬼。而言天者。以尊敬婦公故。作此愛語。又令設芝聞生歡喜。

問若是鬼者。何以與諸天交親耶。答諸天貪美色故不爲族姓。如設芝。阿素洛女端正無比。是故帝釋納以爲妻。

問何以復能與天鬪戰。答亦有劣者。與勝者共諍。如奴與主鬪狗與人鬪。

問亦有人所承事以爲天者。如筏粟達那神。旃稚迦神。旃荼履迦神。布刺拏跋達羅神。摩尼跋達羅神。訶利底神。末度塞建陀神等。爲是天趣爲鬼趣耶。答被是天趣。問若爾。何故奪人精氣。亦斷人命。受人祠祀耶。答彼無是事。但彼所領鬼神。有奪人精氣等事。彼是鬼趣。依地住神。如鳩畔茶。藥叉。羅刹娑。羯吒布怛那等。皆鬼趣攝。若緊捺落。畢舍遮。醯盧索迦婆路尼折羅頗勒窶羅等。皆旁生趣攝彼形雖上立而猶有傍生相。謂或有耳尖。或有戴角。或執險杖。或作諸鳥獸頭。或作旁生蹄。具是故皆是旁生趣攝。云々。

印度藏志卷之八稿

大壑　平篤胤撰述
男　平田銕胤　同
孫　同　延胤　同
門人　井原正孝　校

㈠大千世界品　第五

他化自在天上。初禪有大梵天宮。大梵天上。第二禪。有光音天宮。光音天上第三禪。有徧淨天宮。徧淨天上第四禪。有色究竟天宮。是爲色界也。

三藏法數に。初禪三天。一梵衆天。衆猶民也。(此天是、初禪天主之民衆也、)二梵輔天輔佐也。(此天是、初禪天主之輔佐臣僚也、)三大梵天。謂此天是初禪天之主也。名尸棄。(華言云火、)主領大世。世界也。梵淨也。以無染欲。とあり。(梵の事は、なほ前品婆羅門の下に、委く註せるを見べし、)さて此の天より。初禪。二禪三禪四禪と號たる由は。往古の梵志等が。修行の漸々に積る。位次の標に設けたる稱なるを。佛祖も。梵行を本據として。入り立る故に。其の法にも。此を第一と用ひたるなり。(此の事も前品の註に、委く言へるが如し、)三藏法數に。禪梵語具云禪那。華言靜慮。謂既憑弘誓。利益衆生。則當進修深廣大行。然深廣之行。莫若禪定。言禪則一切皆攝とあり。(或は、一翻思惟修、一翻定、思惟修者、思惟是籌量之念、修是專心研習之名、定者、名默靜、行人離散求靜など有るも、同じ意なり、)また同書に。次第定を載して。人若入禪時。智慧深利。能從初禪。又入二禪。如是次第而入。心々相續不生異念。無間無雜。定者攝心不亂也。と云ひ。初禪定。謂人修禪定。離欲界惡不善法。有覺有觀。離生喜樂。定觀均齊。其心次第而入無有雜念也。(有覺有觀者、初心在緣曰覺、細心分別禪味曰觀、即是初禪之定相、離生喜樂者、慶悅之心名爲喜、恬淡之心名爲樂、初禪既離欲界惡不善法、故生此喜樂也、定觀均齊者、觀即是慧、所謂定慧平等也、)と言へり。㈡第二禪光音天は。三藏法數に。二禪三天。一小光天。(此天光明少故、)二無量光天。(此天光明增勝、無限量故、)三光音天。謂此天。以光明爲

語音故にとあり。(此の天を、また晃、口天とも、書等に見えたり、)また同書に。二禪定。謂人修禪定。從初禪入二禪時。一心無覺無觀。定生喜樂。其心次第而入。無有雜念間隔也。(無覺無觀者、既入二禪、即離初禪覺觀動散也、定生喜樂者、既無覺觀、攝心在定、則生音樂、此即二禪之定相也、)と言へり。〇第三禪徧淨天は。三藏法數に。三禪三天。一少淨天。(此天意識樂受、淸淨故、)二無量淨天。(此天淨勝於前、不可量、故、)三徧淨天。謂此天樂受最勝淨周徧故とあり。(本書長阿含閻浮洲品に、徧淨天と、色究竟天との間に、果實天、此の天を、また淨居天とも、書等に見えたり、)また同書に。三禪定。謂人修禪定。從二禪入三禪時。離喜行捨而受身樂。唯聖人能說。而復捨念行樂。其心次第而入。無有雜念間隔也。(離喜行捨者、謂厭離二禪大喜動散、攝心不受也、受身樂者、既離二禪之喜、而身受三禪之樂也、聖人能說者、此樂極勝、超過一切之樂、非凡夫之所知也、捨念行樂者、謂能捨二禪之喜念、而行三禪之樂也、)と言へり。

〇第四禪色究竟天は。三藏法數に。四禪九天。一無雲天。(以前諸天、空居依雲住、此天在雲之上、居無雲之首故、號無雲、)二福生天。(此天修勝福力、而生其中、從因得名故、)三廣果天。(此天果報廣大、無能勝故、)四無想天。(此天、一期果報心想不行故一期者、謂從生至死也、)五無煩天。(此天離欲界苦及色界樂、苦樂兩滅無煩惱故、)六無熱天。(此天研究心境、無依無處、淸涼自在無熱惱故、)七善見天。(此天妙見十方世界、圓澄無塵垢故、)八善現天。(此天空無障礙、精見現前故、)九色究竟天。謂此天於諸塵幾微之處。研窮究竟故。とあり。(此の天を、また長阿含に、阿迦尼吒天とも、果實天とも云へり、名義集に、或云阿迦尼沙、此云質礙究竟、即ち色究竟天也と云へり、閻浮洲品、忉利天品共に、徧淨天と、色究竟天との間に、果實天、無想天宮、無造天宮、無熱天宮、善見天宮、天善見天宮ありて、各々過ること、由旬一倍とあり、また忉利天品の一所には、色界衆生有二十二種とて、梵身天、梵輔天、梵衆天、大梵天、光天、小光天、無量光

天、光音天、淨天、少淨天、無量淨天、徧淨天、嚴飾天、小嚴飾天、無量嚴飾天、嚴飾果實、無想天、無造天、無熱天、善見天、大善見天、阿迦尼吒天とあり、名も次第も違へり、然れど四禪共に、其大天は違はねば、舊説はたゞ此の四大天のみ也しを、小天は例の出る儘の説法なるを、聞止たる物ゆゑに、さる紛れは有なるべし、故今は四禪に、各々一天の名を、本文に擧つ、其は涅槃の處の次第に、よく符へればなり、）また同書に。四禪の定。謂人修禪定。從三禪入四禪時。斷喜樂。故不喜不樂。其心次第而入。無有雜念間隔也。（斷喜樂者、謂斷二禪之喜、及三禪之樂也、不喜不樂者、謂心無善惡、寂然平等、卽是四禪之定想也、）と言へり。（）是爲色界也とは。初禪より第四禪まで。四天を色界と號くる由なり。三藏法數に。色卽色質。謂雖離欲界穢惡之色。而有清淨之色。始從初禪梵天。終至色究竟天。凡有一十八天。竝無女形。亦無欲染。皆是化生。尚有色質。故名色界。とあり。

色究竟天上。有空處天。空處天上有識處天。識處天上有無所有處天。無所有處天上。有非想非々想處天。是爲無色界。此三界也

空處天は。三藏法數に。空處天謂。此天厭於色身繫縛。不得自在。心緣虛空。與無色相應。住空處故とあり。（此の天を、また空智天とも、空處智天とも、書等に見えたり、）また同書に。空處定謂。人修禪定。從色界入無色界。則滅一切色相。不念種々異相。入無邊虛空處。其心次第而入無有雜念間隔也。（滅一切色相者、謂滅根境可見可對一切色相也、既得四禪定已、猶厭色界色質爲礙、不得自在、於是心求出離、滅一切色相、而修虛空處定、心與虛空之法相應、則不念種々異相也）と言へり。（）識處天は。三藏法數に。識處天謂。此天厭虛空無邊。於是卽捨虛空。轉心緣識。以識爲處故とあり。（此の天を、また識智天とも、識處智天とも、識無邊處天とも、書等に見えたり、）また同書に。識處定謂。人修禪定。既得空處定。已心緣虛空。虛空無邊。緣多則散。能破於定。卽捨虛空。轉心緣識。心與識法相應。則過一切無邊虛空處。入一切

無邊識處。其心次第而入。無有雜念間隔也。（過一切無邊虚空處者、既入識處、則超過虚空處也。）と言へり。（無所有處天は。三藏法數に。無所有處天。謂此天厭於識處無邊。於是捨識。入無所有處。無所有處者。即不緣一切內外境界也。亦名不用處。謂不用前空處識處故とあり。（此の天を、また無所有處智天とも、無所有智天とも、書等に見えたり、）また同書に。無所有處定謂。人修禪定。既得識處定。已三世心識無量無邊。緣多則散能破於定。即捨所緣之識。轉心緣無所有處。其心次第而入。無有雜念間隔也。（內外境者、內即識處、外即虚空處也、三世者、過去現在未來也、）と言へり。（非想非々想處天は三藏法數に。非想非々想處天。謂此天居無色界之極頂。非無所有處之無想。非識處之有想故とあり。（此の天を、また有想無想智天とも、阿含に見えたり、また同經忉利天品に、無色界衆生有四種、空智天、識智天、無所有智天、有想無想智天、ともいへり、）また同書に。非想非々想定謂。人修禪定。既得無所有處定。已深知無想處。如癡。有想處如瘂

如瘖。即捨無所有處。緣念非有想。非無想之法。其心次第而入。無有雜念間隔也。（如癡者、譬無心想也、如瘂如瘖者、有痛即覺、譬有心想也、）と言へり。（是爲無色界とは。空處天より。非想非々想處天まで。四天を。無色界と號くる由なり。三藏法數に。無色界。謂但有心識。而無色質也　始從空處。終至非想非々想處。凡有四天。但有受想行識四心。而無形質。故名無色界とあり。欲界の六天。次に色界四禪の四天。（但し四天と云ふと雖も、そを細に區別すれば、初禪に三天、二禪に三天、三禪に三天、四禪に九天、凡ては十八天なり）無色界の四天。凡て十四天なり。此に色界の小天。十四を合せて。天台四教儀に。二十八天を云へり。（此に須彌山三階道の三天、また日天月天星宿天をも計へて、云ふことも有り、但し長阿含にては、欲界六天、魔天、色界二十二天、無色界四天、凡ては三十三天なり、）此三界也とは。謂ゆる欲界の五衆生界。および諸天。色界無色界の。諸天の限りを稱ふなり。三藏法數に。界は限也。別也。謂三界分限各別不同。故名界也

とあり。

表紙ウラニ、佛法ヲ信シテ魔王トナル法數二十三ノ二ウ、梵王ノ名尸棄ノコト栗十二ノ十一オ、法數三十二ノ十九ウ八定初禪ヨリ非想天マデ也、梵志ノ天ヲ云ハ初禪大梵王ト忉利天ノミ、如意珠二十ノ十オ四十七ノ二十二ウ、四十八年ト云コト二十五ノ十オ、六種震動二十五ノ七ウ法數ニモアリ、辟支佛二十一ノ十ウ二十七ノ七ウ、八智論八犍度三十八ノ五ウ、分衞十九ノ九ウ六十四ノ十三ウ、四種花五ノ十二オ

一日月周二行四天下一。光明所レ照。如レ是千世界。是爲二小千世界一。如レ是千世界。是爲二中千世界一。如レ是千世界。是爲二大千世界一。如レ是世界周帀成敗。衆生所居名二一佛刹一。

上に說たる三界を。千世界合せて。是を小千世界と云ひ。其の小千世界を。千世界にては。千億世界なるを。中千世界といひ。其の中千世界を。千世界にては。萬億世界なるを。大千世界と云ふ由なり。（然て其の一世界ごとに、須彌山四天下日月を始め、諸大王大梵王も、同じ狀に具はれるよし、本經に委く說たり、然れば日月も何も、萬億ありと云ふ意なること知るべし、）偖その萬億世界の周帀。衆生の所居を攝て。一佛刹と名けて。佛祖自そを掌握して。成敗せしむる由なるは。（此事次品にて、明に知られたり、其處に註ふを待て見るべし、）古往今來唯有一人の幻妄。いとも忌しき邪讒言にて。增壹阿含高幢品に。我今於二三千大千刹土中一。最尊最上無二能及者一。と說るは是なり。（なほ此の意ばへの語、いと數多ありて、今悉く討ふべくも非ず、三千大千刹土と云ふは、小千世界、中千世界、大千世界を總て稱ふ語にて、實には大千世界を云ふ語なり、大論に、三千大千世界名二一世界一、一時起一時滅如レ是等十方、如二恒河沙等一世界是一佛世界、如レ是一佛世界數、如二恒河沙等一世界、是一佛世界海如レ是佛世界數、如二十方恒河沙一世界、是一佛世界種、如是世界種、十方無量、是名二一佛世界一於二一切世界中一、取二如レ是分一是名二一佛所度之分一とあり、次々に其妄誕を、倍增せる趣見るべし、）諸比丘等が。此の說を聞て。歡喜奉行せりと有るは。早く佛祖は幻化られて在しかば。論

ふに足らねど。本朝の人すらに。信受奉行するが。今の世にも多く。かゝる讒語の聲に吠つゝ。皇神たちを蔑如するが多かるは。是また忌々しき事なりかし。(然る大言は、吐散して在れど、此老終には、一工師の子に毒殺せられて、悪禽に生を轉じ、その妄談の神罰に、三熱の苦するを、可笑としも思ひ知りたる人の、世に有りや無しや。)いでや已試に。一拳ふり出して。次々に其の大千佛刹土を。打碎きて見ばや。其はまづ蘇迷盧山の事より論むに。上に引りし。十二天儀軌の文に。大梵王者。上天之主衆生之父也。天帝釋者。地居之主云々。(なほ此の全文は、下に引くを見べし。)また淨名疏にも。帝釋是地居天主。梵王是娑婆世界主と。相對へたるに因りて案ふに。大梵王は。正に上天の主なる故に。天と云へり。帝釋は地居の主と云へば。天とは稱まじきを。大梵天王に準へ尊みて。天と稱せること知られたり。(例を云はゞ、本朝の古へにも、天つ神ならぬを、天神に准へて、天某命など申せるもいと多かり、今も其の類と知べし。)然れば其住處をも。天とは稱まじきを。是も尊稱して。忉利天とは稱なりけり。(是また、漢にも倭にも、天朝など云ふを始め、宮都を天に准へて稱せる例、いと多く、今計ふべくも非ず。)そは蘇迷盧山の根基。大地に連たる山なれば。元より大地と別物ならず。其頂上。謂ゆる忉利天。よし何ほど高くとも。天に非ざる事言ふも更なり。故其處に住する帝釋を。地居之主。とは傳へ來つるなり。爰に我が友。圓明院行智が説に。蘇迷盧は。梵文に[illegible]と書たれば。「蘇迷盧と唱ふべし。然して」此は。統領の義には非ざるか。(梵語の中に、本朝の語と相同じきがあり、其の一二を云はゞ、天をソラ、長をナガ、名をナ、上をウハ、下をシタ、熱をヌクタなど云ふ類、今計ふるに暇あらず。)然るは世界の最中に在りて。世界を統御し給ふ神の。住する天なる故に。號たるにやと言へり。此はいと珍しき説なり。然れども。猶天と見たる事の遺憾ければ。今己が忉利天を。なほ地居ぞと云へる説と合せて。猶考ふるに。彼儀軌に。諸天降臨の事を云へる所に。帝釋天。與二諸蘇迷盧等一。一切諸山所攝天衆等一。俱來入二壇場一。ともあり。此文を

察れば。蘇迷盧といふ。一類の物なること著明なり。(この儀軌の譯者、不空三藏と云しは、唐の代に始めて、秘密部の經軌どもを、齎傳へ來れる、謂ゆる三三藏の中の一梵僧にて、唐王が命を受て、此儀軌を譯しつれど、蘇迷盧に當べき唐語を思ひ得ざりし故に、梵語のまゝにて措たるなり、其は舊譯に、蘇迷盧山を、妙高山と譯せるが、當ざるを思ひてなるべし、猶言はゞ本つ書に、此の文の下に、梵王與諸靜慮一切諸天、俱來入壇場、とある靜慮は、梵本に決めて、婆羅賀摩とも、沒藍摩とも、梵とも有りけむを、此は舊に、靜慮と譯せるが當れる故に、用ひたりと見ゆるに、思ひ合せて辨ふべし、梵を靜慮と譯せるは、當れる譯なること、既に云へり。)蘇迷盧山は。諸大神妙天之所居止と。上に採れる本文に見えたれば。諸蘇迷盧等とは。諸の皇神等。といふ義に聞えたり。然れば彼の山を。妙高と翻せるは、都に當ざる譯なること知るべし。(強ひて此の山の名をば、しか翻するとも、今引く文の蘇迷盧等を、妙高と譯しては更に叶ふまじき物をや、凡て佛籍どもに、當らざる翻譯の多きこと、此の一事をもても悟りつべし、大抵は佛意に邊つらひ、犬糞を、神丹に賣付むと、高妙に取成たる翻譯ぞ多かる、)さて佛祖が。謂ゆる一世界は。次品に論ふ如く。正に此の全地の事なるが。此の全地の事は。西洋人の。次々に考たる精說もありて本朝の古傳に符合し。偏執の癡人ならずは。疑ひ有まじく判然たるを。普ねく其の全地を察するに。北方に當りて。是ぞ謂ゆる蘇迷盧山ならむと。所思ゆる山は有ること無れば。此は疑なく。本朝の事を。いと上つ世に。訛り傳へたる山名にぞ有りける。(そは大地は、元より圓體にして、北極は其元首たるに、本朝は、北極の出地三十度より、四十度の間に在り、印度は、皇國より、二十度餘り、南に低りて在れば、彼の地より皇國を想へば、天山とも、天山と稱すべき高地なり、但し此は、今の當る度量を以て云ふなれど、世の初めは、其在所、直に北極の邊に在つ、と覺ゆる考へも有れば、殊に高地なりき、)然るは我が天皇の御大祖。邇々藝命を。皇美麻命とも。天皇命とも。唯に須米良とも申せるより始めて。世々の天皇をしか

申し。御國を皇御國といひて。八百萬皇神を治め祝ひて。萬國を統御すべき。地居の大主に御坐せば。彼の邇々藝命の御事を。いと上古に。傳聞し奉れるを訛り。實の御名を失ひて。釋提婆因陀羅と申し傳へ。(釋は直、提婆は天、因陀羅は帝と譯して、直天帝といふ義なること、上に委く云へるを見るべし。)その御坐す處を。蘇迷盧山と云ひ。御國は。神の本つ國なる事などより。諸の大神妙天之所ニ居止一。なども申し傳へ。八百萬の皇神等を。主治め給ふ事を。諸の蘇迷盧等を從ふるなど云ひ。天降り給ふ時の供奉に。三十二神從へりと云ふ。一傳も有るを。再訛り傳へしより。忉利天の譯すれば。三十三天といふ天名興り。終には大論なる。憍尸迦と云し婆羅門が。須彌山の頂に生れて。帝釋となり。三十二人の輔臣を合して。三十三天と名くとふ因縁をも。妄說せると所思たり。(また此によりて思ふに、諸の蘇迷盧等といふは、謂ゆる三十二人の輔臣をいひて、實には、供奉三十二神の事をいへる、古傳ならむも叉知べからず、)但し憍尸迦といふ名は。古傳と聞ゆ。其は法華の玄

賛に。天帝字憍尸迦云ニ瞿兒一。とある瞿は。繭の俗字にて。字書に。繭與レ襺同。袍衣也とあり。此は邇々藝命の天降坐る時は。いと幼稚く坐しかば。眞牀覆衾と云ふに裹み奉りて。謂ゆる襁袍の御有趣なるを。諸神の守護して。降坐るに由有りて聞え。(また倶舍論の惠暉が註には、憍尸迦此云ニ靈兒一。ともあるは、彼の天皇命の、靈異なる神威の御坐るに、由ありて、聞ゆるをも思ふべし、何方の譯に從ひても、兒てふ語は離るゝ事なし、然れば憍尸迦といふ名は、古傳なること疑ひなし。)また彼の儀軌に。天帝釋者地居之主。注ニ記衆生所レ作善惡一。(天皇の大宮所は、葦原の中つ國と定め給へれど、實には萬國を攝治すべき、元主に坐ませば、萬國の王等が、某々に持分け治むる、人種の善惡をも、彼の王等が奏し出むを、總ねて聞食さでは有まじき、御由緒なるを、幽に注記し給ふ如く、訛り傳へ奉れるなり、上第口節に引たる文に、四天王、月々の三齋日に、天下を案行して、萬民の善惡を觀察して、天帝に奏すと云へる、即ち是なり、なほ彼處に說を見べし、)此天喜時。

國土安穩人民不レ亂。此天瞋時。刀兵相戰。地居諸王皆悉不レ安。と言ひ。(此天喜時云々とは、皇御國の立たる故に、萬國も立ち、皇美麻邇々藝命の、此の中つ國を治看せる故に、萬國にも各々に國主あり、其道理は、神典に明白に見ゆれば、其王ども、邇々藝命の喜び給ふべく、人種を安撫養育すれば、倍々に國土は安穩にて、人民の亂れざるべきこと、此天瞋則云々、とある文に合せて辨ふべし、地居諸王皆不レ安、と云へるは、諸王の立たるは、皇美麻命の、元主と定まり給へるに因る事なればなり、本つ書の始めに、諸國王及諸人民、以レ非治レ世、捨二正法一尒時、諸天皆生二愁憂一愁憂卽過便生二瞋怒一とあるは、能くも神祇の情況を知れる說なり、此天喜時云々、此天瞋時云々、と云へる謂、こゝを以て辨ふべし、此は既にも言へりき、)また求願の所に。若求二息災一。若求二官位一。或欲レ止二刀兵一。帝釋爲レ首とも云へるは。邇々藝命の。是の中國知食すと。天降り給ふ時に。天照大御神の大詔命に。爲二安國一平然介知看。と勅給へる御語の中に。含蓄せる事どもにて。元より我が天皇命の。御業にし有れば。其由緒を。遠音に聞傳へ奉りて。其御功德を。遙にかくは祈願奉れるなり。(然るに中世、しましが間は、反まに、此方より、彼處を拜み給へりし御世も有し事の、御紀どもにも見え、今もなほ其有趣の殘れるを、最あかず口惜くて、慷慨の心止む時なく、若狹なる、潮干に見えぬ沖の石ならねども、人こそ知らね、硯の海に淚の乾く間もなく、かき諄きかき歎けど、歎きは果ず諄きも果ずて、生涯をかくしれ態してや果すらむと我ながらだに哀にこそ阿那あはれ)さて蘇迷盧山を。印度の北方に在と云ふは。阿含を始め。佛籍の常なるに。また彼の儀軌に。諸天の來位を云へる所に。東方帝釋天とあり。然れば彼の國の舊傳には。蘇迷盧山を。その國の東北の方に在り。と云へると聞えて。是また天皇が御國の方位に。よく符へり。(若もと、北方に在りと決したる傳へならむには、其の處なる帝釋を、東方の來位と定むべき由ありなむや、)また是に就て思ふに。謂ゆる四天王といふ神等は。天手力雄命の古說を傳へたりと所思ゆ。しか思ふ

由は。かの手力雄命は。天日大御神の。天石屋に幽居坐る時に。其岩戸を開給へる功績に依りて。亦名を。天石戸別命とも申し。大御神の。新宮の御門を守護し給へる後に。彼の邇々藝命の。天降坐すとき。供奉神の中に。武神の長として降らせる。天押日命と申すは。即ち此の神にて。武道を以て。天皇命を守護し給へり。此の由緒に依りて。此の神の神靈を。櫛石窓。豐石窓命と稱して。神宮また皇宮の。四至の御門に祭りて。惡鬼を避給ふ事の。彼の四天王といふ神等の。蘇迷廬山の四埵に在りて。諸鬼神を司め從へ。天帝を守護すと云ふ趣に。思ひ合さるればなり。（若この考へ當りなば、坂上田村丸の、多聞天王を信じて、志貴に建立し、其驗を蒙りて、武勇絶倫なりし、源義經の、鞍馬山に成長りて、軍戰の道に卓越たりし、楠正成は、其の父志貴の多聞天王に祈りて、設たる子なるに、軍旅の事に拔群にて、何れも皇軍に功有りしなどを思ふに、名こそ多聞天王とも、何とも云はめ、その神實は、手力雄の神に坐せば、其驗さも有べき事にこそ、神界には、然る意ばへの事いと多かり、但し厩戸皇子の、守屋大連と軍し給へる時に、四天王の像を作りて、物し給へる時にも、驗ありて、勝給へる事は、四天王を祈れる始なるが、此は別に論あり、第口品に云を見べし。）さて彼の儀軌に。多聞天王の事のみ有りて。餘の三天王の名のなきは。古説に。四天王とは唱へ來つゝも。實には一神なる故に。一名のみ傳へたる物なり。（印度は更なり、唐戎にも、日本にも、此の神の靈異ありし事おほく、經論どもにも、其の名高く聞えたり、）然れども。彼の三天王の中に。增長天王と云は。古傳に由緣なきに非ず。そは增長（頭注云。華嚴音義に、摩尼正云ニ末尼末一、謂末羅此云レ垢也、尼云レ離也、言此寶光淨、不ニ爲レ垢穢所一レ染也、又云、摩尼、此云ニ增長一、謂此寶處必增ニ其威德一、舊翻爲ニ如意隨意等一、逐義譯也、）といふ譯語にこそ信られね。其梵語を。毘樓勒といひて。蘇迷廬山の南。流離埵を守る王なりと言ふが。邇々藝命の供奉神の中なる。天明玉命とも。玉祖命とも申す神の。始めて色々の珠を作れる神なるに。緣ありて聞ゆればなり。（此

の神の作らせる珠玉の、神機妙々なること、中々に此に云ひ得べくも非ねば、余が古史傳に就て見るべし、）其は大寳積經音義に。吠瑠璃寳名也。或作琉璃。天生寳。青綠色瑩徹光明。非是人間鍊石煙火之中所成瑠璃也と云ひ。攝大乘論の音義に。瑠璃吠瑠璃也。亦云毘瑠璃。又言毘頭棃。從山爲名。謂遠山寳。遠山卽須彌山也。此寳青色。非煙焔所能鎔鑄。唯鬼神有通力者能破之とあり。（名義集七寳篇に、古字作流離。後人方加玉、と云へり、なほ名義集に、西域有山、去波羅奈城不遠、山出此寳、因以名不遠焉、といふ一說をも擧たれど此は華嚴音義に據たる說にて今と別なり、其は本草綱目に、青琅玕の下に、西域記を引て、天竺國出此物、蘇恭云、是琉璃之類也、と云へるにて知べし、）是らの說を察れば。眞の琉璃てふ玉は。須彌山より出たる物なる故に。天生の寳とは言へり。須彌山は。卽ち皇國なれば。上古は印度にも。皇國の玉を傳へて。珍重せる事も有りつ。と知られたり。（華嚴經音義に、因陀羅尼羅、因陀羅帝也、主也、尼羅青也、青色寳中最尊也、故曰青主也と見え、攝大乘論の音義に、帝釋青梵言因陀羅尼羅目多、是帝釋寳、以其最勝故、稱帝釋青、目多此云珠也とも解深密經音義に大青梵言摩訶尼羅、此云大青、亦是帝釋所用莊嚴寳也、ともあり、○行智云く、今の世に、石を火に煉りて、吹作る玉を、ビードロと云ふは、毘頭棃の訛言にて、印度語ならむと言へり、今案ずるに、本草綱目に、諸書を引て、琉璃火齊、與火珠同名とあり、火珠は時珍說に、日中以艾承之、則得火用灸艾炷不傷人、と云へる珠にて、謂ゆる火取玉なり、總じて珠玉の瑩徹にして、凸なるは、皆よく火を取る故に、玉を總て、比登棃と云し事も有けむを傳聞し、語の始めを濁りて、毘頭棃、また毘流離など訛れる物か、然るを今、此間にても、始を濁りて云ふは、印度語に倣へるなり、皇國に元より、始を濁る語の無ればなり、猶玉のこと、古史傳に註るを見るべし、）彼此うち合せて案へば。增長天王は。由なきに非ざれど。東西二天王の名は。疑なく佛祖が妄作にて。彼の妄說せる東西兩洲に配して、四天王といふ古說の

數に。合せたる物にぞ有りける。(故是を以て、この二天王におきては、少かも、古傳に徴し察べき事とては無きなり)抑皇國は。天神地祇の宗國。また萬邦の統領たる勝地にして。天皇は。天神之御子に坐まし。萬國の元君に御坐せば。萬邦の蕃人ども。悉く統領天國と申し。天皇をば。天帝とも天帝と稱へ奉りて。遙拜し奉るべき道理は。是を以ても悟りつべし。印度には最古く。此道理の本を傳聞して。蘇迷盧山は。諸の大神妙天たちの。居止する處と申し傳へ。地居の大主の宮所。と崇め來つるを。(また西戎籍にも、史記を始め、東北は神明の舍なり、など云ひて畏めること、往々見えたり、其も意ばへ同じけれど、印度の如くは精しからず)穴悲きかも。穴惜きかも　佛祖が搔亂せる妄誕に。殆ど二千二百年餘り。其の道理のかき暗されて在けるに。隱顯また時ありて。千年の闇穴も。一把の手火に。其の暗の忽然と昭々たる如く成ぬる事は。我もし前生あらば。何なる天乘をか修して在りけむ。辱なく是の忉利天帝の。皇御國に生れ出て。其福報に。眞の古傳を窺ひ知りて。なほ萬國の古傳をさへに。徴察ばやと。鮑魚の市肆に入るの思ひに。姑く此の梵學定にも入たるを。然すがに。諸大神妙天の。哀となむ照覽ませる。恩賴に依りてぞ。かくは思ひ得たる也けり。(然れば佛祖が、天帝釋の古き因緣を說る、また其の許へ來降して、左ありき右りき、など言へる說法ども、一つも眞の事實なきこと、是をもて辨ふべし、努々その幻妄に、煽惑せらるゝこと勿れ)然るは蘇迷盧山。また忉利天の說は。梵志ら舊く。其先祖梵天の古說を守り傳へて。天帝を。地居の大主と崇敬しつゝも。見ざる皇國の事なれば。天と稱せる語より。上天別界の如く心得て。しか語り繼しを。(そは末に引く、金七十論に、如二上天、帝釋、北欝單越等一、依二聖言一得レ解と云る聖言は、梵天の古說を稱せるにて知べし)佛祖その記を竊しつれど。豈知むや。皇御國の事なりとは。一頓に。天界をいふと心得たる故に。例の己れ一人。かの天眼を以て見知れる貌に。種々妄說せる物なり。(例を云はゞ、今の世にも、なほ癡人多く、天竺と云ふを訛りて、天ヂョクと言ひ、其は上天に在る

國にて、諸天諸佛の住する所、と思へるが多かるを、彼賣僧ども、然る痴人の多かるを幸甚として、信にさる趣に說法して、愚人を誑かすが多かり、印度人の聞むに、いかに可笑しからざらめや、佛祖はやがて、其賣僧の法を始めたる人にて、忉利天上なる事ども、妄說せるを、皇國人の其を聞て、忉利天と云へは、此の地には非じ、と得悟らず有むは、譬へば印度人の、天竺と云を、天上の事ぞと思ひたらむが如し、いと可笑くこそ〕さて謂ゆる忉利天。やがて此の皇國なる事を知り。此の天國の古傳に本據し學べる。古學の天眼を以て。普く世界を見度し。實により書によりて。六合の外は存して論せず。忉利天の上に。依空而居といふ。焔摩天より次々。欲界の四天。（欲界天は、四王天より、他化自在天までを、佛書に、欲界六天と云へり、四王天忉利天は、上に論へる如く地居なれば、此を除ては四天なり〕色界四禪の十八天。無色界の四天と。合せて。二十六天を論ずるに。色界四禪の中なる小天十四は。別に重々せるに非ず。即ち四禪の中に攝すれば。其を除て。欲界の四天。

（焔摩、兜率、化樂、他化自在の四天なり〕色界の四禪天。（大梵、光音、徧淨、色究竟の四天なり〕無色界の四天。（空處、識處、無所有處、非想非々想處の四天なり〕合せて十二重の天名あり。阿含に色究竟天までは。天宮と云て。無色界の四天に宮と云ず（俱舍口）色界四天までの事は。佛說に往々言へる事も有れど。其みな妄誕にて。實は上にも言へる如く。外道等が次々に。其行法を。募りもて行く位次の標に。設けたる寓號にぞ有ける。（忉利天品に、無色界の諸天まで、其壽量をも說き、增壹阿含に、舍利弗が滅度せる時に、無色界天の淚下りて、春雨の如しと云ふことも見たれど、無色と云へば、無形なること言も更なり、然るに淚の下ること有りなむや、豈壽量ありなむや、前後の合ざる說法なり、また華嚴經に、菩薩鼻根、聞無色天宮殿之香と有り、中陰經に、如來至無色界中、諸天禮拜など有るを、佛祖統紀に引き、淨名疏に、不了義明無色界無色、若了義教、明無色有色と有るをも合せて、無色界の色も、了義の者には見ゆる由云へれど、例の賣僧說なり、また華嚴に、

其宮殿の事を云へれど、彼の經は謂ゆる大乘にて、後世に僞說せるにて、論ふに足らず、殊に阿含に、無色界の宮殿をば說ざる物をや、)そは前品外道の所に。其の大端を記せる如く。欲界の六天と云は。勦沙婆仙と云し者の。立始たるにて。其の中に。四王天と忉利天とは。蘇迷盧山頂の古傳に依りて。二重に立たる。地居の天名なるが。舎に依りて居す。と云ふ四天は。古名を拾ひ。別に杜撰を構へて設たるなり。(此の由は前品に、此の仙が立法を論へる中に、修慧修六天行為六、と云へるに、深く心を著て辨ふべし、六天は此仙が設なること、更に疑なき物なり。)さて焔摩天と云は。上に論へる。冥府の主宰たる。焔摩天の古名を拾ひ翻案して。時々唱快樂故。言善時。といふ義を妄說して。忉利天に一層のぼせ(また此時々、快樂を唱ふると云說に本づきて、餤摩王の時々、三熱の苦を受け、また快樂を口むると云ふ妄說を、佛祖が作り出たるなり。)兜率天と云ふは。彼の仙が新作の天名にて。焔摩天に一層上せて。於五欲境知止足。故言知足とふ說を作り(また此の止足を知ると云說に依りて、一生補處の菩薩の王たる所、と云ふ說を佛祖作れり。)化自在天と云は。大梵天の異名なる。大自在天を翻案して。化五欲而自化樂。とふ義を妄說して。化の字を冠て。兜率天に一層のぼせ。他化自在天と云は。其上をまた翻案して。假他所化以為己樂。と云ふ義を妄說して。化自在天に一層上せて。他の字を冠き。此を欲界天の至極。と立たる物なり。(他化自在天と云ふ名は、前にまづ、化自在天を妄說して、後に立たる天名なること著し、そは他化自在といふ天名、元より有むには、化自在とて、其下に在とは立まじき、加上說の勢なればなり、然れば他化自在と云ふ名は、勦娑婆仙が、始めて號たる天名にぞ有りける、此の天やがて大自在天なること、下に引く法華經序品注、淨名疏、三藏法數などに、大自在天は、即ち第六他化自在天なりと云ひ、他化自在天は、欲界頂天の魔王是なり、など有るにて知べし、但し此を魔王と云ふ由は、下に辨ふべし。)然して後に。富蘭那と云ひし者。その欲界の說を破り。殊に高上なる說を作りて。色界の諸天を立

たるが。初禪大梵天と云は。大自在天と同天界なるを。別に一天界として。勒婆婆が謂ゆる。他化自在天に一層のぼせ。二禪光音天と云ふは。是また大梵自在天の別名なるを。彼天に一層上せて。別に一天界とし。(そは上、四禪天の所に引く、法數に、光音天とは、光明を以て語音と爲すと云ひ、百論の疏に、何故、謂ニ火爲ニ天口ト耶、倶舍論云、諸天口中、有ニ光明ー語言、是火故云ニ天口ーとあるは、梵天の事なるを以て辨へ知るべし、翻譯名義集に、梵音、劫初廓然光音天神降爲ニ人祖ー、宣ニ流梵音ー、故西域記云、詳ニ其文字ー梵天所レ制云々、と云へるはよく叶へり。)三禪徧淨天と云は。是また大梵自在大(頭注云、婆沙論百八十三卷に、有說梵世是世間有情、所ニ尊重ー處、上地諸天亦名爲レ梵)の異名。韋紐天を譯して。徧淨天といふ。其の名を取て。一天界に立て。光音天に一層のぼせ。(大毘盧舍那經住心品疏に、韋紐具云ニ毘瑟紐ー、唐云ニ遍淨ー、大自在天別名也とあり。)四禪色究竟天と云は。大涅槃經音義に、摩醯首羅、此云ニ大自在ー、居ニ色究竟天ー也と有れば。是また梵自在天を本と爲て。其說を作り。徧淨天に一層上せて。立たる天名なり。(猶色究竟天は、大自在天の住所と云こと、數見えたれど、多く引出むこと煩しければ記さず、然るを佛祖統紀などに、色究竟天の上に、摩醯首羅天を別に立て、圖をさへに著はせるは、愚昧の至極と云ふべし、)斯てなほ飽ずや在りけむ。己が立たる。色界四禪の說をも破りて。無色界の說を作り。空處天と云ふを立て。此天厭ニ於色身繫縛ー不レ得ニ自在ー。といふ義。また其禪法をも妄說せるが。猶飽ことを知らず。また此の空處に一層上せて。識處天と云を立て。此天厭ニ虛空無邊ー。卽捨ニ虛空ー緣レ識。以レ識爲レ處。といふ義を立て。其禪法をも妄說せり。(そは前品、外道論の所に引く名義集に、事鈔といふ籍を引て、富蘭那、色空外道、以下用レ色破ニ欲有ー、以レ空破ニ色有ー、謂中空至極上と云へるにて著明なり、是をもて、此を色空外道とは云なり、但し此文に、謂ニ空至極ーと有るに依れば、識處天を立たるは、別人ならむも知るべからず、)さて此富蘭那と云しは。謂ゆる六師外道の一人にて。佛祖と同時に出たる者なるが。其の同時に出

たる。阿羅々仙と云し者。また一機軸を出して。識處天の上を一層して。無所有處天と云を妄想せる。其の說に。此の天厭於識處無邊。捨識入無所有處。といふ義を立て。其禪法をも妄說せるに。此の仙が同時に。鬱陀羅仙と云し者。なほ其に加上して。非想非々想處天と云を忘想して。其說に。此天居無色界之極頂。非無所有處之無想。非識處之有想。といふ義を立て。其禪法をも妄說せり。是ぞ謂ゆる二十八天の究竟なる。（倶舍論の頌に、空無邊等三名、從加行立、非想非々想、昧劣故立名、とある所の疏に空無邊等三名從加行立者謂修定前起加行、位厭色境故、作勝解想、思無邊空、加行成時、名空無邊處、又於加行中厭無邊空、起勝解想、思無邊識、加行成時、名識無邊處、又於加行中、厭無邊識、起勝解想、捨諸所有、寂然而住、加行成時、名無所有處、非想非々想昧劣故立名者、有昧劣想、名非々想、前三無色約加行立、第四非想約當體立、と有をも見べし、皆妄想より加行せる、層上說なること明なり、富永仲基說に、二十八天、以非々想為極、是鬱陀所宗、為度無所有而生于此也、是本上于阿羅、以無所有為極、而無所有、則本上于識處、識處則本上于空處、空處則本上于色界、色界則本上于欲界、皆相加上以成說、其實則漠然、何知其信否、と云へるは、諸天の作者を知ざれど、加上の說は實然ることとなり、其は上に、右諸天の名義を註せる所に引たる、法數の說に、次々其の義を述たるを見て知べし、彼曆象編に、印度所言天者、乃是果報依處而、非謂知卵裏碧璪者、所謂六欲、色、無色等諸天是也、と云るも、短文なれど、其の旨を得たる說なり。）かくて最後に。佛祖起り出て。まづ阿羅々。鬱陀羅二仙人が弟子となりて。其の立法の旨を學び取り。また此に上せむと欲するに。天加上の說を以ては。勝がたき故に。別に大機軸を發して。二十八天の說を。みな網羅して襲ひ取り。悉く元より常在せる諸天。と誣用ひて。なほ雪上に。霜を重ぬる說を加增し。過古六佛の說を作りて。其を宗とし。世尊の稱を吾に歸し。彼の謂ゆる神變力を振ひて。世人を煽惑し。生死を離

る丶行法なる由を讒語して。大千世界の妄說を。大成せる物なり。(此も早く仲基が說に、外道の所說、以二非々想一爲レ極、釋迦文欲レ上二于此一、難下復以二生天一勝上レ之、於レ是上宗二七佛一、而離二生死相一、而加レ之以二大神變力一、而示以二其絕難一レ爲、乃外道服而竺民皈焉、と云るは、實然る說にぞ有ける。)さて右諸天の中に。他化自在天と。大梵天と。同天界なること。上に辨ふる如くなるが。大梵天といふ名にての事實は。阿含に數所に見えて。佛說の趣詳に知るれど。他化自在天と云ふは。名こそ往々見えたれ。事實の說なき故に。その佛說を。如何とも知べき由なきが如し。然れども。阿含外なる經論疏どもに考ふるに。十二天儀軌に。伊邪那天。舊云二摩醯首羅一。唐云二大自在天一。此天喜時。諸天亦歡喜。威光倍增。安穩而住。此天瞋時。魔衆皆現。國土荒亂と見え。(また同軌に、諸天來降の事を云る所にも、伊邪那天、與二諸魔衆一俱來入二此壇一同時受レ供とも云り自在天を魔と云へるに心を著べし、五大院の菩提心義にも大乘論を引て、伊邪那天是第六天主とも云へり、)大毘盧舍那經住心品に大天與二一切樂一者。若虔誠供養、一切諸願皆滿。所謂大梵天。自在天。那羅延天。商羯羅天。黑天。日天。月天。龍尊。毘沙門。閻魔天。閻魔后。自在天后。或天仙大圍陀論師。各々應二善供養一とある(此諸天の中に、黑天の事のみ未云ざれど、其餘の事は、前處々に既に記せれば、今更に云はず、)黑天の疏に。黑天の梵言嚕捺羅と言へる。其の疏註に。因明論を引て。嚕捺羅。是摩醯首羅之化身也。亦名二伊邪那一。是欲界頂伊舍那也。而名二黑天一者。藏記下曰。伊舍那天黑青色。約二身色一爾名也。(また上なる四姓の所に引たる、瑜伽師地論音義に、魯達羅天此云二暴惡一、自在天之別名也とも云へり)妙法蓮華經序品に。大自在天子。とある註に。卽ち第六の他化自在天と云ひ。淨名の疏に。他化自在天。是欲界頂天。卽魔王也と見え。(また佛祖統紀にも、因果經大論などを引て、魔王爲二欲界主一居二欲界頂一と云ひ、法數どもにも、他化自在天卽魔王天也とも見えたり、)攝大乘論の玄應が音義に。天魔梵云二摩羅一。譯云二能障一。爲二修道一作二障礙一也。亦名二煞者一。論中釋二斷慧命一。

故名爲レ魔。常行二放逸一而自害レ身故名レ魔。位處卽第六天主也。名曰二波旬一。此云二惡愛一也（頭注云、法華經音義に、摩羅此云二破壞義一又言二摩卑夜一此云二惡者一云二波旬一訛也、とあり）ともあり。（大寶積經の慧琳が音義に、魔是梵語略也、正梵音麼羅、唐云レ力也、卽他化自在天中魔王、波旬之異名也、與下修二出世法一者上作二留難事一、名爲二麼羅一とあれど、自在天中魔王と云て、自在天神と別物と爲たるは、誤說なり、なほ同音義に、波卑掾梵語、天魔名、相傳誤云二波旬一梵語元无二波旬一、古譯書二陂旬一略也、後人誤書レ旬爲二旬字一、唐云二惡欲一、多二愛欲一故也、とも云り實相般若經音義に、波旬梵語正云二波俾掾一、唐云二惡魔一、秦言二好略一、遂去二卑字一、句字本從レ日、音縣、誤書從日爲レ旬、今驗二梵本一無二巡音一、蓋書寫誤耳とあり、）是らを合せ考ふれば。伊邪那天。摩醯首羅大自在天。嚕捺羅天。大自在天子。他化自在天。第六天魔王。天魔波旬。麼羅波旬など。籍等に散見せるは。悉く大梵王の異名なること著明なり。（なほ大梵王に、異名多きこと、前品四姓の所に、委く註し辨へたるを見て知べし、）さて阿含の佛說に。魔醯首羅てふ名は無れど。大梵天は更なり。他化自在天をも。以前の異道說に從ひて。二つの天界とし。更に天魔とも。魔王とも。魔波旬とも言ひて。最惡き別神ありと爲たるが。不審くて。また更によく察れば。佛法に妨害を爲。と云ふ所にのみ魔と稱し。常は大梵王とも。他化自在天とも云へる故に。別物の如く見ゆる也けり。（但し、長阿含閻浮提品に、於二他化自在天、大梵天中間一、有二魔天宮一、云々と見え、忉利天品の、欲界衆生の數を云へる所に、他化自在天、魔天、梵天と云こと見えたれど、此は阿含を意なく見ては、他化自在天と魔天と、別物の如く見ゆる故に、後人右の意を得ずて、謾に加筆せる物なり、そは其の上下に、諸天の次第を云る所、數有れど、魔宮の入ざるを以て辨ふべし、三災品に、諸天宮の成敗を云へる所にすら、魔宮のことは說ざるをや、然るに起世因本經、樓炭經などに、魔天宮を、別に擧たるは、阿含より後に出來たる經なる故に、彼の加筆に惑ひてなり。故今の本文には取ざるなり、また後の經論疏どもに、摩醯首

羅と魔王と、大梵王と別て、大梵王は三界の天主たり、魔王は欲界頂の主たり、摩醯首羅は、色界頂の主たりと云る故に、佛祖統紀などに色究竟天と、空處天との中間に、摩醯首羅天と云を別に立て、首羅處色界頂、以報勝為主、梵王居大千之中、以統御為主といひ、或は首羅梵王共領大千、猶如君臣同統一國など云へるは、天々重重の說は、元より是れ妄誕にて、元これ一梵王の異名より出たるを、佛祖また論師ども、其は元より知つゝも、己が邪說を強張に張遣せるとしも得知らず、偶に知たるも、謂ゆる護法の念のみ高貢りて在る故に、傍へより其妄說の露れむと爲るを、なほ隱さむと喧つゝ、首を隱せば尾の露れ、尾をまた隱せば、四足の出るなど、見苦しき愚說のみぞ言散しける、是ぞ佛籍の、數十牛に汗するばかり多かる、大概の因緣なりける、然は有れど、其泥上に糞便を塗り、糞便上に、瞿摩夷を抹もて隱さむと、左言ひ右言ふ、佞辨利口の端々に、異道の計とて言破る說のある、其の破說は、大抵論ふにも足らねば、眩惑せられず、異道の計と貶せる

說中に、眞の古說あるを、揣摩して辨別するを、佛書見の眞活眼とは云なり。かく記して後に、大毘婆沙論を見れば、百三卷に、菩薩知修苦行非眞道、已詣菩提樹下結跏趺坐、便發誓言時、大地大海諸山六種震動、如海輕船逐浪高下、乃至他化自在天宮、皆悉震動、魔王驚懾、速出宮、往菩薩所曰、剎帝利子可起此座、菩薩告曰、佛祖が初成道の時に、天地震動せる事を云る處に、其動き他化自在天宮に至れば、魔王驚き、自宮より出て、菩薩の所に至る、菩薩六天に告く、魔王云く、ゝゝ)さて佛祖は。何の因緣によりて。大梵自在天神を。魔と號けて惛めると 是に阿含中に考ふるに。多くは婬欲情を勸むる由の說なると。龍猛論師が大論に。魔具云魔羅翻云惡者。多愛欲害出世善根故也。と有に據れば。本は陰具の名と聞ゆるに就て。その梵語を探ぬるに。經論どもに。根とのみ譯して。梵語を載さず。然れば草木の根と。同語にやと所思えて。其方より尋ぬるに。梵語雜名草木の所に。根母攞とあり。(梵語千字文にも根慕攞と見えたり、)然れば。根

を麼羅とも。母攞とも云て。草木の根と。陰具に通る名なりけり。（そは草木の根は枝葉花實を生成するの根元なる故と聞えたり、此の外に麼羅といふ物二品あり、其は華蔓と鰐魚となり此は下に云ふべし、○かく記して後に婆娑論を見れば、百四十二卷に問何故男女根得名根、答、欲界有情欲爲種子欲爲苗稼是故此二亦得名根云々とあり予が說差ざりけり。）偖しか號たる由を。大論に。多愛欲害出世善根故也と云へるは。彼の一物は。殊に愛欲ありて。佛法に謂ゆる。出世の道に害となるを。大梵自在天神は。佛意と元より反にて。人生本とも。人種神とも有ごとく。人種を蕃息し。子々生成を好む神にて。（立世阿毘曇論に、彼大梵天者、外道人等以爲能生萬物之本、摩醯首羅、外道人等計、彼天王能爲造化之本と云ひ、補行記に、摩醯首羅、擧世尊之以爲化本と有るなど是なり、以て爲すといひ、計すと云へるは、例の貶說なり、されど、其の計すなはち古傳の正說なり。）人種萬物の祖なれば。生民悉く其の神性を賦し生れて。佛道を修行するに害ありとて。其の本神たる大自在天神を。彼の物に準へて。麼羅と負たる由なり。（魔の字は、大寶積經音義に、字書本無魔字、譯者變摩作之と見え、名義集に輔行記を引て魔字舊從石、梁武帝以來謂能惱人易之爲鬼とあり、彼の武帝と云しは佛法に淫して、國を亡へる愚主なりしかば、かゝる字をさへに作れるなり、舊く、磨字をかけるに著て、佛祖統紀に、樓炭經を引て、其魔懷嫉譬如石磨磨壞功德と云へるは、磨字を假字なりと知らざるにや、捧腹に堪たる附會の愚說なり。）其は華嚴經疏にも。天魔者。謂欲界第六他化自在天、爲魔。蓋此天爲欲界主。見人修道以爲失我眷屬。空我宮殿。即興魔事。惱亂行者也。とも有るを以て知べし。（人の修道とは佛法者の佛道を修するをいひ、行者とあるも、佛法の行者をいふ、凡て佛法は、我が道を最上と謳たる法なる故に、傍若無道に、其道を只に道と云ひ、他をば外道と云なり、）然れば此の文に、修道の行者を、惱亂する由云へるは、彼の道法を行ふ者を、害ぐる由なること知

べし、徐より、在のまゝなる梵行を修せむに、何か害けむ、佛道は民生を滅ずる修法なる故に、害ぐるなり、我が眷屬を失ひ、我が宮殿を空くすと爲て、と有るにて知られたり、世人、魔てふ梵語の本義を知らず、只雷同して、佛書に惡魔と云へば、惡なる物ぞと心得たるは、甚く違へり、大抵佛の惡物とたて、惡事と立たる事を、天下公平の論に係れば、善物善事ぞ多かめる、西戎人朱熹が語に、佛法此國に入りて、善惡の名差ひ舉る、と云しは、實然る語とぞ所思たる。）かくて世間の道を。魔罥と稱して甚く惡めり。（大寶積經音義に、經云、魔罥者、五欲也、魔王以此繫縛衆生也、罥亦作羂、或作䍐、考聲云、以繩捕也、纒結也、韻英云、繫取也とも、羂索也、罥亦縛也とも云へり。）然れば佛祖が。此神を甚く惡神と爲たるは。其の立たる法の。世間の道と甚く違へる故に。大梵自在天王の。必ず忌嫌ふべき謂なり。と察してなれど。此神より云ふときは。佛法實に無比の妖道にこそ有りけれ。（然るは、人種萬物の眞正道たる、子々生成蕃息の道を、邪業と惡ふ法なればなり。）斯れば此の神を。よし佛法には惡魔と云とも。謂ゆる五倫の道を捨ざらむ人は。惡ふべき神に非ず（佛罥に繫縛せられて、可惜此の世を、苦界火宅と逃尻貌する徒は、論の限りに非ず、然れども然る人々をも、漸々に眞の道に引返さむと、かくは論ふを、其やがて、麼羅のわざとや論すらむ）佛祖は然ばかり。此神を惡ひしかども。其は說法こそ有れ。實には然らず。妻も三人。子をも三人ぞ持たりける。中にも羅睺羅と云し子は。謂ゆる成道の前。菩薩の時の子なりしをや。（但し此は二十九歲の時なりき、是に因て案ふに、かく謂ゆる成道の年に近く、五年ばかり修行のほど彼の一物の愛欲多きには、菩薩も甚くわびたりけむ故に、此れやがて大自在天神のわざと察して、惡神と言ひ立て、種々妄誕をば、構へ出たる物なるべし。）倩かく思ひ取れるは。十年ばかり前なるが。去年の正月十一日といふ日に。物へ行く途中の骨董舖にて。一の石品を得たり。其の形男莖にて。長一尺九寸五分。周一尺四寸あり。下は稍細く。鋒は下よりも細かれど。龜頭の形もよく具はりて。世

に云ふ陽石の類なる。自然石に非ず。また人作の物にも非ず。其の石質を見るに。外邊は。木化石に似たれども。常の石に比べては甚重く。四貫六百目ありて。自然形ならず。人作ならぬは。神造なること疑なき物なり。（そは世にいふ、矢の根石の如き、自然の物ならず、また人作ならざるは、神造の物なること疑なきに準へて知るべし、然るを世の事知人どもの、神を知ざるが、何くれと論すれど、一つも矢の根石の眞を、説得たるは有ことなし、此は己れ別に考あり、斯て右の男莖石を得たる骨董舗に、我が得たる石よりは、稍少き、同じ石質の同形なるを、何にして撃折けむ、其鋒のみ有しを、取て見るに、外邊こそ木化石の如く見ゆれ、其折たる小口を見れば、中心は悉く瑪瑙の如く、水晶の如き玉の、粒々重々、一つに混凝せるにて、外邊わづかに、木化石を覆ひたる如くにぞ有りける、然れば余が得たる莖石も、其と同質なる故に、其分際よりは、大く重しと知られたり、借その折たる石莖を、人數多にも行きて見よとて、見せたる後に、次々に考ふる所の出來て、

いかで彼をも藏せむと、人して問はしむるに、既に賣たる由なるは、今になりては最口惜きや、）さて此の石莖を得て。熟々觀つゝ。熟々思へば。近き邊の國々にて。石神。幸神。金精神など稱して祀るが多く。其の神體を見れば。男根形にて。石なるも有が中に。我が得たる石根と。同質に見ゆるも交れば。何の神世に。かゝる物をば。數造り置けむと。切に知まほしく祈つゝ。人にも問へど。知れる人無れば。七月ばかりは。甚異しく所思つゝぞ有りける。（然るは世に石神幸神金精神など祠へばとて、我は其に雷同して拜べくも非ずと思ふに、自然形ならず、人作ならねば、神造なること灼然き故に、麁略に爲難ければなり、故その形石に向ひて、誓けらく、世にしか〴〵祠ひ、また其の狀を見ても、小緣の物とは所思ねど、我が元よりの性質にて、己が心に、よく其由緣、また其尊むべき本緣を、知明さゞる限りは、世の人なみに拜むことは得爲ざるを、若靈ありて、慨と所思さば、いかで我に其の本緣を明に知しめ給へ、と祈言して、傍の柱によせ立てぞ置たりける、其は此

武藏なる田舍あたり、其外の田舍にても、御石神様とて甚く恐るゝは、時々甚き祟もある故なりと、氷川神社の神主、岩井滿貴が、其邊にて然る事あるを、能知りて語りつればなり。）然るに八月の始ごろ。行智が訪來て。彼形石を見て。珍しく大自在天神の神實をば。如何して得つると言ふに。始めて驚き。そは何に因りて云ふ語ぞと問へば。續高僧傳の。玄奘三藏が傳に見えたり。と言にぞ。嬉しきこと言む方なく。屋代氏に其書を藏たれば。速に。人走らせて借て見るに、彼比丘が。印度の諸國を周遊する所に。至劫比他國。俗事大自在天。其精舍者。高百餘尺。中有天根。形極偉大。謂諸有趣由之而生。王民同敬不爲鄙恥。諸國天祠率置此形。大都異道乃有百數。中所高者。自在爲多とあり。是にて數月の疑惑も一時に晴たるは。正に彼の祈つる祥にて。大自在天神の賜物なりけり。（西域記に、印度の諸國に、大自在天祠の多き趣を記せる、其數幾千ちと云ことを知らず多く、皆いたく神驗ありて、人の尊崇する趣は詳に見ゆれど、天根を神實と爲よしを記さゞるは。

彼の記は、其の王に見せむと記せる記なればなるべし其傳は私の記なる故に、天根の事までを記遺せりと知らる。）さて此を天根とも云ふは。人作ならず。天造の物なる由と通えたり。然して諸の有趣。これに由りて生ずと語り傳ふるぞ。天地萬物生成の道の。玄奥妙旨なりける。（然るを、玄奘比丘がえ知らずて、人の擧りて崇敬するを、鄙恥なる事に思へるは、憐むべし。）然るは。彼大梵自在天神と稱する神を。人は何とか思ふらむ。此は我が天皇の皇祖、産靈大神と。伊邪那岐大神の御故事を。一つに混じて。傳へ奉れる古說なり。其は。彼の神の天地萬物を造り、人種を蕃息せりとふ傳へは。産靈の大神の。天地と分判べき。其狀貌言難き、一物を鎔造し給ひ。（此の一物の形を、熟思へば、かならず女陰の形なりしと所思ゆ、故れその狀言ひ難しとは傳へたれ、委くは古史傳にいへり、然れば此は玄牝とぞ名くべかりける。）伊邪那岐。伊邪那美二柱の神に。天瓊戈を賜ひて事依し給ひ。二柱神。その御戈もて。彼一物を畫成し。引上給へる其の末より。垂落る物。自然に凝

積りて。於能碁呂島と成しかば。其の島に天降まして。其の事より所思立して。始めて夫婦の道を興し給ひ。國の八十國。萬の物を生給ひ。青人草を蕃息し給へるに符合し。（是らの事ども、古史傳に委く註したれば、今更に云はず、その蘊奥微旨を知むと思はむ人は、彼の傳に就きて見べし。）かつ彼の御戈は。於能碁呂島に衝立て。國中の御柱と爲給ひ、るが。後に小山と化れる。其眞形を觀れば。所レ謂天根の形に髣髴たるは。小緣の事に非ざれば。彼の賜へる瓊戈と云ふは。其趣の物なりしこと著明し。（然れば彼の御戈をば玄牡とぞ名くべかりける、大神貫道が磤馭盧島日記に、島中奇石磊落、多現ニ男根女陰之狀一奇形怪狀不レ可ニ勝數一矣、又金玉之精湧出、其形如レ露似レ球、表發ニ金氣一裏含ニ土砂一矣とあり、）因に云ふ、去ぬる文化十三年の四月の比、常陸下總の邊を周遊せる時に、とある山中の社地にて、石笛を得たり、世にいふ、海ぼらなど云ふ類の陋しき物に非ず、此を得たる由よし、其の委しき狀などの事は、別に記せる物あり、然るに此の物の狀、また於能碁呂島の眞形にいと能く似たるは、異しき事なり、）前品四姓の處に引たる。中論疏に。韋紐天手執ニ輪戟一。有ニ大威勢一。故云。萬物從レ其生也。とあるも。彼御戈に由有りて聞ゆるを。思合すべし。（韋紐天とは、即ち大自在天の別名なること、上に委く云へるが如し、萬物從レ其生、とある其字は、韋紐天をさす語のごと聞ゆれども、熟視れば、其とは、戟をさして云ふ語なること著し）かくて金七十論に。毘紐天の一萬六千の妃と見え。（毘紐天と云も、大梵自在天の別名なること、既に云へり）大毘盧舍那經住心品に。梵天后。自在天后とあり。（但し此の經の疏に、天后是世間所ニ奉尊一神、然佛法中、梵王離レ欲、無レ有ニ后妃一と云ひ、其冠註に、梵天無レ欲、云何云レ后耶、此是梵王明妃印相、義云レ妃也など云へるは、佛法に引こめたる說にて、古傳に違へり）また西域記。健馱羅國の處に。跋虜沙城東北。五十餘里。至ニ崇山一。山有ニ靑石大自在天婦像一。毘摩羅天女也。聞ニ諸土俗一曰。此天像者自然有也。靈異既多。祈禱亦衆。印度諸國求レ福請願。貴賤畢萃遠近咸會。其有レ願レ見ニ天神形一者。至誠無レ貳。

絶食七日。或有得見求願多遂。山下有大自在天祠。と有れば。后神も在けり。是また皇產靈大神の。男女二神なるに符へり。（然れども金七十論に、一萬六千妃とあるは、余り多きに過て信がたし、）俗西域記の文に、此の天像者自然の有なり、と云るを察れば、其狀玄牡なりと見ゆ、そは常の神形に非ざること、下文に、願見天神形者云々と有が、其本形を云へるにて知られたり、是に就てまた案ふに、常陸國筑波山の、二並なるが、男體女體とて、玄牝玄牡の形を爲し、また備前の國の海中に、男根女根の狀に、最よく肖たる石の、二つ並びて突出せることは、人も普ねく知り、國國處々に、さる形せる山、また岩などの、小緣ならず見聞せらるゝが多く、海底に生る瑣陽と云物、また菌の類は、草木の精氣の、地氣に和合して生ずる物なる物なるに、自然に玄牡の形を具するなども、悉く幽き由ある事なるべし、）さて自在天神を摩羅と云ひ。其后神を毘摩羅天と云を思へば。摩羅ちふ名は。元これ自在天の。夫婦に通る名と聞えたり。（俗こゝて上に云ふ如く、麼羅を母羅とも云ひて、根の梵語なるに、經論どもに、男女の陰を云ふときは、共に母羅と有し如なること、著明なり、）法蘊足論根品に、云何女根、謂女々體女性女勢分女作用、此復云何、謂臍輪下膝輪上所有、肉身筋脈流注、若於是處與男交會、發生平等、領納樂受、是名女根、云何男根、謂男々體男性男勢分男作用、此復云何、謂臍輪下膝輪上所有、肉身筋脈流注、若於是處與女交會發生平等、領納樂受、是名男根とあり、なほ發智、婆沙、倶舍を始め、諸論に根品といふが有りて、其論殊に喧しきは、皆捨べからぬ正眞道を、邪道と名けて、佛祖が妖說を誣賣れる故なりかし、婆沙論百四十五卷、爲欲棄捨男女根故、修諸靜慮云々と云へるは、笑ふに堪たる事なるを、人のなど笑しからぬにや、）俗また此方にて。男陰を麼羅と云ふこと。まづ靈異記に。閛萬良と見え。和名抄に。房內經云玉莖男陰名也。楊氏漢語抄云。屎（口卧口外二切、亦作𡱝、破前、一云麻羅、今案玉莖等、屎脊骨、可爲玉莖義不見、）とあり。此は

今の印本に。㞓（破前、一云麻前良、）とあれど。麻の字の下なる前は衍なり。（こは破前の前の字を誤りて寫し入れたる物と見えたり、さて破前は、元より假字なり、但し少か意を用ひて書たる字とは見えたり、）さて此の麻羅てふ語を。前に思けらく。男陰の稱は。古語拾遺に。男莖を袁婆斯と訓み。和名抄に。破前。太秦牛祭文に。大閪など有る。是古名にて。麻羅ちふ名は。中世の比丘等が。事好みに。梵語をもて稱せるが。世に弘まれる稱ならむ。（なほ太秦牛祭の文に、また閪風とも見え、新猿樂記に、閇、大而長八寸四伏、云々などあり、なほ麻羅ちふ名は、書等に數見えたり、）其は古き神典どもに。天津麻羅命。大麻羅命。天津赤麻良命。天照眞良建雄命など云ふ名あり。麻羅てふ語。もし元より陰具をいふ名ならば。其を神名に負べくも非ず。神名の麻羅は。眞浦とも。麻占とも書たる例有れば。此は萬葉の歌に。「旦日照る嶋の御門に鬱悒しく。人音も爲ねば眞浦悲しも。と詠たる。眞浦と同じ古言にて。眞心の義なれば。（借こそ天津赤占とも見えたれ、浦占ともに借字にて、

心の義なること言も更なり、）陰具をいふ麻良とは元より別なりと思ひ決めて在りけるに。此の頃大自在天の神實の天根なると。彼の御戈の古傳を思ひ合せて。神名の麻良。また陰具を麼羅と云も。元より古言にて。梵語に。自在天を麼羅と云も。我が古言の。彼國に傳はれるにて。同語なる事を解り得たり。（其は我友荻野長は、佛籍にこよなき博覽なれば、上に云る陰具を麻羅と云ふは梵語にて、神名の麻良とは別ならむ、と思へる考へを語りしかば、長云く、印度にて、華蔓を麼羅といふ、是れ語の本にて、自在天をもしか云は、其飾れる華蔓の、美麗なるより負る名と聞ゆ、そは我が古へに、珠玉を身の飾とせるを思ふに、天津麻羅命など云ふ神名も、由有て聞ゆれば、陰を麻羅と云も、元より此方の古言なるべし、猶今一度とり並べて考へよ、と云ふに催されて也けり、）然るはまづ。語の本より論はむに。神名の麻良は。即ち眞心の義にて。漢字を塡れば。情字よく當りて。是れ語の本なるが。此を轉用して。陰具をも然稱へるは。彼處ばかり。人の眞情の凝結する處

の無ればなり。（伊藤長胤が辨疑錄に、情者好惡之實、人心之無偽飾者也、古書中或替實字說、曾子曰如得其情哀矜而勿喜、大學曰、無情者、不得盡其辭、左傳、稱晉文公曰、民之情偽盡知之、故或曰事情、或曰情願、好色之心人之所必有、而最無偽者、故曰情欲情實、則相沿爲好色之心、亦其心之所好、而無偽者也、と云へるは能叶へり、詩小序標有梅、男女及時之說、陳氏曰、男女及時也の註に、聖人之慮天下也、血氣既壯、難盡自撿、情竇既開、奚顧禮義云々、僧尼孽海巻の一に、幼尼青春二八芳姿、眩目、庵主操凛氷霜心堅金石、是以衆尼不敢逞其芳心、人亦无計開其情竇、云々など見え、なほ情の字を、陰處に關係せる語いと多く、念々彼の所に凝思するを、情凝と名け、彼の處を人に委するを、情人或は情郎と云ふ、六朝遺事に、煬帝戲月賓曰、儂之愛汝只是情、と云へるなどは、陰所を直に情と云へり、猶多かれど、然のみ擧むこと煩しければ洩しつ。）故れ皇朝にも。古く情の字を。彼所に當て用ひられたり。其は神代紀に。女神伊邪那美命の御陰を。男神伊邪那岐命の看行せる處に。伊弉冉尊。恥恨之曰。汝已見我情。我復見汝情。時伊弉諾尊亦慙焉。とある情字即ち是なり。（また古事記に、豐玉毘賣命の産所を、火遠理命の伺せるを、豐玉毘賣命の恨むる處に、雖恨其伺情、とある情の字も、其義を用ひて書れしなり、然るを是等の情の字を、舊くコヽロと訓るは非なり、斯て己往に、古史徵を撰べる時に、中つ世の戲籍どもに、陰所をナサケドコロと云へることあるは、上古より彼處をば、其の名を顯に言はざりし趣に聞ゆれば、名避の義にて、實の名をば言ざりしにこそ、斯て情の字をナサケと訓むは、彼處は情の本處なる故に、是より轉して、物の哀をしる心をも云ならむ、と思ひて、ナサケと訓りしかど、今なほ思へば、此は男女に通じてマウラとも訓べく所思たり）上に言へる神名の麻良の。眞心なるに因りて。此の情の字は。麻宇羅とも訓むに論ひ無れば。神典を記せる人々。其意を以て。此の字をば書れけむ。斯て此はもと。男女の陰處に

通る名なること。神代紀の文にて著明なるを。上に引く靈異記。和名抄。また餘の書等にも。玉莖の名とし。今の世まで。然は稱へ來つれど。此は後の誤と爲べし。（女陰の名は、鎮火祭詞に、保止、古事記に蕃登、靈異記閇口保、神樂歌に、陰名久保、桑家漢語抄に、陰門比奈登、和名抄に、房内經云、玉門女陰名也、通鼻、楊氏漢語抄云、吉舌比奈佐伎、などあり、男陰をヲパセと云は、男柱の轉語と聞ゆ、實に男の柱なりかし、但し此の名は、彼の瓊戈を、國中の御柱と爲給へる謂よりや名たりけむ、また此れに依りて思へば、神また貴人を計へて、幾柱と云ことも、師說は有れど、男莖を柱と云より出たる語なるか、借また往年、駿府に物せる時に、小原雄英老翁が語に、男陰を閉能許と云ふは、保古と同語ならむ、閉能の切り保なればなり、と云へるを、聞入れむとも所思ざりしかど、今思へば、少か由なき說には非ず、但し和名抄に、陰核俗云篇乃古、刑德敎に云、丈夫淫亂割ニ其勢ヲ、勢者則陰核也と有は、字彙に、宮刑男子割レ勢、勢外腎也と云るに據れば、睪丸をいふ語なるを、今は並玉莖をいふ語となれり、名の趣を思へば、玉莖の名めきて聞ゆるは、今いふ所正しくて、陰核の名とせるは、和名抄の誤ならむも知べからず、衆經の音義に、勢峯謂ニ陰莖ヲ一也とあり、餘の西戎籍にも此の名あるか、面白き名なりかし。）さて印度にて。大自在天を稱する麼羅と。此方にて陰處を稱する麻羅と。同語なるに就て。また案ふに。彼國にて。華蔓瓔珞などの類をも。麼羅と云ふは。皇產靈神の賜へる御戈を。瓊戈と云ひて。瓊を飾れる戟なるに。其が化れる彼の小山に。金色なる玉の。幾千ぢと云數を知らず涌出せるは。幽き因緣ある事なるが。韋紐天の手に執れる。輪戟といふ物。其より萬物を生ずと云へば。輪は飾の瓔珞にて。瓊戈の古傳の。訛り傳れる物。と聞ゆるに思合され。華蔓瓔珞などを。麼羅と云ふも。此の戟の飾玉より出たる語ならむ。と想像られたり。（然れば、艸木の根を母羅と云は、彼の戟の萬物を生ずる根元なり、と云ふ義を轉じて號たるにて、此は末なりと知べし、また鰐を麼羅と云ことは、我が古傳に、海神（頭注云四教儀に曰海神惜レ

玉因ニ其睡臥ニ卽盜ニ其珠ー）と申すは、其の本躰は和邇に坐て、飾身の玉に名高く、印度にて、海神を龍なりと云は、上に辨ふる如く、和邇を紛らしたる傳へなるを思ふに、是も古傳の訛りて、且々存れる也かし、また寄皈內法傳に、杜得迦摩羅、杜得迦者本生也、摩羅者卽是貫焉、集ニ取昔生難行之事ー貫ニ之一處ーとある說に依れば、摩羅てふ語は、神世に數多の玉を緒に統貫て、御統之珠と云へるに符ひて聞ゆ）偖かく此方の正傳に本據して。彼方の舊說を徵し察るに。大梵自在天神の傳は。此間の古傳を訛れる傳說なること著し。是を以て。伊邪那と申す御名も傳はり。彼の火吽軌別錄。また十二天饑軌に。其の來位を。是も東北とこそ傳へたれ。（然るに此を、暴惡なる名義に譯せるが有るは、佛法より惡ふ意をもて譯せるにて、正譯に非ず、其の正說を知まほしく思はむ人は、神典を見べし、また大自在天を、麼羅と名けて、能障、慾者、斷慧命、惡者など譯せるも、皆佛法者の私譯なること、上に論へる、北俱盧、蘇迷盧などの私譯なるに、彼ニ思ひ合せて知り辨へ、本朝の語と同じきをば、古譯に拘はるまじき事を悟りねかし）また大自在天王頂生天女法に。其の頂より天女を生たりと云ふ傳へも。伊邪那岐神の御目より。大日靈命を生坐る古傳に似たり。然れば大梵自在天と稱する神は。伊邪那岐神。產靈大神を混じて。一神に傳へ奉れる神なること。疑なき物なり。故是をもて。佛法をば。甚く惡ひ給ふなりけり。（是に就て思ふに、本朝にも國々處處に、第六天神宮と云がいと數多あり、此は上に引たる、佛籍どもに見えたる如く、彼の道にては、甚く惡ふ神なるに、然ばかり佛法を信じ用たる昔に、かく國々に祭るまじき謂なるに、然多かる事は、何なる由有しと云ふこと知べからねど、其は左まれ右まれ、是やがて神意にて、佛法を惡ふ名をもて祭れる祠の、國々に多く、ほど〳〵に昌ゆることは、賴ある御世なり、然るに近頃の社人等に、やゝ佛法を嫌ふ倫も出來て、彼の魔王といふ名をあかず思ひて、或は菅原の天神と稱し、或は神世七代と云が中の、第六世にあたる、面足惶根神を祭れりなど、云ひ紛さむと爲めり、我が教

に従ふ徒にも、其社の社人なるが彼此ありて、皆心よからず思ふ趣なるは、中々にわろし、名こそは何とも云はめ、實には我が神國の、皇祖神の御上を誹り傳へたるに、佛法より、種々の惡名を負たるなれば、然る惡名を負給へるぞ、却りて此神の、御稜威の勝れたる故なるをや、然れば、佛法を惡ひ思はむ人は、殊によく崇敬すべき神にこそ、）是また天照大御神を始め奉り。我が皇神たちの。甚く佛法を惡ひ給ふに能符へり。其は彼の法は。天地生成の神意を邪見とし。人民萬物蕃息の道を。邪道と貶する法なればなり。（天照大御神の、佛法を甚く惡ひ給ふこと、古今の事實に昭々として、更に論なき事なるを、中つ世の比丘ら、說を作りて、此國開闢の始に、大御神、かの第六天の魔王と誓約ありて、佛法を近づけじと宣へる故に、内には佛法を好み給へども、外には惡ひ給ふ趣に、もてなし給ふなりなど言へれど、妖妄の造言なり、委くは、古今妖魅考に辨ふるを見て知べし、）抑この全世界の始まりは。本朝の古傳に昭々として。天之御中主神。無始より天上に坐々て。成立造化の原を主宰し給ひ。（此大神の御事は、印度を始め萬國に、其の傳有ことなし、其は此の神、造化の本つ神に御坐して、其神德至大なるが故に、臭もなく聲もなく、爲こと無して、無より有を出し、寂然として御坐せばなり、委くは、古史傳に註せるを見るべし、）二柱の產靈大神。その產靈の德を以て。天地を鎔造し。人種萬物を造化し給ひしかば。此の天地世界。元より是一枚にして。皇國百蕃の隔なく。總てこの皇祖天神たちの。全能に係らずと云こと無れば。皇國最初の傳へに。百蕃國の最初の傳へはこもり。蕃國の最初の傳へは。やがて皇國の最初の傳の。轉訛せる物なるが。中に。印度に傳ふる古說は殊に精しく。中には神國失レ之。而獲二之於蕃國一。とも謂つべき事も有るめり。（然るは前品に引たる。彼の十二天饑軌に、梵天王者、上天之主衆生之父、此天喜時、器世間安穩无レ有二亂動一、何以故、劫初之時、此天成二立器世間一、故衆生不亂、以レ正治レ世、何以故、父王喜故、此天瞋時世間不レ安、有二種々病一、至二于草木一皆悉惱落、衆生迷惑各如二醉人一と有るを始め、天

神地祇の功徳を述たる明説の如き、本朝にも、我師の出られざる程には、絶て世に諭せる人なく、また西戎の國などは、賢しく道理を論ずる國にて、殊に皇國の境近ければ、印度には甚く劣りて、斯ばかりも、委しき傳のなき故に、道の本意を失へるさかしら説のみぞ多かる〕故是をもて。皇國の古傳を本とし。印度の古説を採り徴して。世間成立の道の玄奥を論し顯さば。まづ此の天地世界は。皇祖天神の御執しの天の瓊戈。いはゆる天根玄牡を。かの玄牝なせる一物に。指下し給へるに資りて成立せる。是ぞ道の根元なる。〔凡て玄妙幽旨なる事はしも、佛菩聖賢など云ふ徒の、立たる説に奉れる倫は、え知ざる物なり、然れば、世界成立の根元は、天根よりと云説などは、得信まじけれど、道理の極めて深々なる事は、却りて淺々に思はれ、淺々なる事は、却りて理深げに聞えて、生賢しき倫は、速く信ひく物なり、其は世の學者どもの、理深しと爲ること、多くは、譬へば謂ゆる、機關人形の、人前に給仕すべく作れる工の物語をきゝて、甚く感ずる如き事どもなるを、眞に活動く人の成れる始めは、何の至りげもなく、淺々に聞えて、もし其道を知ざらむ人の聞ては、人形の人に給仕する工みを聞たる如くは、感じ信まじき物なり、萬つに然るぞ、常人の效ひなる、然れば玄牡玄牝に、天地人種萬物の成れる幽妙微旨は、佛菩聖賢らが説を、道の蘊奥と心得たる倫の、え知らざるは然るものにて、其の祖師、夫子など云ふ徒、百千人、額を集めて研究すとも、古傳の眞理を知ざらむ限りは、明め得まじき事なり、然言はば、佛者らが、例の、歌邏羅に因りてなど云めれど、歌邏羅に因りて生ずる事は、また何の理に因ことぞと、次々問もて行むには、終に知べからざる、玄妙の域に歸するより外なき事ぞかし、〔大寶積經音義に、歌邏羅梵語、初受胎時、父之遺泄也とあり、佛籍に往々此の説見たるが、本は吠陀中の説と聞ゆるを、金七十論に委しく見たり、彼の論に就きて見べし〕かくて伊邪那岐。伊邪那美二柱神。その道に因順し坐て。始めて夫婦の道を興し給へるより。其の蕃息し給へる人種は更なり。萬物までも。其道を稟繼ぎ有ちて。父また子

に傳へざれど。自然に其の道を識り行ひつゝ。子子生々無窮ならしめ。人としては。人倫の道の此に端起ることを辨へて。皇祖天神より賜はれる命性を。失たず復行なる。正道とし常とし。此に背ふを。邪徑とし變とす（增一阿含邪聚品に、僧伽摩と云もの、出家して、佛弟子と爲り、樹下に坐せるを見て、其妻の母が云へる言に、汝今所爲實爲非理、人所不許、汝今所思惟非是人行、と云り、實に理たり、大般若經音義に、大論云、違背正教無益勤苦、名爲邪行、と云るは、佛法より他道をさして云るなれど、其道によく叶へり、）其の正常の道に因順して。其邪變の徑を撥くを。眞の學士と稱ふなり。（西戎籍中庸に、君子之道造端乎夫婦、及其至也、察乎天地、と云ひ、後漢書に、夫婦人倫之始、王敎之端と云るは、其にさる言なり、世間萬物悉く、玄牝玄牡に生じ、人種萬物、また自然に其狀を得て男女を別ち、また自然の如く、其の道を知りて、產靈の德を繼嗣すること無窮なる、是ぞ人種萬物の道なる、然れば、世間および萬物を生成せる、二物の狀を、玄牝玄牡なせりと云を、嗚呼なる說に、思はむ人も有べけれど、實には彼の二物の、其狀なりし故に、人種萬物の牝根牡根の、其に肖て成れる物ぞ、と云ふ理を思はむ人は、異しと思はざらまし、右に記せる事ども、思ひ連くるに、余が得たる天根を始め、印度などにも多かるは、上古の神人たちの、其の最古の因緣を思ひて、其の形を製りて、齋待たるが、遺れるにぞ有べき、故自然石ならず、人作ならず見ゆるなめり、古語拾遺に、御歳神の、蝗を避る禁術を敎へ給ふ所に、以牛肉置溝口、作男莖形以加之、と宣へるは、男莖の形を作る事の、神世より有し證にて、是また幽き契ある事なり、）或人問。印度は此天國より。甚く低りて遠く。かつ中間に。西戎の國ありて。是に隔たり。既にかの西戎の國すらも。漢と云ひし世に始めて。彼印度の事を知りたりと聞ゆるに。皇國とは。何のほどに往來ありて。我が古傳の彼國に遺れることぞ。答。產靈大神の御子に。少彦名命と申す神おはし坐せり。此の神。世の最初に。天上より。早く異國に天降坐して。其の國々を造り給ひ。其

後に。大國主神も渡り給ひ。その御子八十一神あるが中より。十五神を擇びて。四方の異國に班ち遣はし給へれば。此の神たち。萬國を。其々に特別造りて。其の國々に相應せる。種々の事どもを。敎へ始め給へる故に。戎蕃の國々にも。少かづゝの古傳を。訛り傳へしなり。(始めてかく聞たらむ人々は、甚く驚き奇むべけれど、此の神たちの然る由よし、また異國々を造り給へる事情などの事は、師の古事記傳にもあら〱論れたるを、猶委くは、余が古史傳に就て見べし。)其が中に。印度をば。殊に神意を用ひて。事始め給へりと聞えて。彼の二神に。由緒ある事ぞ委かる。其は彼の二神は。世間の事を敎へ。呪禁法と。醫療方とを始め給へる神等なるが。(此事を知まほしく思はむ人は、余が古史傳に就て見べし。)印度の婆羅門等が傳へ學ぶ。四吠陀論の學事ども。皆これ右に攝すべき事等にて。其學風は。博く精微を究めて。玄奥を貫窮し。人に大義を示して。導くに微言を以てし。古に博く。貞に居て物外に沉浮し。事表に逍遙して。寵辱に驚かず。知道を貴ぶこと有りて。貨財を恥ること無しと有る。學行の高尙なること。彼の二神の神業に。熟くも符へるを思ふべし。(四吠陀論、および婆羅門の學風のこと、前品に委しく論へれば、今更に委くは註さず、)然れば。前品に引たる籍等に。劫初梵王下化人間と云ひ。劫初之時。大自在天下人間行化すなど云るは。皇產靈大神。その荒御魂を暫く降して。彼の國土を成立し給へる事の有けむも知べからず。(然れど二十四返など云る說は覺束なし、)かくて金七十論に。昔時梵王生有四子云々とある其の子等を。梵天と云ふ由なるが。(但し書どもに、梵天と云ふに差別あり、そは梵天界を云へると、其天衆を云へるとなり、よく心得て思ひ混ふべからず、)其の中の一梵天。印度に天降りて。人間を敎化し。其の口より。婆羅門子を生じて。四吠陀論を始め。種々の事ども授け敎へたる由なるは。其少毘古那神なるべく所思たり。(印度の古說は、漸々に訛り來つる故に、前品四姓の所に引出たる文等の如く、異說も多く成ぬれど、公平の心を持て、熟々思ひ辨ふれば、其趣の詳に知られて、正說を見得

らるゝ事なれど。少かも護法の我慢心ありては、其の正説を見得まじくなむ、故是を以て、古今の佛學者たちに、此の旨を明し得たるは無りしなり。)其は大梵自在天神と云は。上に論ふ如く。皇産靈大神を申せること灼然たるに。彼の少彦名命は。卽ちその御子にて。天上より放れて。異國に天降り坐るに能く符へるを。(但し其の口より、子を生せりと云こと、佛祖を始め、知見なき論師らが、何くれと云へる說も有れど、論ふに足らず、最古くは、男女を云ず、頂よりも、目よりも、口よりも、子を生る類は、何れの國にも有し事にて、珍しからず、上古には非ざれども、佛祖も、母が右脇より生れたりと云めり、其より遙か後世にも、陰處ならぬ所より、子を生る事實は、西戎籍にもいと多く見えたり。)金七十論に。如天上。北欝單越。非證量比量所知。信聖語故得知。聖敎名聖言者。如梵天所說四違陀。とあるに合せて辨ふべし。(こは今用なき文を、約めて引たれば、委くは本書を見べし。)天上界の事。また北方なる。欝單越洲などの事は。我等凡人の。少き證量比量の智を以て。量知るゝ所に非ず。その天上界より降れる。梵天の神の。聖語聖傳を信ずる故にこそ。知ことを得つれ。其聖語を聖言と名く。そは彼梵天の所說へる。四違陀典なる說ども是なり。と言へる文義なり。(天上とは、梵天界と、忉利天界とを云り、そは今引く文の下に、如上天帝釋北欝單越等、依聖言得解、とも有にて知られたり、帝釋の坐と云なる、忉利天といふは、上に辨ふる如く、皇御國の事なれば、其傳へも、此の天神の聖語に傳へたること、更に疑なし、北欝單越を、また北俱盧とも稱へり、そは既に解たりき、○行智前に語けらく、俱盧は闇き義にて、謂ゆる夜國の事にや、然も有らば、少彦名の神の、常世の國に渡り坐りとふ古傳は、常世を常夜と書る例も有れば、夜國に往坐る由に非じか、と云へり、今此の文に依りて思へば、彼の神まづ夜國に往坐して、其より印度、その外の國々へ渡り坐て、天上のこと、皇國のこと、夜國の事をも語り傳へ坐る故に、此文にかく記せりと見ゆ、然れど、此はなほ熟く考へて定むべし。)金七十論は。上に論ふ如く。迦

毘羅仙が說を集記せるにて。四違陀典の所說とは。彼の天降れる梵天の聖語を信ずる。敦厖なる風も存けり。證量比量の所知に非ずと云へるは。殊に古意を存せり。(此に反りて、佛說の妄なる、天上の神も說ざる、東弗于逮、西倶耶尼の說こそ、最も鳴呼なれ、彼の天眼を主張する佛學者らも、少しは古意の信實をも思へかし。)さて其の天降れる梵天の名を。何と傳へらむと稽ふるに。同論に。梵王の生有せる四子の名を。一名ニ婆那歌一二名ニ婆難陀那一三名ニ婆那名那一四名ニ婆那鳩摩羅一とあり。上三子の事はおきて。第四子の名を、鳩摩羅と言こと。是また少名毘古那神に由有り。(四梵子の名ともに、婆那てふ語を上に冠たるは、父王の一名を、伊舍那とも傳へたれば、其を負たるか、伊舍那の伊を省けるなり、然る例いと多かり、其は由乾陀羅山の、由をはぶきて、乾陀羅山と云ひ、須彌樓山の、須を略きて、彌樓山など云類なり。)そは大般若經音義に。鳩摩羅正音ニ究摩羅一。究摩羅者。是彼八歲以上。乃至未レ娶者之惣名也。舊名ニ童子一とあるが。彼の神の小童の貌に坐ますに。最よく符ればなり。(また經論疏どもに、自在、韋紐、鳩摩羅など、一連に云ひ、大涅槃經音義に、拘摩羅天此云ニ童子天一などある、鳩摩羅天は、即此なる第四子、梵天の事ならむも知べからず、また阿含經に、大梵王の名を、尸棄と云ふよし說たるが、其を火とも譯せれど、頂髻と譯せるが正しと聞ゆ、其は梵王を、梵童子とも云ひて、其形を頭ニ五角髻一ノアリ、顏貌端正、身紫金色、蔽ニ諸天光一などあるも、彼の天降れる梵天子の貌の、頂髻童子なりし傳なる故に、大梵王の狀貌をも、其に擬へて、佛祖が例の妄說せる物と見たり、また印度ならぬ異國々にも、小童なる神の天降りて、國を作り、人間の道をも敎へつと云が、彼此ある由聞たり、其もし實ならば、其もやがて、少毘古那神ならむも知べからず、然れど其說の訛り、また妄誕の多からむ事は、云も更なるべし。)然れば彼の婆羅門に傳はる。圍吠陀前の諸法術の本は。悉く少毘古那神の傳授なること。著明なり。故その法術どもを察るに。我が天朝の古意。古風に符へる事も少からず。

(此は已往に謂ゆる秘密儀軌てふ物を普ねく見て考へ記せる物あること既にも云ふが如し。)また是因縁によりて。印度の古傳に徴し察べき說も存りて。須佐之男命。大物主神の御傳なども　他蕃國に勝りて。精しき古說の存るなり。(こは既に上に論へりき。)言語音聲の道も。異國の中にては正雅にして。本朝の天語に同しきも多かり。彼の悉曇の字原も。よく考へなば。皇國の神字ならむも亦知べからず。(我が皇國の神字のことは、往年著はせる神字日文傳に委く記せるを見るべし。)なほ次品に論ふを見べし。

十四五丁の間のはり付紙朱書

○大毘盧舍那經住心品に、大天與二一切樂一者、若虔誠供養、一切所願皆滿、所謂大梵天、自在天、那羅延天、商羯羅天、黑天、日天、月天、龍尊等、及毘沙門、乃至閻魔天、閻魔后、梵天后、自在天后、乃至或天仙、大國陀論師、各々應二善供養一云々、○此文の疏に、商羯羅、摩醯首羅別名、黑天梵音嚕捺羅、是自在天眷屬」○此冠注に、因明論を引て、商羯羅此云二骨鎖天一、劫初梵王化二人間一苦行像貌、商羯羅天、此是摩醯首羅、於二一世界中一有二大勢力一、一世界者卽一須彌界也」黑天者藏記下曰、伊舍那天黑青色、約二身色一爲名也、俱舍論曰、嚕捺羅此云二暴惡一、自在天有二一千名一、此是一號也、因明論云、嚕捺羅卽是商羯羅忿怒身、又曰嚕捺羅是摩醯首羅之化身也、亦名二伊邪那一、是欲界頂伊舍那也、而名二黑天一者、藏記下曰云々、○俱舍論頌言、由二險利一能燒、可レ畏恒逼害、樂レ食二血肉髓一、故名二嚕達羅一、とある光記に、由二嶮利一能燒者、有二三阿素洛一、將二三國土一飛二行虛空一、於二自在天上一過、自在天見以二火箭一射レ之、一時俱盡、此卽火箭險利燒二三國土地一、可レ畏恒逼害者、以レ龍貫二人髑髏一、繫二其頭頸一、又以レ龍縛レ臂、殺レ象取レ皮、塗レ血反被、此是逼二害有情一也、樂食二血肉髓一者、顯二所食一也、今祭祀者、還以レ此祭レ之、故名二嚕達羅一、此云二暴惡一、大自在天總有二千名一、今現行レ世、唯有二六十一、嚕達羅卽一名とあり、

此疏は光記に採れるなれば彼記に校して載たり

三災二十四ウ　粘米二十四十九ウ　地肥七十三十七オ　渕然九七オ二十三初オ地味四十九三オ七十

三十七ォ　一劫二十五三ォ二十七七ゥ　馬勝比丘十一六ゥ　大劫十八三ゥ　沙門十八十二ゥ二十一十九ォ二十六十三ォ二十七七ゥ

附箋に曰く須彌山と云須彌も須米の通音也。からぶみに神功后の事を卑彌呼といへるも卑米呼なり。また山と云るは尋常の如き山號と云にはあらで皇國は天下の高地なるを云へるなり。故に山と釋してもよく當りかたきにより更に妙高とも釋せる也。但しスメの義をばもとよりえしらで高の義をのみとりて釋せる也。魏志倭人傳に倭人在二帶方東南大海之中一。依二山島一爲二國邑一と云り。魏志は晉の陳壽か吾朝廷神功皇后の御世の末の比に當りて撰述したる書にて皇后新羅國を事平伏玉へるとき其國の王が皇國の事を吾聞東有二神國一云へる比ほひにて。から人とも丶既に皇國の有狀を海外よりはろかに望窺ひ又其ほど韓國よりいさゝか傳言に聞たるをなろ〳〵記せる書なるに御國の體を依二山島一ともいへるも洋中に突凸たる高地なりと。望窺ふが故なるべし　かの妙高と釋せる意におのつから相似たるをもおもふべし。

印度藏志卷之二十一

大壑　平篤胤　選述

○印度傳通品一第二十一

此品には佛滅後百有餘年より、第四百年に至る間は、唯小乘のみ流行せるが、其の間に次異部起りて、大乘部破れて九部となり、上座部破れて十一部と成れる其の差別を論ひ、また因に其の間々に有し事の心得べき事どもを註し辨へたり、

異部宗輪論云。如レ是傳聞。佛薄伽梵般涅槃後百有餘年。摩竭陀國俱蘇摩城王號二無憂一。統二攝贍部一。感二一白盖一化治二人神一。

此論は。佛滅より四百年許後に。其の法の正統とする。說一切有部なる。世友論師と云が所作にて。彼玄奘比丘が翻譯せる書なるを。今は此に無用の文を略して。採れるなり。下の條々も此に效ふべし。(是より前、陳と號し代にも、此梵本を譯して、部執異論と名けたるが、梵文に爽へる事の有とて、

更に譯せるよし、此論の述記と云ふ物に見ゆ。然れば部執異論とは異譯同書にて、今共に一切經藏に收りて世に行はるゝなり、世友がこと下の條々に註ふを見るべし、)○佛薄伽梵とは。佛祖を尊稱せるなり、(金剛般若經音義に、薄伽伴梵語、或云薄伽梵、或云婆伽婆、或云薄伽跋帝、皆佛十號也と見え、摩訶般若波羅蜜經音義に、舊譯云有大功德、至聖之名也、薄伽此云德、梵此言成就義、衆德成滿名薄伽梵、又此惣攝衆德、餘即不爾、故諸經首皆置此名也とも云へり)○涅槃後百有餘年は。十八部論及び法顯傳には。佛滅度後百一十六年とあり。大抵我が孝安天皇の御世の初比に當り。諸越は周顯王が世の初に當るべし。其は前品の末に引たる西域記の文に。佛涅槃後百一十年と有るよりは。疑なく後の事なればなり。(但し此年紀の考へは、佛祖の卒れる年は、周敬王が三十四年に當れば、其の歲より算へて云ふ說なり、比丘らが說には、佛祖の卒を周穆王が五十三年に當ると云ふなれど、其は非なること、既に前品に論へるが如し)○摩竭陀國は既に出たり。(第十四品を見るべし)○倶蘇摩城は。西域記摩竭陀國の處に。殑伽河南有故城。周七十餘里。荒蕪雖久基趾尙存。舊號拘蘇摩補羅城。唐言香華宮城。王宮多華故以名焉。後更名波吒釐子城。舊曰巴連弗邑訛也(本論の述記には、中印度國名摩竭陀、王大都城名倶蘇摩、倶蘇摩者古舊都城、有新都城、名波吒釐子、阿闍世王先都、王舍其子王等、以王舍地曾起惡逆、遷都於此と云へり)故宮北有石柱高數十尺。是無憂王作地獄處也。釋迦如來涅槃之後。第一百年有阿輸迦王者。(阿輸迦唐言無憂、舊曰阿育王訛也)頻毘婆羅王之曾孫也。自王舍城遷都波吒釐とあり。(また王舍城は、頻毘娑羅王の城邑なり、或は云ふ阿闍世王に至りて此城を築く、阿闍世王の太子既に王位を嗣て此に都し、無憂王が時に波吒釐城に都を遷し、王舍城を以て婆羅門に施すとも云へり、孰か是なるを知らず)○贍部とは。五印度を統稱ふ名なる由も既に論へり。(第五品を見るべし)○感白盍とは。述記に。謂王初嗣位。鐵輪飛空。有白雲盍覆贍部。明所伏處即一天下とあり。(鐵輪飛空

は妄説なること既に第四品に云へりき。）（化治八神は。述記に。謂此王使諸人神鬼造八萬四千塔と云へり。（但し此事は論あり、下に云を見るべし。）さて此無憂王が事は。世に阿育王と訛稱して。人普く其の名を知れば。今此に其の傳の要略を載さむに。雜阿含經に。巴連弗邑有王。名曰月護。生子名曰頻頭沙羅。其王有子名曰修師摩。時瞻婆國有一婆羅門女。極爲端正。頻頭娑羅王。即爲夫人。生子。生時安隱母無憂惱。過七日後立字無憂。（上に引く西域記に、阿育王を頻毘娑羅王之曾孫也と云ひ、述記には、阿育王是頻婆娑羅王之孫なりと有り、是また何れか是を知らず。）又復生子名曰離憂。（西域記に、無憂王有同母弟、名摩醯因陀羅、唐言大帝とありて、始め奢侈縱暴なりしが、阿育王に罪せらるべき時に至りて、出家證果せるよし見えたるは、此離憂がことか。）無憂者身體麁澁。父王不大附提。情所不念。（此王が形貌の醜陋なりし事、なほ本經に委しく見えたり、然るに述記には、此王父未生無憂之日以前、恒慮遮那枳來相殺害、及生無憂之日此怨自死、怨害既除名無憂也、又此王容儀絶比、神彩難方、悦可父母之懷、故以無憂爲號とあり、今と大に異なり。）時頻頭沙羅王邊國。祖叉尸羅反。王語阿育。卒伐彼國。王子去時不與兵甲。阿育言我若果報者。兵甲自然來應。發此語時兵甲即至。往伐彼國。時彼國人民平治道路。莊嚴城郭。奉迎王子。種々供養。王子平此國已。又使伐佉沙國。彼國王即便降伏。如是平天下至於海際。（なほ是より前にも種々の方便して、父王が此阿育を試し察たる事あり、本書を見るべし、また阿育が邊國を伐むと出る時に、四兵衆を地より沸出せりなど云ふことも有れど、例の幻説なれば記し出ず、そは其幻説のみならず、本書此件には殊に幻説多けれど、大かたは漏せり、平天下至於海際とは、西域記に境極瞻部、戸滿物賅と云へるは、即是にて、瞻部洲を併領れる由なり。）時修師摩王子。出外遊戲遇逢一大臣。其臣不修禮法。王子怒即使人打拍。其臣念言。此王子未得王位用性如是。若得王者不可。我等相與立阿育爲王。是時叉尸羅國復反。諸臣

共議白王。令修師摩王子伐彼國。不能降伏。
時父王得重病。王語諸臣曰。立修師摩爲王。
令阿育往至彼國。卽便命終。阿育王如禮法殯
葬父王已卽立。時修師摩王子。聞父王崩阿育爲
王。卽集諸兵而。來伐阿育。阿育王於東門外。
作無煙火坑以待之。彼王子旣來到。而卽趣東
門墮火坑便卽死亡。（佛祖が調達を殺せるも卽
この術計なりしこと、卽に辨へたるに思ひ合すべ
し）於是諸臣以共立阿育故。輕慢於王不
行君臣禮。王亦知之。卽以利劒殺諸大臣。復
王形體醜陋。皮膚麤澁。諸婇女輩心不愛王。王
生忿怒。繫諸婇女以火燒殺。故曰暴惡阿育王。
時大臣白王曰。云何手自殺人。王今當立屠殺之
人。有所殺則以付彼人。王卽聞已求屠殺者。
彼有一山名曰耆梨。中有一人兇惡撾打繫縛
小男小女。及捕水陸之生。乃至拒逆父母。是故
世人傳云兇惡耆梨子。時王諸使語彼曰。汝爲王
斬諸兇人不。彼答曰。一切閻浮有罪者我能淨
除。況此一方。諸使卽呼彼。時其父母言。子不
應行是事。彼卽便殺父母已然後乃至。王卽以

彼爲屠殺者。彼啓王作舍屋。其室極爲端嚴。唯
開一門。門亦極精嚴。於其中間作治罪之法。
羅列狀如地獄。彼屠主聽諸比丘說地獄事。按
此法而治罪人。時彼屠主啓王言。若人來入此
中者不復得出。王答言。如汝所啓當以與汝。
（西域記にも、初無憂王嗣位之後、擧措苛暴、乃
立地獄作害生靈。周垣峻峙隅樓特起、猛焰洪罏、
銛鋒利刃、備諸苦具擬像幽途、招募凶人立爲
獄主、初以國中犯法罪人、不校輕重總入塗
炭、後以行經獄、次擒以誅戮、至者皆死と記せ
り）時有比丘名曰爲海。遊行諸國次至巴連
弗邑。入城次第乞食誤入屠殺舍中。時彼比丘遙
見舍裡火車鑪炭等。治諸罪人如地獄中。便欲
出門時。屠主卽往執彼比丘言。入此中者無
得出也。汝今於此而死。比丘聞已泣淚滿目。屠
主叱曰。汝云何如小兒啼。比丘答言。我不恐
死。志求解脫。所求不成是故啼泣。兇主語曰。
汝今必死何所憂惱。比丘哀言。乞我生命可至
一月。兇主不聽。如是日數漸減止於七日。彼卽
聽許。時此比丘知死期不久勇猛精進坐禪息心至

於七日時。王宮內人。有事差付兇惡人令治其罪。兇主將是女人著臼中以杵擣之令成碎末。比丘見已極厭惡此身。嗚呼苦哉我不久亦當如是。而說偈言。

大師正妙法。　此身如聚沫。　向者美女色。
今將何所在。　生死極可捨。　愚人而貪著。

如是念言。專精修法。斷一切結成阿羅漢。期限已盡。彼兇惡人執彼比丘。著鐵鑊油中。足與薪火。火終不然。於是兇主見火不然。打拍使者。而自然火火即猛盛。久久開鐵鑊蓋見彼比丘。鐵鑊中蓮華上坐。生希有心。即啓國王。（この比丘がかゝる不思議ありしは、死期近きにありて他を顧みず、專精勇猛に佛法を信じ、佛祖を念じたる故に、佛祖の靈その勇猛精進心に應じて、かゝる異驗を付與せるなり、此等の異驗を、妄說なりと思はむは、佛祖の靈妙なる由緣を明らめ知ざる人の僻心なりかし）王即便嚴駕將無量衆。來看比丘。時彼比丘如鴈王即身昇虛空。示種種變化。時阿育王合掌偈言。

形體無異人。　神通未曾有。
修習何等法。　令汝得清淨。
爲我分別說。　我了法相已。
爲汝作弟子。　畢竟無有悔。

時彼比丘而作是念。我今調伏是王。多有所導攝持佛法。當廣分布如來舍利。於此閻浮提盡令信三寶。即向阿育王而說偈言。

我是佛弟子。　逮得諸漏盡。
不著一切有。　息心得寂靜。
生死大恐怖。　我今悉得脫。
永離三有縛。　如來聖法中。
獲得如是利。

時阿育王聞彼比丘言。於佛所生大敬信。白比丘言。佛未滅度時何記說。比丘答言。佛記大王於我滅後。過百歲時。巴連弗邑有三億家。彼國有王名曰阿育。當王此閻浮提。爲轉輪王。宣布我舍利。於閻浮提立八萬四千塔。佛記如是。然大王造此大地獄殺害良人。今宜慈念令得安隱。時阿育王敬信合掌。向彼比丘而作禮言。我得大罪。今即懺悔。我之所作甚爲不可。願爲佛子。受我懺悔勿復責我。而說偈言。

我今歸依佛。於此閻浮提。
普立諸佛塔。種々諸供養。
莊嚴如來塔。妙麗世希有。

時彼比丘。度阿育王已。乘空而化。(この比丘が佛祖の懸記とて說たる事どもは、阿育王を度せむが爲に、方便せる妄誕なり、そは上文の念言に、我今調伏此王云々と有るをもても悟らる、猶次次に云ふを合せ考ふべし、) 時阿育王從彼地獄出。爾時兇主白王言。王不復得去。王曰汝今欲殺我耶。彼曰如是。王曰誰先入此中。答曰我是。王曰然者汝先應取死。卽勅人將此兇主著作膠舍裏以火燒之。又勅壞此地獄。時王欲建舍利塔將四兵衆至王舍城。取阿闍世王佛塔中舍利。還復修治此塔與本無異。如是取七佛塔中舍利。作八萬四千寶篋盛佛舍利。作八萬四千寶瓶以盛此篋。作無量旛幢繖蓋供養之。一日之中立八萬四千佛塔。民人興慶共號曰法阿育王。(七の佛塔とは、佛舍利を納めたる塔は、上の第十八品に見たる如く、阿闍世王が建たる塔と合せて八塔あるを、上文に阿闍世王が佛塔の事を云へる故に、七佛塔とは云へり、誤りて謂ゆる過去七佛の塔とな思ひそよ、西域記にも、摩竭陀國の下に、竹園東有窣堵波、阿闍世王之所建也如來涅槃之後、諸王共分舍利、阿闍世王得以持歸崇建而修供養、無憂王之發信心也開取舍利建卒堵波、といひ、また無憂王既開八國所建諸窣堵波、分其舍利建八萬四千塔、とも有るにて知るべし、なほ龍宮中に入りて舍利を索めたると云ひ、諸鬼神に勅して塔を建たりなど云へれど、悉く妄說なれば洩しつ、此の件西域記は殊に妄誕多かり、)時巴連弗邑有上座名曰耶舍。王詣彼處曰。更有比丘受佛所記當作佛事不。上座答曰。佛臨涅槃時告阿難曰。於我般涅槃後百年中當有長者名瞿多。其子名曰優波崛多。當作佛事教授於人最爲第一。時王問上座曰。優波崛多今已出世不。上座答曰。已出世出家學道。是阿羅漢。共無量比丘眷屬。住在優留曼茶山中。哀愍衆生說淨妙法。(上座とは、謂ゆる上座部の中にも、上座長老たる由なり、斯て其の名を耶舍とは云へど、彼第十三品に見えて、佛祖の幻通をもて比丘

と成たる耶舍には非ず、其由は下文にて知られたり。)王聞已歡喜。速辨二嚴駕一將レ詣二彼所一。時群臣言彼在二王國一宜二遣レ使迎一レ之。王言我當二自往一卽遣レ使言某日當レ往二尊所一。優波崛思惟。若王來者。無量從者殺二害微蟲一。作二是念一已答二使者一曰。我當三自往詣二王所一。時王平二治道路一燒レ香散レ華出迎。優波崛比丘將二諸比丘衆一至二王國一。王甚歡喜供養恭敬。時優波崛爲レ王指二示如來往昔遊方行住處一。及諸大弟子之功二德行住處一。時王如レ是等處々。種々供養及立二塔廟一。(優波崛多がこと、付法藏傳に、始祖大迦葉、二祖阿難、三祖商那和修、四祖優波毱多と立て、摩突羅國人、容貌端正、聰慧辨戈、商那初敎二繫念一若起二惡心一當レ下二黑石一、生二善念一時當レ下二白石一、毱多如レ敎攝念、初黑偏多次白黑等、至二七日滿一唯有二白石一、商那卽爲宣二說四聖眞諦一、應レ時建二得須陀洹果一、初見二商那一便求二出家一商那問汝年幾、答曰十七、商那曰、汝身十七、性十七、毱多曰師髮已白髮白耶、心白耶、商那知二是法器一、卽度出家、受二具戒一已卽得二阿羅漢道一、商那謂曰、佛記レ汝在二百年後一、坐禪第一、大化二衆生一、毱多受レ敎集レ衆說レ法、時阿怒迦王聞二毱多在一レ憂陀山一、遣レ使白言、欲三來問二訊一、毱多躬自往詣至二華氏城一爲レ王指二示如來往昔遊方行住之處一、悉令レ起レ塔、神通化用與レ佛無レ異但無二三十二相一、擧レ世號爲二無相好佛一、化緣已畢作二十八變一、而取二滅度一とあり、)時阿育王。設二大供養一。著二白淨衣服一。執二持香鑪一在二於殿上一向二四方一作レ禮心念口言。如來賢聖弟子在二諸方一者憐二愍我一故。受二我供養一如レ是語時。三十萬比丘悉來集。彼大衆中十萬是阿羅漢。二十萬是學人及凡夫比丘。(この員數は例の妄數にて、元より論ずるに足らず、拘はること勿れ、)然上座之座無二人坐一。王問二之諸比丘一。時大衆中有二耶舍比丘一。是大阿羅漢具二足六通一。白レ王言此座上座之座也。餘者豈敢於レ中而坐。王曰於二尊者所一更有二上座一耶。尊者答曰。更有二上座一佛之所レ記。名曰二賓頭盧一是上座。應レ坐二此處一。王復問言於レ中有レ見レ佛者一不。尊者答曰有也。賓頭盧猶存レ世。王復白言。可レ得レ見二彼比丘一不。尊者曰不レ久當二來至一。(この耶舍比丘が語を案ふに、此比丘も佛祖を見ざる趣なるを以て、往昔の耶舍比丘ならぬこと所知たり、

此の比丘が事なほ次節に引く述記の說にて知るべし、）爾時尊者賓頭盧將無量阿羅漢。次第相隨譬如鴈王。乘空而來在於上座處坐。諸比丘僧各修禮敬次第而坐。時王見賓頭盧頭鬚皓白辟支佛體。頭面禮足。長跪合掌而說偈言。

我統領閻浮。不以爲歡喜。
今得見尊者。勝見於王位。
我今見尊者。便是見生佛。

王復白曰。尊者見如來耶。時賓頭盧以手舉眉毛視王而言。我見如來世無譬類。王復問曰。尊者何處見佛。尊者曰如來將五百阿羅漢。倶初在王舍城安居。時我在中。又佛住舍衞國時。大作神力種々變化。作諸佛形滿在諸方。我爾時亦在於中見如來種々變化神通之相。（此種々の變化はしも、佛祖が山を出て、始めて父母の國へ來れる時よりして節々行へる事にて、前の品々に擧たるが如し、）復佛在天上。與母說法時亦在於中。說法竟來下時優波羅比丘尼。化作轉輪聖王。乘空而來。我亦見此。（こは第十八品に見たる事の物語なり、彼處に具に論ふが如し、然るに賓頭盧、その天上にて說法せる席中に在しと云へるは、彼幻妄の尻を結べる例の妄誕なり、）復佛住舍衞國時。給孤獨長者女在富樓那跋陀那國請佛及比丘僧時。諸比丘各乘空而往。彼我爾時以神力挑大山而往。時如來責我。汝那現如是神足。我今罰汝常在於世不得取涅槃。護持我法勿令滅也。（こは第十九品に見たる事を云へり、此も彼處に論へるを見るべし、但し佛祖に責られたる事は彼品に見えず、斯て此說に據れば佛弟子の多かる中に、此間まで存世せるは、賓頭盧より外には無りしなり、）復如來將諸比丘入城乞食時。有童子戲沙土中。捧上於佛。時如來記。彼童子於我滅度百歲之後。於巴連弗邑受王位。領閻浮提名曰阿育。廣布我舍利。一日之中當造八萬四千塔。今王身是也。爾時亦我在於中。（是また彼屠主に殺されむと爲たる、妖比丘が方便の妄說、および優波崛多が妄誕に合て、王を歡喜せしめたる妄談なり、そを知る者は、唯比丘與比丘、この姦の姦たる旨を、げに然も有らむと忽然に悟らむ者は、唯太上與俊秀ならむか

し）時王白言、尊者今住在何處。答曰、在於北山。山名揵陀摩羅。與六萬阿羅漢俱。於是王卽勅諸群臣。唱令國界集諸五衆捨十萬兩金。布施衆僧。千甕香湯漑灌菩提樹。時王子名曰拘那羅。在王右邊擧二指而不言說。意欲二倍供養。大衆見之皆盡發笑。王亦發笑。復以三十萬兩金供養衆僧。復加千甕香湯洗浴菩提樹。時王子復擧四指。意在四倍。時王瞋恚語臣曰。誰敎王子作是事。群臣等言。王子聰慧利根故作是事耳。時王曰除我庫藏之物閻浮提中一切物。夫人婇女諸臣眷屬。及我拘那羅子。皆悉布施衆僧。唱令國界與衆僧共以香湯洗浴菩提樹。其樹倍茂盛。（西域記呾叉始羅國の下に、城外東南有窣堵波、無憂王太子拘浪拏抉目之處也、此太子正后生也、儀貌妍雅、正后終沒、繼室憍婬、私逼太子、太子灑泣退身、繼室忿怒譖王、王惑卽誡太子曰、呾叉始羅、國之襟帶、吾今命爾作鎭彼國、凡有召命驗吾齒印、印在吾口、其有謬乎、太子銜命來鎭、歲月雖淹、繼室彌怒、詐發制書、紫泥封記、候王眠睡、竊齒爲印、馳使而往賜以責書、輔臣讀之、抉去太子兩目、逐棄山谷、太子曰、父而賜死、其敢辭乎、齒印爲封、誠無謬矣、命旃荼羅抉去其眼、旣失明乞貸自濟、流離展轉至父王都城、其妻告曰、昔爲王子、今作乞人、願得聞知、重伸先責、於是謀計入王內廏、於夜後分泣、對淸風長嘯悲吟、箜篌鼓和、王在高樓聞其雅唱、辭甚怨悲、怪而問曰、箜篌歌聲似吾子、今以何故而來此乎、卽問內廏誰爲歌嘯、遂將盲人而來對旨、王見太子銜悲問曰、誰害汝身遭此禍釁、愛子喪明猶不覺知、凡百黎元如何究察、太子悲泣曰、某年月日、忽奉慈旨無由致辭、其王心知繼室爲不軌、無所究察便加刑辟、時菩提樹伽藍有瞿沙大阿羅漢者、王告其事、願令得復明、時阿羅漢受王請已、卽於是日宣令國人、吾於後日欲說妙理、人持一器來此聽法、以承泣淚也、於是遠近相趨士女雲集、是時阿羅漢說十二因緣、凡厥聞法莫不悲哽、以所持器承其灑泣、說法旣已總收衆淚置之金盤、而自誓曰凡吾所說諸佛至理、理若眞則願以衆淚洗彼盲眼、眼得復明、

發二此語一訖持レ淚洗レ眼、眼遂復レ明、王乃責二彼輔臣一詰二諸僚佐一或黜或放或遷或死、とある拘浪拏は卽拘那羅王子なるが、是抉目の一件、衆淚を集め洗ひて復明せりと云へるは信られねど、凡ては人のよく沙汰する事なる故に、因に委しく抄し出たり）時王洗二浴菩提樹一已。次復供二養衆僧一。時彼上座耶舍語レ王言。大王今大有二比丘僧集一。當下發二淳信心一供養上。時王從レ上至レ下自手供養。復以二三衣幷四億萬兩珍寶一嚫二五部衆一。阿育王所レ作功德無量如レ是とあり。（音釋に嚫梵語具云二達嚫一此云二財施一とあり、○右は雜阿含二十三卷なる全文三十三葉あるが中の、今此に要とある事どもを甚く略文して引たるなり、然るは佛法弘通のことに就ては、此王ばかり高名なるはなく、人の普く口實とする王なれど、大凡の人などは、委く其の因緣を知ざればなり、次節なる生涯の傳も、其の意をもて煩けれど抄しつ、なほ一切經藏に、阿育王經、阿育王傳など云ふ物あり、己が抄し洩せる事どもは其らをも合せ見て知るべし）さて本書この條の發端も例の如く。如是我聞と錄出して、佛祖が在世

阿難及び諸比丘と。王舍城に乞食しける時に。足もて城門の限を踐けるに。大地これが爲に六種の震動あり。身より千日の燄の如き光を放ちて。普く世界を照し。邑に順ひて行く時に。兩童子あり。共に沙中に在りて嬉戲せるが一を闍耶といひ。二を毘闍耶といふ。遙に佛祖を見て闍耶童子念言して麥麨を供養せむと。手に細沙を捧げて佛祖の鉢中に著く。時に毘闍耶童子も合掌隨喜せり。時に彼童子發願して。此善根を以て。一天下の一繖蓋王と生れて。諸佛を供養する事を得てむと云ふを。佛祖きゝて微笑を發せり。（佛祖の笑ふに種々の因緣あり、また種々の奇瑞ありと云ふこと、諸經論に所見たるを、集めて既に第十五品に註へりき、其の樣を思ふに、小膽ならん人は、怖えてしばし魂揚るべく所思るばかりの氣味わろき笑ひにぞ有りける）佛祖は恒に因緣無して笑ふこと無れば。阿難その故を問ふに。佛祖答へて。我今笑者。於二我滅度百年之後一此童子於二巴連弗邑一。統二領一方一爲二轉輪王一。姓孔雀名阿育。正法治化。又復廣二布我舍利一。當下造二八萬四千法王之塔一安樂無量上。阿難

取此鉢中所施之沙。捨著如來經行處。當行彼處と云ふに。阿難すなはち敎の如すれば。阿難當知とて。今此に引きたる阿育王が事を。佛祖の自說せる由に載せり。然れど其はかの兇主に殺されむと爲たりし比丘が。方便に云へる妄誕の懸記を實事に取成しそを前に移して。例のごと作り加たる物なり。其は上に引く文の。精細に書調へたる事ども。都て懸記など云ふべき體裁ならぬ事は。讀書に活眼ならむ人は。披き見て直に知り辨へむ物ぞ。(また西域記に、彼地獄の迹に窣堵波の建たる由を記して、其側有大石。如來所履雙迹猶存。其長尺有八寸。廣餘六寸矣。迹俱有輪相。十指皆帶華文。昔如來將取寂滅。北方趣拘尸那城。南顧摩竭陀國。蹈此石上告阿難曰。吾今最後留此足迹。將入寂滅。顧摩竭陀國也。百歲之後有無憂王。建都此地。匡護三寶。と云へる由を載たれど、石に足迹を蹤著たると云ふこと、阿含に無れば、是また後にせる石を其處に牽來りて、佛祖が神力に誣たる例の作り古迹なり、惑ふこと勿れ、抑右の僞懸記に、阿育王が國王にして、

佛法を尊信せる因緣をば、右の如く作り構へつれど、始めは父に憎まれ王位を得て、暴逆にして、地獄を作りて、無罪の人を數知らず殺し、また其の愛子を盲目となし、次條に引出る經說の如く、謂ゆる三寶を護せる因によりて、終老の時に至りては、其の子に迫られて、僅に半菓の阿摩勒を、自恣するばかりの困窮となり、耄言しつゝ死たる因緣の懸記なきは何ぞや、此はかの比丘が懸記に、此等の事は無りし故に、僞作者もまた逗漏せるなり。)偖また上にも引たる十八部論と云ふ物あり。是も一切經藏に收たるが。今の宗輪論の如く。佛法の後世に至りて。諸部に別りたる由來を述て。佛祖の懸記に託せる書なり。(表題は十八部論と有れど、卷を披けば、文殊師利問經卷下、分別部品第十五と有りて、譯人の名を失せり、然るに此經の全書も、一切經藏に旣に收たり、古人の書にも、十八部論とのみ引たれば、吾もしばらく然は稱ふなり、其の書名をかく題しは、根本二部をおきて、分別せる十八部を以て名とせる物なり。)さて其の書の初に　爾時文殊師利白佛言。佛入

涅槃後。未來弟子云何分別。云何根本。佛告。未來我弟子有二十部。根本二部從大乘出。從般若波羅蜜出聲聞緣覺。諸佛悉從般若波羅蜜出。如地水火風空是一切衆生所住處。般若波羅蜜及大乘。是一切聲聞。緣覺。諸佛出處。文殊言。云何名部。佛告。初二部者。一摩訶僧祇。(此言大衆、老小同會共集律部也、)二體毘履。(此言老宿唯老宿人同會共出律部也、)我入涅槃後一百歲內出二部云々と有りて。其の大衆部より次次に七部を出して八部と爲り。其の老宿部より次次に。十一部を出して十二部と爲り。總ては二十部と爲る由を記して後に。下の條々に引出る。佛滅度後百一十六年云々の說を記せれど。阿育王より以前に。異部の作れると云ふこと。今擧る本文に合はず。後世大乘家の加上說なることと疑ひ無れば。採用せず。述記にも既く此を疑へる說等あり。(其は此の經、かの般若の聽首たる、文殊師利とふ名を指して、其の重きを般若波羅蜜に歸して、根本二部もその本は、大乘より出たりと云へるを以て、宗輪論の撰者世友より後の、大乘般若家が、宗輪論を盜みて僞造せること詳に知られたり、然ればこそ、宗輪論と正に同文なる事もぞ多かる、此等の事は、次々に論ふを見て知るべし、)

是時佛法大衆初破。因四衆共議大天五事不同分爲兩部。

是時とは。阿育王が瞻部を統攝せる當時を云ふ。西域記に。吠舍釐國の下に。城東南行十四五里至大窣堵波。是七百賢聖重結集處也。(重結集と云へるは、かの迦葉等が三藏を結集せるのち、復重ねてと云ふ義なり、)佛涅槃後。百一十年。吠舍釐城有諸苾芻。遠離佛法謬行戒律。時長老耶舍陀住憍薩羅國。長老三菩伽住秣菟羅國。長老釐波多住韓若國。長老沙羅住吠舍釐國。長老富闍蘇彌羅住娑羅梨弗國。大阿羅漢並持三藏得三明有大名稱。衆所知識。皆是阿難弟子。(耶舍陀とは上に引く雜阿含經に、上座耶舍と云へると同人なり、)時耶舍陀遣使告諸賢聖。皆可集吠舍釐城。猶少一人未滿七百。是時富闍蘇彌羅。以天眼見諸賢聖集議理事。運神足至法會。時三菩伽於大衆中。右袒長跪揚言曰。衆無譁。

欽哉念哉。法王寂滅歳月雖淹言教尙在。吠舍釐城懈怠苾芻。謬於戒律。今諸賢者深明持犯。俱承大德阿難指誨。念報佛恩重宣聖旨。時諸大衆莫不悲感。卽召集諸苾芻依毘奈耶訶責制止。削除謬法宣明聖教と有り。此文に言教と云ひ宣と云へるは。前品に論ふ如く。是時いまだ紙葉に載せる籍の無りし故なり。是を以てかく時に結集宣明せでは謬る事の多有しなり。然れど元より異說は有こと無れば。謂ゆる一味和合してぞ有りける。（然れば述記に、佛滅後百有餘年、雖有異部起、百年以前無異部起、一味和合衆生純信と云へり。）○佛法大衆初破とは。阿育王が時まで。佛法の大衆に異說は無りしを是時より、其說破れ初たる由にて。述記に。雙林之後百載以前人。無交競之鬧。糺紛之說。巖內巖外雖兩處弘宣。然尙渾一知見。道終未替。（此事は、既に前の三藏結集品に委く註せれば、今の文をも約めて抄せり。）次有尊者耶舍。慶喜門人。更召七百極果於吠舍離國。再集調伏重整幽訛。澆舛雖生淳和尙挹。（調伏とは律部を云ふこと、既に前品に說たりき、慶喜は卽阿難なり、耶舍は其弟子にして、前節此頭の上座なりし故に、此の擧有りしこと、前節に註せる說どもに相發して辨ふべし。）漸復時移解味聖少凡多。大天既搆辨爭馳。羣聖亦濬情競發。人爲異部法有殊宗。遂使一味幽致分成二十之宗。慧路自此參差。道迹難爲取捨と云へるが如し、（其の爭馳の趣、また遂に二十部と成れる由來は、次々に說もて行くを見て知るべし。）○四衆の事は次節に云ふべし。○大天五事とは。本書に。其の五事者。如彼頌言餘所誘無知。猶豫佗令入。道因聲故起。是爲眞佛法と有る述記に。一餘所誘。二無知。三猶豫。四佗令入。五道因聲起。是爲五事と云ひ。其の委しき事實は。俱舍論の遁麟記に。摩訶提婆者。摩訶云大。提婆云天。大天本是末土羅國商人之子。（述記に、昔末土羅國に一の商主あり、少して妻室を聘して一男子を生り、顏容端正なり、字を大天と云ふと見え、末土羅國は摩伽陀國の東南に在りと、書どもに見えたり、）因造三逆罪。深生憂悔。欲求滅罪。遂乃出家。（述記また俱舍慧暉註に、婆沙論を引きて、

父の商主遠行して、子遂に母に染穢せり、父が家に還りて其の惡事の彰るゝを恐れて、母と共に計りて父を殺し、母を將て波吒釐城に投じ、還りて摩伽陀國に厲し、遇に本國にて供養せる、阿羅漢の僧に逢ひて、醜事を傳へむ事を恐れて、又た方便して此僧を殺し、母後に餘人と交通するを見て、憤恚して其母をも殺せり、既に三逆罪を造りて深く憂悔を生じ、釋子沙門に滅罪法ありと聞て、雞圓寺に入りて、一僧の經偈を誦するを聞くに、若人造二重罪一修レ善必滅除、彼能照二世間一如三日出二雲翳一いへり、大天きゝて甚歡喜して、便出家を求む、其の僧審に其根性を撿問せず、遂に度して出家せしむ、)出家未レ久便能誦二持三藏一。(述記に、大天聰慧にして、出家いまだ久しからず、便能く三藏の文義を誦持し、言詞淸巧にして善く化導し、歸仰せざる者なしと有り、)王聞數請入レ宮供養。便與二王妃一私通。(述記に、此王を無憂王とあり、信に其の說のごとし、)然後復稱二我是羅漢一。後於二寺中一。夢失二不淨一。而令三弟子浣二所レ汚衣一。弟子白言。師煩惱盡何有二斯事一。彼言漏有二二種一。一者煩惱、羅漢已無。二者不淨。羅漢猶有。煩惱雖レ盡。豈無二便利涕唾等一耶。然我之漏失爲レ魔嬈。故汝不レ應レ怪。(これ謂ゆる惡見五事の第一、餘所レ誘といふ者なり、)彼又欲レ令二弟子親附一。矯設二方便一。次第記二別四沙門果一。弟子問言。阿羅漢等應レ有二證智一。如何我等都不二自知一。彼言。羅漢亦有二無知一。無知有レ兩。一者染汚。羅漢已無。二不染汚。羅漢猶有。(これ謂ゆる惡見五事の第二、無知といふ者なり、)弟子復言。曾聞聖者已度二疑惑一。四諦三寶我猶懷レ疑何也。彼言。疑惑有レ兩。一者隨眠性疑。羅漢已無。二者是處非處疑。羅漢猶有。(述記に、稱レ理名二是處一、不レ稱レ理名二非處一、於二此事一不レ決名二處非處疑一とあり、是謂ゆる惡見五事の第三、猶豫といふ者なり、)弟子又言。我是羅漢應三自知二證悟一。如何但由二師記一。彼言。羅漢有レ由二他度一。如二舍利弗目連。通慧第一。佛若未レ記彼不二自知一況汝鈍根。不レ由二他度一。而自能了。(述記に、後に彼弟子、諸經に、阿羅漢有二聖慧眼一、於二自解脫一能自證知と有るを披き讀て、此問を爲せる由見たれど、此間はなほ讀べき經の無りしかば、此は謬說

なり、鱗記に其說なきぞ正しき、是謂ゆる惡見五事の第四、(令二他入一といふ者なり、)然彼大天。雖レ造二衆罪一。未レ斷二善根一。後於二夜中一自懷二重罪一。憂惶所レ逼。高聲唱言苦哉苦哉。弟子尋白レ師言。所作已辦。何乃唱レ苦。彼遂告言。我呼二聖道一。謂諸聖道若不三至誠稱二苦名一。命終不二現起一。(これ謂ゆる惡見五事の第五、道因レ聲起といふ者なり、)後雞園寺於二布薩時一。大天昇レ座。集二前五緣一。而作レ頌言。

無學漏失因二魔引一。　無知疑惑由二他度一。
聖道不レ起假レ聲呼。　是謂二如來眞佛教一。

爾時衆中有學無學。多聞持戒修二靜慮一者。聞二彼所說一。翻二彼所說一。三句同レ前。改二第四句一。是汝狂言非二佛教一。於レ是竟夜鬪諍紛紜。乃至終レ朝。城中士庶。國王自來和レ諍僻二用律文一。行籌滅レ諍憑二多人語一。(述記に、城中の士庶大臣など、相次て來り和するに、皆息ること能はず、時に無憂王これを聞て、自ら出て鶏園寺に詣りて、大天に孰か非、孰か是なると問ふに、大天白して言く、戒經中に說あり、若欲レ滅レ諍依二多人語一と有りと云へるよし見えたり、)時賢聖衆中耆德雖レ多。而僧數少。大天朋內耆德雖レ少。而人衆多。遂以二大天一爲レ是。聖衆爲レ非。於レ是聖衆便捨二雞園一。欲レ詣二他處一。王聞瞋責。欲レ驗二是非一。遣二送恒河一。載以二破船一。將二以墜溺一。時諸聖衆既逼二命難一。咸運二神通一。並攝二同見未得通者一。凌レ虛履レ空。如二飛鴈王一。西北而去。往二迦濕彌羅國一山谷栖止。於レ是便分二二部一。一上座部即聖衆也。二大衆部大天衆也。とあり。本文に分爲二兩部一と云へることは是にて知るべし。(上件遁麟記の文に、まゝ通え難き事も有るをば、大毘婆沙論九十九卷なる同說、また述記を採りて補へる所もあり、)○西域記に、摩揭陀國無憂王、以二如來涅槃之後第一百年一、命二世君一臨威被二殊俗一、深信二三寶一。愛二育四生一、時有二五百羅漢僧五百凡夫僧一、王所二敬信一、供養無レ差、有二凡夫僧大天者一、闊達多智幽求二名實一、潭思作レ論理違二聖教一、凡有二聞知一群從異議、無憂王不レ識二凡聖一、因二情所一レ好黨二援所親一、召二集僧徒一赴二殑伽河一、欲レ沉二深流一、總從誅戮、時諸羅漢既逼二命難一、咸運二神通一凌レ虛履レ空至二迦濕彌羅國一とあり、)また述記に。時諸賢聖各起二神通一。作二種々形一

相次乘レ空西北而去。王聞見已深生二愧悔一悶絶僻レ地。水灑乃蘇。速卽遣レ人。尋二其所一レ趣。在二迦濕彌羅一。後固請レ還。僧皆辭レ命。（西域記には、時無憂王聞而悔懼、躬來謝レ過請レ還二本國一。彼諸羅漢確不レ從レ命とあり、）王遂總捨二迦濕彌羅國一。造二僧伽藍一安二置聖衆一。隨下先所二變作一種々形上題二伽藍號一謂二鴿園寺一。數有二五百一。多賫二珍寶一。營二辨什物一而供二養之一。由レ是爾來此國多有二諸賢聖衆一。任二持佛法一。相傳制造于レ今猶盛。（前節に引たる雜阿含經に、阿育王が集めたる僧衆を、十萬是阿羅漢、二十萬是學人及凡夫比丘など云へれど、妄數なること、遁麟記述記西域記などには、五百羅漢、五百凡僧など有るにて知るべし、但し此五百もまた大數を言へるなり、）於レ後大天因遊二城邑一。有二占相者一。遇爾見レ之竊語レ彼言。今此釋子却後七日定當二命終一。大天報曰。吾已久知。至二雞園寺一遣二諸弟子一。遍告二國王及諸臣衆人一却後七日吾當二涅槃一王等聞レ之無レ不二傷歎一。至二第七日一彼遂命終。王及諸臣城中士庶。悲哀戀慕。各辨二香薪並諸蘇油華香等物一。積二置一處一。而焚二葬之一。持レ火來燒隨至隨滅。種々方計竟不レ能レ燃。有二占相師一謂二衆人一曰。彼不レ能レ消此殊勝葬具。宜下以二狗糞一而灑中穢之上。便用二其言一火遂炎發。須二臾焚蕩一倏成二灰燼一。暴風卒至飄散無レ遺此卽大天乖諍由序。諸有智者應二知避レ之。とあり。大毘婆沙論九十三卷に載する所も。大抵同じ趣なり。（偖この占相師が語を思ふに、幽に甚く惡ふ神の有りて、正火を以ては燒ざる神意にこそ有けめ、然思ひ合さるゝ事は、謂ゆる穢多乞食など、正火を用ふる時は、必ず其の物の成ざるを、然るをりは死骨または狗糞など、汚き物の限りを其の火に打加ふれば、事もなく其の物の成るよし聞たり、大天が死骸の燃ざるに、狗糞を灑ぎ汚せること、能くも符合せり、幽き由ある事なるべし、）

兩部者。一大衆部。二上座部。四衆者一龍象衆。二邊鄙衆。三多聞衆。四大德衆。

是謂ゆる兩部は。述記に。佛初入滅。七葉巖中。二部結集。界內卽有二飲光一。時爲二上座一。滿慈當レ結二集阿毘曇一。近執當レ結二集毘奈耶一。慶喜當レ結二集素怛纜一。界外無二別標首一。但總言二大衆一。時雖二

兩處結集。人無異諍。法無異說。界內者年至多。界外年少極多。至大天乖諍。昔界時外少年之僧門人。共爲一朋。名大衆部。往昔界內者舊之僧苗裔。共爲一徒。名上座部。此乃根本諍起之先首也。と有るが如し。(飮光は迦葉、滿慈は富樓那、近執は鄔波離、慶喜は阿難なり、阿毘曇は論藏、毘奈耶は律藏、素怛纜は經藏なること、前品に既に委く說たり。)〇四衆のこと同記に。種々の異說を擧たる中に。龍象衆者。喩大天之流。恃國王大臣之力。威勢叵當。性稟凶頑爲惡滋甚。鬪諍之首也。邊鄙衆者心行理外。因之爲邊。無德可稱名之爲鄙。是等既非諍首。大天之門徒等也。多聞衆者。凡夫學者。妙達幽微。廣閑三藏。助善朋黨稱曰多聞。卽黨援聖衆者也。大德衆者卽聖衆也。契理通神。戒淸學博。道高無上。名爲大德。四果等聖也と有るを取るを取るべし。(なほ四衆に各々二說を擧たれど、皆よく叶へりとは聞えず、委くは本書を見て知るべし。)〇さて此兩部は差別を。巨細に言むは說長ければ。其の較略を言むに。上座部は。上に引たる十八部論注に。體毘履此言老宿。唯老宿人同會共出律部也と有れど。律のみに非ず梵語に薩婆多と稱するを。一切有部と譯して。諸書に根本說一切有部と云へると同流なり。(但し同說にして、然しも二流に立たるは何と云ふに、其の根本の說には異無れど、上座と稱せる部には論藏を後にし、說一切有と稱せる部には、論藏を先にすと云ふのみの相異なり、其の由は第九項に出ずを見て知るべし。)斯て此を根本說と稱ふは。佛祖が正說根本たる由にて。此は信に然る事なり。また一切有部と稱ふは。此宗輪論の撰者世友が語に。謂一切有者。皆二所攝。一名。二色。過去未來體亦實有云々と言ひ。述記に。說一切有者 一切有二。一有爲。二無爲。有爲三世。無爲離世。其體皆有名一切有と云へるにて。其大旨を知るべし。(また近く翻譯名義集に、薩婆多此云一切有、此部計三世有實三性、悉得受戒、大集云、而復讀誦書寫外典、受有二世及以內外、破壞外道、善能論議說一切性、悉得受戒、凡所問難悉能答對、是故名爲薩婆多と有るをも思へ。)其の說相の詳なる趣は。佛

祖生涯の品々に採れる謂ゆる轉法輪の說法より始め。次々の說相にて知るれば。今更に云はず。其は既に云へる如く。彼品々の事實及び說法は。宗輪論なる一切有部の本義を熟察し。そを諸說を擇ぶ規則と爲して。諸經を糺し載たればなり。(然るは宗輪論は、其の撰べる時代いと諦にて、撰者も著く、かつ佛祖が入滅より間近く、一切經藏中に、是ばかり正しき論は有ること無れば、佛書學の規則は、此を熟讀して年代を明らめ、諸部の立說の趣を知るに及こと無し、其は一切有部の根本說を熟知りて、大衆部の根本說と比挍し考ふれば、其の互に異なる所より、眞僞本末見るに從ひて知られ、大衆部と、一切有部と、二流の根本說を熟知りて、其より分流せる諸部の異同を比挍すれば、其の増說相異瞭然として知らるゝめり、然れど斯樣の活斷はしも、昔者に有りし多聞衆の類なる仲基が倫こそ有れ、昔者に有りし龍象衆の類なる文雄が徒は、得知こと能はず、假令知るとも、偏執我慢の護法念より、或は國侯臣吏の力を恃み、或は謂ゆる邊部衆の類を誣惑はさむを、世に賢衆は少く、凡衆は多き當昔よりの效にし有れば、眞說の世に普からむ事はいと有り難くなも有りける。)然て其の大衆部は。十八部論注に。摩訶僧祇此言二大衆一。老小同會共集二律部一也。と有れど是も律のみに非ず。(そは近く名義集に、摩訶僧祇此云二大衆一。大集云、廣博徧覽二五部經書一、とも有るにて知るべし、)其宗義は。此宗輪論の世友が言に。謂諸佛世尊皆是出世。(述記に、此部意說、世尊之身並是出世、無レ可レ過故、唯無漏故、謂諸異生說名爲レ世可二毀壞一故、佛世尊下過二一切一、無レ所レ劣故不レ可二毀壞一、超二過毀壞一皆是出世、約レ人爲レ論無漏身故、薩婆多等其義不レ然と云へり、)一切如來無二有漏法一。(述記に、約レ法爲レ論、十八界等在二佛身一時皆名二無漏一、非漏相應、非漏所レ縛故名二無漏一、佛所有三業皆亦是無漏、故諸如來無二有漏法一所餘諸部皆不レ然と云へり、)諸如來語皆轉法輪。(述記に、佛所說語皆爲二法輪一故佛法輪非二唯八道一、薩婆多說八支聖道是正法輪、見道稱レ輪、亦非二佛語皆爲二轉法輪一、今此部說、非二唯見道獨名爲レ輪、佛所說語無レ非二利益一故、佛所說皆是法輪、と云へり、)佛

以二一音一說二一切法一。（述記に、佛經ニ多時ニ修習圓滿、功德神力、非レ所二思議一、以二一音聲一、令二一切有情聞レ法別解一、除二自靡勞一、即由三一音中能說二一切法一故、令三諸聞者皆別領二解麁細義一故、薩婆多等卽不レ許レ然、至下當レ知るゝと云へり。）世尊所說無二不如義一。（述記に、佛所說語令二他利益一、無レ有下虛言不レ利益上者、皆饒益故、薩婆多等說、佛世尊亦有二不如義言一、對レ之故也と云へり。）如來色身實無二邊際一。如來威力亦無二邊際一。諸佛壽量亦無二邊際一。（述記に、薩婆多等諸部亦許レ有二此三無邊一、有二何差別一、而今敍レ之、と云へり、此事に就ては義論あり、既に第十品に委く論へるを見るべし。）佛無二睡夢一。（述記に、薩婆多師、許二佛有一レ眠、而無レ有レ夢、以レ無二妄思欲念起一故、亦有三諸部許二佛有一レ夢故、合而言三佛無二睡夢一と云へり。）如來答レ問不レ待二思惟一。佛一切時不レ說二名等一。常在定故。然諸有情謂說二名等一歡喜踊躍。（述記に、此部意說、諸佛說法、任運宣說、不レ須レ思二惟名句文等一、任運自成二應理言敎一、勝名句等、常在レ定故、然聽レ法者謂、佛思二惟其名等一而宣說法、深生二歡喜踊躍一依レ敎進修奉行、諸部不レ然、卽佛雖レ無二加行思慮一、實亦思二惟所說名等一、編次如レ法、方爲レ他說、故此部所レ言異二諸部一也と云へり。）一刹那心了二一切法一。（述記に、餘部佛心、一念不レ能レ了二一切法一、除二其自性相應共有一、今此一念亦了三自性相應共有等法差二別自性一、故異二餘宗一と云へり。）一刹那心相二應般若一知二一切法一。（述記に、此明三佛慧一刹那時與レ心相應、亦能解二知諸法一、皆盡圓滿慧故、至二解脫道金剛道後、一念之間、卽能解二知諸法自性一、不レ假二相續一、方知レ法盡、皆亦解二知慧自性一故、前明下心王了二別法一盡上今明下智慧解二知法一盡上と云へり。）諸佛世尊盡智無生智。恒常隨轉乃至二般涅槃一。（述記に、薩婆多等佛尚有二無記心一、何況二智、許下恒現起、或無漏智佛恒現前、漏盡身中恒現前上、故名爲二盡智一、無生身中恒現前、故名二無生智一、薩婆多等身卽可レ然、智卽不レ爾故是異義也、と云へり、右三節は、後に般若經の出興すべき魁語と云ふべし。）一切菩薩入二母胎中一。皆不レ執二受羯刺藍、頞部曇、閉尸、鍵南一、爲二自體一。一切菩薩入二母胎一時作二白象形一。一切菩薩出二母胎一時皆從二右脇一生。一切菩薩

不起欲想恚想害想。（此等の事は、第十一品に、既に云へれば今更に註せず。）菩薩爲欲饒益有情、願生惡處。隨意能往。（こは後世に、法華經の出興すべき創語と云ふべし、普門品など思ふべし。）以一刹那現觀邊智、遍知四諦諸相差別。眼等五識身。有染有離染。色無色界具六識身。五種色根肉團爲體。眼不見色。耳不聞聲。鼻不齅香。舌不嘗味。身不覺觸。在等引位有發語言。亦有調伏心。亦有諍作意。所作已辨無容受法。諸預流者心。心所法能了自性。（こは薩婆多部の四諦等を貶して、般若及び楞伽などの胚胎せるにて、即後世かの二經の出興すべき創言と云ふべし、薩婆多とは既に委く云へる如く、一切有部にて、一切有部すなはち上座部なること、下に云ふ如くなれば、此は上座部を云ひ貶さむと構へ出たる立言なり。）有阿羅漢爲餘所誘。猶有無知。亦有猶豫。他令悟入。道因聲起。（こは上に出たる大天が五事の立説なり、述記に、大衆部承大天苗裔、故今陳五事旨と言へるが如し。）苦能引道。苦言能助。慧爲加行。能滅衆苦。

亦能引樂。苦亦食。（こは彼大天が、夜中に苦哉苦哉と呼はりし事より演て、道因聲起と云ふ義を、立たるに起れる説にて、後に聲を絶ず稱名する宗の、出興すべき創語と爲すべし、）第八地中亦得久住。乃至性地法皆可説有退。豫流者有退義。阿羅漢無退義。無世間正見。無世間信根。無無記法。入正性離生時。可説斷一切結。諸預流者造一切惡。唯除無間。佛所説皆是了義。（こは後に彌勒の懸記、十地經説の興り出べき紀原と云ふべし、）無爲法有九種。一擇滅。二非擇滅。三虚空。四空無邊處。五識無邊處。六無所有處。七非想非々想處。八縁起支性。九聖道支性。心性本淨。客塵隨煩惱之所雜染。説爲不淨。（述記に、無始以來、心體自淨、由起煩惱、故名染煩惱、非心無始本性、故立客名と云へり、此は正に楞伽經の旨におなじ、）隨眠非心非心所法。亦無所縁。隨眠異纏。纏異隨眠。應説隨眠與心不相應。纏與心相應。過去未來非實有體。一切法處非所知非所識。是所通達。都無中有。諸預流者亦得靜慮。と云へるにて知るべし。（以上は皆、

是時まで一味和合し來れる佛教とは、違背せる新說にて、中にも最末の說は、上座部の一切有といふ說をうち破れる、後世大乘說の起る張本なりかし。)是を以て本論の一切有部の說中に。四念住能攝一切法。一切隨眠皆是心所。與心相應。有所緣境。一切隨眠皆纏所說。非一切纏皆隨眠攝。緣起支性定是有爲。八支聖道是正法輪。非如來語皆爲轉法輪。非佛一音能說一切法。世尊亦有不如義言。佛所說經非皆了義。佛自說有不了義經。など云へるは。殊に嚴にその大衆部說を剝せる語なり。心を著て見るべし。(猶委くは本論を見て、今己が抄せる事どもの、精詳ならぬを精詳にかき著はして、初學に示さむ後人もがな、然るは、己かくは載せど、尚言足らず所思ゆればなり。)さて彼阿育王が時世に有りける事ども。是にて其の較略を說竟たれば。今また因に彼王が生涯の事を記し續てむ。其は雜阿含阿育王因緣經に。阿育王於如來法中。得大敬信。時王問諸比丘言。誰於如來法中行大布施。諸比丘言。給孤獨長者最行大布施。王復問曰。彼施幾許寶物。比丘答曰。以億千金。王聞已彼長者尚能捨億千金。我今爲王。當以億百千金。施於八萬四千佛塔。一一塔中。施百千金。復作五歲大會。會有三百千比丘。用三百億金供養於彼僧衆中。第一分是阿羅漢。第二分是學人。第三分是眞實凡夫。(給孤獨長者が大施を行へること、第十三品に既に出たり、斯て此王彼に劣らじと、倍して大施を行へる、其の愚の甚しき事、また此數の妄なること、次の文を見て知るべし。)時王得重病。自知命欲終盡。時有大臣。名羅陀崛多。見王重病命垂盡稽首而問病。王言。我常所願。以滿億百千金作功德。今願不得滿足便就後世。時計校前後所施金銀珍寶。唯四億未滿。此大臣是王宿命施佛土時同伴童子。(王の宿命に童子にて、佛祖に沙を施せる說の妄なること、上に辨へたるが如し、偖此に王の生涯施せる金銀珍寶を計校するに、唯四億未滿と有るにて、前に謂ゆる員數どもの、悉く妄數なること知られたり。)王卽辨諸珍寶送與雞雀寺中。時太子名曰三波提。諸臣等啓太子言。大王將終不久。今以此珍寶送與寺中。今庫藏財

寶已竭。諸王法以物爲尊。太子今宜斷之勿使大王用盡。時太子卽勅典藏者。勿復出與。時阿育王自知索諸物不復能得。所食金器送與寺中。時太子令斷金器給以銀器。王食已復送與寺中。又斷銀器給以銅器。王亦以此送與寺中。又斷銅器給以瓦器。時王手中有半阿摩勒果。悲淚告諸大臣言。今誰爲地主。諸臣等曰。王爲地主。王卽曰。汝等何假妄語。我坐王位不得自在。半阿摩勒果在我手。此卽我有。先領閻浮。今一旦貧至。如恒河一逝不反。先時所令速疾無礙。今有所求無從我敎。如華轉萎我亦復爾。（名義集に、阿摩勒果樹葉似棘華白、而小、果如胡桃、味酸甜可入藥とあり。）時阿育王呼侍者言。汝憶我恩。持此半果送雞雀寺。禮諸比丘白言。阿育王問訊聖衆。閻浮提是我所有。今者頓盡於一切財不得自在。今此半果我得自由。此是最後布施檀波羅密。（我が有てる物のかぎり悉布施するを、檀波羅蜜と云ふこと、既に第二十品に委く說たりき。）哀愍我故。納受此施。時彼使者受王勅已。卽持半果至雞雀寺。至上座前具演王勅。時彼上座作是念言。云何令此半果一切衆僧得其分食。卽令研磨著石榴羹中行已。一切衆僧皆得周徧。（西域記に、無憂王所建之伽藍趾側有大窣堵波、名阿摩落伽、阿摩落伽者印度藥果之名也、無憂王遘疾彌留、知命不濟、欲捨珍寶崇樹福田、權臣執政誡勿從欲、其後握阿摩落果半爛、長息問諸臣曰、贍部洲主今是何人、諸臣對曰唯獨大王、王曰不然、我今非主唯此半果、而得自在、嗟呼世間富貴危甚風燭、告侍臣曰、持此半果詣彼雞園施諸衆僧、作如是說昔一贍部洲主、今半阿摩落王、願受最後之施哀愍貧乏增長福種、僧中上座曰無憂大王虐疾在躬姦臣擅命□□積寶非己、半果爲施、承王來命、普施衆僧、卽羹中總煮、收其果核起窣堵波とあり。）阿育王復問傍臣曰。誰是閻浮提王。臣言太王是也時王從臥起而坐。顧望四方。合掌作禮心念口言。我今以此閻浮提洲施與三寶隨意用之。以此語書紙上而封緘之以齒印印之。作如是事畢便卽就盡。時太子及諸臣。宮人。國界人民。

興種々供養。葬送如王法。而闍維之と有るぞ。阿育王が生涯の有趣なる。（齒印のこと、上の細注に引たる西域記の文にも見えて、彼文に據れば、齒に墨などを塗りて紙に印すると見えたり、阿含中に、紙上に書する事の見たるは、唯この一所なり、闍維は名義集に、正名茶毗、此云焚燒と有りて、火葬の事なる由は既にも註へり。）抑此王はしも。世の比丘比丘尼は更にも云はず。佛法に甚く歸依する人々は。佛菩薩と同じ樣に。その道德をしたひ感れど。何に頑愚を極めし死期ならずや。（其は此王が一世の行狀によりて、其の爲人を思ふに、生質いと愚昧にして、强暴を兼たるが、頗ぶる權謀武略に賢き性も有りて、始め反ける國々を討て功をたて、兄を殺して國をも知りたるは、權謀武略あるが故なれど、我を輕慢する大臣どもを躬から殺し、我を愛せざる婇女どもを燒殺し、また屠殺者を求めて、謂ゆる地獄の有趣なる刑を行へるなど、甚く暴虐なり、然るに彼比丘が、一時の妄誕に其我を折りて、然る暴虐の冥罰を畏るる心より、佛法に歸依して、姦僧どもに幻化せられ、無量の國寶を捨て、比丘僧に布施せるは、固より愚昧の性にして、道の眞を知らざる故なり、其の闇昧なる事は、繼妻の讒を信じて、其の愛子を放らし、盲目とせる一事を以ても辨ふべし、斯く齡の末に重病にかゝり、尙も國寶を盡して、僧に布施せむと欲するを、其の世子および諸臣等に斷せられて、纔に半果の阿摩勒を寺僧に布施して、病惑の耄言ども吐散せるが、死期に及びて、其國をもて三寶に施與すれば、隨意に用ひよと印書して、父祖の國をも寺僧にあたへ、子孫の事をも思はざるは何事も我が意に任せぬより、更に惡念を生じて、子孫らが保國の計を亡はしめむと欲せるなり、嗚呼この惡毒の心行を、牽らし賦たるは、それ何物ぞや、まさに幽にその魅あり、能く其主性を知ざる人は、必ず其の魅に牽らる、國君たらむ人などは、殊に心すべき事にこそ、然るは其の魅ゆゑに國を失へるが諸越にも有ればなり）さて阿育王が子孫のさまは。右の文の連次に時諸臣欲立於三波提紹王位。中有一臣語諸臣曰。前王在時。欲以滿十萬億金作功德。減四億不滿十

萬一。故捨二閻浮一施二與三寶一。欲レ令二滿足一。今是大地屬二於三寶一云何而立爲レ王。諸臣聞已。卽以二四億金一送二與寺中一。立二三波提一令レ紹二王位一。三波提王子名二毗梨訶波低一次紹二王位一。毗梨訶波低王子名二毘梨訶西那一次紹二王位一。毘梨訶西那王子名二沸沙須摩一次紹二王位一。沸沙須摩王子名二沸沙蜜多羅一次紹二王位一。（阿育王より沸沙蜜多羅王まで凡て六世なり、此事につきて論ひあり、下に云ふべし、）時二沸沙蜜多羅王問二諸臣一曰。作二何等事一令二我名德久存二於世一。諸臣等之信二三寶一者。啓レ王言。阿育大王是王前種。彼王在世。造二立八萬四千佛塔一。復與二種々供養一。此是名德相傳至レ今。王欲レ求レ名。當レ造二立八萬四千佛塔一。王言。阿育大王有二大威德一辨二此事一。我不レ能レ作更思二餘事一。中有二一臣不レ信二三寶一者。啓レ王言。世間二種法。傳レ世不滅。一者作善。二者作惡。阿育大王作二諸善行一。王當下行二惡行一打二壞八萬四千塔上。王用二此語一。卽興二四兵一往二詣寺舍一壞二諸塔寺一。王先往二雞雀寺一。寺門前有二石師子一。卽作二師子吼一。王聞レ之大驚怖。非二生獸一而能吼鳴。還二入城中一。呼二諸比丘一問言。我

壞レ塔爲レ善壞二僧房一爲レ善。比丘答曰。二不レ應レ行。王其欲レ壞者。寧壞二僧房一。勿レ壞二佛塔一。時王殺二害比丘一及壞二塔寺一。（寺門なる石師子の吼たりと云ふこと、終に其の寺を壞れるを見れば、例の幻說なるか、若實にさる異の有らむには、佛法の例の異驗にぞ有りける、怪むに足らず、）如レ是漸々至二婆伽羅國一復唱令。若有レ人。能得二沙門釋子頭一來者。賞二之千金一。時彼國有二一阿羅漢一。化二作衆多比丘頭一。與二諸百姓一令レ送二至於王所一。令二庫藏財寶竭盡一。王知二是事一。倍復瞋恚。欲レ殺二彼阿羅漢一。時彼羅漢入二滅盡三昧一故。王作二無量方便一。不レ能レ傷二其體一。（凡て佛法に謂ゆる三昧といふ術は、もと婆羅門の仙術を受たる物なる故に、かゝる奇特は恒の事なれば異むに足らず、）如レ是漸進至二佛塔一。時有二一鬼神一名曰レ蟲。行二諸惡行一凶暴勇健。彼蟲神排二擡大山一。磓二笮王上一。及二四兵衆一無レ不二死盡一。彼王終亡阿育苗裔於レ此永終と有り。此王がかゝる死を致せること。是また佛法の異驗なり。蟲神の殺せりと言ことは覺束無れど。亦有まじき事にも非ずかし。（然れど本經に、佛法を守護する牙齒といふ鬼

神に一女あり、蟲神その女を索む、牙齒その索めに應じて、蟲神を聟となし、相語ひて、蜜多羅王を磓笮せしめつと有るは、例の妄說にて信ずるに足らぬ事なり。）さて此經に。蜜多羅王が苗裔の。永く終たる由云へると。此王は阿育王が六世孫なるとに據りて考ふるに。阿笈摩の經々は。諸經の中に古けれど。佛滅より三百年餘り後の集錄なる事は。まづ論ひ無き事なり。其由は下に委しく論ふを見て知るべし。（彼天游が赤裸々に、相類たる考へ有れど精からず、其事も下に論ふを見るべし。）

後卽於此第二百年。大衆部中流出三部。一說部。二說出世部。三雞胤部。

此文に後卽と云へる後は。上座部と大衆部と二部に分別せる後をいひ。卽とは。大衆部より次々に。分別せる諸部の有るが中に。此三部は最前に流出せるが故に卽とは云へり。（其は次なる三章ともに、卽とは云はず、上座部より始めて一部を出せる章にも、後卽と記せるを照應して辨ふべきなり。）述記に。後卽於此第二百年者。於大衆上座部分之後。卽一百年外。二百年還。又更部起と云へるは少か言足らねど。下に第二百年滿時と云へる語の有るを合せ考ふれば。佛滅より百五六十年計りの頃を第二百年と云へること所知たり。（皇國は孝安天皇の御世の中頃、漢土は周の顯王が世の末頃にや當らむ。）さて右三部の宗義は。述記に。一說部說。世出世法皆無實體。但有假名。名卽是說。意謂。諸法唯一假名無體可得。卽乖本旨。所以別分名一說部。從所立爲名也。（眞諦法師論、名與此同、文殊問經云、執一語言、部名雖相似。然注解云、所執與僧祇同。故言一說、此釋非也、○文殊問經とは、かの十八部論の本名なり。）說出世部明世間煩惱從顚倒起。此復生業。從業生果。世間之法既顚倒生。顚倒不實。故世間法但有名都無實體。出世之法非顚倒起。道及道果皆是實有。唯此是實。世間皆假。既乖本旨。所以別分名說出世部。從所立爲名也。（文殊問經注、可稱解者此猶非也、眞諦法師云出世說者隨順梵言、於此便倒也。）雞胤部唯弘對法不弘經律。是佛方便敎故。頌言出家

爲説法。聽敏必憍慢。須捨爲説心正理正修行。若爲講經而出家者、講經必起憍慢。憍慢起故不得解脱。須捨爲説心。應依正理正勤修行斷煩惱也。故知經是方便不許説故。唯有對法是正理也。故此部師多聞精進。速得出家。卽第一時。大衆部中出三部也とあり。（對法の梵語は、阿毘曇と云ふ、卽ち論なり、案ふに此部の所立は、後世禪家の説に似たり、楞伽經は、此部の末裔にて作れる物ならむも知べからず。）さて雞胤部と云ふ由は。憍矩胝此云雞胤。上古有仙。貪欲所逼遂染一雞。後所生族。因名雞胤。婆羅門中種姓也と見えたり。（また説に、文殊問經注云、律主姓也、是釋名同、眞諦法師云灰山住部。此言非也、本音及義皆無此説、此從律主之姓以立部名とも云へり。）

次後於此第二百年。大衆部中。復出一部名多聞部。

此文に次後と云へるは。上の三部の流出せる次後を云ひ。此第二百年とは。佛滅後百年を過ぎて。二百年に至るまでの間を云へり。（下條も是に效ふべし。）多聞部と云ふ名義は。述記に。此第二時分、多聞部廣學三藏深悟佛言。從德爲名。當時律主具多聞德也。と云へり。（また有釋言とて、佛在世時に、祀皮衣とて、樹皮を被て衣となし、天を祀る仙人有りしが、佛涅槃の時に入定して、覺えず二百年に至り、雪山より大衆部中に來りて、其の三藏を弘むるに、大衆部は其の淺義を弘めて、深義を弘むること能はず、此師は具足して更に深義を誦せり、時に其の説を弘むる者あり、弘めざる者あり。故に乖競せり、其の弘むる所の教へ、大衆より深く、舊の所聞に過たる故に、多聞と名く、と云へる説をも載せり、然れど此は疑しき説なる故に、有釋言と云へるなり。）さて本論に。此部の宗義を記して。謂佛五音是出世教。一無常。二苦。三空。四無我。五涅槃寂靜。此五能引出離道故。如來餘音是世間教。（以上は此部の新義と聞えたり。）有阿羅漢爲餘所誘。猶有無知。亦有猶豫。他令悟入。道因聲起。（此五事は、かの大天が立義なること既に出たり。）餘所執多同説一切有部とあり。

次後於此第二百年大衆部中更出一部。名說假部。

說假部と云ふ名義は。述記に。此部所說世出世法中皆有少假。非一向假故不同一說部。非出世法一切皆實故不同說出世部。既世出世法皆有假有實、故從所立以標部名也と云へり。(また舊釋言とて、大迦旃延先に無熱池の側に住し、佛入滅の後、二百年時に、方に彼より出て、大衆部中に至りて、三藏敎に於て、此は如來の假名を以て說るなり、此は實義をもて說るなりと明すに、大衆部中に信者あり、不信者あり、遂に別に部を分たり、此部は即大迦旃延の弟子の弘通する所なり、と云へる說をも出せれど、是も疑はしき說なる故に、舊釋言と云へるなり、)さて本論に。此部の宗義を記して。謂苦非蘊。十二處非眞實。諸行相待。展轉和合。假名爲苦。無士夫用。無非時死。先業所得。業增長爲因。有異熟果轉。由福故得聖道。道不可修。道不可壞。餘義多同大衆部とあり。

第二百年滿時。有一出家外道。亦名大天。大衆部中出家受具。多聞精進。居制多山。與彼部僧重詳五事。因玆乖諍分爲三部。一制多山部。二西山住部。三北山住部。

述記に。以前諸部但第二百年內分。未滿二百年。今此正二百年分部。故言滿時。即大衆部中末後諍也。(佛滅より二百年滿時は、大凡我が孝靈天皇の御世の始め、諸越は周赧王が世の二十七八年に當るべし、)出家外道者。外道之中有形同俗。有同出家。今此出家之人故言出家。亦名大天者。前第一百年時有大天比丘。爲乖諍之首。今此同前之名。故稱爲亦。婆沙所說是前大天也。(この婆沙の說は非なる故に諸書に用ひず、)大衆部中出家者顯所從部。出家受具。明下形入僧流受持具戒上。廣學優思名曰多聞。行潔亮淸目爲精進。此乃談其威德。即乖諍之首也。(また有釋言とて、摩揭陀國に、好雲王と云ふ有りて大きに佛法を弘め、所在に聖者を供養して、多く其の國に集む、其の國の貴庶、たゞ沙門に事へて、外道を崇めず、其の徒甚く貧なり、或は聰明なるも有りて、三藏を受持し、能く法を說き髮を剔りて、遂に眞僞を和雜ならしむ、王此事を知りて、聖凡を沙汰して、多く

本宗に歸せしむ、博達なほ數百人許あり、佛法の幽玄並びに能く通達す、若更に剪除せば、佛法を破壞せむ事を恐れて、別に伽藍を造りて、彼の衆を安置せり、大天は卽かの頭首にて、多聞博學なりとも云へり。）制多山先云支提訛也。此云靈廟。此山有諸制多故爲名。大天所居也。大天與彼大衆部僧重詳前議大天五事。五事與大衆同。因議此五有可不可。因茲乖諍分爲三部。制多山西稱曰西山。既與大天不和、因此別住。北山亦爾。制多山北之一山也。此三並從所住立名と云へり。（なほ部執異論、及びかの文殊問經に、此の分別を二部と爲たるが、譯家の謬なる由をも辨へたり。）さて本論に。此三部の宗義を記して。謂諸菩薩不脫惡趣。於窣堵波。興供養業。不得大果。有阿羅漢。爲餘所誘。此等五事。及餘義門所執多同大衆部說とあり。如是大衆部四破。或五破。本末別說合成九部。一大衆部。二一說部。三說出世部。四雞胤部。五多聞部。六說假部。七制多山部。八西山住部。九北山住部。

前に論へる文殊師利問經の。謂ゆる十八部論に。佛滅度後百一十六年。城名巴連弗。時阿育王。王閻浮提匡於天下。爾時大僧別部異法。初生二部。一謂摩訶僧祇。二謂他鞞羅。（秦言上座部。）卽此百餘年中。摩訶僧祇部更生異部。一名一說。二名出世間說。三名窟居。（摩訶僧祇は、大衆部たること既に云へり、一說は本文の一說部に當り、出世間說は、說出世部に當り、窟居と有るは雞胤部に當れり。）又於二百年中。摩訶僧祇部中復生異部。名施設論。（こは本文の多聞部に當れり。）又二百年中、摩訶提婆外道。出家住支提山。於摩訶僧祇部中復建立三部。一名支提加。二名佛婆羅。三名鬱多羅施羅。（この一は本文の制多山部に當り、二は西山住部にあたり、三は北山住部に當れり。）如是摩訶僧祇中分爲九部。一名摩訶僧祇。二名一說。三名出世間說。四名窟居。五名多聞。六名施設。七名遊迦。八名阿羅說。九名鬱多羅施羅部とあり。（斯て此九部の宗義をも、委曲に記せるが、大抵は宗輪論を取りて、佛の懸記に託せる說なる中に、甚く謬り有ること、

述記に詳なり就て見るべし）さて是にて。大衆部より分別せる。異部宗輪の論竟たるに依りて案ふに。服天游が佛法源流論に。佛後百年。大衆部中有一師。名曰大天。始起異見別立新義。唱生死涅槃皆是假名之旨。蓋後世大乘之説既胚胎于此云。而大衆部則信而用之。上座部則惡其違舊義。互相謗毀不復和合云々と言へるは。文言少か足ねども。大乘の説既胚胎于此と云へる語は。また此類なき活眼の。大卓見にぞ有りける。（文言いさゝか足ずとは、唱生死涅槃皆是假名之旨と云へる、其假名の説はしも、大天が新義に胚胎せれど、實には其より出たる一説部、説出世部、多聞部などの立説なる物をや、其は上の節々に出せるを察て知るべし、然れば此文言は、立新義と云ふ下に後裔復などの文字を置べかりしを、其は思ひ落せるにや有らむ、此は後に吹毛の難を入る人有らむ事を思ひて、今かく辨へ置くになむ）そは其の大乘説の此に胚胎せる事は。既に出せる大衆部説中に。一刹那心。相應般若。知一切法。諸佛世尊盡智無生智。恒常隨轉乃至般涅槃と有るは。是正に大乘般若の胚胎せるなり。然れば此を敷演して。其より出たる一説部に。諸法唯一假名無體可得。とふ説を生出し。説出世部に。世間法但有名都無實體。世間皆假。と云ふ説を生出し。多聞部に。一無常。二苦。三空。四無我。五涅槃寂靜。此五能引出離道。とふ説を生出たり。（但し此は今姑く、大乘の中の般若に就て大乘胚胎の一端を論ふなれど、豈般若の胚胎のみならむや、其の餘の諸大乘經どもの旨も、みな胚胎せること、既に且々も云へるを、尚委くは次々に説もて行くを見て知るべし）是を以て。かの大乘弘通の魁首たりし。稱ゆる馬鳴論師。大衆部の本義を取捨敷演して大乘起信論を作り。その多聞部の説を襲ひて。苦空無我。第一義諦皆悉空寂と立言し。また其弟子とも云ふ龍猛論師も。大乘般若の旨を專一と爲て。かの大智度論をぞ作たりける。然れば此徒みな彼大天が子孫に非ずして何ぞ。また凡て大乘説を奉ずる徒。この大天が苗裔に非ずして何ぞ。（なほ此馬鳴龍猛らが事は、次品の大乘を論ずる所は精く云はむと欲すれば、今は事の因は、唯その

大凡を云ふのみ、其の精説は次品に論ふを待て見るべし。)抑この宗輪論の作者世友などは。固より上座一切有部の人なれば。大天が新義を擯斥せむ事は。その舊義の廢れむ事を思へるにて。實に然も有るべき擧なるを。其の後に出し彼國の大乘論師らは更なり。其の大乘般若を荷ひ持來し玄奘が。此論を譯しつゝも。右の由來を辨へず。此比丘を始め諸越の比丘等。また皇國の佛者たちも。皆大乘を信じつゝ。彼大天が異見をしも。口を極めて謗り惡むは、其の大乘教法の父をのみ尊みて。其の教本の祖父を卑むる道理になも有りける。(其は他なし、此教法を各々その成業に立るより、唯に偏執我慢の情のみ進みて、大乘の方廣説に眩惑せられ、此宗輪論などは、小乘の陋しき論と蔑視しつゝ、熟くも讀み辨へざるに依る事なり、但し此は佛者たちの一向に大乘經説を尊奉して、其の本末を知らざる倫を謂ふ言にこそ有れ。我その一切有部説を信ずと云ふには非ず、固より彼此ともに、蚊鳴蛙聲の如く聞居ることは、上下に論ふ説等を視て察べきなり。)

其上座部經爾所時。一味和合。三百年初有少乖諍。分爲兩部。一説一切有部。亦名説因部。二即上座部。轉名雪山部。

述記に。上座部者迦葉住持後。有近執。滿慈。慶喜等。助揚其化。聖者相繼。所以二百年前殊無異諍。故言經爾時時一味和合。(この四人の比丘らが事は既に云へり、其に謂ゆる十大弟子の中なり。)三百年初者。二百年餘。三百年之首也。(皇國は孝靈天皇の御世の中頃に當り、諸越は東周の惠公が世の初めに當るべし、東大寺の凝然法師が佛法緣起に、三百年初者、指滿三百年時と云へるは甚じき非言なり。)或説。上座部本弘經藏以爲上首。以律對法爲後弘宣。然至三百年初。迦多衍尼子出世。於上座部出家。先弘對法後弘經律。所以鬪諍紛紜名少乖諍。不同大天大乖諍也。又解此時迦多衍尼子未必生。但執義不同遂爲乖諍。且如大天五事。上座猶行。此時之中有不許者。既乖本旨。遂分兩部。と云へり。(前の或説は非なり、後の説を取るべきこと云ふも更なり。)さて説一切有部を。また説因部と稱し。

上座部をまた雪山部とも云ふ由は。述記に。說所立法皆有因由。故亦名說因部。此部起多弘對法。既閑義理能伏上座部僧。說因大强。據舊住處。上座乃弱移入雪山。從所從處稱雪山部也とあり。（上座部と云ふ名は、根本の名なれど、實には異部と成れること、下に引く本文にて所知たり、）說一切有部の宗義は。既に云へれば其はさし措て。其の雪山部の宗義は。本論に。菩薩入胎不起貪愛。無諸外道能得五通。亦無天中住梵行者。有阿羅漢爲餘所引。猶有無知。亦有猶豫。佗令悟入。道因聲起。餘所執多同說一切有部と記せり。（述記に、菩薩入胎不起貪愛者、卽異說一切有部、有阿羅漢爲餘所誘等五事、本上座部爲此五事與大衆諍、今復許立、何乖本旨、初與大衆乖諍之時、尙未立、此至三百年滿與說一切有諍、說一切有得本宗故無五事、舊上座弟子失本所宗乃立五事、是知年淹日久、聖隱凡生、新與舊殊、復何怪也と云へるは然る言なるが、然言ふ比丘らも、皆かの大天が流に出たる末宗にて在りけり、としも自からは、知らず悟らで在ことは、傍痛き事なりかし、）

後卽於此三百年中。從說一切有部流出一部。名犢子部。

此文の後卽と云へる後は。說一切有部と雪山部と。二部に分別せる後をいひ。卽とは。說一切有部より次々に分別せる諸部の有るが中に。此犢子部は最前に流出せるが故に。卽とは云へり。（其は下なる數章ともに卽とは云はず、上の大衆部より始めて三部を出せる章にも、後卽と記せると照應して辨ふべきなり、）於此三百年中とは。佛滅より二百五十年許りの頃を云ふべし。（皇國は、孝靈天皇の御世の末に當り、諸越は、東周も亡びて、秦の始皇が世の、中頃にもや當りなむ、）述記に。犢子部者部主姓也。上古有仙。居山靜處欲染母牛生子。自後仙種皆言犢子。佛在之日有犢子外道。歸佛出家。此後門徒相傳不絕。至此分部從遠襲爲名言犢子部。とあり。（また異說を載して、文殊問經犢子注云、律主姓是也、眞諦法師云可住子弟子部、可住言上古有仙名可住、今此律主母、

是彼種從母爲姓名可住子、此理難解と有れど、此異説ぞ却りて穩に聞えたる、上の雜亂も是に准ふべし、名義集に、婆蹉富羅此云犢子とあり。）此部の宗義の較略は本論に。謂補特伽羅非即蘊離蘊。依蘊處界假施設名。諸行有暫住。亦有刹那滅。亦有外道能得五通。五識無染。亦非離染。若斷欲界修所斷結名爲離欲。非見所斷。即忍名相。世第一法。名能趣入正性離生。若已得入正性離生十二心頃。説名行向。第十三心説名住果。、有如是等多差別義。と見えたり。（なほ委くは、本書に述記を引合せ見て辨ふべし。）

次後於此第三百年。從犢子部流出四部。一法上部。二賢冑部。三正量部。四密林山部。

此第三百年は。上に第三百年中と有るが。二百五十年間を云ふ語なるに。次後と云へれば。佛滅より二百六七十年の頃を云ふ。（述記に。法上者部主名有法可上名爲法上。或有出世衆人之上故名爲法上。賢冑者賢是部主名。是賢阿羅漢之苗裔。故言賢冑也。正量者。此部所立。甚深法義。刊定無邪。目爲正量也。密林山者近山林木。蓊欝繁密。部主居此從所居爲名也とあり。（また或解言とて、此等の四部は、舍利弗が阿毘曇を釋して、義の少著あれば、之を足して後に、各その論を造り、經義を添著して、既に大旨に乖けり、遂に即ち部分せりと云へり。）さて此四部の宗義は。本論に。所釋頌言とて。已解脱更墮。墮由貪復還。獲安喜所樂。隨樂行至樂。と見えたり。（述記の説を合せ見て其義を辨ふべし。）

次後於此第三百年。從説一切有部。復出一部。名化地部。

此第三百年は。佛滅より二百七八十年の頃を云ふ。○述記に。此部之主本是國王。捨國出家弘宣佛法。化地上之人庶。地者王所統攝。國界地也。從本名化地部とあり。（また眞諦法師云、正地部本是王師匡正土境。捨而弘法、故言正地、亦稍相近、文殊問經言大不可棄非也とも云へり。）さて此部の宗義は。本論に。謂過去未來是無。現在無爲是有。於四聖諦一時現觀。見苦諦時能見諸諦。要已見者能如是見。無爲法有九種。一擇滅。二非擇滅。三虛空。四不動。五善法眞如。

六不善法眞如。七無記法眞如。八道支眞如。九縁起眞如。入胎爲初。命終爲後云々と見えたり。（文なほ繁かれど所狹ければ抄し出ず、委くは本論に述記を合せ見て知るべし、）

次後於此第三百年。從化地部流出一部。名法藏部。亦名法密部。自稱我襲采菽氏師。

此第三百年は。佛滅より二百八九十年の頃を云ふ。○述記に。法藏者部主名。密之與藏義意大同。法藏法密二義皆得。此師含容正法。如藏之密。故言法密。其說總有五藏。一經。二律。三阿毘曇。四呪即明諸呪等。五菩薩。即明本菩薩行事等。既乖化地本旨。遂乃部分。他不信之。遂引采菽氏爲證。說有五藏證也とあり。（采菽氏とは目連を云ふこと既に云へり、）さて此部の宗義は。本論に。謂佛雖在僧中所攝。然別施佛。果大非僧。於窣堵波興供養業獲廣大果。佛與二乘解脫雖一。而聖道異。無諸外道能得五通。阿羅漢身皆是無漏。餘義多同大衆部執と見えたり。（其の根本は、一切有部より出たるに、其の執多く大衆部に同じと有れば、是また彼大天が五事を用ふること知るべし、斯て後世に祕密の經宗起れる事は、正に此部に胚胎せりと云はむかも、）

至此第三百年末。從說一切有部。復出一部。名飮光部。亦名善歲部。

三百年末とは。上に二百年滿時とある如く。佛滅より正に三百年に滿たる頃を云ふ。（大凡そ皇國は孝元天皇の中御世頃に當り、諸越は漢の呂后が世を知れる頃に當るべくや、）○述記に。飮光者婆羅門姓也。此部敎主是彼苗族。故言飮光。此師少歲性賢有德。因以立名。故言善歲。從其姓云飮光。從其名云善歲也とあり。（また或云く、此は佛在世の時の、迦留陀夷兒の姓飮光なり、少して佛に歸し、出家して道を受たる故に、善歲と名くと、何の故に三百年の末に、此人なほ在るやとも云へり、）此部の宗義は。本論に。謂若法已斷已遍知則無。未斷未遍知則有。若業果已熟則無。果未熟則有。有諸行以過去爲因。無諸行以未來爲因。一切行皆刹那滅。諸有學法有異熟果。餘義多同法藏部執と云へり。

至第四百年初。從說一切有部復出一部。名經量

部。亦名說轉部。自稱我以慶喜為師。
第四百年初とは。佛滅より三百二三十年の間を云ふなり。（大凡そ皇國は、孝元天皇の御世の末、諸越は漢文帝が時に當るべし。）○述記に。此部師者唯依經為正量。不依律及對法。凡所援據以經為證。即經部師。從所立名經量部。亦名說轉部。此師說有種子。唯一種子現在相續轉至後世。故言說轉也。結集時滿慈弘對法。近執弘律。慶喜偏弘經藏。故今唯以慶喜為師也とあり。（また一說を擧て、舊には說度部と云ふとも云へり。）さて此部の宗義は。本論に。謂說諸蘊有從前世轉至後世。立說轉名。非離聖道有蘊永滅。有根邊蘊。有一味蘊。異生位中亦有聖法。執有勝義補特伽羅。餘所執多同說一切有部と見えたり。
如是上座部七破或八破。本末別說成十一部。一說一切有部。二雪山部。三犢子部。四法上部。五賢胄部。六正量部。七密林山部。八化地部。九法藏部。十飲光部。十一經量部なり。
前件六衆部の終章に引たる文殊師利問經の。佛滅度後百一十六年云々と有る次に。至三百年中。上座部中因諍論事。立為異部。一名薩婆多。亦名因論先上座部。二名雪山部。（薩婆多は、說一切有部の梵語なること既に云へり、因論先上座部は、かの說因部と稱するに當れり。）即此三百年中。於薩婆多部中。更生異部。名犢子。即此三百年中。犢子部復生異部。一名達摩鬱多梨。二名跋陀羅耶尼。三名彌離部。亦言三彌底。四名六城部。（この一は本文の法上部に當り、二は賢胄部にあたり、三は正量部に當り、四は密林山部に當れり。）即此三百年中薩婆多中更生異部。名彌沙部。（本文に謂ゆる化地部を稱する梵語なり、下には彌沙塞とあり、彼彌沙塞律の本主なり、名義集に、彌沙塞此云不著有無觀、法名五分と有りて、其律今に傳はれり、三十卷あり。）彌沙部中更生異部。因師主因執連名曇無德。（本文に謂ゆる法藏部亦名法密部と有るに當る、名義集に、曇無德亦名曇摩毱多、此云法密、又翻法藏、法名四分と有りて、此律も今に傳はれり、六十卷あり。）即此三百年中。薩婆多部中更生異部。

名優梨沙。亦名迦葉惟。(こは本文の飲光部亦名善歳部と有るに當れり、名義集に、迦葉遺此云重空觀此有戒本、相同五分と云へり、)於四百年中薩婆多部中。更生異部。因大師欝多羅名僧迦蘭多。亦名修多羅論。(こは本文の經量部と有るに當れり、此文殊問經に、こをまた相續部とも稱せり、)如是上座部中分爲十二部。一名上座部。二名雪山。三名薩婆多。四名犢子。五名達摩欝多梨。六名跋陀羅耶尼。七名彌離底。八名六城部。九名彌沙塞。十名曇無德。十一名迦葉惟。十二名修多羅論部とあり。(斯て此十一部の宗義をも、委曲に記せれど、其みな宗輪論の說を取りて、佛の懸記に託せる說なるが中に謬り有ること、述記に云へる如くなれは採用せず、猶此諸部の說々を委く知らむと思はむ人は、新婆沙論、倶舍論をも參考して知るべし、鳳潭が倶舍論疏冠註も便宜しき物なり、)さて右の如く、上座部。大衆部と二つに分別せるより。次々遂に二十部と成り。各々自見自說を逞くして。互に例の我聞如是と稱しつゝ。其の部執の經論どもの數出來てその所說區にぞ成にける。(仲基が言に、兩部復分爲十八部、然而其言所述以有爲宗、事皆在名數、全無方等微妙之義、是所謂小乘也、と云へるは麁漏なり、十八部豈みな有を以て宗と爲むやも、中には一切假名と稱し、或は苦空無我と稱し、或は密呪、また既に菩薩藏と云ふを唱へ出たる部も有るをや、仲基が此等の麁漏は、なほ下の三品に委く論ふを見るべし、)今假に、前件々の諸部の分派せる系圖を作りて示すこと左の如し。

○佛祖

七十九歲時二月、爲工師子周那被毒殺畢、所謂般涅槃是也、當於我懿德天皇二十五年、周敬王三十四年、

—上座部後轉名雪山部

—大衆部

佛滅度後、於七葉巖中結集三藏、由處窟內外、而分有二部名耳、雖有二部名、未分宗一味和合、至佛滅後一百一十六年、由大天立新義、始爲

兩部異宗矣、當於我　孝安天皇二十二年、周烈王五年

一說部

說出世部

雞胤部

後卽於此第二百年流出此三部、當於我　孝安天皇御世中、周顯王末世也、

多聞部

次後於此第二百年復出此一部

說假部

次後於此第二百年更出此一部

制多山部

西山住部

北山住部

次後於此第二百年滿時分別此三部、當於我　孝靈天皇四年、周赧王二十八年、凡九部也、

說一切有部亦名說因部

於第三百年初與上座部分爲兩部

犢子部

後卽於此第三百年中流出此一部

法上部

賢胄部

正量部

密林山部

次後於此第三百年流出此四部

化地部

次後於此第三百年復出此一部

法藏部亦名法密部

次後於此第三百年流出此一部

飮光部亦名善歲部

至第三百年末復出此一部

經量部亦名說轉部

至第四百年初復出此一部、當於我　孝元天皇御世末、漢文帝世末焉、凡十一部也、

右諸部の分別に就て仲基が言に。如其文殊問經及部執。宗輪。十八部三論皆列部執。或爲十八部。或爲二十部。或爲二十一部。其命名次序年數亦皆有異。皆異部名客各々相傳之説。不必求其開會可也。後世不知之。種々牽強。必求合之。又或以二十一部。爲譯之失者。可謂固矣。と言へれど委からず。此は一向に宗輪論を取るぞ公義なる。(其は上に云ふ如く、部執異論は、宗論の同本異譯にして、其の異説と見ゆるは、誤譯なること、述記に云ふ如くなれば、彼の本は取るに足らず、十八部論は、文殊問經中の一品を別譯せるにて、互に異あるは、何れ過失と云ことと知がたく、殊にこは宗輪論ありし後に、大乘家より宗輪論を盜みて、佛祖の懸記に託して、此經中に入たる物なること、既に辨ふる如くなれば、是また取るに足らず、然れば宗論の一本に據らむこと、實に公義に非ずやも、)さて本書に。下に擧る五頌あるは。發端の如是傳聞と云へる文より前に。世友より稍後なる人の。此の論を贊たる文なり。(述記に、此の五頌の作者を、或は世友が自作と爲し、或は後學の所作と爲し、或は如是傳聞と云ふより、敍年別部に終るまで世友の所作にて、前の五頌と、本末の宗義を述たるは、皆後人の所造と云へる三説を載たれど、此の五頌のみ後學の所作と云ふ説を用ふべし、)此は序に在るより。跋に在るが相當せる故に。今は左に出して其の義を註しつ。

佛般涅槃後。適滿百餘年。聖教異部興。便引不饒益。

此は述記に。此言自佛滅後百有餘年。於聖教中有異部起。便引攝不饒益事。翻顯百年已前。雖佛已滅。於聖教中無異部起。一味和合。正教不虧。衆生純信。無不饒益也と云へるが如し。(委しくは、既に上に註せるを見るべし、)

展轉執異故。隨有諸部起。依自阿笈摩。説彼執令厭。

こは述記に。展轉者不定義。此部所是彼部所非。此部所非彼部所是也。是非無主。故言展轉。情見不同名爲執異。故者由也。隨者逐也。由諸弟子互相是非。展轉取捨。情見各別。逐自理所事義乖張。無華蕚之相扶。有

支離之異想。皆自隨情執。罕遵理生。所解既自不同。執人遂分別部。即順人隨情執成異部也。（また眞宗淪極、損諸理外、妄說浮言實在義先、慕道者猶豫於兩端、歸依者惆悵於岐路、良可悲哉、良可痛矣とも云へり、共に部執して異論ある趣を能くも述たり、）阿笈摩者此翻爲傳。或翻爲教。厭者怖也離也。論師意。今說部起隨自情執。非我本意妄述。根本由依自說一切有教相傳說也。（阿笈摩は即阿含と云ふに同じ、委くは次卷の末條に云ふを見るべし、）論師舟航庶類。梁棟佛法。屬此乖張深所嗟慨。所以依教傳說。鏡範後賢令知法本。令來葉深生厭怖也と云へるが如し。

世友大菩薩。具大智覺慧。釋種眞苾芻。觀彼時思擇

此は述記に。世友者梵云筏蘇蜜多羅。筏蘇者世義。蜜多羅友也。毘瑟拏天亦名筏蘇。能救世故。世間父故。世導師故。住於世故。此天暴惡神鬼怖之。（毘瑟拏天とも筏蘇天とも云ふは、即ちかの大梵自在天神の別名なること、印度國俗品、婆羅門の所、また大千世界品の末節に、委く說たるを視て知るべし、）論主初生。父母矜愛。恐非人所嬈。故以此爲名。謂此嬰兒世天之友。世天所護。諸鬼神等勿恐怖之。如今此方立名神護。（今此方とは、諸越の俗を云へるなり、）又此菩薩大悲救物爲世之友。故名世友。自標名也とあり。（俱舍論の光記及び西域記に、筏蘇密呾囉舊云和須密多訛也とも言ひ、部執異論には、天友と譯せり、）○菩薩は名義集に。菩薩正音云菩提薩埵と有りて。種々の譯を擧たる中に賢首云菩提此謂之覺。薩埵此曰衆生と言ひ。述記に。菩提名覺。薩埵云有情。具智覺之有情故。と有る是正譯にて。高士。始士。大士。開士など譯せるは。皆古義に叶はず。（また名義集に、秦言大心衆生、無正名譯也、依大論釋、菩提名佛道、薩埵名成衆生、天台解云、用諸佛道成就衆生、故名菩提薩埵、又菩提是化地、自修佛道又化他故、と云へる說も有れど、此は大乘盛りに成りて、菩薩と云ふ稱をいみじき事にする、後世の意をもて誣たる說なり、）さて覺衆生と譯せるを正しと云ふ故は。まづ

菩提はもと佛陀と同語なり。其は阿含に三藐三菩提と云ふ語を。また三藐三佛陀とも云へるを。また三耶三佛陀とも。三耶三菩提とも有るを以て。其の同語なる事を知り。菩提佛陀ともに。覺と翻譯せるを以て。諦に思ひ證すべきなり。(然れど此を同語と云へる說は、古比丘らの說に有りや無しや知らず、猶此の事は、既に第十三品の、三藐三菩提と有る所に委く註せれば、今はその大凡そを云ふなり。)斯て薩埵とは衆生と云ふ語なれば。具には菩提薩埵と云ひ。略して菩薩とも云ふは。佛陀に成むと。其の道を修行して。未得成ざる衆生と云ふ語なるが。また其の衆生と云ふは。述記に具二智覺一之有情とも云へる如く。人耳ならず。活とし生る物をみな云ふ語なれば。元より甚く下劣なる稱なり。其は名義集序に。菩提薩埵名二大道心衆生一。其名下劣皆掩而不レ翻云々と云ひて。大道心衆生と譯せるを甚じき手柄の如く云へるを以ても知るべきなり。(然るを皇國にも、中つ御世頃には、法師らの白しかすめて、掛まくも畏き皇神たちにさへ、此の號を負せて稱し奉れる御世も有りしは、悲しとも悲しき事の極みにこそ有けれ。)然らば衆生の。佛道修行せる間を。菩薩と稱せる證文有りやと云はむか。其は阿含の經々に。佛祖は更なり。彼の謂ゆる過去の六佛等の。履歷を云ふを視るに。刹利婆羅門などの。菩提に志して修行するに。俗相の間は更なり。假令比丘相と成たらむも。猶初初しき間を菩薩と稱せる故實なり。(其は近く長阿含の、大本緣經などの趣を見るに、謂ゆる成佛以前を菩薩と有れど、成道以後には、佛とも如來とも稱ひて、菩薩と云はざるを以ても知るべし、今の世友は更なり、佛祖を菩薩と稱せるも、全その趣に見えたるをや。)是を以て本論の說一切有部の宗義に。應言菩薩猶是異生。諸結未レ斷。若未三已入二正性離生一。於二異生地一未レ名二超越一と云へり。佛祖及ひ世友などは。刹利種なれば。更にも云はず。婆羅門種も。その俗相は。寶冠華曼瓔珞を服飾ること。既に云へる如くにて。是謂ゆる菩薩相なり。(婆羅門種、刹利種の徒の服飾の事は、既に第一品に委しく註せり、立却り見て知るべし。)然るに此を事々しき高德の尊號の如く稱ひもて來しは。佛祖

を菩薩と稱せるに本づけるか。彼の法藏部に。始めて菩薩藏と云ふを立て。明本菩薩行事等と云へるに。かの馬鳴菩薩が。大乘經說を興す時しも。其の新義を綴して。己また梵志の薩埵衆生なれば。菩薩乘と云ふを。最重き事に云ひ成せるより。其遂に後習と成りて、佛陀にいまだ未熟なるをば。比丘相なるをも菩薩と稱して。甚く崇むる事とは成れり。謂ゆる地藏菩薩など是なり。(上の小註に擧たる大論の說及び天台解云とある說は、便ちこの後の意をもて云へる說なる故に、誣言なりとは云ふなり、彼天游も右の古義をば糺さねど、其の著せる赤倮々に、菩薩は皆在家の身にして、乘急戒緩の人なり、其の子細は、釋迦すら猶比丘相なるに、菩薩は有髮にして、寶冠華曼あり、身に瓔珞を佩ぶ、全く在家の相なり、その伏惑不斷、受生利物と云へるも、俗と並び居り、同事攝あるが故なり、維摩經序分の列衆に、其の比丘を先にし、菩薩を後にせるを、羅什が注に、隨人情所推と云へるも、菩薩は戒緩なるが故に、世俗多くは信ぜざるなり、然らば其の菩薩戒と云ふ物有るは、如何と云ふに、

是も亦後人の假託に出たり、夫戒は佛世一時に具足せる物には非ず、諸弟子の過ある每に、臨時に結戒して、後遂に二百五十にも及べるなり、是小乘戒の說、誠に其の實を得たりと謂ふべし、爾るに彼の菩薩戒經を見れば、其の首に盧舍那佛、千葉の蓮華に坐し、其の一葉ごとに一佛ありて、各々千葉の蓮華に坐す、また其の一葉ごとに一佛あり、而して其の本身盧舍那佛と一時に、此の戒を誦出すと云ふ、其荒唐不經なる兒童も、亦能く其の假託なる事を知るべしと、猶次卷にも擧る如く委しく論へり、護法の比丘らに、此の說を嫉みて、大乘甚深の敎へ、祕密敎の妙旨を知らざる凡夫白痴と、其の徒どちして、甚く詈り喧ぐも有りと有りと云ふは信なるか穴をかしや、)然れど今己が論ふ古意のなほ存れるは。大乘の首たる大般若經の隨喜廻向品に。不應爲新學菩薩宣說般若乃至一切法。自相空義。以雖有少分信敬愛樂。而聞已尋皆妄失。驚疑恐慴。生毀謗故。また新學菩薩聞如是法。將無驚疑怖畏云々など。猶是の類なる語は計ふるに暇あらず。(また其の餘の經論どもに、非義菩薩、

有疾菩薩、鈍利二根菩薩、初心敗壞菩薩、菩薩倒執懈怠、菩薩旃陀羅など云へる事も多かり、此はもと下劣なる稱なりし故なり。猶下の卷々に註ふをも合せ考ふべし、)さて此の世友は、釋種と有れば。佛祖が同族の流れにて。刹利姓なる故に。元より寶冠華曼せる菩提薩埵の人なりしが。苾蒭と成ても。仍その舊稱をもて菩薩と稱し。かつ此の宗輪論を始め諸論を著はし。佛法には甚く功績ありし故に。後より大菩薩とは稱せるなり。(なほ次卷の馬鳴菩薩が所に論ふをも見るべし、)觀二彼時一思擇とは。述記に。觀謂二觀察一。彼時者卽部異時也。思謂二思量一。說二是部執之事一。擇謂二簡擇一。論主四百年生。部在二一百年餘一。相去既遠。觀二彼部起之時一。思二擇其事一申二諸宗義一也。と云へるが如し。

等觀二諸世間一。種々見漂轉。分二破牟尼語一。彼々宗當レ說。

こは述記に。等是遍義。見解此非二唯一一。故言二種種一。漂謂二漂浮一。轉謂二流轉一。見卽由レ人起。人遂レ見流。如來所說十二分敎名二牟尼語一。(十二分敎は、また十二分經とも云ふ、契經、應頌、記說、伽陀、自說、因緣、譬喩、本事、本生、方廣、希法、論義の十二なり、其の委しき事は、既に第十四品に解註せるを立却りて見るべし、)言二彼々一者。是非レ一義。謂諸有情爲二種々見一所二漂轉一。故分二破如來根本所說眞敎一。作二彼々宗一。皆由レ隨二自見解一故。分二破佛語一。非二是佛語本末有一レ別と云へるが如し。

應下審觀二佛敎一。聖諦說爲レ依。如來沙中金。擇中取其眞實上。

此は述記に。此頌正明下勸二觀佛敎一去レ僞留上レ眞。聖諦說者。卽佛所說四諦敎也。佛所說中。但四聖諦敎爲二眞依處一。生死因果苦集二諦。出世因果滅道二諦。眞實不レ虛。諸部無レ諍決定。如レ是實可レ依處。(苦集滅道の四を四聖諦と號けて、佛祖が第一の根本說法たる事、及び其の事の委しき趣は、既に第十二品に說たれば今更に云はず、)餘傍義理。諸部互乖。是非不レ定。猶如下採二沙中之金一取レ金去上レ鑛也。四聖諦理猶似二眞金一。誠實不レ虛。應可レ依取。所餘義理或是或非。卒難レ取舍。便謂二諸部竝各非一レ眞。其諸部四聖諦敎無二異說一。故可二依信解一。不レ以レ有二沙弃一レ金。勿下以レ有レ諍弃中聖諦敎上。此卽第一二

敍部異之衰損。述眞教而令依。造論意也。と云へるが如し。（また是より前に、異者別也、部者類也、人隨理解、情見不同、別而爲頭名爲異部、宗者主也、輪者轉也、所主之法、互有取捨、喩輪不定、故曰宗輪、來學鏡此、諸部善達玄微、妙閑幽致、可以挫異道、制殊宗、樹德揚名、借稱輪矣、激揚宗極、藻議攸歸、垂範後昆、名之爲論とも云へり。）抑この宗輪論は、既に云へる如く。玄奘三藏が翻譯にて。翻經沙門基と云へるが。筆受述記せる物なること貞元錄に所見たるが如し。（然れば述記の說は、玄奘が旨を稟て記せること云ふも更なり、是を以て諸書に、玄奘の疏とて、此の述記の文を引たるも有り、今は僅にそが中の一二の要文を摭ひ切めて抄出せり、其は佛經はもと、其の文辭いと迂遠にして、漢人ならむには、百言許にて書竟べく思ふ事をし、千言萬語に云へれど、其の理なほ通え難き事ども有るを、其うるはしと見效たる比丘らの、其の註疏などを物するに、元より漢土の人なるも、常に見習へる佛經樣の長愚文を作り出して、直ちに語路の通えかぬる書ども多く、また元より道理もなき事をし、道理深げに云はむとして、然る長愚文と成れりと見ゆるも少からず、今引き出たる述記も、また其愚文を免れず、然れば今己が抄せる文にも、なほ省くべき文の殘れるも有るべく、また擧べき說を見落し漏せるも有るべし、其の過ちは、後人の補ひ有らむ事をし希ふになも、）さて此の比丘ども。今の本論に據りて。其の佛說の眞僞を擇ぶ道をしも。後昆に傳へたる。語論の趣は然る事なれど。其の自から擇び取れる所は。その述記に述る如くならず。一切有部の佛祖が眞說を小乘と卑めて。大天に始れる大乘の僞說を信用せるは何ぞや。此をもし此の世友論師に聞しめば。汝等自說に謂ゆる。金を弃て鑛を取るとぞ笑はむかし。（玄奘すら斯の如くなれば、和漢古今の比丘たちに、一人も佛祖を去て、大天を採ざるは無しと知るべし、）然るに我が延享天明の御世頃に。戯れに出定如來と稱せる富永仲基。さし繼て蘇門居士と字せる服部天游。この二人出て。始めて小前大後の故實を發明し得て。共に書を著はして。世に佛法の眞面目を喩せるは。最利く裂

たる活眼なりけり。(然は有れど、此の二人共に是の宗輪論は、熟く讀ざりしと見えて、諸經の異說を論ずるに、其の議論の根元を熟得ざる說ども有り、かつ其の論義較略にして、人その卓見を知ること能はず、故今こゝに先かく諸部の別をし辨ふるになも、穴煩しきかも、)さて此の四百年の時しも。健駄羅國の迦膩色迦王と云ひしが。彼國を併知たる頃にて。其の諸說の紛々たるを網羅して。其の是非を論訂せしめ。復の結集をぞ爲たりける。其は次の卷に說くを見るべし。

印度藏志卷之二十二

大壑　平篤胤　撰述

○印度傳通品二第二十二

此の品には佛滅後第四百年初より。第五百年中に至る間に、健駄羅國の迦膩色迦王と云ひしが。說一切有部の古說を結集せる事。かつ次々に謂ゆる小乘の諸經論共。六足。發智。大毘婆沙。四阿含などの出來し時代。また其經論共に就て心得べき要事を因々に考へ註せる也

西域記云。佛涅槃後。四百年初。健駄羅國有レ王。名迦膩色迦。尊二重佛法一。味レ道忘レ疲。傳燈是務。日請二一僧一入レ宮供養。王因問レ道僧說莫レ同。王甚怪レ焉。問二脇尊者一曰。佛教同源理無二異趣一。諸德宣唱奚有レ異乎。尊者答曰。如來去レ世歲月逾邈。弟子部執師資異論。各據二聞見一共爲二矛盾一。王聞已甚用感傷悲嘆。良久謂二尊者一曰。諸部立範孰最善耶。我欲二修行一。尊者答曰。諸部懿典莫レ越二有宗一。王欲二修行一宜レ遵二此矣。王曰。向承二嘉旨一示以二有宗一。此部三藏今應二結集一。

須召二有德一共詳中議之上。迦膩色迦王は、倶舍論の慧暉註に。此云二淨金色王一とあり。此王が佛法に入りたる始めの事も。西域記に。北印度境健馱羅國。東西千餘里。南北八百餘里。東臨二信度河一。國大都城號二希路沙一。周八十餘里。城外東南八九里。有二畢鉢羅樹一。高百餘尺。枝葉扶疏。蔭影蒙密。(この樹の事は、第五品に既に委しく說なるを見るべし。)釋迦如來於二此樹下一。告二阿難一曰。我去レ世當二四百年一有レ王號二迦膩色迦王一。北南不レ遠起二窣堵波一。吾骨肉舍利多集二此中一。其樹南有二窣堵波一。迦膩色迦王之所レ建也。(この佛祖が懸記は、下文の小豎が、妄誕の言ありし後に、作れる懸記なり、下に云ふを見るべし、)迦膩色迦王。以二如來涅槃之後第四百年一。君臨膺レ運統二贍部洲一。不レ信二罪福一輕二毀佛法一。畋二遊草澤一。遇見二白兎一。王親奔逐至レ此忽滅。見下有二牧牛小豎於林樹間一作中小窣堵波上。其高三尺。王曰汝何所爲。牧豎對曰。昔釋迦佛懸記。當下有二國王一。於二此地一建中窣堵波上。吾舍利多聚二其內一。大王名符二昔記一。說二此語一已忽然不レ現。(法顯傳には、犍陀衞國膩伽王出行遊觀時、天

帝釋欲レ開二發其意一、化二作牧牛小兒一云々とて此故事を記せり、)王聞二此議一喜慶。自負二其名一發二正信一。深敬二佛法一。建二基趾周一里半。高一百五十尺窣堵波一。其上更起二二十五層金銅相輪一。卽以二如來舍利一斛一。而置二其中一。式修供養營建纔訖とあり。(此は是の王が佛法を信じ初たる因緣なるが、其の小豎は疑なく、かの幻通ある、比丘の化たるにて、懸記は其が方便の妄誕なり、法顯傳に、天帝の化たる由云へれど、其は論ふにも足らず、斯て文の初めに、佛祖が阿難にしか〴〵言へりと有るは、化物の妄懸記ありて後に、そを上に及ぼして記せる文なること、上に論へる阿育王が懸記に、思ひ合せて辨ふべし、比丘らの深く佛道を得たるは、能く化る物なること、既に委く論へるが如し、)○日請二一僧一云々。如此して佛道を問ふに。其の僧ことに說法の異なるを甚怪めるなり、其は此の頃已に其の道二十部に分別して。各宗に立る所あるが上に。口授闇誦の說多く。各々その傳誦する所を正とし。別に憶斷自見の契經等をも記載し出て張行せる故なり。○脇尊者と云ひし比丘が事は。倶舍

論の述讎記に。脇尊者は。梵言波栗濕縛。唐云脇尊者。初爲梵志師也。年垂八十捨家入道。城中少年便誚之曰。愚夫老朽。一何淺智。夫出家者有二業焉。一則習定。二乃誦經。而今衰老無所進取。濫迹淸流。徒知飽食。時脇尊者聞諸譏嫌。因謝時人。而自誓言。我若不通三藏理。斷三界惑。得六神通。具八解脫。終不以脇而至於席。自爾之後。唯日不足。經行宴坐。住立思惟。晝則研習理教。夜乃靜慮凝神。綿歷三歲。學通三藏。斷三界欲。得三明智。時人敬仰其德。因號脇尊者焉とあり。西域記に載せるも同意なれば。校合して引たり。(付法藏傳には、第八祖佛陀密多と云ふが弟子なりと爲て、第九祖、脇比丘尊者、中印度人、由於昔業、在母胎六十年、既生須髮俱白、厭惡五欲、不樂家居、其父攜見密多曰、此子處胎六十年、因號難生、曾遇相者、言是法器、願求出家、受戒之日、祥光燭座、感舍利三七顆、便於座上得阿羅漢果、精進苦行、脇不至席時號脇比丘とあり、合せ見るべし、)是の時しも脇比丘は。上座一切有部の長老にして。行德の名高かりし故に。佛教はもと同源に出れば。異趣有るまじき理なるに。諸僧の宣明する教說に奚が故に異說あると問ふなり。(此の王かの二十部の起れる由緣、また異部の宗輪をも知らざる故の問にて宜なる言なり、)○答曰如來去世歲月逾邈云々は。上件々に註へる如く。佛滅より此の四百年初の時まで。總ては三百二三十年を經たる間に。二十部に分り。其の苗裔の弟子ども其の部々に執し。かつ師資らの異論あり。各々その聞見を是と爲る故に矛楯すとなり。(信に此の比丘が答への如くなる事、上の件々なる諸部の異說は區なるを以て知るべし、)○諸部立範孰最善耶云々は。脇比丘が言を聞て。始めて諸部の分別ある事を知り。かつ一佛祖に出たる說の。然る異論矛楯を生じたる事を感傷悲歎して。我れその眞說に依りて修行せむと思ふを。諸部の立範の中に。孰か佛祖の眞說なると問ふなり。(是また誠に然も有るべき問條なり、)○諸部鬭典莫越有宗云々は。諸部鬭典と有れば。彼の大天が五事の諍論ありし以來。この時までに。諸部にて某々に。彼此と紙葉に記せる。契經の出來しこ

と所知たり。（其は上の件々に引たる諸部の宗義を、異輪論に出せるを以ても察るべし、世友が當昔、かの諸部の立說を、かつぐ〜記せる經論の無りせば、然しも記し出べくも有らぬ事、前卷の末なる頌に、依自阿笈摩說彼執と有るも、自他の經論を對考して、記せりと聞ゆるに思ひ合せて辨ふべし、）然れど。其の諸部の謂ゆる藏典どもの中に。一切有宗の說法。これ佛祖の正說なれば其の契經に越たるは無し、王もし眞の佛法を修行せむと欲さば。其の有宗の說に遵ひ給へ、と云へるなり。（抑この比丘は、元より一切有部の比丘にし有れば、其の己が依る所に部執して、餘の諸部の宗義をば、貶斥せる如く思はむ人も有るべけれど、此は實に佛法の公論にて、曾て偏頗の議に非ざること、上の條々に論へるに思ひ合せて辨ふべし、）○王曰。向承嘉旨示以有宗云々は。汝比丘が言を聞て。始めて眞の佛說は。一切有宗に有る事を知りたれば。有德の僧等を召集へて詳議せしめ。此の一切有宗の三藏を結集して。此の宗旨をもて世に示さむと云へるなり。

於是王乃宣令遠近召集聖哲。四方雲集。英賢畢萃。凡聖極衆。遂簡凡僧唯留聖衆。聖衆。尙繁。簡去有學唯留無學。無學復多不可總集。於無學內定滿六通智圓四辨內閑三藏外達五明方堪結集。故以簡留。所簡聖衆四百九十九人矣。王曰此國暑濕不堪結集。應往王舍城中迦葉結集之處。不亦宜哉。脇尊者曰。王舍城中多諸外道。酬答無暇。何功造論。迦濕彌羅國林木欝茂泉石淸閑。城塹一門極堅固矣可結集矣。

佛法の古義に於ては有學と云ふを卑しみ。無學果と云ふを尊しと爲る事は。前の三藏結集品に。既に委く說たりき。無學の梵語を阿羅漢と云ふ。委くは三藏結集品に立ちかへり讀みて知るべし、）六通。四辨。五明の事も上の品々に出たれど。此にも其の大概を註さむに。六通とは六神通とも云ひて。天眼通。天耳通。他心通。宿命通。如意通。漏盡通なり。（三藏法數に、一能見六道衆生死此生彼苦樂之相、及見一切世間種々形色、無有障礙、是名天眼通、二能聞六道衆生苦樂憂喜語言及世間種々音聲、是名天耳通、三能知六道衆生心中所念

之事、是名他心通、四能知自身一世二世三世、乃至百千萬世宿命、及所作之事、是名宿命通、五身能飛行、山海無礙、於此界沒、從彼界出、於彼界沒、從此界出、大能爲小、小能作大、隨意變現是名如意通、六漏卽三界見思惑也、羅漢斷見思惑盡、不受三界生死、而得神通、是名漏盡通と云へり。)

○四辨とは。捷辯。迅辯。應辯無疎謬辯を云ふ。(此も同書に、諸法の名字分別に通達して滯りなく、捷こと影響の如きを捷辨といひ、事理に明にして、心に疑滯なく、善く機緣に赴き、問に隨ひて卽ち答へ語言の迅疾なることを、懸河の如きを迅辨と云ひ、一切の文字名義を以て、種々の法語を莊嚴し、時に應じ、機に應じて、差異有ること無く、其の所問に隨ひて、應答窮まる事なき故に、應辨といひ、一切衆生の根性の聞法せむと樂ふ所に隨ひて、道を說くに皆眞理に契ひて、差失有ること無き故に、無疎謬辨と云ふと云へり。)○五明とは。一には聲明。二には因明。三には醫方明。四には工巧明。五には內明を云ふ。(此の事も同書に、世間の文章算數建立の法、みな悉く明了に通達するを聲明といひ、世間種々の言語、及び圖書印璽地水火風、萬法の因みを悉く明了に、通達するを因明と云ひ、世間種々の病患、あるは癩癇蠱毒、四大の不調、鬼神呪詛及び寒熱の諸病、みな悉く其の因を曉了して、通達對治するを醫方明といひ、世間の文詞讃詠、或は城邑を營造し、農田また音樂卜算、天文地理一切の工業、巧妙みな悉く通達するを、工巧明と云ひ、持戒を以て破戒を治し、禪定を以て散亂を治め、智慧をもて愚癡を治し、種々の染淨邪正、また生死涅槃對治の法、みな明了に通達するを、內明と云ふと言へり。)斯の如き事どもを兼明むる比丘ども。四百九十九人を簡び定めたる由なり。

其の中に勝比丘も有るにと言ふも更なり。

於是王及聖衆。到彼國建立伽藍已。緣少一人未滿五百欲召世友。然世友識雖明敏。未成無學。衆欲不取。世友顧聖衆曰。我見羅漢其猶洟唾。志求佛果。不趣小徑。汝何尊此棄我乎。我欲證之。擲此縷丸。未墜于地。必當證得無學果也。時諸羅漢重訶之曰。增上慢人斯之謂也。

無學果者諸佛所讚。宜可遠離以法衆議。於是世友即擲縷丸。空中諸天。接縷丸而語世友曰。大士方期佛果。次補彌勒。三界特尊。如何爲此小緣。欲捨斯大事。於是聖衆聞此空言。頂禮世友。推爲上座。凡有疑議。咸取決焉。

彼の國とは迦濕彌羅國を云ふ。此は既に出たり。

○少一人未滿五百云々は。五百人に一人足ざる義にて。此は舊く彼の國にて。かゝる人數を簡ぶ時の事を云ふ例文のごと聞ゆ。そは第一時の結集にも一人を少たるを。阿難を加へて人數を整へ、第二時の結集にも一人を闕たりしを。富闍蘇彌羅を加れて。人數を滿たること。此の第二節の注に引たる文の如なれば。此は深く拘るべき事にも非ず。(然れど毎事かくの如く物する事は、いと拙なく煩さき文法にて其の加不加を論ずる人は、いつも必す其の人無くては、事成まじき要用の人なるも亦をかし。)○世友は即ち宗輪論の撰者にて前品に出たり、然て是の世友が擲たる縷丸の。地に落ざる間に。無學果を證すと言ひ。空中に諸天ありて。云云と語たる由云へるなどは。大乘の說起りて後に加増せる例の妄誕なり。拘はる事勿れ。(然るは此比丘に始めて菩薩と稱し、佛弟子の最第一の位とする、阿羅漢果を成ずる事を、洟唾の如しと卑め、また空中なりし諸天の言とて大士と呼しめ、次て彌勒に補して云々、と有るに心を著て見るべし、その彌勒と云ふ物のこと、上にも下にも辨へたるを思ひ合せむには、此の說等は大乘家の妄誕なる事自づからに著明ならむ物ぞ、)さて此の世友論師を上座として。五百人の員數全く具はれり。斯て是の比丘らが事を。西域記健駄羅國。波羅覩邏邑の所に。如來去世垂五百年。有大阿羅漢。自迦濕彌羅國遊行至此とて。其が物語を載せるに。曩者南海之濱有一枯樹。五百蝙蝠於中穴居。有諸商侶。止此樹下。屬風寒人皆飢凍。聚積樵蘇。蘊火其下。煙焰漸熾枯樹遂然。時商侶中有一賈客。夜分已後誦阿毘曇藏。彼諸蝙蝠雖爲火困。愛好法言忍不去。於此命終隨業受生。俱得人身捨家修學。乘聞法聲聰明利智。並得聖果爲世福田。近迦膩色迦王與脇尊者。招集五百聖衆。於迦濕彌羅國作毘婆沙論。斯並枯樹之中五百蝙

頌也。余雖不肯是其一數。と云へること所見たり。然ば世友脇比丘を始め。此の時の五百比丘は。みな蝙蝠の化生にぞ有りける。(但しそは何して世に知られたると云はむに、五百比丘何れも謂ゆる宿命智をもて知たりと答へむか、然も有らば、其の四百九十九人の比丘ら、何どて世友も其の倫なりし事を知らで、始めに彼を拒みけむ、其は六通を得たりと云ふ、羅漢比丘とも有らぬ。未しき事ぞと云はむに、護法の比丘をも答ふる辭有るまじくなむ、然れば五百人の員數、及び六通四辨五明のこと、又かの拒める時の議論などは、然しも拘はるに足ざる說どもなる事、いよ〳〵益々灼然なりかし。)

於是五百聖衆。初集十萬頌釋素怛纜藏。次造十萬頌釋毘奈耶藏。後造十萬頌釋阿毘達磨藏。凡三十萬頌。六百六十萬言。備釋三藏。懸諸千古。莫不窮其枝葉究其淺深。結集既已。王遂以赤銅爲鍱。鏤寫論文。刻石立誓。唯聽自國。不許外方。不令異學持此論。卽今大毘婆沙論是也。

凡て今の本文と爲たる西域記の文は。今の要となき事をば皆省きて。間また俱舍論頌疏に引たるを校合して擧たり。抑この時の結集はしも。迦葉等が結集の時。また彼の耶舍陀が再度の結集の時とは樣替りて。上に云へる如く。此のほど既に諸部某某に。契經の記せるが出來しと聞ゆれば。律藏論藏の書も且々は出來にけむを。此の時に善く上座一切有部の。根本宗旨に叶へるを撫ひて。先その三藏の本籍を撰定し。然して後に其の撰べる三藏の。根本說たる所以の論頌を造たりけむ。其は集十萬頌釋素怛纜藏云々と樣に。三藏ともに釋すと云へるにて知るべし。(其はもし此の時なほ三藏の本籍の紙葉に載せるが無らむには、釋其藏とは云まじき謂なること、思ひを潭めて辨ふべし)斯て其の頌を三藏ともに十萬頌と云へるは、例の大數を云ふ。常例の云ひ樣なれば。是また拘はるに足らず。唯に廣博なりし事と見て在るべし。(其はかの五百の蝙蝠僧らが異口同心に、一藏に一頌つつ唱ひ出たらむも、三藏にては、凡そ千五百頌、三萬三千言ある謂なるをも思ふべきなり)○懸諸千古と云より。不令異學持此論と云まで

は。詳に聞ゆる文なれば註するに及ばず（なほ本書に、その迦濕彌羅國を以て、總て僧徒に施し、藥叉神に命じて其の城門を守護せしめつと有るは、其の城門にかの力士神の像を造り立たる義なり、然て此王が死ける後に、訖利多種とて、甚く賤しむる種族の者、この國を推取りて王となり、其の僧徒らを逐斥けて、佛法を毀壞せる事なども記せり、委くは本書に就て見るべし、）さて此謂ゆる三十萬頌。六百六十萬言の論頌を。即今大毘婆沙論是也と有れど。此は玄奘が甚じき謬りの說にて。今傳はる大毘婆沙論は。此時の說には非ず。佛滅より九百年あまり後の物なり。抑是時の論は。例文ながらも。三十萬頌。六百六十萬言と云へる許なれば。決めて廣漠なりけむが。其は早く滅びて。今傳はる阿毘曇心論と云ふもの。疑なく其の梗概を錄せる物なり。然るは此論わづかに四卷なれど。信に三藏を釋せる論の。大概を綜るに足る物にて。卷首に。尊者法勝造と有るが如し。（こは東晉の世に、罽賓國の沙門、僧伽提婆と云ひしが、慧遠と云ふ比丘と共に譯せる物なり、界品、行品、業品、使品、賢聖品、智品、定品、契經品、雜品、論品と十品に說たり、）其は彼凝然が佛法緣起に。七百年時。法勝羅漢。嫌婆沙太博。略撰要義。作二百五十偈。名阿毘曇心論。譯成四卷。又千年間達磨多羅尊者。以婆沙太博。四卷極略。更撰三百五十偈。足前四卷。合六百偈。名爲雜心。と云へるを思ひ合せて辨ふべし。（此は內典錄、及び開元貞元の釋敎錄などに、謂ゆる說を集めて記せるにて正說なり、但し凝然も、婆沙の要義を略撰してと云へる婆沙を、今傳はる大毘婆沙論の事ぞと思へる趣なれど、其は覺えず古人の謬りを受たるなり、）七百年時とは。六百年を過ぎて。七百年までの間をいひ。千年間とは。九百年を過ぎて千年までの間を云ふ語なり。（また同書に、九ー年時達磨多羅造雜心論とも云へり、）西域記に。健駄羅國の所に。城北四五里有故伽藍。即達磨呾邏多論師。（唐云法救。舊曰達磨多羅訛也）此製雜阿毘達磨心論とあり。（阿毘達磨は、阿毘曇と云ふに同じ、凡て達磨を切めて曇と云ふは常の事なり、）此を略して雜心論と稱するにて。卷首に尊者

法救造と有るが如し、(こは劉宋の世に、天竺沙門僧伽跋摩、と云ひしが譯にて十一卷あり、此は前の阿毘曇心論を釋たる論にて、序品と擇品と二品を加へて、十二品とせり、)其は序品の偈に。敬禮尊法勝所説我頂受と云ひ。文に依阿毘曇毘婆沙所應故大德法勝。及我達磨達羅共莊嚴云々と有るを以て。是時の毘婆沙に依りて。法勝かの阿毘曇心論を造り。法救はその法勝が論を奉じて。此時の婆沙の遺説を莊嚴せり。と云ふ意いと炳焉に知られたり。(此法救また、五事毘婆沙論と云ふをも造れり、其は次條に云ふを見るべし、)然らば今傳はる大毘婆沙論を。是時の論に非ずと云こと。何を以て知ると云むに。吾は此論二百卷の全書を眼を開き讀みて知りたり。其は第六條に論ふを待て。阿毘曇比丘らもまた善く眼を開きて見るべし。佛滅後。五百年中有阿羅漢。名迦旃延子。先於薩婆多部出家。本是天竺人。後往罽賓國。與五百阿羅漢。及五百菩薩。共撰集薩婆多部阿毘達磨。製爲八伽蘭佗。即此間云八犍度。伽蘭陀譯爲結也。此條及び次條は。世親菩薩傳と云ふ物に採りて載せり。(此傳を一には婆藪槃豆傳とも云ふ、婆藪槃豆を譯して、世親と云なり、陳の眞諦が翻譯にて一卷あり、藏經の傳記部に入たり、)さて五百年中とは。佛滅より四百五十年頃を云こと。上件々の例の如し。(皇國は崇神天皇の御世治し看せる、五六十年頃に當り、諸越は漢元帝が初元、永光の頃に當るべし、)○有阿羅漢名迦旃延子とは。彼四果の中に最上とする。阿羅漢果を得たる人の義なり。佛祖が十大弟子の中に。大迦旃延子と云ふ人有れど。其とは元より別人なる事いふも更なり。(此を誤りて、同人と爲たる説も彼此あり、惑ふこと勿れ、)名義集に。羅什曰。南天竺婆羅門姓也。善解契經者。淨名疏云。此翻不定。有云扇繩。有云文飾。未知孰正とあり。(また下に引く西域記には、迦旃延と云ふは訛にて、迦多衍尼と云ふを正と爲すよし云ひて、玄奘が書には然のみ云へり、)○先於薩婆多部出家とは。上座一切有部にて出家せる由なり。前品の第九條に引たる述記の或説に。至三百年初迦多延尼子出世。於上座部出家。先弘對法。後弘經律。と有るも同人

なれど。其は述記に。此時迦多衍尼子未必生と有る如く。訛傳なり。○本是天竺人。後住罽賓國云々とは。本は南天竺の人なるが。罽賓國に往て住せる由なり。罽賓國は。本書にまた在天竺之西北と見えて。卽上に出たる迦濕彌羅國なり。其は西域記に。迦濕彌羅國舊曰罽賓訛也。周七千餘里。四境負山。山極峭峻。雖有門徑。而復隘狹。自古隣敵無能攻伐。國大都城。西臨大河。南北十二三里。東西四五里。伽藍百餘所。僧徒五千餘人。有四窣堵波。並無憂王所建也とあり。(玄弉が傳に記す所も同じ趣なり、但し玄弉は、罽賓と云ふを訛也と云へれど、其の後書等にも、皆罽賓とのみ云ひて、迦濕彌羅國とは云はざるなり。)○與五百阿羅漢及五百菩薩共とは。阿羅漢は佛弟子の上果。菩薩は在家の覺衆生を稱へる古實に叶へる文言なり。然るは迦旃延子は阿羅漢果の人にて。撰集の上首と爲り其餘五百の羅漢ども及び五百の菩薩らを手役はしめて製せる由なり。(然れど其の數を、各々五百と云へるは。例の文格なれば、元より拘はるに足らず。)然れば其の菩

薩ども。みな羅漢比丘らの下座に就て物せること。最諦にぞ有りける。(かの赤倮々に、維摩經序分の列衆に、比丘らを先にし、菩薩を後にせるを、羅什註して、隨人情所推と云へるも、菩薩は戒緩なるが故ぞ、世俗多くは信せざりし故なり、と云へるを思ひ合すべし。)○薩婆多部は說一切有部。阿毘達磨は阿毘曇とも言ひて。論とも對法とも譯する由は既に出たり。撰集とは。その說一切有部に有來れる論等を殊に撰集して。八の伽蘭陀に製し爲せる由なり。(其の本論どもは下に論へる六足論の類なるべし。)○卽此間云八犍度は伽蘭陀は梵語にして。犍度は其の譯語の如く聞ゆれども。此は文辭の惡きにて。然には非ず。犍度。伽蘭陀ともに同じ竺語の轉訛なり。(然るに此傳の譯者眞諦より、舊く諸越にては、八犍度と唱ひ來れる故にかく云へるなり)○伽蘭陀譯爲結は。梵語に犍度とも。伽蘭陀とも云ふを翻譯すれば。結の義なる由にて。また聚とも譯せり。斯て是れ八あるが故に。八結とも八聚とも稱せり。(三藏法數に、梵語犍度、華言法聚、以諸法門、各々、從其類分

爲八聚、故名八犍度論、と有るを思ひ合すべし）名義集に。犍度正音婆犍圖。此云法聚。如八犍度。以分一部爲八聚故。以氣類相從之法。聚爲一段。一業犍度明三業。二使犍度明百八煩惱。三智犍度明十智。四定犍度明八定。五根犍度明根性。六大犍度明四大。七見犍度破六十二見。八雜犍度謂小乘法とあり。（但し此は八犍度の名目のみなり、委くは八犍度論、發智論を見るに及こと無れど、手近くは三藏法數また大藏法數などを見ても知るべきなり）然して此下に。大論云。問。八犍度誰造。六分阿毘曇從何處出。答。佛滅後百年。阿輸柯王會諸論師。因生別部。有利根者。欲解佛經作八犍度。其初造者卽迦旃延也と有り。（此は本書大智度論をも見て、今の用ある文をのみ甚く切めて抄せり、委くは本書を見るべし）西域記。北印度境なる。至那僕底國の所に。大城東南行五十餘里。至答秣蘇伐那僧伽藍。此言闇林。僧徒三百餘人。學說一切有部。釋迦如來涅槃後。第三百年中。有迦多衍那論師者。（舊曰迦旃延訛也）於此制發智論焉と有る發智論。やがて此八犍度論なり。（其は凝然が佛法緣起に、佛滅後三百餘年、迦多衍尼子、造阿毘曇八犍度論と有るにても知るべし、但し西域記、緣起ともに、三百年と有り、諸書にも多く此年數を用ひたれど誤なり、其は上に引たる述記に、此時迦多衍尼子未必生と云へる如く、年數うち合ざる物をや、偕この西域記の文、通本に誤字あり、今は玄弉が傳を校して引たり）さて上なる大論の文に。六分阿毘曇從何處出と有るは。謂ゆる六足論の出處を問へる語なるが。八犍度論の事を論ふに就ては。先この諸論の事を知ずは有るべからず。大論に其の說有れど。文繁かれば其は措きて。近く倶舍論頌に。諸論とある處の疏に。諸論者一舍利子集異門足論。二大目犍連法蘊足論。三迦多演那施設足論。已上三論佛在世造。（この三人の比丘どもは謂ゆる十大弟子の中にも、上首の者なること、既に往々云へるが如し、また此中に迦多演那と云へるは、卽謂ゆる大迦旃延なり、今の八犍度論を造れる迦旃延子を、また迦多衍那とも云ふに思ひ混ふべからず）佛涅槃後一百年中。提婆設磨造識身足論。

至二三百年初一。世友造二品類足論一。又造二界身足論一。至二三百年末一。迦多演尼子造二發智論一。前六足論義門稍少。發智一論法門最廣。後代論師多宗二發智一。大毘婆沙論依レ之而造。と有るをまづ思ふべし。（佛法緣起に、薩婆多宗根本有二七論一、發智爲レ身、六足爲レ足と云ひ、倶舍論の光記寶記並に云く、上七論是說一切有部根本論也、和上唯施設足論未レ翻、餘之六論、皆並翻訖と云へり、和上とは玄奘を云ふ、施設足論は、譯本なき故に、經藏目錄に出さず、外に施設論と題せるが、七卷なる有れど、此撰者の名も無く、謂ゆる施設足論とは別なり、此論をも大毘婆沙論などに、唯に施設論とも云へるを以て、同書なりと思ひ紛ふべからず。）然れども此諸論の出來し時代を。云へる說は信られず。其は集異。法蘊。施設足の三論を。佛在世造と有るが中の施設足論は。今傳らざる故に知ねども。集異法蘊の二論は今傳はるを視るに。佛在世に。舍利弗。目連らが造れりと云ふこと。全信られず。其はまづ集異門足論を。具には阿毘達磨集異門足論といふ。（また說一切有部集異門足論とも名く、卷首に尊者舍利子說とあり、玄奘比丘が譯にて二十卷あり、十二品に別たり、）此は疑なく。長阿含に收たる集衆經と。十上經とを合せ取りて。其の法門を大きに敷演して。後人の作り替たる物なり。然るは其の集衆經の初めに。一時佛於二末羅一遊行。與二千二百五十比丘一倶。漸至二波婆城闍頭菴婆園一。云々と錄し。其の說法已りて後に。舍利弗に。吾患二背痛一。欲二暫止息一。汝今爲二諸比丘一說法と勸むるに。舍利弗諾して。一法より十法まで。種々に增一法を說たると見え。十上經も。其の說法の場處こそ異れ。同じ趣に吾患二背痛一欲二少止息一とて。同人に代講しむれば。一法より十法まで。各々一を增して十に至り。共に五百五十法を說たるを。佛祖が印可せる由見えたり。（また藏經中に、佛說大集法門經とて二卷あるは、集衆經の別譯なり、また長阿含十報法經と云ふも二卷あり、此は十上經の別譯にて、共に今の二經と同じ趣なり、）然て集異門足論にも。初品緣起品に。世尊一時。遊二力士生處一。至二波々邑一。住二折路迦林一。時告二舍利子一。吾今背痛暫當二寢息一。汝代レ吾。爲二苾芻一宣二說法要一。

時舍利子默然受教告衆言と錄し出て。終りの讃觀品に。佛讃舍利子。善哉善哉。汝今善能結集如來所説増一法門と印可せれば。諸苾芻ども聞て觀喜奉行とあり。(力士生處とは、上の集衆經に、末羅と有る地名の譯語なり、波々邑は波婆城、折路迦林は、闍頭菴婆園の轉語なり、是にても集衆經を取れること灼然し。)斯て一品より十法品まで。二百十餘門に別ち。凡て問答の體に作れるが告衆言とは有れど。目前に集へる。衆人に諭せる。文格に非ざるは。此作者が文の飽漏なり。かつ其五法品に。問。尊重有智同梵行者云何。答。舍利子。大採菽氏。大迦葉波。某々等皆名尊重有智同梵行者。問。法云何。答。名身。句身。是名爲法云々など有り。舍利弗が當昔の自記ならむに。自から尊重有智としも云むや。佛祖よりして、自から尊大に誇り稱するは、佛法者の常なれども、佛祖の在世なりし間は、其の弟子どもかく自尊大には稱せぬ事なり、此論の作者も、然ばかりの事は知りて在めれば、案ふに此論は、舍利子が造に託すとは無く、只に彼二經を布演して、作れる論なるを、後人その舍利弗が名の見えたるに、能くも其作意を尋ねず、謾に舍利子造と定めしを玄弉をはじめ後の比丘らも、深く此義を辨へず、雷同して、舍利弗が自記とのみ心得來にけむ、其は他なし、和漢古今の比丘ら、盡く懸空誣妄の説にのみ長じて、曾ても本故を温ぬる、實學を知ざる故なり、此事なほ新婆沙論を論ふ所に云ふをも、合せ考へて辨ふべし)殊に其の論中に。法蘊足論を多く引たるは。彼論ありし後世人の撰なること。更に論ひ無き物なりかし。(また一切經藏中に、舍利弗阿毘曇論と題せる、二十二卷三十三品の論あれど、是また舍利弗に僞託せる物なり。)次に法蘊足論を。具には阿毘達磨法蘊足論といふ。また説一切有部法蘊足論とも名く。卷首に。尊者大目乾連造とあり。玄弉が譯にて十二卷あり。二十一品に別たり。(唐沙門靖邁が後序にも、大目建連之所製矣といへり。)文中に。目乾連といふ名は一所も無く。また彼比丘が造と覺ゆる文も有ること無く。初品より第二十一品まで品ごとに。一時薄伽梵在室羅筏住逝多林給孤獨園。爾時世尊告苾芻衆

云々と有る故に。佛祖の自說かと見るに。甕喩經中佛作ニ是說一云々。莎底經中佛作ニ是說一云々。如ニ契經說一。尊者慶喜。告ニ瞿史羅長者一言云々など有れば。總ては佛說ならず。いと不體裁なる物なり。(なほ滿月經、大因緣經、頞勒窶經、取蘊經、六處經、など云ふをも引たるが、皆此趣に云へり。)殊に目乾連が在世の時頃に。かく引出る佛經論は有こと無ければ。此は紙葉に載せる契經の。次々に出來し後世人の撰なるを。目犍連が造と誤り來れるにぞ有りける。(然れども集異門足論よりは前に出來しこと、彼論に多くこの法蘊を引たるにて論なし。)次に識身足論を。具には阿毘達磨識身足論と云ふ。また說一切有部識身足論とも名く。卷首に。提婆設摩阿羅漢造とあり。玄奘が譯にて十六卷あり。六品に別たり。是を佛涅槃後一百年中に造れりと言ふも信られず。其は此間いまだ契經さへに。紙葉に載せるが無りし時なれば。況て阿毘曇を。紙葉に載すべき時に非らず。(然るは大毘婆沙論の第百十九卷に、契經是此論根本と有る如く、契經の法敎ありてこそ、阿毘曇は有れ、是道理をまづ思ふべし。)然れば此は。諸論の中には最舊かめれど。紙葉に載せる契經の少出來て後に造れる論なる事は論ひなし。(然ればこそ經名は一つも無れど、契經中ニ云々と云ふこと往々に見えたれ、また他人の論說を引たる所もなきは、是ぞ諸論中に、最古なるべき證なりける。)上に論へる集異法蘊の二論。もし信に佛在世より有りなむには。佛祖が十大弟子の中にも。上足たる舍利子目連が。佛祖の印可を受たりと云ふ。阿毘曇の古書なれば。必ず引ずは有るまじき事なるに。彼二論の說を襲へる文の無をもて。識身足論よりは。彼二論の却りて後なる事をも悟りつべし。(或人問、識身論もし前にて、集異、法蘊の二論却りて後ならば、彼二論に、識身論說ニと云こと有るべきに、無きはいかに、答、そは彼二論は、共に佛在世の造にせむと爲たるが故に、識身論をば引ざるなり。また問、然らば集異門足論に、法蘊足論を引たるは如何、答、こは問にや及ぶべき、法蘊論は前に作り、集異論は後に作れる故なる耳ならず、共に佛門二人の上足なれば、互に嫌ひなき故なりかし。)次に品

類足論を。具には阿毘達磨品類足論と云ふ。また說一切有部品類足論とも名く。卷首に。世友尊者造とあり。玄弉が譯にて十八卷あり。八品に別たり。(西域記健馱羅國の所に、城東有二窣堵波一、世友論師於レ此製二衆事分阿毘達磨論一と有るは、卽この品類足論なり、藏經中に、品類足論の外に、衆事分阿毘曇論とて、宋求那跋陀羅、共二菩提耶舍一譯と云へるが、十二卷なる有れど、品類と同本異出にして略本なり。) 此を世友が造と云ふこと。然も有るべけれど。三百年の初と云へるは信られず。其は四百年の初に。健馱羅國の迦膩色迦王が。三藏結集の時の上首は世友なれば。其の時百五六十歲ならずは。年數合ず。當昔世友は然る老比丘としも聞えねば。三百年初は必ず四百年初の訛傳なるべし。(上に出せる彼の結集の時の趣を思ふべし、當時世友は、菩薩とさへ云ひて、餘の比丘等よりは、超りて若比丘なりし故に、人の貶しめたる趣に見ゆるをや。)さて此論の辨千問品と云ふに。十八界經。謂頌中前九後九。各總爲レ一。合有二二十經一。依二一經一。爲二前十五問一と云へる語も有れば。識身足論の出來し頃よりは。契經の紙葉に載せるが猶多かりげに聞えたり。(然れど經々の名は一ッも見えず、其は四阿含中なる數多の經名は、悉後に撰集せる徒の、心々に題たるが故なり、其の由は末に阿含の事を云ふ所に、委しく論ふを見べし。)次に界身足論を具には阿毘達磨界身足論とも云ふ。また說一切有部界身足論とも名く。卷首に世友尊者造とあり。玄弉が譯にて三卷あるを二品に別たり。是も世友が造と云ふこと然も有らむか。但し大毘婆沙論に。前の五足論をば。數所に引たれど。此論を引たる所なきは。不審しき事なり。(また是に依りて思ふに、此は大毘婆沙論ありし以後の託作ならむも亦知るべからず其は上の品類足論の辨五事品をかの、雜心論を作れる法救が釋せる、五事毘婆沙論と云ふが二卷あれど、此界身足論の事の無きをも思ひ合すべし。)次に發智論を。具には阿毘達磨發智論と云ふ。また說一切有部發智論とも稱へり。卷首に。尊者迦多衍尼子造と有り。玄弉が譯にて二十卷あり。八品に別たり。(其の八品は卽謂ゆる八犍度にて、雜蘊、

結蘊、智蘊、業蘊、大種蘊、根蘊、定蘊、見蘊の八品なり。)亦是より前。符秦の僧伽提婆と云へるも翻譯して。阿毘曇八犍度論と題せるが三十卷有れど。譯の善らぬ由にて。玄奘がまた更に譯して。發智論とは號けしなり。(其の八犍度論も一切經藏に入りて、今に傳はれど、暇を惜む人などは、發智論をだに見れば、其は讀までも在りぬべし。)さて此發智論にも。經名は無れど。契經說。世尊說とて引たるが多かるを見るに。阿含の經々に載たる說等の多く見ゆるは。記せる經の益々に殖たりし故なり。然るに其の經名を云ざるは。當時すでに然は出來つゝも。舊よりの習風のまゝに。唯に契經とのみ稱へて。各々某々に名を題ざりし故なり。(然るに法蘊足論に、七經ばかりの名の見たるは、彼論は發智論よりも、後に作れる故なること著し、集異門足論は、法蘊足論を引たれば、猶後の作なること、云ふも更なり。)然れば右六論の出來し次順は。まづ識身足論ありて。後に世友が品類界身の二足論作り。次に發智論出來て。後に法蘊足論あり。此論有りし後に。集異門足論を造り出しを。其の後の人これを舍利弗が造として。諸論の上に介立たるなり。其は議論の次々に高上に成行ける趣を以ても推量られたり。(然れど此は吾等が古學の眼をもて見たる說にこそ有れ、佛習內ならむ徒に示せてば、また何なる護法言をか云ふらむ。)さて上に引たる俱舍論頌疏に。前六足論義門稍少。發智一論法門最廣。後代論師多宗發智。大毘婆沙論依之而造と有るは。實然る事にて。今在る大毘婆沙論。やがて發智論を廣說せるなり。其は次條に云ふを見るべし。

迦旃延子。既造八結竟。復欲造毘婆沙論釋之。馬鳴菩薩是舍衞國婆枳多士人。通八分毘伽羅論及四皮陀。迦旃延子。遣人往舍衞國。請馬鳴爲解八結義意若定。馬鳴隨即著文。經十二年。造毘婆沙方竟。凡百萬偈是也。

此條も世親傳の前條に接せる說を採れること。上に云へるが如し。(但し發端の五字は、今己が加へたるなり、其はかく二條に引放ち載すとしては、語足らねばなり。)〇既造八結竟云々は。まづ八結とは。發智論を云ふ。結は犍度の譯語なること

既に云へり。(梵語に、犍度とも伽蘭陀とも云ふは、類聚の義なるを、此論は、法義を八種に分類せるが故に、八結とも、八蘊とも、八聚とも諸書に譯して、其の譯せる事を發智論と號けしは、此を學べば發智する意なり)さて其の八結の論を造り竟て。復其が毘婆沙を造りて。其の義を解釋せむと欲へる由なり。○舍衛國は。西域記に。室羅伐悉底國舊曰二舍衛國一訛也と有る國にて。此國の事は佛祖生涯の品々に數所に出たり。婆枳多士は。其の國の小地名と聞えたり。(此馬鳴が生國を、諸書に或は東天竺と云ひ、或は西天竺といひ、或は北天竺といひ、或は中天竺と云へり、鳳潭が幻虎錄に、其の異說どもを悉擧て、未レ詳二何是一と云へるは實に然る言なり)さて此馬鳴と云ひしは。付法藏の第九祖と稱する彼脇比丘が弟子。十祖富那夜奢と云へるが弟子にて。婆羅門種の人なるが。後に付法藏の。十一祖と稱する人なること。下に引出る書等のごとし。(竺語に、阿濕縛窶沙と云へるを、譯して馬鳴と云ふ、此名の由緣を云へる說に、或は前世に毘舍利國の王たりしが、其の國人ら馬の如く裸體なるを憐みて、王分身して、蠶と化りて、衣を得せしむ、故に馬人ら感戀悲鳴せる故に、馬鳴と稱ふと云ひ、或はもと高勝と稱へるを、其の說法の甚妙なるに、馬も淚を垂れて法を聽たる故に、馬鳴と稱すとも云へり、甚も信られぬ說等なり、名義の實說は、餘に有りけむが、傳へ漏せるにや有む)此を菩薩とも。大士とも。論師とも。比丘とも。尊者とも諸書に見ゆるは。本これ婆羅門なるが故に。華蔓寶冠の菩薩形なりし事は云ふも更なり。大士と稱ふは其の諡たる譯語なること。既に前品に云へり。論師と云へるは。能く議論を立ればなり。斯て後に剃髮せる故に比丘と云ひ。付法を嗣たる由を以て。尊者とも云へれど。尙舊稱を存して。後までも菩薩とは稱する事なり。其は此の馬鳴のみ然るに非ず。後に出し龍猛。無著。世親などをも。右の如く稱するは。是故なりかし。(赤倮々に、或人予を難じて云く、吾子菩薩を俗相と云こと何の據か有る。既に盧舍那尊特の身相は、寶冠瓔珞を以て莊嚴せり、如來豈俗體ならむや、又經論に、菩薩に、在家出家の二種ありと

説く、今吾子在家のみと謂へるは、一偏に失するに非ずや、答ふまづ菩薩俗相のこと我今近く事證を引きて喩すべし、西域記に、天竺の風俗を叙て云く、國王大臣服玩良異、華蔓寶冠以爲首飾、環釧瓔珞、而作身佩、其富商大賈唯釧而已と、如此なれば、其の刹利婆羅門二種の人は、みな寶冠瓔珞を服すと見えたり、此は玄弉が目撃親見せる所を、直に錄せる者なれば、其の説尤信ずべし、さて盧舍那は華嚴の敎主なり、此經寓言なること、既に辨ずる如くなれば、佛身を俗相に設けしも、俗諦に卽して、眞諦なるの理を表示せむが爲なり、故に入法界品五十三の善知識、その比丘相なるは、僅に六人に過ぎず、餘は皆俗相なるを見て知るべし、と云へるは實に然る説なり、猶委くは本書に就て見るべし。〇通八分毘伽羅論及四皮陀云々とは其の毘伽羅論は、悉曇文字音韻言語の論なる事。また四皮陀は四韋陀典とも言ひて。婆羅門種の先祖。梵天子より傳へし梵學の本書なる事も。既に出たれば今更に云はず。(第一品に委く説たり立却り見て知るべし。)抑此毘伽羅四皮陀の學はしも。梵學の根本規範たる道なるを。此等の學に通達せる故に。迦旃延子がわざと人を遣して馬鳴を招請し。八結の廣説を造る成業に雇へるなり。(迦旃延子元より此頭の上首と聞ゆるに、其の人の如く成業に雇へるを以て、此馬鳴がまた別なる才氣のありし人なる事も推量らるめり。)〇爲解八結義意若定馬鳴隨卽著文云々とは。馬鳴が爲に迦旃延子その造れる八結の義意を解開しめて。義意のよく定まるに隨ひて。馬鳴やがて文章にかき著せるが、十二年を經て。一部の毘婆沙と造り竟たる由なり。(但し此趣によりて案ふに、此時迦旃延子は、既に老年にて、さる大業に堪ざりし故に、馬鳴に依托せるにやとも思はる、其は其の本書たる八結の書をしも綴り集めし人の、その解釋書を造るに堪ざる、道理の有べくも非ねばなり、後人なほ能く考ふべし。)凡百萬偈と云へば。彼迦膩色迦王が時の三十萬頌六百六十萬言の毘婆沙に勝れる。大毘婆沙にぞ有りける。(倶舍論頌の圓暉が疏に、迦膩色迦王が時の毘婆沙結集の事を記して、世友商確、馬鳴採翰、懸諸千古と云へるは甚く謬なり、

然るを華嚴の鳳潭が冠註に、今の世親傳なる說を引きて證せるは、此比丘ども、迦旃延子馬鳴を、世友と共に四百年の時の人とし、其の時の毘婆沙と、馬鳴が迦旃延子に雇はれて、文に著せる毘婆沙とを、同じ論と心得たるなり、是はそも何ちふ麁學ぞや撰者どもの時代も知らず、其の據る書の文義も見えぬ比丘らなりかし、古今此比丘らの學は大凡そ斯のごとし）さて此馬鳴は。諸書に云ふ如く。始めて大乘と稱する說を弘めし人なるに。是時かく薩婆多部の論說に勞けるを思ふに。此は壯年なりし間の事にて。此頃までは。一切有部の古說を信受せしが。中年よりして。其の大乘說を立たりけむと所思るなり。（こは事實のつゝきを思ふにも、迦旃延子は薩婆多部の人なれば、此時しも馬鳴、かの著せる大乘起信論などの如き、見識にて在なむには、必ず互に忌合ふべき謂なるを、十二年がほど相和して事竟たるは。同意の密合する所ありし故と思はる、然れば實には壯年まで、迦旃延子が弟子なりし故に、雇はれけむも亦知べからず）偖しか所思るに就て。なほ潭く考ふれば。思ひ合さる

る事なむ有ける。其は上にも云へる如く。此は付法藏の十一祖と立る人なるが。其師を十祖富那夜奢といふ。此夜奢が師は。かの迦膩色迦王が。結集の時の上座たりし。九祖脇比丘なり。（富那夜奢がこと、付法藏傳に、十祖富那夜奢尊者華氏國人、智識深遠、多聞博記、初脇比丘至其國、止一樹下、指其地曰、此地若變金色、當有聖人至矣、言已地果成金、既而夜奢果至、遂納爲弟子、付以法藏、以善方便化度衆生、所作已辨使入涅槃とあり、其他の金色と成れりと云ふは、妄誕なること言まくも更なり、脇比丘が事は、既に出たれば今更に云はず、）斯て此脇比丘は。元より薩婆多部の正統第一の長老にて在しかば。彼王が。諸部立範。孰最善耶と問へるに。莫越有宗と答へき。此は信に釋門の古義にし有れば。富那夜奢に傳ふる所も。此旨なること言ふも更なり。然るに此者その師傳の付囑に背ひて。大衆部より流れ出たる諸法空無我の說をぞ弘たりける。（但し佛法のみならず、何の學びにまれ、青を藍より出て藍より青き、考說義釋の出來む事は、世にも常ある事な

れど、其の根本第一義の立說を變廢して、黑白氷炭相反する、敵對の說を盜みて主說と爲すは、轉變異學といふ者にこそあれ、此を傳統付囑の人と云むや、然れば上に引たる此者の傳に、脇比丘が樹下の地を指して、此地もし金色に變せば、聖人至らむと懸記せるに、富那夜奢その所に至れりと云へるは、妄誕なること彌益々明なり、總じて佛書は、妄誕幻說を揑ね固めし如き物なれど、別に一機見の活套ありて、其中より眞の事實を見出る事なるが、彼付法傳はしも、大乘の祖とする、馬鳴龍猛らが立義の傳承を、かの大天が流と云ふ事をし覆さむと欲して、脇比丘までの九祖を、强に引付たる物にして、大乘家流の撰なれば、殊に其の用意して見ずば有るべからぬ物なり、此事は仲基も既く少か云へりし如く所思たりし）僧また馬鳴が中年の頃まで、一切有部なりし事は。かの付法藏傳に。實有我と計して。天下の智士の。もし我に勝者あらば首を截りて謝せむと誇れるに。夜奢が諸法空無我と說くを聞て。諍論せるに。忽に降伏せられ。其の弟子と成りて、其の宗義を弘めしと有る如くなれば。中年よりの轉學なること著明なり。僧しか轉學せるより後の事は。諸書を引きて次品に委く說くを俟べし。（然れど少か其の大概を云はむに、馬鳴が性質、元より拔群の高才なるが上に、能辨また比類なき者也しかば、彼二十部の諸立說を盡く網羅し、かつ梵志學の蘊奥をも襲ひ取りて、始めて其の說義を大乘と稱し、爾前の二十部諸說をば、一切有部をも係て小乘を貶し卑しめ、佛祖の秘藏を總說する由に託して、數多の大乘經等を僞造し、其の中に阿彌陀、觀世音など云ふを始め、佛祖が夢にも知ざりし、彼謂ゆる法身の佛菩薩を無數に揑ね出し、また西方極樂世界の妄誕をも構へしことを、次品に彼が自作せる、大乘起信論等を擧て、委曲に詳し辨ふるが如し、何に大乘說の魁首ならずや）○或人問ふ。前に西域記を採れる本文に。かの迦膩色迦王が時に結集せる。三十萬頌六百六十萬言の論頌を。即今大毘婆沙論是也と有るを。玄奘が謬と爲て。其論頌は早く亡たるが。今在る阿毘曇心論。雜心論。その略說なり。今存る玄奘譯の。二百卷なる大毘婆沙論

は。決めて當昔の論頌ならずと言へれば。今この迦旃延子が馬鳴と共に製れる毘婆沙論。もし彼玄奘が譯せる。二百卷の大毘婆沙論なるか。答ふかの阿毘曇心は。七百年時に出し法勝が作。雜心は千年間に出し法救が作にて。共にかの三十萬頌の略論なること。既に說明せれば再更に云はず。（もし不審くは、上の第四條に註せる說どもを、立却り見て知るべし。）今見在する大毘婆沙論は。迦膩色迦王が時の論頌ならぬ事は。其全編を通觀するに。全く發智論の釋論にて。其の發端に。誰造此論と自問せるは。誰か此發智論を造れると言ふ意なるが。其の自答の說の繁かる中に。佛在世以種種論道。分別演說。佛涅槃後。或在世時。諸聖弟子。隨順纂集別爲部類。是故迦多衍尼子亦佛去世後。隨順纂集造發智論。於佛說諸道論中。安立章門。標舉略頌。造別納息。制總蘊名。（謂集種々異相論道制爲雜蘊、集結論道制爲結蘊、集智論道制爲智蘊、集業論道制爲業蘊、集大種論道制爲大種蘊、集根論道制爲根蘊、集定論道制爲定蘊、集見論道制爲見蘊）諸勝義智。皆從此發。此爲初基。故名發智論と言ひ。（此文いたく略して引たれば、委くは本論を披き見るべし）篇目も發智論に同ければ。彼論の廣說なるに論ひ無けれど。其の發智は。五百年時に。迦旃延子が始めて造れる論なれば。廣說せる大毘婆沙論の。四百年時なりし迦膩迦色迦王が時に。出來べき由有なむや。（是に就て思ふに、西域記を始め諸書に、發智論を造れる迦旃延子を、三百年所の人として、或は三百年初、或は三百年中に、發智論を造ると云へるは、然すがに大毘婆沙論の、發智論を釋せる書なる事は知れども、其の大毘婆沙を迦膩色迦王がかの五百の蝙蝠僧らに命せて、作しめたる物に爲まほしく思ひて、世親傳に、迦旃延子を、五百年時の人と有る事をしも、深く省みず、强ひて彼を三百年所の人と爲して、四百年時に、彼五百僧らが廣說せる由に年時を合はせたる妄事にぞ有べき。）然らば此の本文に。迦旃延子が自身に馬鳴と共に造れる毘婆沙論。すなはち今の大毘婆沙論なるかと云ふに。此二人して製れる毘婆沙も。亦早く滅びて。今の大毘婆沙論は。其にも非ら

ず。(然れど中には、其の遺說の存せるが有らむも、亦知べからず、其はいと廣博に、舊說どもを集めし大廣說なればなり、一切經藏の小乘論部中に、鞞婆沙論とて、卷首に、迦旃延子造と題して、符秦の僧伽跋澄と云へるが譯せる、十四卷四十二篇の論有れど、發智論の次第に合はず、甚く不體裁なる物なり、若くは、迦旃延子と馬鳴が製れる婆沙の、殘欠などを集めし物か、後人なほ考ふべし。)いで其の由は今在る毘婆沙の。初品を披けば忽に。一切鄔陀南頌。皆是佛說。佛於處々方邑。爲種々有情。宜宣說。佛去世後。大德法救。展轉得聞。隨順集制。立品名。謂集無常頌。立爲無常品。乃至集梵志頌。立爲梵志品。と云へるは文あり。(鄔陀南梵語、此云自說也と音釋に見えたり。)此に法救と有るは。彼千年間に出て。雜心論を造れる人なり。今の大毘婆沙論。もし迦膩色迦王が時の論頌。或は迦旃延子が自撰ならむに。九百年を過たる後人の事を云む物かは。(其は迦膩色迦王が結集は四百年時、迦旃延子が其の學は五百年時なればなり。)また第百十四卷に。昔談を多く並べ錄せる所に。昔健駄羅國の迦膩色迦王云々と云へる說あり。此の王が當時に錄せる論ならむに。斯の如き語の有らむ物かは。(此等の事はも、何に比丘らが護法心にも、例の懸記とは云ひ得まじくこそ。)猶言はゞ。佛法の後世に傳はる。年限を論へる所に。如佛告阿難陀言。我善說法。若不度女人出家者。應住千歲。度女人出家故。今減五百歲。問。正法住猶滿千年。何故如來作是說。答。此依解脫堅固密意而說。謂若不度女人出家。應經千歲解脫堅固。而今後五百歲。惟有戒聞等持堅固。非解脫者。皆是度女人出家之過失耳とあり。(此文は、第百八十三卷の九葉に見えたり、今は用なき文を略きて引たり、委くは本論に就て見るべし。)此文に後五百歲と云へるは。千年を二つに分けて。前五百歲。後五百歲と爲たる語なること詳に聞えたり。猶滿千年と云へるにて。前五百歲は疾く過ぎて。後五百歲をも。四百年所は過たること著明なれば。今の大毘婆沙論は。佛滅より千年に垂たる時に。出來し論なること。更に論ひ無きに非ずや。然ればこそ。九百年

を過たる世に出し。法救が事をも載たりけれ。（和漢の比丘ら、此婆沙論の全書を見たるは、一人も無りしが、今論ふ如く說明せる書は、吾いまだ是を見ず、東大寺の凝然のみ、此年來のうち合ざるに聊か心著たると見えて、其著はせる佛法緣起に雜心法救取二婆沙法救一と云へり、此は婆沙に出たる法救と、雜心論を作れる法救と、同名異人にせむとの結構にて、彼日蓮と云へる比丘が宗義に、法華經の釋迦と、餘經の釋迦と別なり、と云ふに類せる說なるが、其說立がたき由あり、其は此法救また出曜經、法集要頌經、など云をも著せるに、出曜經の第一品を無常品と云ひ、第三十二品を梵志品と號けて、上に引たる婆沙の文に、大德法救展轉得レ聞云々、と有るに品目符合し、また雜心論とも符合するは、同人なるに論ひなく、何とも言かすめ難き事になも有りける。）然るに玄奘比丘が其の大毘婆沙論の卷首ごとに。五百大阿羅漢等造と署し。その第二百卷の終に。三藏法師玄奘。譯二斯論一訖。說二一頌一言。佛涅槃後四百年。迦膩色迦王二贍部一。召二集五百應眞士一。迦濕彌羅釋二三藏一。其中對法毘婆沙。具獲二本文一今譯訖と云へるは。其の譯者とも有らぬ甚しき妄言ならずや。（大毘婆沙論の名を、一切經藏目錄に、其には說一切有部阿毘達磨大毘婆沙論と云ふ、卽玄奘が譯なり、此を俗に新婆沙論と稱ふ、そは玄奘より前に、北涼と云ひし國にて、浮陀跋摩と云し梵僧が、道泰と云へる僧と共に譯せるが多く缺て八十二卷あれど、只三犍度のみにて全書ならず、かつ譯の宜からぬ由にて、玄奘がまた更に譯せる故に、かの北涼の譯をば舊婆沙と云ふ、其に對へて新婆沙とは云ふなり、）然らば今存る大毘婆沙論の作者は。何者ならしむと言ふに。先その論體。決して彼五百の蝙蝠僧など。多勢の撰に非ず。唯一手に出たる。文格なるに就て案ふに。西域記に。中印度界なる阿耶穆佉國の所に。殑伽河岸有二青石窣堵波一。其側伽藍。是昔佛陀馱婆論師。唐言二覺使一。於レ是製二說一切有部大毘婆沙論一とあり。其の製れる年時を何頃と記さねども。今の大毘婆沙論の卷末ごとに。說一切有部の論なる由を記せるに思ひ合すれば。此覺使論師と云ひし者の。撰述なること疑ひ無し。

是を以て上に出せる玄奘比丘が頌をしも。妄言なりとは言ふなり。(但し西域記も、此比丘が撰なるに、是說をも載たるは、凡て彼記の文は、多く謂ゆる印度記、また國志など云ふ古記を取りて記せりと見ゆれば、覺えず、是傳說を存し置て、矛楯の僞をぞ露はしける、此事のみならず、彼が譯本述作の物に、かゝる類ひは猶多かれど、煩はしくて今は漏しつ。)抑毘婆沙と云ふ語の義は。倶舍論の光記に。毘名爲廣。婆沙云說。謂彼論中。分別義廣故。名廣說。名義集に。毘婆沙此云廣解。又云種々說。又云分々說。總有三義。廣說。勝說。異說也と有る如くなる故に。廣博なる解書をば。皆かく號けしと見えたり。然れば西域記に。如意論師が毘婆沙論と云へるも有るを始め。諸書にも。某毘婆沙論と云ふが往々見えたり。

卽於此第五百年中。四阿笈摩叢集成焉。

是條は四阿笈摩の經文と。說一切有部の諸論とを熟讀し。なほ操返し考究して。己が新に作り補へる文なり。其はまづ四阿笈摩と云るは。四阿含と同語なるが。(此語の義は下に委く註ふを見るべし。)長阿含經序に。大教有三。約身口。則防之以禁律。明善惡。則導之以契經。演幽微。則辨之以法相。然則三藏之作也本殊應。會之有宗。則異途同趣矣。禁律律藏也。法相論藏也。契經四阿含藏也と有る如く。四阿含すなはち契經を叢めし物なり。(なほ此差別は、前の三藏結集品に、委しく說たるを、立却り見て思ひ明すべし。)然るに其の四阿含經はしも。今見るに疑なく。迦膩色迦王が時の結集よりは後。また今在る大毘婆沙論の。出來しよりは前に。肇めて集錄せる物と所思たり。(諸佛經を、總てかの迦葉阿難を始め、大弟子らが結集の時に、既く紙葉に記載せる物と思へる、古今の比丘らが說は、論ふに足らず、希に聊か記せる契經の有しにも有れ、多くは口誦授受せる物なること、既に結集品にも云へるが如し。)迦膩色迦王が結集より後なりとは。何を以て云ふなれば。此王が三藏を結集せるは。上に出せる二十部の諸宗義。みな既に起れる後なるに。四阿含に叢めたる經々を視るに。異義區にして。分別し難きに似たれど。巨細に視れば。二十部の宗

義。何くれと散見せるを以て。諸部の異論のみな起れる後に。其の異部說の自他を論ぜず。集錄せること。まづ著明に知らるめり。(其を今逐一に云むことは、所狹き所爲なれば、下に次々論ふを見て知るべし、其はよし今云ざらむも、目を開きて書見む人は、斯だに云はゞ、誰も己がじゝ知り得べきなり。)さて上に引たる雜阿含經に。佛滅より百十餘年後に出たる。阿育王が事を精しく記せる一品あるが上に。また既に引たる阿育王因緣經とて。此王が六世孫なる、蜜多羅王と云ふが終亡せる事までを載せる一經あり。其の六世の王ども。各々世を有てる間の長短は有るめれど。姑一世を三十年つゝと概するに。百八十年許の年數あり。此を上の百十餘年と合せて。二百九十餘年なり。(凡そ人の世代の年數を攷ふるに、世より數ふると、代より數ふるとの差別あるを、代より數へて、人數多かるも、其の生子より生子と世をもて數ふれば、人數こよなく少き物にて、中世よりの世を數ふるも、大抵一世三十年許つゝに當る物なり、阿育王が子孫は、其の生子より生子に傳へし六世なれば、一世を三十年といふ算は動くまじき算なり、殊に彼國も、此頃はなほ上古なりしかば、世を有てる間のなほ長かりけむも知るべからず、)然るに彼經の末文に、彼王終亡。阿育苗裔。於是永終と云る語あり。此は蜜多羅王が終亡せるより、數十年後を知らでは。記出まじき語なれば。此年數を六七十年と加へて。上の二百九十餘年と合すれば。三百六十餘年なり。かく三百六十餘年後に記せる物の收たれば。阿含の經ども。迦膩色迦王が三藏結集の時よりも、後の集錄なること。再更に論ひ無き物なり。(かの天游が赤倮々に、雜阿含を見るに、阿育王が法事を起せる事を載たり、是佛滅より百年後の事なり、然れば後人の手に成たること、彰々然として明なりと云へるは、然る說なれど、蜜多羅王が事を云ざるは精からず、殊にかく言むには、後に護法の人ありて、阿含みな、佛說を阿難の記せる物なれど、阿育王の件などは、後人の差加へたる物なりとか、或は其みな如來の懸記なるぞ、凡人の得知る所に非ずなど云べき物をや、)然て今こゝに。五百年中と文せる由は。前

前條に論へる。六足發智等の諸論は。みな謂ゆる小乘の論にて。五百年時前後に出來たる物なるに。種々の契經ども見ゆれど。阿含ちふ名は一所もなきを以て。今の如く四阿含と叢成せるは。其の後なること所知たり。(凡て諸論は、契經に本づき起る事なるに、もし此等の論の出來し時に、四阿含に總たる經の有なむに、其の事を云ざるべき謂なき事なり)然れど今傳はる大毘婆沙論よりは。前に叢錄せる物ぞと云こと。何を以て知ると言ふに。彼論に四阿笈摩と云ふ名は更なり。增一阿笈摩。雜阿笈摩と云ふ名も數所に出て。下に引き出る文等の如なるを以て是を知れり。(大毘婆沙論より以前の佛書と諦に知られたる物に、阿笈摩と云ふ名の出たるは、前品に擧たる宗輪論の頌より外に有ること無く、また中阿含の七寶品に、辨二阿含及所得一と云こと見ゆれど、其はたゞ敎法と云ふ語の梵語にて、今存る四阿含の事には非ずかし)さて其の二經の名い出たるに。長阿笈摩。中阿笈摩と云ふ名の。出ざるが不審くて。熟く察れば。契經說と云へるに。增一雜の說も有れど。長中二阿含に收たる諸經の說多く。また直に經名を出せるにも名こそ異れ。長中二阿含に出たる經說多かり。然れば古く契經と云へるは。彼二阿含に收たる經等を專と云ひしを增一阿含。雜阿含なる說等を叢めて後に。四阿含の名を號て。四經ともに契經とぞ稱へりけむ。(今試みに大毘婆沙論に出たる、長中二阿含なる經等を一二ッ擧げば、梵網經、六十二見經など云るは、長阿含なる梵動經なり、勝威經と云るは闍尼沙經なり、增一經と云るは增一經なり、大涅槃經と云るは、遊行經の後分なり、帝問經と云るは、釋提桓因問經なり、猶中阿含の經も數多あり、其は鹽喩經、天使經、師子吼經は更なり、大因緣經とあるは大因經なり、梵問經と有るは、梵天請佛經なり、諦語經とあるは聖諦經なり、なほ增一、雜なる經等も往々に見え、また四阿含に所見なき經も彼此あれど、然のみは煩ければ漏しつ)抑阿含と云ふ書名と爲たるは。元これ佛經の事に非ず。婆羅門の誦し傳ふる。梵天の聖語を稱する語にて。謂ゆる四韋陀の事なり。其は金七十論の偈に。阿含是聖言と有る迦毘羅仙が

釋に。聖教名聖言。聖言者。梵天所說四違陀論也と有り。(此文いたく切めて引たり、委しくは本書を見るべし。)大毘婆沙論の。四阿笈摩と有る玄奘が音釋に。阿笈摩梵語也。亦云阿達婆。西域書名。四韋陀典之一也と見え。(阿達婆とは、第四韋陀の梵名なること、第二品に註せる如くなるを、阿笈摩の異名と爲たるは謬なり、西域書名云々は、決めて西域書、四韋陀典之一名也と有りし文の、後に錯亂せるなり、其は四阿笈摩とは、四韋陀の別名なればなり。)攝大乘論音義に。阿笈摩梵語。亦云阿伽摩。舊言阿含訛略也。此云敎法。或言傳。謂展轉傳來。以法相敎受也と言へり。(また名義集には、阿含正云阿笈多、此云敎と有れど、多は摩の誤字には非ざるか。)是等を合せて考ふるに。阿含と云ふはもと。梵天の言敎を。展轉口誦し傳ふる。四韋陀論を稱ふ古語なるを。佛法に採りて其の契經に名負たること著明なり(四韋陀論は、元より、口誦に相傳し來れる物なること、既に第二品に云へるを思合すべし。)其は佛說も言敎とて。元より口誦に傳へ來つる故なり。然れば四阿含と爲たるも。彼四韋陀の例に傚へる事。また更に疑ひ無き事なり。(其は此名のみならず、佛法に用ふる諸名目ども、梵志學に舊く固より有りしを、其儘に襲へるが多きこと、既に往々論へれば、今更に委しくは云はず、)さて此四阿含共に。一手に成れる物に非ず。其撰者は各々別なり。其は中なる諸經どもこそ。諸部の分派せるより以來。次々に記し傳へたる物なれ。其を四阿含に叢書せる徒、各々にその體裁を整へ。且その好む所に隨ひて、撰び叢めし物なり(凡て大部なる諸經どもに、本末貫きて一部の全書なる有り、其は般若、法華、華嚴などの類是なり、また一經一品各々異部なるを、一部に叢書せる有り、四阿含また大寶積經の類是なり、此事常に心得て在るべし。)其は何を以て知ると言ふに。四阿含互にその文格一致ならず。同事の說法及び事實を。彼にも此にも載たるに、相違多きを以て。然る所以を明し得たり。其の文格の異を少か言むに。長阿含の經品ごとに。其の始めを如是我聞一時佛在某國某所。與大比丘衆千二百五十人俱。爾時云々と記し。(爾時

と云より下は、事の趣に依りて、少か變有れば抄し出ねど、爾より上は異ことなし、)其の終をば。爾時某比丘諸比丘聞佛所說歡喜奉行と必ず云へり。(唯この文格に外れたるは、大會經と云ふ品のみなり、其の由は下に論ふを見るべし、)雜阿含は。毎段の始終は。大かた長阿含に同けれど。比丘の員數をば記さず。總ての文法說相ともに。決めて同手の撰ならず。(是また活眼の人見ては、一手に出たるかの、疑途に渉るまじ、文風自然に著く、かつ事實の相違ども、明に見ゆめり、)中阿含の品々は。始めを。我聞如是一時佛遊某國某所。與大比丘衆俱。爾時云々と言ひて。比丘の員數を云はず。與大比丘衆俱と云ざる條々も多く。また初發ならで文中に比丘の數を云ことを有れば。心ず千比丘と云ふ例にて。終りは佛說如是某比丘及諸比丘、聞佛說歡喜奉行と。その說法の結句より。二字放ちて記す例なり。(かくて長阿含に收たる經等のあまた再出せるを以て、彼經と一手に出ざる事は論ひなく、雜阿含の文格と異なる事もまた勿論なり、)增一阿含の品々は。其發端を。聞如是一時佛在某國某所。爾時云々と言ひ。比丘の員數を云ときは與大比丘衆五百人俱と云ひ。(また希々には千二百五十人と云る所もあり、)其の終文をば一品ごとに。心ず諸比丘等當作是學。爾時諸比丘。聞佛所說。歡喜奉行と云へり。(爾時と云より下は長中雜の三阿含も、大かた同けれど、諸比丘等當作是學と云ことは、增一に限れり、)此餘に婆羅門の學事を稱する定語。また新に佛法に入りたる者の。果を稱する定語を始め。其の外にも定語あまた有るを。四經各々に文格同じからず。斯て同じ事實を彼にも此にも出せるに。互に相違ある事は。大千世界品。佛祖生涯品などに。次々校べ訂せるがごとし。(四阿含の經ども、若一人の手に成たらむには、然る相違の有べくも非ず、)此は其の中に收たる經品の本書こそ。諸部にて次々に錄せるが。散ぼひ傳はれる物なれ。しか大部に聚へし徒。みな己が向々に、定語を成して記しゝ。其間には。自見自說をも差加へし故に。右の如くは成れるなり。(此說を不審しと思はむ人は、己がじゝ四阿含の同じ事實を、逐一に訂

し見て辯ふべし、か丶る事どもは、各々その譯者の別なる故なり、と云ふ護法家も有るめれど然には非ず、其の梵本の各々別手に成れる故に、元より異有るなり、然るは比丘の員數のみならず、天地の廣狹を始め、もとの佛說を其の儘に傳へむには、決して相違有まじき事どもの、員數丈數までも、甚き相違ある一事を以ても、元より其傳者の別なること知らる、其は譯者も然る數量をば變まじければなり）是に就ても。阿含をはじめ經々みな。阿難が誦唱を直に筆記せる物と云る說どもの、頑愚を極めし說なる事は知べきなり。其は中阿含の侍者經に。阿難が涅槃せる事までを載たる等を何とか言はむ。斯て其の經の終りさへ、佛說如是。彼諸比丘聞佛所說歡喜奉行と有るは。笑ひに堪ぬ事ぞかし。（また此因に思へば。同經の薄拘羅未曾有經に、薄拘羅比丘が、佛滅後八十年がほど學道して涅槃せる事を記し畢て、諸比丘聞佛說已、歡喜奉行とも云へり、斯ても護法者流は諸經をみな、佛祖が眞說を、阿難が直に記載せりと云むか、兼好法師が徒然草に、或者小野道風の書ける和漢朗詠集とて持たりけるを、或人、御相傳浮たる事には侍らじなれども、四條大納言の撰ばれたる物を、道風か丶む事は、時代や違ひ侍らむ、覺束なくこそと云ければ、然候ら丶ばこそ、世に有がたき物には侍りけれとて、彌々秘藏しける、と記せることぞ思ひ合ざる）さて大毘婆沙論に。曾聞。有一苾芻。先誦得四阿笈摩。中間妄失。復溫誦之。盡其方便。不能通利。往阿難所。問其因緣。阿難答言。汝今可往以油塗身。溫室洗浴求諸隨順衣服。飮食。臥具。房舍。說法人等。苾芻依敎悉還通利。また舍利弗。執大藏。二苾芻。倶誦四阿笈摩。一一皆通利。など云る事あり。（此類なる文はなほ數有れど、然しも多くは引出ずなむ）此文に四阿笈摩と號けし經々の。舍利子阿難が在世頃より。既にありと爲たるは非なれど。舊く其の經說どもを。口誦にて傳來せること。是にても知らる。然てかく闇誦せるが故に。その記憶の方術さへに有けり。（印度に、記憶の方術ありと云ふ事は、南海歸寄傳にも見えて、既に第二品に論へりき就て見るべし）然れば同じ論中に。三藏の事を

云ふに。必その文例として。若持毘奈耶。若誦素怛纜。若學阿毘達磨とやうに錄せり。毘奈耶は戒律なる故に持といひ。阿毘曇は論藏なる故に學と云ひ。素怛纜は契經にて。口授なる故に誦とは云へり。（一部二百卷の新婆沙中、みな此文例なり、心を着て察るべきなり）猶言はゞ同書に。曾聞商諾迦衣大阿羅漢。尊者阿難同住弟子。般涅槃時。尚有爾所經論隱沒。況從彼後迄至于今。諸論師滅。經論隨沒數豈可知。故經論說。有餘師說と有るを思ふべし。（此は略文なり、委くは既に三藏結集品に引たり、商諾迦衣と云ふは、阿難が第一の弟子にて、上座部正統の、第三祖を受たる比丘なる事既に出たり、此を文の隨に見て商諾迦衣が當昔、すでに紙葉に載せる經論の。然しも多在しと思はむは。謂ゆる邊部衆の見なり。其は此比丘を始め。其より後にも。是大毘婆沙論を造れる當昔までに。諸論師どもの滅る時に。經論等の隱沒せりとあるに心を着けよ。皆口誦の授受なる故に。未傳の經論は　その師比丘らが命と共に隱沒して。口授せる經論のみ遺れる由なり。是故に次々の論師ら。各々其の口授する經論に。自見自說を混淆せる故に。契經說有餘師說とは云へるなり。（もし實に今在る經論どもの如く、紙葉に載せる籍の有なむに、師比丘らが死ぬ時ごとに、然しも隱沒すべき由あらむや、龍象邊部の護法者流も、其の念をしばし忘れて、平心に思ふべきなり）偕しか口誦に傳ふる古風なるが故に。紙葉に載す事始まれる後も。其の口誦を專として。寫本は甚く希なりし趣なること。下に引く天竺記傳の文にて著し。是を以て諸部各々。その傳誦する契經は更なり。律藏論藏にも。僞文新說を攙入して佛說に托し。我聞如是と云ひ募れば。如是我聞といひ諍ひて。各々部執の宗義を書記せる故に。遂に四阿含の異說紛々とぞ成れりける。（諸經の發端に、必ず我聞如是とも、如是我聞ともある事は、既に三藏結集品に註せる如く、仲基が言に、我者何、後世說者自我也、聞者何、後世說者傳聞也、如是者何、後世說者傳聞如是也と云るが如し、阿含より後に次々出來れる諸經の初めにも、必ずしか云るは、皆阿含の例に倣へるなり、諸經の初め

に、必かく有るを以て、和漢の古比丘らが註せる、書等に云る說ども、總て取るに足ざる事すでに彼結集品に辨へたれば、今更に云はず、宗輪論の初めに、如是傳聞と云ひ、今引く大毘婆沙論の文に、嘗聞とふ說の多かるも、皆古說を傳誦せる由にて、如是我聞、云ふに、意異ならずと知るべし、）然ればば毘婆沙にまた。佛滅後。有於素怛纜中置僞素怛纜、毘柰耶中置僞毘柰耶。阿毘達磨中置僞阿毘達磨。諸僞文句。不應通釋。と云る語もあり。信に此語の如く。經論どもに僞說多かり。然れど阿含部中には。古來の遺說も有なれば。假令その說法淺劣なるも。佛說の古義は存り。また佛祖が履歷に妄誕の有るも。其の妄中に眞說あれど。其の大乘諸經はしも。彼姦狡秀才の論師らが。異部各々の僞作なれば。假令その說法高妙なるも。佛說の古義に非ず。また佛祖が履歷の靈異に聞えむも。其の眞說は千百中に一と知べし。是を以て諸僞文句。不應通釋とは云へり。（然るは此大毘婆沙論はしも、佛滅後千年に垂たる時の撰にて、大乘僞經どもの大きなるは、大抵世に弘まれる頃にしあれば、よく其の差別を知りて、記せる說なること、其の書中に、阿含中なる諸經の說をば契經と稱し、或は增一阿笈摩、雜阿笈摩など稱して、其の部中に、取用せざる經說どもをば、餘經と稱へり、其は契經說云々、餘經說云々と、並べ云る文のいと多かるを見るに、其餘經の說と云へるは、多く大乘の旨に合ひ、契經說と云るが、多く阿含の旨に叶へるを思ふへし、）然るに。其の僞文句の經々を通釋して。皆佛祖が眞說と爲たるは。謂ゆる天台の智者が。五時八敎の說なり。其の牽强誣說の甚しき事思ひ遣るべし。（其の由は、次品に、委く辨ふるを俟て見るべし、）さて四阿含の諸越へ渡來せる始めは。まづ符秦の法顯が遊天竺記傳に。師子國の處に。法顯在此國。聞天竺道人於高座上誦經。法顯爾時欲寫此經。其人云。此無經本。我止口誦耳。法顯住此國二年。更求得彌沙塞律藏本。得長阿含。雜阿含。復得一部雜藏。此悉漢土所無者。得此梵本とあり。（是より前にも、巴連弗邑に到れる所に、法顯本求戒律、而北天竺諸國、皆師々口傳無本可寫、是以遠步乃

至中天竺、於此得一部律、是摩訶僧祇律、佛在世時最初大衆所行也、於祇洹精舍傳其本、自餘十八部各有師資、大歸不異、於小小不同、或用開塞、但此最是廣說、備悉者、復得一部抄律、可七千偈、是薩婆多衆律、即此秦地衆僧所行者也、亦皆師々口相傳授不書之於文字、復於此衆中得雜阿毘曇心、云々とありて、律を求得たる事ありし故に、更求とは云るなり、法顯が遊天竺記傳は、諸書に、法顯傳とも、歷遊天竺記傳とも、佛遊天竺記とも、只に天竺記とも見えたり、即法顯が彼國に歷遊せる事を自記せる道の記なり）斯て法顯その國に還れるは。東晉の安帝が。義熙元年と云ふ年なるが。此二經を譯せる事は。唐內典錄に。長阿含經二十二卷。東晉安帝世、罽賓三藏佛陀耶舍。秦言覺明。弘始十五年出。佛念筆授。（貞元錄には姚秦の錄に出して、佛陀耶舍弘始十四年出、至十五年訖、涼州沙門竺佛念傳譯、秦國沙門道含筆受僧肇製序と云ひ、また耶舍爲人髮赤、善解毘婆沙、時人號曰赤髭毘婆沙、爲羅什之師、耶舍先誦曇無德律、司隸挍尉姚爽請令出之、興疑其遺謬、乃試耶舍令誦差籍藥方各々四十餘紙、一日乃執文覆之、不誤一字、衆服其強記、即以弘始十年戊申、譯四分律幷長阿含等經、十五年癸丑方訖、有說云、耶舍與佛念等勸法顯所將梵本、然後翻出、衆說少殊とも見えたり、二十二卷にて中に三十經あり、）雜阿含經五十卷、南宋文帝世。中天竺三藏。求那跋陀羅。宋言功德賢。瓦官寺譯とあり。（貞元錄に、劉宋の錄に出して、求那跋陀羅印度人也、於瓦官寺譯、梵本法顯賫來と云ひて、二人が傳をも委しく載たり、五十卷にて、中に數百經あり、）さて中阿含增一阿含の始めて傳はれる事は。內典錄に。東晉孝武帝世。兜佉勒國三藏。曇摩難提。秦言法喜。以建元初至長安。（東晉とは謂ゆる司馬晉にて、此を正統の國號と爲也、秦とは其の世の反國なるが、別に國號を立て帝と稱せり、此を符秦と云ふ、建元と云ふは、其の秦の第四世、符堅と云しが年號にて、其の初年は、東晉の哀帝と云しが、興寧三年なり、諸越は王統の定らざる國なる故に、かく胡亂しき事どもの聞ゆるなり、然れば此文は、東

晉孝武帝世、以秦建元初、兜佉勒國三藏、曇摩難提至長安と云る意なり、）誦四阿含梵本。口授竺佛念。寫爲梵文。到二十年。爲符主。譯中含作五十九卷。是第一譯。佛念筆受。增一五十卷。爲秦武威大守趙業出。是第一譯。曇嵩佛念筆受。時屬慕容沖及姚萇反亂。關中危阻未過委悉。難提西出不知所之とあり。（增一阿含經序に、晉沙門道安が記せる趣は少か異なり、そは外國嚴岫之士、江海之人於四阿含多詠味、茲曇摩難提者兜佉勒國人也、誦二阿含周行諸國、無土不渉、以秦建元二十年來詣長安、武威大守趙文業、求令出焉、佛念譯傳、曇嵩筆受、歳在甲申、夏出至來年春乃訖、爲四十一卷、分爲上下部、上部二十六卷全無遺忘、下部十五卷失其錄偈也、余與法和共考正之、全具二阿含一百卷と云ひ、貞元錄に記す所も少か異なり、合せ考ふべし、）然れば此二阿含の。漢土へ傳來せるは梵本ならず。彼舊き習風のまゝに。紙葉に錄さず。口誦にて記えたるを。口づから佛念と云ふに授けて。まづ梵文に寫し取り。然して後に翻譯せるにぞ有ける。漢語に譯せるすら。甚しき大部の九十九卷あれば。梵文にて在しほどは。猶幾ばかり多有けむ。然るを盡く闇誦して。委曲に傳授し在しは。最もいみじき記憶にこそ有けれ。然るわざはも。己がごと記憶あしき者の心には。甚く信難き事に所思れど。上にも云ふ如く。彼國には。記憶を學ぶ法術さへに有れば。曇摩難陀も其の法をや知たりけむ。（增一阿含の序には、增一と中と、二阿含を闇誦せる趣なれど、內典錄には、四阿含を誦じたりとあり、上に論へる如く、四阿含互に文例の別なる、また相似たる說々の、少かなる差別までを、嚴重に傳誦し別ちたるを見るにも、彼伏生が尙書の殘篇を、闇誦せりと云ふ事などは、事にも非ずとこそ感らるれ）また是に就て案ふに。法顯かの國に渡りて。經律を求むるに。多く闇誦にて。寫本は無く。僅に上に出せる計りの本を得たるに。適に長雜二阿含の梵本を得たる事をし。漢土に未傳はらぬ物とて。甚く悅べる體なるが。今の譯本は卽その本なると。難提が。中增一の二阿含を。闇誦にて傳へし事とを思へば。四阿含

の名こそ婆沙に見えて舊けれ。彼國にも元より長雜のみを紙葉に書して。中增一の二阿含は然らず。唯に口誦にのみ傳來しけむも。亦知べからず。(但し此は慥に所見たる事は無れど、上下に註し出る事どもに據りて、必かくも有けむと想ふ由を試に云ふ耳なり、後人なほ能く考ふべし)さて右四經の差別は。四教儀集解の標註に。報恩經云。破諸外道是長阿含。說種々詳法。是雜阿含。是坐禪人所習。爲利根弟子。說諸深義。名中阿含。是學問者所習。爲諸天世人。隨時說法集爲增一。是勸化人所習也。また長含多破外道。中含多說苦空無常。雜含多說禪思及觀門等。增一無偏多說。通被利鈍。定散邪正。故泛と云り。是にて其の差別の大旨を知べし。(然れど打まかせて、此說の如しとのみ思はむは非なり、許多の開合ある事なり、其は上下に論ふを見ても知るべし)また長中雜增一など題たる義は。俱舍論の遁麟記に。一長阿含多說長偈。二中阿含多說中偈。三增一阿含。一法爲始於一上增一至多故也。四雜阿含謂種々說也と云へり。然も有べくこそ。(また

四教儀の標註に、五分律を引きて、集一切長經爲長含。集不長不短經爲中含。從一增一至諸法故、爲增一含。集比丘比丘尼、諸天帝釋等雜事、爲雜含也とも云り、是も通ゆる說なり、なほ說多かれど漏しつ)さて四阿含に總叢して、右の如く名題たるは。大抵五百年中より。七八百年時までの。間ならむと所察るゝ中に。其叢成の前後を云むには。長阿含ありて。雜中二阿含の叢集あり。此二阿含の後に。增一阿含を聚めたるかと思ふ由あり。其はまだ長阿含は。上座一切有部の古傳來を集めし物と見えて。經々品々大抵は。梵志學を始め。他道を破斥するを主と爲し。佛祖が生涯の履歷に本づきて。其の立義を說演たるは。實に諸經の最先たるに論なし。(そは佛祖が言にも、我が說く道義を傳ふる事は、婆羅門らが古來の所說を、破斥するを要と爲すよし云ること、既に第二品に註せるを見るべし)さて此經凡ては三十經四十四品。何れも實に長偈にて。その說相の一致なる中に。大會經と云ふ經のみは。疑なく後に加はれる物なり。其はその發端に。如是我聞。

一時佛在釋翅搜國迦維林中。與大比丘衆五百人俱。盡是羅漢。復有十方諸神妙天。皆來集會禮敬如來及比丘僧。時四淨居天云々と記せるは。餘の二十九經の文例とは異れり。(こは比丘の員數の例に違へるは更にもいはず、凡ての文法みな違へり、眼を精くして、餘品どもと合考ふべし。)かくて其の終りを。佛說此法時。八萬四千諸天。遠塵離垢。得法眼淨。諸天龍鬼神。阿修羅。迦樓羅。眞陀羅。摩睺羅伽。人與非人。聞佛所說。歡喜奉行とあり。(餘品には、阿須倫とあるを、阿修羅と云ひ、緊那羅と有るを眞陀羅と云るは、例に違ふ耳ならず、其の餘の文例もみな違へり。)抑斯の如き方廣なる大會は。後に大乘と稱する僞經どもの趣にて。長阿含には絕て例なき集會なるに。況て其の文中に。結咒四あるも餘品に例なく。かつ咒文は。佛祖が取ざる所なるを以て。此一經は後の加入なる事を證すべきなり。(十方諸神妙天、謂ゆる天龍八部、人非人の集會せるに、佛一語言を以て、說法すと云ふ事は、大衆部に、佛以一音說一切法、といふ說を起せる以來の僞說なること、說一切有部の宗義に、非佛一音能說一切法と有にて著明し、さるは然しも諸天人鬼、萬物の部族の集會せむに、豈同一音語を以て、其盡々に法を聽入れしむる事を得むや、是を以て古說に、然る大會の說無りし故に、長阿含に其の說なく、かつ一切有部の宗義に、右の如くは云へり、然るに大衆部は、大天が異見を起せる以來、右の如く立言せる故に、後の大乘僞說家ども、其の立言に本づきて、華嚴法華を始め、其の會ごとに、諸天人鬼、八部人非人等までも、同一語言の說法を聽て皆能く聞受たる趣に作れり、是一を以ても、阿含と大乘經々との眞不眞を辨ふべく、阿含と云ふ中にも、長阿含の、佛祖が古說を傳へし事を知べきなり、猶この事及び佛祖の咒文を取ざる由來も、次品に委しく說くを俟つべし、)次に雜阿含は。實にも禪觀の說法を多く集記せるが。其禪觀はもと梵志の專門なるを。佛祖が其となく竊して。己が宗義に取りなせるを。後に梵志學は絕て。その禪思觀門の法。みな佛法に收たれば。是また佛祖が古說と云ふも難なし。(抑禪觀の法門は、もと

梵天子より傳へて、其の苗裔たる婆羅門の專學なるが、此は諸越の玄學に傳はる、胎息行氣玄一の道に同じき事、すでに第二品に說明せれば、今更に委くは云はず。)斯て第二卷に。廣く苦空無常の事を說たる。品の收たるを始め。空教の旨を說たる品々も數收たり。然て大毘婆沙論に。雜阿笈摩中四句法。是如彼頌言。賢聖法中善言最。二常愛言遠不愛。三常實言離虛誑。四常法言遠非法とあり。此文小異なきに非ねど。大凡そ今本の旨に叶へれば。今本やがて當昔の本にや有らむ。(上に云べきを忘れたり、一切經藏中に、五蘊皆空經と云もの有るは、卽雜阿含の第二卷の別譯同本なり。)次に中阿含は。苦空無常の說をも多く載たれど。總ては長雜二阿含に。並べ云むも難なく。長阿含の闕略を。補ふべき經品どもゝ少からず。雜中ともに。能く長阿含と挍べ見て。古義を擇ぶべし。(是を以て佛祖生涯の品々に。往々長の略を措きて、餘の三阿含なる精說を取れる事ども有り、但し古義とは云へど、佛法の古義の議にこそあれ、眞の古義を云ふには非らず、思ひ混ふべからず、)

次に增一阿含は。疑なく上の三阿含より。後に集記せる籍なり。其は此中なる經品どもを察るに。上の三部なる說々を翻案して。方廣微妙なる趣に作り變たる說多く。方廣說の嚆矢と云べき說相なること。東方奇光佛と云ふが國土の事を妄說し。かの彌勒と云ひし比丘が事を。いと仰山に莊嚴せる趣などを以ても知るべし。(抑この彌勒と云ふ者の由來は、中阿含の說本經に、當來人壽八萬歲の時に至りて、螺王と云ふ聖王いで、其の世に我が如き佛の出世有らむ。と云へる說法しける時に、其の座に彌勒阿逸多と云ふ比丘在りて、我その佛に生れ出むと揚言しけるを、佛祖が譽て授記せる事あり、此は例の一時の勸化、口に任せし說法なるを、增一阿含に、その彌勒比丘を菩薩と稱し初めて、其が過去世の因緣を作り、かつ彼忉利天に生じて、八萬歲の世に出むと、待つ由を敷延せるより、後來の大乘家、なほ彌益に、妄誕の經說どもを作り加たる事、既に第十五品に說たる如く、また次品にも辨ふるが如し、其彌勒比丘はも、名義集に、羅什云、彌勒姓也、阿逸多字也、南天竺婆

羅門子也と見えて、謂ゆる十大弟子にも入らぬ、凡比丘なるを、此が一時の揚言より、慈氏菩薩出世の曉を待つと云ふ、妄誕の出來れる耳ならず、其が兜率天上にて說たる由して、太じき大乘經說をさへに作り出たり、是を以ても、增一阿含の、大乘嚆矢と云べき事をし辨ふべきなり)、さて大毘婆沙論に。有說增一阿笈摩中四法迹。是一無貪法迹。二無愼法迹。三正念法迹。四正定法迹。と有る說を。今在る增一の四法の所と比撿るに。相發すべき法迹無れば。思ふ由ありて。長阿含に收たる。增一經と比挍するに。其法迹よく符へり。(然るは其の增一經の、第四法に、四種法と云るが無貪法迹、四覺法と云るが無愼法迹、四滅法と云るが正念法迹、四證法と云るが正定法迹に當れり、然るに今の增一阿含には此の事見えず)また其毘婆沙論に。昔聞。增一阿笈摩經。從一法乃至百法。今惟有一乃至十在。餘皆隱沒。又於增一至十。亦多隱沒在者極少ともあり。(此文は今の增一阿含を、初結集の當昔より、有來し物に取成たる說なり、然れども其增一は更なり、餘の三阿含も、當昔よりの物に非ざる故に、上に論へる諸論どもに、四阿笈摩の名は有こと無く、今の大毘婆沙論は、增一阿含よりも後の造なる故に、斯の如き强說を成せり、惑ふこと勿れ)今此婆沙の說等に依りて考ふるに。是論の出來し頃まで。增一阿含と云しは。もと長阿含中なる增一經。三聚經。衆集經。十上經など。都て一を增して。十に至る法なる經等を主となし。今の增一阿含なる品々を合せて。一部と爲たる名なりしを。右の四經は。早く長阿含に入たる故に。後人その四經を省きて。其遺編に本の名を存して。殊に方廣風なる說等を。多く收入せるが。今在る增一阿含ならむと所思るなり。(抑長阿含中なる增一經は、其の文に、一多成法、一修法、一覺法、一滅法、一證法と凡て四法あり、二多成法、二修法、二覺法、二滅法、二證法と凡て八法あり、次々斯の如く法を增重ねて第十多成法に至りて、十修法、十覺法、十滅法、十證法と凡て四十法あり、總ては比丘の二百五十戒を具ふる法にて、餘の三經も此立法なるは、增一てふ名よく叶へれど、今在る增一阿含經は、一

數字ある條をば、皆一に類聚し、二數字ある條をは、皆二に類聚し、斯の如く次々、十の數字ある條まして、類聚せる分の事にて、味ひなく、一を增して十に至ると云ふ法例には、不相當なる文例なり、是を以て、今引く婆沙の文に思ひ合せて、右の如くは考たるなり、後人なほ能く考ふべし〕さて是考への當否は姑く措とも。此經これ方廣說の嚆矢なる事は。近く其の序品に。此經全部をも。阿難が說出せる由に妄語して。梵天下降。及帝釋護世四王。及諸天。彌勒。兜術。尋來集。菩薩數億不レ可レ計。彌勒梵釋。及四王。皆悉叉手而哀請と云るが。大乘の說口なる耳ならず。契經一藏。律二藏。阿毘曇藏爲三三藏一。方等大乘義玄邃。及二諸契經一爲二雜藏一と云る頌も有るを以て。大乘義說の多かる事を辨ふべし。〔然して此頌の次に、時阿難告二優多羅一曰、我今以二此增一阿含一囑二累汝一、善諷誦莫レ令二漏減一、增一出二三十七道之教一、及諸法皆由レ此生云々と有るは、例の妄誕なること、云ふも更なり、其は邊部衆こそ知ざらめ、多聞衆は己が辨を待までも無く、自づからに知りなむ物ぞ、〕然て

序品にのみ斯の如く方等大乘を稱して。爾前の諸契經を雜藏と貶せれど。本文に至りては。唯方廣說の牽れる耳にて。其の說を大乘と稱せる事は一所もなく。亦謂ゆる契經說を小乘と貶せる條も有こと無し。其は此經を叢めし頃まで。尙いまだ然る差別の名目無りし故なり。然れば此序品は。その差別の出來しより後世人の。加へたる序なること疑ひ無し。〔但しかく言ふは、謂ゆる小乘四阿含の出來し頃まで、謂ゆる大乘の名目は無りしと云ふを聞て、後の護法家など、此序を引き出て、諍ふ徒も有むと、今まづかくは懸記する物なり、〕然らば其の本文に。何等の大乘義說か有ると云むに。等見品に。舍利弗曰。戒成就比丘。當レ思二惟五盛陰一。無常爲レ苦爲レ惱。爲二多痛畏一。亦當レ思二惟苦空無我一。便成二須陀洹道一。邪聚品に。僧伽摩曰。色痛想行識皆悉無常。此無常義即是苦。苦者無我。無我者即是空也。此五陰是無常義。無常義者即是苦。我非二彼有一。彼非二我有一。苦々還相生。度レ苦亦如レ是。如來告二諸比丘一。我聲聞中降二伏魔一者。僧伽摩是也。六重品に。佛言。我之所說。色者無常。無

常者即是苦。苦者即是無我。無我者即是空也。空者彼非ニ我有一。我非ニ彼有一。如レ是者智人之所レ學也。我之教誡。其義如レ是と有るを始め。此旨を演たる說法なは計ふるに暇有らず。（雜中の二阿含にも、かゝる意なる語は、數多あれど、斯ばかり般若の旨に、允當せる語は有ること無く、況て長阿含には、絕て一句も有ことなし、たゞ其典尊經に、如來以ニ方便力一、說ニ善不善具足說法一、而無ニ所得一、說ニ空淨法一、而有ニ所得一、此法微妙猶ニ醍醐一と云る語あり、空說に似たれど、此は增一の六重品を見れば、我今當レ說ニ第一最空法一と云ひて、十二因緣の事にざりける、是事は既に第十九品にも云へりき、然れば實にも長阿含は、上座一切有部の眞面目にこそ有けれ）さて斯の如き說法等は。都てかの大天が諍論ありし後に。大衆部より次々に生出たる。異部の謂ゆる。如是我聞を收入たるにて。阿含部の經にこそ出たれ。佛祖が古說に非ざること。言ふも更なれば。此經は殊に是空說を信ずる者の。集錄なること疑ひ無し。故是を以て思ふに。上に粗言へる。馬鳴が師たる富那夜奢が說法に。苦空無我。悉皆空寂の旨を立たるは。元より此說を用ひしなり。然れば此經。やがて富那夜奢が集錄にて。かの般若心經と云ふ物。まさに今引たる文の旨なるは。即この夜奢が僞作ならむも亦知べからず。（また是に就て思ひ出たり、彼大毘婆沙論は、說一切有部の根本とは云へども、既に諸大乘經の僞作、悉く出て後の撰なる故に、其說どもも多く交れる中に、般若說は殊に多かり、其は第百七十八卷定蘊篇に、菩薩經と云ふ大乘經を引きて、四波羅密多の事を廣說して、若時菩薩名瞿頻陀、精求ニ菩薩一、聰慧第一、論難無レ敵、世共稱仰、齊此名爲ニ般若波羅密多圓滿一なども云り、四波羅密多とは、施、戒、精進、般若の四なり、此に忍と靜慮とを加へて、六波羅密多と云ひ、また別說にては、前の四に、聞と忍とを加へて、六と爲すよしも見えたり、初學の人、一切有部の經論には、大乘の說なしと思ひて、龍象邊鄙の女牛らに、腹を突るゝこと勿かれ）然るはかの般若波羅密多心經に。觀自在菩薩。行ニ深般若波羅密多一時。照ニ見五蘊皆空一。度ニ一切苦厄一。（叙なれば文義をも少か

云べし、觀自在菩薩とは、空海法師が祕鍵に、能行人とも、諸乘之行人とも云へる如く、自在智の法を得むと觀ずる菩薩と云るにて、一菩薩の名には非ず、觀法の人を廣く指せり、般若を智慧と翻し、波羅密多を到彼岸と譯す、彼岸に到るとは、此岸よりして中間に流るゝ濁水を度りて、彼岸に到ると云ふ義を喩たる語にて、極妙覺などの字の意なり、五蘊とは下に見えたる、色受想行識を云ふ、此を約めて言へば、身心の二なり、然るに此を蘊としも云ふは、下に註ふ如く、色にまれ受にまれ、多義を包蘊して有と云ふ意をもて、蘊とは云なり、斯て其の五蘊を皆空なりと、照に見徹す義なり、苦厄とは苦と厄と二なり、苦とは生老病死愛憎怨會別、求不得など、一切の苦惱をいひ、厄とは災難の義にて、水火風盜兵鈔など、一切の災厄を云ふ、度とは脱する義なり、凡ての文義は、自在智法を得むと觀ずる人、その深智慧の極妙覺を得むと行する時に、其身も心も皆空なる理を照に見徹して、生老病死愛憎怨會別求不得など一切の苦惱、また水火風盜兵鈔など、一切の災厄をも脱れよ、

其は五蘊皆空の理をだに識得れば、然る一切の苦厄は、みな忘れ離れ脱るゝ物ぞと云る意なり、）舍利子。色不レ異レ空。空不レ異レ色。色卽是空。空卽是色。受想行識亦復如レ是。（舍利子は佛弟子の中に、智慧第一と聞ゆる故に、此比丘が名を召びて、説聞せたる趣に作成せり、色とは大凡そ、形ありて見るべき物を云こと、佛經の常なり、そは形ありて靑黃赤白黑等の、色なきものは無き故にかく云ふなり、故是にては、卽ちその身を云へり、文義は、わが身形は空に異ならず、空は身形に異ならず、身卽これ虛空と同體なりと云ふ義を以て、色卽是空、空卽是色とは云へり、然て受とは眼に見、耳に聞き、鼻に齅ぎ、舌にて味ひを知るなどは、外なる物を體に受納るゝ義ある故に、受とは云ふなり、想とはおもひ、行とはおこなひ、識はしると訓みて識神を云ふ、此四も亦みな空に異ならずと云ふ義にて、約めて云へば、身心の二なること、上にも註せるが如し、）舍利子。是諸法空相。不レ生。不レ滅不レ垢不レ淨不レ增不レ減。（是諸法とは、前文の五蘊を指て云へり、空相とは唯に空と云ふ

に同じ、相字に泥むべからず、文義は身心共に空なる故に、不生不滅不垢不淨不增不減なり、然るを生滅垢淨增減ある物の如く思ひ惑ふは、凡夫心ぞと云る意なり)是故空中無色。無受想行識。(右に云ふ如く、諸法は卽空なる故に、大虛空中には、身心なく、身心なき故に、受想行識も無しと云るなり)無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無知亦無得。以無所得故。(此五十五字は、上文に、是故空中無色、無受想行識、と云るに含畜せる語なるを、重ねてかく云ふは、閑言剩語なり、心を平にして讀み辨ふべし)菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顚倒。究竟涅槃。(菩提薩埵とは、菩薩の正語なること既に云るが如し、文義は、菩薩は右に說く、般若波羅蜜多、智慧彼岸の行法に依るが故に、心に罣礙なく、心に罣礙なき故に、恐怖の思ひ有こと無く、顚倒せる一切世間法は更なり、夢の如き妄想をも遠く離ちて、智慧の極處を究竟すと云るにて、顚倒夢想とは、世間人衆の、所行所思を卑しめて云ふ語なり、涅槃とは、此にては智覺の至極と云ふ意なり)三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。(阿耨多羅云々は梵語なり、此には無上正覺と譯す、文義は過去、現在、未來三世の諸佛も、此般若波羅蜜多の法に依るが故に、無上の正覺を得たりとなり)故知般若波羅蜜多是大神咒。是大明咒。是無上咒。是無等々咒。能除一切苦。眞實不虛。(般若波羅蜜多は、此にては、般若波羅蜜多咒と云ふ意なり、卽下なる咒文を指す、そは般若波羅蜜多の法を行するに、唱ふる咒文なればなり、五蘊皆空の旨を照見して、此咒を唱へつゝ行すれば、一切の苦厄を脫離して、究竟涅槃に至る故に、大神と云ひ、大明といひ、無上と云ひ、無等々とは贊せるなり、偖しか贊する故は、此咒よく一切の苦を除くこと眞實不虛なる故なりとなり)故說般若波羅蜜多咒。卽說咒曰。羯諦。羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提娑婆訶。(文義は、般若波羅蜜多咒は、右の如く、無上神妙にして、一切の苦厄を、脫離せ

しむる呪文なれば、今說くべしとて、卽說たる由なり、その說者は、佛祖なりと云ふ意なること言ふも更なり、呪文は梵語なるが、羯諦は度と譯す、羯諦波羅、羯諦波羅は、度彼岸、度彼岸と譯す、僧羯諦は、僧は衆なり、羯諦は度なり、菩提は、道と翻して、此には佛道を云ふ、娑婆訶は速疾と譯す。呪文すべての意は。度度彼岸、度彼岸衆度道速疾と促し勸めたる語にて、彼岸に度れとは、上に云へる、一切苦厄を脱して、智慧妙覺の道に到れと云ふ語なり、)これ其の全文なり。熟く見よ。上に引く增一阿含の空說に同じく。かつ富那夜奢が。悉皆空寂を。第一義諦と立たる宗義に能くも相應せり。(然るを後世の註者ども、或は般若の旨は空に非ず、空と非空の間を云ふ、と說くも有りと云ふは、謂ゆる斷無の見に等しきを嫌ひてなれど强說なり、照見五蘊皆空と云ひ、諸法空とも云るを何とせむ、惑ふこと勿れ、)抑この心經の旨はも。三世の諸佛の無上正覺を得し道とて。比丘ならぬ凡常の人までも。生狡しき倫は。こを甚く信じて。他をも勸め惑はすが。多かるに就て

思ふに實も此文面の如く。一切の苦厄を度り除きて。虛空同躰と成なむには。心安かるべき事の極なるが。五蘊皆空と觀ずる計りは。誰もいと易く照見すめれど。其は唯しか觀じたる分の事にて徒事なり。然るは佛祖を佛としも稱ふは。徒に照見せる耳ならず。其の道を得たる義なるに何ぞ一切の苦厄を離れず。獨その道を愛して他道を憎めるや。何ぞ背痛の宿病を持たるや。何ぞ老後に人の毒殺を受たるや。(但し般若空寂の旨は、佛祖が說の古義には非ず、然れど此の說をも、佛說に託せる故に、今は姑く其の僞說につきて、斯々は論ふなり、然れば佛祖を除たらむも、此旨を始めに唱へし富那夜奢は更なり、そを繼弘めし馬鳴龍猛も、他道をば甚く憎み、また老て死もしたりき、中にも龍猛は、齡の末に、頸を刎てぞ死たりける、此をしも一切の苦厄を度せりと云むや、)然れば此空敎はも。徒口にのみ言べくして。佛祖。馬鳴。龍猛も度り得ざりし法なれば。況て其より以下の比丘らは言ふも更なり。然るを今の世に。某居士など自稱して悟り臭きが。此を自他ともに。至り得

らるゝ法のごと演説して。愚人を惑はし。彼岸に度れる顔して。此世を度るも多かるは。甚悪き事にぞ有ける。其は今し然る徒がらを誰も見てこそ其の有趣は知らめ。（阿波禮さる屎鵄の、果報を好む徒をし、眞雪ふる冬の夜中を赤裸にして、外に立しめむに。「捨はてゝ一切空と悟れども、雪の膚赤は寒くこそ有れ」などぞ云むかし、然しも寒からむ間は、彼岸に渡れりとも、五蘊皆空とも云ふべからず、此はむかしの比丘も、相類たる言云へりし如く所思たり。）倍世の心經學者ども。此經は。かの大品般若中の。樞要を擇び約たる物と。思へるが多かれど。然には非ず、彼大般若波羅蜜多經の初分四百卷は。却りて此の心經を敷演せる物にて。其の二分以下は。また其大品を。種々に作り改めたる物なり。其由は。次品に委曲に。説辨ふるを俟て見るべし。

印度藏志卷之二十三稿

大壑　平篤胤撰述　男　平田銕胤　同
孫　同　延胤　同
門人　角田忠行　校

○印度傳通品三

八宗綱要云。傳聞。如來滅後四百年間。小乘繁昌異計相與。大乘隱沒納在龍宮。

八宗綱要は。文永五年正月。東大寺の沙門凝然と云しが。撰れる書にて。今の論の次第に便り宜ければ。此を本文と爲して。四百年後の弘通相を述むとす。（八宗綱要を著せる時は、凝然二十九歳なりしとぞ、此後應長元年七月、更に三國佛法傳通緣起、上下卷を著せり、其時は七十二歳と、自の奥書に見えたり、また内典塵露章と云ふをも著せり、同じ類の書なり、何れも板本に有れど、誤字多し、古寫本を求めて校合すべし。）抑々佛滅より。四百年の間。小乘の繁昌せること。前品に委しく述る如なるが。其を小乘と云に就て論あれど。其は下に述りて。（第口節に、出定如來、天遊居士らが説

を擧て、委しく說き辨ふを見べし、）まづ異計相興り。と云へる語意を按ずるに。此は謂ゆる。大乘經說を奉ずる徒の說にして。小乘說を。總て異計とは貶せる語なり。故是を以て。大乘隱沒云々。とは言へり。（語の意を委く云はゞ、大乘敎法は、如來の本旨正敎なれども、四百年餘りの間は、小乘の權敎繁昌して、異計相興れる故に、大乘の本敎は、隱沒せりと云へるなり。）納二在龍宮一。と云へるは實には小乘說。これ眞の佛說にて。大乘說どもは。悉後五百歲に出たる徒の。僞託なる故に。佛滅より。四百年ばかりの間に。二十部の異說は興りつゝも。猶悉く。小乘說にて在けるを。五百年を過ぎ。六百年に垂むとする時より。馬鳴論師を始め。謂ゆる大乘論師ら世に出て。その經說を僞造し。七百年の間に。龍猛論師世に出て。四百年後より。次々僞託し來れる。大乘方廣の經說を集め取て。早く龍宮に納在しを。取來れりと幻說せるを。後世大乘家の徒は。其の說に據る故に如此は言へるなり。（そはなほ下に、委く論ふを見べし。）（書入云、阿含は此程作るか）

五百年ノ時、外道競興リテ。小乘稍隱ル。況ヤ大乘耶。

五百年時とは（書入云四百年を過て四百六十七年までの時をいふ）。五百年を過て。六百年に垂むとする時までを云ふ。外道の事は。既に委しく說たりき。（第二品の節に、註せるを見べし。）提婆論師が謂ゆる。二十部の外道說など。もはら此の時に競興れるなるべし。（此の事も、第二品に引て、既に註せりき。）小乘稍隱云々とは。然ばかり繁昌なりし小乘說も。外道說の競興れるに壓けたれて。稍隱るゝ許なりし故に。況て大乘の敎法は。臭もなく聲もなく隱沒して。世人の知らず在しと言るなり。然れども其は。一部立たる。大乘の經々こそ未有けめ。其大乘と云が中の空說は。疾く興りて在し故に。四阿含中なる經々に。空の旨を記せるも數多あり。（其尤きを一二言はゞ、長阿含の闍尼沙經に、梵童子の佛祖を賛せる語の由にて、如來以二方便力一、說二善不善具足說法一、而無二所得一、說二空淨法一而有二所得一、此方微妙猶如二醍醐一など云ひ、中阿含には、大空經小空經を始め、殊に空を說たる說多し、雜阿含にも往々見え、增一阿含は、最後

に集たる經なる故に、殊に空説多かり、其は勸請品に、諸比丘聞此空法、解無用有、則得解了一切諸法、如實知之、身所覺知、苦樂之法、若不苦不樂之法、卽於此身觀悉無常、皆歸於空、云々と見え、□□品に、阿難語僧伽摩、曰、已知如眞法乎、僧伽摩報曰、我已覺知如眞法也、阿難曰、云何覺知乎、僧伽摩報曰、色痛想行識、皆悉無常、此無常義、卽是苦、苦者無我、無我者卽是空也、此五陰是無常義、無常義者、卽是苦、我非彼有、彼非我有、苦々還相生、度苦亦如是、如是者智人之所學也、阿難歎曰、善哉如眞之法、善能決了、卽從座起而去、往至如來所、具白、爾時如來、告諸比丘曰、我聲聞中能降伏魔者、僧伽摩是也、と有などは、謂ゆる色卽是空、空卽是色、と云へるに似たり、是等の説を觀通して、四阿含中にも、空説の經々の、錯れる事を知り辨ふべし、)然れども。其を大乘説と言へることは。四阿含は更なり。前品に論へる諸論にも。一所だに有ことなし。(増一阿含の□□品に、□□□梵志が女須深と云が偈に、勇猛有所伏、求於大乘行と云ふ語、たゞ一つ見えたれど、此は世間の道に對へて、佛道を尊みて、大乘行と云へるにて、後世大乘小乘と對へ云ふ、大乘の事には非ず、思ひ混ふべからず、)其は四阿含の經々、何れも大乘小乘など云ふ稱の。興らざる以前に録せる經々を。聚め取たる物なればなり。(其が中に増一阿含の序品は大乘の日出來て後に記し加へたる物なる故に阿難が此の經を結集の時に梵王帝釋四天王、諸天菩薩數億不可計、彌勒梵釋、及四王、皆悉叉手而哀請せりなど、方廣なる説を記し、方等大乘義玄邃、乃諸契經爲雜藏などぞ云へりける、六足發智等の諸論は更なり、彼の新婆沙論にも、大乘といふ語は無を、此序にかく云へるは、彼の論どもよりも遙後に加へたる序品なりけり、)出定如來が説に。□□□□□□。(心經ありて大般若ありの論)

爰馬鳴論師。時將六百。始弘大乘。起信論等是時則造。外道邪見卷舌皆亡。小乘異部閉口咸伏。大乘深法再興。

六百年（書入云、五百七八十年の時を云べし景行の御世漢の和帝にあたる）。に將むとする時は。佛

滅より五百七八十年の時を云ふ。但し此は。大乘說を張行せる始にこそ有れ。此の時馬鳴は。百歲餘りの老比丘なりしと覺ゆ。然るは第九祖と稱する。彼の脇比丘が弟子。第十祖。富那夜奢と云しが弟子なればなり。（夜奢がこと、付法藏經に、富那夜奢尊者、華氏國人、智識深邃、多聞博記、初脇比丘至其國、止一樹下、指其地曰、此地若變金色、當有聖人至矣、言已地果成金、既而夜奢果至、遂納爲弟子、付以法藏、以善方便化度衆生、所作已辨、便入涅槃とあり。）其は付法藏經に。十一祖馬鳴尊者。東天竺桑岐多國婆羅門。以刀貫杖銘曰。天下智士。能勝我者。截首以謝。諸國之人無有應者。時富那夜奢於閑林中坐。馬鳴大慢貢高。計實有我。聞夜奢說諸法空無我。往謂之曰。一切世間言論。我能破壞。此言虛斷首以謝。夜奢曰。佛法之中凡有二諦。若就世諦。假名爲我。第一義諦皆悉空寂。如是推求我何可得。馬鳴知義不勝。便欲斬首。夜奢曰。我法仁慈不斬汝首。如來記汝。後六百年當傳法藏。於是度令出家。內心猶有愧恨。

時夜奢有經在闇室。令馬鳴往取。白言。室闇。夜奢以五指放光。馬鳴心疑是幻。凡幻之法知之則滅。而此光轉更熾盛。卽便心服勤苦云々。（如來記汝云々は、例の方便懸記なり、摩耶經に、如來滅後六百歲已九十六種諸外道等、邪見競興毀滅佛法、有一比丘、名曰馬鳴、善說法要、降伏一切諸外道輩、七百歲已、有一比丘、名曰龍樹、善說法要、滅邪見幢、燃正法炬、と懸記せるよし造れるは、龍樹が出世より、後に作れる經なる故に、かく記せれど、其の本は、夜奢が妄懸記にぞ因れりけむ、羅什が譯の馬鳴傳には、脇比丘が弟子と云へり、然して付法藏と異なる事どもあり、合せ見べし。）勤苦修行。仰受付囑。於華氏城。遊行敎化。作妙技樂。名賴吒和羅。其音清雅宣說。苦空無我義。令作樂者演暢斯音。馬鳴著白氎衣。入衆伎中。自撃鐘鼓調和琴瑟。音節哀雅曲調成就。（こは卽ちこの比丘が立たる宗にて、謂ゆる大乘起信論の旨なり。）時此城中五百王子。同時開悟。厭惡五欲出家爲道。時華氏王。恐人々聞此樂音。捨離家法。國土空曠。卽便宣

令其土人民。勿復更作此樂。時月支國王攻華氏城。即從索九億金寶。時華氏王即以馬鳴。一佛鉢。一慈心雞。各當三億。馬鳴智慧殊勝。佛鉢如來功德。慈心雞不飮蟲水。悉能摧伏怨敵。月氏王大喜。回兵歸國。馬鳴傳法已。即入龍奮迅三昧。挺身虛空如日輪相。復還本位以取涅槃。とあり。(なほ此の比丘に就ては、異說おほし、種々の事ども有れど、煩はしければ皆漏しつ、また馬鳴と云名の事は、鳳潭が幻虎錄に、正宗記、馬鳴傳などを引て、馬垂淚聽法故號馬鳴と有れど、此は附會と聞ゆ、名義は餘に有けむが、漏たるにや、また是が出たる時代に就ても、異說おほく、或は三百年と云ひ、或は云々と云ひ、其の生國をも、或は東天竺と云ひ、或は西天竺といひ、或は北天竺といひ、或は中天竺と云ひ、或は舍衛國とも云へり、幻虎錄に、盡く其の異說を擧たる、就て見べし。西域記八に、摩揭陀國波吒釐城鞮椎臺北、有故基。昔鬼辨婆羅門、所居處也、有阿濕縛馬、窶沙鳴、菩薩者云々、と引たり。)さて其の造れる起信論等とは。大乘起信論。大宗地玄文本論。大莊嚴經論等をいふ。(起信論は、蕭梁優禪尼國沙門眞諦が譯と、唐于闐國沙門實叉難陀が譯とあり、共に二卷なり、大宗論も、眞諦が譯にて、八卷あり、大莊嚴論は、姚秦天竺沙門鳩摩羅什が譯にて、十五卷あり。)此の中に、起信論は。專要とある論なる故に。起信論等とは言へり。(諸書にも大抵かく云へり。)故今此の論を取て論はむに。實にも空無我の大乘說法にぞ有ける。然るは空無我の說法は。前節に引たる如く。阿含の經々にも。彼此見えたれば。既く彼の經々を部類せる程には。然る契經等の出來て在しこと炳く。且かの富那夜奢が。馬鳴に諭せる語に。第一義諦は。皆悉空寂と云へるにても所知たり。(夜奢が師脇比丘は、有宗を第一義と云へるに、夜奢は空寂を第一義と云へり、此差別に、よく心を著て思ふべし、然れば彼の阿含の經々は、夜奢が持法藏の時分に、集錄せるもまた知べからず。)かくて般若部の經中に。孰の經が古きと察るに。謂ゆる摩訶般若波羅密多心經ぞ古かりける然言ふ由は。彼の全文に。觀自在菩薩。行深般若波羅密多時。照見五蘊皆空。度

一切苦厄。(觀自在菩薩とは、ある一菩薩名のには非ず、自在法を得むと觀ずる菩薩、と云るにて、觀法の人を廣く指せり、般若波羅密多は、般若を智慧と譯し、波羅密多を、到彼岸と譯す、彼の岸に到るとは、此岸よりして、中間に流るゝ濁水を度りて、彼の岸に到るとふ、義を喩たる語にて、極妙覺などの字の意あり、俗言に云はゞ、極意と云が如し、行ひ深むとは、深く行ひ入る由なり、深め字を下につけて深般若と讀むは非なり、五蘊とは下に見たる、色受想行識をいふ、此を約めて言へば、身心の二つなり、然るに此を蘊としも云ふは、下に註ふ如く、色にまれ受にまれ、多義を包蘊て、有とふ意をもて、蘊とは云なり、其を皆空と照見すとは、照に見徹す義なり、苦厄とは、苦と厄との二つにて、苦とは生、老、病、死、憂、憎、怨、會、別、求不得など、一切の苦惱をいひ、厄とは災難の義にて、水、火、風、盜、兵、釼など、一切の災厄をいふ、度とは脫るゝ義なり、凡ての文義は、自在法を得むと觀ずる人、其極意に深く行ひ入る時に、此身も心も皆空なる理を、照に見徹して、生老病死憂憎怨會別求不得など、一切の苦惱、また水火風盜兵釼など、一切の災厄をも脫れよ、其は五蘊皆空の理をだに識得れば、かゝる一切の苦厄は、みな忘れ離れ脫るゝ物ぞと云る意なり。)舍利子色不レ異レ空。空不異色。色卽是空。空卽是色。受想行識。亦復如レ是。(舍利子は、佛弟子の多かる中に、智慧第一と所ゆる故に、此が名を召て說聞せたる趣に作爲せり、さて色とは、大凡そ形有て、見つべき物を云こと、佛經の常なり、そは形ありて、青黃赤白黑等の、色なき物は無れば、云ふ語なり、故是にては、卽その身を云へり、文の義は、わが身形は、空に異ならず、空は身形に異ならず、身卽ち虛空と同體なりと云ふ義を以て、色卽是空空卽是色、と云へるなり、さて受とは、眼に見、耳に聞き、鼻に臭ぎ、舌にて味ひを知るなどは、外なる物を、體に受納るゝ義ある故に、受とは云ふなり、想はおもひ、行はおこなひ、識はしると訓て、識神を云ふ、此の四つも、亦みな空に異ならずと云ふ義にて、約めて云へば、身心の二つなること、上にも註せるが

如し、）舍利子。是諸法空相、不生不滅。不垢不淨。不增不滅。（是の諸法とは、前文の五蘊を指て云へり、空相とは、唯に空と云ことなり、相の字に泥むべからず、文の義は、身心共に空なる故に、不生不滅不垢不淨不增不滅なり、然るを生滅垢淨增滅ある物の如く、思ひ惑ふは、凡夫心ぞと云るなり。）是故空中無色。無受想行識。（右に註ふ如く、諸法は卽空なる故に、大虛空中には、身心なく、身心なき故に、受想行識と云ことも無し、と云るなり、○此間に、無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無知亦無得。以無所得故。といふ六十字有れど、此は上に五蘊皆空といひ、此に無色無受想行識、と云へるにて、說盡せり、然るを再重ねてしか云へるは、或人も云へる如く、閑言剩語なり、諸註家しひて、重複ならぬ趣に說むとするは、僻事なり、心を平にして讀辨ふべし。）菩提薩埵。依般若波羅密多故。心無罣碍。無罣碍故。無有恐怖。遠離一切顚倒夢想。究竟涅槃。（菩提薩埵とは、菩薩の正語なること、既に云へるが如し、文の義は、菩薩は右に說く、般若波羅密多、智慧彼岸の付法に依るが故に、心に罣碍なく、心に罣碍なき故に、恐怖の思ひ有ことなく顚倒せる一切世間法は更なり、夢の如き妄想をも、遠く離ちて、智慧の極處を究竟すと云へるにて、顚倒夢想とは、世間人衆の所行所思を、佛法より卑めて云ふ語なり、涅槃とは此にては、智覺の至極と云ふ意なり。）三世諸佛。依般若波羅密多故。得阿耨多羅三藐三菩提。（阿耨多羅云々は、梵語なり此には無上無覺と譯す、文の義は、過去現在未來三世の諸佛も、此の般若波羅密多の法に依るが故に、無上の正覺を得たり、と云へるなり）故知。般若波羅密多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等々呪。能除一切苦。眞實不虛。（般若波羅密多は、此にては、般若波羅密多呪といふ意なり、卽下なる呪文を指す、そは般若波羅密多の法を行ふに、唱ふる呪文なればなり、五蘊皆空の旨を照見して、此の呪を唱へつゝ行ずれば、一切の苦厄を脫離して、究竟涅槃に至る故に、大神と

いひ、大明と云ひ、無上といひ、無等々とは賛せるなり、偕しか賛する故は、此の呪よく一切の苦を除くこと、眞實不虚なる故なりとなり。）故説般若波羅密多呪。即説呪曰。羯諦。羯諦波羅。羯諦波羅。僧羯諦。菩提娑婆訶。（文の義は、右の如く、般若波羅密多呪は、無上神妙にして、一切の苦厄を、脱離せしむる呪文なれば、今説べしとて、即説たる由なり、其説者は、佛祖なりと云意なること、言ふも更なり、呪文は、梵語なるが、羯諦は度と譯す、羯諦波羅、羯諦波羅は、度彼岸度彼岸と譯す、僧羯諦は、衆度と譯し、菩提は道と譯して、此には佛道をいふ、娑婆訶は速疾と譯す、呪文すべての意は、度度彼岸、度彼岸衆度道速疾、と促し勸めたる語にて、彼の岸に度れとは、上に云へる、一切苦厄を脱れて、智慧妙覺の道に到れと云ふ詞なり。）此にて般若の本旨。富那夜奢が空寂。また馬鳴が苦空無我。と立たる旨も所知たり。（然るを後世の註家ども、或は般若の旨は、空に非ず、空と非空の間を云ふ、など云るは、謂ゆる斷無の見に等しきを嫌ひてなれど、强説なり、照見五蘊皆空といひ、諸法空とも有を、いかにせむ、○因に云ふ、五蘊皆空と照見する時は、無に入る無に入たる後に、彼岸に度る物は何物ぞ、度る物有れば、皆空に非ず、なほ有なり、また度一切苦とは、上に註ふ如く、生老病死愛憎の苦を脱るゝ義なるを、佛祖は更なり、空寂といひ、苦空無我と立たる比丘とも、何ぞ其の道を愛し、他道を憎むや、何ぞ老死せるや、然れば此の空教は、たゞ口に言べくして、衆生は更なり、佛祖も比丘らも、行ひ得ざりし法になむ、然るを世には、我も得至らず、人も得至るまじき、邪道を行ひ得べき趣に説法して、我は彼の岸に度れるさまに、愚人を誑かすが多かり、いかで然る古屎鶏の態する徒を、眞雪ふる冬の夜中を、赤裸にして置たらむに、（捨はて、一切空と思へども、雪のはだかは寒くこそ有れ、などぞ云むかし、しか寒からむ間は、五蘊皆空とは云べからず。）さて此は。何者の作と云ふこと知らねども。此の心經ありて後に。なほ其の宗旨を敷演して。種々菩薩どもの名をも寓作し。大品般若經をば。僞造せりと見ゆるが。（世の

般若學者らは、大抵この心經は、大品般若中の極要にて、其の廣きを省き、要を取れる物と思へるが多かれど、精からず、決めて大品は、此を敷演して作れるなり、なほ下に註ふを思合すべし）其の作者は。必ず馬鳴なるべく所思たり。其の由を委しく論むに。是比丘が。始めて大乘説を唱へ出たる事は。本文にも記せる如く。其の著せる諸論の趣にても知るゝに。下に論ふ如く。般若はこれ。大乘經の始なるが想ひ符され。（因に思ふに、心經は夜奢が作にて、馬鳴は其を敷演して、大品を作れるには非じか）また大毘婆沙論は。上に論ふ如く。必ず五百年を過て。六百年の時に造れる物ならむと見ゆるに。此を製れる事を。天親傳の一説に。佛滅度後五百年中。迦旃延子。先於薩婆多部出家。（先にと云へるは、既く三百年の時に、出家せればなり、然して五百年の中まで在けるは、世の長人にぞ有りける、）撰集薩婆多部阿毘達磨。爲八犍度。竟復欲造毘婆沙釋之。馬鳴菩薩。舍衛國婆枳多土人。通八分毘迦羅論。文字學府（毘迦羅論とは、悉曇文字の論なること、第二品に委く云へるを見べし、）迦旃延子。遣人往請馬鳴解八結義意若定。馬鳴隨即著文。經十二年造毘婆沙。方竟凡百萬偈是也。とあり。（八結とは　即八犍度の譯語なり、本書に、八伽蘭他。此間云八犍度、伽蘭他譯爲結、とあるにて知べし）此は時代も符はず。覺束なき傳なれども。彼の大毘婆沙論を察るに。馬鳴が筆を加つらむ。と所思ゆる空説の多かる中に。定蘊篇。四波羅密多の名目あり。（四波羅密多とは、施、戒、精進、般若の四なり、此に忍と靜慮を加へて、六波羅密多と云ひまた別説にては、前の四に聞と忍とを加へて、六と爲すよしも見えたり、）然して菩薩。精求菩提。聰慧第一。論難無敵。世共稱仰齋。此名爲般若波羅密多圓滿。とも見えて。此を菩薩の行と爲して。容易に行し難き法と爲たれば。馬鳴が文に著せりと云ふ傳へは。更に因なき説には非ず。（そは迦旃延子に請せられて、と云説こそ覺束なけれ、其より遙後にまれ、必ず馬鳴が手をば經たりけむ、）さて其の起信論に。修多羅説。若人專念西方極樂世界阿彌陀佛。所修善根廻向。願求生彼

世界ニ即得ニ往生スルコトヲ。如レ是摩訶衍ハ。諸佛ノ祕藏ナレドモ。我已レニ總說。若衆生欲レ入ニ大乘道ニ。當レ持ニ此論ヲ云々とあり。然るに四阿含中に。西方極樂世界の說法なく。阿彌陀佛といふ佛名有こと無れば。此は四阿含を撰錄せる時までの世人は更なり。佛祖が說ざる世界の佛祖が知ざる佛にぞ在りける。然れば。其の修多羅は。是の比丘が密に造りて。佛祖に託せる僞經なること疑なし。偖こそ此を。諸佛の祕藏なれども。我已に說とは言へれ。(是一つを以ても。謂ゆる普賢文殊を始め、無數の菩薩どもの名は、皆この比丘が寓作なる事を、知り辨ふべし。)さて其の修多羅は。何經ならむと案ふるに、彼の方等部と稱する。大寶積經にぞ有りける。(唐の南印度、三藏沙門菩薩流志譯にて、百二十卷とす、四十九會あり。)其は此の經の第五會を。無量壽如來會とて。佛祖耆闍崛山に住して。萬二千の大比丘と俱なるに。普賢文殊彌勒など。無量の菩薩來集せり。此の時阿難が問に應じて。往昔法處比丘と云しが。四十八願を與して。無量壽佛と成りて。西方極樂世界に住する由を讃し。發願往生を勸めたる由を造れる。是ぞ始めと見ゆればなり。(然ればこそ、後漢月支國の沙門、支婁迦讖が譯の、無量清淨平等覺經二卷、また曹魏天竺沙門、康僧鎧が譯せる、無量壽經二卷、また吳月支國優婆塞、支謙が譯の、阿彌陀經二卷、また宋中印度沙門、法賢が譯せる、無量壽莊嚴經三卷など、並に無量壽如來會の同本異譯にぞ有りける、また宋の國學進士王日休が、前の四經を取て、删補訂正したる、大阿彌陀經と云が二卷あり、此外に大寶積經の末經云々。)其は此の經。大乘方廣部の祖經と見ゆるに。極樂世界阿彌陀佛の本緣を載せると。其の大乘說は。馬鳴に始まり。かつ起信論に。右の如く云るにて論ひ無し。佛にては。阿彌陀。阿閦。口を始め。菩薩にては。普賢文殊を始め。無數の佛菩薩どもの。阿含中に見ざる名等は。皆この馬鳴が造れるなり。(凡て佛菩薩諸天明王諸鬼神など、本緣を知むと爲るには、熟々に四阿含を察て、彼の經々に名の出たるを善記えて、其より諸經の出たる時代を返さひ考へて、此は某に始めて見えたり、彼は某に始めて見えつ、と云ことをまづ知て、後に其名と事

實とをよく考へて後にぞ、其の本緣また信僞を知べきわざなるを、然る人の世に出し事を聞ざるは、惜むべし)さて上に引く般若心經に。觀自在菩薩とあるは。彼所に註せる如く。一菩薩の名に非ず。自在を觀ずる人を。廣く指す文なるを。馬鳴よりは後人の。此を翻案して謂ゆる觀世音菩薩といふ。一大菩薩を揑出たり。(こを馬鳴が所爲ならずと云ふ由は、大品般若は、正に此比丘が作なるに、此の菩薩の事實なく、寶積經に、種々の菩薩を揑り出たれど、此菩薩の事實なきにて知られたり)觀世音と云は。卽ち觀自在の異譯にて。同語なり。(そは西域記に、阿縛盧枳低伊濕伐羅。唐言ニ觀自在ト。卽阿縛盧枳多、譯曰レ觀、伊濕伐羅譯曰ニ自在ト、舊爲ニ光世音、或觀世音、或觀世自在ト、皆訛謬也、と云へるにて知るべし)然るに此を。一菩薩と揑出たるは。方等部中に收入せる。觀世音菩薩。得大勢菩薩受記經。といふ經ぞ始なりける。此の經の大旨は。佛祖鹿苑に在て。二萬の比丘。萬二千の菩薩。二萬の天子と俱なるに。華德藏菩薩と云が。如幻三昧といふ事を問ひて。何人か。此の三昧を得つると問へば。彌勒文殊など。六十菩薩を擧て答ふるに。また他方の菩薩。何人か此を得たると問ふ。其時に。觀世音。得大勢ノ二菩薩を擧て答ふるに。其の二菩薩を召てと請ふ。爰に佛白毫より。大光を放て。安樂刹土を照せば。二菩薩忽に來る。佛遂に二菩薩が。過去發心の因を說き。補處成佛ノの記を。授けたりと造れり。(此經は、劉宋幽州沙門曇無竭が譯にて、一卷なり、此外に、如幻三摩地無量印法門經、と云が三卷あるは、同本異譯にて、末に一女人の發心せるが男子と成れる事の、異說を加へたり)觀音は更なり。得大勢も。此經の作者が。揑出たる菩薩なること知べし。(得大勢とは、謂ゆる得大勢至菩薩なり、此の二菩薩は、安樂刹土の阿彌陀佛が、左右の脇立なり、と云ふこと、人の普く知るが如し、名義集に、觀世音と譯せるに就て、別行玄と云を引て、觀世音ハ能所圓融ナリ、有無兼暢、照ニ窮正性ヲ、察ニ其本末ヲ、故稱レ觀也、世音者、是所觀之境也、萬象流動隔別不同ナリ、類音殊唱、俱蒙ニ離苦ヲ、菩薩弘慈一時普救、皆令ニ解脫セ一故、曰ニ觀世音ト といひ、また上に引く玄奘が西域記に、

觀自在と譯せる説をも擧て、なほ玄奘にて、觀有不住有、觀空不住空、聞名不著於名、見相不沒於相、心不能動、境不能隨、動隨不亂其眞、可謂無礙智慧也と云ひ、勢至の事は、摩訶那鉢、此云大勢至、思益云、我投足之處、震動三千大千世界及魔宮殿、故名大勢至、觀經云、以智慧光普照一切、令離三塗得無上力、是故號此菩薩名大勢至とある類は、總て大乘家の例の幻妄附會にて、固より論ずるに足らず。)さて般若心經の異本に。聖佛母般若波羅密多經。と言ふあり。此には。佛鷲峯に在して。定に入れる時に。觀世音が。舍利子に説聞せたるを。佛祖定より出て。印可せる趣に作れり。此は前に論へる。二菩薩の受記經ありて後に。何者か。心經に妄添して。僞造せる經なること疑なし。(なほ此の外に、摩訶般若波羅密大明呪經と云があり、鳩摩羅什が譯なり、此は全く心經の異本なりかし。)なほ般若部の經なほ多く。中には數十卷なるも。數部在れど。皆悉く大品般若より。品を分て別譯せるなり。また大寶積經の品々を拔て。別行せる經も多かり。是また見るに足らず。(其は閲藏知津を見ても知るべければ、今委しくは言はず、寶積經の小經は、五十部ばかり、大般若より拔たる小經は十九部ばかり、外に仁王般若と云ふが有りて、こは別經なるが、此に據べき經も三つ四つはあり。)さて出定如來が説に。釋迦文既沒。迦葉始集三藏。而大衆亦集三藏。分爲兩部。而後復分爲十八部。然而其言。所述以有爲宗。事皆在名數。至無方等微妙之義。是所謂小乘也。(此は上座および大衆の兩部にて、三藏を結集せる事を云へるなり。委しくは第口品に。既に註るを見べし、)於是文殊之徒。作般若以上之。其言所述以空爲相。而事皆方廣。是所謂大乘也。(こは大智度論に、如來在鐵圍山外共文殊及十方諸佛結集大乘法藏と云へるに依ての説なれど、文殊と云ふ名は、阿含中に所見なく、凡て上座部の古論律にも所見なし、此は疑なく、般若を造れる者の寓作名なり、然るを智度論に、右の如く云へるは、此論すなはち、大品般若の釋論にて、其作者龍猛論師が、骨法とせる經なる故に、文殊の名を

實に取りて、大論にかく記せるなるを、大活眼の出定如來が欺かれたるは如何ぞや、然れども、阿含の有宗に上せむと爲て、般若空相の說を作れり、と云へる說は、此の如來が眞活眼の活見なりかし。）此の時大小二乘。未有年數前後之說。其張大乘者則曰。自得道夜至涅槃之夜常說般若。（是また智度論に、しか云へるに依れるよし、如來が自註に見ゆ、なほ大論に、佛祖が初成道の事を記して是時世界主、梵天王及色界諸天等、欲界諸天等、皆詣佛所、勸請初轉法輪、亦是菩薩所願、故受請說法、諸法甚深、般若波羅密、故說摩訶般若波羅密經、と云へるも、本文の旨なり。）其張小乘者則曰。從轉法輪經至大涅槃。集作四阿含。（是また智度論に、佛滅後に、三藏を結集せる事を云へる所に、大迦葉が阿難に云へる語とて、從轉法輪經、至大涅槃、集作四阿含とある文に依りて云へること。自註に見ゆ、但し大涅槃とは云へど、大乘部なる四十卷の、大涅槃經の事には非ず、卽ち長阿含中なる、遊行經是なり、此をまた大涅槃經とも云ひて三卷、東晉の

沙門法顯が譯し別本あり、新婆沙論に、大涅槃經と云へるも、卽ち此の經を云へり、四十卷の涅槃經は、智度論よりも、後に造れる經なること、下に論へり。）是各々命其終始。未有年數前後之說也。故其仁王般若序云。世尊前已說四般若。三十年正月說仁王者。亦唯泛爾言之。非言阿含後正當三十年也と言ひ。（また其の自註に、然るに法界性論に之を說て、十二年說阿含、三十年說大品、八年說法華と云へるは、法華なる四十餘年の文に轉せられて、言へる說にて、其の實は非也とも言へり）また天遊居士が說に。諸大乘經は。皆後人の假託なること疑なし。何となれば。凡そ小乘の說は。事實なり。大乘の說は空理なり。（そは譬へば、釋迦の行由を、述るが如き、小乘には二十五出家、三十成道、八十入滅と記し、大乘には、佛成道より已來、既に久遠劫を歷たり、また滅度を示すと云へども、實は滅度せず、常に靈山に在して、說法すと說く、是まづ其事實ありて後に、空理を附會せること、明なり）且また小乘の名目は。皆正義なり。大乘家は。多くは小乘

の名目を假て。竊案して。其の大乘の義を成せり。(そは譬へば、四諦の如き、諦は審實不虚の義にして、苦は實に苦、集は實に因など丶說く、是本義なり、然るに大乘には、諦非苦非集、など說き、また蘊は、積聚有爲の義にして、因より無爲を攝せず、然るに大乘には、蘊卽無爲と說けり。)且また法數に就て云ふに。小乘に四大を說けば。大乘には。五大六大七大を說き。小乘に六識を說けば。大乘には。七識八識九識十識を說く。是みな後々。漸々に增加せるなり。右三端は。ほぼ一二の例を示すのみ。餘は准知すべし。然れば先小乘ありて。後に大乘起れること決せり。其の小乘の諸經さへ。多く後人の手に成りて。眞說は少なりと見ゆ。其は雜阿含に。佛滅より百年後の。阿育王が事を載たるにて明なり。況や大乘は其の後に出たるをや。と言へり。(阿育王が事を載せるに、眼の著たるは、然る事ながら、其說はいまだ盡さず、此は前品に、既に委しく辨へたるを見るべし。)また出定如來が說に。有般若後。法華氏之言興。其言云。從成正覺來。過四十餘年。無數方便引導衆生。我所說諸經。法華最第一。但爲菩薩不爲小乘。觀諸法實相。是名菩薩行。(無量義經、亦云、四十餘年未顯眞實、種々說法以方便力。)是可見。其託諸四十餘年後。而愚法從前諸家。亦託諸實相。而破從前有空。是法華氏乃大乘中別部。幷從前二乘。而斥之者也。(從前の二乘とは、阿含の有宗と、般若の空宗と、二乘をさせり、斯て法華は、阿含般若に後る丶耳ならず、大寶積經、また觀音勢至受記經等にも、後れて成れり、故その經中に、阿彌陀觀音勢至なども見えたり。)然而後世學者。皆不知之。徒宗法華。以爲如來(佛祖カ)眞實之說經中最第一者。誤矣。年數前後之說。實昉于法華。幷吞權實之說。亦昉于法華。廣大方便力。熒惑古今人士者。何限。嗚呼孰蔽之者。非出定如來不能也と云ひ。(また其自註に、解深密經に、初小乘、中空敎、後不空と、是また法華氏の黨なり、また案ふに、三藏の目は、始めて迦葉に起る、然るに法華の文に、三藏學者と云ふ語あり、是を以て、法華經の後出なる事を知るべし、と云へるは、皆當れる說なれ

ども、又案に、法華蓋普賢之徒作、大論遍吉之語可レ見、と云へるは誤なり、そは普賢といふ名も、寓作なること、旣に第□□品に註せるを見るべし。）天遊居士が說に。法華維摩の二經は。共に小乘を壓倒するの說にして。其の間やゝ異なる所あり。維摩は。攻擊を主とし。法華は倂包を主として。且つ是を如來最後の說に託する故に。經王の稱あること。誠に宜なり。然れども。今此の經を。平心に看讀するに。三乘もと。一乘より出るの說有りと云へども。唯懸空の談にて。其の然る所以の理を說ざれば。小乘家これを見るとも。肯て心服すまじき說なり。如何となれば。元來印度に。小乘家あるは。倭漢に。小乘の學ある如くには非ず。（支那日本に、もはら小乘を宗とする家有りと云へども皆大乘を兼學して、自是非他の執有るに非ず、これ大小權實の論定れるが故なり、印度の小乘家は、大に此に異なり。）元來小乘の稱も。大乘家よりの貶語にして。小乘家の。自ら小乘と云るには非ず。各々みな自宗を勝たりとし。屹然として肯て相下らず。（然れば玄奘が渡れる時に、竺土の佛法、小乘を學ぶ道場は多く、大乘を學ぶ道場は、少有しとかや、是印度には、末世に至るまで、大小のいまだ定らざるが故なり。）然るに倭漢に行はるゝ佛法は。專大乘家なり。小乘の學有れども。畢竟は大乘に精からむが爲に。學ぶには過ず。故に愚夫愚婦に至まで。大乘は勝れ。小乘は劣るの說を聞なれて居なり。（因りて、今、法華の說を聞ても、怪みを致さず、固より然るべし、と謂ひて在るなり。）若もと小乘を固執せる人に。遽に法華を聞しめば。必肯て心服すまじ。（何如となれば、只懸空の大話のみにして、其爾る所以を、說ざるが故なり。）夫此經。一部八卷二十八品。その文繁しと云へども。其要は。方便の一品に過ず。（むかし曹溪の六祖、人の此經を讀誦するを聞て、纔に此品に至り、旣に一經の意を得たりと云こと、然も有べし、然れば其の餘の諸品、信解は是を信解し、譬喩は是を譬喩し、授記は是を授記し、乃至流通は是を流通して、全く他說なし。）然らば此の方便一品。いかなる甚深微妙の談か有む。と思ふに。唯有一乘法。無二亦無三。の大話のみなり。（但諸

佛兩足尊、また是法住法位などの偈、やゝ理を說くと云へども、這般の談は、他經にいか程も見えたれば、珍からず、たゞ他經に無きは、唯有一乘法の說なれども、然る所以の說なき故に、たゞ懸空の大話のみと知べし。)また此の經中に。持經の功德。また謗經の罪報を說くに至りては。全く愚夫愚婦を誘ふの說にして。淺陋尤も笑ふべし。(其は持經者の功德を述たる語に、是人功德百千萬世、終不瘖瘂、口氣不臭舌常無病、口亦無病、齒不垢黑、不黃不疎、亦不缺落、脣不下垂、亦不褰縮、鼻不匾虒、亦不曲戾、面色不黑、亦不脥長、亦不窊曲と云ひ、謗經者の罪報を述たる語に、此人罪報汝今復聽、其人命終入阿鼻獄、從地獄出當墮畜生、有作野干來入聚落、身體疥癩、亦無一目、爲諸童子之所打擲、受諸苦痛、或時致死、於此死已更受蟒身、其形長大五百由旬、聾騃無足、宛轉腹行、爲諸小虫之所唼食、晝夜受苦、無有休息、若得爲人、諸根闇鈍、矬陋攣躄、盲聾背傴口氣常臭、鬼魅所著、貧窮下賤、爲人所使、多病痟瘦、無所依怙、身常臭處垢穢不淨、淫欲熾盛、不擇禽獸、謗此經故、獲罪如是と云り、かゝる說話は、人情の好惡する所に因りて、敎を設くるに在りと云へども、豈智者に對するの所談ならむや、華嚴、維摩、楞嚴、圓覺等の諸經には、絕て如此き說なし。)むかし圭峯の宗密。法華を貶して。勝鬘圓覺等の四十餘部の經よりも。劣れりと言ること。豈その所以無らむや。(かつ法華經は、これ天下の書にして天台一家の私有する所に非ず、人々各自に、一雙の眼を以て、看取すべきに、天台の三大部有しより已來、世人法華は、たゞ天台の釋に非ざれば、解すべからぬ物と思へる故に、褒揚大過し、終に世擧りて、皆是が爲に轉ぜらる、噫々、)また普門品の如きも。淺陋にして。觀るに足らず。是その本意。もはら在家の。愚夫愚婦を勸誘するに在り。故に將諸商人。齎持重寶と云ひ。若有女人求男。求女と云ふの類。みな出家沙門の事に非ず。(然れば今是を讀む人は、たゞ淺く事上に於て解し、刀尋段々壞は、惡七兵衛景淸を引て、證する程の事にて、能べ

きなり、)彼の台家の約観の釋の如きは。附會大に厭ふべし。また此品の偈に。呪詛諸毒藥。所欲害身者念彼觀音力。還著於本人。と有を。蘇東坡が評に。若如此ならば。大慈大悲に非じ。下の一句は兩家揔沒事と爲べし。と云へるを。雲栖の袾宏が摸象記に。口を極めて是を非る。然れど此は護法心より。蘇子が經文を鵰黄するを見て。三百の鎗を以て。心を刺るゝ思ひに堪ず。罵詈して其憤悶を洩すには過ず。東坡の言。一時の戲謔なりと言へども。實に其意を得る者と云べし。(世說新語に載す、桓炅寶征殷仲堪。道出盧山。因詣遠公。語次及征討之意。遠曰、願檀越安穩、使彼亦復無他と、是ぞ桑門の本色なるべき、東坡が言、暗に是と合へり、もし經文の如くは、觀音は遠公に如ず、と謂ひつべし。)また楞嚴經。觀音圓通章に。三十二應。十四無畏あり。事は全く普門品に同じく。但理をもて事を奪ひ。表法と做して說去れり。是かの經は。法華より後に出て。普門品の淺陋なるを嫌ひ。此理窟を揑造して。稍小智ある者の。機に應せむと爲たるなり。(諸經みな寓言な

尊こと、其の說明に就て考たらむにも、看破せらるゝ事なりかし、)さて維摩經の大旨も。小乘を厭破するに在る故に。其の能說の主を。佛に託せず。在家居士の維摩に託せり。これ佛。なほ比丘相の嫌あるが故なり。其序分佛國品に。毘耶離城の寶積および。五百の長者子。同じく佛所に來詣せり。維摩もまた。五百長者の其の一にして。獨り病を示して詣ざるは。如來問疾の端を引出さむ爲の楔子なり。然して問疾に就て。諸聲聞に命ずるに。孰れも皆不堪と稱して。昔日の呵を述ぶ。然るに是を直に維摩の口裡より出さず。諸聲聞をして。各自に說出さしむる事。もとも作者の巧を見べし。一部の趣向。全く居士の託病より出づ。(予嘗て戲に言ふ、韓退之が送揚少尹序を、古人評して、一篇情景、在託病上と云へり、これ韓退之、實に病るには非ず、病に託せざれば、一篇の趣向出來ざるが故なり、今此の經もまた然り、)さて室內に至りても。病の字を放下せず。因て菩薩の大悲に說き入れ來る。前、照應。毫無滲漏也。と云べし。其の他座を燈王に借り。假

を香積に請ひ。妙喜世界を斷取する等のこと。謂ゆる無中に有を生ずる。空中の樓閣にして。文章家の妙境。すべて玆に在り。（誠に此の作者の才力、蒙莊子、蘇東坡、施耐菴の輩と、並驅るべし。）如此く看破してこそ。作者の粉骨も見え。面白くも有なれ。若只實事と做して看ば。宛も蠟を嚼むが如く。何の趣味か有む。且また事を解せざるの甚しきなり。（何となれば、佛祖既に他心通を得たれば、諸聲聞の行くに堪ざる事は、素より熟知する所なり、出世の身にも、世間の慶弔缺べからずとて、使を遣さむに於ては、初より直に、文殊に命ずべき事なり、然るに一一諸聲聞に命じ、舍利弗堪ずと云へば、目連に命じ、目連堪ずと辭すれば、迦葉はいかにと、賣膏藥が路人に衒ふ如くなるは、豈兒戲ならずや。）たゞ諸經。みな後人の假託にして。作者もまた一人の手に出ずと知れば。種々奇怪の事あるも。疑を致すに足らず。彼と此と。說相に異同多きも。和會する事を用ひず。始めて揞黑豆の譏を免るべし。（王元美謂らく、一切經、皆佛說と稱すれど、其の間に、後人の假託なきに非ず、その大乘諸經は、固より議すべきに非ずと云へども、小乘諸經の如きは、佛滅後に、竺土の僧の作れる所にして、名を迦文に託せる者なりと云り、此は了義の說を眞とし、不了義を假とす、疏漏の說と云ふべし。）林希逸云く。朱文公謂らく。釋氏の說。もと莊列に出と。恐らくは然らじ。古へより天地の間。一種の議論あひ期せずして。自然に同じき者あり。佛西方に出づ。豈こゝに於て剽竊すべけむや。誣ること大過なるは。公ならずと。是朱子は。排擊を主とし。希逸は護法を主とす。皆一偏の論にて。共に公ならず。案ふに釋氏の說を。莊列より出と云とも。何ぞ妨げむ。（佛の西方に出たるは、勿論なれども、亦奚ぞ知らむ、翻譯の三藏等、および筆授潤文の人々、莊列を籍りて、幇襯潤色せざる事を、）他經は姑く置て論ぜず。維摩經の如きは。甚だ莊列に類せる所多かり。其は文殊が入不二門の問に。維摩が默然無言なりしは。卽ち知北遊に。三問而不レ答也。非レ不レ答。不レ知レ答の意なり。その須彌を。芥子に納るゝは。卽ち大山爲レ小。秋毫爲レ大の義なり。散

華の天女の。我從二十二年一來。求女人相。了不可得と云るは。即ち兀者申屠嘉が。吾與夫子遊十九年矣。而未嘗知吾兀者也の說なり。佛道品に。法喜以爲妻。慈悲心爲女と有るは。即ち庚桑楚が。擁腫之與居。鞅掌之爲使の旨なり。此の餘なほ多し。只看る者の烱眸に在のみ。且また羅什および。四依の弟子らが。此經を註せるを見るに。全く郭子玄が註體に傚へる者なり。(是を以て、後世天台賢首、諸家の註經とは、體裁大に異なり、肇公また別に、物不遷論、般若無智論などあり、其の中多くは、莊列の語を假りて、文を傚せり、)然れば此の經も。莊子を以て幇襯潤色せること。有まじきに非ず。そは佛經のみならず。禪話にも。莊列より出たる者あり。油斷すべからず。(其は女子出定の話は、赤水玄珠を摸擬し、大耳三藏が、見忠國師の話は、神巫季咸が、相壺子の章を、剽竊せる類なり、)然れども。痕迹宛然として。終に識者の藻監を逃れ難し。と云へるは。然る言なり。(維摩經を、具には維摩詰所說經といふ、また不可思議解脫經とも云ふ、鳩摩羅什が譯にて、三卷十四品あり、凡て寓言なること、蘇門が辨へたる如なれば、維摩居士と云も寓名なり、然るに西域記に、其古迹を舉たるは、例の後に作れる古迹なること、云も更なり、)さて右の經等ありて。後に出來たるは。華嚴經なり。(此を具には、大方廣佛華嚴經といふ、唐于闐國三藏沙門、實叉難陀と云しが譯にて、八十卷三十九品あり、此を世に、八十華嚴と云ふ、そは四十卷なると、六十卷なると、二部の全書ならぬ、別譯も有ればなり、)そは出定如來が說に。有法華後。華嚴氏之言興。乃託之二七日前。說圓滿修多羅。以付從前小乘。又譬之日輪之先照諸大山王。以斥從前大乘。而特作一家經王矣。誠加上者之魁也。後世或復信此方便。而曰此經最上至極。頓之頓者。亦誤矣。と云へり。(また其の自註に、舍利弗目連は、異時異處にして、共に佛法に入る、然るに此の會中に、舍利弗等、五百聲聞と云ふ語あり、また祇洹林普光法堂など、此の時並に未だ建立せず、而して此の文、具に之を述ぶ、是みな作者の方便、逗漏の處なり、また案に、華嚴に、諸法實相、般若

波羅密の語より是を以て此の經は、法華般若の二經の、後に出ることを知る、)さて蘇門居士説に。此の經一部三十九品の中に。阿僧祇と。隨好光明功德の二品のみ。佛の自説にして。其の餘は皆。菩薩の説なるに就て。李長者説に。佛果中二恩。一數法廣大恩。二隨好光明功德恩。此二位法。非ニ諸菩薩智所レ及。至ニ佛果滿ニ方明。故如來自説と釋き。清涼は。僧祇因終。光明功德果極。故二皆佛説。と解たり。此の二義既に同からず。然れども其の佛の自説に。重きを歸するは均し。謂ふに是また偶然のみ。果して何の意義か有む。(元來諸經、すべて意旨平易にして、解し難き者なし、但し後の諸注家、こと更に附會の説を做して、甚深ならしめむと欲するが故に、明なる者反りて晦く、平易なる者は反りて、艱澁となる、但しかく言へばとて、諸註を一向に廢すべし、とには非ず、もし諸註廢すべくは、諸經も亦廢すべし、畢竟は諸經も、また假託に出ればなり、若眞假一如と見て、理長ずれば、就くの意あらば、説後人に出づとも、何ぞ取ざらむ、

只註を將ち來て、經を解せむと欲する事勿れ、となり、然れば經は自ら經、註は自ら註と、各別に眼を具して看讀し、榮レ古虐レ今の見なく、買レ壁還レ積の手有らば、誦文の譏を免れ得なむ、)大抵諸經の作。其の中國より。巧拙有りと云へども。是を要するに。支那の文士の不朽を期して。精力を盡し。心肝を嘔くの類には非ず。多くは是。倉卒に成る者にして。其の意專ら當世に行ふに在り。然るに何れも。經末に至りて。末世の流通を叮囑する所以は。當時既に。佛滅後の末世に當るが故なり。(富永仲基云く、諸經多くは、是佛滅五百年後の人の所作なる故に、經に、後五百歲の語多く見ゆ、と此の言看破し得て甚だ快なり、)夫レ如此くなるが故に。其辭句の重複。事實の倒錯。また文勢前後照應せざるの類。固より支那文章の法を以て。律すべからず然れば。今この佛自説も。偶爾る所にして。甚麼の意義有るに非ず。只是後の學者。各自に己が意見に隨ひて。是を解釋するには過ずと言へり。是も然る説なり。(また王氏華嚴經の序なる、蘇子瞻が論に、宋寶國出ニ王氏華嚴經解一、相

示、予問寶國、華嚴有八十卷、今獨以解其一何也、寶國曰、王氏謂我、此佛語深妙、其餘皆菩薩語爾、予曰、予於藏經取佛語數句、置菩薩語中、子能識其是非乎、曰不能也、予曰、非獨子不能、王氏亦不能、予昔在岐下、聞沂陽豬肉至美、遣人置之、使者醉豬夜逸、置他豬以償吾不知也、而與客皆大詫、以爲非他產所及、已而事敗、客皆大慚、今王氏之豬未敗爾、昔買肉唱女歌、或因以悟、若一念清淨、墻壁瓦礫、皆說無上法、而云、佛語深妙、菩薩不及、豈非夢中語乎、寶國曰唯々、と有るを擧て、此は看敎の徒の、點眼藥なりとも言へり、）然れば（さて上に論ふ如くなれば、）本文に擧たる。綱要の文に。馬鳴論師。始弘大乘と云へるは。然る言なれど。舊く佛說に在し。大乘說の。小乘に壓れて。久しく隱沒せるを。再び興せる如く云へるは。非說なること著明なり。猶次々に論ふを見るべし。

次者有龍猛論師。六百季曆。七百初運紹于馬鳴獨步五印。所有外道無不皆摧。所有佛法皆悉傳持。三本華嚴獨含胸藏。「四辨文河妙控江海。」廣造論藏。而靑於藍、深窮佛法。而寒於水。凡斯二大論師。並是高位大士也。

（書入曰六百年七百年の間仲哀の御世、漢獻帝がとき）龍猛論師が師を。迦毘摩羅といふ。十一祖馬鳴論師が弟子なり。其は付法藏經に。十二祖迦毘摩羅尊者。華氏國人。爲外道師。有衆三千。以神力來嬈馬鳴。馬鳴曰。汝之神力更能如何。摩羅曰。我化大海。極爲小事。馬鳴曰。汝能化性海否。問何謂性海。馬鳴曰。山河大地依之建立。三昧六通由茲發現。摩羅聞之。卽能信入與三千衆。同時悟道。受師付囑。宣布正法。於南天竺。大興饒益。造無我論足一百偈。化緣已畢。現通入滅と見え。また十三祖龍樹尊者。南天竺國梵志之裔。佛去世後七百年出。始生之日在樹下。由入龍宮。始得成道。故號龍樹。天姿聰悟在乳哺中。聞諸梵志誦四韋陀典。有四萬偈。各々三十二字。皆達句義。弱冠馳名獨步諸國。天文地理星緯圖識。及餘道術無不綜練。（西域記に、南印度那伽閼刺樹那菩薩、唐言龍猛、舊譯曰龍樹、非也。幼傳雅譽、長擅高名、捨離欲愛、

出家修學、深究二妙理一、位登二初地一と云ひ、羅什が譯の、龍樹傳には、其母樹下生レ之、因字二阿周陀一、樹名也、以三龍成二其道一故、以レ龍配レ字、號曰二龍樹一也とあり、)嘗與二契友三人一議曰。世間義理、可下以開二神明一發中幽旨上者。吾輩悉達レ之矣。更以二何方一而自娛樂。復云人生唯有下追二求慾色一爲中至樂上耳。乃俱往二術家一學二隱身法一。師念曰。此四梵志。才智高遠。今以レ術故。屈辱就レ我。若授二其方一則永見レ棄。乃各與二青藥一丸一。水磨塗レ眼形自當レ隱。(形を隱さむとするに、我が眼に藥を塗ると云こと、甚も心得難くは覺ゆれど、秘密儀軌どもを見るに、其の方の出ることに、眼に塗るよしを記して、其を眼藥とさへ云へり、此は由有ことゝ見えたり。)龍樹聞レ香。便識二此藥一。有二七十種一。名字兩數皆如二其方一。師聞大驚。卽以二其法一具授。(龍樹を、眼科の祖なる由を俗にいひ、また龍目論とて、是者の作なりと云ふ書もあるは、此事より造れる說にや、)四人既得二其藥一。翳レ身遊行。相與入二王後宮一。數月美人懷妊者衆。王問二智臣一。臣曰。若非二鬼魅一則是方術。可下以二細土一置中諸門中上。若是方

術。其迹當レ見。設是鬼魅人。必無レ迹。人可二兵除一。鬼當二呪滅一。王用二其計一。果四人足迹。乃令三勇士揮二鈒空中一。斬二三人首一。近レ王七尺。刀所レ不レ至。龍樹斂レ身依レ王。不レ能レ加レ害。始悟三慾爲二苦本一。卽自誓曰。若免二斯難一。當下詣二沙門一受中出家法上。既得レ出レ宮。便入レ山。至二一佛塔一。摩羅來訪。(羅什が譯せる、龍樹傳の趣きも、大抵是に同じくて、其の入たる山を、雪山とし、雪山深處有二佛塔一、塔中有二一老比丘一、以二摩訶衍經一與レ之と云て、摩羅と對問の事なし、)龍樹迎レ之曰。深山孤寂。大德至尊。何枉二神足一。摩羅曰。吾非二至尊一。來訪二賢者一耳。龍樹默念。此師得二決定性一否。明二道眼一否。是大聖繼二眞乘一否。摩羅曰。汝雖二心語一我已意知。但辨二出家一何慮二吾之不レ聖。龍樹悔謝。卽求二出家一。(これ摩羅が、晩年にて在けるが、此の後は聞えず、龍樹傳なる一老比丘は、摩羅が否ぬか知らず、)於二九十日一誦二通三藏一。閻浮所レ有皆悉通達。辨才無礙。自謂二一切智人一。復自念言。世界佛經雖レ妙句義未レ盡。我當下更敷二演之一。開中悟後學上。復欲下立二師敎戒一。更造二衣服一。令中少不同上。欲レ除二衆情一選二

擇良日。便欲成達。獨處靜室水精房中。(この一節に、殊に心を著て察べし、龍猛元より、識量拔群の者なるが故に、當時までに出來て在し、大乘經どもの、句義ともに調はざる故に、之を敷演し、句義を調へて、後學の疾く其の旨を開悟すべく書改め、また師たる者の、衆を導く教戒の法をも、新に立て、また當時まで、謂ゆる小乘部の衣服の製を改めて、其の大乘宗の衣服を異にして、其まで小乘に倣たる衆情を除かむと欲し、大に其の新法を弘通せむに、必ず成達すべき良日を選擇すと、獨り靜室に處たる由なり、其の靜室の名を、水精房としも云るは、龍宮に入りて、經を得たる由を言はむとて、此者の造言せる房の名なること、言ふも更なり。)大龍菩薩愍其心念。即以神力接。入大海宮殿。開七寶函。與諸方等經典。九十日中通解甚多。龍王曰。汝今閱經爲徧未邪。龍樹曰。汝經無量不可得盡。我今所讀。足過閻浮十倍。龍王曰。忉利天上諸經。復過此中百千萬倍。龍樹於宮中修行。豁然通達。善解一相。深入無生法忍。龍王知悟通。送龍樹出宮。(大龍菩薩とは、龍にして菩薩戒を持つ由の名なり、斯て本には、龍曰師曰と有れど、胡論しければ、龍樹をば、龍樹といひ、龍をば龍王とは記せり、偖この龍宮に入りて、經を得たる談は、衆情を面向けむ爲に、例の方便に云へる幻説なること、云も更なり。)龍樹造大悲方便論五千偈。大莊嚴論五千偈。大無畏論十萬偈。優波提舍論十萬偈。(佛祖統紀に、輔行記を引て、大悲論、明天文地理、大莊嚴論、明修一切巧德法門、大無畏論、明大一義、中觀論者、是其一品、即大智度論也と云へり、なほ此の論師が作れる書ども數多あり、目錄見るべし。)有小乘法師。見師高明。常懷忿疾。師所作已辨。問小乘言。汝今樂我久住世否。答曰。實不願也。一日忽入月輪三昧。唯聞法音。不見形相。唯弟子迦那提提婆識之曰。師示佛性非聲色也。龍樹乃付法提婆。復入閤室。經日不出。弟子破戶視之。見入三昧。蟬脫而去。天竺諸國並爲立廟。敬事如佛と見え。(起信論幻虎錄に引たる、羅什法師言に、如來般泥洹後、三百七十年、有馬鳴菩薩、出興於世、敷演無上大乘

之化、其後五百三十年、有龍樹菩薩、出興於世、敷演無上大乘化一身假服仙藥、乃三百餘年、任持佛法、至八百年後、始付提婆ともあり、さて龍猛が死たる樣を思ふに、謂ゆる死解仙の趣に似たり、迦那提婆が事は、下に云を見よ。）また西域記には。中印度境なる。憍薩羅國の所に。城南不遠有故伽藍。昔者如來於此處。摧伏外道。後龍猛菩薩止此伽藍。時此國王號娑多訶。唐言引正。珍敬龍猛。龍猛菩薩善閑藥術。餐餌養生。年數百志貌不衰。引正王既得妙藥。壽亦數百。王有稚子。謂其母曰。如我何時得嗣王位。父王年壽已數百歲。子孫老終者蓋亦多矣。斯皆藥術所致、龍樹寂滅。王必徂落。菩薩慈悲周給群有。身命若遺。汝宜往彼試從乞頭。若遂此志。當果所願。王子恭承母命。來至伽藍。（こは彼の龍猛が住する伽藍なり、偖印度藏どもに、父王の死を待かねて、或は弑し、或は呪詛する類、あまた見ゆ、阿闍世王、阿育王など是なり、佛祖が國を脱れて、頻婆沙羅王に相見せる時に、△と云へるなど、凡て彼の國の風なり、故觀經に、▽とは見えたるなり、）時龍猛菩薩、方讃誦經行。忽見王子。忙然謂曰。今夕何夕。降趾僧坊。若危若懼。（他心通の菩薩、この王子が訪來つる意を、通じ得ざりしは如何ぞや、偖かく甚く懼れたるは、自然に其の害意の、心に應じたる故にや、）王子對曰。我承慈母餘論。十方善逝。三世諸佛。勸求佛道。或投身飼獸。或割肌救鴿。月光王施婆羅門頭。慈力王飲餓藥叉血。諸如此類。尤難備擧。求之先覺。何代無人。今菩薩篤斯高志。我有所求。人頭爲用。招募累歲。未之有捨。欲行暴劫殺。則罪累尤多。菩薩修習聖道。遠斯（期カ）佛果。慈霑有識。悲及無邊。輕生若浮。賤身如朽。不違本願。垂允所求。龍猛曰。俞誠哉是言也。我求佛聖果。我學佛能捨。是身如泡。流轉四生。往來六趣。宿契弘誓。不違物欲。然王子有一不可者。其將若何。我身既終汝父亦喪。顧斯爲意。誰能濟之。（謂ゆる求道に、不惜身命の說を立たる故に、如此き難あり、自法に、自縛自刑すとや言べからむ、）龍猛徘徊。顧視求所絕命。以乾茅葉。自刎其頸。若利劍

斷害一。身首異レ處。王子見已驚奔而去。門者上白具陳二始末一。王聞哀慼。果亦命終。とあり。付法藏經とは甚く異なり。孰れか正說なる事を知らず。(なほ西域記に、此の引正王が黑峯といふ山を鑿て、伽藍を建る時に、府庫の空しきを憂ひしかば、龍猛以二神妙藥一、滴二諸大石一、並反爲レ金、と見たるを始め、其餘の書等にも、種々の事實あれど、此に用なきは凡て洩しつゝ)さて本文に採れる綱要に、所レ有佛法。皆悉得持といひ。上に引く付法藏經に。有ゆる佛經を。敷演せる由言るに就て。なほ西域記にも。龍猛菩薩。以下釋迦佛所宣說法。及諸菩薩所演述論上。鳩集部別とも有るは。是までに。次々出來て在し大乘敎法を。鳩集敷演して。部を分ち。自ら持し。世に弘傳せる由なり。(そは富那夜奢と云しが時より、馬鳴迦毘摩羅が時までに、僞託せる敎說どもなること、前節に云へると、合せ考へて知べし。)其は皆己が識量を以て。敷演せるには有れど。世に持傳ふる敎說とは差へる敷演を。他人の信まじく思ひて。龍宮なる諸經の精說なるを。得て來れる由して。取出たるにて。其は此の比丘が。新工夫の幻說なり。(涅槃部に收たる、菩薩處胎經と云があり、其の聖齋品といふ品の佛說に、龍宮殿中有二七寶塔一。諸佛所說。諸法深藏。別有二七寶函一、涌二中佛說十二因緣、總持三昧一、龍子龍女香華供養、禮拜承事、とあるは、龍樹より後に右の幻說を、なほ誣ひ貴らむと、作り設けたる說なり。そは同部に。摩訶摩耶經に、如來滅後七百歲、已有二一比丘一、名曰二龍樹一、善說二法要一、滅二邪見幢一、燃二正法炬一と見え、楞伽經に、未來世當レ有下持二於我法一者上、南天國中大名德比丘、厥號爲二龍樹一、能破二有無見一、得二初歡喜地一、往二生安樂國一、と云へるよし作れると、同方便なり、楞伽も、龍樹より後に作れる經なること、此の文にて明なり。)さて其の經どもを。付法藏傳に。諸方等經典と云へるは。後世に方等部と稱する。經々の事には非ず。大乘敎說を。總ねて云へる舊例なり。其は早く。出定如來が說に。方等乃方廣。其義無レ別。棟二異大乘一命レ之。別無二其經一。大論云。法華經諸餘方等經。涅槃經聖行品。從二修多羅一出二方等經一。有二大方等大涅槃之語一。皆讚レ大之辭。非三別有二其

經也。と云へるが如し。（なほ委しくは、後語を見べし、また下に引く、蘇門居士が說にも見えたり。）然れば。龍王より授かれりとて弘通せるは。必ず般若。法華。寶積。華嚴などの經々にて。其を方等とは云へるなり。然して大品般若を釋して。大智度論を作り。餘諸經を演釋して。諸論を造れるが。綱要に。三本華嚴含脇藏と云へる如く。彼の華嚴經を。殊に珍重せりと所思たり。（三本華嚴とは、八十卷の本は更なり、四十卷の本、六十卷の本とを云へり、）其は是比丘が造れる。諸論の中に。至要とする。十住毘婆沙論と云ふあり。此は華嚴十地品の。初二地を釋せる論なればなり。（十住毘婆沙は、鳩摩羅什が譯にて、十五卷あり、三十五品に別たり、また十生論とも云ふ、）さて出定如來說に。在華嚴。而大集泥洹兼部氏之言興。乃作爲其二經。以合大小二乘。且以歸重於其涅槃。如其云三十六年始說大集。是暗託般若之前。而出二乘中間也。且如其說律。云如是五部。雖各々別異。而皆不妨諸佛法界。及大涅槃。是合五部律之異也。然而五部律。皆本出千八十誦中。後世五師。分爲五部。去佛滅度幾何。是知此經後出。（此の經具には、大方等大集經といふ、北涼中天竺沙門曇無讖譯にて、三十卷あり、三十八品に說たり、此經より品を分て、別記せる經六あり、また大方等大集月藏經十卷、大乘大集地藏十輪經十卷、大集須彌藏經二卷あり、地藏虛空藏などいふ菩薩どもを、捏ね出たる事も、是等の經等より始れり、）涅槃亦同手作。故言語多相類。是則託之佛滅。以證此經之出。在年數最後。又譬之以醍醐。以明此經之義最純粹。又擧毘尼幷戒乘緩急。以說大小二乘之幷難遠。如後世名招捨敎者。不知此爲兼武氏也。（また其の自註に、按ずるに法顯傳云、某國小乘學、某國大乘學、某國兼大小乘と、此の兼と云もの、乃兼部氏なり、また按に、哀嘆品に、新體の伊の字を以て、秘密の藏に譬ふ、是に知る、涅槃もまた後出なる事を、とも云へり。）於是頓部氏之說興。（其契經凡二十部。）楞伽其尤也。以從前諸經。言皆煩重。其趣牛毛而迂遠故。更立激切語云。一切煩惱。本來自離。不可說斷及與不斷。一

切衆生。皆是一切。畢竟不生。離諸名字。卽一切法。唯一眞心。一念不生卽是佛。不從一地至一地。初地乃八地。其言直切。無復還回說。以破從前因陀羅。其窮離披。爲菩提達磨氏。其東來以楞伽。印衆生心。亦可徵焉。依義不依文字。終始不說一字。實禪家之鼻祖。其窮變幻奇怪。乃至以乾栗櫪語佛性。以拭瘡疣。斥經卷。是皆所謂頓部氏也。（楞伽經、具には楞伽阿跋多羅寶經と云ふ、四品に說たり、劉宋中天竺沙門、求那跋陀羅が譯にて、四卷あり、此の外に、入楞伽經十卷、大乘入楞伽經七卷有れど、阿跋陀羅楞伽を、かの達磨が用ひたる由にて、此を尊と流通せり、なほ此の部類も、十八九部は在べし）於是祕密曼陀羅金剛手氏之敎興。其敎云。世尊得一切智々。爲無量衆生。廣演分布。隨種々趣。種々欲性。種々方便道。宣說一切智々。或聲聞乘道。或緣覺乘道。或大乘道。或五通智道。或願生天。或生人中及龍夜叉乾闥婆。乃至說生摩睢羅伽法。各々同彼言音。住種々威儀。而此一切智道一味。又云契經如乳。調伏如酪。對法如生

蘇。般若如熟蘇。總持門如醍醐。是可見。此敎攝諸宗。以一切智々。乃合之其所謂曼陀羅。遂以歸重於其所謂毘盧遮那阿字門者也。（此なる二文は▲に見えたり、六度經に、我滅度後、令阿難陀、受持所說素呾纜藏、鄔波離。受持所說毘那耶藏、迦多衍那、受持所說阿毘達磨藏、曼殊師利、受持所說大乘般若波羅密多、其金剛手、受持所說玄深微妙總持門矣、云へる由作れるは、密經どもの、考證に具へむとての僞託說なり、惑ふこと勿れ、）意者。此經王最後出。不空師云。經夾藏于鐵塔數百年。龍猛始獲焉。然而龍猛所說。無一言及焉者。唯祕密號。出于龍猛。故後世祟奉之至。蓋依以爲然也。（蘇門居士云く、唐の玄宗が開元中に、南天竺の金剛智、不空、善無畏の三三藏蟬退として長安に至る、倶に曼陀羅密敎を傳ふ、大抵從前一切の修多羅、これを釋迦の所說に託せざるは無に、獨り密敎は其の言に、これ毘盧遮那法身の所說なり、金剛手菩薩これを受て、南天竺の鐵塔に祕藏たりしを、後に龍猛塔を開きて、此を金剛薩埵に承け、而して後に、世に流傳すと、

これ荒渺の談、實に籍重の最なり、果して其の説の實ならば、嚮に玄奘が西遊せる時に、南天竺にも渉りたれば、謂ゆる鐵塔の靈蹟を見ることを言はざるは、何ぞや、按ふに、此は西域記に、婆毘吠伽論師、南天竺の磔迦國に至り、芥子を呪して、岩壁を擊開きて、彌勒の阿素洛宮に入とふ説あり、三三藏の輩、これらの事を附會して、毘盧縁起を揑造せるが、且つ三三藏の傳來する所は、また唯、壇場儀軌の事法に過ざるのみ、彼の理觀の如きは、台賢（天台と賢首と）二家の所説と、始より殊途なし、意ふに一行の徒、竊に理を斯に取りて、此を事法に縁飾して、鐵塔の説に託せるにや、故に、其の他宗に矜誇するも、亦唯事法の一端に在るのみ。）是諸教興起之分。皆本出于其相加上。不知其相加上。則道法何張。乃古今道法之自然也。然而後世學者。皆徒以謂。諸教皆金口所親説。多聞所親傳。殊不知其中却有許多開合也。不亦惜乎。（金口とは、釋迦に云ひ、多聞とは阿難に云へり。）赤裸々に云く。或人予に謂けらく。小乘は前にして。大乘は後なること。然も有りなむ。既に諸經にも。如來衆生の根機を調熟せむが爲に。其の説法淺きより深きに至ると有り。然れば何ぞ怪むに足らむ。予が云く。我が説に。小前大後と云は。其に佛滅後の假託と倣して。論ずる所なり。予の小前大後の説は。如來在世一代の眞説。と信じてなり。是全く後人の。説時次第の説に惑ひてなり。（今云ふ、説時次第とは、初成道の時に、華嚴を説き、次に阿含を説き、次に大集を説き、次に般若を説き、次に法華を説き、最後に涅槃を説りなど云ひて、諸經を説る時を、釋迦の在世一代に配當したる説どもを言ふなり。）凡そ諸經に。説時次第を立るは。皆是後人の大乘家の妄作なり。如何となれば。小乘家には。如來一代の説法。悉く四阿含に盡るとす。此の外に。別に大乘の説有ことを許さず。然るに大乘家後に出て。小乘を壓むと欲するに。自らその後出なるを以て。小乘は如來の説に非ず。とは誣がたき故に。大小乘共に。如來一代の眞説と許し。唯其中に就て。淺深勝劣を分ち。其の深と勝とを。吾が大乘に歸す。是ぞ説時次第の。由りて起れる所以なる。（かの法相

三論の二宗に、其に三時敎を立るが如き、是なり、○今云、八宗綱要に、據南山律師意者、如來一代所說法門、大小諸敎分爲三敎、一性空敎、一切小乘、卽此中攝、二相空敎、一切大乘淺敎悉攝、三唯識圓敎、一切大乘淺敎悉攝、今四分律、卽性空敎中、一分、唯識圓敎是祖師域心、圓融故云々、圓敎妙體是唯識敎也、とある卽ち是なり、)然れども後來大乘家に。華嚴などの經出て。此を最初の說に託するが故に。小前大後の次第も妨有り。是に於て。天台家の五時の說起れり。(今云、三時の說は、唐土天台山の、智者大師と號しが立たる說なる故に、かく云へり、委しくは天台宗の所に云ふべし。)其說に。如來最初に。頓大の法を說給へども。衆生小機にして。其の益なきが故に。權にまづ鹿苑の小敎を施し。(今云、頓大の法とは、華嚴の敎をいひ、鹿苑の小敎とは、阿含の敎を云へり、佛祖說法の始めは、鹿苑にて在し故に、かくは云なり。)後漸々に。衆生を引て。方等般若を歷て。終に法華涅槃の一乘醍醐味を說く。出世の本懷。是に於て畢ると云へり。(今云、方等とは、此にては、大寶積大集などの敎を云ひ、般若は、卽大般若の敎を云へり、法華涅槃を、醍醐味に譬へたるは、諸敎に勝れて、純粹なる由なり、)此の說誠に。諸經を和會し得て。綿密なるが如しと言へども。元來附會に出る所なるが故に。支離破綻。つひに識者の眼を覆ひがたし。今且つ五時の次第を擧て。其破綻を拈出せば。まづ華嚴を。最初の說とするは。始成正覺。といふ語あるに因てなれど。諸部の小乘にも。始成の語有て。鹿苑に說るを。最初の說としたり。(然れば華嚴に、始成正覺の語あるを以て、最初の說とする說は、立がたし、)是に於て。荊溪また說を作りて。小乘部に。初成正覺の語あるは。小機の所見にして。大乘の始成に異なりと言へり。(荊溪がこと、△に見えたり、)然れども。若この說を主張せば。恐らくは。矛楯の過ち出來ぬ。如何となれば。鹿苑の說法を。成道最初とする事は。法華方便品にも見えたり。其は我始坐道場。と云より。法僧差別名と云まで。此の一段六十四句の偈なり。(其大意を云はゞ、佛祖成道の後、三七日思惟しつるは、我直に、一乘

の法を說べけれども、衆生根鈍にして、信ずることと能はじ、然るに過去の諸佛、みな方便をもて三乘を說たり、今吾も其例に從はむとて、鹿苑に趣き、五比丘の爲に、四諦の法を說く、此の時始めて、三寶の名ありとなり）如此くなれば。法華の始成は。卽小乘の始成と同時にて異なし。然れば法華もまた。小機所見の說と云べしや。是別義に非ず。元來華嚴は。法華より後に出たる經なる故に。法華經に。其の事の無るべき謂なり。（然るに、天台大師信解品の、長者窮子の譬へに於て、五時を配當し、其の傍人急追を、華嚴の擬宜を領ずるの文とす、是附會の甚しきなり、今試に、本文のみを、平かに讀去べし、何ぞ曾て、かゝる穿鑿に及ばむや、況て舊譯正法華の此の譬は、文句甚異にして、五時に配すべき語かつて無し、されば天台の說、巧なることは巧なれども、終に此の經の作者の本意には非ず、と知べし）且また華嚴經に就て考ふるに。彼の作者。成道最初の說に託すと云へども。處々に破綻の文有て。覺えず後出の消息を漏遁せり。（夫小乘の敎有りて、而して後に、聲聞の人は有べき事なり、爾るに此の經、入法界品に、舍利弗等の五百の聲聞あり、此の時いまだ、小乘の名さへ有べきやう無に、舍利弗ら、何より何れの法を學び得て、聲聞とは成れるや、且つ祇園精舍は、佛成道六年の後、始めて造立有しなり、然るに此の品の初めに、祇園精舍あり、是前後相違に非ずや、○今云、此の相違の事は、仲基も早く云へるを、既に華嚴の論の處に記せり、合せ考ふべし）次に阿含を第二時と爲こと。信解品の。脫妙著麁の文に據てなり。然れども。舊譯には此の文なし。（殊に此の文、五時に干涉ざる譬へなるをや）次に方等を。第三時とするは。大集經の如來成道始めて。十六年の文に據なれど。方等部の經も。甚博く其間。說時の異說區々なり。然るに大集一經の語を以て。餘の一切を概せむこと。不平の甚しきと云べし。かつ方等の稱は。方廣平等の義にして、一切大乘經の總名なれば。阿含部を除く外は。華嚴般若法華涅槃も。みな盡く方等なり。其の證諸經に多く見えたり。（今その一證を擧げば、舊譯正法華の序品に今日大聖、當

爲我等講正法華方等典籍の語あり、是正しく法華を指して、方等と稱せり、爾るに唯八年の中、四教ともに說く者とすること、甚だ非なり、其誤り、涅槃の五味を、五時に配當するより起れり、五味元より五時に干涉ざること、仲基既にこれを辨せり。）凡天台家方等の稱は。其の謂ゆる理方等は。是正義なり。別に時方等を立るは。杜撰なり。（且つまた菩提流支說には、成道二十八年に、瓔珞經を說き、三十八年に、解深密を說き、四十二年に、觀無量壽經を說くと云へり、然るに天台家には、右の諸經を、みな方等部に收入せり、是等の異說、いかむか和會せむ、然れば近世藕益の智旭は、天台宗の末師なれども、時方等の盡理ならざる故に、專と大乘の通名なる義を主張せり、）次に般若を。第四時とするは。仁王經に。如來成道二十九年。既爲我說摩訶般若。と云に據れり。然れども此の語の意は。其前二十八年中に。華嚴阿含方等の三時を說き畢れり。と謂るには非ず。只成道已來。諸部の般若を說て。二十九年に至れるの義なり。（今その證を引むに、大智度論に、初成道の事を記して、是時世界主梵天王、及釋提桓因、幷四天王等、皆詣佛所勸請世尊初轉法輪、是故佛說摩訶般若波羅蜜經と見え、また天台は、大論を引て云く、始從成道夜至泥洹夜常說般若と是なり。）次に。法華涅槃を第五時とするは。四十餘年および。臨滅度時の文に據れり。然れども是皆二經の作者。自張自大の談のみ。他經を以て律すれば。其の說合はず。（其は法華に於て、授記を得し、迦留陀夷が後に、聚樂に入て害に遭ひ、遂に結戒の緣起と爲れり、また長阿含增一阿含等には、佛滅して寺に葬り、後に諸弟子の、說法せる事までを載たり、また近くは遺敎經の如き、如來臨滅中夜の說と云に非ずや、是皆小乘の所なれば阿含部かへりて、法華涅槃の後に在り）五時の破綻かくの如し。是に因て。天台また通別の說を設けて。其の失を救ふ。其の說に云く。上の如く前後次第を立るを。別の五時と云ふ。また通の五時と云は。必しも前後次第に拘はらず。唯その衆生の機に赴きて。最初より。法華涅槃をも說べければ。是を說き。最後にも。華嚴阿含を說く。方等

般若の前後に通ずるも。亦斯の如しと。予謂ふに。通と別と兩立せず。何となれば。若し別を立れば通は廢し。通を立れば別は廢す。決して並び行はれて、相悖ざるの道理なし。(もし强ひて、これ有りと云はゞ、因明論に、我が母は石女なりと云へる如く、自語相違の過ちを犯すべし、○今云ふ石女とは、子を生ざる女を云ふ、婆沙論十六の巻に、如下女身中不レ任ニ懷孕一、空無レ子故、說中名石女上とあり、)然るに此の自語相違は。天台のみにも非ず。清凉の華嚴の疏に。別して時分を明せるに。約ニ不壞相一と。約ニ實圓融一との說あり。全く右の通別に相同じ。嗚呼兩宗の祖師諸經は。皆後人の手に出る事を。知ざる人ならむや。唯これ護法の念勝て。直ちに說破するに忍びず。多方に遷就囘互して。後の學者をして圈套中に陷し入れて。跳りて出ること能ざらしむ。歎ずべし。(或人問ふ、誠に吾子が說の如くは、諸經皆後人の假託なること疑なし、然るにまた法門中にも、別に僞經目錄ありて、眞僞の辨に嚴なるは何ぞや、答ふ、均しく是假なり、而してまた其の中に就て、眞僞の辨ある所以は、

其の古來世に偏ねく流布し、諸人の信受奉行し、且その義理に、大謬なき者を、權に眞經と定め、或は其譯時、出處も慥ならず、或は義理に大謬有て、凡そ人の疑を惹べき類を、黜けて僞經と定む、されば其の眞と云は、假中の眞にして、其の僞と云は假中の假なり、假中の假の疑ひに因りて、遂に假中の眞をも、人信ずまじきを恐れ慮りて、眞僞の辨の嚴なるなり、假如は、淸淨法行經および、冢墓因緣經の如き、閻浮提中、有ニ振旦國一、我遣ニ三聖一、在レ中化ニ道人民一、光淨菩薩、彼稱ニ孔子一、迦葉菩薩、彼稱ニ老子一、月光菩薩彼稱ニ顏囘一、といふ說あり、是みな支那の奸僧、儒道二教を壓むが爲に、假託して揑造せる所なり、總じて僞經に、妄誕多しと云へども、特にかゝる類の說を倣せば、儒道二教の徒、かならず起りて、辨斥せずては休ざるなり、若かゝる說をも、眞經に收入せば、彼の辨斥の餘波、或は法華華嚴等にも及ばむか、然れば法門中に、眞僞の辨あるは、必しも其の假を惡むに非ず、その假中の眞を護らむが爲なり、其實は、眞假ともに假にして、無差別なるが故に、既に眞

僞未決の沙汰ある經も、義理に害なき類は、天台等の祖師と云へども、引用せること有るをもて見るべし、また假中の假を造るに、其の意樂右の奸なるが如くには非ずして、極めて笑ふべき有り、昔妬婦を怯る丶者あり、是を制するに計無く、遂に經文を模擬し、佛に託して、妬の罪報の極めて畏るべき事を說く、是只一時、家婦の妬を禦ぐに在りて、流布するに意有るに非ず、されど偶々世に傳來せしと、開元釋敎錄に見えたり、此の經もし、日本へも渡りなば、六條の御息所の類を喩すには、利益無にしも非じ、何ぞ必しも是を廢せむ、また日本造の經も、多く見ゆれど知り易し、是また假中の假中（假なり、）偖また東流の諸經の中に。其の同經異譯ある者に就て考ふるに。品の添減文句の異同、參差して一樣ならず。是は天竺の梵本。既に一種に非ざるが上に。翻譯の三藏。筆授潤文の諸學匠の意樂に由りて。凡そ百の名物より。行文用字に至るまで。必しも舊を襲はざるが故なり。然れば今經を解する者。たゞ其の大綱を得ば已べし。もし文々句々を逐て。義理を求めば。

支離破碎。反りて本意に戾る事多かるべし。譬へば。法華譬喩品の如き。西晉の竺法護が譯は。象馬羊なるに。姚秦の羅什が譯は。羊鹿牛なり。予謂ふに。晉譯決めて。梵本の隨に正翻せるなり。何と云ふに。象馬車のことは。他の諸經にも多く見え。既に羅什譯の妙法華にも。象馬車乘の語前後處々に出づ。（また涅槃經の、三乘淺深の譬へに、三獸渡ㇾ河も、象馬兎なり、維摩經佛道品の偈にも象馬五通馳、大乘以爲ㇾ車と有れば、晉譯は梵本のまゝに、正翻せしこと疑ひ無し、況や牛車の事は、他經に於て所見なきをや、）然るに象車は。天竺に在りと云へども。支那には無し。適に有れども。其は蠻夷より貢獻する所を。僅に法駕に供ふる耳にて。常用の物には非ず。また馬車は。支那にも。古へ春秋の時までは有しかど。戰國の頃より。單騎もはら行はれしより。何時となく馬車は廢れて。御法毛後世には傳はらず。牛車及び羊鹿車は。晉已來六朝に。盛に行はれしなり。（世說新語、晉書等に載る所をもて、其時の風尙を想見つべし、）然れば西晉の譯に象馬と有るは。正翻なれど。羅

什が譯は。象馬を改めて。時行の牛鹿に易たることと決せり。象馬にまれ。牛鹿にまれ。畢竟は其の大小を譬へに取までにて。深き道理ある事には非ず。然るに天台ここを釋して。聲聞如ニ羊ノ鷲絶奔走一。緣覺如ニ鹿ノ並馳迴顧一。菩薩如ニ牛ノ全レ群而出一と云へるは附會なり。(大抵此の一事に就ても、敎家の所談に、附會多きを見べし、)また聲聞緣覺菩薩。是を三乘といふ。是また佛世一時に。竝出たるに非ず。其は聲聞の。佛に親弟子たるに於ては論なし。緣覺は。佛滅後に出たる人なり。故經論にも。無佛世に出て。無師自悟すとは云へり。かつ諸聲聞は。其の父母種姓。生緣名號に至るまで。詳に載せて明白なり。緣覺は。たゞ通號のみ有りて。其の各人の名を標せるを見ず。(聲聞緣覺のこと、委しく云べし、)大抵のこと。初起は草畧にして。後來漸々に全備すること。必然の理なれば。佛法も。釋迦その端を啓き。滅後に及びて。歷世の比丘ら。其の緖を繼て是を脩飾し。是を張大にし。然して後に。大成しつれば。緣覺の聲聞に勝れると云も。其の後出なるが故なり。(もし尋常の所談の如く、二乘同時に並出せむに、豈佛に親炙せる聲聞の、反りて獨行の緣覺に劣る、と云ふ理有むや、)菩薩乘に於ては。また緣覺乘に於ては。また緣覺乘の後に立たるなり。其は緣覺なほ。小乘たる事を免れずして。菩薩は正しく大乘の人なり。(その無師智を稱するも、また緣覺に同じく、佛世に出ざるが故なり、)かつ菩薩は。皆在家の身にして。乘急戒緩の人なり。其の由は。釋迦すらなほ比丘相なるに。菩薩は有髮にして寶冠華蔓。身に瓔珞を佩ぶ。全く在家の相なり。伏レ惑不レ斷。受レ生利レ物と云へるも、俗と並び居り。同事攝あるを以なり。(維摩經序分の列衆に、その比丘を先にし、菩薩を後にせるを、羅什註して、隨ニ人情所一レ推と云へるも、菩薩は戒緩なるが故に、世俗信せざるなり、)然らば其の。菩薩戒と云が有るは。如何と云ふに。是また後人の假託に出たり。夫れ戒は。佛世一時に具足せる物には非ず。諸弟子の過ある每時に結戒し。後來遂に。二百五十にも及べるなり。是小乘戒の說。誠に其の實を得たりと謂つべし。然るに彼の菩薩戒經を見れば。其の首に。盧舍那佛。

千葉の蓮華に坐し。其の一葉ごとに。一佛有て。各々千葉の蓮華に坐す。また其一葉ごとに。一佛あり。謂ゆる千百億化身是なり。而して其の本身盧舍那。一時に此の戒を誦出すと云ふ。其の荒唐なる兒童も亦よく其假託なる事を知べし。(菩薩戒經を、具には□□□□□。)或人難じて云。吾子菩薩を俗相と云こと。何の據か有る。既に盧舍那尊特の身相は。寶冠瓔珞を以て莊嚴せり。如來豈俗體ならむや。また吾子謂に。緣覺は。佛滅後に出るが故に。其の名を標せずと言へり。然らば菩薩も。また滅後に出て。反て其の名號あるは何ぞや。また經論に。菩薩に在家出家の二種ありと說く。然るに吾子在家のみと謂ふは。一偏ならずや。右三條の難を。一一に通じ來れ。答ふ。まづ菩薩俗相のこと。今近く事證を引て喩すべし。西域記に。天竺の風俗を叙て。國王大臣服玩良異。華曼寶冠。以爲二首飾一。而作二身佩一。其富商大賈。唯釧而已と云へり。(今云、此の文の義は、既に初品の註に云へりき、)西域記は。玄奘が。彼の國に渡りて目擊せる所を。直に實錄せる物なれば。其の說尤も信ずべし。(その刹帝利、婆羅門二種の人は、みな寶冠瓔珞を服すと知られたり、)さて盧舍那は。華嚴の敎主なり。此の經寓言なること。既に前に辨ずるが如し。然れば佛身を俗相に設けしも。俗諦に卽して。眞諦なるの理を表示せむが爲なり。(故に、入法界品五十三の善知識、その比丘相なるは、僅に六入に過ず、餘はみな俗相なるを以て見べし、)次に菩薩名號のこと。是また後の經家の寓託にして。亡是公。烏有先生に異ならず。何如となれば。今かの諸聲聞の名を見るに。迦葉の大龜氏たる。阿難の歡喜たる。舍利弗の鶖子たる。目連の菜服根たる。拘絺羅の大膝たるが如き。其の餘も皆此の類にして。總て事實に據りて。名を命ぜり。その質素淳朴なる。竺土の風俗想ひ見つべし。(亡是公、烏有先生など云ふは、諸越の文章家といふ徒の、文を造るに、寓にかゝる名どもを作りて、章を成せり、菩薩の名、まことに是に異ならず、また此なる四比丘の名義を、委しくは既に云へりき、)菩薩の名號は。是に異なり。普賢。妙德。觀世音。大勢至。不休息。無盡意。智積の類。みな

空理の稱なり。(かの後世、馬鳴龍猛の諸菩薩の如き、其の佛世を去こと、久遠なるすら、なほ事實によりて、名を命せり、況や佛世に在む菩薩の、豈かくの如き空理の稱あらむや、彼の經家の寓託なる事、疑ひなし。)然るに。其の緣覺に名無き事は。其の後出なるを諱のみに非ず。既に聲聞と同じく。小乘なるが故に影略して。別に標見する事を用ひず。菩薩は大乘にして。正しく聲聞の敵手なれば。其の人を設け。其の名を標せざること能はず。然れども佛世の人と稱して。後人の名は諱む所なる故に。別に空理に寓せり。新に名を設たるなり。(然れば華嚴會上に、列座の諸菩薩の名を見るに、十箇の菩薩ごとに、同一樣の字面を用ふ、もし是實に其の人あらば、少しくは參差出入も有べき事なり、かくの如く齊整なるべからず、況や註家も表法と倣して釋き去るをや、)嗚呼菩薩のみには非ず。三世十方の諸佛の名號も。また是に例して察知すべし。次に菩薩に。二種あるの說。是また後世に起れり。云何となれば。佛滅後數百歲を過て。馬鳴。龍樹。無著。世親等の諸祖。世に出たるに。皆菩薩の稱あり。然るに其の人。みな出家比丘相なり。彼の寶冠。瓔珞の俗相に異なるが故に。遂に出家菩薩の號。起りたるなり。(是を以て、華嚴梵行品にも、一切の菩薩の染衣出家といふ語あり、然れども彼の文殊普賢等は、謂ゆる出家の菩薩なるに、其の相反りて染衣ならざれば、其說つひに、齟齬して合はず、)かつ馬鳴龍樹など。孰もみな。上迦葉阿難を祖と爲さるは無し。然るに迦葉阿難等。なほ聲聞たる事を免れずして。其の末流たる馬鳴龍樹。反りて菩薩の稱有ること。豈顚倒の甚しきに非ずや。因てまた。外現聲聞身。內祕菩薩行の說起る。是また例の遁辭なり。宋儒の言に。浮屠氏よく遁辭して。其の說究詰すべからずと。信なるかな。(然れば予が、玆に辨を費せども、終に誦文の徒をして、信せしむること能はず、もし世に伶利の漢あらば、僅に一二の諸言を得て、豁然として神契すべし、)さて馬鳴は八地。龍樹は初地の菩薩なりと云ひ傳ふ。

九百年時。無著論師出於世間。夜昇都率。現稟慈氏。晝降閻浮。廣敎衆生。然衆生執深。尙不從化

故。即請慈尊自降説法。慈尊應レ請。降ニ中天竺阿瑜遮那講堂一。説ニ五部大論一。如瑜伽論卷軸一百八萬法門。深談奧義一代敎文。莫不皆判。故名ニ廣釋諸經論一矣。是時衆生邪見悉伏。正路同趣進入妙麗。慈尊昇天之後。無著繼化ニ閻浮一。

（書入云、八百年を過たり仁德の御世始め東晋元帝が時にあたる、）

此時代中世親施レ化。始弘ニ小乘一。廣製ニ五百部論一。後學ニ大乘一。亦造ニ五百部論一。故擧世號ニ千部論師一。加之訶梨跋摩之成實論。衆賢（三ノ十九ウ）論師之順正理。此時製矣。

如來滅後一千年間。大乘宗義未レ分ニ異計一。千一百年之後（推古の中世隋の煬帝がとき）。大乘始起ニ異見一。故護法淸辨。諍ニ空有於依地之上一。

（書入云、繼體の御世始め梁武帝が世始なり、）

千七百歲。戒賢智光論ニ相性於唇舌間一。如ニ金剛與ニ金剛一。似ニ巨石與ニ巨石一。

（書入云、此年數甚怪しむべし、）

厥餘諸大論師。龍智。提婆。青目。羅睺羅。陳那。身證。火辨。智月等。並是四依大士。蘭菊諍レ美。諸宗各取以爲ニ祖匠一。衆生互憑以爲ニ上首一。如此論師。古來繼出。是爲ニ天竺弘通之相一也。

大正六年十月廿七日印刷
大正六年十月卅一日發行

定價金貳圓也

編輯兼發行者　東京市麹町區飯田町五丁目八番地　室松岩雄

印刷者　東京市神田區錦町一丁目三番地　大澤京之助

印刷所　東京市神田區錦町一丁目三番地　三賞舍印刷所

發賣所　東京市麹町區飯田町五丁目八番地　法文館書店